山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡辻田地区墓地群の調査

第 9 集

1978

福岡県教育委員会

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市大字上白水字門田・辻田所在

門田遺跡辻田地区墓地群の調査

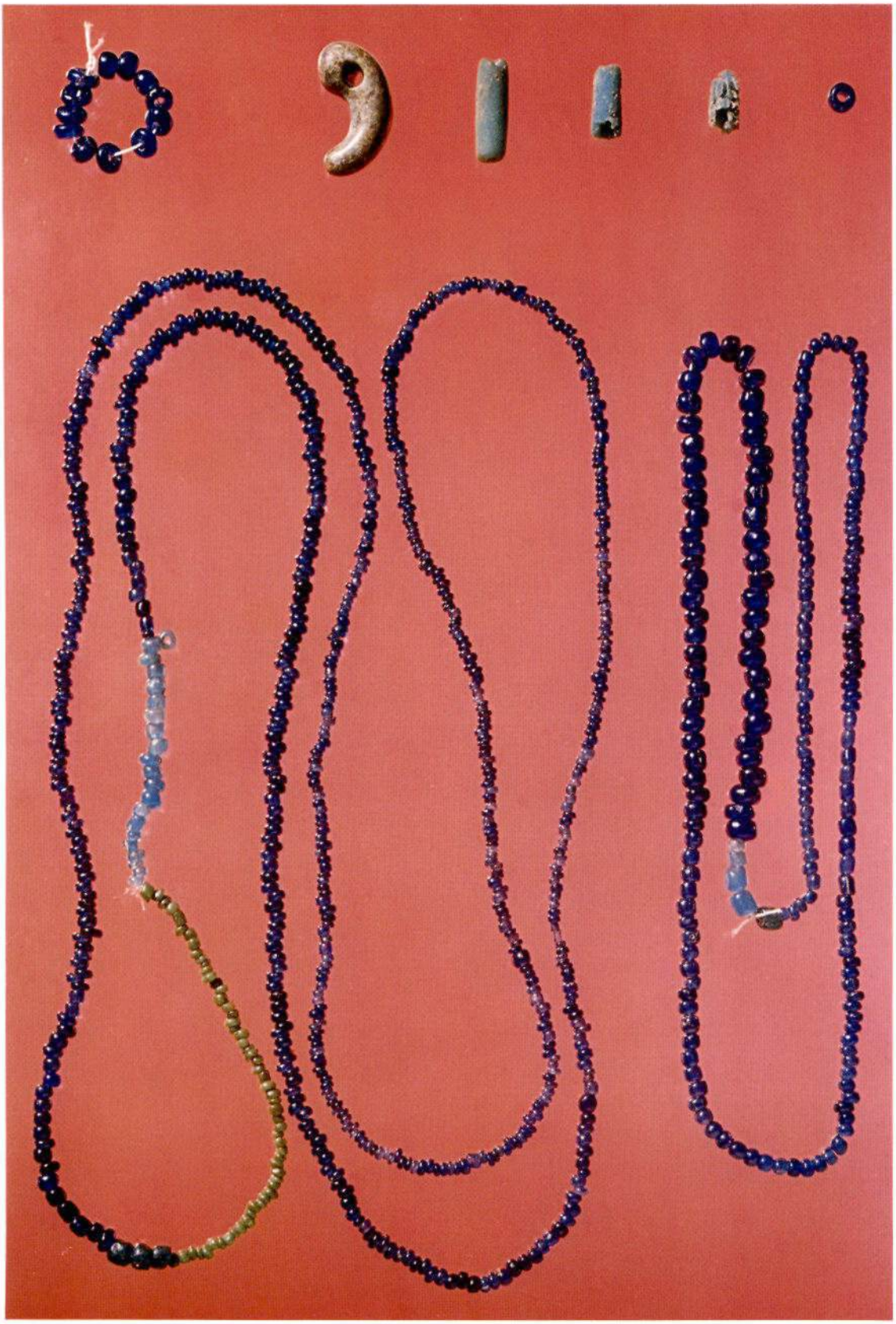
第 9 集

24号甕棺墓

24号甕棺墓と鉄戈の出土状態

1. 15号土壙墓内玉類出土状態

2. 1号石蓋土壙内ガラス小玉出土状態



弥生時代B群墓地出土の玉類

序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて昭和46年度から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車輌基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は，春日市大字上白水所在門田遺跡辻田地区の墓地遺構関係の調査報告を内容とするもので，『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集として公刊することになりました。

発掘調査の記録としては決して満足のいくものではありませんが，本報告書を通して埋蔵文化財に対し，一層の御理解と御協力をいただければ幸いです。

なお，調査に対して御協力いただいた地元の方々をはじめ，関係各位の御援助と御配慮により本書を発刊することができましたことを心から感謝申し上げます。

昭和53年12月20日

福岡県教育委員会

教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1．本書は，昭和47年７月14日 から 昭和50年10月25日までに福岡県教育委員会が，日本国有鉄道下関工事局から委託されて，山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した９冊目の報告書である。

2．本書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ ……井上裕弘
Ⅱ ……井上裕弘
Ⅲ－１ ……井上裕弘・木下修
小池史哲・丸山康晴
Ⅲ－２ ……柳田康雄・井上裕弘
木下修・小池史哲
Ⅳ－１ ……柳田康雄
Ⅳ－２ ……井上裕弘
Ⅴ－１ ……井上裕弘
Ⅴ－２ ……小池史哲
Ⅴ－３ ……井上裕弘・小池史哲
Ⅵ－１ ……永井昌文
Ⅵ－２ ……沢田正昭・秋山隆保
Ⅵ－３ ……大澤正己
Ⅵ－４ ……布目順郎
Ⅵ－５ ……本田光子
Ⅵ－６ ……江本義理
Ⅶ ……井上裕弘

3．本遺跡の人骨鑑定・執筆には九州大学医学部永井昌文教授，甕棺胎土分析・執筆には奈良国立文化財研究所沢田正昭・秋山隆保氏，鉄戈の分析・執筆に

は新日鉄大澤正己氏，繊維製品の分析・執筆には京都繊維大学布目順郎教授，赤色顔料の分析・執筆には東京芸術大学大学院本田光子氏，ガラス玉類の分析・執筆には東京国立文化財研究所江本義理氏の協力を得た。

4　掲載の写真の撮影，実測図の作成および製図は，図版目次・挿図目次に示すとおりである。遺物写真撮影は九州歴史資料館石丸洋・岡紀久夫氏の協力を得た。

5　本書の編集は，井上裕弘があたった。

本　文　目　次

門田遺跡・辻田地区墓地群の調査

Ⅰ　調査の経過……1

Ⅱ　遺構の概要……9

Ⅲ　弥生時代の墓地……10

1．A群の墓地……10
2．B群の墓地……53

Ⅳ　古墳時代の墓地……84

1．古墳の配列……84
2．辻田1号墳……84
3．辻田2号墳……91
4．辻田3号墳……97
5．辻田4号墳……99
6．土壙墓……100
7．まとめ……103

Ⅴ　歴史時代の墓地……107

1．土壙墓……107
2．火葬墓……109
3．近世墓……109
4．まとめ……146

Ⅵ　自然科学系の調査……151

1．21号甕棺墓出土の人骨……151
2．北九州地方における甕棺の胎土分析……151
3．門田遺跡出土鉄戈の分析調査……155
4．門田遺跡出土の繊維製品について……160

5．赤色顔料の分析について…… 166
6．門田遺跡出土のガラス玉類の材質について…… 170

Ⅶ　お　わ　り　に…… 172

1．調査の成果と問題点…… 172
2．甕棺製作技術と工人集団把握への試論…… 173
3．甕棺を黒く塗る風習…… 190

図　版　目　次

本文対照頁

図 版 1　(1)　門田遺跡辻田地区全景航空写真　西から（井上裕弘撮影）……1
　　(2)　昭和47年度辻田地区の予備調査航空写真　東から（井上撮影）……1
　2　(1)　昭和48年度辻田地区調査航空写真　西から（井上撮影）……2
　　(2)　昭和50年度辻田地区調査航空写真　東から（井上撮影）……3
　3　(1)　弥生時代A群墓地西端部の甕棺・土壙墓群（井上撮影）……10
　　(2)　1号甕棺墓（井上撮影）……10
　4　（上）1号甕棺墓　南から（井上撮影）……10
　　（下）1号甕棺墓　東から（井上撮影）……10
　5　(1)　2号甕棺墓（井上撮影）……10
　　(2)　4号甕棺墓（井上撮影）……13
　6　(1)　5号甕棺墓（井上撮影）……13
　　(2)　6号甕棺墓（井上撮影）……13
　7　(1)　弥生時代A群墓地中央の甕棺・土壙墓群全景（井上撮影）……13
　　(2)　中央部の甕棺・石蓋土壙墓・土壙墓群近景（井上撮影）……13
　8　(1)　21～24・27・28号甕棺墓群（井上撮影）……25
　　(2)　9・11号甕棺墓（井上撮影）……13
　9　(1)　9号甕棺墓（井上撮影）……13
　　(2)　9号甕棺墓覆口部近景（井上撮影）……13
　10　(1)　10号甕棺墓（井上撮影）……16
　　(2)　11号甕棺墓（井上撮影）……16
　11　(1)　12号甕棺墓（井上撮影）……16
　　(2)　13号甕棺墓（井上撮影）……19
　12　(1)　14号甕棺墓（井上撮影）……19
　　(2)　16号甕棺墓（井上撮影）……21
　13　(1)　16・17号甕棺墓（井上撮影）……21
　　(2)　17号甕棺墓（井上撮影）……21
　14　(1)　18号甕棺墓（井上撮影）……25
　　(2)　19号甕棺墓（井上撮影）……25

15　(1)　20号甕棺墓（井上撮影）……25
　　(2)　20号甕棺墓内人骨出土状態（井上撮影）……25
16　(1)　21号甕棺墓　西から（井上撮影）……25
　　(2)　21号甕棺墓　北から（井上撮影）……25
17　(1)　21号甕棺墓　東から（井上撮影）……25
　　(2)　21号甕棺墓内人骨出土状態（井上撮影）……28
18　(1)　22号甕棺墓（井上撮影）……30
　　(2)　22号甕棺墓（井上撮影）……30
19　(1)　21・23・24・27・28号甕棺墓全景（井上撮影）……32
　　(2)　21・23・24・27号甕棺墓露出状態（井上撮影）……32
20　(1)　23号甕棺墓盗掘坑と出土青銅製鋤先（井上撮影）……32
　　(2)　青銅製鋤先出土状態（井上撮影）……32
21　(1)　23号甕棺墓　南から（井上撮影）……32
　　(2)　23号甕棺墓　西から（井上撮影）……32
22　（上）23号甕棺墓と横穴の状態（井上撮影）……32
　　（下）23号甕棺墓全景（井上撮影）……32
23　(1)　24号甕棺墓（井上撮影）……32
　　(2)　24号甕棺墓と鉄戈の出土状態（井上撮影）……33
24　(1)　24号甕棺墓　西から（井上撮影）……33
　　(2)　24号甕棺墓と横穴の状態（井上撮影）……33
25　(1)　鉄戈と柄の痕跡（井上撮影）……33
　　(2)　墓壙掘削時の鋤状工具の痕跡（井上撮影）……33
26　（上）24号甕棺墓全景　北から（井上撮影）……33
　　（下）24号甕棺墓全景　東から（井上撮影）……33
27　(1)　24号甕棺墓内面（井上撮影）……33
　　(2)　銅鏡副葬の痕跡（２面が一部かさなった状態）（井上撮影）……33
28　(1)　25号甕棺墓（井上撮影）……34
　　(2)　26号甕棺墓（井上撮影）……37
29　(1)　27号甕棺墓　南から（井上撮影）……37
　　(2)　27号甕棺墓　西から（井上撮影）……37
30　(1)　鉄剣・鉄戈出土状態（井上撮影）……37
　　(2)　27号甕棺墓全景　北から（井上撮影）……37
31　（上）27号甕棺墓全景　東から（井上撮影）……37

（下）28号甕棺墓（井上撮影）……39
32 (1) 1・2・5号土壙墓（井上撮影）……40
(2) 3号土壙墓（井上撮影）……40
33 (1) 16号土壙墓（井上撮影）……42
(2) 17号土壙墓（井上撮影）……42
34 (1) 18号土壙墓と供献土器出土状態（井上撮影）……42
(2) 18号土壙墓（井上撮影）……42
35 (1) 19号土壙墓（井上撮影）……45
(2) 20号土壙墓（木棺墓）（井上撮影）……45
36 (1) 23号土壙墓（井上撮影）……45
(2) 24号土壙墓（井上撮影）……45
37 (1) 2号石蓋土壙墓（井上撮影）……48
(2) 石蓋除去後の状態（井上撮影）……48
38 (1) 土器溜状遺構全景（井上撮影）……49
(2) 土器溜状遺構内土器出土状態（井上撮影）……49
39 甕棺（1）（岡紀久夫撮影）……10
40 甕棺（2）（岡撮影）……16
41 甕棺（3）（岡撮影）……21
42 甕棺（4）（岡撮影）……25
43 甕棺（5）（岡撮影）……30
44 甕棺（6）（岡撮影）……34
45 (1) 23号甕棺墓出土青銅製鋤先（岡撮影）……32
(2) 24号甕棺墓出土鉄剣（岡撮影）……34
46 24号甕棺墓出土鉄戈（岡撮影）……34
47 (1) 24号甕棺墓出土鉄戈着柄部（表）（岡撮影）……34
(2) 24号甕棺墓出土鉄戈着柄部（裏）（岡撮影）……34
48 27号甕棺墓出土鉄剣（岡撮影）……37
49 27号甕棺墓出土鉄戈（岡撮影）……38
50 (1) 27号甕棺墓出土鉄戈着柄部（表）（岡撮影）……38
(2) 27号甕棺墓出土鉄戈着柄部（裏）（岡撮影）……38
51 (1) 弥生時代B群墓地全景　東から（岡撮影）……53
(2) 弥生時代B群墓地全景　北から（岡撮影）……53
52 (1) 7号甕棺墓　東から（井上撮影）……53

(2) 7号甕棺墓 北から（井上撮影）……53
53 (1) 8号甕棺墓 南から（井上撮影）……55
(2) 8号甕棺墓 北から（井上撮影）……55
54 （上）13・14号土壙墓 北から（木下修撮影）……55
（下）13・14号土壙墓 東から（木下撮影）……55
55 （上）15号土壙墓 西から（井上撮影）……66
（下）15号土壙墓内玉類出土状態（井上撮影）……66
56 （上）15号土壙墓 北から（井上撮影）……66
（下）15号土壙墓 西から（井上撮影）……66
57 （上）1号石蓋土壙墓 西から（柳田康雄撮影）……67
（下）1号石蓋土壙墓 南から（柳田撮影）……67
58 (1) 1号石蓋土壙墓（柳田撮影）……67
(2) 石蓋除去後の状態（柳田撮影）……67
59 (1) 1号石蓋土壙内玉類出土状態全景（柳田撮影）……68
(2) 玉類出土状態近景（柳田撮影）……69
60 (1) 8号甕棺（岡撮影）……55
(2) 1号石蓋土壙墓出土壺形土器（岡撮影）……75
61 7号甕棺墓，13・15号土壙墓，1号石蓋土壙墓出土玉類（岡撮影）……54
62 （上）予備調査で発見された辻田1号墳（井上撮影）……84
（下）辻田1号墳石室（井上撮影）……84
63 (1) 辻田1号墳全景 南から（井上撮影）……84
(2) 辻田1号墳全景 東から（井上撮影）……84
64 (1) 周溝内土器出土状態全景（井上撮影）……88
(2) 周溝内土器出土状態近景（井上撮影）……88
65 （上）辻田2号墳全景（井上撮影）……91
（下）辻田2号墳石室（井上撮影）……91
66 (1) 石室内鉄鏃・玉類出土状態（井上撮影）……94
(2) 石室内刀子出土状態（井上撮影）……94
67 (1) 辻田3号墳全景（井上撮影）……97
(2) 辻田3号墳石室 南東から（井上撮影）……97
68 （上）辻田3号墳石室 南西から（井上撮影）……97
（下）辻田3号墳石室 北東から（井上撮影）……97
69 (1) 石室北壁石積み状態（井上撮影）……99

(2) 墓道内鉄斧出土状態（井上撮影）……99
70 (1) 辻田4号墳石棺全景（小池史哲撮影）……99
(2) 石棺内鉄鏃出土状態（小池撮影）……100
71 (1) 7号土壙墓（井上撮影）……100
(2) 7号土壙墓内須恵器杯出土状態（井上撮影）……101
72 (1) 8号土壙墓（井上撮影）……101
(2) 9号土壙墓（井上撮影）……101
73 辻田1号墳出土装身具・須恵器（岡撮影）……88
74 (1) 辻田1号墳出土土師器（岡撮影）……90
(2) 辻田2号墳出土鉄器（岡撮影）……88
75 辻田2号墳出土玉類（岡撮影）……94
76 (1) 辻田3号墳出土鉄斧（岡撮影）……99
(2) 辻田4号墳出土鉄鏃（岡撮影）……100
(3) 7号土壙墓出土須恵器（岡撮影）……101
77 (1) 10号土壙墓（井上撮影）……107
(2) 10号土壙墓内土師器皿出土状態　南から（井上撮影）……108
78 (1) 10号土壙墓内土師器皿（岡撮影）……108
(2) 火葬墓（小池撮影）……109
79 (1) 近世墓群全景　北から（井上撮影）……109
(2) 近世墓群全景　南から（井上撮影）……109
80 (1) 近世墓西側一群（井上撮影）……109
(2) 近世墓東側一群（井上撮影）……109
81 (1) 1号近世墓（井上撮影）……109
(2) 2号近世墓（井上撮影）……110
82 (1) 3号近世墓（井上撮影）……110
(2) 4号近世墓（井上撮影）……114
83 (1) 5号近世墓（井上撮影）……114
(2) 石蓋除去後の5号近世墓（井上撮影）……114
84 (1) 6号近世墓（井上撮影）……114
(2) 8号近世墓（井上撮影）……114
85 (1) 9号近世墓（井上撮影）……114
(2) 12号近世墓（井上撮影）……114
86 (1) 13号近世墓（井上撮影）……114

(2) 平石除去後の13号近世墓（井上撮影）……114
87 (1) 11・14号近世墓（井上撮影）……114
(2) 14号近世墓（井上撮影）……114
88 (1) 17号近世墓（井上撮影）……114
(2) 20～22号近世墓（井上撮影）……122
89 (1) 23号近世墓（井上撮影）……122
(2) 25号近世墓（井上撮影）……122
90 (1) 26号近世墓（井上撮影）……122
(2) 27号近世墓（井上撮影）……122
91 (1) 28号近世墓蓋石と髪毛（井上撮影）……122
(2) 28号近世墓（井上撮影）……122
92 (1) 29号近世墓（井上撮影）……122
(2) 33号近世墓（井上撮影）……132
93 (1) 34号近世墓（井上撮影）……132
(2) 35号近世墓（井上撮影）……138
94 (1) 37号近世墓（井上撮影）……138
(2) 39号近世墓（井上撮影）……138
95 (1) 2・4号近世甕棺（岡撮影）……110
(2) 5・6号近世甕棺（岡撮影）……114
96 (1) 7・8号近世甕棺（岡撮影）……114
(2) 12・13号近世甕棺（岡撮影）……114
97 (1) 16・17号近世甕棺（岡撮影）……114
(2) 18・27号近世甕棺（岡撮影）……114
98 (1) 28・31号近世甕棺（岡撮影）……122
(2) 37・39号近世甕棺（岡撮影）……138
99 後産埋納器・供献品（岡撮影）……133
100 近世墓出土の供献品・副葬品（岡撮影）……120
101 近世墓出土の古銭（1）（岡撮影）……143
102 近世墓出土の古銭（2）（岡撮影）……144
103 多々良窯石甕製作工程（岡撮影）……148
104 偏光顕微鏡写真（沢田正昭撮影）……151
105 鉄戈の顕微鏡組織（大澤正己撮影）……155
106 門田遺跡出土の絹製品（布目順郎撮影）……160

107　門田遺跡出土の絹製品の繊維断面写真と断面転写写真（布目撮影）……161
108　辻田２号墳出土の丸玉の孔に残った繊維製品（布目撮影）……165
109　出土顔料の顕微鏡写真（本田光子撮影）……166
110　(1)　黒色塗彩した23号上甕棺（岡撮影）……190
　　(2)　〃　24号下甕棺（岡撮影）……190

挿　図　目　次

第 1 図　発掘風景（1）（井上裕弘撮影）……3
第 2 図　発掘風景（2）（井上撮影）……3
第 3 図　発掘風景（3）（井上撮影）……4
第 4 図　発掘風景（4）（井上撮影）……4
第 5 図　24号甕棺墓（井上撮影）……5
第 6 図　27号甕棺墓（井上撮影）……5
第 7 図　山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置（佐々木隆彦作成）……7
第 8 図　山陽新幹線関係主要遺跡分布図（木下修作成）……折込み
第 9 図　山陽新幹線博多総合車輌基地付近地形図及び遺跡位置図
　　（日本国有鉄道原図　木下作成）……折込み
第 10 図　門田遺跡調査地区全図（1/1,500）（日本国有鉄道原図　井上作成）……折込み
第 11 図　弥生時代A群墓地遺構配置図……折込み
第 12 図　1～6号甕棺墓実測図（高田一弘実測，白水千賀子製図）……11
第 13 図　甕棺実測図（1）（井上・小林義彦実測，井上製図）……12
第 14 図　9～11号甕棺墓実測図（小池史哲・宮崎貴夫・木下実測，白水製図）……14
第 15 図　甕棺実測図（2）（井上・小林実測，井上製図）……15
第 16 図　12～15号甕棺墓実測図（木下・小池・川村博実測，白水製図）……17
第 17 図　甕棺実測図（3）（井上・小林実測，井上製図）……18
第 18 図　16～18号甕棺墓実測図（宮崎・丸山康晴・高田弘信実測，白水製図）……20
第 19 図　甕棺実測図（4）（井上・小林実測，井上製図）……22
第 20 図　甕棺実測図（5）（井上・小林実測，井上製図）……23
第 21 図　19号甕棺墓実測図（高田実測，白水製図）……24
第 22 図　20号甕棺墓実測図（宮崎実測，白水製図）……26
第 23 図　21号甕棺墓実測図（小池実測，白水製図）……折込み

第 24 図　甕棺実測図（6）（井上・小林実測，井上製図）……27
第 25 図　21号甕棺墓人骨実測図（小池実測，河鍋洋子製図）……28
第 26 図　甕棺実測図（7）（井上・小林実測，井上製図）……29
第 27 図　22号甕棺墓実測図（小池実測，白水製図）……31
第 28 図　23号甕棺墓実測図（木下・丸山実測，白水製図）……折込み
第 29 図　24号甕棺墓実測図（宮崎実測，河鍋製図）……折込み
第 30 図　23号甕棺墓盗掘坑覆土内出土土器実測図（小林実測，井上製図）……33
第 31 図　青銅製鋤先実測図（井上実測，製図）……33
第 32 図　甕棺実測図（8）（井上・小林実測，井上製図）……折込み
第 33 図　鉄剣実測図（井上実測，製図）……35
第 34 図　鉄戈実測図（井上実測，製図）……36
第 35 図　25・26・28号甕棺墓実測図（小池・宮崎実測，白水製図）……折込み
第 36 図　27号甕棺墓実測図（小池実測，製図）……折込み
第 37 図　甕棺実測図（9）（井上・小林実測，井上製図）……折込み
第 38 図　1・2・5号土壙墓実測図（高田実測，河鍋製図）……41
第 39 図　3・4号土壙墓実測図（高田実測，河鍋製図）……42
第 40 図　16・17号土壙墓実測図（高田実測，河鍋製図）……43
第 41 図　18・19号土壙墓実測図（宮崎・小田雅文実測，白水製図）……44
第 42 図　20・21号土壙墓実測図（宮崎実測，河鍋製図）……46
第 43 図　22～24号土壙墓実測図（宮崎・小田実測，白水製図）……47
第 44 図　2号石蓋土壙墓実測図（木下実測，河鍋製図）……48
第 45 図　土器溜状遺構実測図（丸山実測，河鍋製図）……49
第 46 図　土器溜状遺構出土甕棺実測図（小林実測，井上製図）……49
第 47 図　弥生時代Ｂ群墓地遺構配置図……53
第 48 図　7・8号甕棺墓実測図（井上・高田実測，白水製図）……54
第 49 図　7号甕棺墓出土ガラス小玉実測図（井上実測，製図）……54
第 50 図　8号甕棺実測図（小林実測，井上製図）……55
第 51 図　12～15号土壙墓実測図（井上・高田実測，河鍋製図）……56
第 52 図　13号土壙墓出土ガラス小玉実測図（木下実測，製図）……57
第 53 図　15号土壙墓出土玉類実測図（井上実測，製図）……66
第 54 図　1号石蓋土壙墓実測図（柳田康雄実測，白水製図）……68
第 55 図　石蓋土壙墓内ガラス小玉出土状態（柳田実測，製図）……69
第 56 図　1号石蓋土壙墓出土ガラス小玉実測図（柳田実測，製図）……72

第 57 図　1号石蓋土壙墓出土土器実測図（柳田実測，製図）……75
第 58 図　古墳・土壙墓群配置図……85
第 59 図　辻田 1 号墳地山整形実測図（高田実測，白水製図）……86
第 60 図　辻田 1 号墳石室実測図（柳田実測，白水製図）……87
第 61 図　辻田 1 号墳出土装身具実測図（柳田実測，製図）……88
第 62 図　辻田 1 号墳石室内出土刀子実測図（柳田実測，製図）……88
第 63 図　辻田 1 号墳出土須恵器実測図（柳田実測，製図）……89
第 64 図　辻田 1 号墳周溝出土土師器実測図（柳田実測，製図）……91
第 65 図　辻田 2 号墳地山整形実測図（高田実測，白水製図）……92
第 66 図　辻田 2 号墳石室実測図（井上実測，河鍋製図）……93
第 67 図　辻田 2 号墳石室内鉄器・玉類出土状態実測図（井上実測，河鍋製図）……94
第 68 図　辻田 2 号墳石室内出土玉類実測図（柳田実測，製図）……95
第 69 図　辻田 2 号墳石室内出土玉類実測図（柳田実測，製図）……95
第 70 図　辻田 2 号墳石室内出土鉄器実測図（柳田実測，製図）……98
第 71 図　辻田 3 号墳石室実測図（木下実測，白水製図）……折込み
第 72 図　辻田 3 号墳出土鉄斧実測図（柳田実測，製図）……99
第 73 図　辻田 4 号墳石室実測図（小池実測，白水製図）……100
第 74 図　辻田 4 号墳出土鉄鏃実測図（柳田実測，製図）……100
第 75 図　6 号土壙墓実測図（石田広美実測，河鍋製図）……101
第 76 図　7 号土壙墓出土須恵器実測図（井上実測，製図）……101
第 77 図　7～9・25号土壙墓実測図（高田実測，河鍋製図）……102
第 78 図　10号土壙墓実測図（桑田和義実測，河鍋製図）……108
第 79 図　10号土壙墓出土土師器実測図（井上実測，製図）……108
第 80 図　火葬墓実測図（小池実測，河鍋製図）……109
第 81 図　近世墓地遺構配置図……110
第 82 図　1・5 号近世墓実測図（小池・高田実測，河鍋製図）……111
第 83 図　2・28号近世墓実測図（高田実測，白水製図）……112
第 84 図　3・7・32号近世墓実測図（小池・宮崎・高田実測，白水製図）……113
第 85 図　4・15号近世墓実測図（高田実測，白水製図）……115
第 86 図　6・18・38号近世墓実測図（高田実測，白水製図）……116
第 87 図　8・9・19号近世墓実測図（宮崎・藤瀬禎博実測，白水製図）……117
第 88 図　墓碑拓影（1）（河鍋美智子・八尋恵美子・穴井栄子手拓）……118
第 89 図　近世甕棺実測図（小林実測，井上製図）……119

第 90 図　近世墓出土遺物実測図（井上実測，製図）……120
第 91 図　10・13号近世墓実測図（藤瀬・高田実測，河鍋製図）……121
第 92 図　11・14号近世墓実測図（宮崎実測，河鍋製図）……折込み
第 93 図　12・16号近世墓実測図（宮崎・藤瀬実測，白水製図）……123
第 94 図　墓碑拓影（2）（河鍋・八尋・穴井手拓）……124
第 95 図　17・23号近世墓実測図（高田実測，白水製図）……125
第 96 図　20～22号近世墓実測図（宮崎実測，河鍋製図）……126
第 97 図　墓碑拓影（3）（河鍋・八尋・穴井手拓）……127
第 98 図　墓碑拓影（4）（河鍋・八尋・穴井手拓）……128
第 99 図　墓碑拓影（5）（河鍋・八尋・穴井手拓）……129
第 100 図　墓碑拓影（6）（河鍋・八尋・穴井手拓）……130
第 101 図　24・31号近世墓実測図（宮崎・高田実測，白水製図）……131
第 102 図　25・26・29・33・35号近世墓実測図（小池・宮崎実測，白水製図）……132
第 103 図　後産埋納土器・供献土器実測図（小林実測，井上製図）……133
第 104 図　27・30・37号近世墓実測図（宮崎・小田・小林美孝実測，白水製図）……134
第 105 図　34・36号近世墓実測図（宮崎・小田・小林実測，白水製図）……135
第 106 図　墓碑拓影（7）（河鍋・八尋・穴井手拓）……136
第 107 図　39～41号近世墓実測図（宮崎実測，白水製図）……137
第 108 図　近世甕棺タタキ目拓影（1）（河鍋・八尋手拓）……141
第 109 図　近世甕棺タタキ目拓影（2）（河鍋・八尋手拓）……142
第 110 図　古銭拓影（1）（勝野素子手拓）……143
第 111 図　古銭拓影（2）（勝野手拓）……144
第 112 図　グループ分けされた試料の Srkα/Zrkα・Rbkα/Zrkα比（沢田正昭作成）…153
第 113 図　グループ分けされていない試料の Srkα/Zrkα・Rbkα/Zrkα比（沢田作成）…153
第 114 図　粒度分布曲線（本田光子作成）……168
第 115 図　粒度累積曲線（本田作成）……169
第 116 図　粒子径と均一性の相関関係（本田作成）……169
第 117 図　甕棺成形工程（井上作成）……176
第 118 図　甕棺刷毛目拓影（井上手拓）……折込み
第 119 図　周辺の主要な甕棺遺跡分布図（井上作成）……180
第 120 図　甕棺タイプ分布図（井上作成）……183
第 121 図　黒色塗彩甕棺分布図（井上作成）……191

表　目　次

表　1　山陽新幹線関係遺跡一覧表（木下修作成）……折込み
表　2　A群甕棺墓一覧表（井上裕弘作成）……39
表　3　A群土壙墓一覧表（井上作成）……48
表　4　7号甕棺墓出土ガラス小玉計測表（勝野素子作成）……54
表　5　13号土壙墓出土ガラス小玉計測表（勝野作成）……57
表　6　1号石蓋土壙墓出土ガラス小玉計測表（柳田康雄作成）……72
表　7　辻田2号墳出土管玉計測表（柳田作成）……96
表　8　辻田2号墳出土小玉計測表（柳田作成）……96
表　9　土師器皿計測表（井上作成）……108
表　10　近世墓一覧表（井上作成）……138
表　11　近世墓出土甕棺一覧表（井上作成）……139
表　12　近世墓出土土瓶一覧表（井上作成）……140
表　13　近世墓出土古銭計測表（勝野作成）……144
表　14　胎土分析資料一覧表（沢田正昭作成）……151
表　15　タイプ別による分類（沢田作成）……154
表　16　鉄戈の炭素含有量（大澤正己作成）……156
表　17　弥生時代鉄器の分光分析結果（大澤作成）……157
表　18　門田遺跡から出た絹製品についての調査成績（布目順郎作成）……161
表　19　漢代絹製品についての調査成績（布目作成）……162
表　20　門田遺跡から出た絹製品についての調査成績（布目作成）……162
表　21　漢代絹製品についての調査成績（布目作成）……163
表　22　試料一覧表（本田光子作成）……167
表　23　X線分析測定結果（本田作成）……167
表　24　粒子径分布測定結果（本田作成）……169
表　25　ガラス玉測定結果（江本義理作成）……171
表　26　粘土帯幅の計測表（井上作成）……175
表　27　甕棺分類表（井上作成）……179
表　28　甕棺タイプ一覧表（井上作成）……184

付　図　目　次

付 図 1　門田遺跡遺構配置図（柳田康雄・井上裕弘・木下修・佐々木隆彦・小池史哲・肥山正秀・池辺元明・渡辺和子・桑田和義・高田一弘・市川富久・藤瀬禎博・石田広美・三津井知廣・丸山康晴・川村博・井上和人・小林美孝・高田弘信実測，高田製図）

付 図 2　辻田地区遺構配置図（柳田・井上・木下・佐々木・小池・桑田・高田・藤瀬・石田・三津井・丸山・川村・高田実測，高田製図）

付 図 3　辻田地区旧地形と遺構配置図（柳田・井上・木下・佐々木・小池・桑田・高田・藤瀬・石田・三津井・丸山・川村・高田実測，高田製図）

門田遺跡・辻田地区墓地群の調査

Ⅰ　調査の経過

門田遺跡は，第19地点から第27地点におよぶ南北の２つに分れた舌状台地とその間の谷部の低地から構成された遺跡で，本報告書に掲載するのは第19～21地点として登録されていた北台地から検出された墓地関係遺構の報告である。

発掘調査は，昭和47年度の予備調査を含め，４次にわたる分割調査の結果，昭和50年10月で完了した。調査は生活遺構関係の調査とも並行して実施されたものであるが，ここでは墓地関係遺構の調査経過のみをとりだし日誌をくりながらたどってみたい。なお，年度毎の経過と生活遺構関係の調査経過は第３・７集に詳しい（註１）。

昭和47年

８月５日　Ｄ５～７区に発掘区を設定し，表土剝ぎを開始する。

８月10日　Ｄ５～７区の表土剝ぎが終了し，遺構検出をはじめる。Ｄ５区から１号墳の石室と周溝の一部が発見される。

８月11日　Ｄ６区で２号墳の周溝と主体部と思われる方形の掘り方が検出される。周構の内側には建物が建つと思われるピット群が並ぶ。

８月12日　２号墳の周溝と主体部の発掘を開始する。周溝・主体部とも上面がかなり削平されているため残存状態は極めて悪い。

８月14日　主体部の掘り下げがほぼ終り，扁平な板石を立てた横穴式石室であることが判る。側壁にわずかに石を残すのみで，奥壁の石も残存しない。しかし，奥壁に近い床面上からは鉄鏃・勾玉・管玉・小玉等が検出された。

８月23日　今日から工事用の進入路建設のために一部壊わされる可能性があるため，急拠Ｅ８区の調査に入る。

８月24日　１号墳の周溝を一部掘り下げる。２号墳と比べわずかに深く残っている。

８月25日　Ｄ５―16区から周溝の内側に接して前期の１号甕棺が検出される。また，今日から１号墳主体部の掘り下げを始める。

8月28日　並行して進めていた門田地区の遺構の掘り下げ，写真撮影も今日でほぼ終る。また，1号墳主体部の発掘も終る。主体部は横穴式石室で，腰石の一部と敷石の一部を残すのみで，内面はかなり撹乱を受けていた。

8月29日　今日から谷地区の調査に入る。

9月5日　1号墳石室から2号墳全体の写真撮影を行う。

9月12日　今日から1・2号墳石室の実測を開始する。

9月15日　辻田地区の全体測量を開始する。測量の終った所から埋戻しを行う。1・2号墳石室の実測が終る。

昭和48年

10月11日　D4・5区の表土剝ぎを行ない，予備調査で確認されていた1号墳周溝のほぼ全貌が検出される。西側周溝は後世の開削により浅い。

10月12日　周溝の掘り下げ始める。

10月15日　北東側周溝中から金環1個が出土する。

10月17日　周溝が掘り上がり，午後から写真撮影のため清掃をする。

10月18日　1号墳全体の写真撮影を行う。

10月19日　2号墳の写真撮影のため，清掃と一部掘り残しを発掘する。午後，全景の写真撮影を行う。

11月1日　D5・6区で住居跡や袋状竪穴が多数検出されはじめ，生活遺構関係の発掘が忙しくなる。

11月28日　D5区から前期の甕棺・土壙墓群が検出されはじめる。

12月2日　甕棺・土壙墓の個別写真を撮る。

12月6日　今日でほぼB8，C8，D3～7，E3～7区の発掘が完了する。全景写真撮影を行う。

12月8日　航空写真撮影を行う。

12月9日　割付けを開始する。

12月11日　実測を開始する。

12月20日　実測が全て完了する。

昭和49年

5月31日　谷地区の調査がほぼ完了したので今日からE5・6，F5・6区の表土剝ぎを開始する。

6月4日　F6区で住居跡・溝状遺構等が検出されはじめる。

6月7日　F6区から甕棺・土壙墓・石蓋土壙墓群が発見される。昨年検出されたD5区の甕棺・土壙墓群とは別グループの墓地である。

6月11日　E６区で検出された13～14号土壙墓と１号石蓋土壙墓の掘り下げを行う。13・15号土壙墓からガラス小玉が発見され，調査員緊張しはじめる。

6月12日　昨日に続き13号土壙墓からガラス小玉多数出土する。すでに150個を越している。14号・15号土壙墓，７号甕棺が掘り上がり，15号土壙墓からガラス管玉３個と勾玉１個，７号甕棺からガラス小玉12個が出土する。

第１図　発掘風景 (1)

6月13日　石蓋土壙墓・15号土壙墓の個別写真撮影を行い，実測に入る。相変らず14号土壙墓からはガラス小玉が続出する。300個を越したようだ。今日でほぼ床面に近くなったようである。15号土壙墓の南側に近接して１号方形竪穴と複合した状態で８号甕棺墓がさらに発見される。

第２図　発掘風景 (2)

6月14日　石蓋土壙墓の蓋開けを行う。期待通り頸部付近と思われるあたりからガラス小玉多数が帯状をなして検出されはじめる。墓地群の調査がほぼ終りにかかったので今日から門田地区の伐採に入る。

6月15日　石蓋土壙墓を除き，今日でほぼ掘り上る。13号土壙墓のガラス小玉は計808個に達する。

6月24日　今日で石蓋土壙墓の実測も終了し，全景写真撮影のための清掃を行う。

6月25日　写真撮影を行う。一部割付けを開始する。

6月26日　今日で写真撮影がすべて終了。

6月28日　割付け終了し，午後から平面実測に入る。

7月10日　今日で，E５・６，F５～６区の実測が全て終了し調査完了。

昭和50年

5月22日　発掘作業を開始する。排土置場との関係から北西斜面のC４，D２・３区のトレンチ調査から開始する。

6月３日　今日からC７区の表土剝ぎを開始する。

6月23日　C４，D６区の発掘を進める。近世墓・甕棺墓等が検出されはじめる。

7月3日　近世墓の発掘を開始する。今日で21基を確認する。

7月4日　6号近世墓下に甕棺が発見される。

7月7日　18号住居跡の南側隅から4号墳石室が発見される。

7月8日　13・14・15号住居跡を掘る。14号住居跡から完形の石庖丁2個と，鉄鉇・鉄鎌等が出土する。

7月15日　このところ住居跡・袋状竪穴の発掘におわれる。

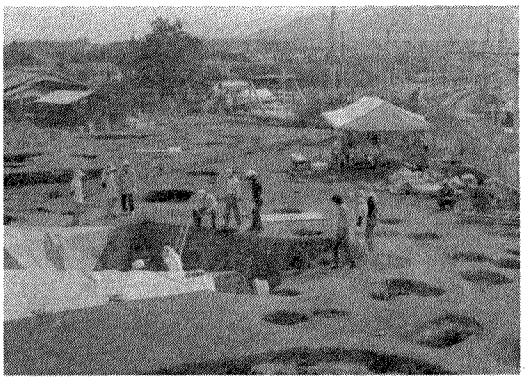
7月23日　C5区から3号墳石室の残がいが発見された。

8月12日　楕円形状の大形の22号住居跡を掘り下げる。住居内からは甕棺・土壙墓等の遺構が発見される。

8月21日　今日から近世墓の平面実測をはじめる。

9月6日　実測と並行して甕棺の掘り下げを開始する。

9月10日　甕棺・袋状竪穴等の発掘進む。近世墓の個別実測が今日でほぼ終了する。C5区から火葬墓と思われる遺構が検出される。



第3図　発掘風景 (3)

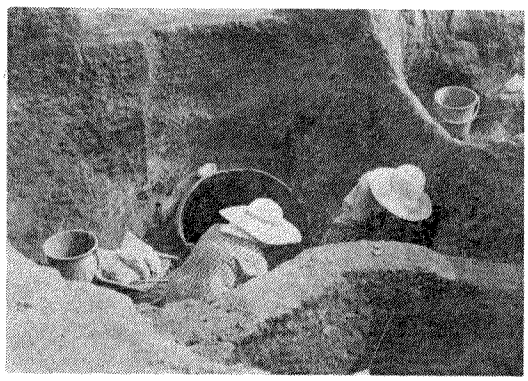
9月15日　21～24号甕棺と3号墳石室を掘りはじめる。

9月18日　3号墳石室も今日でほぼ掘り上り，午後から実測に入る。

9月22日　23・24号甕棺の発掘進む。両者とも盗掘を受けているようで，甕棺の小片が散在しはじめる。24号甕棺の掘方覆土中から鉄剣の破片が出土する。調査員一同の期待がつのる。

9月23日　23号甕棺の盗掘坑と思われる覆土中から完形の青銅製鋤先1個が発見される。

9月24日　24号甕棺の掘り方覆土中から水銀朱を思わせる赤色顔料の塗られた甕破片がでではじめる。盗掘と思われる攪乱されたプランがつかめたため，まず，そこから掘り始める。ついに上甕下面が破壊されていることが判る。棺内は真赤である。

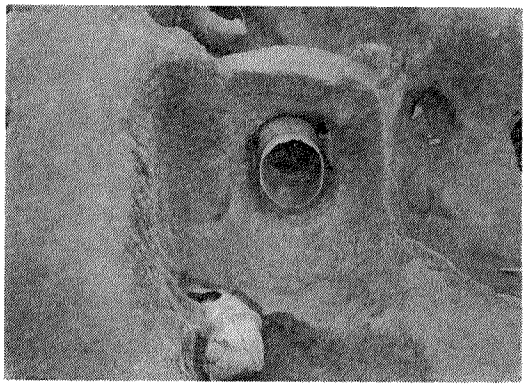


第4図　発掘風景 (4)

9月25日　盗掘坑のプランを略測し，掘り方全体の掘り下げを進める。D4・C4区付近のエレベーションをとる。

9月27日　ついに，24号甕棺の棺外から鉄戈が発見される。有樋鉄戈で，さらに朱塗りの柄がついた痕跡を残している。調査員一同興奮気味。急拠，写真・実測を行いスタンプを残し，取り上げる。また昨日から掘り始めた27号甕棺の棺内からも鉄剣1個が検出される。夕方近くであったため埋め戻す。

9月29日　27号甕棺の棺外から，さらに鉄戈が発見された。



第5図　24号甕棺墓

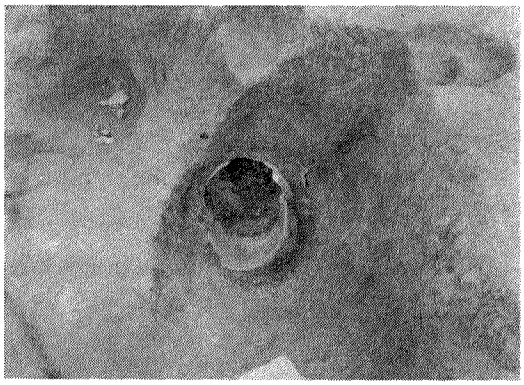
9月30日　21～28号甕棺墓群全体の写真撮影を行い午後から個別写真をとりはじめる。

10月1日　写真と並行して実測を継続する。

10月8日　このところ甕棺・袋状竪穴の写真・実測におわれている。

10月18日　今日で，甕棺・住居跡・袋状竪穴がほぼ掘り上がったので清掃し，全景写真をとる。

10月20日　今日でほぼ実測にめどがつく。残る地区のエレベーション・旧地形測量を開始する。



第6図　27号甕棺墓

10月22日　21号甕棺から人骨が検出される。辻田地区では始めての人骨である。

10月25日　実測図点検・発掘器材の移動を行い今日で発掘作業の全てが終了する。

なお，辻田地区の発掘調査並びに整理関係者は下記の通りである。また，発掘調査並びに整理にあたっては，春日市・那珂川町在住各位の協力を得た。記して謝意を表したい。

福岡県教育委員会

総　括

教育長	森田　實	教育次長	西村　太郎
文化課長	古川　善久	文化課長	森　英俊
文化課長	藤井　功	文化課課長補佐	菅　隆
文化課課長補佐	今井　岩男	文化課課長補佐	平井　元治
文化課課長補佐	野上　保	文化課課長補佐	川崎　隆夫

文化課課長補佐	武久　耕作	文化課課長補佐	松岡　　史

庶　務

文化課庶務係長	姫野　　博	文化課庶務係長	前田　栄一
文化課庶務係長	大淵　幸夫	文化課主事	小川浩一郎
文化課主事	植田　　實	文化課主事	加藤　俊一
文化課主事	滝　　龍二	文化課主事	山本　文和
文化課主事	大神　　新	文化課嘱託	吉村　源七

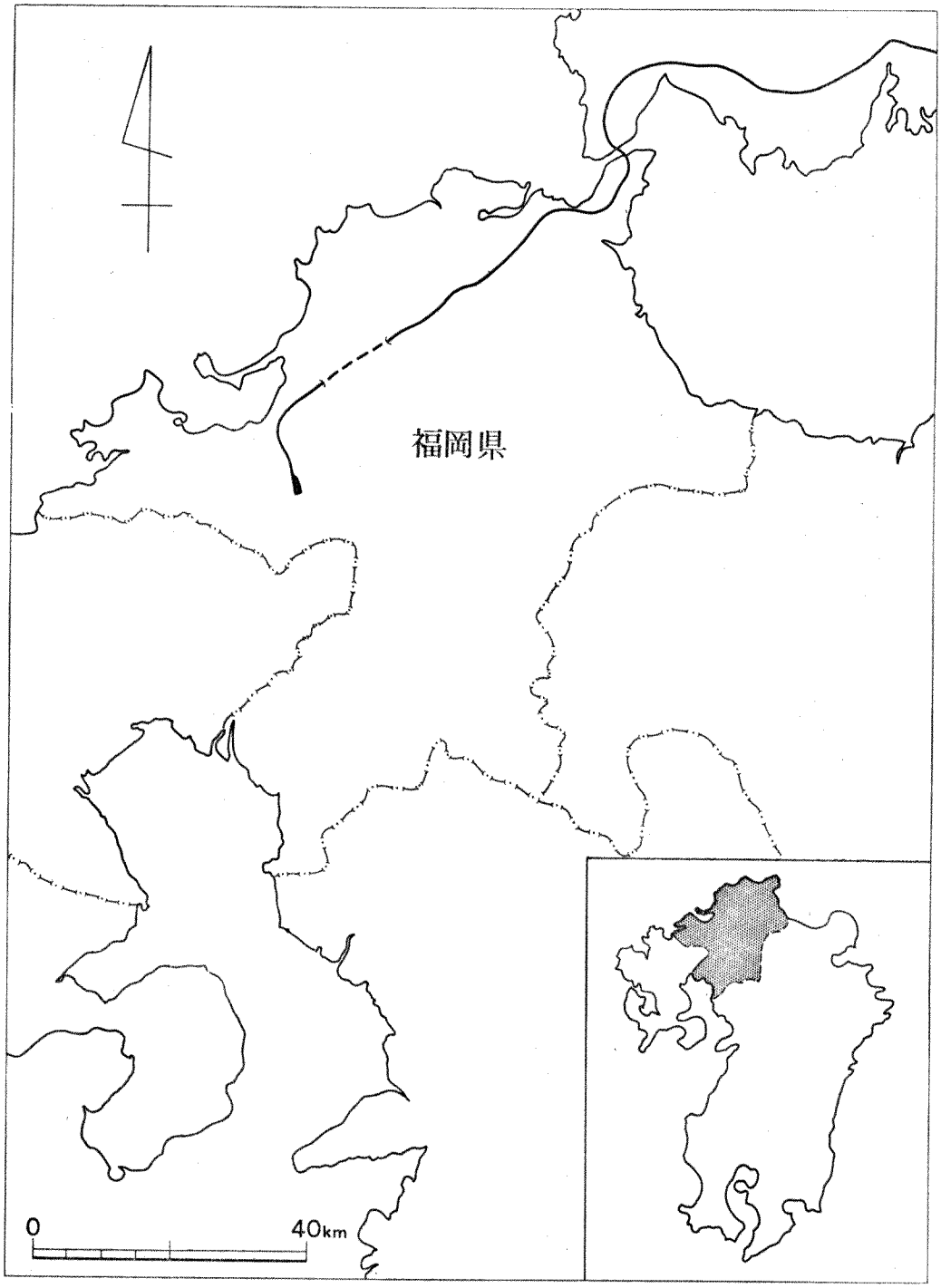
発掘調査

九州大学教授	永井　昌文	九州大学助手	木村幾多郎
九州大学教授	松本　　勗	九州大学助手	林　　鉄也
東京国立文化財研究所	江本　義理	奈良国立文化財研究所	沢田　正昭
奈良国立文化財研究所	秋山　隆保	新　日　鉄	大澤　正己
東京芸術大学大学院	本田　光子		
文化課係長	松岡　　史	文化課技術主査	鬮久　嗣郎
文化課技術主査	栗原　和彦	文化課技師	柳田　康雄
文化課技師	井上　裕弘	文化課技師	木下　　修
文化課技師	佐々木隆彦	文化課技師	小池　史哲
文化課嘱託	岩瀬　正信	文化課嘱託	宮崎　貴夫
調　査　員	桜井　康治		

調査補助員	肥山　正秀	池辺　元明	渡辺　和子	桑田　和義
高田　一弘	藤瀬　禎博	石田　広美	三津井知廣	丸山　康晴
川村　　博	高橋　和子	井上　和人	小林　美孝	高田　弘信
整理補助員	小林　義彦	荒武　麗子		

なお，国鉄関係者は「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第１・２・７集に示す通りである。　（井上）

註１　井上裕弘「Ⅱ－１調査の経過」『山陽幹線関係埋蔵文化財調査報告』３　福岡県教育委員会　1977
「Ⅰ調査の経過」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』７　福岡県教育委員会　1978

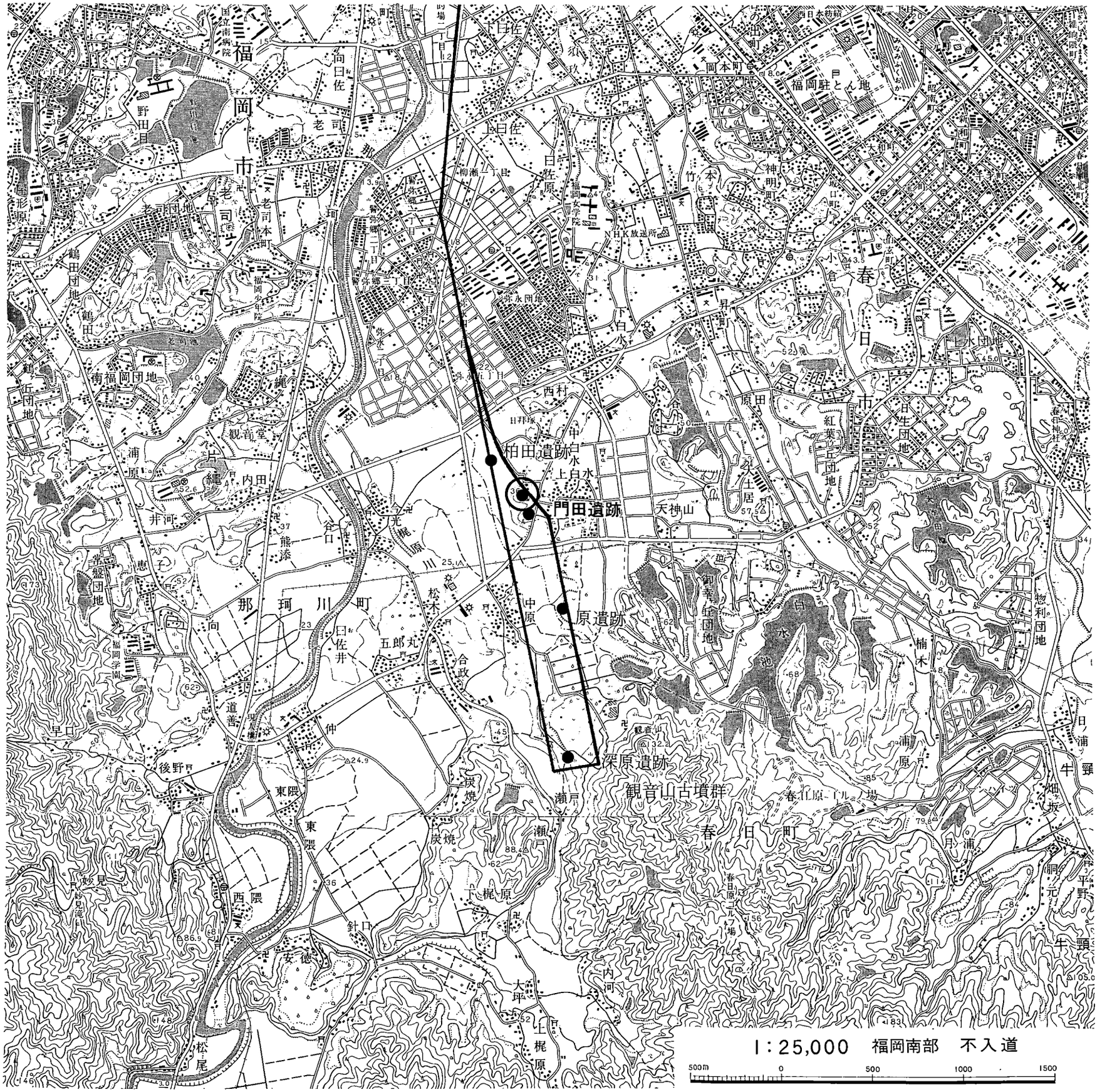


第 7 図　山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置（1/1,000,000）

表 1　山陽新幹線関係遺跡一覧表

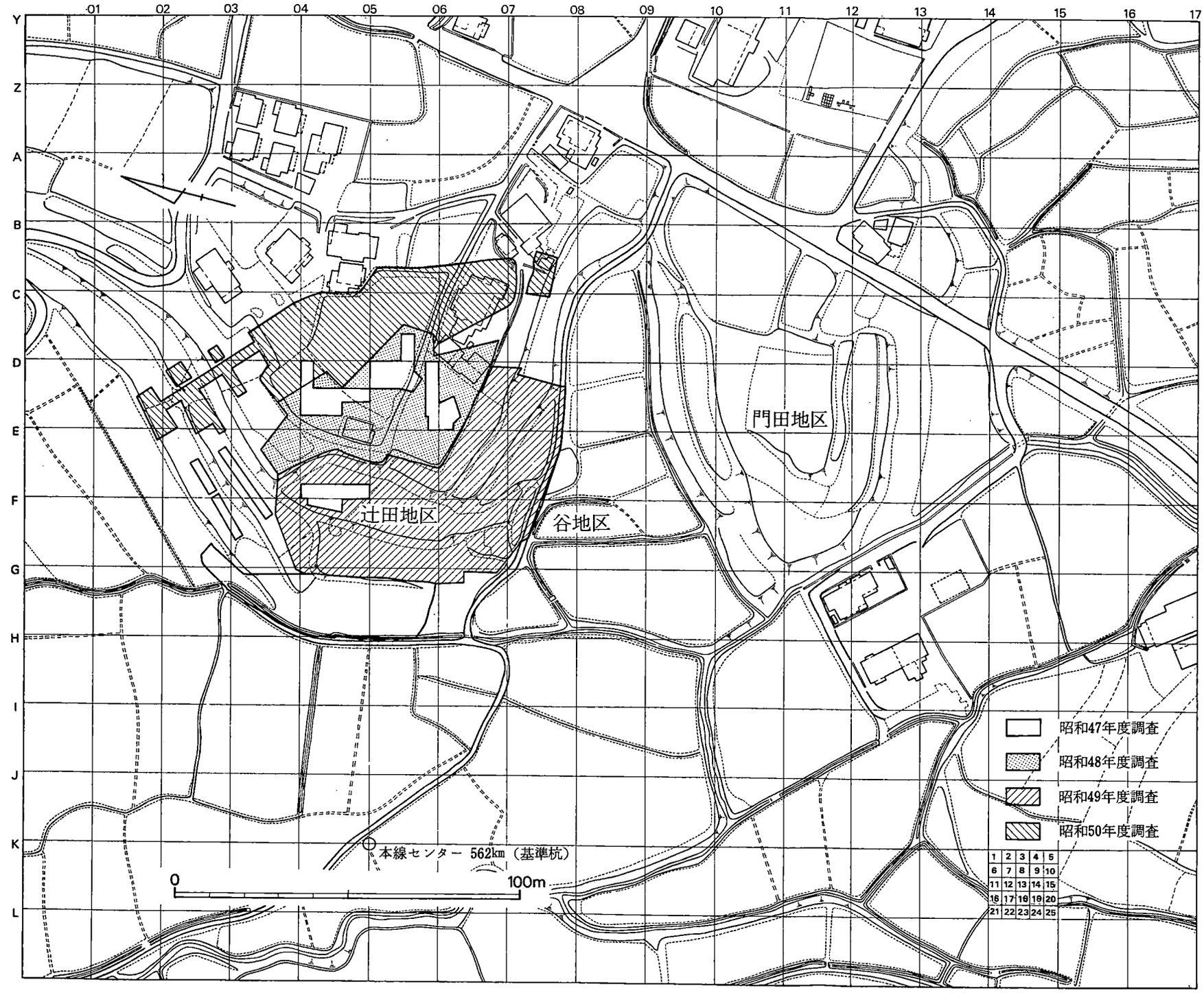
地点番号	遺跡名	所在地	内容	調査終了面積								備考	報告書
				46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	53年度		
				㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡		
3	小田山墓地	鞍手郡鞍手町中山	近世墓地										1集
4	下松尾墓地	〃　〃　〃	近世墓地		−								〃
5	京尾遺跡	〃　〃　室木	中世配石遺構		−								〃
6	若宮条里	〃　若宮町	条里遺構		229								〃
6－0		〃　〃　金丸	近世墓地			−						調査前に工事のため改葬	〃
6－1	田尻遺跡	〃　〃　金丸・水原	古墳，歴史時代：住居跡		2,035		3,000						〃
6－2	別当塚	〃　〃　竹原	古墳		146							遺構，遺物なし	〃
6－3	八幡塚	〃　〃　〃	古墳		16			300					
7	杉園遺跡	〃　〃　稲光	土師：散布地									遺構なし	1集
8		粕屋郡久山町山田	条里遺構		100							調査の結果，条里ではなかった	〃
18	柏田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡8軒，円形遺構，溝状遺構			790							4集
18－1							2,100	1,000				昭和49年度は，別府大学に一部調査委嘱	〃
18－2	辻田遺跡	〃　〃	弥生，古墳時代：住居跡・木器							2,375	1,882		
18－3	井手ノ元遺跡	福岡市南区上曰佐								720			
19～27及び周辺	門田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡，貯蔵穴，甕棺墓，石棺墓，土坑墓，古墳5基		予備調査(4,500)	7,170	9,700	4,570				昭和48年度に門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱	1・3・6・7集
28－311	下原遺跡	〃　〃	古墳時代：住居跡	2,784									3集
32	油田遺跡	筑紫郡那珂川町中原	古墳時代：散布地		690								〃
32－1	〃	〃　〃　〃	古墳時代：甕棺墓				300						〃
32－2	久保遺跡	〃　〃　〃	縄文，歴史時代：溝状遺構						700				
33		春日市上白水	古墳時代：散布地			197							2集
33－1	原古墳群	〃　〃	円墳3基，周溝墓8基，土坑墓4基			1,725	800	1,510					〃
	原遺跡		縄文時代早期，弥生時代甕棺墓									一部保存	
34		筑紫郡那珂川町中原	弥生時代：散布地		135							遺構・遺物なし	
34－1	鳥ノ巣遺跡	〃　〃　〃	先土器，縄文時代：散布地		267								
34－2						288						別府大学に調査委嘱	
35		〃　〃　〃	中世：散布地			200							
36		〃　〃　〃	近世：道標（かんのん道）			−							
37，39 50，55	井手ノ原遺跡	〃　〃　〃	中世：方形区画遺構，溝状遺構	1,814	1,515	1,500							2集
38，40～43 45～49 49-1-4，51	観音山古墳群中原支群	〃　〃　〃	古墳31基	707	6,400	220							5集
43－1	深原遺跡	〃　〃　〃	縄文時代：石組炉跡32基，円形竪穴遺構		1,840	2.540						昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱	8集
43－2						104							
46－1									1,021				
44		〃　〃　〃	中世：散布地		271								
52		〃　〃　〃	中世：散布地		452								
53		〃　〃　〃	古墳時代：散布地		123							遺構なし	
54		〃　〃　〃	弥生，古墳時代：散布地		150								
54－1		〃　〃　〃	古墳時代：散布地			95							
合計				5,305	14,369	14.829	15,900	7,380	1,721	3,059	1,882		

註　1．地点番号1，2は北九州市教育委員会，9～17は福岡市教育委員会が調査を担当した。
2．路線以外の付帯施設にかかわる調査地点は上表に含めてある。
3．面積欄に（－）で示したものは調査面積としてあげないが当該年度に調査したことを示す。



第 8 図　山陽新幹線関係主要遺跡分布図(1/25,000)

第 9 図　山陽新幹線博多車輌基地付近地形図及び遺跡分布図(1/5,000)　　印は本報告書掲載を示す



第 10 図　門田遺跡調査地区全図 (1/1,500)

Ⅱ 遺構の概要

門田遺跡は，二つの舌状に突きでた台地とその間の狭い谷部からなる。辻田地区は北側の台地一帯で，弥生時代から江戸時代にわたる各時代の墓地群がほぼ台地全体から検出された。

弥生時代の墓地は，大きく二群に別れる。前期末・中期後半にわたる甕棺墓27基，木棺墓・土壙墓14基，石蓋土壙墓１基のA群と，後期前半の甕棺墓２基，土壙墓４基，石蓋土壙墓１基のB群からなる。A群はB５・D４・D５区の台地の最も高い所に，B群は台地の西側斜面にあたるF６・G７区に位置している。B群は短期間に形成された墓地群のようで，少範囲に集中している。しかし，A群は時期的にも幅をもち，前期の墓地群が台地の西側斜面に移る沿辺部に分布しているのに対して，中期後半の墓地群は台地中央部に分布するという墓地形成の違いがみられる。とりわけ，鉄剣・鉄戈・青銅製鋤先等多量の副葬品を出した23・24・27号甕棺墓が台地のほぼ中央部の最も高い所に位置することは墓地形成とその規制を考える上で見逃がせない。

古墳時代の墓地は，４基の古墳と５基の土壙墓からなる。４基の古墳は台地の最も高い所に位置し，西側から１号・２号・３号・４号と並んでいる。５基の土壙墓群は，１号墳南側の台地平坦部にあるもの（６・25号）と，南側斜面にあるグループ（７～９号）に別れる。古墳で周溝をもつものは１・２号墳のみで，それも極めて浅く台地全体がかなり削平されていることが判る。

平安時代の墓地は，台地中央部のC５区にある火葬墓１基と，南側斜面のC８～D８区にわたってある10号土壙墓１基のみである。

江戸時代の墓地は，　C５区の台地平坦部東側にあり，　東西に細長く密集して形成されている。時期は江戸時代末期から明治初頭にわたり41基を数える。その大半は江戸末期のもので，墓地はさらに発掘区域外に広がる。棺は甕棺・木棺・桶棺と思われる土葬のものなどさまざまであるが，半数以上が改葬を受け攪乱されていた。　（井上）

Ⅲ　弥生時代の墓地

(1)　A群の墓地（図版３・７，第11図）

Ｂ５・Ｄ４・Ｄ５区にわたり形成された墓地で，辻田地区の最も高い台地平坦部から検出された一群である。前期末，中期後半～末にわたる甕棺墓27基（１～６号，９～28号）土壙墓・木棺墓14基（１～５号，16～24号），石蓋土壙墓１基（２号）から構成される。

a．甕　棺　墓

≪１号甕棺墓（図版３・４，第12図１）

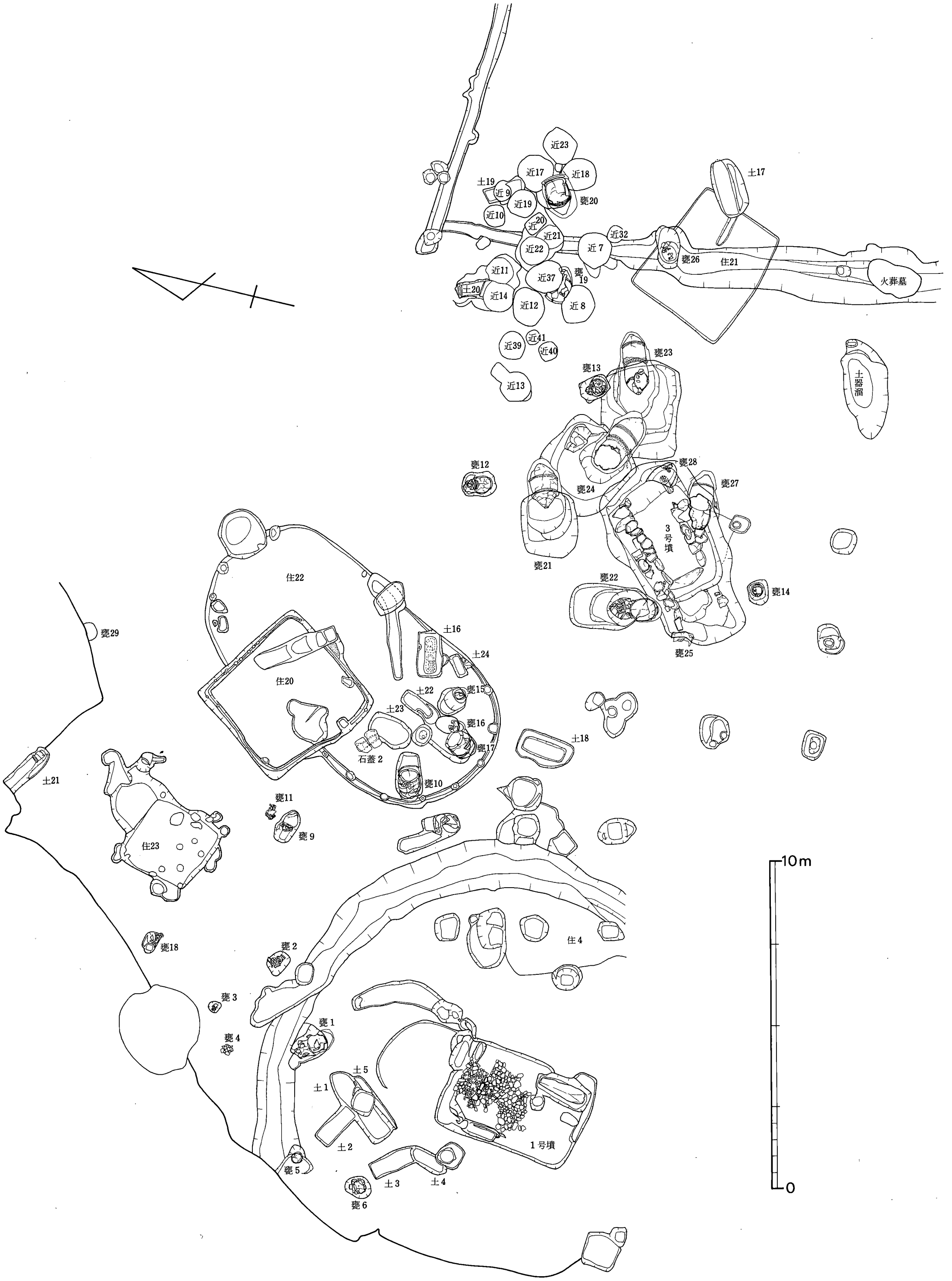
Ｄ５―16区から検出された成人用接口式甕棺墓で，台地の西端の一群を構成する。墓壙上面と上甕側は削平され旧状をとどめていない。主軸方位はN―32°―Wを示し，甕棺の埋置は35°の傾斜をもっている。接口部の目貼り粘土はない。時期は前期末。

甕　棺（図版39，第13図）　上甕は，口径52.7㎝，器高68㎝，底径16㎝を測る大形壺形土器である。平底の底部に球形の胴部がつき，肩部にはヘラ描きの１本沈線がめぐっている。頸部の立ち上りは直線的で，口縁部の外反は緩やかな「く」字状をなす。口縁部内面は肥厚し，段をなしている。口唇部外面には刻目を有す。内外ともナデ仕上げで，口縁部内面には細い刷毛目を残している。色調は淡黄褐色で，胎土には大粒の砂粒を多量に含んでいる。焼成普通。

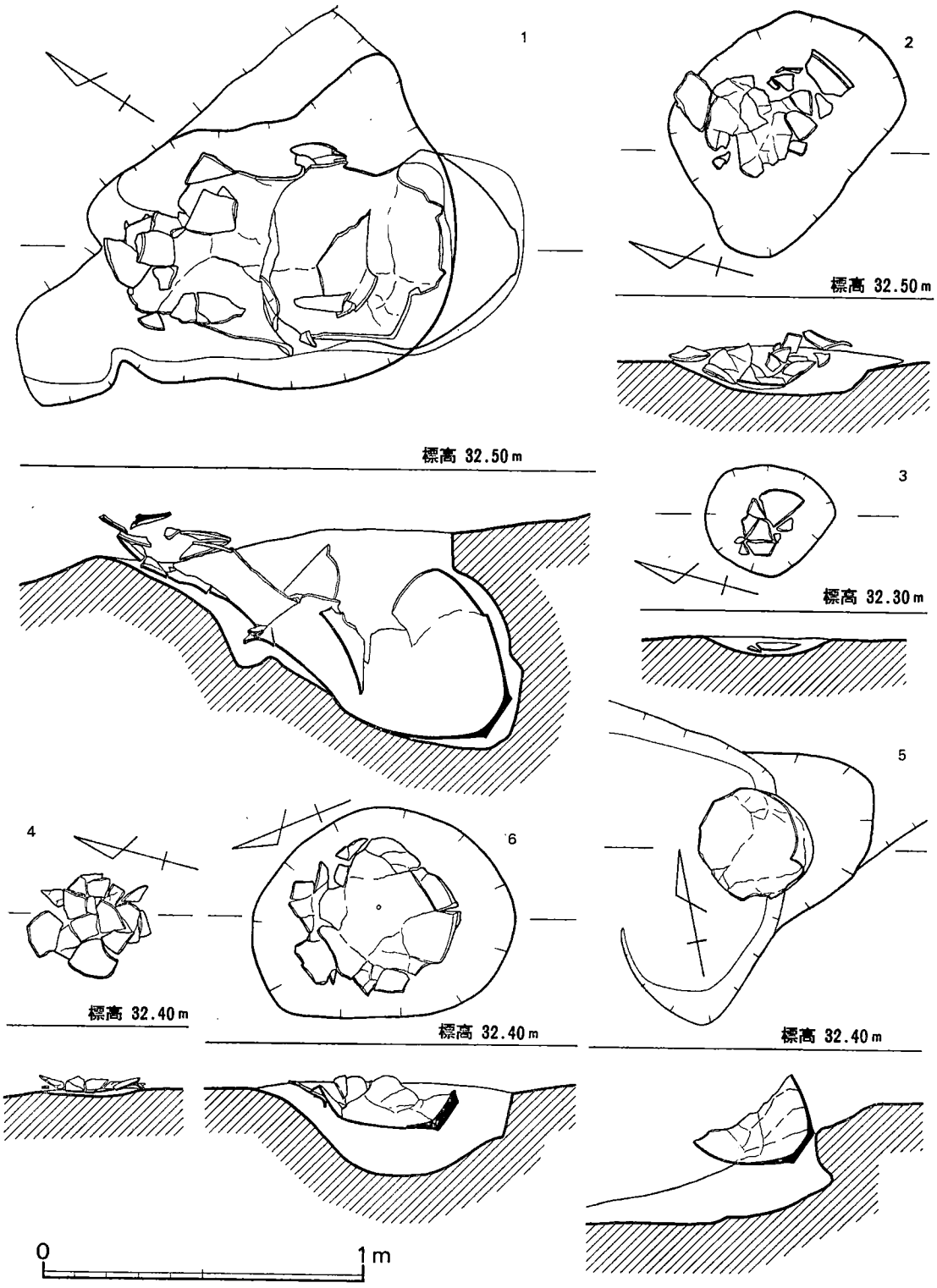
下甕は，口径61㎝，器高78㎝，底径15.5㎝を測る大形壺形土器である。平底の底部に球形の胴部がつき，上甕と同様，肩部に１条のヘラ描き沈線を施している。頸部の立ち上りは，直線的で，口縁部の外反は「く」字状をなす。口唇部外面は，ヨコナデによる凹みをもち，端部上下に刻目を付している。口縁部内面は肥厚し，段をなしている。胴下半には排水のための穿孔１個がある。器面は内外とも風化が著しく調整は不明。色調は淡黄褐色，胎土には多量の砂粒を含む。焼成普通。

≪２号甕棺墓（図版５，第12図２）　Ｄ４―14区から検出された覆口式小児用甕棺墓で，西端の一群をなす。後世の削平が著しく，わずかに下半が残存するのみで，墓壙形態・主軸方位など不明である。時期は前期末。

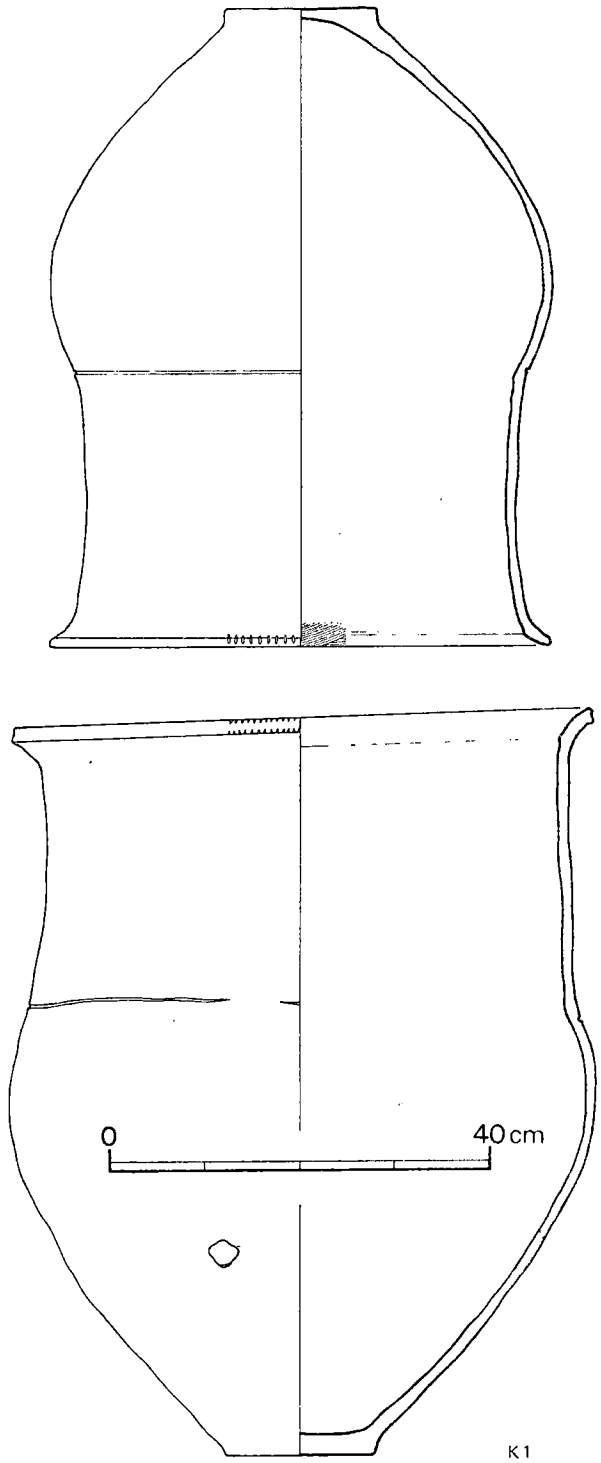
甕　棺（第15図）　上甕は復原口径51.6㎝を測る大形鉢形土器である。口縁部外面と口縁下に１条の三角凸帯を付した鉢で，下の凸帯端部には刻目を施している。口縁部内外はヨコナ



第 11 図　弥生時代 A 群墓地遺構配置図 (1/100)



第 12 図　1～6号甕棺墓実測図（1/20）



第 13 図　甕棺実測図　1 (1/8)

デ，凸帯間は刷毛，他はナデて仕上げている。色調は淡黄白色を呈し，胎土には多量の砂粒・雲母を含んでいる。焼成普通。下甕は復原口径40.8㎝を測る大形壺形土器である。口縁部は緩やかな「く」字状をなし，端部外面下端には刻目がある。口縁部内面は肥厚し，段を作っている。内外とも器面の風化が著しく調整は不明。色調は淡黄白色で，胎土には多量の砂粒・雲母を含んでいる。焼成普通。

≪3号甕棺墓（第12図3）

2号甕棺墓の西側に位置し，1・2号と同様西端のグループを構成する。上面は後世の削平が著しく，わずかに胴部小片を残すのみである。単棺・複棺の判別は不明である。胴部破片からみて小児用甕棺であろう。胴部小片のみで実測は不可能であった。時期は前期であろう。

≪4号甕棺墓（図版5，第12図4）

D4—20区から検出されたもので，3号甕棺墓の西側に位置する。3号甕棺墓と同様，上面の削平が著しく，わずかに胴部破片を残すのみである。単棺か複棺か，また成人用か小児用かも不明である。胴部小片のため実測不可能。

≪5号甕棺墓（図版6，第12図5）

4号甕棺墓の西側に位置する小児用甕棺墓で，主軸方位はN—79°—Wを示す。この甕棺も上面の削平が著しく，胴下半を残すのみで，単棺か複棺か不明である。甕棺の埋置角度は34°を示し，掘り方底面より約15㎝浮いている。時期は前期末であろう。

甕　棺（図版39，第15図）　小型壺形土器の胴下半の資料で，底径11㎝を測る。胴部は球形をなし，底部の厚さは1.6㎝と分厚い。調整は器面の風化が著しく不明。色調は黄褐色を呈し，胎土には多量の砂粒を含む。焼成は普通。

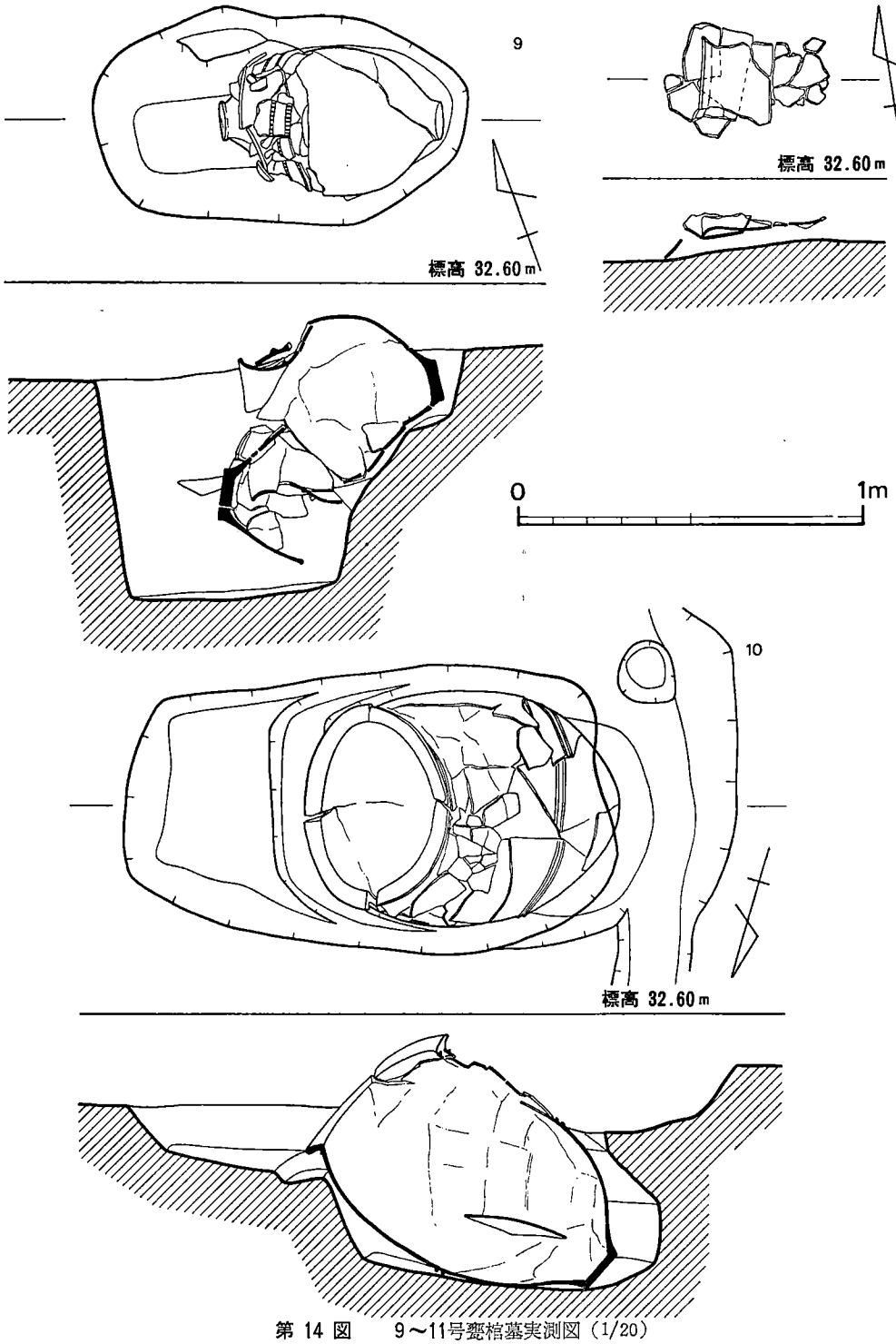
≪6号甕棺墓（図版6，第12図6）

D5—21区から検出された覆口式の小児用甕棺墓，台地西端の一群を構成する。この甕棺墓も上面の削平が著しく，上甕は口縁部付近をわずかに残すのみである。主軸方位はほぼN—23°—Eを指し，埋置角度は約35°を測る。5号と同様，下甕の埋置は掘方底面より約15㎝と浮いている。下甕の胴部中位には排水のための穿孔がみられる。時期は前期末。

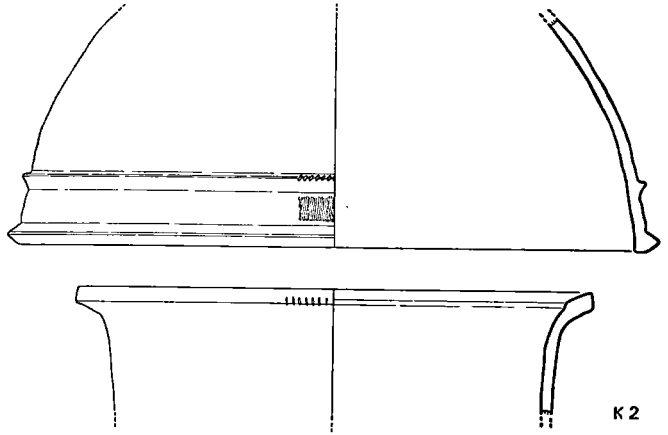
≪9号甕棺墓（図版8・9，第12図9）

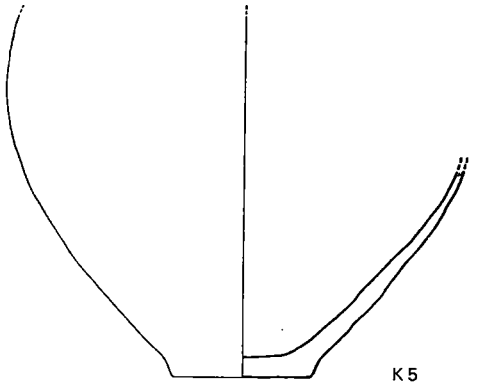
D4—10区に位置し，台地西端の一群を構成する覆口式の小児用甕棺墓である。前期末の46号袋状竪穴の入口部上面を切って埋置されている。主軸方位はN—71°—Wを示し，埋置角度は—27.5°を測る。上甕は袋状竪穴の入口部にあり，竪穴の陥没のためか甕が落ち込んだ状態を呈している。下甕は壺で，上甕は甕を覆せて埋置している。時期は前期末である。

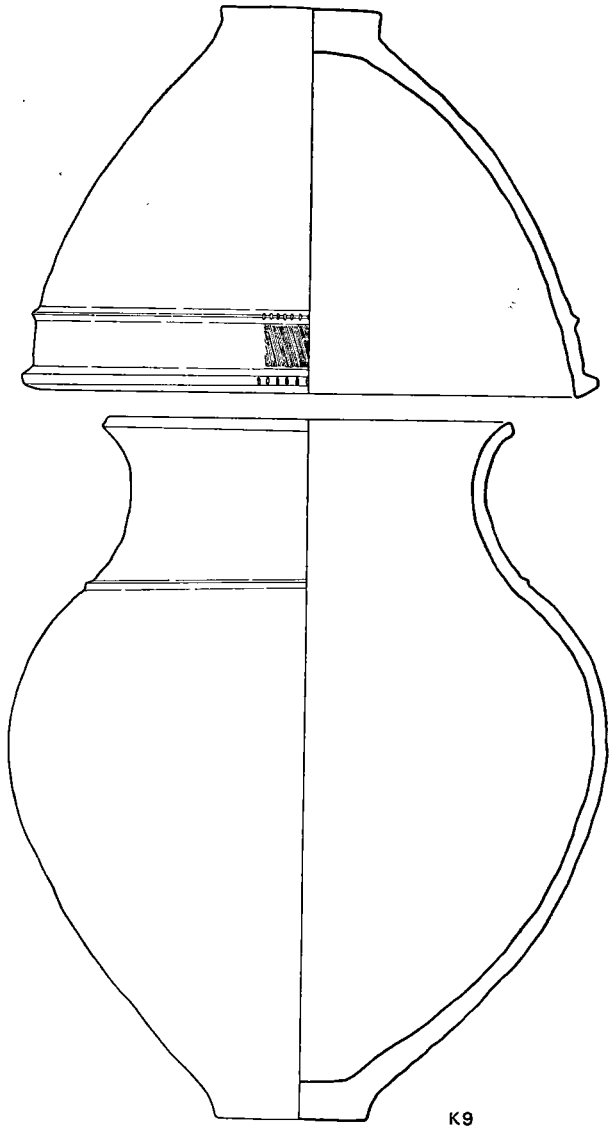
甕　棺（図版39，第15図）　上甕は，口径45.4㎝，器高30.5㎝，底径12.6㎝を測る大形鉢形土器である。口縁部と口縁下に1条の凸帯を付し，端部に刻目を施している。器壁は約1.2㎝，底部の厚さ3.4㎝と部厚い作りの土器である。口縁部内外はヨコナデ，凸帯間は細い刷



第 14 図　9～11号甕棺墓実測図（1/20）







第 15 図　甕棺実測図　2（1/6）

毛，体部内外はナデて仕上げている。部厚い平底の外面には指頭による押え痕が顕著に残っている。色調は淡茶褐色，胎土にはかなりの砂粒・雲母を含む。焼成良好。

下甕は，口径32.4cm，器高55cm，底径12cmを測る壺形土器である。器肉の厚い平底の底部に，胴部最大径を上位にもつ球形の胴部がつき，肩部には1条の三角凸帯がめぐる。頸部は短かく，内傾気味で，口縁部の外反が緩やかな単口縁の壺である。口縁部内外と凸帯の部分がヨコナデの他はナデて仕上げている。全体に器肉の厚い作りの土器である。色調は淡黄褐色，胎土には多量の砂粒を含む。焼成普通。（井上）

≪10号甕棺墓（図版10，第14図10）

D5区北東部に位置し，22号住居跡西端と重複する。単棺の成人用甕棺墓である。墓壙は長辺1.35m，短辺0.85mを測る隅丸方形プランで，西側に横穴を穿ち＋40°の傾斜を有して甕を挿入させている。甕棺はN—74.5°—Eの主軸方向で埋置される。甕の口縁部に沿った墓壙床面には，約4cmの浅い凹みがみとめられ，蓋を設けていたことが考えられる。

甕　棺（図版40，第17図）　口径55.0cm，器高81.6cm，底径12.0cmを測る大形甕形土器である。口縁部は2.2cm内傾する逆「L」字形で，口縁直下に三角凸帯が貼り付けられている。胴部は長胴の倒卵形をなし，胴部やや上位で最大径65.5cmを測る。胴部中位やや下寄りに断面「コ」字形の突帯が2条貼り付けられている。底部はややあげ底気味の平底である。器壁は7～10mmと薄めで，外面上半ナデ，下半突帯以下細かい刷毛調整，内面は粗い刷毛のあとナデて仕上げている。胎土には長石・石英粒をかなり含むが赤色粒土は含まれず，焼成は並で，色調は黄褐色を呈す。（小池）

≪11号甕棺墓（図版10，第14図11）

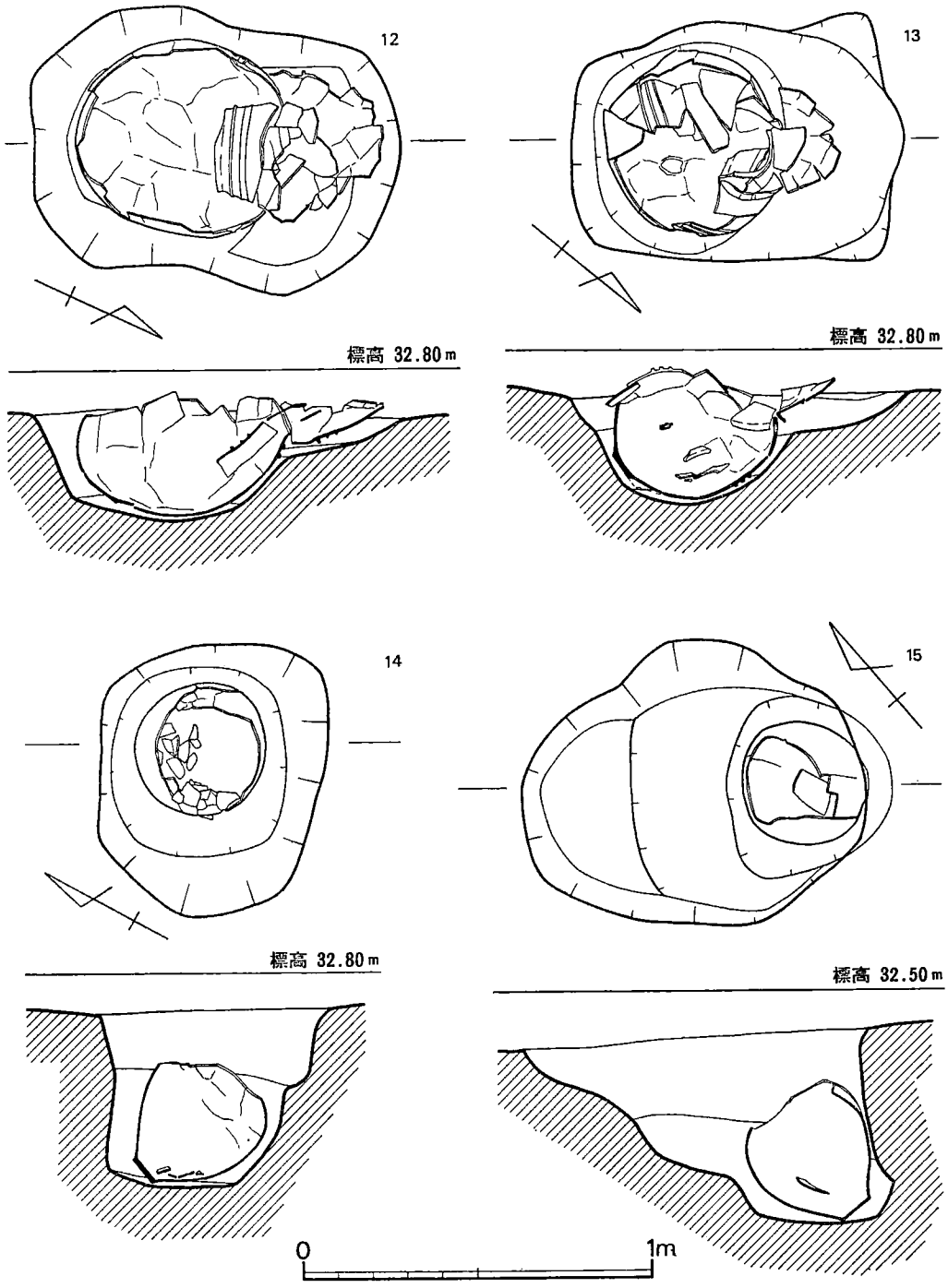
9号甕棺墓の北側に近接して検出されたものである。上面の削平が著しく，甕棺は下半の一部を残すのみで，墓壙等も確認できなかった。わずかに残る甕棺から覆口式甕棺墓であることが判る。上甕は口縁部を打欠いた甕形土器で，下甕は壺形土器である。埋葬傾斜はほぼ水平である。時期は前期末である。

甕　棺（第19図）　実測しえたのは下甕のみである。下甕は復原口径41.6cmを測る壺形土器で，口縁部内面を肥厚し，段を作っている。口縁端部上下には刻目を施している。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は赤褐色を呈す。胎土には多くの砂粒・雲母を含む。

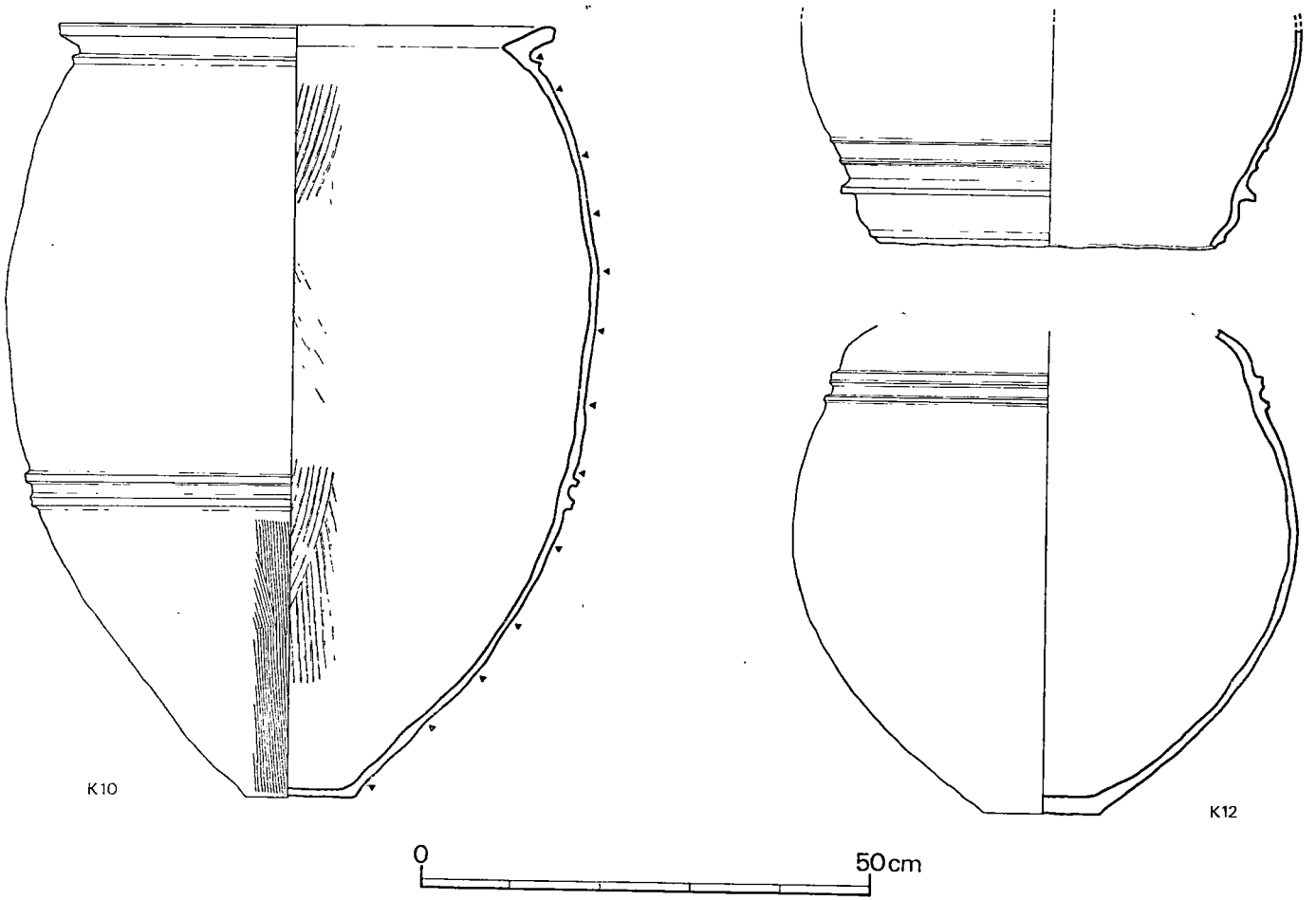
（井上）

≪12号甕棺墓（図版11，第16図12）

C5区の中央部北西寄りに位置する覆口式の小児用甕棺墓である。上半部を大きく削平されているため，墓壙・甕棺とも大半を消失し，墓壙は下面の瓢形に近い不整楕円形プランを残す程度で，全体の形状は不明である。甕棺の残存状況も良くないが，下甕口縁を打ち欠き，わずかに上甕が覆う。粘土目貼りはみられなかった。主軸方位はN—25.5°—Wで甕棺埋葬角度は



第 16 図　12～15号甕棺墓実測図（1/20）



第 17 図　甕棺実測図　3（1/8）

+34°を測る。人骨は遺存しない。

甕　棺（図版40，第17図）　上甕は，口縁部打ち欠き及び胴部以下の欠損のため明瞭ではないが，現存する胴部最大径55.6cmを測る壺形土器。肩部に1条の鍔状凸帯がめぐらされ，小さな凸帯が鍔状凸帯の口縁側に1条，胴部側に2条めぐらされ，樽形をなす。胎土に若干の細砂粒・雲母粒を含むが精良で，胴部付近の器壁は薄く5～6㎜程度，口縁付近は厚くなる。焼成はやや粗で，色調は黄褐色を呈す。

下甕は，口縁部を打ち欠かれており，現存する器高54.3cm，最大径55.6cm，底径13.0cmを測る中形の壺形土器。口縁部の形状は不明であるが，口縁から肩部にかけては大きく彎曲し，2条の「M」字形凸帯がめぐることから，樽形に近い要素を有している。内外面ともナデで仕上げられ，外面全体に赤色顔料が塗付される。胎土には多量の石英粒と雲母粒がみとめられ，焼成並で，茶褐色の色調を呈す。

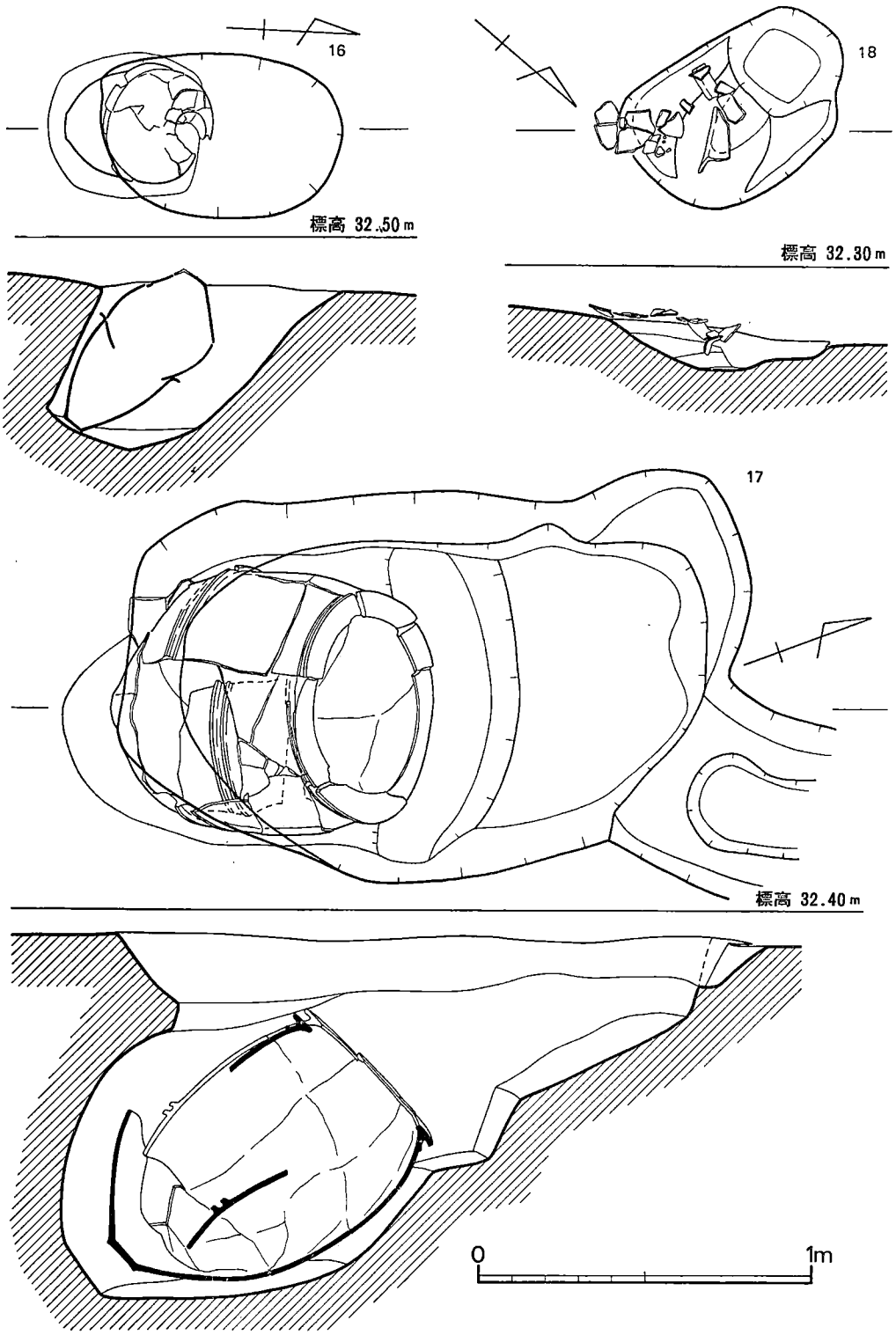
≪13号甕棺墓（図版11，第16図13）

C5区中央部に位置し，23号甕棺墓墓壙上面を切って施設される小児用甕棺墓である。この甕棺墓も上半部を削平されており，墓壙の下端部を残すのみで全体の形状は不明である。甕棺も，深い横穴に入れられた下甕の残存状況がやや良いのに比して上甕は口縁部がわずかに残存する程度である。壺形土器頸部までで口縁を打ち欠いた下甕に上甕の口縁が接口する。目貼り粘土はない。主軸方位はN—40°—Wで傾斜角度は+32°を測る。なお甕棺内には人骨の遺存はみられなかったが，下甕内に須恵器片が混入していた。

甕　棺（図版40，第20図）　上甕は底部を欠損するが，口径28.0cm，現存する器高24.0cmを測る小型甕形土器。口縁部は外反し「く」字状を呈し，胴部やや上位の最大径部分に断面三角形の凸帯が1条貼り付けられ最大径を29.2cmにさせている。外面頸部以下は，凸帯部分を除いて，刷毛調整され，内面はナデ仕上げされる。胎土に石英粒をやや多く含み，焼成は並で，淡褐色の色調を呈す。下甕は，頸部までの口縁部を欠失するため全体の形状は不明瞭であるが，現存する器高43.6cm，底径13.0cm，胴部最大径52.5cmを測る中形の壺形土器。胴部最大径部分に3条の下向きの「コ」字形凸帯が貼り付けられ，頸部に三角凸帯の存在がわずかにみとめられる。胴部下半に外面から打ち欠いた長径10.0cm，短径6.0cm程度の穿孔がある。内外面ともナデ仕上げされ，器壁はやや薄い。胎土に石英粒を含み，焼成は並で，色調は茶褐色を呈す。

≪14号甕棺墓（図版12，第16図14）

C5区西端部，3号墳墓壙の南側に位置し，この墓地群の南端部に占地する。単棺式の小児用甕棺墓である。現存値長径0.75m，短径0.65m，深さ0.5mの不整円形プランの墓壙を有し，壺形土器をN—151.5°の主軸方位，+46°の傾斜角度で埋置しているが，蓋については明瞭ではない。ただ主軸方位の墓壙肩部，壺の口縁部に相当する位置にわずかな凹みをみとめるが，木蓋を設けたとするには不明瞭な施設である。



第 18 図　16～18号甕棺墓実測図（1/20）

甕　棺（図版40，第19図）　口縁部を欠失するため全体形状は不明であるが，現存する器高34.7㎝，最大径38.7㎝，底径9.8㎝を測る中形の壺形土器。底部はやや上げ底気味で，倒卵形の胴部へ移る。胴部やや下位に直径0.7㎝程度の穿孔が内側から穿たれている。胎土に長石・石英粒を多量に含み，焼成が粗で風化が顕著なため，器面の調整方法は不明である。内面はわずかにナデの痕跡をみとめることができる。色調は淡黄褐色を呈す。

なお，口縁部の欠失については墓壙・棺内ともに口縁部土器片が残存せず，墓壙上面まで深さを保っていたことから，埋置当初から口縁を欠失していたことが考えられる。打ち欠きの痕跡をみとめられないため，破損した壺の転用も考えなければならない。

≪15号甕棺墓（第16図15）

D５区の東端部に位置し，22号住居跡と重複する単棺の小児用甕棺墓である。墓壙は三段掘りで，長径0.95ｍ，短径0.8ｍ，深さ0.4ｍの楕円形プランを呈し，更に長径方向の横穴を掘って棺を埋置している。棺には口縁部を頸部まで打ち欠いた壺形土器を使用し，主軸方位N―49.5°―W，傾斜角度＋52°で埋葬しているが，蓋等の施設については検出できなかった。

甕　棺（図版41，第19図）　頸部以上を打ち欠いているため全体の形状は不明であるが，現存する器高39.4㎝，底径11.0㎝，最大径37.1㎝を測る壺形土器。やや上げ底気味の平底から倒卵形の胴部に反りながら移行する。また頸部には断面三角形の凸帯の存在がみとめられる。胎土に長石・石英の細粒や雲母・赤土を含み，焼成は並であるが，風化が顕著で，器面の調整方法等は不明である。色調は暗赤褐色を呈す。　（小池）

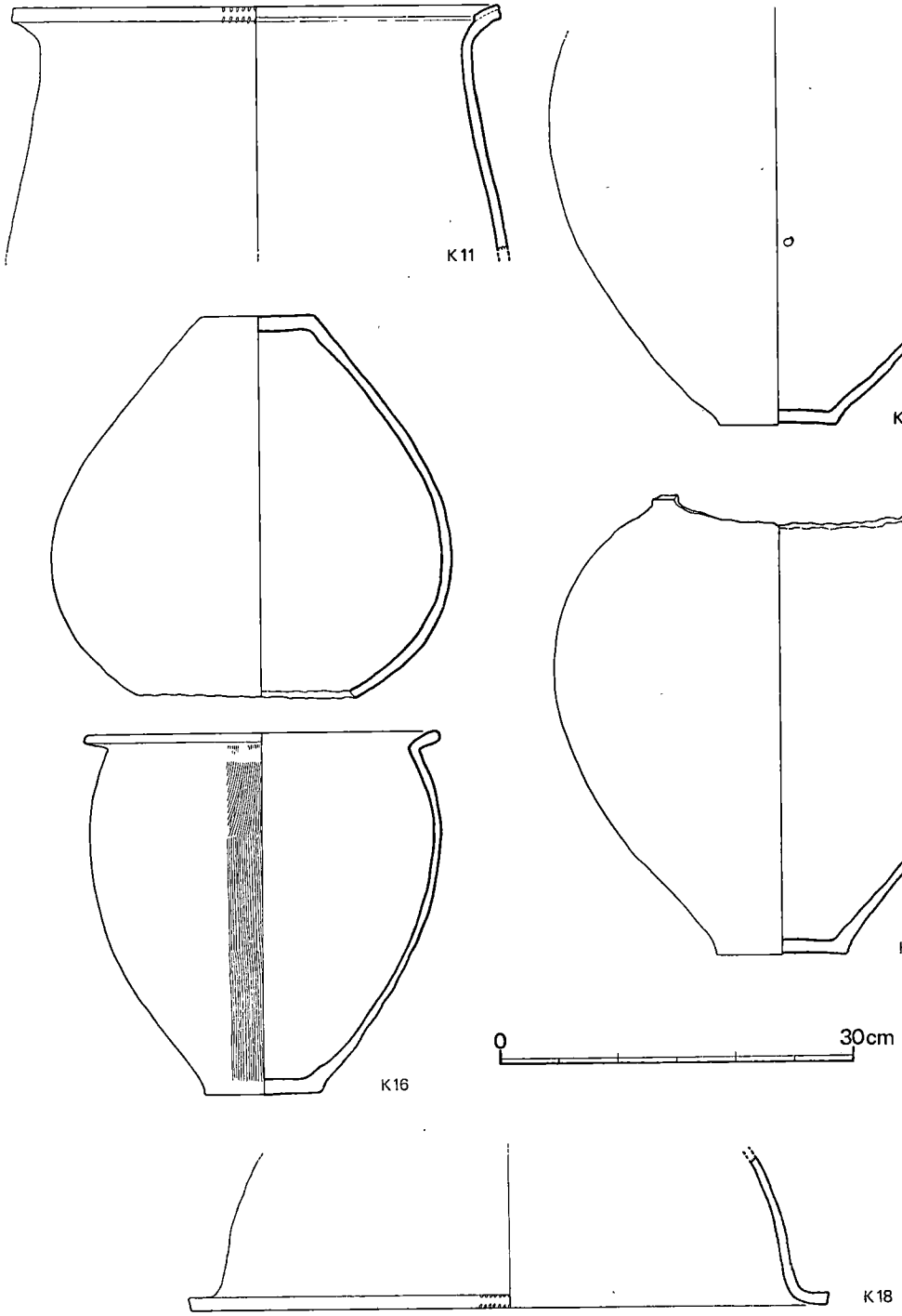
≪16号甕棺墓（図版12・13，第18図16）

15号甕棺墓の西に位置する挿入式小児用甕棺墓である。墓壙は，若干の削平を受けているが，現存上面で楕円形のプランを呈し，北から南へ40°前後の傾斜で掘り込まれている。甕棺は墓壙の南側に接近して埋置され，埋置傾斜角度は50°を示し，主軸方位はN―13°―Wである。

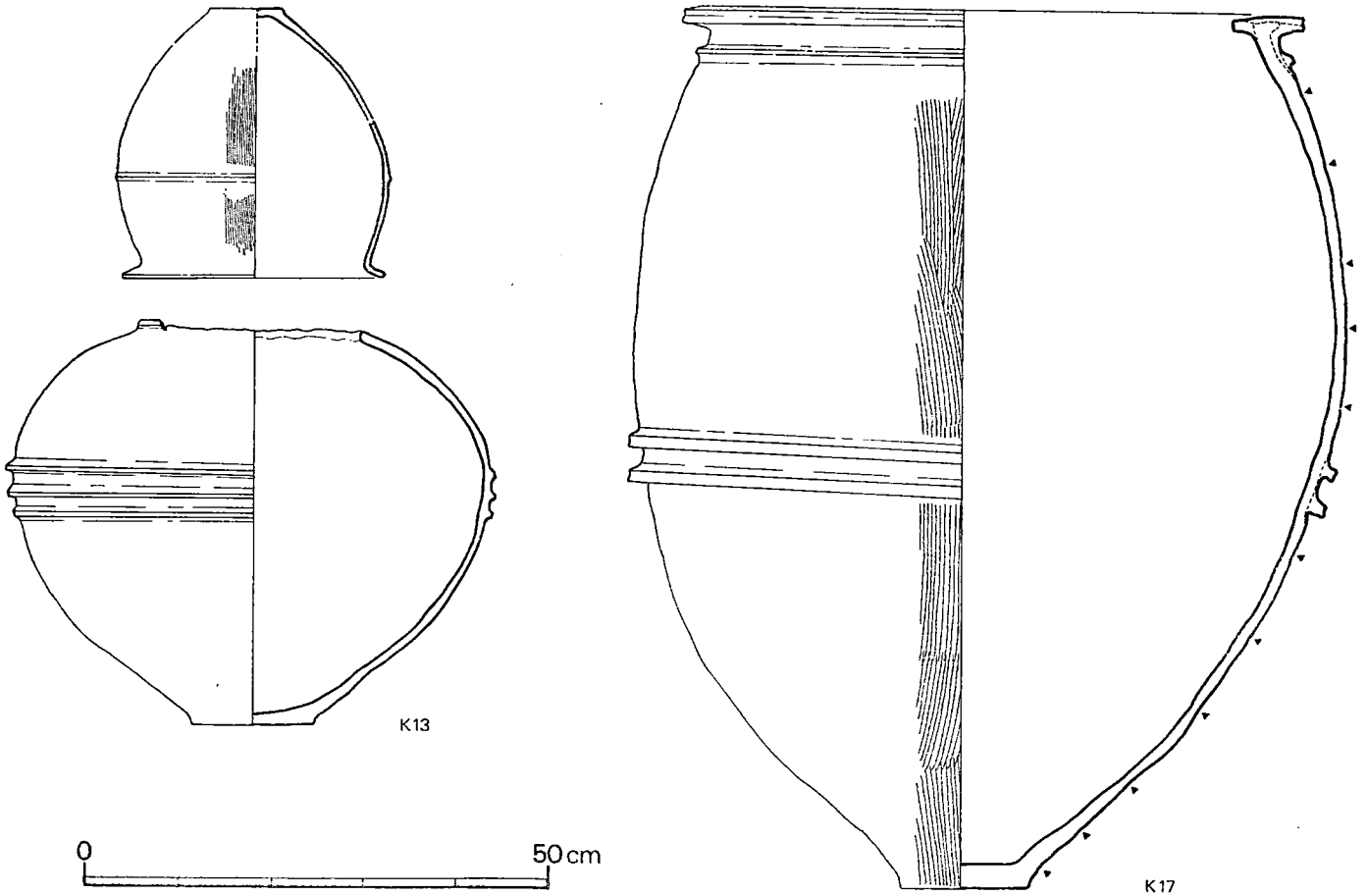
≪17号甕棺墓（図版13，第18図17）

16号甕棺墓に切られその西南に位置する成人用単式甕棺墓である。墓壙はほぼ原形をとどめており，不整隅丸長方形を呈する。北から南へ傾斜する底面と南側へ約40㎝掘り込んで横穴部を形成している。甕棺の口縁部直下には幅15㎝～20㎝の平坦面をもち蓋受部をなしている。蓋受部及び甕棺口縁部に目貼りの粘土等はみられなかった。

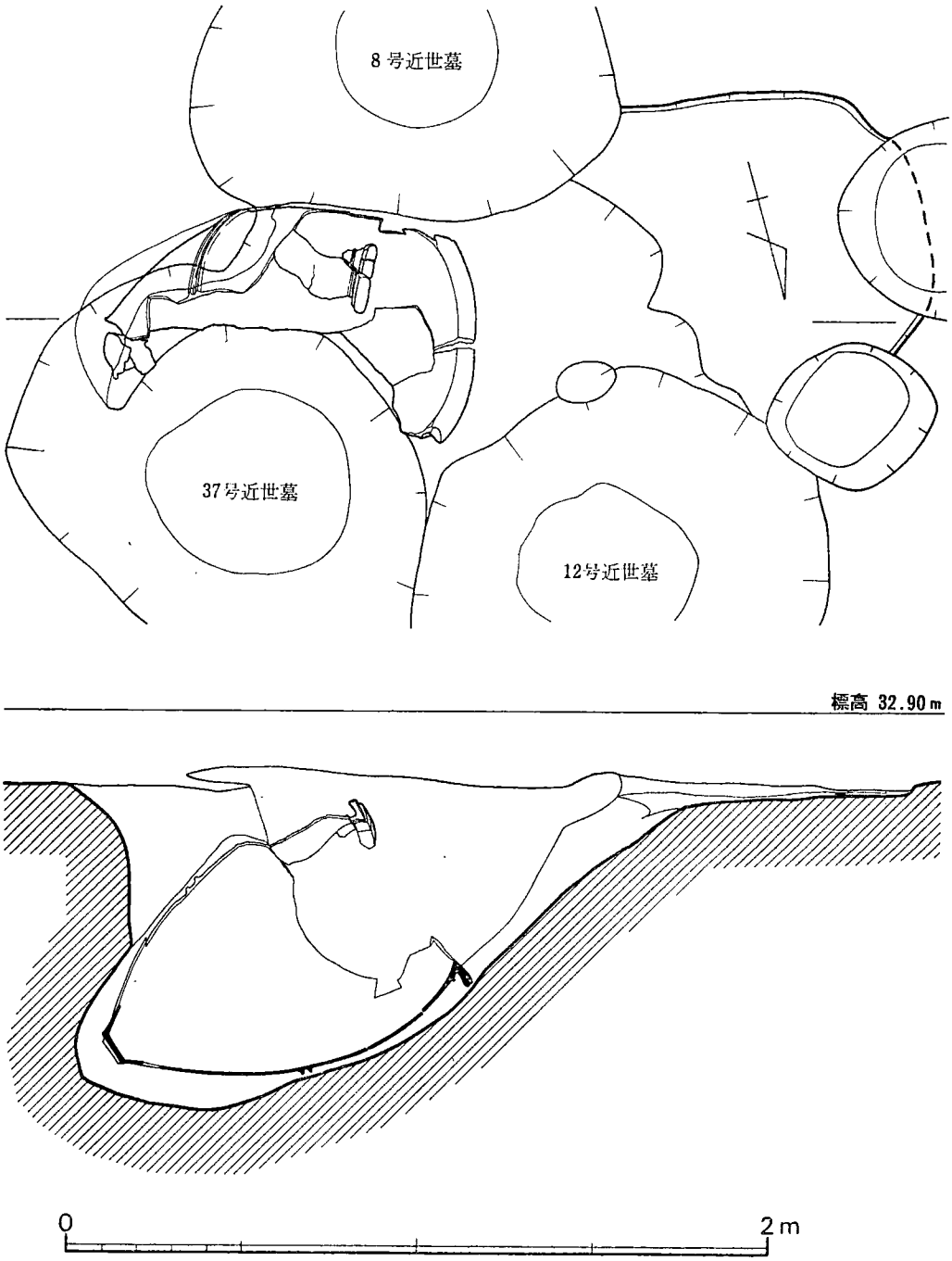
甕　棺（図版41，第20図）　甕は内外に突出する口縁部を有し，口縁部の平坦面は若干内側に傾斜する。頸部には断面「コ」字状の貼り付け凸帯を有する。最大径は胴中央部に在り，胴部には下向きの断面「コ」字状凸帯二本をめぐらす。底部は平底を呈する。調整は外面に下から上方向の刷毛目を上から下へ施している。内面はナデ仕上げであるが胴上半部に刷毛目を残している。胴部中央付近と胴部下半から底部にかけて黒斑がみられる。胎土は，やや小さめの石英粒，長石を含み，焼成は良く，色調は多少赤味を帯びた黄褐色を呈する。　（丸山）



第 19 図　甕棺実測図　4 (1/6)



第 20 図　甕棺実測図　5 (1/8)



第 21 図　19号甕棺墓実測図（1/20）

≪18号甕棺墓（図版14，第18図18）

台地の西端に位置する覆口式の小児用甕棺で，下甕は口縁部を打ち欠いている。他の西端部の一群と同様，上面が著しく削平されていて，下甕は胴部の一部，上甕は口縁部付近を残すのみで，墓壙の状態等は不明である。主軸方位はかならずしも明確でないが，ほぼN—40.5°—Eを示す。埋置角度は明確でない。

甕　棺（第19図）　下甕は胴部小片のため実測不能。上甕は，復原口径54.4cmを測る如意形口縁の大型鉢形土器で，口縁端部外面上下に刻目を付している。口縁部内外をヨコナデ，体部内外はナデて仕上げている。色調は淡黄褐色，胎土には多くの砂粒・雲母を含む。焼成良い。

≪19号甕棺墓（図版14，第21図）

C 5—12区から検出された単棺の成人用甕棺墓で，周囲は近世墓群によりその大半が破壊されていた。墓壙は削平のため下端のみであるが楕円形を呈し，その東側に横穴を掘って甕棺を埋置している。単棺にしては横穴が深い。主軸方位はN—74.5°—Wを示し，埋置角度は33°を測る。

甕　棺（図版42，第24図）　口径65.2cm，器高100cm，底径12.2cmを測る大型甕形土器である。底部は若干凹み気味の平底で，胴部は倒卵形を呈し，最大径は上位にあり68.2cmを測る。胴中位よりやや下に「コ」字形凸帯２条と，頸部に１条めぐっている。口縁部は22mm内傾する逆Ｌ字形を呈し，口縁端部外面はヨコナデにより凹んでいる。口縁部内外と凸帯上下がヨコナデ仕上げの他は，内外ともナデて仕上げている。色調は暗赤褐色を呈し，胎土には砂粒・赤土を含む。焼成は良い。

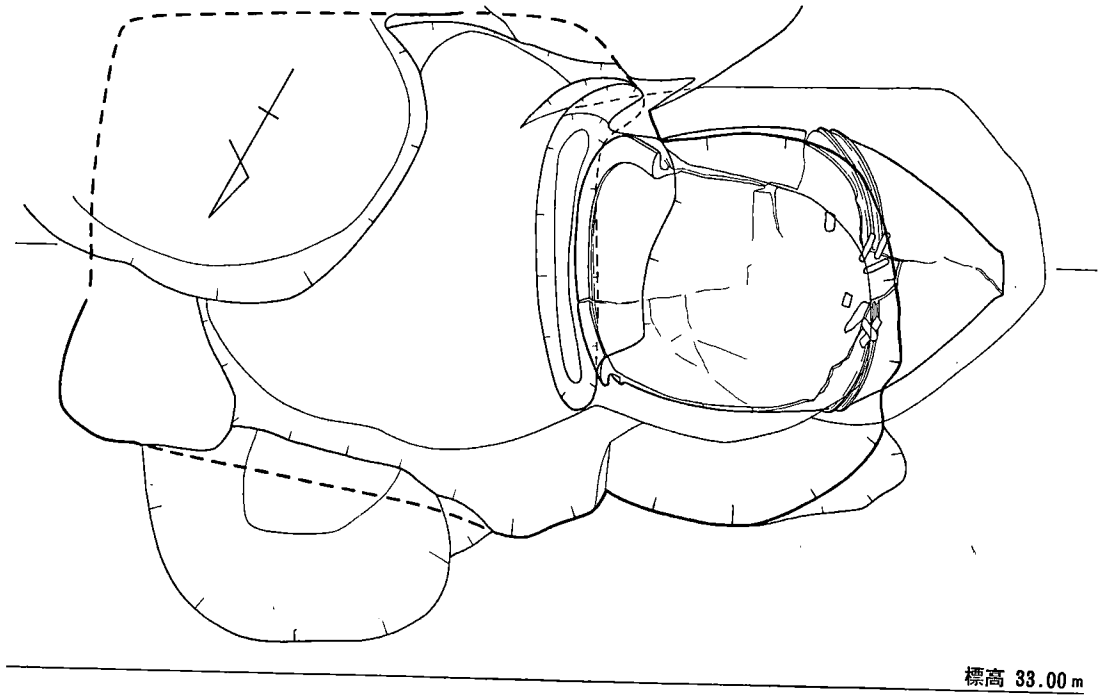
≪20号甕棺墓（図版15，第22図）

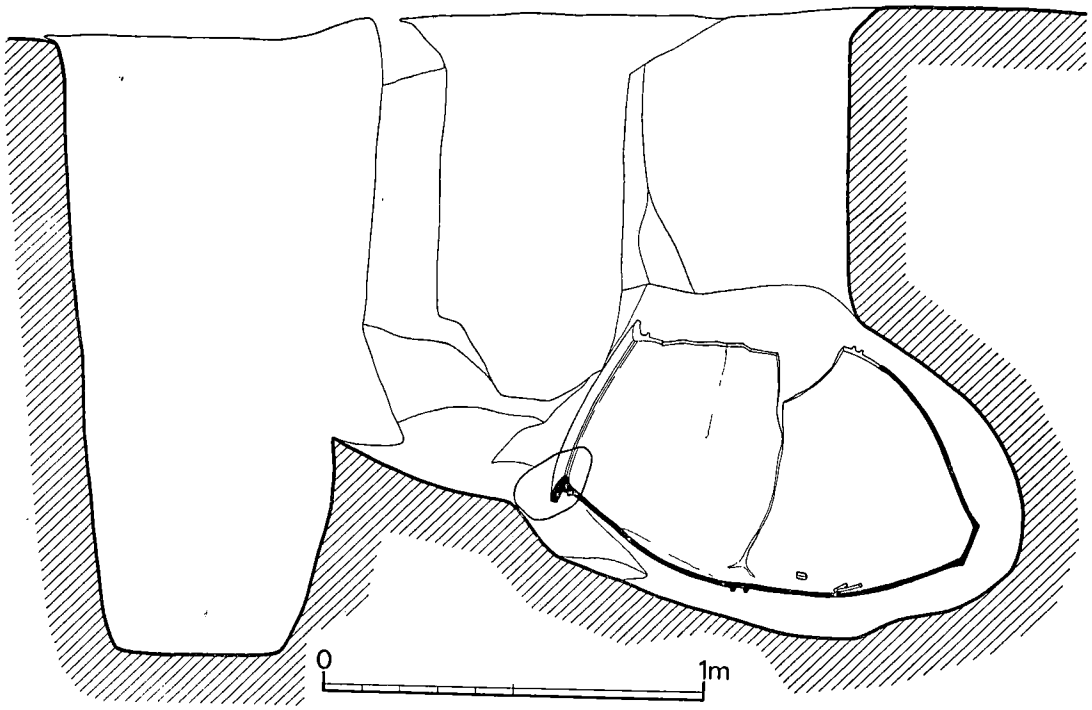
最も東端に位置する単棺の成人用甕棺墓である。墓壙の大半は近世墓群により破壊されているが，わずかに残存する部分から長辺約1.4m，短辺約1.25mの長方形プランを呈すようである。墓壙の西側に横穴を穿ち，26°の傾斜をもたせて甕棺を埋置している。また，木蓋をしたと思われる幅12～15cm，長さ77cm，深さ４cmの溝状遺構が検出された。主軸方位はN—59°—Eを示す。

甕　棺（図版42，第24図）　口径72.6cm，器高103.2cm，底径12.2cmを測る大型甕形土器である。口縁部はほぼ平坦で，内面に若干張り出した「T」字形の口縁である。胴部は倒卵形をなし，最大径は中位にあり，75.4cmを測る。凸帯は「コ」字形をなし，頸部に１条，胴部中位よりやや下に２条ある。底部は平底で，器肉は８～10mmと薄く作りが良い。内外ともナデて仕上げた暗赤褐色を呈す土器で，焼成は良い。胎土には砂粒・赤土をかなり含む。（井上）

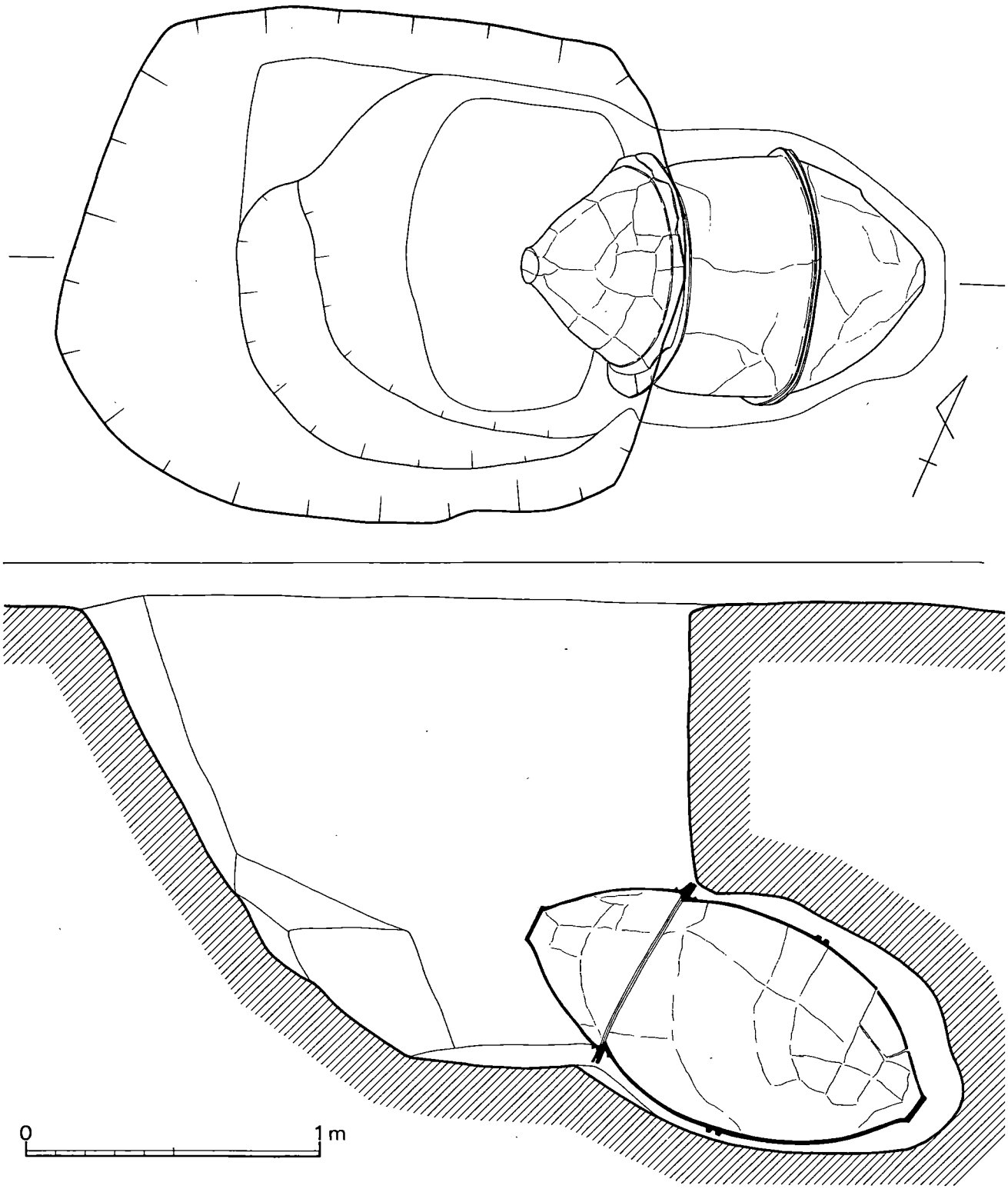
≪21号甕棺墓（図版16・17，第23・25図）

C 5区西部の３号墳の北側に位置し，台地頂部に占地する成人用の接口式甕棺墓である。この甕棺墓と22・23・24・27・28号甕棺墓はいずれも大形の墓壙を有しており，接近して占地す

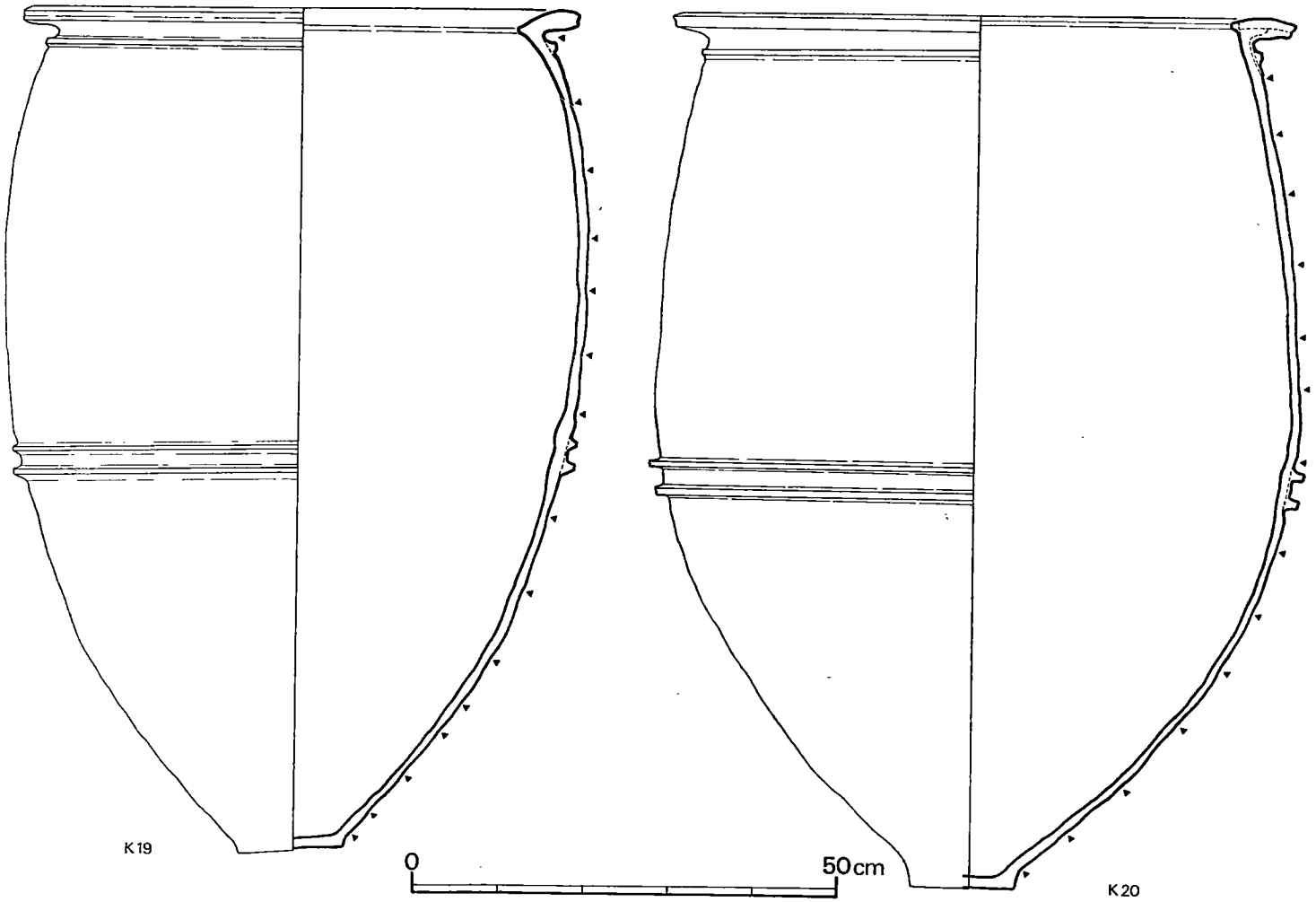




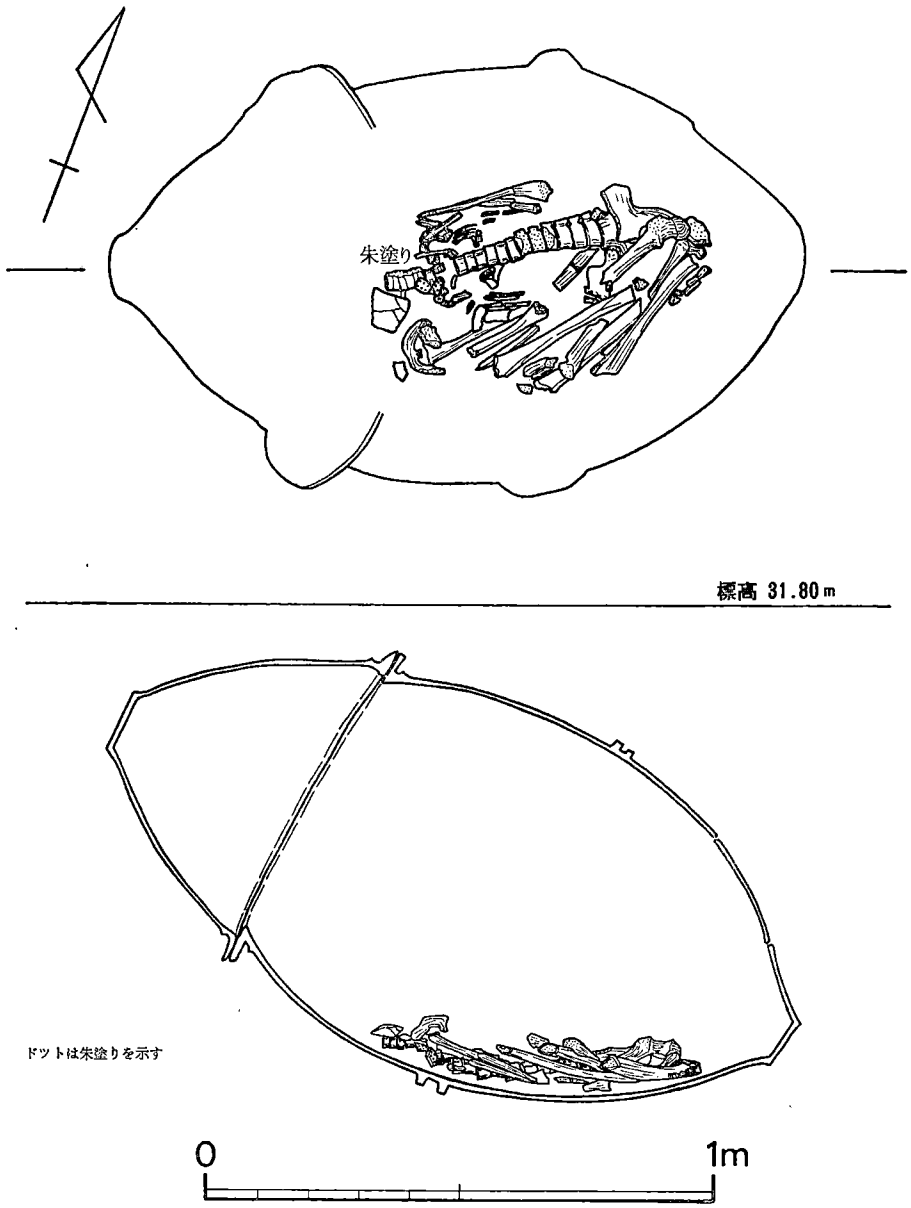
第 22 図　20号甕棺墓実測図（1/20）



第 23 図　21 号甕棺墓実測図 (1/20)

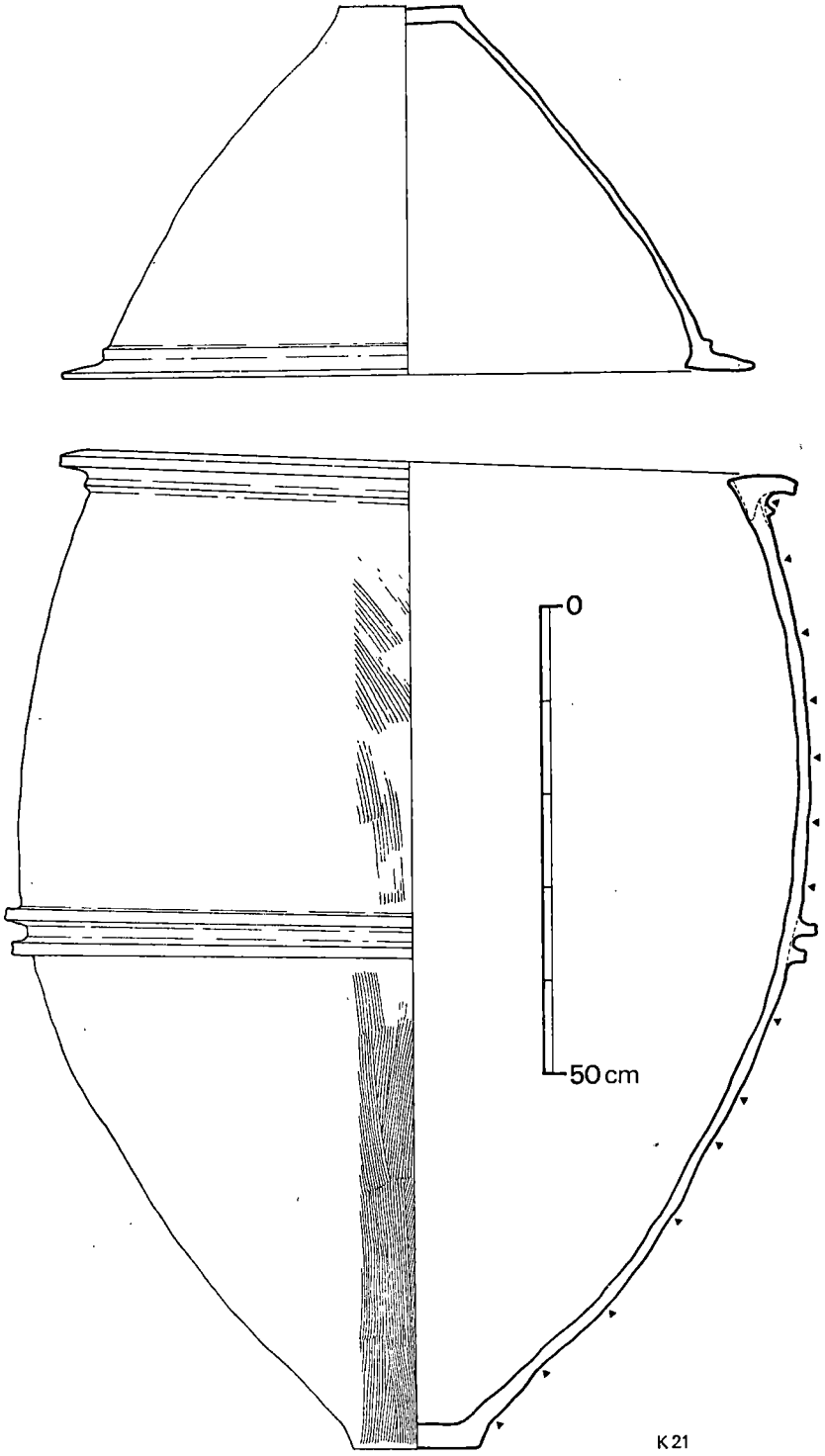


第 24 図　甕棺実測図　6（1/8）



第 25 図　21号甕棺墓人骨実測図（1/15）

る。21号甕棺墓の墓壙は長辺２ｍ，短辺1.7ｍの隅丸方形をなし，深さ1.6ｍの二段掘りで，更に奥行き・門口とも１ｍ程度の大きな横穴を穿った大形のものである。24号甕棺墓の墓壙と一部重複する部分があり，発掘時に一応21号甕棺墓の方が後出すると判断していた。しかし，24号甕棺墓で副葬品の存在等で調査が先行し，24号の方を先に掘り下げたため確認するには至



第 26 図　甕棺実測図　7 (1/8)

らなかった。甕棺は残存状況良好で完形のまま検出され攪乱の痕跡もみられなかった。主軸方位N—74.5°—E，傾斜角度＋27°で埋置され，下甕の甕形土器と，上甕の傘蓋形土器と接口させることによって法量は長さ1.45m，幅0.85mを測るが，接口部に目貼り施設はみられなかった。

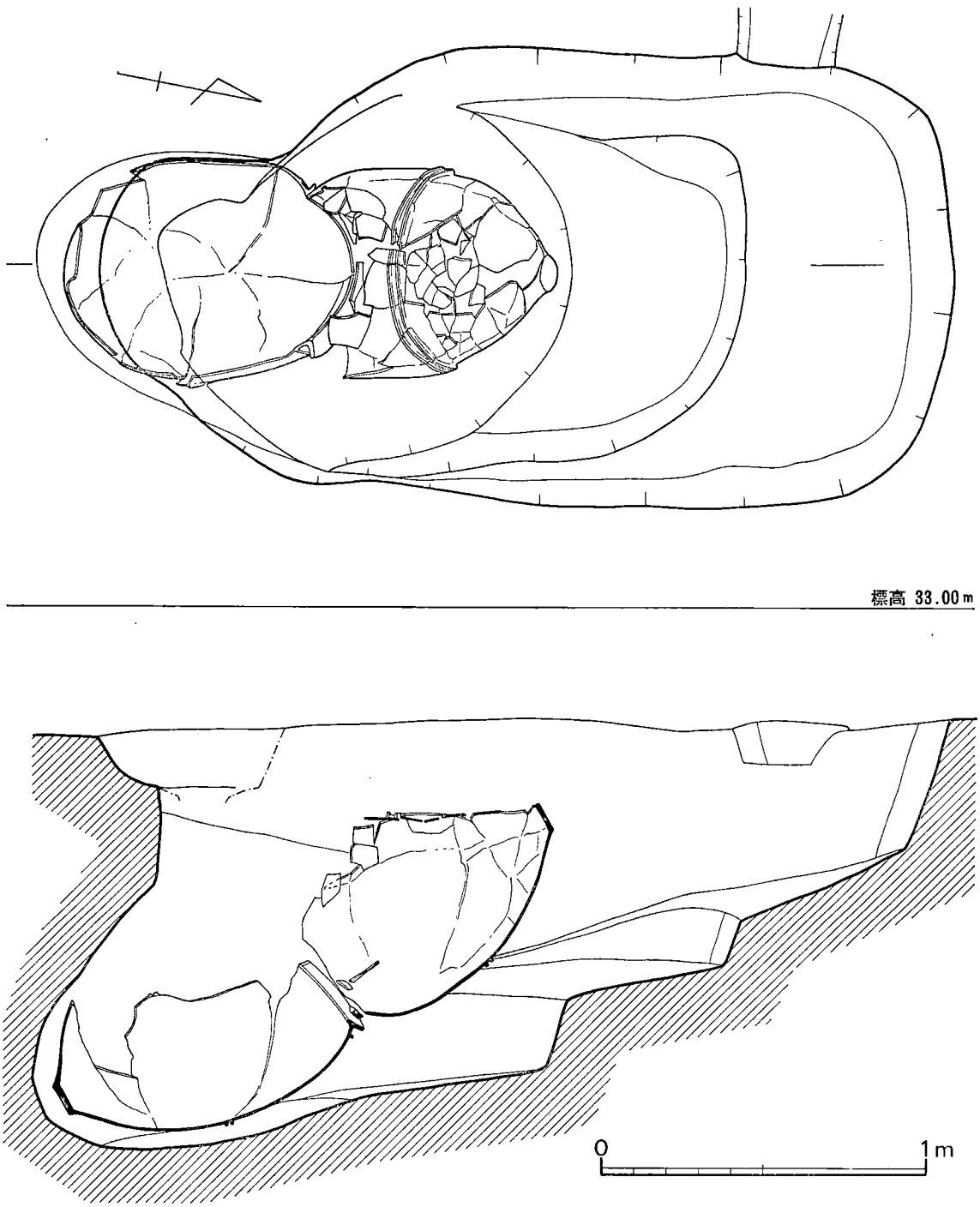
甕棺内部には，人骨遺存がみられ，仰臥屈葬の形式をとっており，頭骸骨前面に赤色顔料の塗布がみとめられた。被葬者は熟年の女性で，これについては，九州大学医学部の永井昌文教授に鑑定をお願いした。なお棺内外共副葬品はみられない。

甕　棺（図版42，第26図）　上甕は，口径73.8cm，底径13.0cm，器高39.5cmを測る。傘蓋形土器。わずかに内傾した逆「L」字形の口縁直下に断面三角形の凸帯が1条めぐらされ，上げ底気味の平底までは膨らみ加減ではあるが直線的につながる。内外面ともナデ仕上げされる。胎土には長石・石英粒を含み，焼成は並であるが，色調は黄褐色を呈す。下甕は，口径78.4cm，底径13.2cm，器高177.8cmを測る大型の甕形土器，口縁部は逆「L」字形で口縁直下に三角凸帯が貼り付けられている。胴部は膨らみをもった砲弾形をなし，胴部やや上位で最大径84.2cmを測る。胴部中位に断面「コ」字形の凸帯を2条めぐらせ外径86.4cmを測る。底部は平底である。外面上半刷毛のあとナデ，下半刷毛調整，上半の刷毛と異なる。内面はナデ仕上げである。また口唇上面も刷毛調整されている。胎土に長石・石英・雲母・赤土粒を含み，焼成良好で，暗赤褐色を呈す。

≪22号甕棺墓（図版18，第27図）

C5区の西端，3号墳墓壙の北西側に占地する接口式の成人用甕棺墓である。墓壙は9号建物跡のP4柱穴によって長辺側を一部切られているが，本来長辺2.1m，短辺1.4mの隅丸方形プランで，深さ1.1mの三段掘りであり，更に南側に横穴を設けている。甕棺は甕形土器を上下に接口させているが目貼り施設はみられない。埋置方位はN－11°—Wに主軸をもち，傾斜角度は＋31°を測る。下甕は柱穴等の攪乱のため崩壊が顕著であり，棺内に人骨の遺存はみられず，棺内外とも副葬品は存在しない。

甕　棺（図版43，第32図）　上甕は，口径53.5cm，底径11.2cm，器高83.8cmを測る大型の甕形土器。2.1cm内傾する逆「L」字形口縁の直下に断面三角形の凸帯が1条めぐらされ，長めの倒卵形胴部のやや上位で最大径66cmを測る。胴部やや下位に2条の断面「コ」字形凸帯がめぐらされる。器壁は6～10mmと薄く，胎土に長石・石英・赤土の細粒を含むが精良で焼成も良好である。器面調整は内外面とも刷毛のあとナデ仕上げされ暗赤褐色を呈す。下甕は，口径55.8cm，底径12.1cm，器高88cmを測る大型甕形土器である。2.1cm内傾した「T」字形口縁部の直下に1条の断面「コ」字形凸帯が貼り付けられ，膨らみながら砲弾形の胴部へ移る。胴部やや下位に2条の断面「コ」字形凸帯がめぐらされる。上甕同様器壁は薄く，胎土に石英・長石粒等を含むがやや粗で焼成良好である。色調は淡黄褐色を呈し，器面調整は外面刷毛のあ



第 27 図　22号甕棺墓実測図（1/20）

とナデ，内面ナデ仕上げであるが，外面下半の刷毛は比較的よく残っている。　（小池）

≪23号甕棺墓（図版20～22，第28図）

台地中央部で検出された中期後半の甕棺群の１つで，13号及び有樋鉄戈を副葬した24号甕棺墓に切られている。東西2.39m，南北2.3mの南北2.3mの隅丸長方形を呈す墓壙は前述のように北西隅を大きく24号甕棺墓によって切られている。西側は軽い稜をもちながらU字状に掘り込み，東側は現状から1.2mで斜横穴を穿ち甕棺を施設している。横穴の深さは下甕の長さより若干深い。最深部は掘り込み面より2.3m，甕棺は成人用接口式合口甕棺で，約29°とかなり傾斜を有す。甕の接口部には目貼り粘土帯が巡る。上甕の底部から胴部を欠いて盗掘が行なわれたと考えられ，人骨，副葬品等は遺存しなかった。なお，墓壙内上部の盗掘穴内より青銅製鋤先１が検出された。

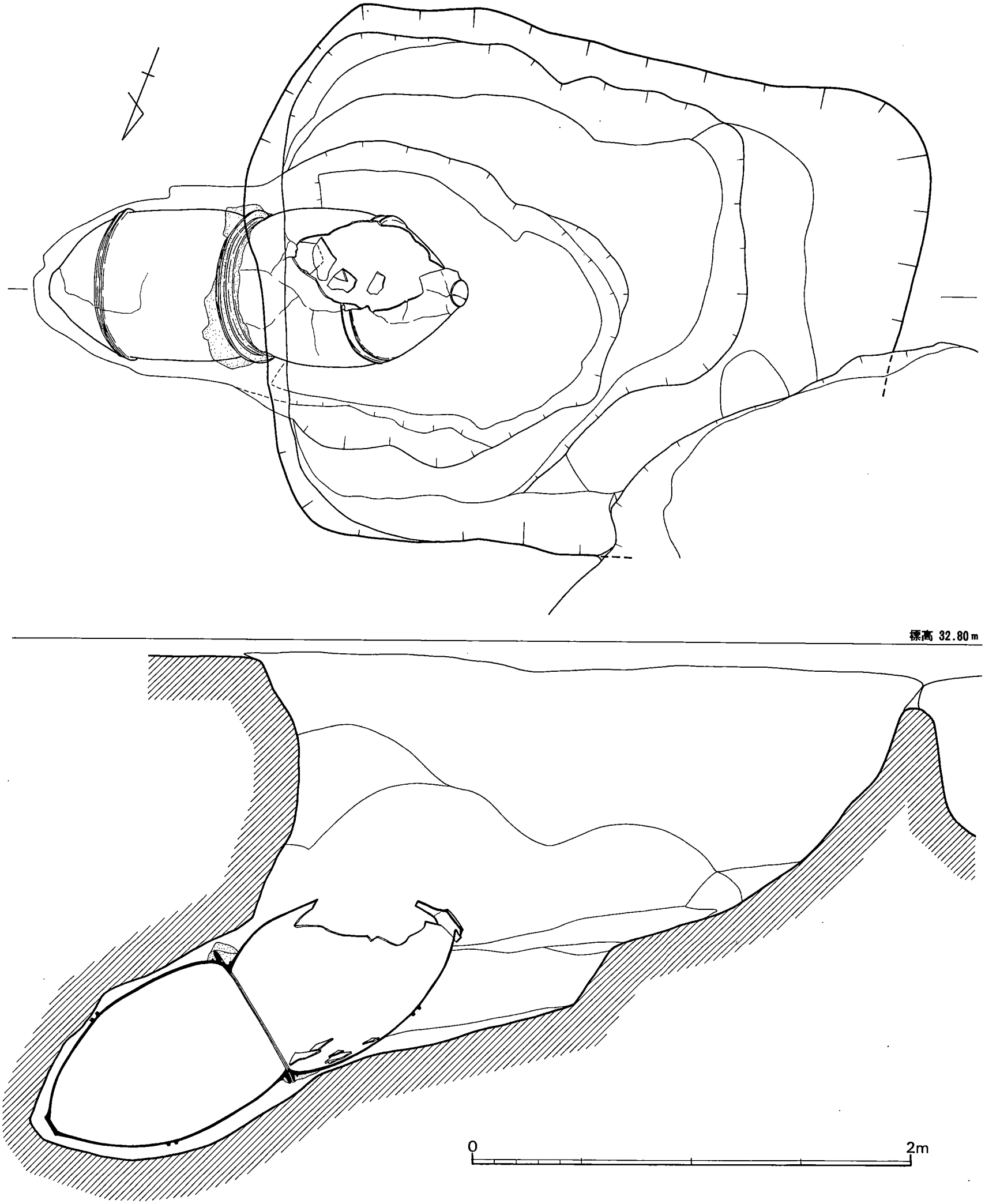
甕　棺（図版43，第29図）　上甕は器高104cm，口径64.6cmを測る大型の甕形土器で，砲弾状を呈す。比較的薄手の「T」字状口縁直下に一条の三角凸帯が巡る。胴上半部で最も張り，徐々にすぼまりながら，胴部下半の２条の「コ」字状凸帯に至る。底部径は12cm。器肉は全体的に1.2cm前後と大型の甕としては薄手で硬く焼きしまっている。口縁部内外，凸帯部，底部付近はヨコナデを施し，内面は上半を横方向，それ以下は斜，及び上下方向の刷毛がみられる。胎土に長石・石英の他赤土を含む。

下甕も砲弾形の甕形土器で器高105.6cm，口径65.8cm，底径11.2cmを測る。上甕より内傾12mmと８mmほど小さな「T」字状口縁直下に断面台形に近い凸帯が１条巡る。胴上半部は上甕ほど張らず，徐々にすぼまって，胴下半に２条の「コ」字形凸帯が付く。凸帯は約１cm程張り出している。凸帯以下はふくらみを有しながら底部へ移行する。外面胴上半部はナデ，内面の中央部から底部は底部から上方向への刷毛を施しているが，刷毛は連続しない。まず，底部から一定間隔の刷毛を施こした後，その上端をナデて消しており，その上はナデの空間を有したまま再び刷毛を施こすという方法を取っている。胴下半部に黒斑を有し，胎土・焼成またプロポーションとも上甕と類似した土器である。　（木下）

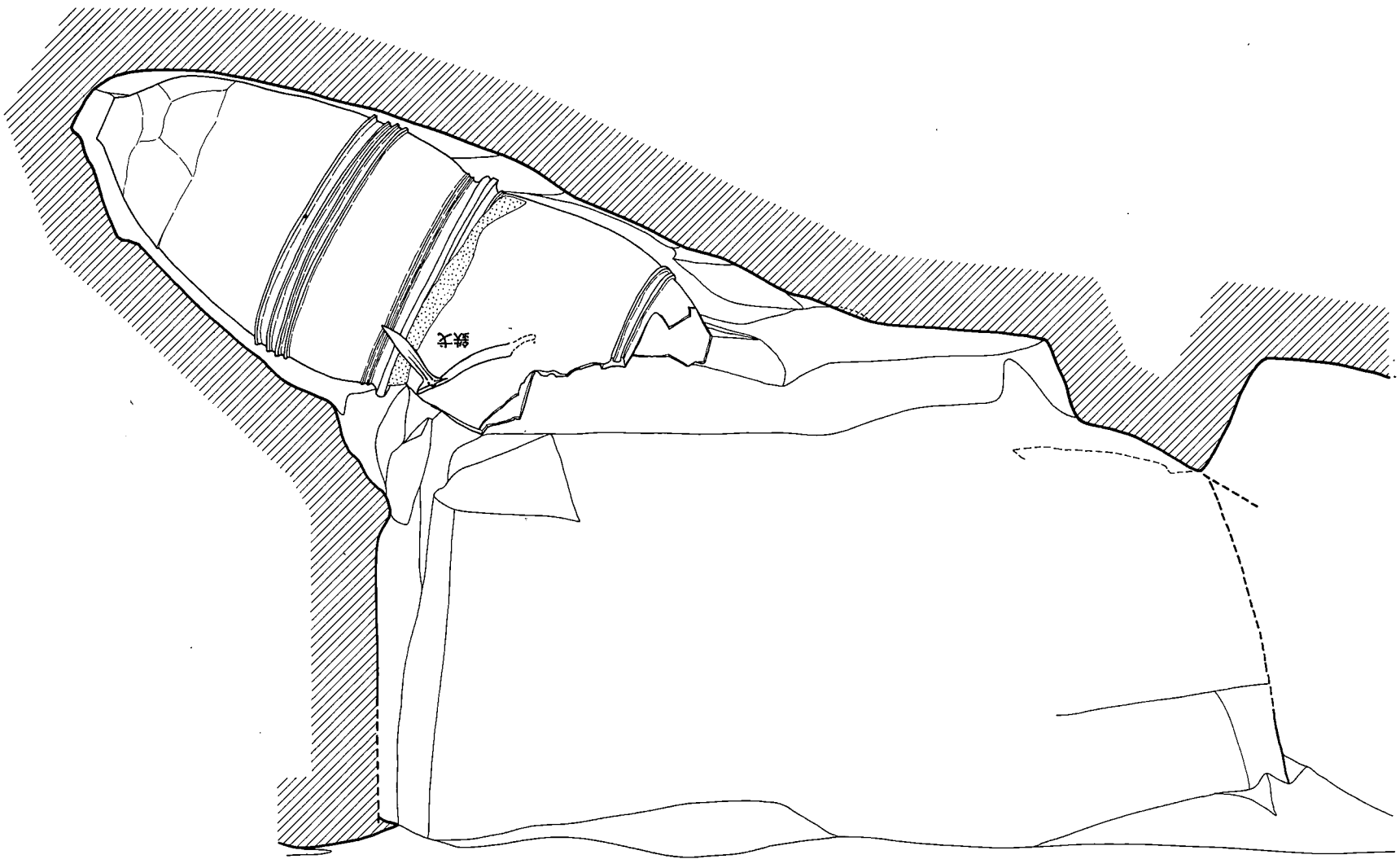
青銅製鋤先（図版45，第31図）　刃部を欠損するがほぼ原形を知りうるもので，全体幅9.1cm，復原全長約7.7cm，復原刃部幅約7.8cmを測る。袋部は幅の広い無突帯形式のもので，袋部内法は全体幅7.5cm，長さ4.6cm，上面での厚さ１～1.3cmである。表面刃部付近に縦に走る擦痕がみられ，製作時の研磨痕か使用痕かの区別はむずかしいが，刃部付近に集中することから考え，使用痕の可能性が高い。表面はかなり風化が進み，青緑色を呈している。

≪24号甕棺墓（図版23～27，第29図）

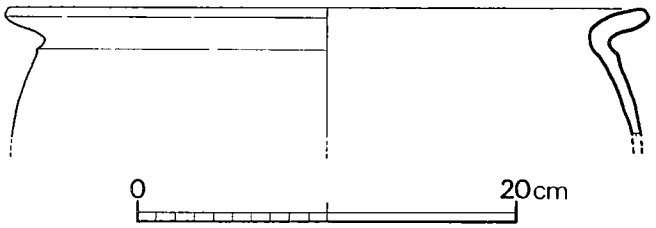
台地中央の最も高い所に位置する接口式の成人用甕棺墓である。東側は23号甕棺墓の墓壙の一部を切って，西側は墓壙の一部を21号甕棺墓に南側を３号墳石室掘り方に切られて検出された。墓壙の規模は長辺2.9m，短辺2.6m，深さ約1.6mを測り，他と比べ最も大きい。プラン



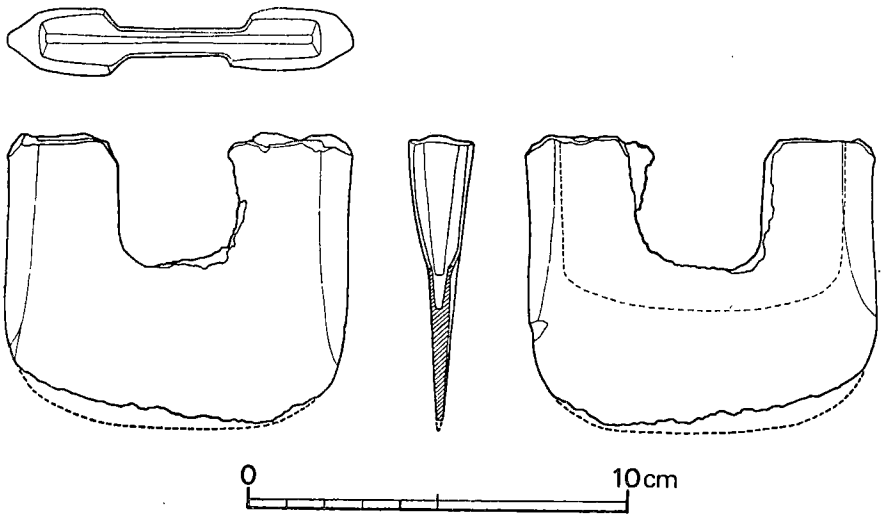
第 28 図　23 号甕棺墓実測図 (1/20)



第 29 図　24 号 甕 棺 墓 実 測 図 (1/20)



第 30 図　23号甕棺墓盗掘坑覆土内出土土器実測図（1/4）



第 31 図　青銅製鋤先実測図（1/2）

は隅丸長方形を呈し，墓壙の東側に横穴を穿ち，下甕を埋置している。

横穴は奥行1.5m，高さ約90cmの砲弾形を呈したもので，棺と横穴の空間はぎりぎりの大きさである。棺底の深さは上面から2.5mと極めて深い。また，墓壙内壁には掘削時の鋤状工具の痕跡が各所にみられた。とりわけ顕著な南壁をみると最大幅14cm，最大長19.5cmを測るU字状をなし，その痕跡は極めて鋭利である。上甕と下甕の接合部は青色の粘土で堅固に目貼りしている。上甕の胴下半は盗掘時の撹乱により欠失している。撹乱土中からは上甕の破片多数と副葬されていたと思われる鉄剣の破片1が出土した。盗掘坑は見事に上甕上面をつきあてていた。棺内は全面に水銀朱が塗られ，下甕の中位には直径約14cmと13cmの円弧が二つ一部でかさなった状態で確認できた。多分銅鏡の副葬もあったことを示すものであろう。棺外接口部南側からは有樋鉄戈1が切先を下甕に向けて，検出された。鉄戈には朱塗りの木柄がついていたようで，直径2.5cm，長さ43cmの空胴の溝が関部から緩やかに外彎した状態で確認された。着柄の角度は約105°を測る。時期は中期後半である。

甕　棺（図版44，第32図）　上甕は，口径75㎝，復原器高約108㎝，底径12.4㎝を測る大型甕形土器である。口縁部は20㎜内傾する「T」字形口縁で，胴部は倒卵形をなし，頸部に１条，胴部には中位よりやや下位に２条の「コ」字形凸帯を付している。胴部凸帯の張り出しは強く，しっかりしている。胴部最大径は中位よりやや上にあり79.2㎝を測る。器肉は８㎜内外と薄く，作りの良い土器である。口縁部内外と凸帯上下がヨコナデしている他は，内外ともナデ仕上げである。色調は暗赤褐色を呈し，胎土は精良で，小粒の砂粒・雲母・赤土を含む。焼成は良い。体部内面全体に水銀朱が塗布されている。

下甕は，口径88㎝，器高120.2㎝，底径15.5㎝を測る超大型の甕形土器である。平底の底部に倒卵形の胴部がつき，口縁部の内傾は32㎜と強く「く」字形を呈す。頸部の器肉は3.4㎝と厚いが，胴部は１～1.6㎝で大きさに比べ薄い作りの良い土器である。最大径は上位にあり，頸部２条の三角凸帯と，胴上位に４条の張り出しの強い「コ」字形凸帯が付された特異な甕形土器である。調整は口縁部内外と凸帯上下がヨコナデ仕上げの他は，内外ともナデて仕上げている。色調は茶褐色を呈し，胎土には多くの砂粒・雲母・角閃石を含む。焼成は良好である。体部内面全体に水銀朱の塗布がみられる。

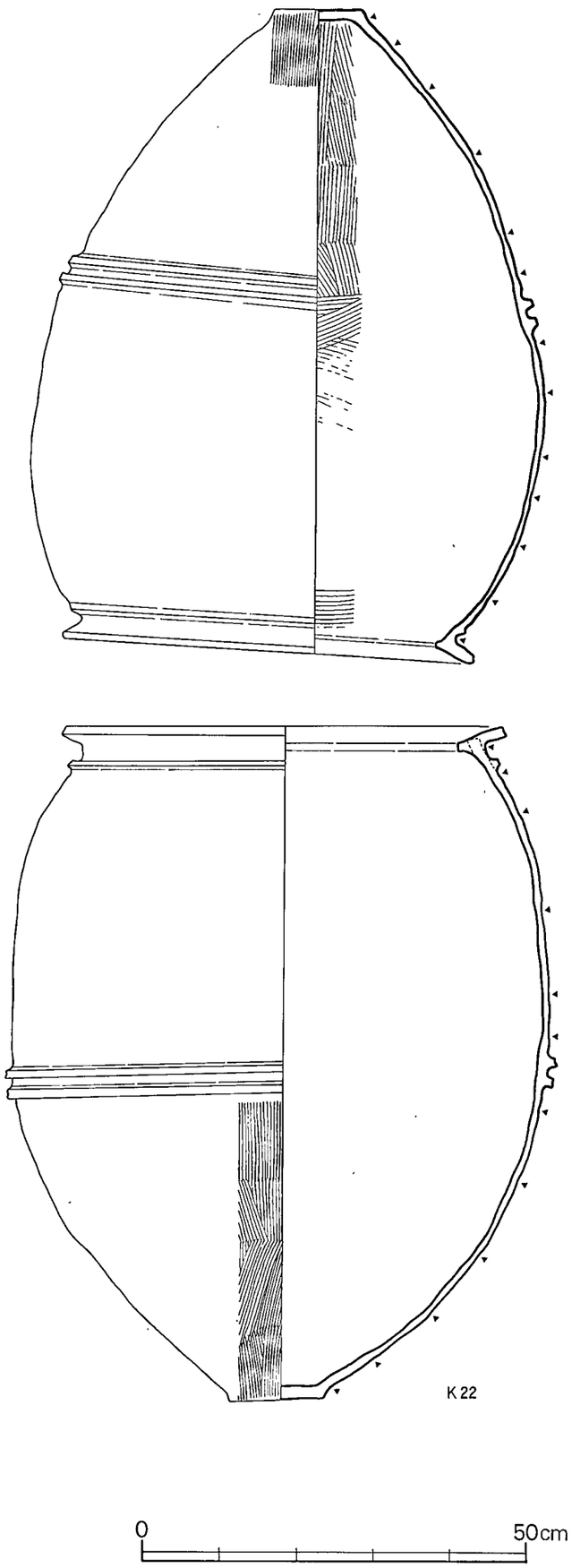
鉄　剣（図版45，第33図１）　剣身の一部と柄部を残したものである。身幅は３㎝で，断面扁菱形をなし鎬は明瞭である。柄部は断面三角形の木柄を２枚あわせて中に剣の茎をはさみ，糸巻きで仕上げている。柄の長さは7.4㎝，幅3.3㎝，頂部の厚さ2.1㎝を測る断面菱形の柄である。柄部先端９㎜と柄尻2.8㎝の部分には糸巻きはみられない。柄は一部剣身を柄内にとりこんだもので，関部から3.6㎝を測る。剣身の関部に近い部分には2個の目釘孔がある。関部の長さ2.4㎝，幅1.6～1.7㎝，厚さ0.4㎝を測る。関の断面は長方形をなす。木柄に巻かれた糸は絹である。詳しくはⅥ－４を参照。鍛造品。

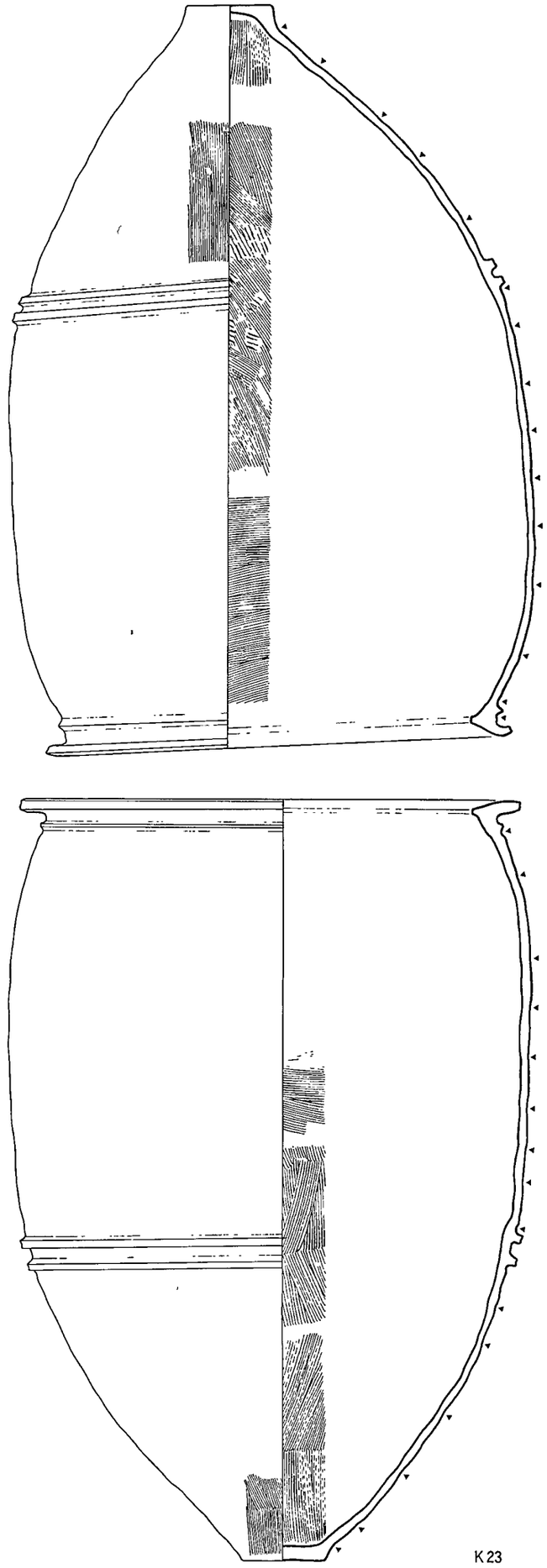
鉄　戈（図版46・47，第34図１）　長さ33.9㎝，身幅3.7～4.3㎝，関幅16.5㎝を測り，鋒付近でやや広くなる。中央部の厚さ0.7㎝，鋒付近の厚さ0.4㎝を測る。

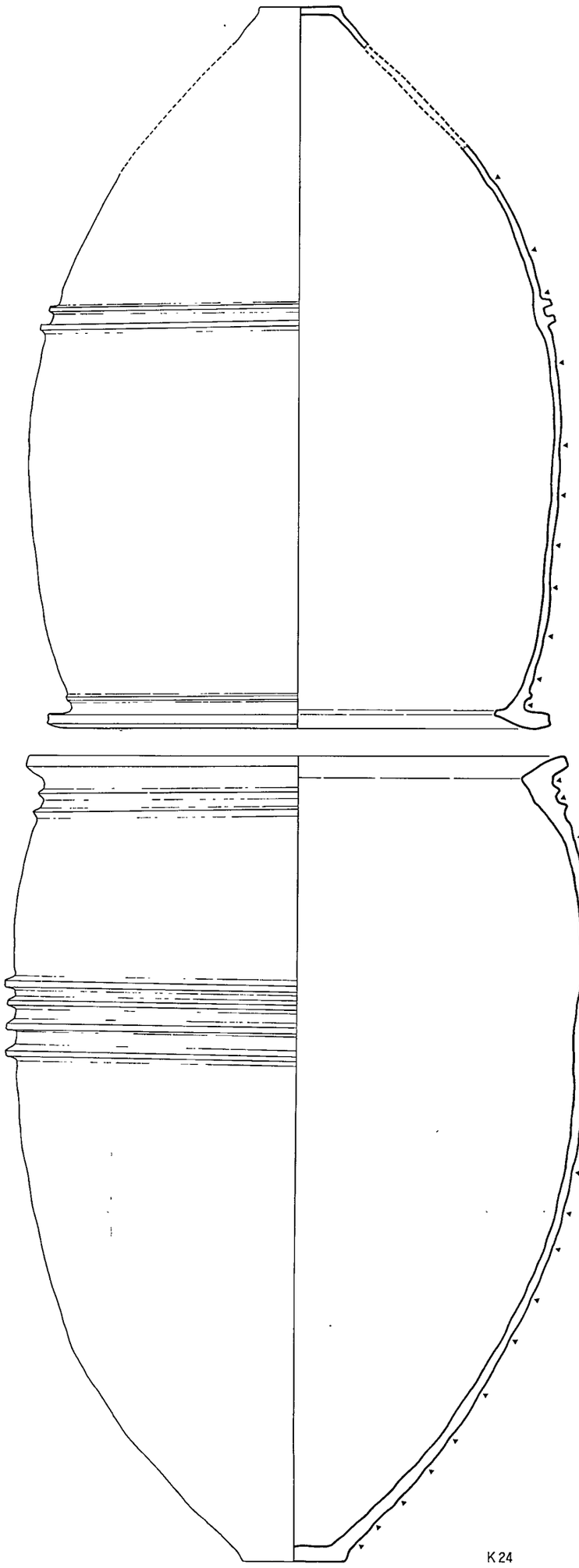
この鉄戈は，いわゆる銅戈にみられるような樋を有し，樋内中央には幅約１㎜の細かい隆起線が削り出されている。さらに，緊縛孔上面にはそれと直行する細い隆起線がみられる。関部の彎曲度は27号例に比べ弱く直線的である。木柄は，木柄痕跡と，一部基部に残る木質から長径2.2㎝×短径2.1㎝の断面楕円形をなす長さ約60㎝の外反した柄であることが判る。基部は0.7㎝ほど柄に嵌めこまれ，さらに幅約１㎜の細い革紐を６～７条巻きつけて固定している。柄の着装法は胡を上方に着装したもので，身に対して鋭角をなす。鍛造品。　（井上）

≪25号甕棺墓（図版28，第35図）

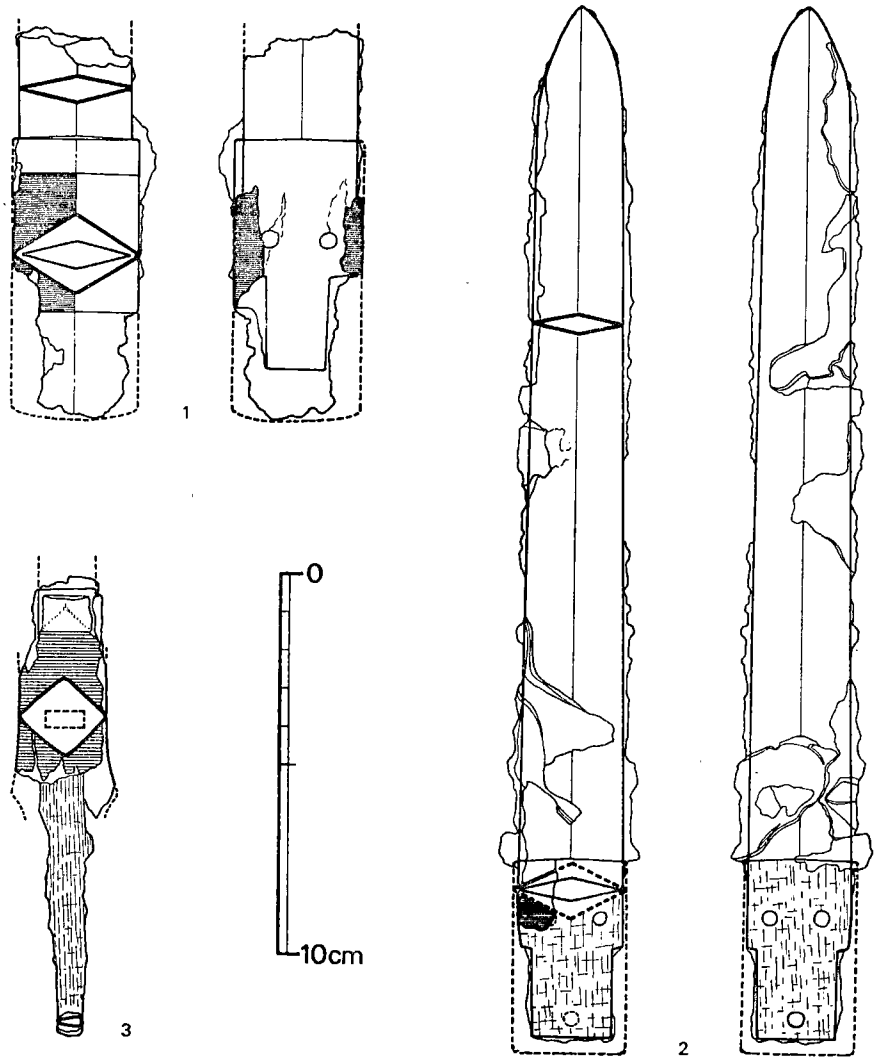
Ｄ５区のＤライン上に位置し，３号墳墓壙の西端，17号袋状竪穴と重複するため，３号墳による削平と17号袋状竪穴の崩落によって大半を消失しているが，単棺の成人用甕棺墓である。墓壙は現存値で長径1.4ｍ，短径1.0ｍを測る楕円形プランを呈すが，当初は長径，短径ともこ







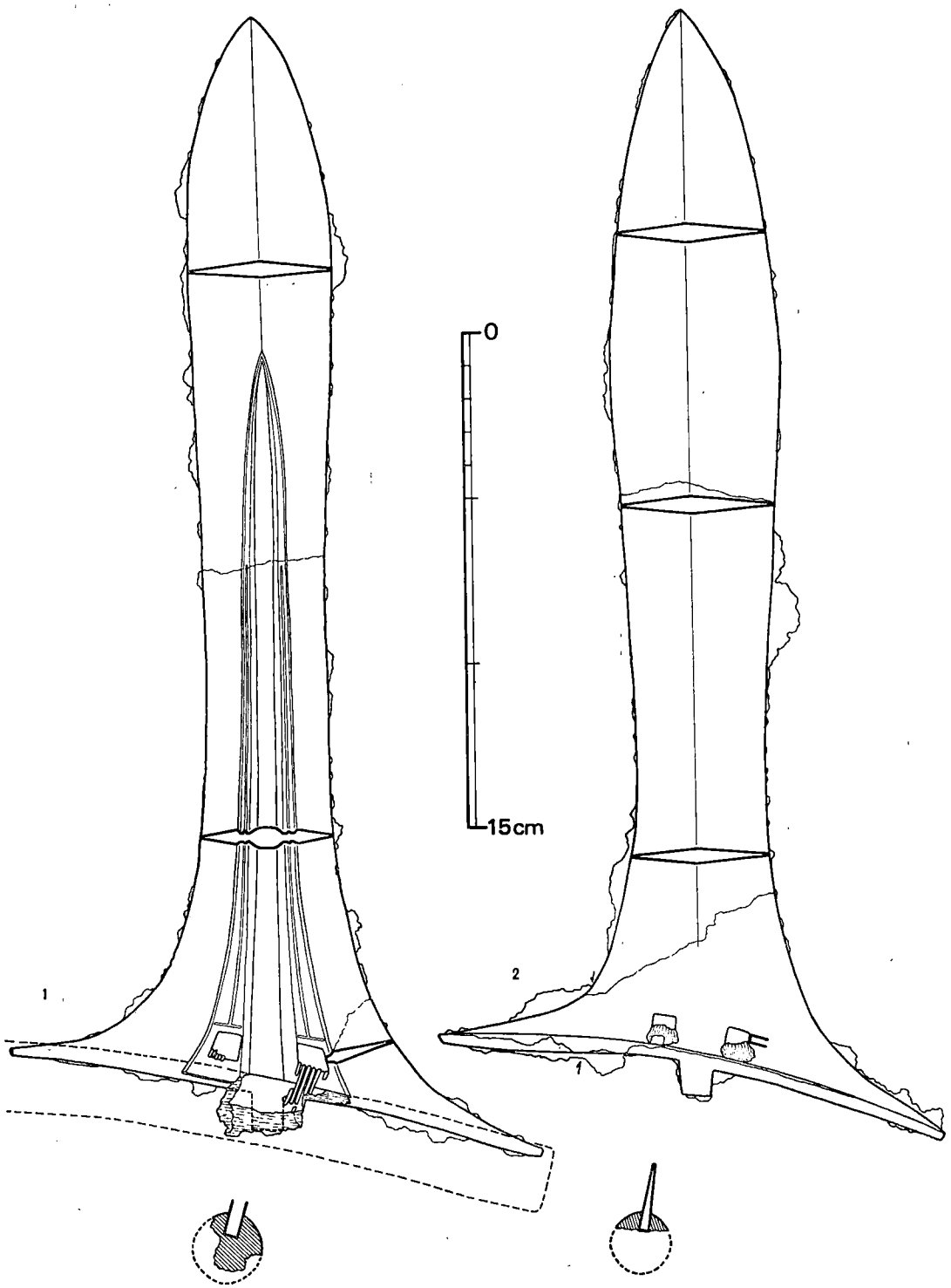
第 32 図　甕 棺 実 測 図 (8) (1/8)



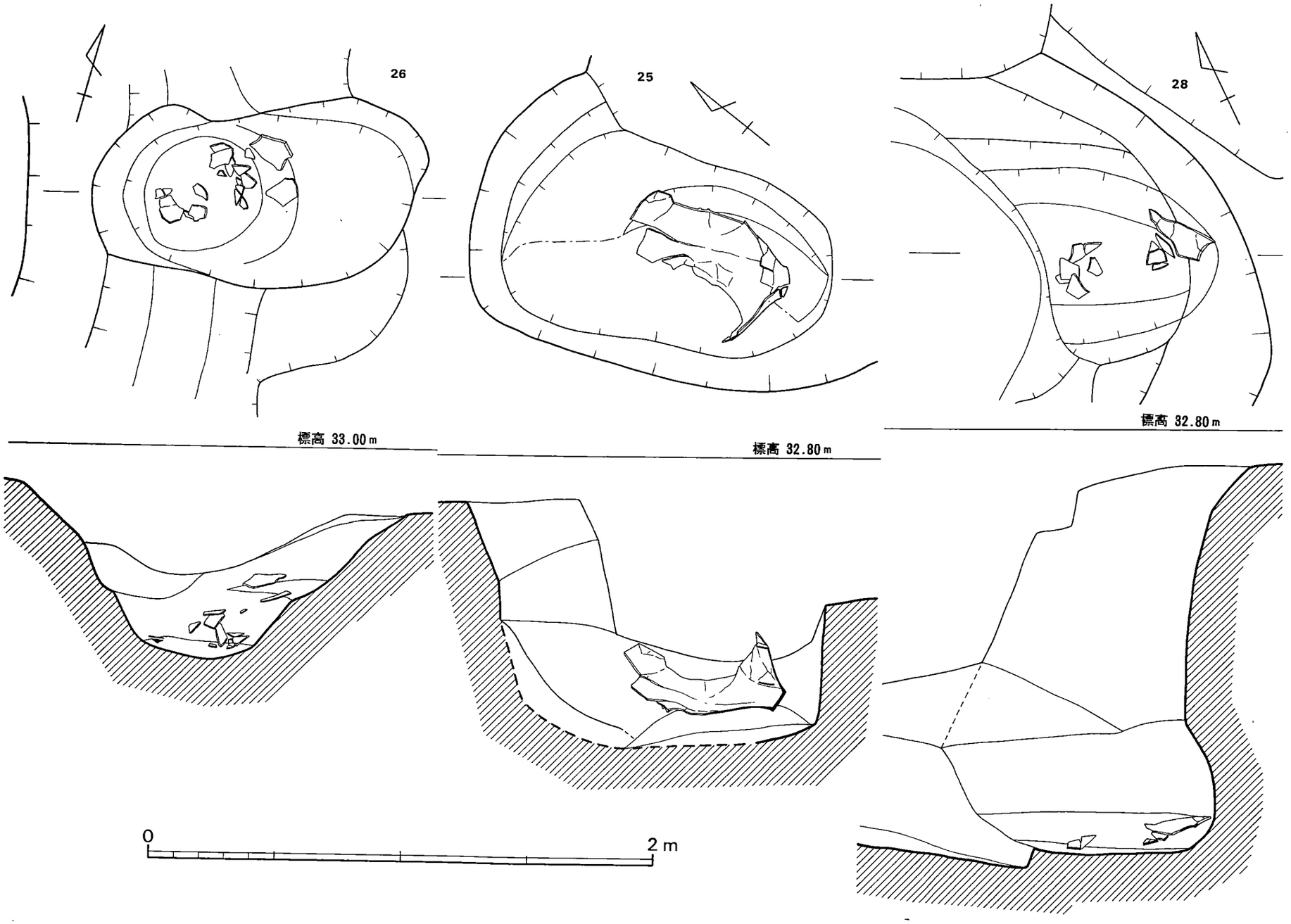
第 33 図　鉄剣実測図 (1/2)

れより規模が大であったと推定される。甕棺は胴部以下を残すのみであるが大形の甕を使用しており，主軸方位N—38.5°—Wで，墓壙の主軸に対してやや西に偏り，傾斜角度＋28° に埋置される。人骨その他の遺物はみられなかった。

甕　棺（第37図）　口縁部，頸部等の胴部上半以上を欠失するため全体の形状は明確ではないが，現存する器高60.8㎝，底径13.2㎝を測る甕形土器である。倒卵形の胴部上半に65.3㎝の最大径があり，胴部下位に２条の断面「コ」字形凸帯をめぐらせる。内外面ともナデ仕上げされるが，焼成粗悪で器面の風化が激しく外面の調整は確認し難い。胎土には長石・石英・赤土粒を含み，色調は暗赤褐色を呈す。



第 34 図　鉄戈実測図（1/2）



第 35 図　25・26・28 号甕棺墓実測図 (1/20)

≪26号甕棺墓（図版28，第35図26）

C５区の中央に位置し，中世溝状遺構（溝H）と21号住居跡によって削平され大半を消失する単棺の小児用甕棺墓である，墓壙は楕円形プランを呈し.長径1.3m，短径0.7m，深さ0.7mを測るが，当初はこれよりも規模が大であったと想定される。甕棺は散乱して検出され，埋置の状況は不明であるが，底部の破片の位置と墓壙との関連から主軸方位をN—75°—Eにとっていたとみられ傾斜角度も＋45°に近いものと推定される。甕破片以外の遺物は検出できなかった。また甕破片も小片で器形実測するには至らなかった。

≪27号甕棺墓（図版29～31，第36図）

C５区の西寄り，３号墳の墓壙と重複して位置し，21～24号甕棺墓等と共に台地頂部に占地する接口式の成人用甕棺墓である。墓壙は３号墳墓壙によって北西部を大きく削平されているが，長軸の現存長1.7m，短軸の現在長1.6m，深さ約1.8mを測る隅丸方形プランを呈す。墓壙の東側に横穴を掘って甕棺を施設しており，最下面は2.45mの深さを測り，墓壙の西側にフラット面を有す。甕棺は＋28°の傾斜を有し，主軸方位N—89°—Wに施設され，接口によって，長さ２m，幅0.75m程度の法量を得ている。接口部には厚い目貼り粘土帯が施されていたが，青白色と淡黄色を混ぜた様な粘土内には遺物を含んでいなかった。また接口部右上側に61°の傾斜角度で，鋒を下にした鉄戈１本が検出された。これは墓壙の東南隅に先端を甕棺下甕に向けて，柄が墓壙南壁に沿った状態で副葬されていたことを想定させ，24号甕棺墓の例と酷似する。甕棺内面一部に赤色顔料の塗布がみられ，人骨は遺存しないが，副葬品と思われる鉄剣２が内部になだれ込んだ状態で，上甕胴部破片・土砂等と共に検出された。

甕　棺（図版44，第37図）　上甕は口径66.0cm，底径11.8cm，器高98.7cmを測る大型甕形土器である。15cm内傾した逆「L」字形口縁部の直下に断面三角の凸帯が１条めぐらされ，砲弾形の胴部やや上位に最大径69cmを測ることができる。胴部やや下位に断面「コ」字形の凸帯２条がめぐらされ，この部位から平底の底部へすぼみながら移行する。内外面ともナデ仕上げで調整されており，器壁は６～10mmと薄く，やや精良である。胎土には長石・石英・赤土の細粒が含まれ，色調は暗赤褐色を呈す。下甕は，口径73.4cm，底径14.5cm，器高135.0cmを測る大型の甕形土器である。わずかに内傾した「T」字形口縁部直下に断面「コ」字形の凸帯が１条めぐらされ，膨らみながら砲弾形の胴部へ移行する。胴部やや上位に77.2cmの最大径を測れるが，胴部やや下位に断面「コ」字形の凸帯２条がめぐらされ，平底の底部へとすぼまる。外面は刷毛調整されているが，刷毛のあと胴部の凸帯を貼りつけ，その後接合部付近に新しく刷毛を施している。また口唇部上面にも刷毛調整がみとめられ，内面はナデ仕上げである。胎土には長石・石英粒が含まれるが精良で，焼成も良好である。色調は赤ぽい黄褐色を呈す。

鉄　剣（図版48，第33図２・３）　２点あり，いずれも甕棺下甕内に崩落した泥土と共に検出されたため当初の位置を保ってないが，棺内副葬されたものであろう。

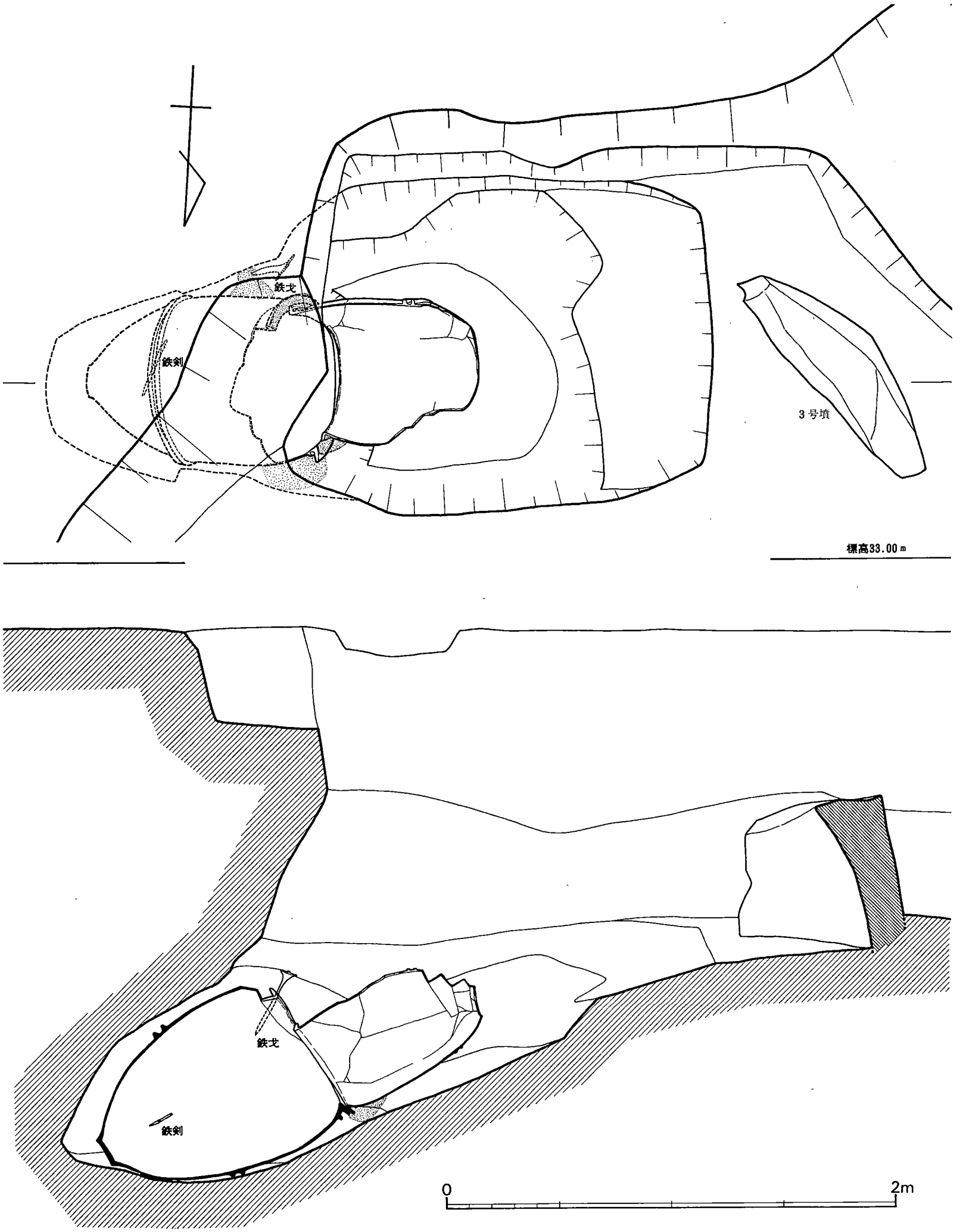
2は，全長273㎜，身幅27～12㎜で鋒はやや丸味をもって鋭く尖る。身の厚さは5～5.5㎜で，鋒から関まで鎬が通り断面扁菱形を呈すが，稜はやや不明瞭である。全長のうち茎の長さは47㎜を占め，茎は関側23㎜までは幅広で，段をなして端部側の幅が狭くなり，幅は27㎜と21㎜を測る。茎に穿たれた目釘孔は，幅広な部分に2ヶ所・幅狭の部分に1ヶ所設けられ，いずれも孔径4㎜を測る。鍛造品。茎の片面には剣身に並行する木目の木質が残存し，更に木質の外周に絹糸が木目に対して直行方向に巻かれている。この部分の形状は，厚さ15㎜程度の断面菱形を呈する柄が装着されていたことを示す。また剣身には20～25㎜幅の平絹が鋒から関に時計回りに巻かれた状態で錆着している。絹糸は，所謂柄のすべり止めとして巻かれたものであろうし，3ヶ所の目釘孔と共に，柄の着装をより確実にする効果を考えさせる。平絹の錆着は，抜き身のままではなく布巻きによって剣身を保護して副葬されたことを想定させる。

3は，身部を欠失しているが，残存長121㎜を測る。柄とみられる鹿角が残っているが，鹿角の欠失した部分での想定される茎の形状は，関側で幅約15㎜，厚み約4㎜，柄尻に近い側で幅7㎜，厚み3㎜を測り，断面長方形を呈す。なお関部に接してわずかに稜を有して断面扁菱形を呈す部分があり剣身に相当すると考えられる。鍛造品。鹿角は風化が進んでいるが，外周には剣身に直交方向の糸巻痕を留めている。残存状況の良好な部分での幅23㎜，厚さ12㎜を測り断面菱形を呈すが，柄尻に向ってやや太目になる傾向を示しており，柄の太さは一様ではない。柄の中央部がふくらむ種類であろう。

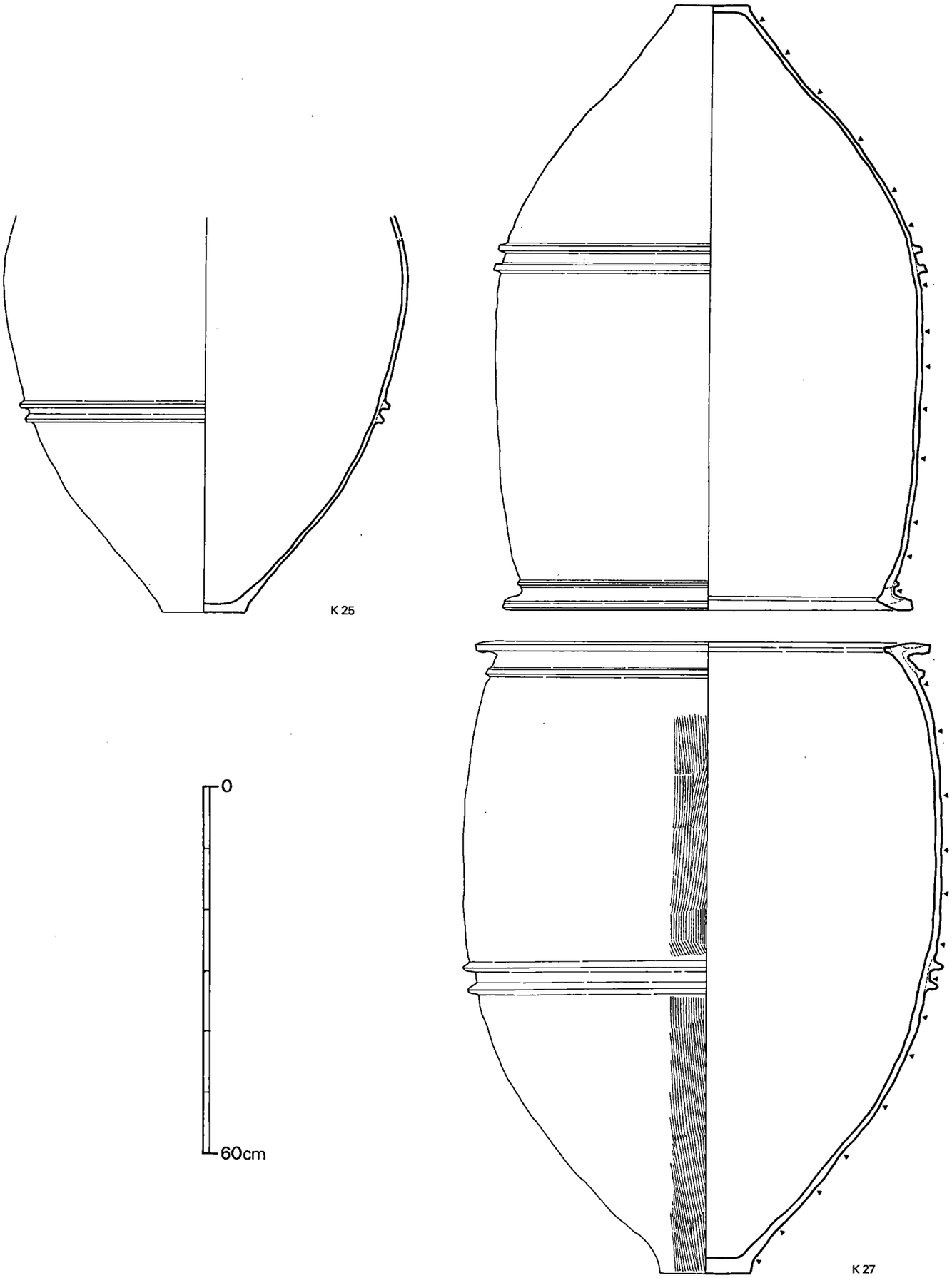
鉄　戈（図版49・50，第34図2）　墓壙内の南東部で甕棺接口部右上の棺外に，傾斜角度61°で鋒を下甕右下方に向けて出土した。関部には木質が残存しており，戈の身部正中線に対して鋭角になる側を南西に向けていることから，戈に対し柄を鋭角に装着していたと考えられる。柄の痕跡を墓壙内において確認することはできなかったが，墓壙下面の広さを考慮すれば1m前後の柄であったとして大過ないであろう。

鉄戈の全長332㎜，身幅39～52㎜，身厚4～5.5㎜，関長157㎜，関の正中線に対する角度78°茎の長さ9㎜，茎の幅10㎜，茎の厚み3㎜を測る。身は断面扁菱形をなし，鋭く尖った鋒から関部まで鎬を有するが稜線はやや不明瞭である。内彎した関部は直径約20㎜の木質に約6㎜嵌入させており，関部に沿って穿たれた2つの緊縛孔は，それぞれ一辺約7㎜の方形をなし，いずれも錆着した革紐片が残存する。鍛造である。

なお立岩遺跡の報告書において小田富士雄氏の論文中にみられる「棺外副葬された門田27号例では〝胡〟が下方になり柄に塗朱した痕跡が60cmくらいまでたどられ」，戈の長く張り出した方の関部が〝胡〟に相当するとされている記述は誤認があるので訂正しておきたい。すなわち，当該例での戈の長く張り出した方の関部は柄の上方に相当し，柄が逆に装着されていれば下甕にぶつかるため可能性は少ないといえよう。また塗朱した柄の痕跡は，24号甕棺墓の棺外副葬例にみられたが，当該例では確認できなかった。おそらく小田氏が，24号甕棺墓の例と混



第 36 図　27 号甕棺墓実測図(1/20)



第 37 図　甕棺実測図 (9) (1/8)

同されたのではなかろうか。

≪28号甕棺墓（図版31，第35図28）

27号甕棺墓の北東側に接し，23・24号甕棺墓にも接して位置し，3号墳墓壙によって大半を削平された甕棺墓である。墓壙は，わずかに横穴の基底部を残すのみで全体の形状は不明である。深さは1.6mを測るが27号甕棺墓の深さ2.4m程度に比して浅いためこれらの墓壙より小規模であったと推定される。甕棺は底部に近い胴部破片数点が残るのみでこれも全体の形状は明らかでなく埋置形式も明らかでないが，おそらく接口式の成人用甕棺墓であると考えられる。なお主軸方位はN—64.5°—Wを横穴の基底部の形状から推定できるが傾斜角度は不明である。甕破片以外の遺物は残存しない。破片が小片のため器形の実測図は作成しえない。　（小池）

≪29号甕棺墓（第11図）

現存する墓域の最北端に位置する甕棺墓である。調査の時点では西側斜面に転倒しており，後世台地が削平を受けた際に転倒したものと思われる。小児棺ではあるが，単棺か複棺かは不明である。時期は中期後半。実測不能。　（井上）

表 2　A 群 甕 棺 墓 一 覧 表

No.	主軸方位	傾斜角度	合口形式	上甕＋下甕	外面黒色塗彩	墓坑形態	副葬品	備考
1	N－32°－W	＋30°	接口	壺＋壺		?		
2	?		覆口	壺＋鉢		?		
3	?	?	?	壺破片		?		
4	?	?	?	〃		?		
5	N－79°－W	＋34°	?	壺		?		
6	N－23°－E	＋35°	覆口	甕＋?		?		
9	N－70°－W	－27.5°	覆口	鉢＋壺		楕円形		46号袋状竪穴の上に位置し上甕落ち込む
10	N－74.5°－E	＋40°	単(木蓋)	甕		隅丸方形		
11	N－81.5°－W		覆口	甕＋壺		?		
12	N－25.5°－W	＋34°	覆口	壺＋壺		不整楕円形		
13	N－40°－W	＋32°	接口	甕＋壺		?		下甕口縁部打欠き，23号より新しい
14	N－28.5°－W	＋46°	単	壺		不整円形		
15	N－49.5°－W	＋52°	〃	〃		楕円形		
16	N－13°－W	＋50°	挿入	?＋甕		〃		17号より新しい
17	N－20°－E	＋41°	単(木蓋)	甕	○	不整隅丸長方形		16号より古い
18	N－40.5°－W		覆口	鉢＋壺		?		
19	N－74.5°－W	＋33°	単	甕	○	楕円形		

No.	主軸方位	傾斜角度	合口形式	上甕＋下甕	外面黒色塗彩	墓坑形態	副葬品	備考
20	N－59°－E	+26°	単(木蓋)	甕	○	長方形		
21	N－74.5°－E	+27°	接合	傘蓋＋甕	下甕○	隅丸方形		人骨♀，額の一部に赤色顔料の塗布がみられる。24号より新しい
22	N－11°－W	+31°	接口	甕＋甕		〃		上甕口縁部打欠き
23	N－69°－E	+29°	接口	〃	上甕・下甕	隅丸長方形	盗掘坑から青銅鋤先1	13号・24号より古い
24	N.－64°－W	+27°	〃	〃	〃	〃	鉄戈1，鉄剣1鏡の痕跡2	23号より新しく21号より古い内面全体に水銀朱塗布
25	N－38.5°－W	+28.5°	単	甕		楕円形		
26	N－75°－E		〃	壺		〃		
27	N－89°－E	+28°	接口	甕＋甕	上甕・下甕○	隅丸方形	鉄戈1，鉄剣2	下甕内面の縁部付近一部にのみ水銀朱の塗布あり
28	N－64.5°－W	?	接口？	？＋甕		?		下甕底部のみ
29	?	?	?	甕		?		転落一括

b．木棺・土壙墓

≪1号土壙墓（図版32，第38図1）

D5—16区，1号甕棺墓の南西側に近接して位置し，東側を5号，西側を2号土壙墓と複合している。また。中央は柵列のピットで破壊されている。墓壙は隅丸長方形を呈し，北側小口は南側と異なり尖り気味である。最大長257cm，最大幅82cm，深さ32cmを測る。 壙底面には中央より南側小口部に偏して径15cm，深さ15cmのピットが穿たれている。 主軸はN—39°—Eを示し，遺物は弥生式土器小片がわずかに出土したのみである。

≪2号土壙墓（図版32，第38図2）

東側小口部を1号土壙墓に切られて検出された。墓壙は隅丸長方形を呈すものと思われ，現存長135cm，幅57cm，深い所で20.5cmを測る。主軸方位はN—59°—Wを指す。遺物は出土しなかった。

≪3号土壙墓（図版32，第39図3）

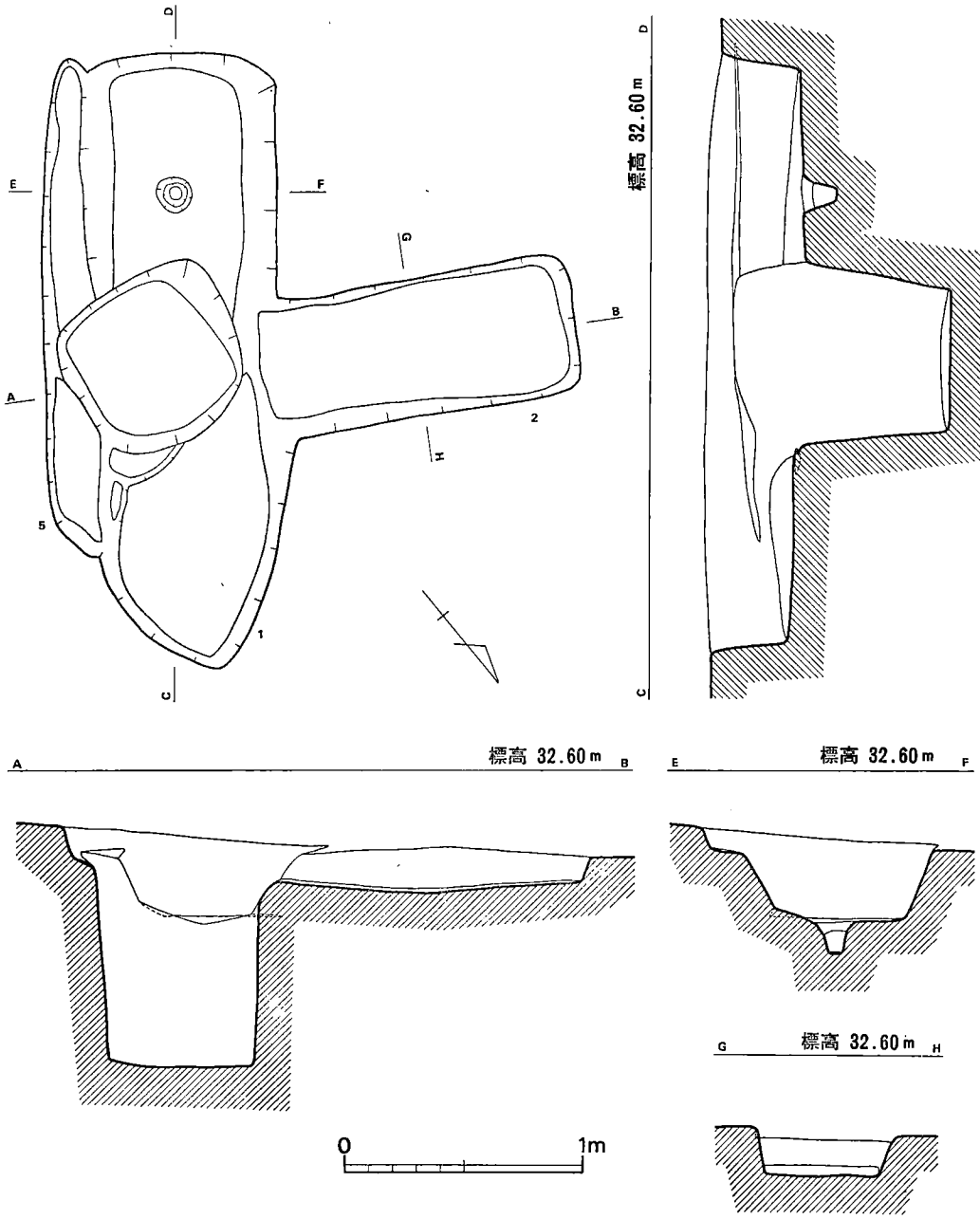
1号土壙墓の南側に近接し， 南側小口部を4号土壙墓に切られている。 墓壙は長方形をなし，現存長145cm，最大幅60cm，深さ約12cmを測る。主軸方位はN—38.5°—Wを示す。遺物はわずかに弥生式土器小片のみである。

≪4号土壙墓（第39図4）

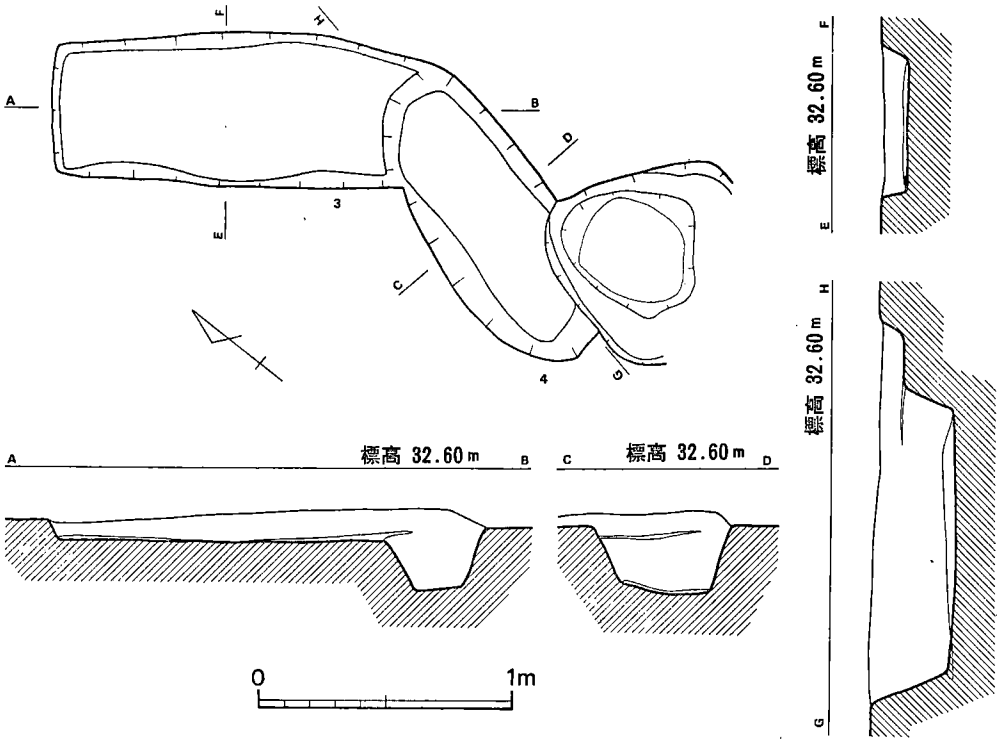
3号土壙墓の南側小口部を切って，西側辺から南側小口の一部は中世の柵列ピットに切られた状態で検出された素掘りの土壙墓である。 長さ127cm，幅54cm，深さ33cmを測り，平面形態は長楕円形を呈す。主軸方位はN—10.5°—Eを指す。

≪5号土壙墓（図版32，第38図5）

1号土壙墓によりその大半を欠損した土壙墓で，東側長辺をわずかに残すのみである。現存長105cm，深さ約15cmを測り，幅は不明。主軸方位はN—39°—Eを指し，1号土壙墓とほぼ同



第 38 図　1・2・5号土壙墓実測図（1/30）



第 39 図　3・4号土壙墓実測図（1/30）

じである。遺物は出土しなかった。

≪16号土壙墓（図版33，第40図16）

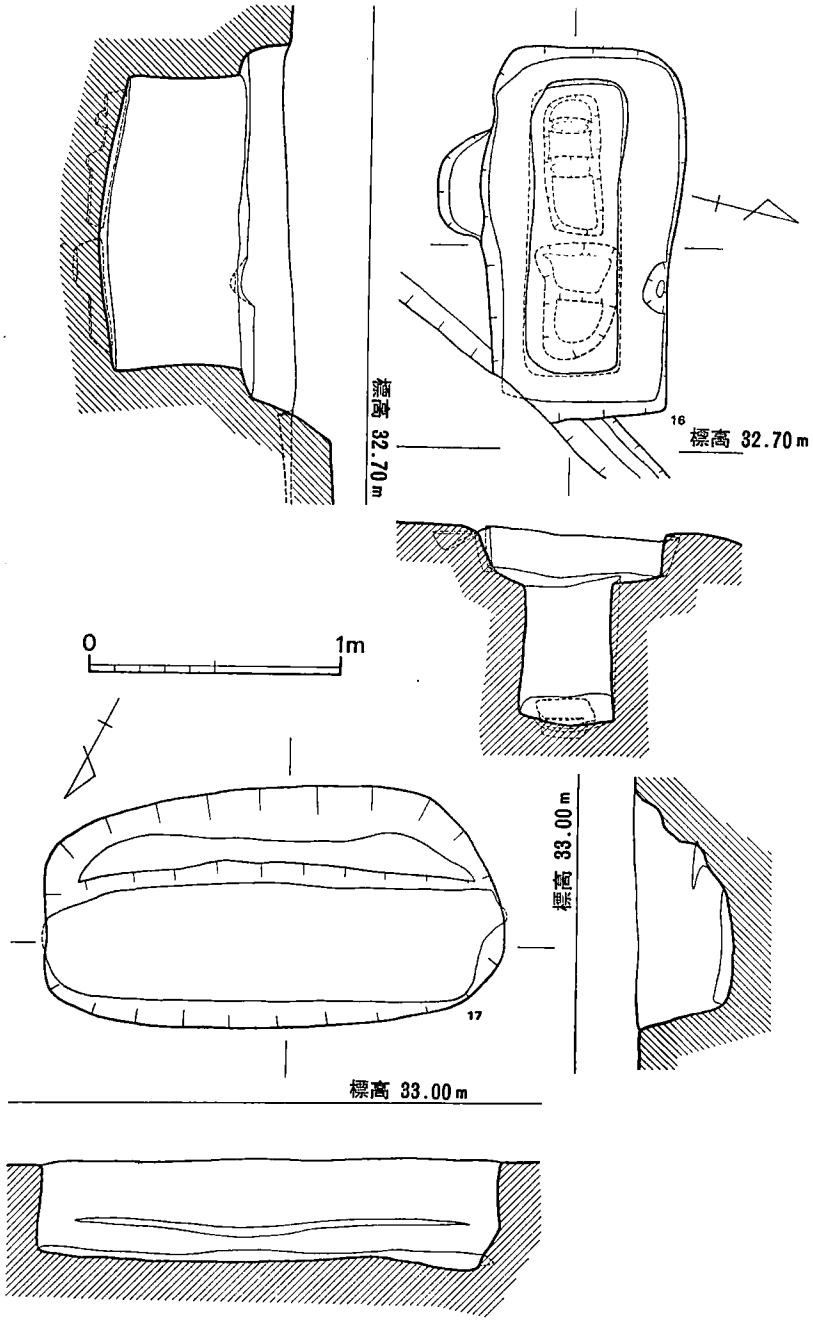
D 5—1～2区にまたがって検出された二段掘りの土壙墓である。墓壙は隅丸長方形で，長さ147cm，幅80cm，深さ36cmを測る。墓壙の中央部にはさらに遺体を埋置するための長さ116cm幅35cm，深さ56cmの土壙が掘られている。底面は上面幅よりわづかに広く，壁は内傾している。また，壙底には楕円形の凹みが2ヶ所みられるが，その意味は不明である。墓壙内の埋土に比べ，下の土壙内の埋土の方が若干やわらかかったことからすれば土壙の上面には木蓋があったのかもしれない。主軸方位はN—76°—Eを指す。遺物は弥生中期後半の朱塗りの壺の小破片が墓壙内から出土したのみである。

≪17号土壙墓（図版33，第40図17）

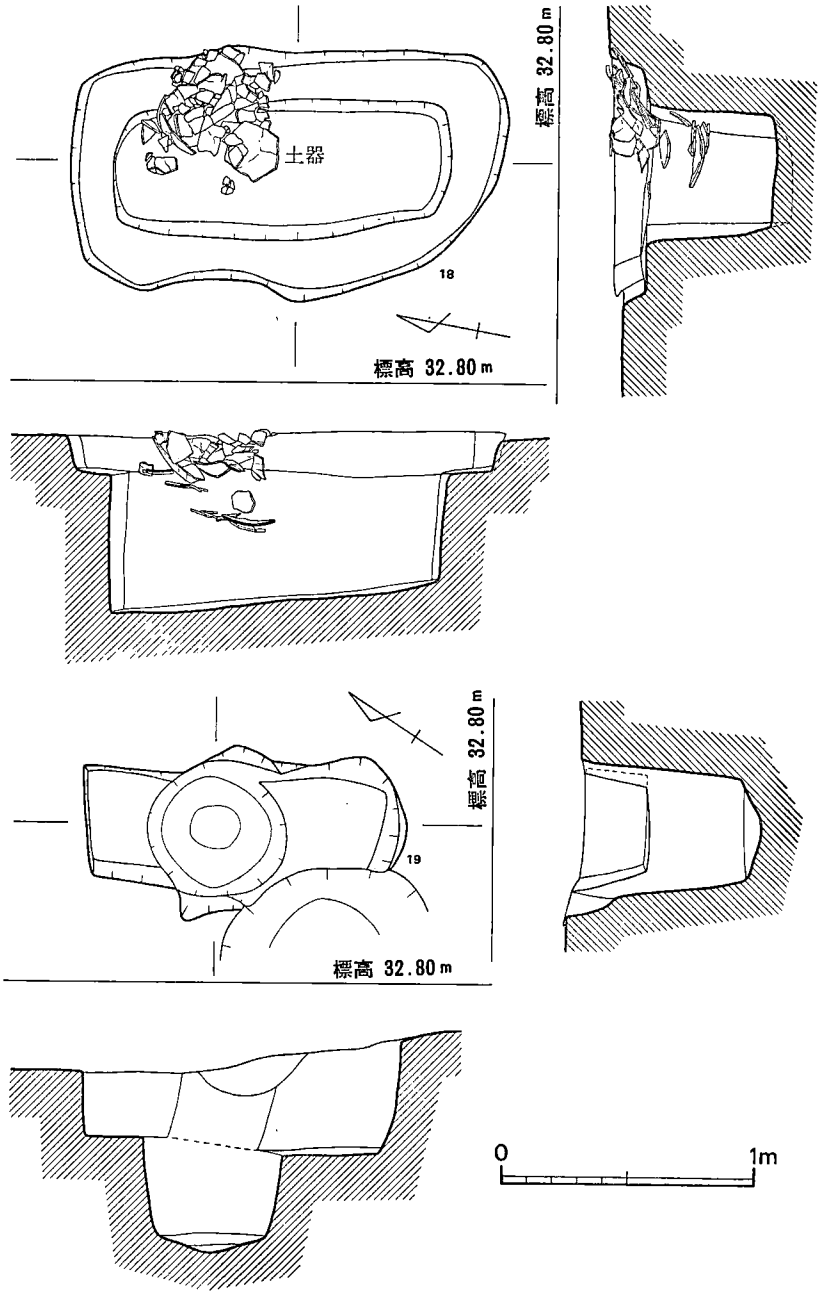
C 5—9区に位置し，中期前半の21号住居跡を切って作っている。平面形態は楕円形を呈し，南長辺側が階段状をなす特異な土壙墓である。長さ183cm，幅は上端で95cm，下端で65cm，深さは40cmを測る。主軸方位はN—61.5°—Eを指す。

≪18号土壙墓（図版34，第41図18）

D 5—2区，17号甕棺墓の南東に近接する。墓壙のプランは，楕円形を呈し，その中央はさら



第 40 図　16・17号土壙墓実測図（1/30）



第 41 図　18・19号土壙墓実測図（1/30）

に遺体を埋置するための隅丸長方形の土壙が掘られている。いわゆる二段掘りの土壙墓である。墓壙の規模は長さ173cm，幅98cm，深さ15cm，土壙の規模は長さ134cm，幅56cm，深さは深い北側で55cm，南側で42cmを測る。北東隅付近の墓壙内からは供献されたと思われる弥生時代中期の壺形土器がつぶれた状態で出土した。土壙内の埋土は墓壙内の埋土とくらべ若干やわらかいことなどからして，本来は木蓋がされていた可能性をもっている。主軸方位はN—10°—Eを指す。

≪19号土壙墓（図版35，第41図19）

C 5—7区，20号甕棺墓の北側に位置する。中央部を9号，南西隅付近を19号近世墓により破壊されている。墓壙のプランは長方形をなし，南側小口はやや丸味をもっている。その規模は長さ128cm，幅46cm，深さは残りのよい南側で45cmを測る。主軸方位はN—33.5°—Wを指す。

≪20号土壙墓（図版35，第42図20）

C 5—12区，19号甕棺墓の北側に位置し，主軸方位をN—24.5°—Wにとる。南側小口部付近は11・14号近世墓により破壊されているため，その長さは不明である。墓壙内には木棺を納めたらしく北側小口部には小口板を付設した幅10cm，深さ8cmの溝が掘られている。側板・底板等の痕跡は確認しえない。

≪21号土壙墓（第42図21）

D 5—3・8区の崖ふちから検出された。北側は崖のため破壊され不明である。墓壙の現存長168cm，幅54cm，深さは南側小口部で48cmを測る。土壙内には木棺を納めたらしく南側小口部に小口板を付設した幅8cm，深さ3cmの溝が掘られている。主軸方位はN—57.5°—Wを示す。

≪22号土壙墓（第43図22）

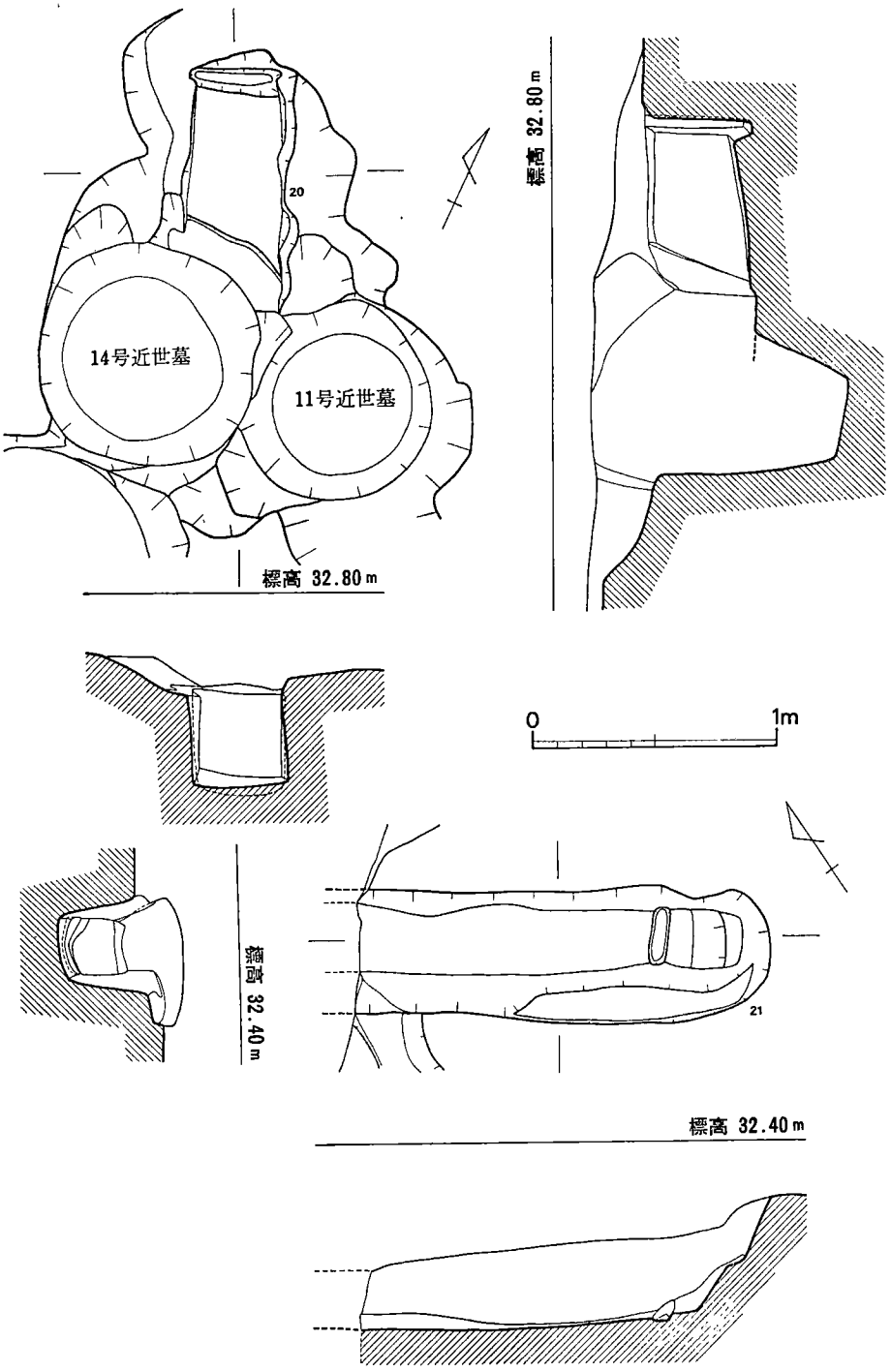
D 5—1区，16号甕棺墓の北側に位置する。主軸方位をN—25.7°—Eにもった楕円形プランの土壙墓である。南側小口付近に「コ」字形のテラス状遺構をもち，壙底は南から北に傾斜している。墓壙の規模は長さ137cm，幅49cm，深さは深い北側で31cmを測る。

≪23号土壙墓（図版36—1，第43図23）

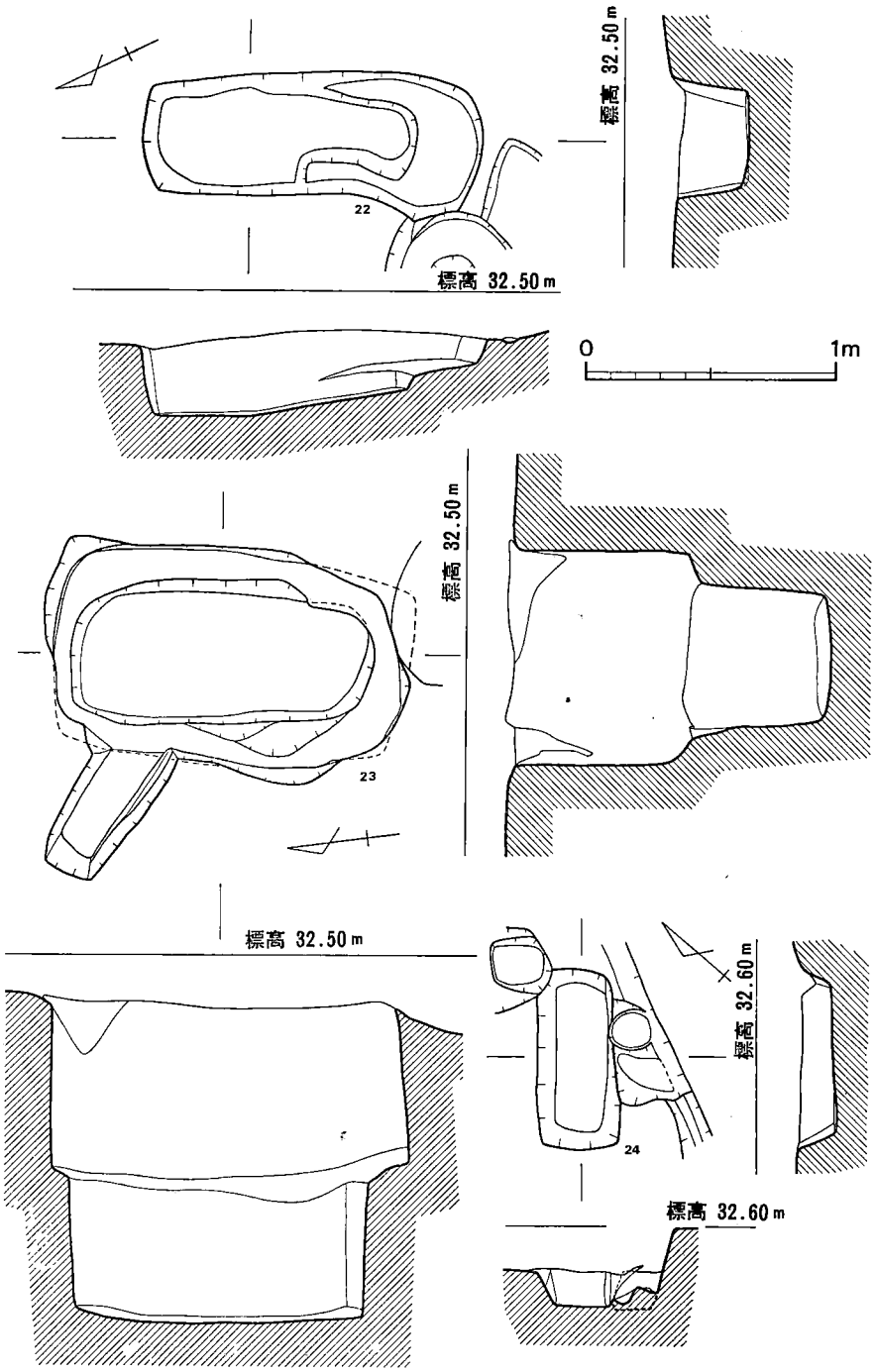
22号土壙墓の西側に位置する。墓壙の北西隅付近は2号石蓋土壙墓に切られている。墓壙のプランは楕円形を呈し，墓壙の中央にはさらに遺体を埋置するための土壙が掘られた二段掘りの土壙墓である。墓壙の規模は長さ140cm，幅87cm，深さ70cm，土壙の規模は長さ122cm，幅57cm，深さ54cmを測る。主軸方位はN—73°—Eを指す。

≪24号土壙墓（図版36，第43図24）

16号土壙墓と15号甕棺墓の間に位置する小児用土壙墓である。墓壙のプランは隅丸長方形で，その規模は長さ75cm，幅34cm，深さ15cmを測る。主軸方位はN—50°—Eを指す。



第 42 図　20・21号土壙墓実測図（1/30）



第 43 図　22～24号土壙墓実測図（1/30）

表 3　A群土壙墓一覧表

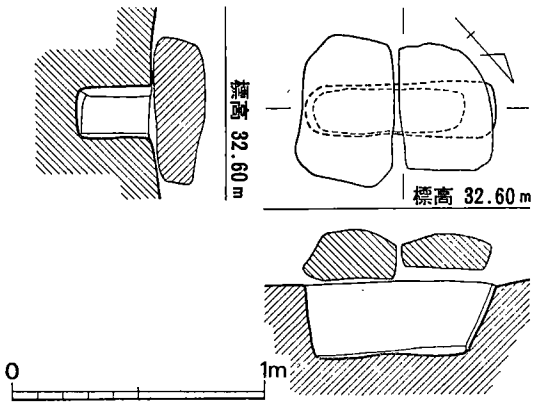
No.	墓坑形態	墓坑 (単位cm) 長軸	短軸	深さ	主軸方位	備考
1	隅丸長方形	250	82	32	N－39°－E	
2	〃	(135)	57	20.5	N－59°－E	
3	長方形	(145)	60	12	N－38.5°－E	
4	長楕円形	127	54	33	N－10.5°－E	
5	?	(105)	－	15	N－39°－E	
11	—	—	—	—	—	欠番
16	隅丸長方形	147 116	80 35	36 56	N－76°－E	二段掘り
17	楕円形	183	95	40	N－61.5°－E	
18	隅丸長方形	173 134	98 56	15 55	N－10°－E	二段掘り，土器供献
19	長方形	128	46	45	N－33.5°－W	
20	〃	－	41.5	45	N－24.5°－W	
21	長楕円形	(168)	54	48	N－57.5°－W	
22	楕円形	140	49	31	N－25.7°－E	
23	〃	122	87	70	N－7.3°－E	二段掘り
24	隅丸長方形	75	34	15	N－50°－E	

c．石蓋土壙墓

≪2号石蓋土壙墓

（図版37，第44図）

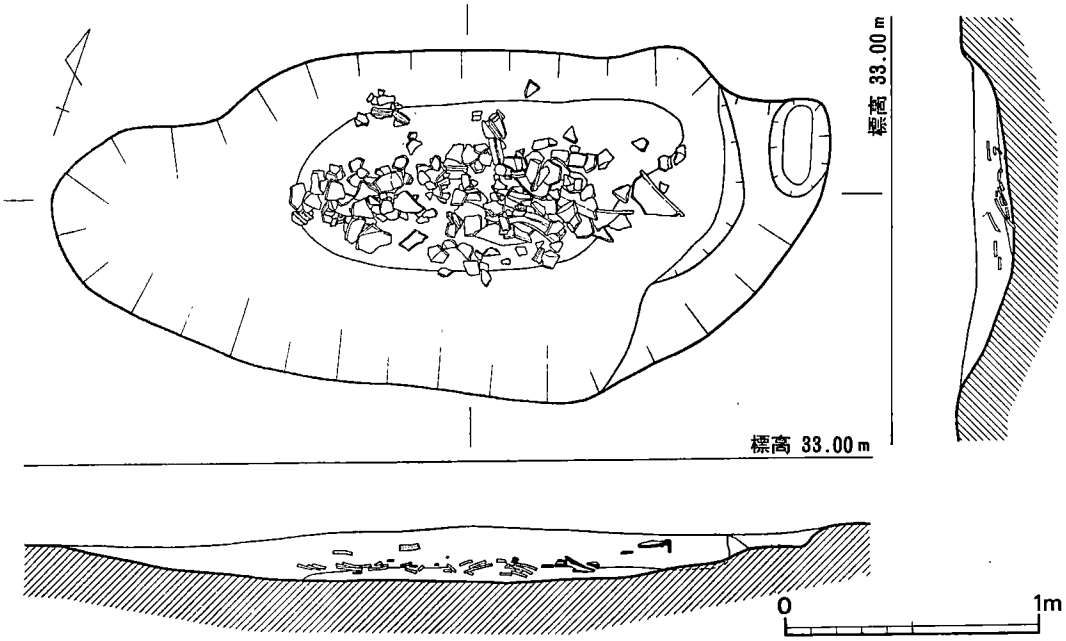
D5区で，23号土壙墓の上部に検出された。素掘りの土壙は，隅丸の長方形を呈し，長さは上端部で76cm，底面60cmと逆台形状を呈す。深さは中央部が若干浅く，両端部で29cmを測り，幅は19cmと狭い。土壙上には2枚の花崗岩を用いて蓋石としている。蓋石は長辺を横方向にして並べている。主軸方位はN—49°—Wにとる。（井上）



第 44 図　2号石蓋土壙墓実測図（1/30）

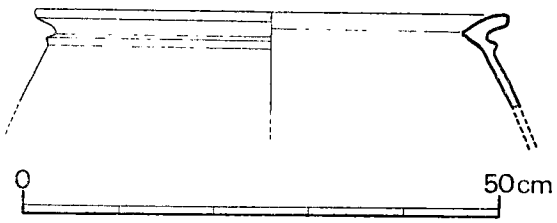
d．土器溜状遺構（図版38，第45・46図）

東西方向に長い不整楕円形を呈する浅い土壙の中央部に破砕された土器片が集積していた。土器は流れ込みによるものとは考えられないが，この土器片は同一個体によるものではなく，遺構の性格は不明である。土器は中期中葉～中期末のものであり，朱塗土器もみうけられた。



第 45 図　土器溜状遺構実測図（1/30）

第46図の土器は復原口径49.4～50.0cmで，20mm程内傾する逆L字状口縁を呈し，口縁下には三角凸帯を一条めぐらす。調整は，口縁部及び内面はヨコナデの仕上げを行っている。胴土は，粗・細砂粒，雲母微細を含み，焼成は良好であるが風化のために磨滅がみられる。色調は暗黄赤褐色を呈する。（丸山）



第 46 図　土器溜状遺構出土甕棺実測図（1/8）

e．A群墓地のまとめ

時期と分布　A群墓地の形成時期は 時期の判る甕棺と一部土壙墓から 大きく二時期に別れる。Ⅰ期は，いわゆる前期末１～６・９・11・18号甕棺墓の９基で，Ⅱ期は中期後半10・12～

17・19～29号甕棺墓の18基である。この墓地は時間的に連続しない墓地のようである。

また，墓地形成のあり方でも両者はその分布を異にしている。Ⅰ期の甕棺は台地の西側縁辺部に集中し，Ⅱ期の甕棺は台地中央部に主に分布している。

Ⅰ期に属する9号甕棺墓は前期末の46号袋状竪穴が埋没した後に形成されたものである。上甕は口唇部と口縁下に1条の三角凸帯を付し，両端部には刻目を施した鉢形土器で，下甕は緩やかに外反する単口縁の壺で，肩部に1条の三角凸帯を付している。上・下甕とも袋状竪穴出土土器と比べ，全体に新しい様相をもっている。前期末の壺形土器特有の不明瞭ながらも有段状口縁をなす壺と異なり，単口縁であること，下甕の鉢の底部が高台状に厚く高い特色は，前期末でも極めて新しい様相をもっているといえる。

また，1号甕棺墓の上・下甕とも袋状竪穴出土の大型壺と比べ，形態的には前期末の様相を多く残しつつも口縁部が有段状をなさず単口縁であることなど全体に新しい様相をもっている。他の甕棺墓も同様の傾向をもち，時期としては前期末でも中期初頭に極めて近い時期が比定され，時間的にも極めて短期間に形成された墓地といえる。

Ⅱ期の中期後半のグループは，23号→24号→21号甕棺墓への切り合い関係から墓地形成が少なくとも3時期にわたることが判る。しかし，型式としてはほぼ同一の範疇に入るもので，その分離は困難といわざるをえない。他の甕棺も同様であるが，その内でも17号甕棺は口縁部が平坦で，T字状をなし，このグループで最も古い甕棺である。だが，他の甕棺は口縁部の形状・内傾度，胴部の形状等は橋口達也氏（註2）のいう中期末に属している。その意味ではこのグループも極めて限られた時期に形成された墓地で，その中心は中期末にあるともいえる。

木棺墓・土壙墓・石蓋土壙墓については時期が確定しえるものがほとんどなく不明な点が多いが，16・18号土壙墓には中期後半の土器の供献がある。この土壙墓はいわゆる二段掘りの土壙墓で，23号土壙墓も同様の構造をもっている。従って，甕棺と共存する土壙墓群の存在は明らかである。しかし，他の土壙墓・石蓋土壙墓群が全て甕棺の示す中期後半～末の期間に形成されたものかは不明といわざるをえない。

仮に，土壙墓群の時期が中期後半から末にわたり甕棺群とともに共存したとすれば，その分布に興味深いことが指摘できる。(1)1～5号土壙墓群のグループ，(2)16・18・22～24号土壙墓群，2号石蓋土壙墓，10・16・17号甕棺墓群のグループ，(3)21号土壙墓・29号甕棺墓のグループ，(4)12～14・21～25・27・28号甕棺墓のグループ，(5)17・19・20号土壙墓群，19・20・26号甕棺墓群のグループの5つの小単位のグルーピングできる可能性をもっていることである。

副葬品　副葬品をもつ甕棺は 23・24・27号の3基で，3基とも後世の盗掘を受けているため，その全容は不明である。

23号甕棺墓出土の青銅製鋤先については，その出土状態が盗掘坑覆土中であるため若干の疑問も残るが，ほぼ完形の状態で検出されていることや，覆土中の遺物の中にも中期末を下る新

しいものもなく，当甕棺墓に共伴すると考えた方が妥当であろう。

鋤先についてはこれまで春日市立石遺跡出土の鋤先が中期の甕棺から出たといわれている他は，後期終末に属するものが大半で，確実に中期にさかのぼる資料はなかった。甕棺から出土したという立石例も，その甕棺は現存せず時期を確定しえない。しかし，近年柳田康雄氏によりその分類が試みられ，それによれば本例はⅡ型に属し，中期にさかのぼる可能性を指摘されている（註３）。その意味では本例が最も古い時期の知りうる貴重な資料となる。

鉄剣は24号甕棺墓から柄部破片１個，27号甕棺墓から完形品１個と柄部破片１個が出土している。24号例が盗掘坑フク土中，27号例は棺内フク土中からそれぞれ出土したもので，原位置の確定はかならずしも充分とはいえないが，両者とも棺内に副葬されていたと考えてもよかろう。

本遺跡出土の鉄剣には，24号例・27—１号例の短茎形式のものと，27—２号例の細長茎形式の２種がある。短茎形式の24号例には２号例には２個，27—１号例には３個の目釘孔を有しているが，細長形式の27—２号例にはみられない。

柄部は断面菱形をなす木柄で，極めて細い糸巻きを施している。24号例・27—１号が極めて細い糸巻きであるのに対して，27—２号例はやや太目の糸である。この糸については京都繊維大学の布目順郎教授に鑑定していただき絹糸であることが判った。詳細はⅥ—４を参照されたい。また，27—１号例の剣身には目の粗い布製品が巻きついている。剣身を布でくるんで副葬したものと思われる。

鉄戈は24号例と27号例の２個があり，両者とも棺外南側の接口部付近に副葬されていた。24号例はいわゆる銅戈にみるような樋を有し，樋内には綾杉文こそみられないが，中央に幅約１㎜の細い隆起線が削り出されている逸品である。附着した錆を新日鉄・大澤正己氏に分析していただき鍛造品であることが判った。樋と中央にみる細い隆起線の削り出しの技術は極めて高度である。この種の鉄戈は現在本例のみである。

27号例は通例の鉄戈で24号例と比べみた目に粗雑さを感じる。関部の彎曲度は27号例が強いのに対して24号例は極めて弱く直線的である。柄を固定させる革紐も24号例は幅約１㎜の細い革紐を６～７条巻いているのに対し，27号例はたば状の革紐を使い異っている。

また，24号例には朱塗りの木柄がついていたと思われる痕跡がある。その長さは約60㎝，直径約２～2.2㎝を測る断面楕円形を呈すもので，柄の胡を上方にして着装している。身に対して鋭角をなし，中国戈の着装法と明らかに異なる。しかし，約60㎝の木柄痕は身に対して緩やかに外彎しているので，それ自体，中国戈と同様鈍角をなしていたものかもしれない。

24号・27号例とも小田富士雄氏の分類によれば中鋒形式に属し，他に栗山・御床松原・中原遺跡の諸例が指摘されている（註４）。両鉄戈とも鍛造品と分析されている。詳細はⅥ—３を参照されたい。

二つの円弧の痕跡　24号甕棺下甕中位から二つの円弧が一部かさなった状態の痕跡が検出された。大きい方が約14cm，小さい方が約13cmを測る円弧で，下甕口縁部に向って左側中位にある。多分，銅鏡の副葬があったことを示す痕跡であろう。人骨は遺存しないが，21号甕棺の人骨例と同様の葬法であれば，遺体の左脇腹（口縁部に向って）付近に銅鏡２面が副葬されていたことになる。上・下甕内面全体には，真赤な赤色顔料の塗布がみられ，円弧の部分は他と比べ黒味をおびてその痕跡ははっきりっかめた（図版27—２）。

この二つの円弧文が銅鏡であるとしたら，いかなる鏡であったろうか。円弧の径のみで鏡式を想定するには多くの問題があるが，甕棺が中期後半でも末に近い時期を示すことから，ほぼ同時期と考えれる三雲遺跡南小路１号・２号甕棺墓出土鏡（註５）。須玖岡本遺跡出土鏡（註６）立岩遺跡10号・28号・34号・35号・39号甕棺墓出土鏡（註７）等と比較し，おおよその想定は可能であろう。

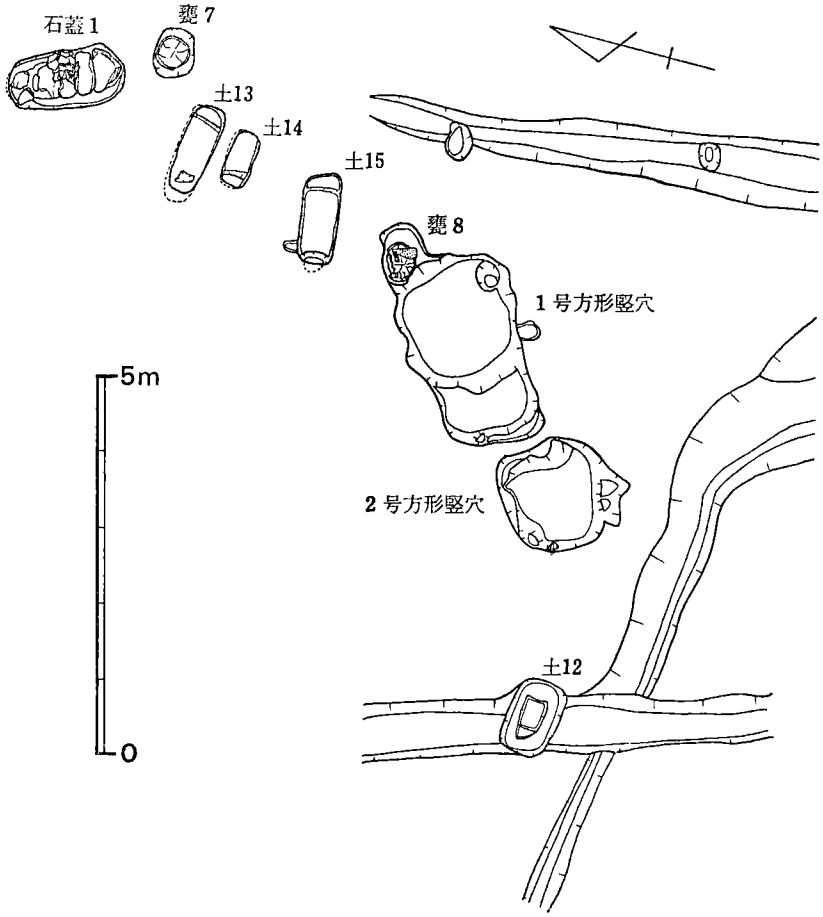
円弧の径は約13cmと14cmであるから，面径15cm以上を測る内行花文清白鏡・重圏精白（清白）鏡・重圏四乳草文鏡・方格四乳草文鏡・四乳雷文地鏡等はほぼ除外できよう。また，面径約５～８cmが主体である日光鏡についてもまず除くことができるだろう。

従って，面径８～15cmの中間を埋める鏡式が本例を考える上で重要となる。その中間の面径をもつ鏡式として現在知られるものは「昭明鏡」である。しかし，現在，国内で発見されているもので長崎県上県郡峰村櫛ムコガイ出土例（註８）が12.5cmと最大である他は，10cm前後のものが多い鏡式のようで，かならずしも充分といえない。だが，可能性は高い鏡式といえよう。また，須玖岡本例にみられる星雲文鏡は明らかに大型品であるが，中国において江蘇省連雲港市霍賀墓（前漢）出土例（註９）のように径13.0cmを測るものもあり，可能性のある鏡式としてあげる必要があろう。（井上）

註１　小田富士雄「鉄器の関連資料」『立岩遺跡』立岩遺跡調査委員会　1977
２　橋口達也他「道場山１地点の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸＶ　福岡県教育委員会　1978
３　柳田康雄「第２—５青銅製鋤先」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』５　福岡県教育委員会　1977
４　註１と同じ
５　青柳種信『柳園古器略考』，柳田康雄「４三雲南小路の甕棺遺物」『井原・三雲遺跡発掘調査報—昭和49年度—』福岡県教育委員会　1975，「５南小路地区の調査」『井原・三雲遺跡発掘調査概報—昭和50年度—』福岡県教育委員会　1976
６　梅原末治「須玖岡本発見の古鏡について」『筑前須玖史前遺跡の研究』京都文学考古学研究報告　11　1930
７　岡崎敬「６鏡とその年代」『立岩遺跡』立岩遺跡調査委員会　1976
８　水野清一・樋口隆康・岡崎敬「櫛住吉神社」『対馬』1953
９　註７に同じ

(2) B群の墓地

台地西側斜面にあたるＦ６・Ｇ７区に形成された一群で，甕棺２（７・８号）・土壙墓４（12～15号）・石蓋土壙墓１（１号）から構成される。この一群は後期前半をさほど前後しない短期間に形成された墓地のようで，小範囲に集中している。しかし，若干離れて検出された12号土壙墓は，その構造・位置などから考え同一のグループとするには問題があるかもしれない。しかし，ここでは一括してあつかった。



第 47 図　弥生時代Ｂ群墓地遺構配置図（1/100）

a．甕　棺　墓

≪７号甕棺墓（図版52，第48図７）

Ｆ６―25区から検出された。上面は削平が著しく甕棺は胴上半の大半を欠失している。棺は胴中位に２条の三角凸帯を付した壺形土器で，底部付近の上面に１つの穿孔がある。この穿孔

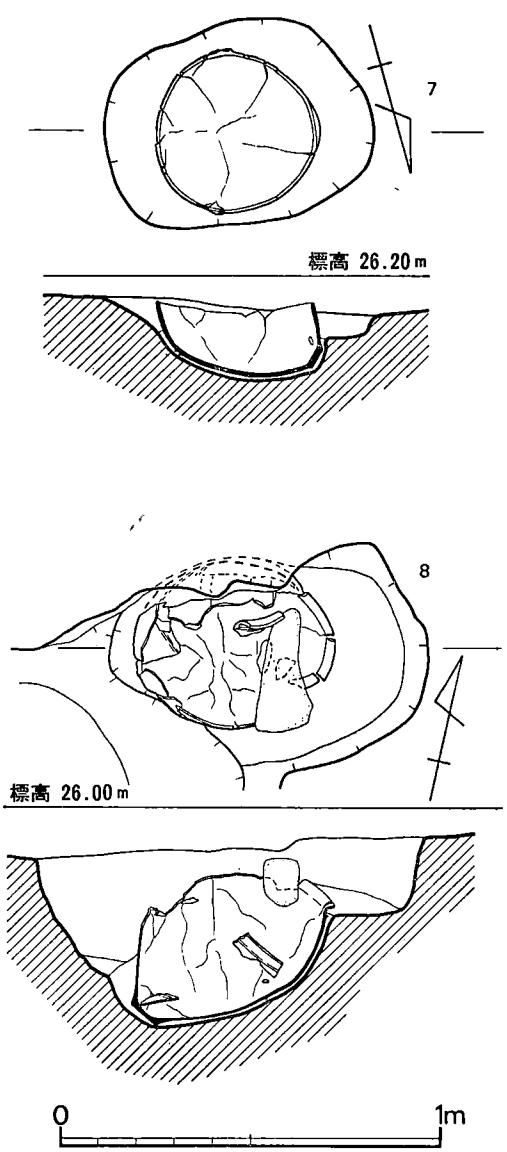
が排水のためのものかと思われるが，穿孔の位置に問題が残る。上面が削平されているので墓壙の形態は不明であるが，単棺であろう。棺内からはガラス製小玉12個が底部付近からわずかに浮いて出土した。主軸方位はN—105°—Eを示し，甕棺の埋置は33°の傾斜を有す。時期は後期前半である。

ガラス小玉（巻頭図版３，図版61，第49図）色調はすべてコバルトブルーである。形態的には２種類あり，径4.25～4.8㎜，厚さ3.05～3.35㎜の径に比べ厚みのあるもの，（９・10・11），径4.8～5.6㎜，厚さ2.1～2.65㎜ の径が大きいのに対して厚みの薄いもの（１～８・12）がある。計測値は表４の通りである。

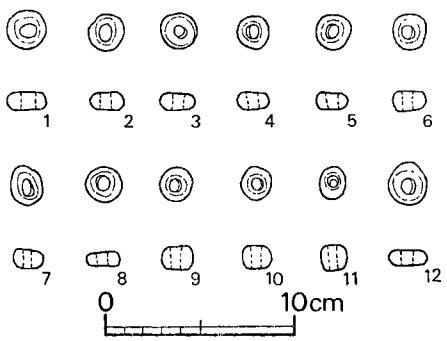
表　4　　７号甕棺出土ガラス小玉計測表

（単位㎜）

No.	径	厚	孔径	色	分類
1	5.25	2.4	2.4	コバルトブルー	C
2	5.15	2.1	2.4	〃	C
3	5	2.45	1.8	〃	C
4	5.1	2.65	1.85	〃	C
5	5.25	2.45	1.8	〃	C
6	5	2.35	1.6	〃	C
7	4.8	2.45	1.8	〃	C
8	4.9	2.25	1.65	〃	C
9	4.25	3.35	1.3	〃	B
10	4.8	3.1	1.6	〃	B
11	4.45	3.05	1.45	〃	B
12	5.6	2.4	2	〃	C



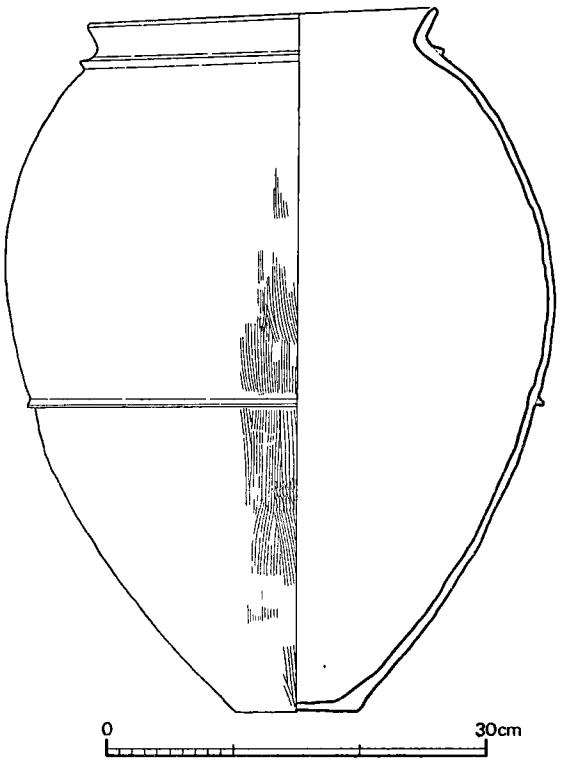
第 48 図　　７・８号甕棺墓実測図（1/20）



第 49 図　　７号甕棺出土ガラス小玉実測図（1/1）

≪8号甕棺墓（図版53，第48図8）

F 7—21区で，15号土壙墓の南側に位置する単棺の小児用甕棺墓である。この甕棺墓は南側の1号方形竪穴を切って施設されたものである。しかし，調査のミスで方形竪穴を先に掘り上げてしまったため南側の掘り方の形状は不明である。墓壙の形態は不整楕円形をなすものと思われ，西壁側に横穴を穿っている。甕の口縁部付近には木蓋を固定したと思われる青色の目貼り粘土が上面にのみ残存していた。主軸方位はN—78.5°—Eを示し，埋置の傾斜は46°と強い。時期は後期前半でも古い時期のものである。



第 50 図　8号甕棺実測図（1/6）

甕　棺（図版60—1，第50図）

口径27.6cm，器高55cmを測る甕形土器で，胴部中位と頸部に1条の三角凸帯を付している。倒卵形の胴部に「く」字状に外反する口縁部がつく甕で，底部は平底である。底径9.4cmを測る。胴部外面は刷毛目，内面はナデ，口縁部付近内外と胴部凸帯はヨコナデで仕上げている。色調は淡赤褐色を呈す。（井上）

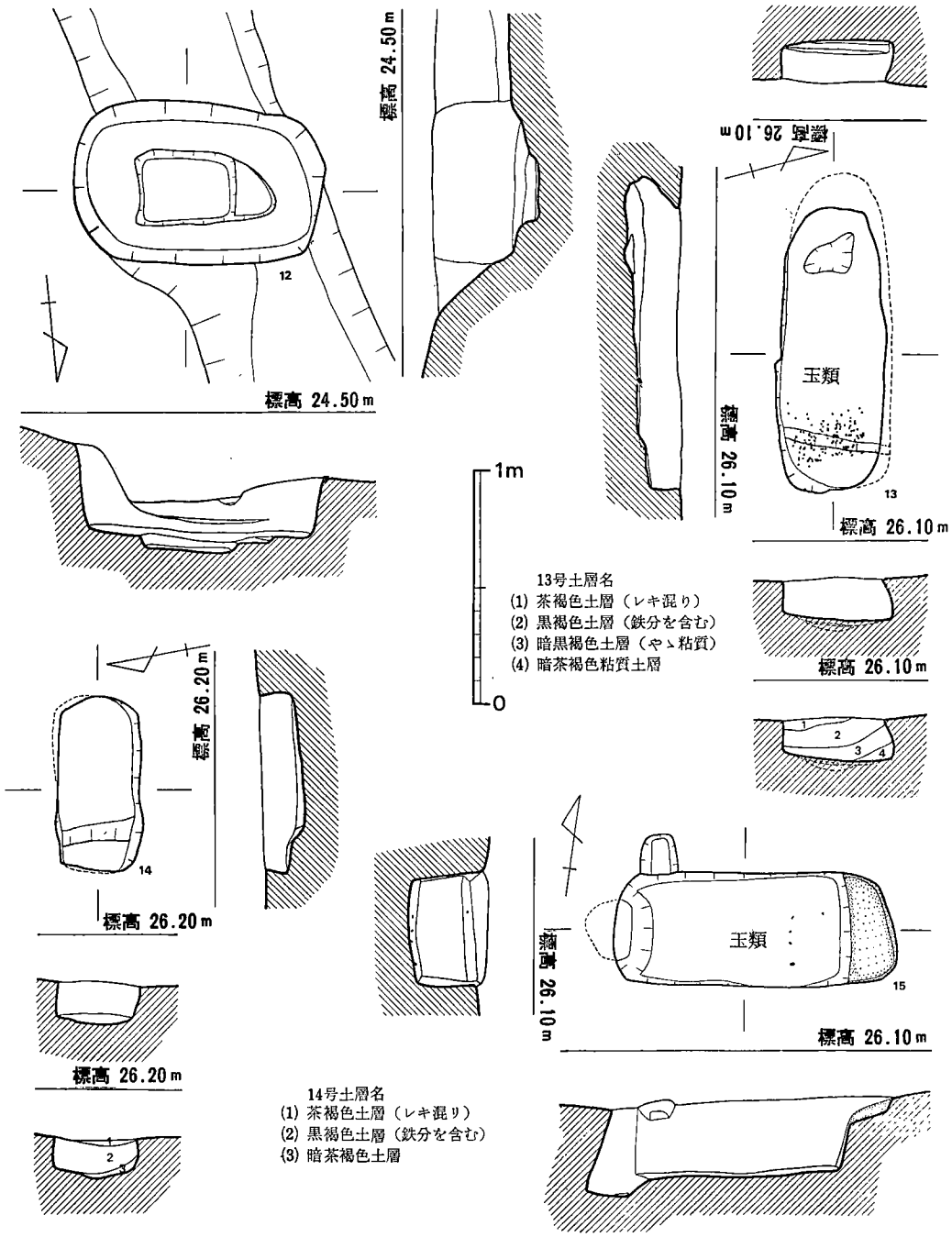
b．土　壙　墓

≪12号土壙墓（第51図12）

G 6区の北東部台地西斜面に位置し，段落ちの溝によって削平された二段掘りの土壙墓である。長辺1.05m，短辺0.7mの隅丸方形プランで深さ0.4mを有し，更に中央部に長辺0.4m，短辺0.3mの長方形プランの掘り込みが深さ0.05cmで設けられている。堆積土では段落ちに伴った湧水のためその変化を判別し難く，また，地山面でも，木棺等の痕跡をみとめるには至らなかった。主軸方向はN—85°—Wで台地斜面に対して平行する方向に相当する。なお遺物は出土しなかった。（小池）

≪13号土壙墓（図版54，第51図13）

1号石蓋土壙墓と14号土壙墓間に検出された。主軸をN—85.2°—Eにとる素掘りの土壙墓



第 51 図　12〜15号土壙墓実測図（1/30）

で，上面観は隅丸長方形を呈す。東側に12cm程テラス面を設け，底面と4cmの段差を有す。床面は西側に低く傾斜し，なおかつ，足入れ部の横穴を設ける。テラス面から80cmばかりの所に浅い凹みがみられた。全長は上端部で1.2m，下端1.33m，深さはテラス側で15cm，西側で24cmを測る。7号甕棺墓の出土状態からして，上部は削平されており，本来的な数値ではない。

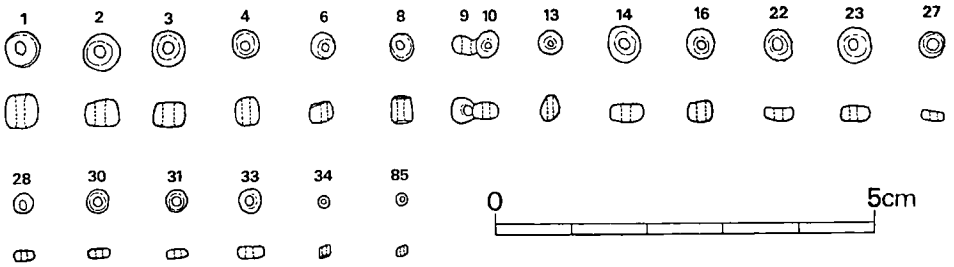
土壙墓内のテラス面と段落ち部付近にガラス小玉が径30cmの環状で出土した。当玉類の出土状態からテラス面を枕として埋葬されたことが判る。

ガラス小玉（巻頭図版3，図版61，第52図）　総数808個出土した。色調はコバルトブルーが大部分を占め，他にスカイブルー，ブルーグリーンがある。形態からはA～Eの5類に分類できる。A類は色調ブルーグリーンを呈し，径4.3～4.5mm，厚さ3～4.2mmと大きいもので1～3の3点のみである。1・3の上下端は平滑になっている。

B類は径に比して厚みのある特徴を有す。点数は23点を数え，色調はコバルトブルーが大部分である。9・10は90度にねじれて融着したもの。

C類は径3.5mm内外で，厚さが2mmと薄手のものである。

D類は径2.1～3.4mm，厚さ1～1.9mm前後のもので，出土したガラス玉の大半を占める。E類は径2～2.5mm，厚さ1.5～2.4mmで，上下をカットし，管状を呈す。全体の計測値は表5の通りである。



第52図　13号土壙墓出土ガラス小玉実測図（1/1）

表5　13号土壙墓出土ガラス小玉計測表

（単位mm）

No.	径	厚	孔径	色	分類	No.	径	厚	孔径	色	分類
1	4.5	4.2	1.3	ブルーグリーン	A	11	3.35	2.8	1.45	スカイブルー	B
2	4.3	3.1	1.6	〃	A	12	2.8	2.85	0.9	〃	B
3	4.5	3	1.2	〃	A	13	2.6	3.2	0.8	コバルトブルー	B
4	3.2	3.7	1.1	コバルトブルー	B	14	4.2	2.2	1.9	〃	C
5	3.55	3	1	スカイブルー	B	15	4	2.9	1.6	〃	C
6	3.35	2.7	1.05	〃	B	16	3.6	2.3	1.3	〃	C
7	3.1	2.9	1.5	〃	B	17	3.2	1.9	2.2	〃	C
8	3.4	3.3	1.1	コバルトブルー	B	18	3.1	2.8	2.7	〃	C
9	3.5	2.5	0.95	スカイブルー	B	19	3.6	2.6	1.4	スカイブルー	C
10	3.6	2.7	0.8	〃	B	20	3.8	2.1	1.4	〃	C

（単位mm）

No.	径	厚	孔径	色	分類	No.	径	厚	孔径	色	分類
21	3.5	2.2	1.3	スカイブルー	C	69	2.7	1.6	1.1	コバルトブルー	D
22	3.85	2	1.4	〃	C	70	2.8	1.9	2.65	〃	D
23	4	2	1.2	〃	C	71	3.1	1.7	1.2	〃	D
24	3.3	1.4	1.25	コバルトブルー	D	72	2.5	2	1.3	〃	D
25	3	1.8	1.45	〃	D	73	2.1	1.5	1.2	〃	D
26	3.1	1.8	1.45	〃	D	74	2.6	1.7	1.1	〃	D
27	2.9	1.4	1.9	〃	D	75	2.9	2.7	1.6	〃	D
28	2.8	1.4	1.4	〃	D	76	3.8	1.4	1.8	〃	D
29	2.8	1.6	1.4	〃	D	77	2.8	1.15	2.8	〃	D
30	2.9	1.3	1.4	〃	D	78	2.8	1.7	1.8	〃	D
31	2.7	1.45	1.2	〃	D	79	2.4	2.1	1	〃	B
32	3.3	1.8	1.2	〃	D	80	3.1	1.7	1	〃	D
33	3	1.9	0.8	〃	D	81	3.2	1.7	0.9	〃	D
34	1.45	1.8	0.9	〃	E	82	2.6	1.9	1.1	〃	D
35	3	2.4	1.2	〃	B	83	2.9	1.6	0.95	〃	D
36	3.4	2.35	1.45	〃	B	84	1.9	1.9	0.9	〃	E
37	3.3	3	1.4	〃	B	85	1.6	1.7	0.3	〃	E
38	3.5	2.5	1	〃	B	86	2.8	1.45	0.9	〃	D
39	2.9	2.15	1	〃	B	87	2.3	1.6	0.95	〃	D
40	2.7	2.3	0.9	〃	B	88	2.4	1.4	1.9	〃	D
41	3.3	2.8	0.1	〃	B	89	2.6	1.1	0.95	〃	D
41	2.6	2.3	1.8	〃	B	90	2.4	1	0.9	〃	D
43	2	1.5	0.8	〃	B	91	2.3	1.45	0.9	〃	D
44	2.3	2	0	〃	B	92	2.5	1.2	1.4	〃	D
45	3.6	2.1	1.9	スカイブルー	C	93	2.9	1.6	1	〃	D
46	3.1	2.4	1.4	コバルトブルー	C	94	2.4	1.6	1	〃	D
47	3.35	2.2	1.2	〃	C	95	2.4	1.2	1.2	〃	D
48	3.1	2.3	1.15	〃	C	96	2.15	1.4	0.9	〃	D
49	3.6	1.9	1.2	〃	C	97	2.4	1.4	1	〃	D
50	3.4	2.65	0.9	〃	C	98	2.4	1.5	0.7	〃	D
51	3.7	1.9	1.15	〃	C	99	2.3	1.4	1.8	〃	D
52	3.7	1.95	1.3	〃	C	100	2.5	1.2	1.1	〃	D
53	3	1.8	0.9	〃	D	101	2.9	1.85	1	〃	D
54	3.2	1.6	1	〃	D	102	2.4	1.3	0.9	〃	D
55	3.1	1.9	1	〃	D	103	2.1	1.4	1.1	〃	D
56	3	2	1	〃	D	104	2.2	1.3	0.75	〃	D
57	2.5	2.1	1	〃	D	105	2.5	0.9	0.9	〃	D
58	3	1.9	0.9	〃	D	106	2.65	1.4	1.1	〃	D
59	3.3	2.6	1.25	〃	D	107	1.15	1.65	0.9	〃	D
60	2.9	1.7	1	〃	D	108	2.65	1.9	0.5	〃	D
61	3.2	1.7	1	〃	D	109	2.6	1.3	1.1	〃	D
62	3.2	1.9	1.2	〃	D	110	2.4	1.2	1.25	〃	D
63	3.1	1.9	1.1	〃	D	111	2.5	1	1.05	〃	D
64	3.1	2.1	0.9	〃	D	112	2.2	1.45	0.7	〃	D
65	2.65	1.1	1.3	〃	D	113	2.8	2	1.1	〃	D
66	2.65	1.15	1.2	〃	D	114	2.4	1.3	0.9	〃	D
67	1.6	2.9	1.1	〃	D	115	2.2	1.2	0.8	〃	D
68	2.65	2.1	0.95	〃	D	116	2.35	1.25	0.8	〃	D

（単位mm）

No.	径	厚	孔径	色	分　類	No.	径	厚	孔径	色	分　類
117	2.9	1.45	0.9	コバルトブルー	D	165	2.4	1.2	0.7	コバルトブルー	D
118	2.4	1.4	1	〃	D	166	2.5	1.4	1.75	〃	D
119	2.4	1.35	0.7	〃	D	167	2.35	1	1	〃	D
120	2.8	1.3	1.1	〃	D	168	2.4	1.15	1 1	〃	D
121	2.65	1.35	1.1	〃	D	169	2.3	1.1	0	〃	D
122	2.5	1.4	0.8	〃	D	170	2.5	1.15	0.85	〃	D
123	2.35	1.6	0.5	〃	D	171	2	1	0.75	〃	D
124	2.6	1.2	1	〃	D	172	2.2	0	0.95	〃	D
125	2.4	1.2	1	〃	D	173	2.25	1.9	1.75	〃	D
126	2.7	1.15	1.2	〃	D	174	2.2	1.05	0.1	〃	D
127	2.4	1.15	1.05	〃	D	175	2.55	1.15	0.6	〃	D
128	2.5	1	1.15	〃	D	176	2.35	1.4	1.6	〃	D
129	2.4	1.5	0.85	〃	E少々大きめ	177	2.3	1	1	〃	D
130	2.5	1.55	0.8	〃	D	178	2.5	4	0.85	〃	D
131	2.2	1.45	0.9	〃	D	179	2.5	1.5	0.9	〃	E少々大きめ
132	2.6	1.15	0.95	〃	D	180	2.05	1.2	0.9	〃	D
133	2.4	1	0.9	〃	D	181	1	1.4	1	〃	D
134	2.4	1.4	0.75	〃	D	182	2.65	0.45	0.6	〃	E少々大きめ
135	2.5	1.3	0.6	〃	D	183	2.75	1.95	0.8	〃	D
136	2.6	1.25	0.9	〃	D	184	2.5	2.05	0.8	〃	D
137	2.3	1.2	0.6	〃	D	185	2.35	1.85	0.75	〃	D
128	3	1.2	1	〃	D	186	2.4	1.2	0.85	〃	D
139	2.4	1.1	0.8	〃	D	187	2.7	1.15	0.95	〃	D
140	2.4	1.2	1.15	〃	D	188	2.4	1.1	1	〃	D
141	2.4	1	1	〃	D	189	2.15	1.4	0.9	〃	D
142	2.7	1.1	0.9	〃	D	190	2.4	1.1	1	〃	D
143	2.3	1	0.7	〃	D	191	2.2	1.45	1.	〃	D
144	2.2	1.15	1	〃	D	192	2.1	1.2	0.8	〃	D
145	2.45	1.15	0.9	〃	D	193	2.4	1	1.75	〃	D
146	2.4	1.45	1.8	〃	D	194	2.8	0.55	1	〃	D
147	1.25	1.2	0.65	〃	D	195	2.4	1	1	〃	D
148	2.3	1.2	1	〃	D	196	2.4	1	1	〃	D
149	2.2	1.1	0.85	〃	D	197	2.6	1.35	1.85	〃	D
150	2.2	1.6	0.8	〃	D	198	2.2	1.95	1.1	〃	D
151	2.2	1	1.1	〃	D	199	2.6	1	1	〃	D
152	2.15	1.4	0.65	〃	D	200	2.3	1	1	〃	D
153	2.55	1.7	1.9	〃	D	201	2.5	1.2	0.9	〃	D
154	2.35	1.1	0.95	〃	D	202	2.25	1.25	0.9	〃	D
155	2.5	1.1	0.9	〃	D	203	2.2	1.3	1.1	〃	E
156	2.5	1	0.9	〃	D	204	1.95	1.3	0.75	〃	D
157	2.45	1.1	0.8	〃	D	205	1.4	1.1	1	〃	D
158	2.15	0.9	0.9	〃	D	206	2.8	1.2	1	〃	D
159	2	1.2	0.6	〃	D	207	2.1	1.2	0.5	〃	D
160	2.4	1.4	0.7	〃	E少々大きめ	208	1.95	1.2	0.6	〃	E少し大きめ
161	2.4	0.85	0.75	〃	D	209	2.4	1.3	1	〃	D D
162	2.4	0.95	1	〃	D	210	2.6	1	1.15	〃	D
163	2.4	1.2	0.9	〃	D	211	2.1	1.5	0.9	〃	E
164	2.5	2	0.9	〃	D	212	2.05	1.45	0.9	〃	E

（単位mm）

No.	径	厚	孔径	色	分　類	No.	径	厚	孔径	色	分　類
213	2.25	1.1	1.7	コバルトブルー	D	261	2.4	1.15	1	コバルトブルー	D
214	2.15	0.9	1	〃	D	262	2.2	0.95	0.8	〃	D
215	2.15	1	0.9	〃	D	263	2.1	1.5	0.5	〃	E少々大きめ
216	2.35	2.45	0.85	〃	E少し大きめ	264	2.15	1.3	0.8	〃	〃
217	2.35	1.15	0.9	〃	D	265	2.5	0.95	1	〃	D
218	2.5	1.15	0.85	〃	D	266	2.15	1.4	0.8	〃	D
219	2.25	1	0.65	〃	D	267	2.1	0.9	0.8	〃	D
220	2.4	1	1	〃	D	268	2.2	1.2	0.85	〃	D
221	2.45	1.4	1.8	〃	D	269	2.3	1.4	0.5	〃	D
222	2.15	1.2	0.6	〃	E？	270	2.3	0.9	0.8	〃	D
223	2.4	1	0.95	〃	D	271	2.1	1.35	0.5	〃	D
224	2.4	1.2	1.05	〃	D	272	2.1	0.9	0.75	〃	D
225	2.45	1.3	0.9	〃	D	273	2.6	1.2	0.9	〃	D
226	2.5	1.4	2.9	〃	D	274	2	1.3	0.75	〃	D
227	2.45	1.25	1.9	〃	D	275	2.4	1.4	0.8	〃	D
228	2.45	1	1	〃	D	276	2.5	1.2	0.85	〃	D
229	2.1	1.2	0.95	〃	D	277	2.1	1	0.9	〃	D
230	2.5	1.15	0.9	〃	D	278	2.15	1.4	0.75	〃	D
231	2.4	0.95	0.9	〃	D	279	2.2	1.4	0.7	〃	D
232	2.4	1.15	0.95	〃	D	280	2.15	1	0.8	〃	D
233	2.4	1	0.75	〃	D	281	0.95	0.4	0.5	〃	D
234	2.1	1.5	0.45	〃	D	282	2.15	1	0.7	〃	D
235	1.2	1.3	0.8	〃	D	283	2.5	1	0.8	〃	D
236	2.15	1.4	0.9	〃	D	284	2.4	1	0.9	〃	D
237	2.6	1.1	0.65	〃	D	285	2.25	1.25	0.5	〃	D
238	2.4	1.15	0.95	〃	D	286	1.95	1.4	0.4	〃	D
239	2.4	1	0.9	〃	D	287	2.15	1	1	〃	D
240	2.45	1.2	1	〃	D	288	2.3	1.15	0.9	〃	D
241	2.5	1.2	0.9	〃	D	289	2.3	1	1	〃	D
242	2.4	2.5	1.2	〃	D	290	1.8	1.75	0.4	〃	E少し大きめ
243	2.4	1	0.9	〃	D	291	2.1	1.1	0.95	〃	D
244	2.4	1	1.2	〃	D	292	2.3	0.15	1	〃	D
245	2.6	1.2	0.9	〃	D	293	2.2	0.9	0.8	〃	D
246	2.45	1.3	0.8	〃	D	294	2	1.2	0.6	〃	D
247	2.4	1	0.85	〃	D	295	2.2	1.2	0.7	〃	D
248	2.45	1	1.2	〃	D	296	1.7	1	0.4	〃	E
249	2.6	1	1.2	〃	D	297	2.4	1	0.9	〃	D
250	2.5	1.25	0.95	〃	D	298	2.45	1.2	0.85	〃	D
251	2.4	0.95	0.85	〃	D	299	2.4	1	0.8	〃	D
252	2.35	1	0.75	〃	D	300	2.4	1.9	0.75	〃	D
253	2.3	1.2	0.7	〃	D	301	2.4	1.1	0.7	〃	D
254	2.3	0.95	0.9	〃	D	302	2.35	1.3	0.85	〃	D
255	2.65	0.9	0.95	〃	D	303	2.25	1	0.6	〃	D
256	2.35	0.95	0.75	〃	D	304	2	1.4	0.8	〃	D
257	2.3	1	1	〃	D	305	2.2	1.1	0.85	〃	D
258	2.4	1.25	0.9	〃	D	306	2.2	0.95	0.8	〃	D
259	2.1	1	0.5	〃	D	307	2.4	1	0.75	〃	D
260	2.2	1.2	0.95	〃	D	308	2.45	1.15	0.8	〃	D

（単位mm）

No.	径	厚	孔径	色	分　類	No.	径	厚	孔径	色	分　類
309	2.4	0.95	0.7	コバルトブルー	D	357	2.1	1.15	0.85	コバルトブルー	D
310	2.1	1	0.8	〃	D	358	2.4	1.25	0.8	〃	D
311	2.25	1.3	0.6	〃	D	359	2.5	1	1	〃	D
312	2.25	1	0.9	〃	D	360	2	1	0.8	〃	D
313	2.25	0.9	0.8	〃	D	361	2.3	0.9	0.9	〃	D
314	2.5	0.9	0.85	〃	D	362	2.55	1.2	0.95	〃	D
315	2.15	1.2	0.5	〃	D	363	2.1	1.45	0.65	〃	D
316	2.3	1.2	0.7	〃	D	364	2.3	1	0.95	〃	D
317	2.55	1.15	0.9	〃	D	365	2.4	0.9	0.95	〃	D
318	2.3	2.4	0.95	〃	D	366	2.2	1	0.8	〃	D
319	2.15	0.9	0.9	〃	D	367	2	1	0.6	〃	D
320	2.1	1.15	0.75	〃	D	368	2.15	1	0.9	〃	D
321	2	1.3	0.45	〃	D	369	2.1	1	0.9	〃	D
322	2.45	0.95	0.95	〃	D	370	2.15	1	0.85	〃	D
323	2.45	1.4	0.95	〃	D	371	2.2	1	1	〃	D
324	2.4	1.3	0.9	〃	D	372	1.9	0.9	0.65	〃	E
325	2.35	1.2	0.7	〃	D	373	2.1	0.95	0.95	〃	D
326	2.4	1.15	0.85	〃	D	374	2.2	1	0.85	〃	D
327	2.55	1.05	1.15	〃	D	375	2.2	1.15	0.5	〃	D
328	2.4	1	1	〃	D	376	2.15	0.95	0.55	〃	D
329	2.15	1	1.15	〃	D	377	2.45	1	1.85	〃	D
330	2.2	1.15	0.75	〃	D	378	2.25	1	0.75	〃	D
331	2.4	1	0.9	〃	D	379	2.3	0.85	0.8	〃	D
332	2.3	0.95	0.75	〃	D	380	2.3	1	0.75	〃	D
333	2.15	1.15	0.6	〃	D	381	0.95	1.4	0.45	〃	E少し大きめ
334	2.45	1.1	0.95	〃	D	382	2.25	0.9	0.6	〃	D
335	2.15	1	0.8	〃	D	383	2.1	1.2	0.5	〃	D
336	2.1	1.35	0.5	〃	D	384	2.3	1	0.7	〃	D
337	2	1.1	0.9	〃	D	385	2.2	1	0.9	〃	D
338	2.2	0.9	0.8	〃	D	386	2.45	0.95	0.85	〃	D
339	2.1	1.1	0.7	〃	D	387	2.15	1	0.65	〃	D
340	2.2	1.15	0.85	〃	D	388	2.15	0.65	0.7	〃	D
341	2.3	0.85	0.8	〃	D	389	2.2	0.95	0.6	〃	D
342	2.15	1.25	0.8	〃	D	390	2.5	1	0.9	〃	D
343	2.3	1.2	1	〃	D	391	2.4	1	0.85	〃	D
344	2.2	0.75	0.9	〃	D	392	2.3	1.45	0.6	〃	D
345	2	1	0.6	〃	D	393	2.1	0.8	0.9	〃	D
346	2.3	1.25	0.9	〃	D	394	2.3	1.3	0.5	〃	D
347	1.95	1.2	0.7	〃	E	395	2.3	1.1	0.9	〃	D
348	2.4	1.15	0.9	〃	D	396	2.4	1.5	0.9	〃	D
349	2.05	0.95	0.65	〃	D	397	2.4	1	0.8	〃	D
350	2.4	1	0.8	〃	D	398	2.3	0.85	0.45	〃	D
351	2.3	1.2	0.6	〃	D	399	2.35	0.9	0.85	〃	D
352	2.4	1.2	1.2	〃	D	401	2.25	1	0.8	〃	D
353	2.15	0.9	0.85	〃	D	402	2.45	1.1	0.7	〃	D
354	2.6	1	0.95	〃	D	403	2.25	0.9	0.8	〃	D
355	2.2	1.2	0.55	〃	D	404	2.1	1.25	0.5	〃	D
356	2.15	1	0.9	〃	D	404	2.1	0.75	0.7	〃	D

（単位mm）

No.	径	厚	孔径	色	分類	No.	径	厚	孔径	色	分類
405	2.4	1.1	0.8	コバルトブルー	D	453	3.3	2.25	1.8	コバルトブルー	B
406	2.15	1	0.8	〃	D	454	3	2.3	1.45	〃	B
407	2.3	1	0.7	〃	D	455	3.8	1.5	1	〃	C
408	1.95	0.9	0.45	〃	D	456	3.55	1.5	1.3	〃	C
409	2.25	0.8	0.7	〃	D	457	3.3	1.5	1	〃	C
410	2.3	1.1	0.75	〃	D	458	3.6	1.7	1.7	〃	C
411	2.15	1	0.6	〃	D	459	3.35	1.85	1.6	〃	C
412	2.1	0.95	0.9	〃	D	460	3.4	1.5	1	〃	C
413	2.15	1	0.6	〃	D	461	3.6	1.45	1	〃	C
414	2.4	0.7	0.5	〃	D	462	3.35	1.5	1	〃	C
415	2	1.4	0.45	〃	D	463	3.65	2.85	1.4	〃	C
416	2.45	1	0.8	〃	D	464	3.1	1.9	1.7	〃	C
417	2.25	1.8	0.7	〃	D	465	3.1	1.6	1.2	〃	C
418	1.95	1	0.75	〃	D	466	3.25	1.55	1.6	〃	C
419	2.3	1.15	0.65	〃	D	467	3.35	1.8	1.4	〃	C
420	2.1	1	0.9	〃	D	468	3.5	1	1.35	〃	C
421	2.3	0.8	0.85	〃	D	469	3.15	2.85	0.95	〃	C
422	2.1	0.75	0.8	〃	D	470	3.1	1.85	1	〃	C
423	2	0.7	0.5	〃	E？	471	3.5	1.7	1.2	〃	C
424	0.95	1.25	1.55	〃	D	472	3.6	1.4	1	〃	C
425	2.25	0.85	0.8	〃	D	473	3.2	1.6	0.9	〃	C
426	2.1	1.3	0.45	〃	D	474	3.5	2.15	0.95	〃	C
427	2.15	1.1	0.9	〃	D	475	3.4	1.44	1.2	〃	CD
428	2.2	1.3	0.6	〃	D	476	3.4	1.8	1	〃	CD
429	2.15	1	0.75	〃	D	477	3.55	1.3	1.6	〃	CD
430	2.05	0.95	0.75	〃	D	478	3.55	1.9	0.95	〃	C
431	2	1.3	0.55	〃	D	479	3.4	1.8	1.25	〃	C
432	2.2	0.95	0.8	〃	D	480	3.3	1.85	1.2	〃	C
433	2.2	0.9	0.95	〃	D	481	3.15	1.95	1.05	〃	C
434	2.25	1.1	0.5	〃	D	482	3.35	2	1.1	〃	C
435	2.35	1	0.6	〃	D	483	3.15	2.4	0.8	〃	C
436	2	0.95	0.8	〃	D	484	3.35	2	1	〃	C
437	2.15	1	0.8	〃	D	485	3	1.9	0.85	〃	C
438	1.75	1.25	0.45	〃	E少し大きめ	486	3.1	2	1.1	〃	C
439	2.15	0.9	0.7	〃	D	487	3.2	2.35	0.9	〃	C
440	2	1.25	0.5	〃	D	488	3.3	1.5	0.9	〃	C
441	2	0.8	0.7	〃	E？	489	3.25	1.7	1.05	〃	C
442	3.35	2.9	1	〃	B	490	3.2	1.45	1.1	〃	C
443	3.1	2.15	1.05	〃	B	491	3.1	2.15	0.85	〃	C
444	3.3	4	1.2	〃	B	492	3.1	1.9	1.15	〃	C
445	2.8	2.7	0.3	〃	B	493	3.35	1.5	1.15	〃	C
446	3	2.1	2.7	スカイブルー	B	494	3.6	1.8	1	〃	C
447	2.9	2.2	1.05	コバルトブルー	B	495	3.5	1.5	1.6	〃	C
448	2.95	2.3	1.2	〃	B	496	3.65	1.7	1.35	〃	C
449	2.75	2.5	0.9	〃	B	497	3.6	1.45	1.6	〃	C
450	2.75	2.6	0.75	〃	B	498	3.4	1.4	0.8	〃	C
451	2.6	2.4	0.85	〃	B	499	3.4	1.95	0.95	〃	C
452	2.3	2.15	0.65	グリーン	B	500	3.35	2	0.95	〃	C

（単位mm）

No.	径	厚	孔径	色	分類	No.	径	厚	孔径	色	分類
501	3.3	1.85	0.8	コバルトブルー	C	549	3.35	1.6	1.2	コバルトブルー	C
502	3.4	1.65	1.45	〃	C	550	3.35	1.6	1	〃	C
503	3.3	1.75	1	〃	C	551	3.15	1.6	0.9	〃	C
504	3.35	1.75	1.3	〃	C	552	3.5	1.5	1.2	〃	C
505	3.35	1.85	1	〃	C	553	3.3	1.6	1.15	〃	C
506	3.45	1.9	0.7	〃	C	554	3.5	1.6	1.25	〃	C
507	3.2	1.44	0.6	〃	C	555	3.3	1.3	1.05	〃	C
508	3.4	1.6	1	〃	C	556	3.45	1.8	1.1	〃	C
509	3.2	1.5	1	〃	C	557	3.3	1.35	1.45	〃	C
510	3.35	1.85	1	〃	C	558	3.25	1.4	1	〃	C
511	3.5	1.65	1.4	〃	C	559	3.45	1.55	1	〃	C
512	3.55	1.65	0.7	〃	C	560	3.3	1.45	1.3	〃	C
513	3.4	1.2	1.2	〃	C	561	3.3	2.3	1.15	〃	C
514	3.4	1.25	1.6	〃	C	562	3.35	1.45	1	〃	C
515	3.4	1.8	1.4	〃	C	563	3.3	1.4	1	〃	C
516	3.5	1.95	1.35	〃	C	564	3.4	1.25	1.1	〃	C
517	3.35	1.95	0.95	〃	C	565	3.5	1.45	1.2	〃	C
518	3.5	1.25	1.45	〃	C	566	3.3	1.3	1.4	〃	C
519	3.2	1.7	0.95	〃	C	567	3	1.75	1	〃	CD
520	3.4	1.6	1	〃	C	568	3.35	1.5	1.2	〃	C
521	3.6	1.5	1.45	〃	C	569	3.15	1.7	1.2	〃	C
522	3.6	1.5	1.1	〃	C	570	3.4	1.45	1.45	〃	C
523	3.45	1.35	1.65	〃	C	571	3.25	1.7	1.1	〃	C
524	3.35	1.6	1	〃	C	572	3.3	1.6	1.3	〃	C
525	3.4	1.8	1.35	〃	C	573	3.25	1.45	1.5	〃	C
526	3.5	1.5	1	〃	C	574	3.5	1.35	0.95	〃	C
527	3.6	1.6	1.55	〃	C	575	3.4	1.4	1.35	〃	C
528	3.15	1.85	0.85	〃	C	576	3	1.55	1.1	〃	CD
529	3.45	1.3	1.3	〃	C	577	3.25	1.4	1.4	〃	C
530	3.35	1.9	0.85	〃	C	578	3.25	1.4	1.3	〃	C
531	3.3	1.6	1.1	〃	C	579	3.1	1.5	0.95	〃	C
532	3.6	1.3	1.4	〃	C	580	3.2	1.55	1.15	〃	C
533	3.35	1.7	1.15	〃	C	581	3.4	1.6	1.3	〃	C
534	3.4	1.4	1.25	〃	C	582	3.45	1.2	1.5	〃	C
535	3.45	1.45	1.15	〃	C	583	3.35	1.4	1.2	〃	C
536	3.25	1.8	1.2	〃	C	584	3.15	1.5	1.2	〃	C
537	3.25	1.5	1	〃	C	585	3.25	1.1	1.5	〃	C
538	3.4	1.7	0.8	〃	C	586	3.25	1.3	1.5	〃	C
539	3.6	1.4	1.3	〃	C	587	3.15	1.65	1.1	〃	C
540	3.4	1.2	1.1	〃	C	588	3.3	1.6	1.1	〃	C
541	3.4	1.35	1.2	〃	C	589	3.3	1.35	1.6	〃	C
542	3.3	1.65	0.9	〃	C	590	3.2	1.55	1.25	〃	C
543	3.3	1.7	0.95	〃	C	591	3.25	1.5	1.2	〃	C
544	3.3	1.5	1.45	〃	C	592	3.3	1.45	1.25	〃	C
545	3.2	1.6	1.25	〃	C	593	3.5	1.45	1.1	〃	C
546	3.25	1.35	1.3	〃	C	594	3.2	1.95	0.9	〃	C
537	3.45	1.5	1	〃	C	595	3.25	1.5	1.25	〃	C
548	3.6	1.65	1.25	〃	C	596	3.35	1.75	1.2	〃	C

(単位mm)

No.	径	厚	孔径	色	分類	No.	径	厚	孔径	色	分類
597	3.1	1.65	1.32	コバルトブルー	C	645	3.25	1.7	1	コバルトブルー	C
598	3.35	1.4	1.3	〃	C	646	3.1	1.5	0.85	〃	C
599	3.2	2	1	〃	C	647	3.15	1.85	1	〃	C
600	3.3	1.45	1.35	〃	C	648	3	1.6	1.4	〃	C
601	3.35	1.65	1.25	〃	C	649	3.2	1.7	1.45	〃	C
602	3.2	1.35	1.15	〃	C	650	3.15	1.85	1.1	〃	C
603	3	1.6	1	〃	CD	651	2.9	2	0.85	〃	D
604	3.35	1.2	1.2	〃	C	652	3	1.6	1	〃	C
605	3.15	1.65	1.15	〃	C	653	2.95	1.9	1	〃	CD
606	3.5	1.35	1.4	〃	C	654	2.9	1.75	0.9	〃	CD
607	3.1	1.35	1.25	〃	C	655	2.85	1.85	1.1	〃	CD
608	3.3	1.7	1.1	〃	C	656	2.9	2.1	0.8	〃	CD
609	3.2	1.3	1.4	〃	C	657	2.95	1.35	0.95	〃	CD
610	3.35	1.35	1.1	〃	C	658	3	1.7	0.9	〃	C
611	3	1.8	1.05	〃	CD	659	3.2	1.55	1	〃	C
612	3.15	1.7	1.1	〃	C	660	3.05	1.9	1	〃	C
613	3.15	1.4	1.1	〃	C	661	3	1.75	0.95	〃	CD
614	3.4	1.7	1	〃	C	662	3	1.5	1	〃	CD
615	3.35	1.35	1	〃	C	663	3	1.5	0.95	〃	CD
616	3.25	1.85	0.85	〃	C	664	2.95	1.6	1.2	〃	CD
617	3.25	1.45	1.1	〃	C	665	2.9	2	0.85	〃	CD
618	3.2	1.2	1.3	〃	C	666	2.85	1.8	0.7	スカイブルー	CD
619	3.1	1.2	1.25	〃	C	667	2.9	1.75	1	コバルトブルー	CD
620	3.15	1.75	0.8	〃	C	668	2.9	1.7	1	〃	CD
621	3.25	1.5	1.15	〃	C	669	2.85	1.55	0.9	〃	CD
622	3.1	1.5	1.15	〃	C	670	2.9	1.7	0.95	〃	CD
623	3.25	1.8	1.2	〃	C	671	0.35	1.2	0.8	〃	C
624	3.3	1.65	0.95	〃	C	672	2.65	2.6	0.8	〃	D
625	3.3	2.35	1.1	〃	C	673	2.9	1.7	1	〃	CD
626	3.35	1.9	1.3	〃	C	674	3.1	1.45	1	〃	C
627	3.25	1.65	0.9	〃	C	675	3	1.7	0.95	〃	CD
628	3.1	1.8	1	〃	C	676	3	1.5	0.9	〃	CD
629	3.1	1.95	1.2	〃	C	677	2.8	1.7	1	〃	CD
630	3.2	1.55	1.3	〃	C	678	2.9	1.45	1	〃	CD
631	3.1	1.5	1.2	〃	C	679	2.95	1.5	0.9	〃	CD
632	3.15	1.6	1.15	〃	C	680	2.9	1.3	1.1	〃	CD
633	3.2	1.7	1.2	〃	C	681	3.3	1.75	1	〃	C
634	3.3	1.7	1.15	〃	C	682	3.3	1.7	1.3	〃	C
635	3	1.45	0.9	〃	C	683	3.15	1.65	1	〃	C
636	3.25	1.55	0.9	〃	C	684	2.9	1.55	1.1	〃	CD
637	3.3	1.9	0.8	〃	C	685	3.1	1.45	0.95	〃	C
638	3.2	1.55	1.2	〃	C	686	3.35	1.5	1.1	〃	C
639	3.1	2.9	1.1	〃	C	687	3.35	1.5	1.2	〃	C
640	3.25	1.5	1	〃	C	688	3.15	1.4	1	〃	C
641	3.25	1.6	1	〃	C	689	3	1.5	1.35	〃	CD
642	3.2	1.75	1.15	〃	C	690	3.15	1.45	1	〃	C
643	3.1	1.5	1.35	〃	C	691	2.8	1.1	1.2	〃	CD
644	3.1	1.5	1.2	〃	C	692	3	1.7	0.9	〃	CD

(単位mm)

No.	径	厚	孔径	色	分　類	No.	径	厚	孔径	色	分　類
693	3	1.75	0.8	スカイブルー	CD	741	2.85	1.1	1.2	コバルトブルー	D
694	2.95	1.7	0.95	コバルトブルー	CD	742	2.6	1.2	0.95	〃	D
695	3	1.45	1	〃	CD	743	2.55	1	0.7	グリーン	D
696	2.85	1.2	1	〃	CD	744	2.55	1.25	0.7	〃	D
697	2.9	1.4	1.15	〃	CD	745	2.6	1.1	0.65	〃	D
698	2.95	1.85	0.7	〃	CD	746	2.6	1.55	0.6	〃	D
699	3	1.15	1.2	〃	CD	747	2.5	1.3	0.9	〃	D
700	3	1.3	1.2	〃	CD	748	2.35	2.5	0.9	〃	D
701	3	1.45	1	〃	CD	749	2.2	1.7	0.8	〃	D
702	3	1.7	1	〃	CD	750	2.15	1.8	0.6	〃	D
703	3	1.65	0.9	〃	CD	751	2.5	1.6	1	〃	D
704	2.9	1.7	0.9	〃	CD	752	2.75	1.55	0.95	〃	D
705	3	1.4	1	〃	C	753	2.45	1.4	0.95	コバルトブルー	D
706	2.9	1.8	1.1	〃	CD	754	2.3	1.3	0.9	グリーン	D
707	3	1.6	1	〃	CD	755	2.5	1.2	0.9	コバルトブルー	D
708	2.9	1.2	0.9	〃	CD	756	2.3	1.4	0.7	グリーン	D
709	2.75	1.45	0.95	〃	D	757	2.5	1	0.9	コバルトブルー	D
710	2.7	1.8	0.9	〃	D	758	2.35	1.4	0.85	〃	D
711	2.85	1.7	1	〃	CD	759	2.6	0.8	1	〃	D
712	2.9	1.5	1.1	〃	CD	760	2.6	1.2	0.85	〃	D
713	2.8	1.4	0.9	〃	D	761	2.5	1.45	0.8	〃	D
714	2.8	1.55	0.95	グリーン	D	762	2.35	1.2	0.9	グリーン	D
715	2.7	1.65	0.55	〃	D	763	2.3	1.45	0.5	〃	D
716	2.85	1.45	1	〃	CD	764	2.1	1.2	0.5	〃	D
717	2.8	1.3	1	コバルトブルー	D	765	2.35	1.1	0.7	〃	D
718	2.6	1.45	0.95	〃	D	766	2.55	1	0.85	〃	D
719	2.65	1.45	0.6	〃	D	767	2.5	1	0.5	〃	D
720	2.65	1.9	0.8	スカイブルー	D	768	2.7	1.5	0.75	〃	D
721	3	1	0.95	〃	CD	769	2.8	1.45	0.8	〃	D
722	2.65	0.9	0.8	コバルトブルー	D	770	2.45	1.45	0.5	〃	D
723	2.75	1.55	0.7	グリーン	D	771	2.4	0.95	0.95	〃	D
724	2.45	1.15	0.85	コバルトブルー	D	772	2.15	1.15	0.55	〃	E少し大きめ
725	2.65	1.1	1	〃	D	773	2.4	0.9	0.95	〃	D
726	2.4	1.45	0.7	〃	E少し大きめ	774	2.15	1	0.85	〃	D
727	2.75	0.95	1	〃	D	775	2.3	1.3	0.6	〃	D
728	2.45	1.7	0.75	グリーン	D	776	2.3	1.15	0.6	〃	D
729	2.4	1.45	0.75	〃	D	777	2.12	0.95	0.65	〃	D
730	2.4	1.85	0.9	〃	D	778	2.15	1.1	0.8	〃	D
731	2.65	1.25	0.85	〃	D	779	1.95	1.15	0.95	〃	D
732	2.2	1.5	0.65	〃	E少し大きめ	780	1.5	0.5	1.95	〃	D
733	2.75	1.15	0.75	〃	D	781	2.4	1.3	0.7	〃	D
734	2.4	1.35	0.5	〃	D	782	2.15	1.3	0.6	〃	D
735	2.15	1.2	0.7	〃	E少し大きめ	783	2.35	1.05	0.95	〃	D
736	2.8	1.3	1.15	〃	D	784	2.5	1.35	0.9	〃	D
737	2.95	1.35	0.8	〃	D	785	2.4	1	1.1	〃	D
738	2.2	1.4	0.65	〃	D	786	2	1.1	0.6	〃	D
739	2.6	1.5	0.9	ブルー	D	787	2.1	2.4	1	〃	E
740	2.8	1.2	1.1	コバルトブルー	D	788	2.5	2	0.75	〃	E

（単位㎜）

No.	径	厚	孔径	色	分　類	No.	径	厚	孔径	色	分　類
789	2.1	2.15	0.55	グリーン	E	799	2.15	1	0.45	グリーン	D
790	2.3	1.95	0.95	〃	D	800	1.95	1.15	0.45	スカイブルー	D
791	2.15	1.5	0.7	〃	E少し大きめ	801	破損			コバルトブルー	B
792	2.3	1.85	0.5	〃	D	802	〃			〃	C
793	3.6	2.55	1.2	スカイブルー	B	803	〃			〃	CD
794	2.4	0.9	1	コバルトブルー	D	804	〃			〃	D
795	2	0.85	0.8	〃	D	805	〃			〃	D
796	1.95	1	0.45	〃	D	806	〃			〃	B
797	1.7	0.85	0.4	〃	D	807	〃			〃	D
798	2.2	1.1	0.95	〃	D	808	〃			〃	D

≪14号土壙墓（図版54，第51図14）

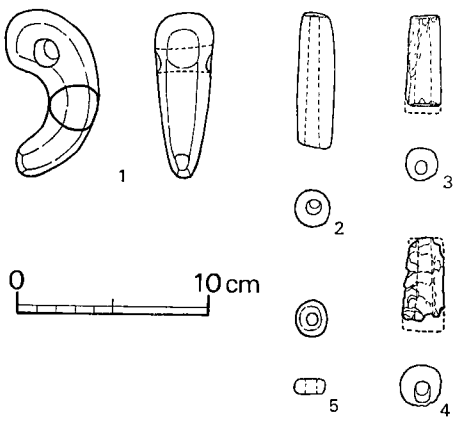
13・15号土壙間に検出された小型の土壙墓で，形態は隅丸長方形を呈す。西側に，底面との差5㎝のテラス面を有し，両小口部は上面より若干内に入いる。底面はほぼ中央部が最深で18㎝テラス側で11㎝を測る。長さは上端部で76㎝，底面部で78㎝，テラス面は14㎝である。13・15号土壙墓の形状からすると，テラス面が西側をとり，頭部の位置が逆転すると考えざるを得ない点，注意をはらう必要があろう。壙内よりは何ら副葬品は検出されず，本来的に欠いていたと思われる。土壙墓の規模からして小児用の墓であろう。（木下）

≪15号土壙墓（巻頭図版２，図版55・56，第51図15）

14号土壙墓と８号甕棺墓の間かられ検出された。東側小口部に幅約18㎝前後のテラスを設け，西側小口部には足部を挿入すると思われる抉り込みの穴を施設している。テラス上辺から足部抉り込部までの長さは1.3m，西側小口から足部抉り込部までの長さは1.12m，中央部での幅48㎝，深さ32㎝を測る。テラス上面には厚さ４㎝の粘土が敷きつめられていた。棺内からは，西側小口部付近の棺底よりわずかに浮いて蛇紋岩製勾玉１個，ガラス製管玉３個が，また，底面より22㎝浮いてガラス製小玉１個が出土した。従って頭位は東側と思われる。主軸方位はN—82.5°—Eを示す。

勾　玉（巻頭図版3，図版61，第53図1）　蛇紋岩製の勾玉である。長さ2.15㎝，厚さ0.8㎝，重さ2.4ｇ測る。頭部は肉厚で，背部は丸味をもち，尾部へと細くしまる。孔径は前面で0.35㎜，裏面で0.3㎜を測る。

ガラス管玉（巻頭図版３，図版61，第53図２～４）　１は完形品，２・３は欠損品である。色調は全てグリーンブルーを呈す。３の器面は



第 53 図　15号土壙墓出土玉類実測図（1/1）

風化のためか亀列が著しい。2の表面には縞状の「す」が縦に走っている。1は，長さ1.8㎝，中央部径0.4㎝重さ1.15ｇを測る。この管玉にも縦に走る「縞」がみられる。

ガラス小玉（巻頭図版３，図版61，第53図５）　径4.4㎜，厚さ2.2㎜を測る。色調はコバルトブルーを呈す。気泡が縦に走る。　（井上）

ｃ．石蓋土壙墓

≪１号石蓋土壙墓（図版57～59，第54・55図）

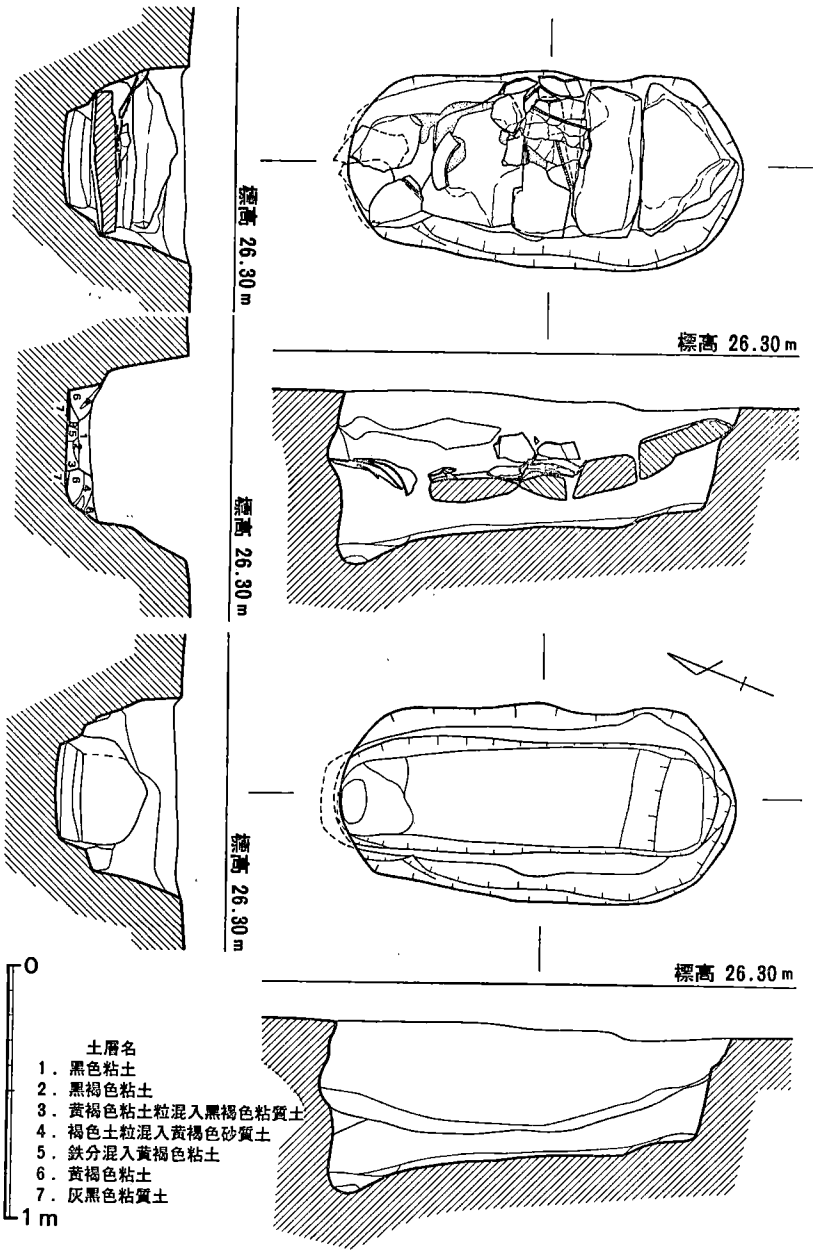
Ｆ６―25区で検出された。群中最も北側にあり，内容的に見ても命主的地位にある墳墓である。隣接する７号甕棺墓の削平具合から見ても当石蓋土壙墓も後世に相当上部を削平されていると見なければならない。

墓壙は，丘陵の傾斜方向に直交する方向で主軸をＳ―21°―Ｅ にとる長楕円形の平面形をなし，長さ1.56ｍ，南側最大幅0.76ｍ，北側幅0.63ｍの大きさである。墓壙内はブロック状黄褐色粘土混入黒褐色土で埋まり，頭部と思われる南側は深さ５㎝程で石蓋が現われた。

蓋石には，４個の板状花崗岩が使用されているが，４個では全部を覆いきれず，足部は壺形土器を破砕して蓋としている。蓋石は，長さ53～58㎝，幅20～37㎝，厚さ９～13㎝の石材で，これを横に掛けて長辺が石蓋の幅となっている。

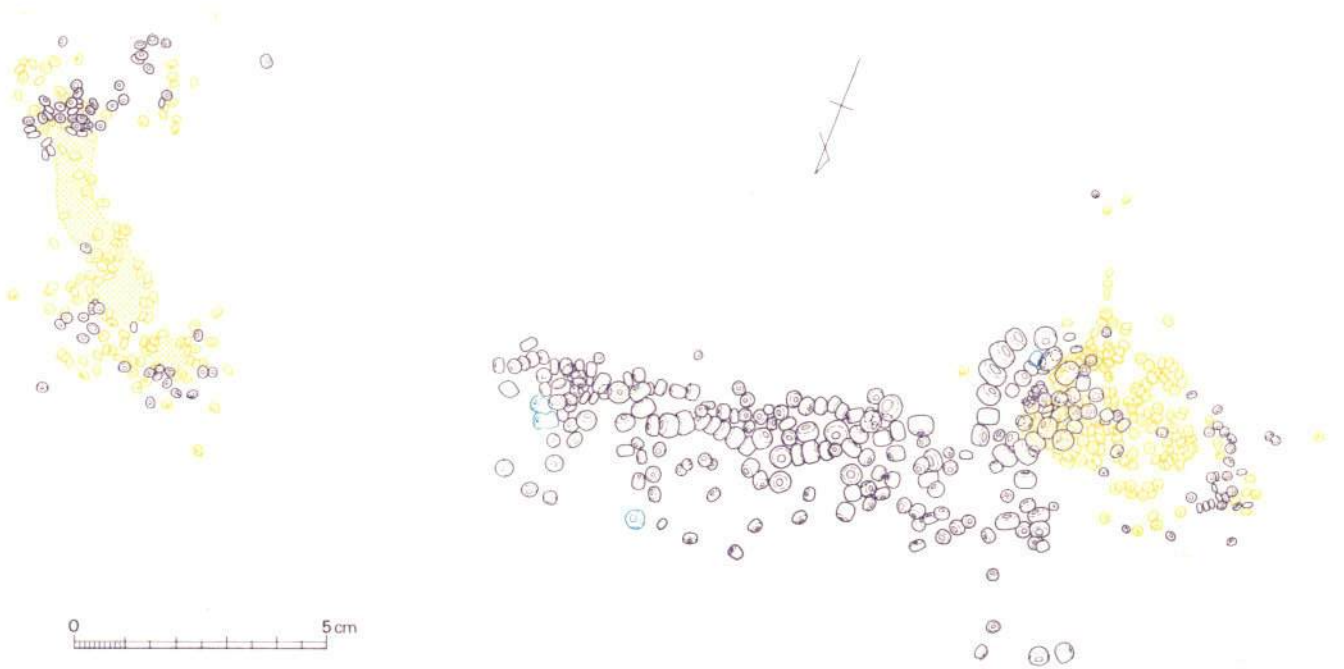
蓋石は現状では，石材自身の重量と土圧で，下部の土壙をつぶして下がった位置にあるが，本来の高さは頭部にあたる三角形状の石材の南側先端と東側中央の土器片上部の位置付近であったと思われる。これは第54図の蓋石下の土壙内土層からも明らかで，土壙床面の有機物の腐植土である灰黒色粘質土の薄い層の上に地山である黄褐色粘土が崩れ落ちている。足部の土器蓋は，大型の壺形土器の胴部凸帯付近以下を大きく４片に破砕し，そのうち底部の付いた３片を組み合せて蓋の代用としたものである。他の胴部以上の壺片は，石蓋の隙間の多い東側中央部に大きな破片のまま覆せていたらしい。壺形土器を復原すると口頸部は４分の１程しかなく，他は破棄されたらしい。

下部土壙は，蓋受けのある２段式の土壙墓であるが，すでに重圧で大半が崩壊していたのと調査が雨期にはいり，国鉄の工事の谷間になっていたため，数回にわたり遺跡全体が水没し，さらに原状を失なってしまった。土壙は，上部で長さ1.55ｍ，最大幅0.45ｍの隅丸長方形で，頭部の深さ30㎝，足部の深さ約40㎝となっている。床面は，長さ1.45ｍ，最大幅0.38ｍの隅丸長方形プランで，頭部に高さ６㎝の枕状段と足部にさらに１段下がる掘り込みを持っている。足部はさらに上部墓壙プランの小口部で，蓋受けと足先の部分が横穴状に掘り込まれている。頭部の段はガラス小玉の出土状態から見ても備え付けの枕であり，足部の掘り込みは状況から見て明らかに足部屈曲のためのものである。したがって，床面の主軸の長さは1.45ｍであるが，成人を埋葬するに十分な大きさの土壙といえる。



第 54 図　1号石蓋土壙墓実測図（1/30）

副葬品としては，枕部の斜面に３群に分かれるガラス小玉が発見された。１群は径３～５㎜の大きさで，頭位から見て首部から胸部のあたりで左右に長く連らなって群をなし，他の２群はその左右にあり，径２㎜以下のものである。前者の３～５㎜の小玉群はスカイブルー，４個



第 55 図　石蓋土壙墓内ガラス小玉出土状態（2/3）

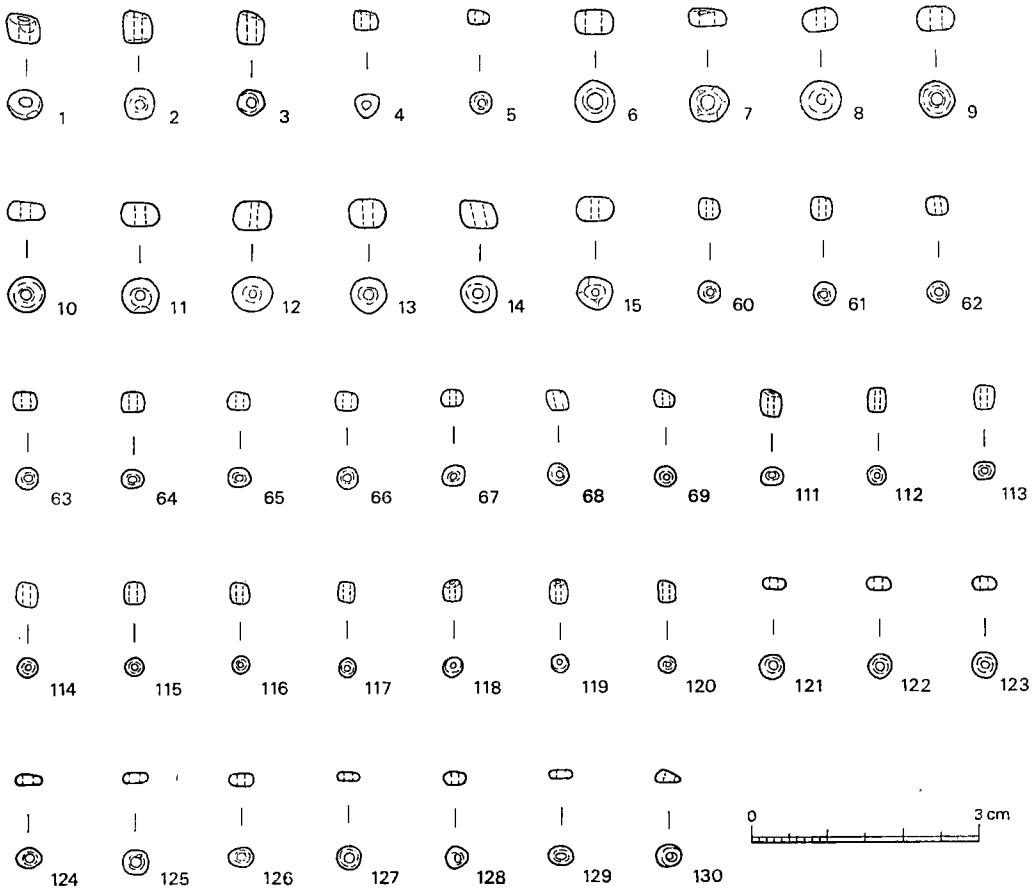
とグリーンブルー１個を含んでいるが他の202個はコバルトブルーで出土位置から首飾か，胸飾りと思われる。後者の微小小玉の２群の位置は，顔部の両側にあたり，耳飾か髪飾と思われる。微小小玉群には，第55図の色刷で示すようにコバルトブルーとイエローグリーンがある。右（東）側の群は南北の長さ8.5㎝，幅４㎝の範囲に分布し，64個以上のコバルトブルーの玉は南北両側に集中し，115個以上のイエローグリーンの玉は全体に分布している。この群には南西側に１個だけ径３㎜のコバルトブルーの玉が含まれている。左（西）側の群は首飾りの西端に半分重複してその下から発見された。分布範囲は南北７㎝，東西７㎝であるが，遊離した数個を除くと長さ５㎝，幅３㎝の範囲に集中する。こちらはコバルトブルー49個，イエローグリーン166個以上である。イエローのガラス小玉は，風化が著しく脆いため１個１個として取り上げられないため，耳飾の部分は表面に露出できたものだけの個数であるから，とくにイエローグリーンの玉数は倍近くになるものと思われる。

ガラス小玉（巻頭図版３，図版61，第56図，表６）　耳飾と思われる左右の微小小玉群は脆いため床面の粘土ごと切り取って上げたので，総数は不明であるが，計測できたものだけで，右側計179個，左側計215個ある。したがって，首飾の207個を加算すると総計601個となり，計測できない微小小玉を入れると700個以上となるであろう。左側耳飾の部分で首飾と重複して出土したためにコバルトブルーの径３㎜未満２㎜以上のものは全部首飾りの部類にしたが，数個は耳飾に含まれるものがあるかもしれない。

首飾の一群の小玉を一連の糸に通すと全長48.5㎝となり，首回り一重しかならない。出土状態を見ると一重以上に見えるところもあるが，４～５㎜の大きなものをまとめて通し前面に向け，小さなものを首の後にまわしていたようだ。被葬者の性別は不明であるが，左右の微小小玉は髪飾である可能性も強い。

総数601個以上のガラス小玉を分類すると，形態からＡ～Ｅの５類に分類できる。これは微少差であるが，Ａは径４㎜前後で厚さも径と同じ程度であるが，厚さが径よりわずかに大きいものがあるため，歪んで長く見える小玉で，ＢはＡより小さく３㎜前後で，径より厚さが大きく長い小玉である。Ｃは４～５㎜のものが主体であるが，３㎜前後のものも多く，径より厚さが小さく，外形は丸味のある玉らしい小玉である。Ｄは径３㎜以上のものと微小小玉の２㎜以下のものがあるが，Ｄの特徴は厚さが著しく薄いことである。Ｅは輪切りにしたそのままの状態に近いもので角が取れていない。

Ａ～Ｅの分類には径の大小はあまり関係ないが，大きさで分類すると３分類できる。最も大きなグループＡ・Ｃは４㎜以上のもので，中間のグループは3.6㎜から2.5㎜，最小は耳飾の微小小玉で２㎜以下のグループである。大きさの分類は出土状態を見ると最も重要で，微小小玉は耳飾りに，大きなものと中間の大きさのものは首飾に使用され，その中でも前述したように大きさで使い分けてある。色の分類をすると，コバルトブルー（315個以上）・イエローグリ



第 56 図　1号石蓋土壙墓出土ガラス小玉実測図（1/1）

ーン（281個以上）・スカイブルー（4個）・グリーンブルー（1個）の4種である。色による使用別は，イエローグリーンが耳飾として区別されているだけで，色と使用別はあまり関係ないようである。

表 6　1号石蓋土壙墓出土ガラス小玉計測表

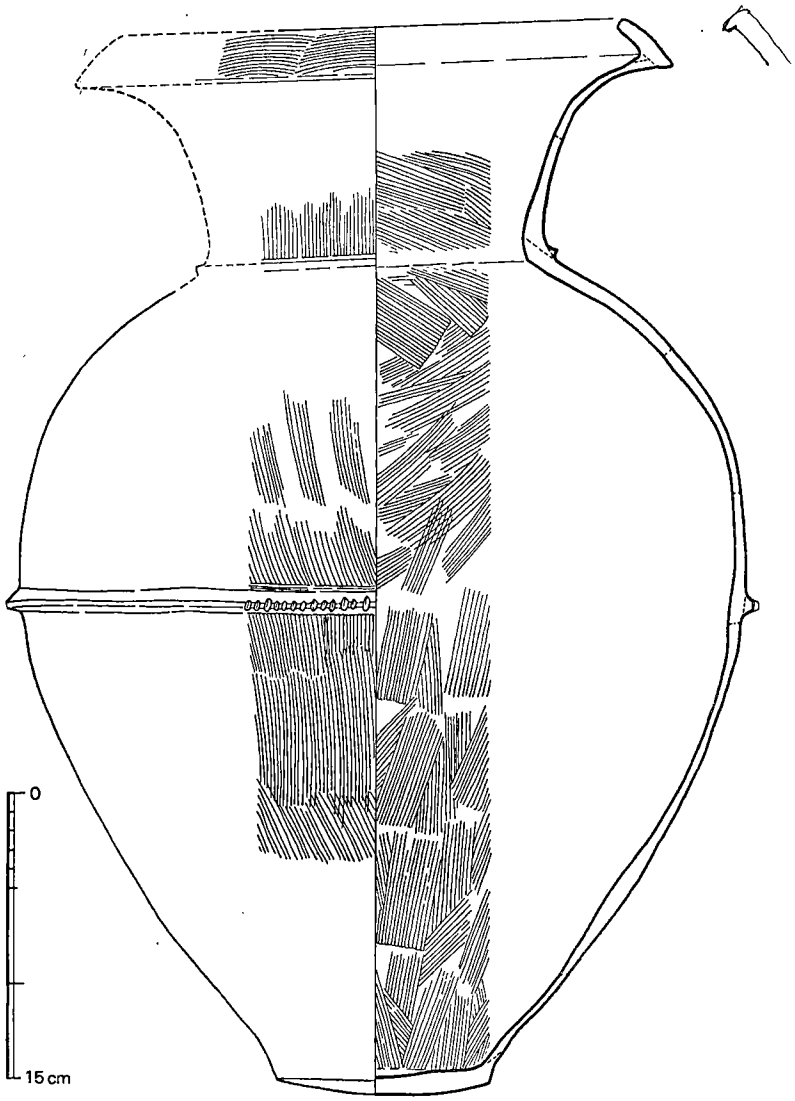
（単位mm）

No.	径	厚	孔 径	色	分類	No.	径	厚	孔 径	色	分類
1	4.15	3.4	1.8	グリーンブルー	A	10	4.8	2.5	1.65	コバルトブルー	C
2	4.1	4.3	1.35	スカイブルー	A	11	5.2	3.1	1.45	〃	C
3	3.8	4.5	1.4	〃	A	12	5.1	3.8	1.05	〃	C
4	3.25	2.5	1.2	〃	E	13	4.75	3.7	1.4	〃	C
5	3.1	2.15	1.0	〃	C	14	4.75	3.8	1.5	〃	C
6	5.5	3.4	2.15	コバルトブルー	C	15	4.8	3.25	1.0	〃	C
7	5.35	2.6	2.05	〃	C	16	4.25	3.25	1.45	〃	C
8	5.5	3.4	1.2	〃	C	17	4.85	3.3	1.2	〃	C
9	4.75	3.25	1.95	〃	C	18	5.1	3.45	1.3	〃	C

No.	径	厚	孔 径	色	分類	No.	径	厚	孔 径	色	分類
19	4.75	2.85	1.7	コバルトブルー	C	67	3.35	2.6	0.9	コバルトブルー	C
20	4.85	3.3	1.1	〃	C	68	3.5	2.95	1.0	〃	C
21	4.9	3.8	1.1	〃	C	69	3.0	2.5	1.2	〃	C
22	4.4	3.9	1.45	〃	C	70	3.5	2.05	1.2	〃	C
23	4.3	3.6	1.3	〃	C	71	3.5	2.4	1.3	〃	C
24	4.85	3.3	1.5	〃	C	72	3.25	3.2	1.0	〃 ヒビ	C
25	4.75	3.2	1.45	〃	C	73	3.3	2.65	0.9	〃	C
26	4.85	3.15	1.7	〃	C	74	3.15	2.95	1.0	〃	C
27	4.65	2.8	1.8	〃	C	75	3.05	2.75	1.0	〃	C
28	4.55	3.85	1.3	〃	C	76	3.6	2.55	1.4	〃	C
29	4.75	3.05	1.3	〃	C	77	3.55	2.45	1.1	〃	C
30	5.00	2.7	2.1	〃	C	78	3.2	2.8	1.3	〃	C
31	4.65	3.25	1.3	〃	C	79	3.15	2.6	1.0	〃	C
32	4.7	3.15	1.45	〃	C	80	3.2	2.5	0.9	〃	C
33	4.8	2.75	1.45	〃	C	81	3.15	2.9	1.0	〃	C
34	4.3	3.5	1.1	〃	C	82	3.2	2.5	1.0	〃	C
35	4.6	3.3	1.00	〃	C	83	3.2	2.45	1.0	〃	C
36	4.65	3.1	1.5	〃	C	84	3.1	2.5	1.0	〃	C
37	4.25	3.3	1.00	〃	C	85	3.2	2.2	1.1	〃	C
38	4.65	3.05	1.05	〃 だ円	C	86	3.3	2.25	0.9	〃	C
39	4.5	2.7	1.1	〃	C	87	3.25	2.2	1.2	〃	C
40	4.55	3.15	1.15	〃	C	88	3.1	2.1	1.2	〃	C
41	4.5	3.3	1.00	〃	C	89	3.35	2.6	0.8	〃	C
42	4.3	2.95	1.45	〃	C	90	3.4	2.1	1.4	〃	C
43	4.5	2.2	1.6	〃	C	91	3.15	2.0	1.0	〃	C
44	4.5	2.25	1.2	〃	C	92	3.5	2.2	1.4	〃	C
45	4.55	3.6	1.2	〃	C	93	3.35	2.0	1.2	〃	C
46	4.35	2.95	1.00	〃	C	94	3.05	1.95	1.2	〃	C
47	4.35	2.95	1.05	〃	C	95	3.05	2.25	1.1	〃	C
48	4.15	3.15	1.15	〃	C	96	3.05	1.9	1.1	〃	C
49	4.15	3.15	1.05	〃	C	97	3.05	1.75	1.2	〃	C
50	4.1	2.95	1.2	〃	C	98	3.4	2.1	1.1	〃	C
51	4.2	2.8	1.5	〃	C	99	3.05	2.0	0.9	〃	C
52	4.05	3.1	1.2	〃	C	100	2.95	1.9	1.0	〃	C
53	4.45	2.9	1.25	〃	C	101	3.4	1.85	1.1	〃	C
54	4.35	2.7	1.2	〃	C	102	3.25	1.7	1.0	〃	C
55	4.1	3.35	0.95	〃	C	103	3.25	2.4	1.0	〃	C
56	4.25	2.9	1.2	〃	C	104	3.3	1.8	1.3	〃	C
57	4.4	2.45	1.25	〃	C	105	3.15	1.85	1.1	〃	C
58	4.15	2.9	1.25	〃	C	106	3.2	1.85	1.0	〃	C
59	4.00	1.9	1.45	〃	C	107	3.1	2.2	1.0	〃	C
60	3.35	3.35	0.9	〃	C	108	3.3	2.05	1.0	〃	C
61	3.3	3.2	0.95	〃	C	109	3.1	2.2	1.1	〃	C
62	3.5	2.6	1.1	〃	C	110	3.0	2.25	1.1	〃	C
63	3.2	2.85	1.5	〃	C	111	3.2	3.4	0.8	〃	B
64	3.6	2.65	1.3	〃	C	112	2.8	3.25	1.2	〃	B
65	3.55	2.45	1.4	〃	C	113	3.0	3.2	1.0	〃	B
66	3.4	2.5	1.4	〃	C	114	3.1	3.05	1.0	〃	B

No.	径	厚	孔　径	色	分類
115	2.9	3.1	1.0	コバルトブルー	B
116	2.7	2.9	1.1	〃	B
117	2.45	3.0	0.9	〃	B
118	2.8	3.0	0.9	〃	B
119	2.5	3.4	0.7	〃	B
120	2.6	3.05	0.8	〃	B
121	3.3	1.8	1.3	〃	D
122	3.45	1.95	1.1	〃	D
123	3.55	1.95	1.2	〃	D
124	3.8	1.45	1.5	〃	D
125	3.65	1.65	1.3	〃	D
126	3.6	1.95	1.3	〃	D
127	3.4	1.4	1.3	〃	D
128	3.6	1.9	1.3	〃	D
129	3.35	1.45	1.7	〃	D
130	3.25	1.9	1.3	〃	D
131	3.55	1.75	1.2	〃	D
132	3.7	1.6	1.4	〃	D
133	3.15	1.9	0.9	〃	D
134	3.2	1.95	1.0	〃	D
135	3.15	1.65	1.2	〃	D
136	3.15	1.5	1.1	〃	D
137	3.35	1.75	1.2	〃	D
138	3.2	2.05	1.2	〃	D
139	3.15	1.7	1.0	〃	D
140	3.15	1.3	1.4	〃	D
141	3.15	1.4	1.0	〃	D
142	2.9	1.6	1.0	〃	D
143	3.1	1.35	0.9	〃	D
144	2.85	1.35	1.0	〃	D
145	2.95	2.9	1.3	〃	C
146	2.85	2.5	1.0	〃	C
147	3.15	2.2	1.0	〃	C
148	3.1	2.2	0.8	〃	C
149	3.1	2.45	1.0	〃	C
150	2.55	2.5	1.1	〃	C
151	2.85	2.3	0.9	〃	C
152	2.75	2.15	1.0	〃	C
153	2.9	2.2	1.1	〃	C
154	3.1	1.85	1.0	〃	C
155	3.0	2.5	1.2	〃	C
156	3.1	1.7	1.1	〃	C
157	3.1	1.8	1.0	〃	C
158	2.95	2.0	0.8	〃	C
159	2.7	2.55	1.1	〃	C
160	2.8	2.5	1.2	〃	C
161	2.9	1.95	1,2	〃	C
162	2.95	2.0	1.1	〃	C
163	3.0	2.4	1.0	コバルトブルー	C
164	2.8	2.3	1.1	〃	C
165	2.7	2.35	1.0	〃	C
166	2.95	2.05	1.0	〃	C
167	2.65	2.4	1.2	〃	C
168	2.85	1.8	1.0	〃	C
169	2.75	2.7	1.1	〃	C
170	2.75	2.5	0.9	〃	C
171	3.0	2.35	1.0	〃	C
172	2.55	2.2	1.0	〃	C
173	2.8	2.5	0.8	〃	C
174	2.8	2.45	0.8	〃	C
175	2.95	1.75	1.0	〃	C
176	2.85	1.75	1.2	〃	C
177	2.75	2.15	1.0	〃	C
178	2.8	1.95	1.0	〃	C
179	2.75	1.95	1.0	〃	C
180	2.7	2.5	1.0	〃	C
181	2.9	2.15	1.2	〃	C
182	2.7	2.0	1.0	〃	C
183	2.7	2.35	0.9	〃	C
184	2.5	2.55	1.1	〃	C
185	2.9	2.3	1.2	〃	C
186	2.65	2.15	1.0	〃	C
187	2.7	1.6	0.9	〃	C
188	2.45	2.1	0.9	〃	C
189	2.9	1.85	1.1	〃	C
190	2.8	2.15	1.0	〃 欠	C
191	2.95	1.8	1.0	〃	C
192	2.65	1.6	0.8	〃	C
193	2.7	1.55	1.0	〃	C
194	2.7	1.75	1.0	〃	C
195	2.6	1.65	1.0	〃	C
196	2.5	2.05	0.8	〃	C
197	2.5	1.55	1.0	〃	C
198	2.65	1.85	0.8	〃	C
199	2.25	1.95	0.9	〃	C
200	3.1	2.4	1.0	〃	C
201	2.85	2.15	1.1	〃	C
202	2.6	2.8	0.7	〃	C
203	2.65	2.4	1.0	〃	C
204	2.8	1.5	1.0	〃	C
205	3.05	1.6	1.0	〃	C
206	2.5	1.95	1.0	〃	C
207	破片				

壺形土器（図版60—2，第57図）　破砕して石蓋の代用にされていた，器高56.3㎝，口径約26.5㎝，頸外部最小径18㎝，胴最大径38.5㎝，底部径11.3㎝の大型壺形土器である。口縁部は，いわゆる複合口縁や袋状口縁といわれているもので，頸部の接点にするどい稜線をもってわずかに内彎しながらのびている。頸部は，胴部との接点が最も細く，上部で急激に外反して口縁部との稜をつくる。頸部と胴部の接合部に１条の貼付三角凸帯をめぐらしている。胴部は，最大径が上半にあり，中位に凸帯を１本めぐらし，下半が細くなる割合長胴である。胴部凸帯は三角形に近い断面台形で，先端に刻目が施されている。底部はふくらみのあるいわゆるレンズ状の平底である。



第 57 図　　1号石蓋土壙墓出土器実測図（1/4）

胎土には砂粒（石英等）を多く含み，表面が荒れているが，内外全面に刷毛目が残っている。口縁外面は横に刷毛目が，内面は横ナデ調整である。頸部は，外面の荒れが著しいが，下から上に刷毛目，内面上半はナデ，下半は斜上方に刷毛目調整である。胴部外面は，下半が凸帯を貼付けた後で，上から下方に刷毛目調整するが，その下方はナデ調整である。上半は下から上に刷毛目調整されているが上方ほど荒れが著しい。上半の凸帯付近は，縦の刷毛目の後から凸帯の上を刷毛目状調整具で横ナデしている。胴部内面は，下半が下から上方に，上半が上から下方に刷毛目調整されるが，頸部近くの上端のみ幅３㎝程の刷毛目調整具で強く，下から斜上方に調整されている。

色調は，口縁端部に一部黒斑があるが，外面は全体に淡黄褐色で，胴部内部は灰褐色で部分的に黒褐色のところがある。焼成は良好である。（柳田）

d．B群墓地のまとめ

時　期　B群墓地は７基から構成されている。現地形では，北東側の削平が著しいところから，北東側に続く１～２基が削平されて消滅している可能性があるが，一応ここでは７基についての検討を試みたい。７基の墳墓のうち直接土器によって時期を判定できるものに，７号・８号甕棺墓・１号石蓋土壙墓の３基があり，その土器形式から２期に分類することができる。

Ⅰ期は８号甕棺で，ほぼ南北に並ぶ６基のうちで最も南端にある。８号甕棺墓は，中型の甕形土器を利用した小児単棺で副葬品を持たない。後期前半に位置ずけられる。７号甕棺を調査後紛失したので明らかでないが，この時期の大型壺形土器であろう。

Ⅱ期は１号石蓋土壙墓で，６基のうち北端に位置し，他と頭部方向を異にする成人用土壙墓で，副葬品に玉類を持っている。蓋に使用された大型の壺形土器は，胴部凸帯に刻目を施すなどⅠ期より新しい様相を示し，後期中頃に位置ずけられるものであろう。

この２期は，間隔のあるものではなく，７号甕棺や他の土壙墓が間にはいり，連続する墓地と思われる。すなわち，８号甕棺が上限で，１号石蓋土壙墓が下限を示すものである。

次に他の土壙墓の時期を検討してみたい。13号土壙墓は副葬品の玉類において，数量で多少の差はあるが，小玉の色・大小・形態においてまったく１号石蓋土壙墓の玉類と差が認められない。したがって，木蓋と石蓋の違いはあるが，時期的に近いことを意味している。また，14号土壙墓は，13号土壙墓に最も近接し，親子の関係といってよいほどの親近性を持っているところから，これも13号土壙墓と同時期と見てよい，このように，墳墓の配列と位置関係から見ると，15号土壙墓と８号甕棺，１号石蓋土壙墓と７号甕棺墓はそれぞれ一対となり近親の関係にあるといってよい。この理論からいくと15号土壙墓は８号甕棺墓と，１号石蓋土壙墓は７号甕棺墓と同時期ということになる。しかし，これは15号土壙墓と８号甕棺墓には異論はないが，１号石蓋土壙墓は後期中頃で７号甕棺墓は後期前半という差があり，他のグループは並列

しているのに，このグループは主軸方向が直行していることもあり，親近性にとぼしい。甕棺を紛失したのが残念である。時期区分を整理してみると，Ⅰ期は8号甕棺墓・15号土壙墓・7号甕棺墓，Ⅱ期は1号石蓋土壙墓・13号・14号土壙墓ということになるが，7号甕棺墓はこの中間的時期にあるとしておきたい。

墓地の構成　B群墓地の構成は甕棺墓2基・土壙墓4基・石蓋土壙墓1基からなる。しかし，12号土壙墓としているものは，他の土壙墓と形態が異なり，離反していることからみても別にすべきである。さらに，石蓋土壙墓も基本的には土壙墓であるから，B群の埋葬様式の基本的構成は甕棺墓2基と土壙墓4基からなるものである。成人・小児の別で構成を見ると，甕棺墓2基と土壙墓（14号）1基が小児で，土壙墓（13号・15号）2基と石蓋土壙墓1基が成人埋葬であるから3対3の同率となる。小児用3基のうち2基が，日用品と思われる中型の甕と壺を利用しているところは中期の甕棺葬と変りはないが，成人埋葬が土壙墓である点で，後期の特色である。後期前半から中頃の時期で，しかも副葬品として玉類を持っているのに成人用の甕棺が使用されていないところに埋葬様式変革期の重要な遺跡といえるようだ。8号甕棺墓が後期前半，7号甕棺墓が後期前半，1号石蓋土壙墓が後期中頃という大別して2期の区分を行なったが前述したように連続して営まれた墓地で，親近性のある短期間の墓地であるから時期区分を大きくとらえる必要はないかもしれない。

土壙墓の形態　12号以外の土壙墓には同一形態で，足方向の小口部に床・壁ともに掘り込みがあるのものである。同形式の土壙墓は，福岡市金隈（註1）・同宝満尾（註2）・春日市伯玄社（註3）・同一の谷（註4）・筑紫郡太宰府町大字高雄字江牟田（註5）・佐賀県二塚山（註6）などで発見されている。保存状態のよかった金隈・宝満尾・江牟田・二塚山から辻田B群の土壙墓の原状を復原してみると，1号石蓋土壙墓のように墓壙があって棺が あるという，いわゆる2段式の掘方のある形式であることは明らかである。江牟田の土壙墓群は大半がこの形式で，とくに保存がよく現状をとどめていて，墓壙が検出される上層で墓標といえる礫の集積が確認され，1段目の墓壙の深さも全て50㎝以上であった。この点宝満尾は標石はあるが，墓壙の深さは30㎝前後である。金隈は標石はないが墓壙の深さが50㎝で保存のよかったものの一つであろう。このことから，B群土壙墓も7号甕棺墓の削平度合からみて深さ50㎝前後の墓壙があったものとみてよい。

木蓋の有無については金隈・宝満尾・二塚山などの残りのよい粘土密封の痕跡から，辻田B群15号土壙墓の木蓋密封粘土に通じるところがあり，石蓋以外のものには木蓋があったと見てよいであろう。

埋葬姿勢は，1号石蓋土壙墓のところで足部を屈曲した屈葬であると述べたが，金隈3号土壙で成人人骨の膝の部分が曲げられた状態で検出され，仰臥屈葬用の土壙墓であることが確められている。仰臥屈葬は中期甕棺で普遍的であったが，甕棺葬の衰退とともに土壙墓に継承さ

れたのであろう。

この形式の土壙墓の時期は，金隈Ｄ３が前期（板付Ⅱ式土器片出土），宝満尾が複線波文縁連弧文昭明鏡などの副葬品から後期前半，伯玄社６号が副葬品の鉄鏃と甕棺墓との関係から中期中頃以後などの諸例がある。したがって，これからは前期後半から後期まで存続することになるが，金隈Ｄ３の例は再検討を要する。金隈の報告では，土壙墓は甕棺との切り合い関係のたどれるものは全て土壙墓が古いということが根底にあり，Ｄ３においては切り合いはないが，板付Ⅱ式土器片が蓋密封の粘土近くで発見されたことで前者土壙墓と同時期として処理されている。しかし，金隈Ⅴ式とされる後期前半の甕棺墓もあり，Ⅴ式（K139）より新しい箱式石棺墓もあるので，Ｄ３は後期初頭前後に位置ずけても不都合はないと思われる。伯玄社６号は中期中葉の甕棺墓の墓壙を切って埋葬され，副葬品の鉄鏃から見ても後期前半といえるもので，辻田Ｂ群のような土壙墓形式は後期前半から中頃の限られた時期に一定地域で行なわれた可能性が強い。時期的に見ても，中期から後期初頭の甕棺葬の仰臥屈葬が継承され，伸展葬に移行していく過程の土壙墓形式といえる。

石蓋土壙墓　石蓋土壙墓の時期については，福岡市小笹遺跡の報告（註７）で指摘されているように，中期以前に属するとされるものは根拠に乏しく，終末から古墳時代初頭に位置ずけられるものが多いといえる。しかし，小笹・宝満尾など後期前半に推定される石蓋土壙があるが，古いもので辻田Ｂ群１号石蓋土壙墓のように直接関係のある土器が発見されたものはない。小笹は供献祭祀用とされる後期前半の土器群からは離れているし，宝満尾は共存の土壙墓の年代からの推定である。１号石蓋土壙墓の下部構造が，後期前半のそれを踏襲している点からして，土器形式の確実な最も古式の石蓋土壙墓といえる。すなわち，後期前半ごろに出現した木蓋足部掘込形式土壙墓に，石蓋足部掘込土壙墓も加わり，箱式石棺が採用される後期中頃には伸展葬となり，足部掘込形式は短期間で消滅していくのではなかろうか。

副葬品　北部九州弥生時代各形式の埋葬法において，石蓋土壙墓も含めた土壙墓がしめる位置をさぐるため，土壙墓を中心に副葬品との関係についての検討をしてみたい。

弥生前期から中期前半の土壙墓（木棺墓も含む）では，小型壺形土器の副葬や石剣・石鏃の伴出がある。石剣片や石鏃の場合は，棺外で大きな破片であれば問題ないが，棺内で切先の小破片であれば，嘉穂郡スダレ遺跡３号甕棺人骨で第２胸椎に磨製石剣切先嵌入の例（註８）があるように副葬品でない可能性が強い。また石鏃にいたっては，伯玄社24号土壙のように長大な磨製石鏃が６本（註９）も発見されれば，副葬品とせざるをえないが，新しい発見例では鞍手郡高木２号土壙墓のような石剣片や石鏃（註10）であれば，副葬品との区別は困難である。

弥生前期の装身具として副葬されるのは，朝鮮製と思われる大形の白色系または淡緑色の碧玉管玉がある。弥生期から古墳時代初頭では，一般に細い碧玉製管玉が知られているが，弥生前期の古いころには石ケ崎支石墓のように最大のもので長さ4.2㎝，径1.3㎝の太い管玉がある

（註11）。筑紫野市剣塚４号土壙墓でもこの太い碧玉製管玉７個が発見されている（註12）。さらに，装身具といえる銅釧が福岡市西区大字片江カルメル修道院内遺跡の土壙墓から３個発見されている（註13）。この土壙墓は，金海式甕棺墓より古い小児用と思われる小形のもので，金属製釧としては最も古い例であろう。釧は小形の楕円形で，銅よりも錫の含有量が多いと思われる白色化した脆いものである。

高木土壙墓群は，中期初頭から中期後半で，土壙墓ではこの時期になって初めて水晶とガラス玉の副葬が確認されている。高木７号土壙墓は壮大な墓壙を持つ成人用で，水晶大形棗玉２・碧玉管玉11・ガラス小玉８が副葬されていた。水晶大形棗玉・ガラス小玉は，古い例として驚かされたが，ガラス小玉の７個はガラス小破片に穿孔しただけのもので，一般にいう小玉と違っているが，1個だけは明らかに高度な製作技術を思わせるものがある。これは径6.8㎜，厚さ2.4㎜，孔径4.4㎜のもので，大きな孔を中心に螺旋状に糸状ガラスを巻きつけて製作している。高木土壙墓群に副葬品があるのは，この地域は成人甕棺葬が行なわれないところであるところに問題がある。すなわち，成人甕棺葬の行なわれる福岡・糸島・唐津・佐賀・筑後・朝倉・嘉穂の各平野では，前期末から後期初頭にかけての時期の副葬品は甕棺墓に集中するからである。

このように，次に土壙墓に副葬品が現われるのは後期前半からである。副葬品のうちで最も珍重されたと思われるのは銅鏡であるが，甕棺墓以外でこの地域で副葬されるのは後期前半からである。

その代表的な遺跡が福岡市宝満尾土壙墓群（註14）である。宝満尾４号土壙墓は，広い墓壙とその上部に標石が並び，土壙は足部に掘込みのある辻田Ｂ群と同類のもので，木蓋の痕跡もある。棺内頭部付近に複線波文縁連弧文昭明鏡（径10.6㎝）１面が副葬されていた。この鏡は，平縁に鋸歯と複線波文を持つところから，楽浪古墳出土と伝える五島美術館蔵の連弧文「居摂元年」鏡と同形式で，佐賀県三津永田石蓋単棺（註15）や同二塚山76号甕棺墓など後期初頭の墳墓から発見されている素縁連弧文昭明鏡より一形式新しいものといえる。宝満尾は他にも13号石蓋土壙墓の棺外に素環頭刀子１，15号土壙墓棺内にガラス小玉540個を副葬していた。

佐賀県二塚山遺跡（註16）は，丘陵の尾根線上に営まれた前期末から弥生終末か古墳初頭におよぶ墳墓群である。尾根主軸線に沿って墓道と思われる空地を残し，その両側に甕棺墓・土壙墓・石蓋土壙墓・箱式石棺墓の各様式の埋葬が行なわれている。ここでもやはり，中期後半から後期初頭の時期で，副葬品を持つものは甕棺墓である。中期中頃では，Ⅱ—59・Ⅱ—71号甕棺墓から貝釧が出土し，中期後半ではⅠ—15号甕棺墓で連弧文清白鏡１面，後期初頭でⅡ—46号甕棺墓から韓国漁隠洞と同笵の小形仿製鏡１・鉄矛１，後期前半でⅡ—76号甕棺墓から連弧文昭明鏡１面が出土している。その他の副葬品を持つものは土壙墓で，後期前半以後の時期

と思われる。 Ⅱ—29号石蓋土壙墓（半石棺足部掘込） は棺外に破砕された複線波文縁獣帯鏡（後期前半），Ⅰ—22号土壙墓（足部掘込）からガラス小玉3,445個以上 （後期前半），Ⅰ—17号土壙墓から小形仿製鏡（後期後半），Ⅰ—26号土壙墓から長宜子孫連弧文鏡１・ガラス細形管玉221個以上（後期末～古墳時代初頭），Ⅰ—19号土壙墓から鉄剣１， Ⅱ—36号・Ⅱ—52号土壙墓からそれぞれ素環頭大刀１などが出土している。このように各時期にわたる一つの墓地が完全に発掘され，埋葬形式の変遷を多数の重要な副葬品によってたどれる遺跡はかつてなかった。

土壙墓や石棺墓は，これから土器が発見されないかぎり，鉄器や玉類などの副葬品のみでは時期を決定するのは困難である。すなわち，後期中葉から後期後半にかけての時期と思われる副葬品をもったものは少なく，小形仿製鏡が発見されれば弥生時代の範疇にあると判断されるぐらいである。

小形仿製鏡は，後期初頭以後に中国鏡輸入不足を補うものとして出現するが，二塚山遺跡では後期初頭の甕棺で，その他は後期後半で住居跡や箱式石棺墓で発見されることが多く，土壙墓では稀である。 その例は，京都郡犀川町山鹿字石ケ坪で，石蓋土壙墓から連弧文鏡（註17）行橋市前田山遺跡の６号石蓋土壙墓から連弧文鏡（註18）， 鞍手郡汐井掛の土壙墓棺外から連弧文鏡（註19），八女市亀の甲の木棺墓から連弧文鏡（註20）などがある。

後漢鏡は，後期前半頃から甕棺墓に副葬されるが，土壙墓では現在発見されていない。しいて例をあげれば， 福岡市曰佐原Ｅ—15号石蓋土壙墓ぐらいである。 Ｅ—15号石蓋土壙墓からは， 「長宜子孫」 連弧文鏡１・硬玉勾玉２・水晶棗玉８・水晶算盤玉形玉11・水晶小形丸玉２・碧玉管玉14が発見された（註21）。 曰佐原遺跡は，Ａ～Ｆの６群に分かれる箱式石棺と石蓋土壙を主体とする墳墓群であるが， Ａ群に１基だけ曰佐原式（註22）と呼ばれる甕棺墓がある。曰佐原式とは，土器の図面のないまぼろしの形式名であるが，終末期の甕棺形式と思われる。 Ｅ—15号はこの甕棺墓から120m以上離れた別群であるから，時期決定資料とはならず，参考資料程度である。副葬品の「長宜子孫」連弧文鏡は，弥生終末か古墳初頭に副葬されるといわれているものであるが，完全に弥生時代のものだという確かな根拠はない。弥生時代のものとして可能性の強いものとして宮原遺跡箱式石棺出土例がある。１基の石棺墓から同形式鏡２面， 他の１基から小形仿製鏡と不明大形鏡各１面が出土したという。 同一石棺墓群に小形仿製鏡を持ったものがあることは確実でも，小形仿製鏡に伴なった失われた大形鏡が「長宜子孫」連弧文鏡とはかぎらない。

曰佐原Ｅ—15号を他の副葬品からみると，水晶製玉類が問題となる。水晶製玉は，さきに述べた高木遺跡の例で明らかなように，中期にはすでに出現しているが，小形棗玉はどうであろうか。 小形棗玉は，門田遺跡辻田地区18号住居跡から１個（註23）， 汐井掛115号土壙墓から異形勾玉１と碧玉管玉９とともに10個出土している（註24）。 辻田例は弥生終末とされている

が，汐井掛例は本報告がないので時期を明らかにされていないが，異形勾玉の同形のものは銚子塚古墳例（註25），のように４世紀末頃に発見例があるのみである。したがって，「長宜子孫」連弧文鏡は，弥生終末頃に副葬される可能性はあるが，現在のところ弥生時代に決定できるものはなく，鏡片であればなおさら困難であろう。副葬品のある土壙墓としては最後になったが，須玖・岡本Ⅲ号土壙墓（註26）をあげておく。これは甕棺墓との切合いから中期後半以後とされる長さ1.6mの長楕円形の船底形をした粘土槨状の土壙墓である。副葬品として鉄小刀１・銅釧３・ガラス勾玉１が発見されている。

以上，少しまわりくどく長文になったが，土壙墓を中心に副葬品を持つ墳墓例を時期をおってあげてみたので，最後にこれらを整理してみると次のようになる。

①前期において，前期末の成人甕棺葬が行なわれるまでは，埋葬法の主流は土壙墓であり，副葬品も土壙墓から発見される（註27）。

②前期末から後期初頭の期間は，中期初頭まであった土壙墓（木棺）も姿を消し，福岡・糸島・唐津・佐賀・筑後・朝倉・嘉穂・熊本の各平野で甕棺葬一ぺんとうになり，大量の副葬品を持つものが現われる。

③後期前半になると甕棺墓が急激に減少すると同時に，土壙墓が再現し，副葬品も土壙墓に見られる。

④後期中頃以後は，箱式石棺墓が主流をしめ，副葬品も土壙墓から発見されるのは少ない。

ガラス玉類の観察　ガラス小玉については先に形態からＡ～Ｅの５類，大小の大きさと使用関係から３類，色から４種にそれぞれ分類を試みたが，この項ではＡ～Ｅの５類の分類に多少関係のある製作法的観察を少し行なってみる。

15号土壙墓出土のガラス管玉３個は，完形品１個と半折品２個で観察には適している。半折品の１個は亀列が多く，その亀列の生じたところの製作法を考える以外は観察に適当でないが，もう１個は風化あるいは気泡のために「す」が表面に多数肉眼で観察される。この「す」は連続して孔に平行に走り，部分的に螺旋状にくねるところがある。管玉は肉が厚く，不透明であるため内部の気泡の状態が観察できなかったので明らかでないが，完形の管玉も孔に平行方向の「縞」が見えるところから，孔の大きさが均等であることと合わせて製作法は限定されてくるのではなかろうか。孔の大きさが均等であることから，最後に穿孔するのでなく，孔になる心棒が最初から用意されていることを意味するわけで，気泡の流れともいえる連続性のある気泡から，心棒を中心にして鋳型状の雌型を用意して熔解したガラスを流しこむか，心棒に螺旋状に巻きつけるという方法が考えられる。丸玉には明らかに巻きつけたものがあることから，巻きつけ法が最も可能性の高い手法かと思われる。外形が中ぶくらみのあるエンタシス状をするのも，製作法に起因するところが大であるからであろう。しかし，縦に「縞」があるところから鋳型法もすてがたい。仕上げの研摩は，孔に棒を通したまま回転させたらしく，孔と

直行する方向に研摩痕といえる微細な条線が残っている。このガラス管玉は，緑色の強いグリーンブルーの鉛ガラスである。

ガラス小玉は，製作法あるいは技術差において多少の差が見られる。小玉は形態・大小・色別に関係なく，小林行雄氏によるところの吹きガラス技法（註28），あるいは，由水常雄氏の引延法（註29）によるもので，その後の処理法によって形態分類（A～E）に違いができるものがある。このことはB群墓地の小玉の全てが孔に平行に連続する気泡が観察されることで，孔に平行方向に引き延ばして作られたことを証明している。気泡の観察は，顕微鏡（20倍・30倍）で行なったが，この観察で小玉によって気泡のあり方に2種あるのに気付いた。不透明のイエローグリーンは別として，コバルトブルーとその他のものについて，気泡の大きさと連続性に大きな差がある。コバルトブルーの小玉は，気泡が微小で連続するが，他は気泡が割合い大きく，あまり連続しない。このことはコバルトブルーの小玉の方がより速い速度で引延されたことを示し，さらに他よりも表面に艶もある。さらにコバルトブルー小玉の場合は切離法にも差があるようで，他に比較して不整形のものが少なく，全体に丸味がある。

切離手法については不明であるが，コバルトブルーの小玉は気泡が両側の丸味に沿ってカーブするところもあるところから，ナイフ状の刃物で一方から輪切にするのではなく，二方向以上から鋏切るような手法が想定される。

切離し後の処理については，由水常雄氏は丸玉の場合砂袋に入れて研摩する手法が図示されている（註30）が，この小玉の場合興味深い例がある。これは13号土壙墓出土のスカイブルーの小玉で，完全に2個ゆ着したものが混入していることである。このような例は宝満尾15号土壙墓出土のコバルトブルー小玉にもあり，この場合は2個重なっている（註31）。この両者共に，すでに角がとれて丸味があるところから，切離後再加熱したためにゆ着したことが明らかである。この再加熱こそ小玉に丸味をつける手段ではなかろうか。しかし，形態分類Eの小玉を見ると，輪切のまま角をとらず，切口を平垣に研摩する手法があることもわかる。

ガラスの着色については，分析不足で次回に譲るが，小玉で4種に分類され，管玉の青色の強いブルーグリーンを加えると5種になる。スカイブルー・グリーンブルー・ブルーグリーンは，大差がないのでスカイブルーとして統一してもよいかもしれないが，これも資料の増加を待ち分析しなければならないだろう。弥生時代にコバルトブルーガラス玉が存在することは，資料の増加で問題なくなってきたが，イエローグリーンのような緑系統の色ガラスが弥生後期前半に位置ずけられた意義は大きい。報告されたもので宝満尾15号土壙墓出土のガラス小玉に，グリーンとされる5個が含まれているが，これは当方でいうグリーンブルーでスカイブルー系のものである。実見する機会をえなかったが，対馬塔ノ首3号石棺墓出土の大量のガラス小玉（註32）も色調で4種（紺・青・青緑・淡緑）に分類されているので辻田B群墳墓出土品と同様と思われ，淡緑色とされているものが，当方のイエローグリーンであろう。塔ノ首3号は石棺

墓で土器や青銅器など大量の副葬品があるが，後期前半であるところに共通性がある。（柳田）

註1　福岡市教育委員会「金隈遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』7・17　1970・1971
2　山崎純男「宝満尾遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』26　1974
3　福岡県教育委員会「福岡県伯玄社遺跡調査概報」『福岡県文化財調査報告書』36　1968
4　宮小路賀宏他「一の谷遺跡」『春日町文化財調査報告書』2　1969
5　昭和43年の宅地造成にともなう増田精一氏をはじめとする東京教育大学の発掘調査で保存のよい弥生墓地群が検出された。未報告である。
6　佐賀県教育委員会「二塚山遺跡群」『佐賀県東部中核工業団地発掘調査展示会資料』1977
7　福岡市教育委員会「小笹遺跡発掘調査報告書」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』25　1973
8　橋口達也「スダレ遺跡」『穂波町文化財調査報告書』1　1976
9　註3に同じ
10　副島邦弘他「福岡県鞍手郡鞍手町所在高木遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XIII　1977
11　原田大六「福岡県石ケ崎の支石墓を含む原始墓地」『考古学雑誌』38—4　1952
12　中間研志他　「福岡県筑紫野市所在剣塚遺跡群の調査」　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIV—下巻　1978
13　福岡市教育委員会文化課山崎純男氏の御教示による。
14　註2に同じ
15　七田忠志「東背振村三津の石蓋甕棺と内行花文明光鏡」『佐賀県文化財調査報告書』2　1953
金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961
16　註6に同じ。石隈喜佐雄・七田忠昭「佐賀県二塚山遺跡の調査」『考古学ジャーナル』138　1977　ただし，各墳墓の時期決定は当方の判断による。
17　小田富士雄「豊前京都郡発見の三重墓」『古代学研究』20　1959
18　前田山遺跡調査会編「前田山遺跡」『福岡県行橋市前田山遺跡の調査概報(1)』　1977
19　福岡県教育委員会調査，池辺元明技師教示
20　高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』58—3　1972
21　鏡山猛「環溝住居址小論四」『九州考古学論考』　1972
22　森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』　1968
23　井上裕弘・木下修・小池史哲他『山陽新幹線埋蔵文化財調査報告』7　1978
24　福岡県教育委員会「くらてのむかし」　3　『九州縦貫自動車道関係若宮町所在遺跡の調査報告会資料』　1976
25　小林行雄「福岡県糸島郡一貴山村田中桃子塚古墳の研究」日本考古学協会古墳調査特別委員会　1952
26　福岡県教育委員会「福岡県須玖・岡本遺跡調査概報」『福岡県文化財調査報告書』29　1963
27　前期には支石墓があり，中期前半以後形骸化するが，ここでは外部施設として扱い，下部構造を取上げる。
28　小林行雄「弥生・古墳時代のガラス工芸」『MUSEUM』323　1978・3
29　由水常雄「東洋古代ガラスの技法」『MUSEUM』323　1978・3
30　註28に同じ
31　山崎純男氏の報告書には記載がないが，福岡市歴史資料館所蔵の実物を実見した。
32　九州大学考古学研究室編「対馬—浅茅湾とその周辺の考古学調査—」『長崎県文化財調査報告書』17　1974

Ⅳ　古墳時代の墓地

(1) 古墳の配列（第58図）

春日市上白水の平坦な丘陵には，いくつかの小さな谷が食い込み，いくつかの舌状台地を形成している。このうち西側に突出する２つの舌状台地に，古墳群が発見された。この古墳群は総括して門田遺跡内に含まれるが，それぞれ所在地の字名を付けて北台地のものを辻田古墳群（４基），南台地を門田古墳群（２基）として区別した。

辻田古墳群は，後世完全に削平され昭和47年の予備調査までその存在さえ知られていなかった。予備調査では，舌状台地の中心部が調査できなかったため，完全に破壊された１・２号墳を発見したにすぎなかった。当台地の最終調査になった昭和50年度の本調査で，さらに３号墳と４号の小石室を発見し，台地舌状部に４基の古墳が確認されたわけである。この台地上には中世遺構が存在するところから，古墳群は中世に完全に削平されたものと思われる。

舌状台地中心部の最優良地を占めるのは３号墳である。次に台地の平坦面で中心部に近い立地を占めるのは，３号墳の南側にある２号墳で，３番目が３号墳の西側で台地平坦面西端を占める１号墳の順となる。この占地の配列は，古墳の築造年代順ともいえる。

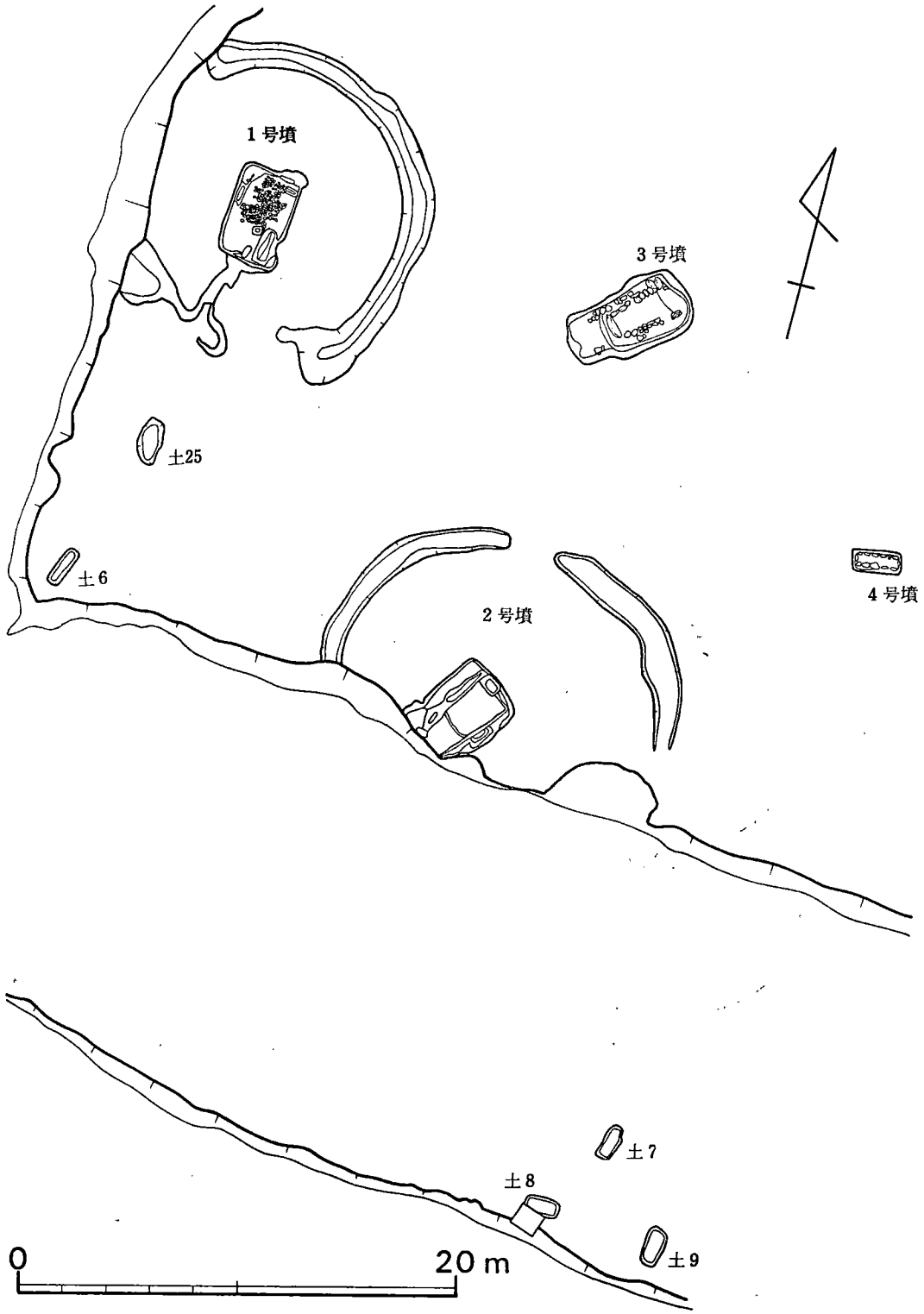
(2) 辻田１号墳

a．遺　構

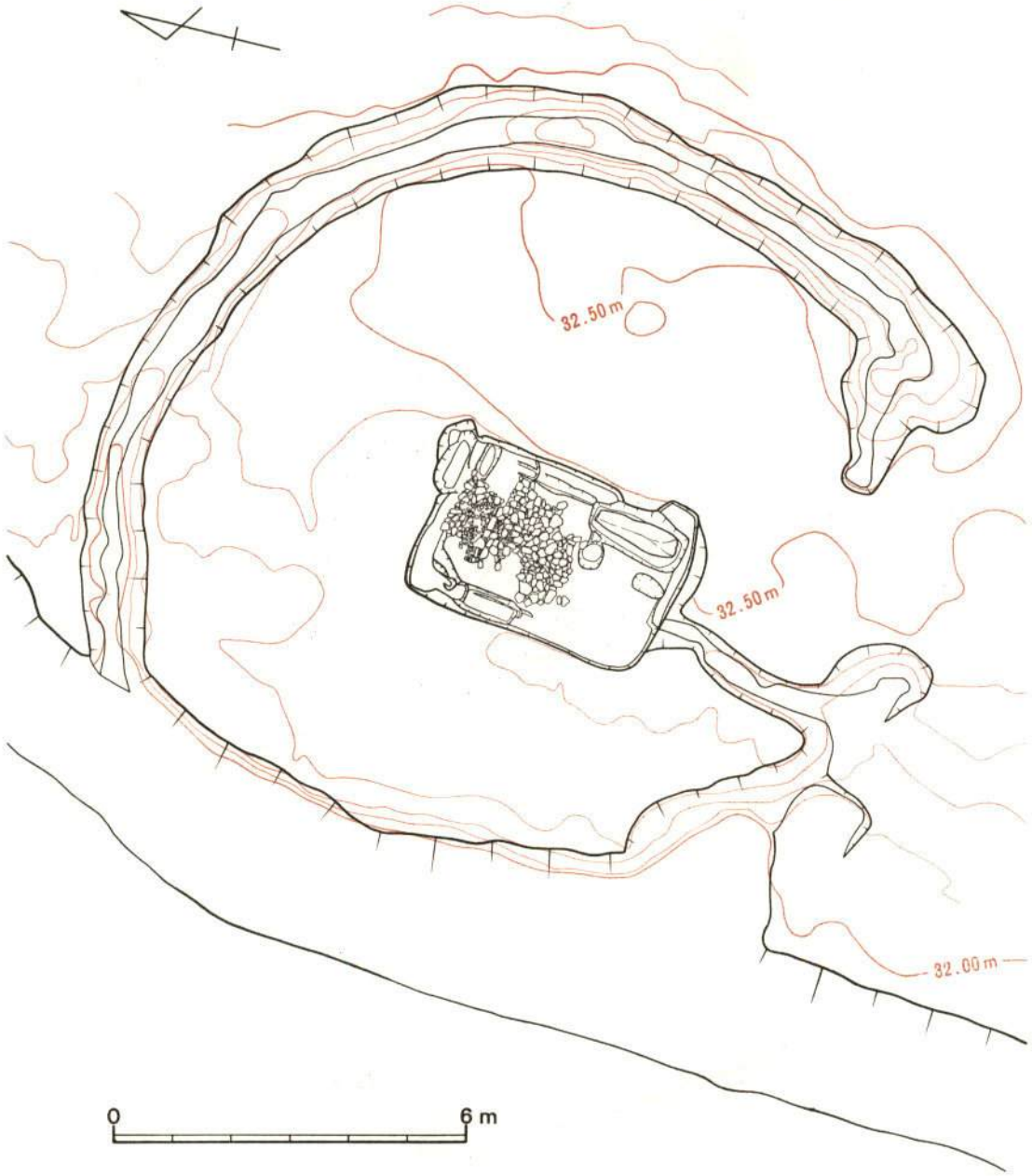
立　地　辻田の舌状台地は南西方向に主軸をとるが，１号墳は台地平坦部西端に位置する。

墳丘と周溝　完全に削平され，石室の石材さえ失なっているので墳丘の立体的な規模は不明であるが，周溝が検出されたので平面的な規模で墳丘を推測するしかない。周溝は，西側を完全に失ない上幅40cmから70cm，深さ20cmから30cmで残っているにすぎない。この周溝の内側下のりを基準に墳丘平面規模を測定してみると，南北径12.8m，東西径約13.6mの円墳となる。現状で周溝は完全に続かず，墓道東側で一部切れるところがある。

石　室（図版62，第60図）　石室は，腰石１個と床面敷石を残すだけで，石室プランの復原が困難なほど完全に破壊されている。石室掘方も浅く，かろうじて長方形プランを保っている。羨道あるいは前室全体を含めた石室掘方は，石室主軸4.4m，最大幅3.0m，最小幅2.7mの大きさである。掘方平面形は，東側で玄門部分と羨道部分では段がついて羨道部分が狭く



第 58 図　古墳・土壙墓群配置図（1/200）



第 59 図　1 号墳地山整形実測図（1/120）

なるので，西側も復原すると羨道部掘方幅は2.4mとなる。したがって，玄室掘方長は3.2mで，羨道部長1.2mとなる。

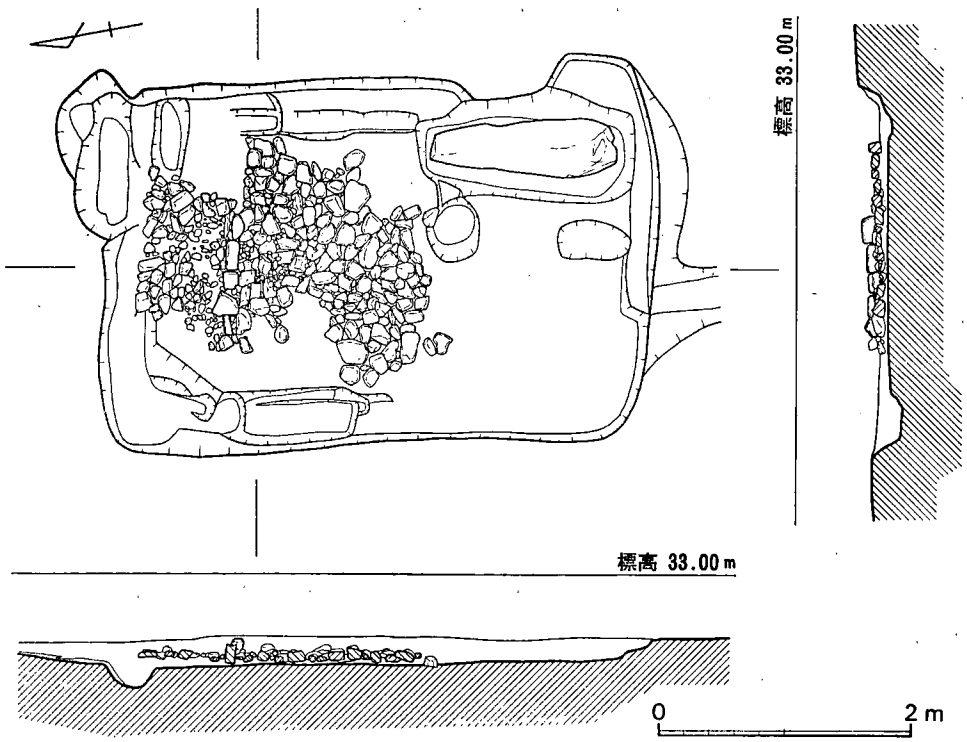
石室掘方と石材抜跡から石室形式は，腰石を使用し，主軸をS—10°—Wに向けた横穴式石室であり，羨道部東側に残る腰石が大きいことから，複室の可能性が強い。

玄室の石組は，奥壁が2個，両側壁が2～3個の腰石を使用し，玄門があったことが石材抜跡から明らかである。この腰石抜跡から，玄室内法は長さ2.2m，奥壁幅2.1m，前方幅2.0mの大きさとなるが，玄門幅は不明である。

羨道の規模は，西側の抜跡がないために不明であり，東壁の腰石が大きいため前室の可能性が強く，現状で幅を復原してみると約1.3mとなる。羨道とした場合は，長さ約1.2mであるから長さより幅の方が広くなり前室とした方が適当であろう。

前室とすれば，羨門が存在する可能性はあるが羨道の石組はほとんどなくて素掘の墓道に続くものと思われる。

素掘墓道は，石室掘方から長さ3.2mで広くなるので周溝に続くものと思われる。幅48cmから88cmで，深さも浅くかろうじて残っていたといえる。



第 60 図　1号墳石室実測図（1/60）

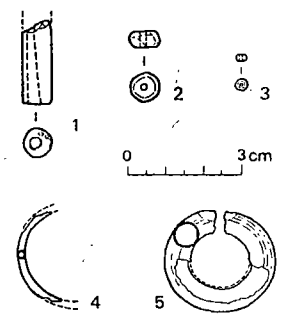
玄室内には，完全に破壊された古墳としては敷石の残りがよかった。敷石は，径10～20cmの平扁な川原石を利用して敷詰め，その上に玉砂利を敷いていたらしい。敷石の中には奥壁に平行に長方形状の石を腰石風に立て１列に並べたものがあり，これは玄室床面を棺床として区分する仕切石であろう。玉砂利は，仕切石を中心に分布し，玄室前方には見られないことから仕切石と奥壁間のみに敷かれていた可能性が強い。仕切石で区分された棺床の内法は 長さ2.1m（奥壁幅），幅0.7mである。

b．出土遺物

出土状態　遺物は玄室内と周溝内から発見された。玄室敷石は割合残りがよかったが，副葬品は完全に近く盗掘されていた。古墳の破壊が中世と思われるので，敷石は石室内で土砂の流入もなく完全に露出していたと思われる。玄室の敷石間と撹乱土中から，耳環片・管玉・丸玉・小玉の各１個と刀子片３個が発見されたにすぎない。

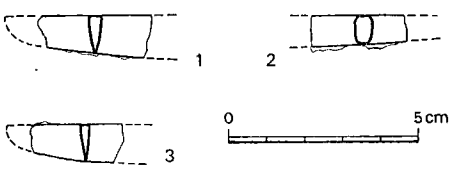
周溝内では，素掘墓道の西側である南西部と南東部から須恵器・土師器・耳環１が散乱して発見された。

玉　類（図版73，第61図１～３）　１の管玉は濃緑色の碧玉製で一方が割れている。現長2.2cm，径0.79～0.81cm，孔径2.65mmの大きさである。この丸玉は，コバルトブルーのガラス製で，径7.6～8.0mm，厚さ4.3～4.6mm，孔製1.7mmの大きさである。３のガラス小玉は，コバルトブルーで，径3.3mm，厚さ2.15mm，孔径0.9mmの大きさ。ガラス玉は両方共に引延法で作られ孔のある切断面を平坦に研磨している。



第 61 図　１号墳出土装身具実測図（1/2）

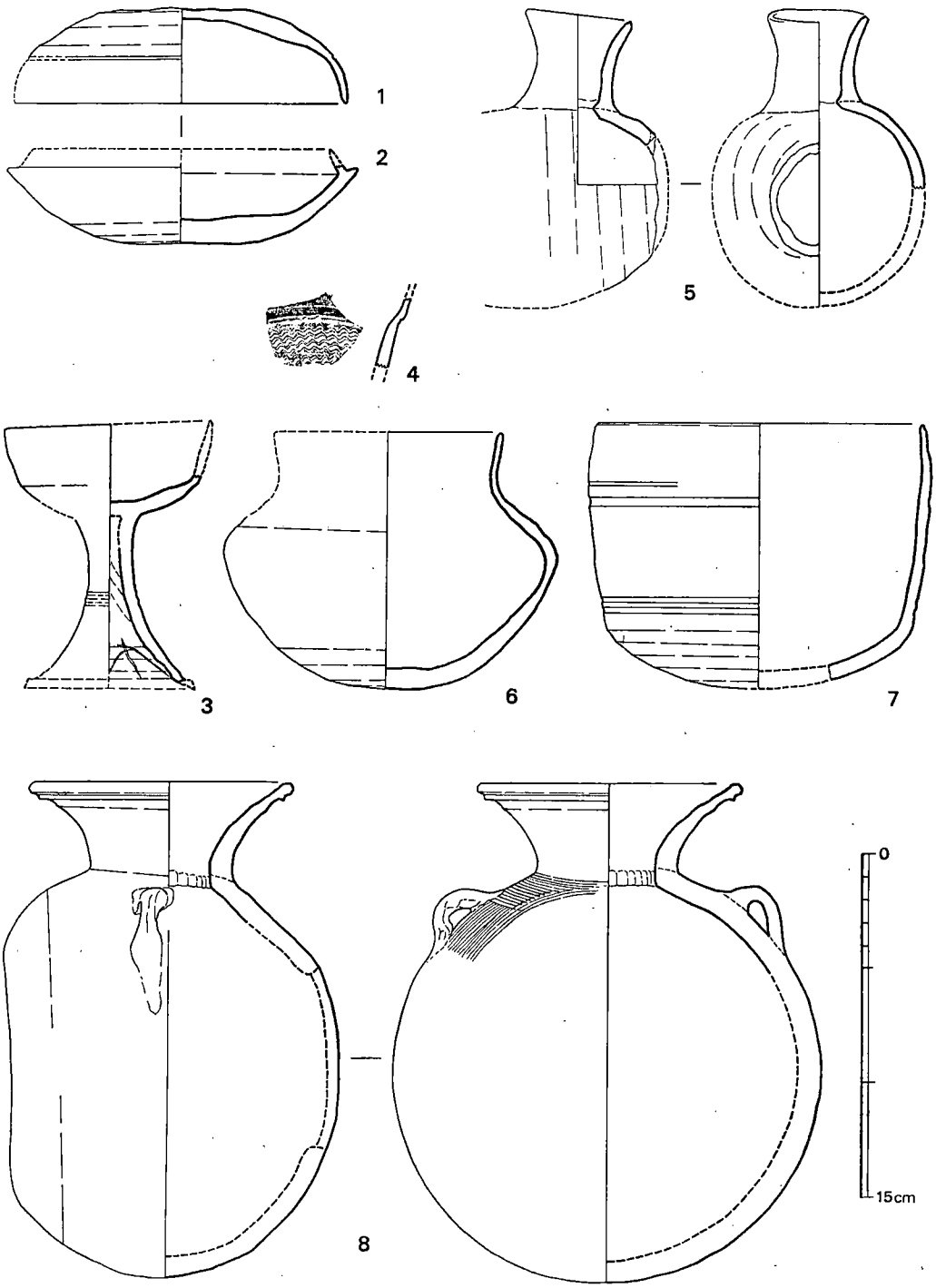
耳　環（図版73，第61図４・５）　４は玄室内で発見されたもので，銅地のみの破片である。復原外径約３cmの大きさであろう。５は南西側周溝で発見された。縦外径27.05mm，横外径29.1mm，厚さ6.75mm，現重量12.9gの大きさ。銅地金貼であるが金箔は白味がある。



第 62 図　１号墳石室内出土刀子実測図（1/2）

鉄刀子（第62図）　３点とも破片で，１・３は身，２は茎であろう。１は最大身幅1.2cm，３は1.1cm，２は0.8cmである。

須恵器（図版73，第63図）　１と２は杯のセットで，蓋（１）と身（２）である。共に南西側周溝内で発見された。１は口径14.5cm，器高4.1cmの大きさで，外面天井にはヘラ切りの痕が残り，その側面はヘラケズリされている。内面天井には同心円タタキがある。その他の面は



第 63 図　1号墳出土須恵器実測図（1/3）

ヨコナデ調整されている。2は径15.3cm，現器高3.4cmの大きさ。外面底部付近はヘラケズリ，内面底部は同心円タタキ，その他はヨコナデ調整である。1・2共に胎土に砂粒を含まず，灰褐色のやわらかい焼成である。

3は南西側周溝内から発見された小型高杯。現器高11.1cm，口径約9cm，杯高4cm，脚最小径1.9cmの大きさである。杯底部付近はヘラケズリの後にヨコナデ，脚外面はしぼりの後に回転ヨコナデし凹線二本をめぐらす。杯内面はヨコナデ調整である。脚部内面にヘラ記号がある。胎土には砂粒をあまり含まず，灰黒色の良好な焼成である。

4は南西側周溝内で出土した甕の頸部破片。小片が2個発見されたのみ。

5は小形横瓶の破片。胴部は縦に作られヘラケズリされており，一方を閉塞した接合面が残っている。胴の側面を開口して口頸部を付設しているが，頸部にはねじりが残りその後ヨコナデされている。胎土に石英粒を多く含み，表面は灰黒色をしているが胎土内は赤褐色である。表面は灰黒色をしているが胎土内は赤褐色である。表面調整は全体に荒く，粗製品である。

6は広口の直口壺である。器高11cm，口径9.9cm，胴径14.4cmの大きさ。底部外面はヘラケズリ，他は回転ヨコナデ調整である。口頸部が少し長く，わずかに外反するところから蓋はないと思われる。内面底部付近に焼成時に灰をかぶっていることからも，焼成時に蓋がなかったことを証明している。胎土には大きな砂粒を含まず，表面は外面の肩部に灰をかぶり，灰色と灰黒色をしており，焼成が良好である。

7は器高11.4cm，口径14cmの椀である。胴部外面には上下各2条の凹線がめぐり，底部はヘラケズリである。上部凹線から上はカキ目調整であるが，他は回転ヨコナデ調整。胎土には砂粒を含まないが，焼成はあまく灰褐色をしている。

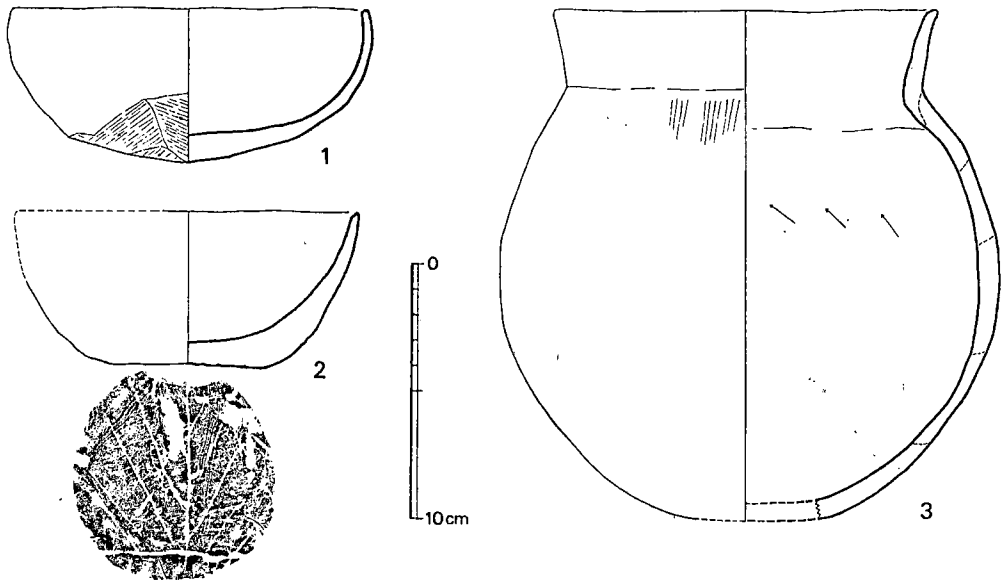
8は南西周溝内で出土した器高21.6cm，口径7.5cm，胴最大径18.3cm，胴厚14.8cmの大きさの提瓶である。大きく開く口頸部と2個の手捏の耳が特徴である。胴部は平行線タタキの後で同心円状にカキ目調整し，肩部は頸部接合後に頸部めぐる同心円状にカキ目調整をしている。耳はカキ目調整後に取付けている。胎土には砂粒（石英・長石）を多く含み，全体に総合すると灰黒褐色であるが，頸部内面と肩部は灰をかぶり灰褐色に，それに続く下部は黒色となり艶がある。さらにその下部は褐色から灰色となっている。

土師器（図版74，第64図）　土師器は全て南西側周溝内出土。1は器高6cm，口径13.9cmの丸底の椀である。底部外面は大きく荒削りされ，外面と内面底部には指痕らしき凹凸があるが，その上からナデ調整されている。胎土には砂粒（石英）を含むが，黄褐色の良好な焼成。

2は器高6cm，口径13.5cmの平底の椀である。外部底面は木葉の圧痕があり全体に内厚で，内外面の底部付近は指痕の凹凸がある。砂粒をあまり含まない黄褐色の良好な焼成。

3は器高20cm，口径15cm，胴径19.5cmの大きさの甕。全体に器面が荒れて調整が不明であるが，胴部外面には荒い刷毛目が残っている。内面は下から斜上方に雑なヘラケズリがある。胎

土には砂粒（石英）が多いらしく表面に多量に出ている。外面は黄褐色，内面は黒褐色で焼成は普通。



第 64 図　1号墳周溝出土土師器実測図（1/3）

(3) 辻田2号墳

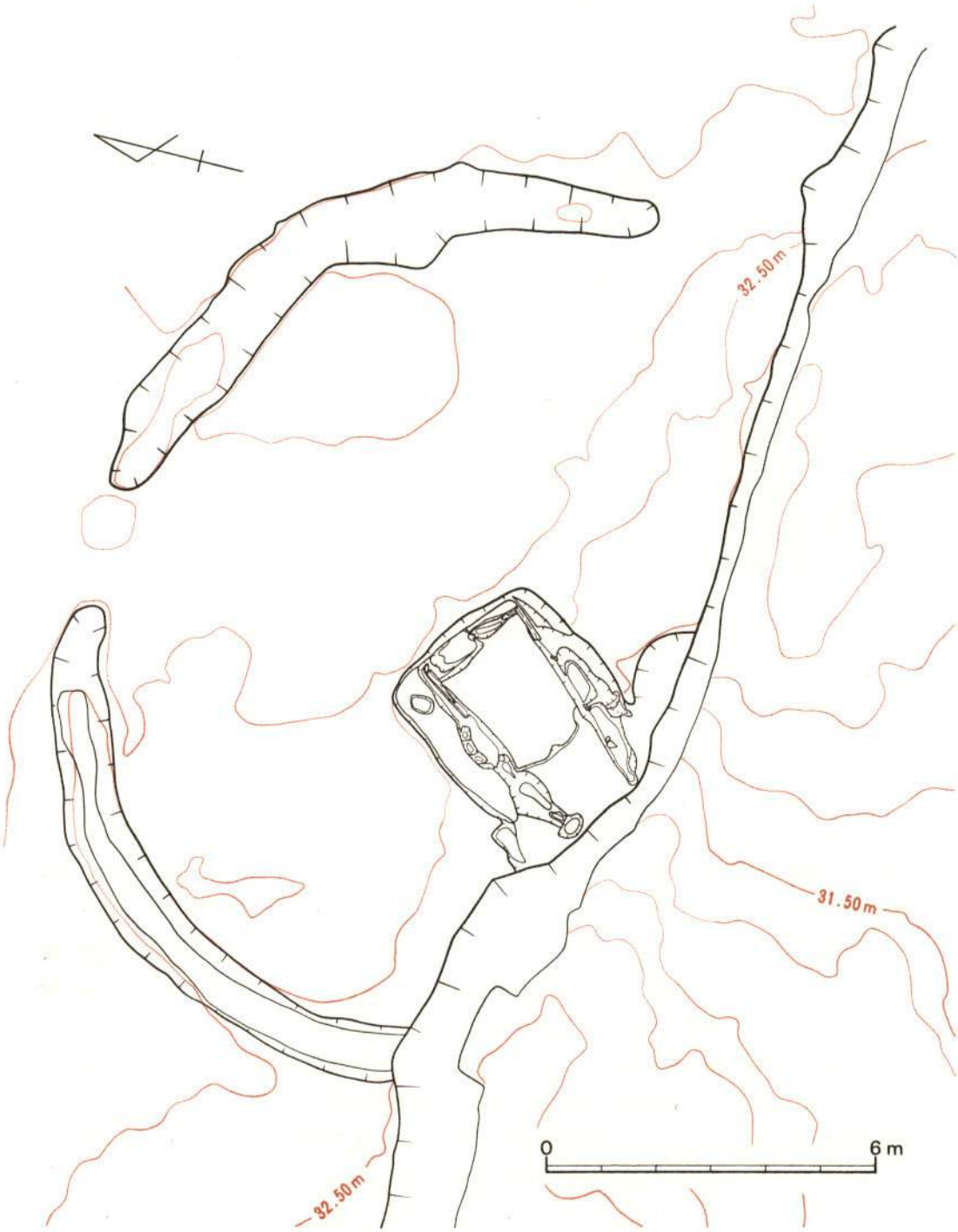
a．遺　構

立　地　2号墳は3号墳と共に，辻田舌状台地先端の平坦部で中心的位置を占地する。

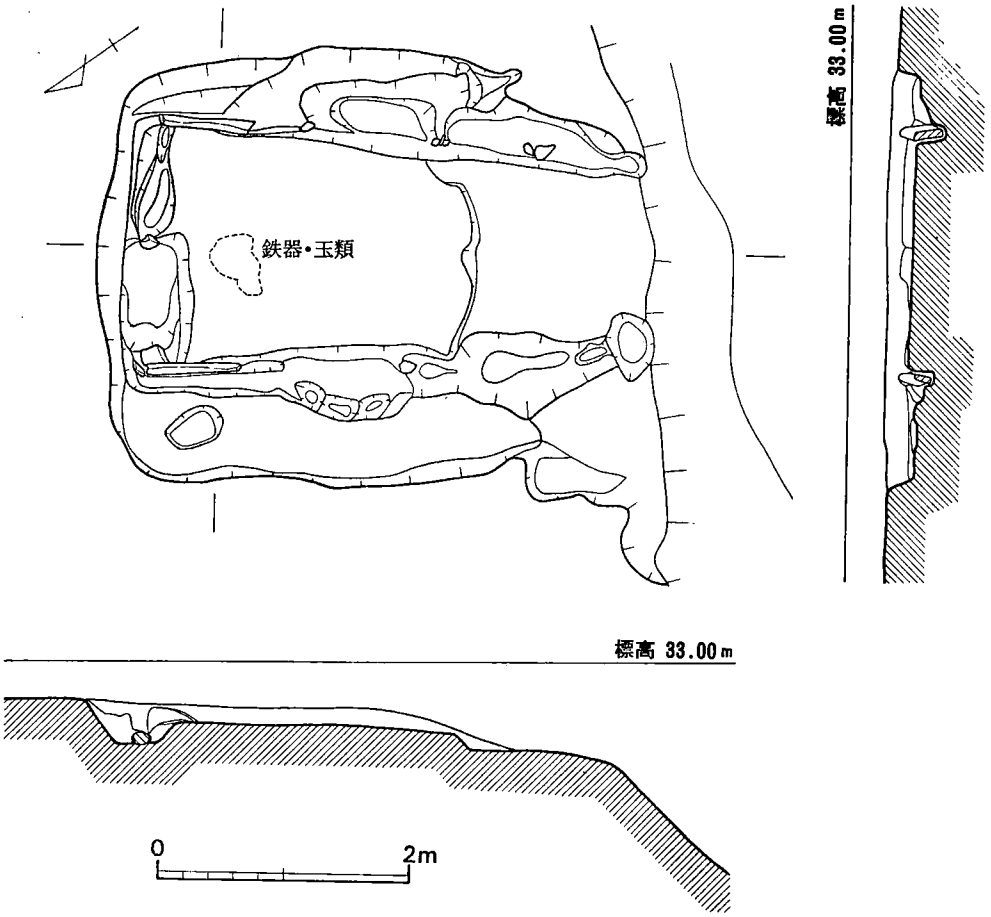
墳丘と周溝（図版65，第65図）　辻田の他の古墳と同様に墳丘を完全に失なっていた。浅く残っている周溝も南半が完全に削平され，かろうじて円墳であったろうと推測されるだけである。周溝は現状で上幅1.3mから0.9m，深さ10cmから15cmで残っているにすぎない。周溝から墳丘は，東西径15mの円墳となる。現周溝では北側で一部切れるが，これはわずかな深さの差で削平されて切れた現状となったのであろう。

石　室（図版65—下，第66図）　石室は，1号墳と同様に完全に破壊され，腰石の一部を残すだけである。しかも，石室前方部は掘方さえ完全に削平されている。

石室掘方は，現主軸長4.4m，最大幅3.3mの大きさの隅丸長方形プランである。掘方内は荒らされているが，両側壁の腰石の一部と腰石抜跡が検出できたので石室平面プランは復原できる。石室掘方と腰石の石材から石室形式は，扁平な腰石を使用し主軸をS—35.4°—Wに向けた横穴式単室であり，竪穴系横口式石室の範疇に含まれる可能性が強い。



第 65 図　2号墳地山整形実測図（1/120）



第 66 図　2号墳石室実測図（1/60）

石室の石組は，石材の抜跡から奥壁が2個，両側壁が3個の腰石を使用し，その腰石も扁平な頁岩であったことがわかる。さらに，掘方内には人頭大の花崗岩が数個散乱していたことから，扁平な腰石の上には花崗岩が小口積してあったと思われる。この形式の石室では，玄門構造が重要な要素をしめているが，玄門付近が完全に削平されているのは残念である。石室内法は，現長3.86m，奥壁幅1.85m，現前方幅1.26mとなり，奥壁幅と前方幅に約90cmの差があり，いわゆる「羽子板形」である。

石室床面には奥壁付近に鉄鏃と玉類，玄門近くに刀子が散乱していたが，敷石らしきものは確認できなかった。床面には敷石はないが，石室前方部の床面が1段下がるのはどういうことであろうか。

b．出土遺物

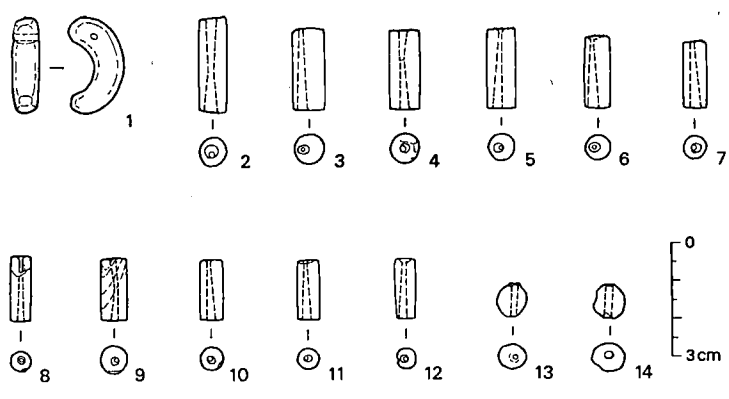
出土状態（図版66，第67図）　遺物は石室内のみから発見された。石室奥壁に接して５本の鉄鏃があり，その南側には玉類が散乱していた。なお，ガラス勾玉は奥壁腰石抜跡内から発見されたので玉類もかなり荒らされたものと思われる。刀子は石室前方部で発見された。

第 67 図　２号墳石室内鉄器・玉類出土状態実測図（1/4）

玉　類（図版75，第68・69図　表７・８）　１はガラス製勾玉で，不透明のライトブルーをしている。長さ24.8㎜，頭部幅8.4㎜，厚さ7.25㎜，重さ３ｇの大きさで，孔は長径1.8㎜の楕円形をしているが，均一の大きさで通じている。

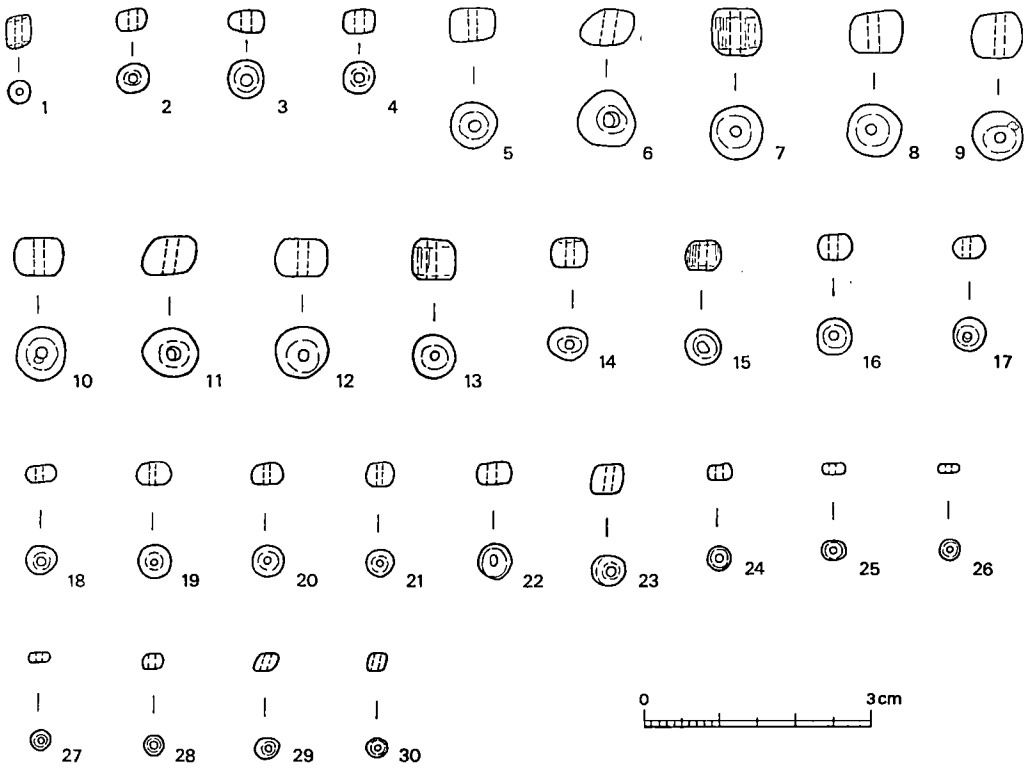
２～12は碧玉製管玉で，計測値は表７のとおりであるが，長さは24.8㎜（２）から15.8㎜（11），径8.3㎜（３）から5.45㎜（12），重さ2.8ｇ（３）から0.95ｇ（12）までの大きさがある。穿孔は両側からされるもの３個（２・４・９），一方からのもの８個である。色調は全て濃緑色であるが，中には淡緑色の縞文様のあるもの（７・９・10）が含まれる。

13・14は青銅製丸玉である。最大径は13が8.25㎜，14が8.7㎜で横断面形は楕円形をしている。孔径は13が1.6㎜，14が2.25㎜で均一の大きさである。重さは15が0.9g，14が1.1gで，他の玉類と一連に通してあったと思われるが，13の孔内にちょ麻の撚糸が残っていた。また孔の周囲に付着物があるが不明。



第 68 図　2号墳石室内出土玉類実測図（1/2）

第69図はガラス製小玉である。完形121個と破片が少量ある。大きさと色調は表８のとおりであるが，中には丸玉ともいえる径７㎜前後のものもある。色は黄・赤褐・淡青・黄緑・青緑・紺・青・濃青の各色があるが，紺色が大半である。黄・赤褐色小玉は不透明で気泡の状況な



第 69 図　2号墳石室内出土玉類実測図（1/1）

ど観察できなかったが，紺色のものは半透明で気泡が多く表面が荒れている。気泡は孔に平行に連続し，表面には白色の細線となって現われ，これは大きな玉ほど著しい。丸玉に近い大き

表 7　辻田2号墳出土管玉計測表

（単位mm）

No.	長	径	孔径(大)	穿孔	重(g)	No.	長	径	孔径(大)	穿孔	重(g)
2	24.8	7.8	3.1	両	2.55	8	17.2	5.8	2.1	片	0.9
3	21.3	8.3	2.8	片	2.8	9	16.5	7.3	1.6	両	1.65
4	20.7	8.1	2.6	両	2.6	10	16.1	6.35	2.0	片	1.3
5	21.1	7.5	2.2	片	2.25	11	15.8	6.0	2.2	片	1.05
6	19.15	6.95	2.8	片	1.65	12	15.9	5.45	1.8	片	0.95
7	17.4	6.1	2.1	片	1.2						

表 8　辻田2号墳出土小玉計測表

（単位mm）

No.	径	厚	孔径	色	No.	径	厚	孔径	色	No.	径	厚	孔径	色
1	3.6	4.4	0.9	黄	33	3.9	1.75	1.35	紺	65	3.05	1.95	1.0	紺
2	4.4	3.0	1.3	赤褐	34	3.45	1.95	0.95	〃	66	3.15	1.95	0.9	〃
3	5.1	2.95	1.8	淡青	35	3.5	2.25	0.85	〃	67	3.1	2.0	0.55	〃
4	4.5	3.15	1.5	黄緑	36	3.45	2.25	1.1	〃	68	3.15	1.7	0.8	〃
5	6.5	4.55	1.2	紺	37	3.2	2.45	0.6	〃	69	3.05	1.75	0.9	〃
6	7.5	4.45	1.9	青緑	38	3.2	2.1	1.25	〃	70	3.2	1.9	0.65	〃
7	6.95	6.2	1.3	紺	39	3.2	2.2	0.95	〃	71	3.15	1.45	0.8	〃
8	7.25	6.8	1.4	〃	40	3.5	1.95	1.3	〃	72	3.05	1.65	0.85	〃
9	6.85	5.95	1.2	〃	41	3.5	2.3	0.65	〃	73	3.1	1.55	0.75	〃
10	6.8	4.85	1.4	〃	42	3.4	2.05	1.1	〃	74	3.05	1.75	0.6	〃
11	7.3	5.15	1.6	青緑	43	3.45	1.6	1.25	〃	75	3.05	1.9	0.85	〃
12	7.0	4.8	1.2	紺	44	3.35	1.8	0.75	〃	76	3.00	1.5	0.5	〃
13	5.8	5.35	1.0	〃	45	3.65	2.1	1.0	〃	77	3.2	1.9	0.6	〃
14	5.35	3.75	1.2	濃青	46	3.4	1.95	0.95	〃	78	2.85	2.1	0.5	〃
15	4.8	3.7	1.3	紺	47	3.45	1.8	1.0	〃	79	2.95	2.3	0.85	〃
16	4.85	3.35	1.1	〃	48	3.35	1.75	0.75	〃	80	2.95	1.6	0.6	〃
17	4.45	3.2	1.0	〃	49	3.15	2.15	0.9	〃	81	2.7	2.05	0.8	〃
18	4.2	2.5	1.0	〃	50	3.35	1.85	0.9	〃	82	3.05	1.8	0.8	〃
19	4.5	3.35	0.8	〃	51	3.35	1.45	1.05	〃	83	2.9	1.9	0.7	〃
20	4.35	3.15	0.8	〃	52	3.6	2.2	0.8	〃	84	2.8	1.7	0.8	〃
21	3.9	3.6	0.6	〃	53	3.25	1.9	1.05	〃	85	2.8	1.7	1.0	〃
22	4.7	2.95	1.5	青	54	3.4	1.9	0.85	〃	86	3.0	2.45	0.65	〃
23	4.25	4.1	1.5	濃青	55	3.3	2.0	0.9	〃	87	2.8	1.75	0.95	〃
24	3.3	2.3	0.8	紺	56	3.35	2.05	0.8	〃	88	2.75	1.85	0.75	〃
25	3.2	1.65	1.0	〃	57	3.2	1.85	0.8	〃	89	2.65	2.0	0.65	〃
26	2.9	1.3	0.8	〃	58	3.3	2.3	0.75	〃	90	2.85	1.85	0.85	〃
27	2.9	1.55	0.9	〃	59	3.35	1.95	0.9	〃	91	3.1	1.7	0.95	〃
28	2.85	2.05	0.9.	〃	60	3.15	1.6	0.9	〃	92	2.8	1.75	0.75	〃
29	3.05	2.45	0.7	〃	61	3.05	1.9	0.75	〃	93	2.8	1.35	0.65	〃
30	2.7	2.25	0.7	〃	62	3.4	2.15	0.7	〃	94	2.9	1.55	0.95	〃
31	3.1	2.85	0.9	〃	63	3.15	1.8	0.85	〃	95	2.7	1.5	0.8	〃
32	3.45	2.5	0.7	〃	64	3.25	1.95	0.8	〃	96	2.75	1.6	0.95	〃

No.	径	厚	孔径	色	No.	径	厚	孔径	色	No.	径	厚	孔径	色
97	2.75	1.5	0.8	紺	106	3.05	1.7	0.65	紺	115	2.4	1.2	0.6	紺
98	2.8	1.7	0.85	〃	107	2.85	1.35	0.8	〃	116	2.6	1.55	0.75	〃
99	2.45	1.85	0.65	〃	108	2.7	1.25	0.65	〃	117	2.55	1.20	0.75	〃
100	2.45	1.75	0.65	〃	109	2.8	1.2	0.7	〃	118	2.2	2.55	0.55	〃
101	2.55	1.7	0.85	〃	110	2.5	2.25	0.75	〃	119	2.4	2.1	0.6	〃
102	2.75	1.8	0.6	〃	111	2.5	1.8	0.95	〃	120	2.55	1.1	0.65	〃
103	2.7	1.4	0.85	〃	112	2.85	1.05	0.95	〃	121	2.4	1.3	0.65	青緑
104	2.8	1.15	1.0	〃	113	2.65	1.4	0.7	〃					
105	2.5	1.8	0.6	〃	114	2.65	2.15	0.75	〃					

いものは，引延法による切断後に切断面を整えるために，孔の周辺を研磨して平坦面をつくっている。これは小さな小玉にもかなりあるようだ。この切断後の研磨は紺色の玉が最も著しい。

鉄　鏃（図版74，第70図）　石室奥壁付近床面と撹乱土から出土したものが７本ある。全て同一の平根形式のもので，長さ14.6cm（１）から12.7cm（４）の大きさである。１は茎の先に何か繊維状のものを巻いた後で矢柄に差込んだらしい。最大幅は１が3.6cm，４が３cm，厚さは２mm前後である。

鉄刀子（図版74，第70図８）　現長10.4cm，身長6.5cm，身最大幅1.7cm，茎幅約1.1cm，厚さ0.4cmの大きさ。柄は鹿角で表面の凹凸が残っていることがある。また，柄は茎を先端から差込むのではなく，上面に切込みの溝を作って嵌込んだものである。

(4) 辻田３号墳

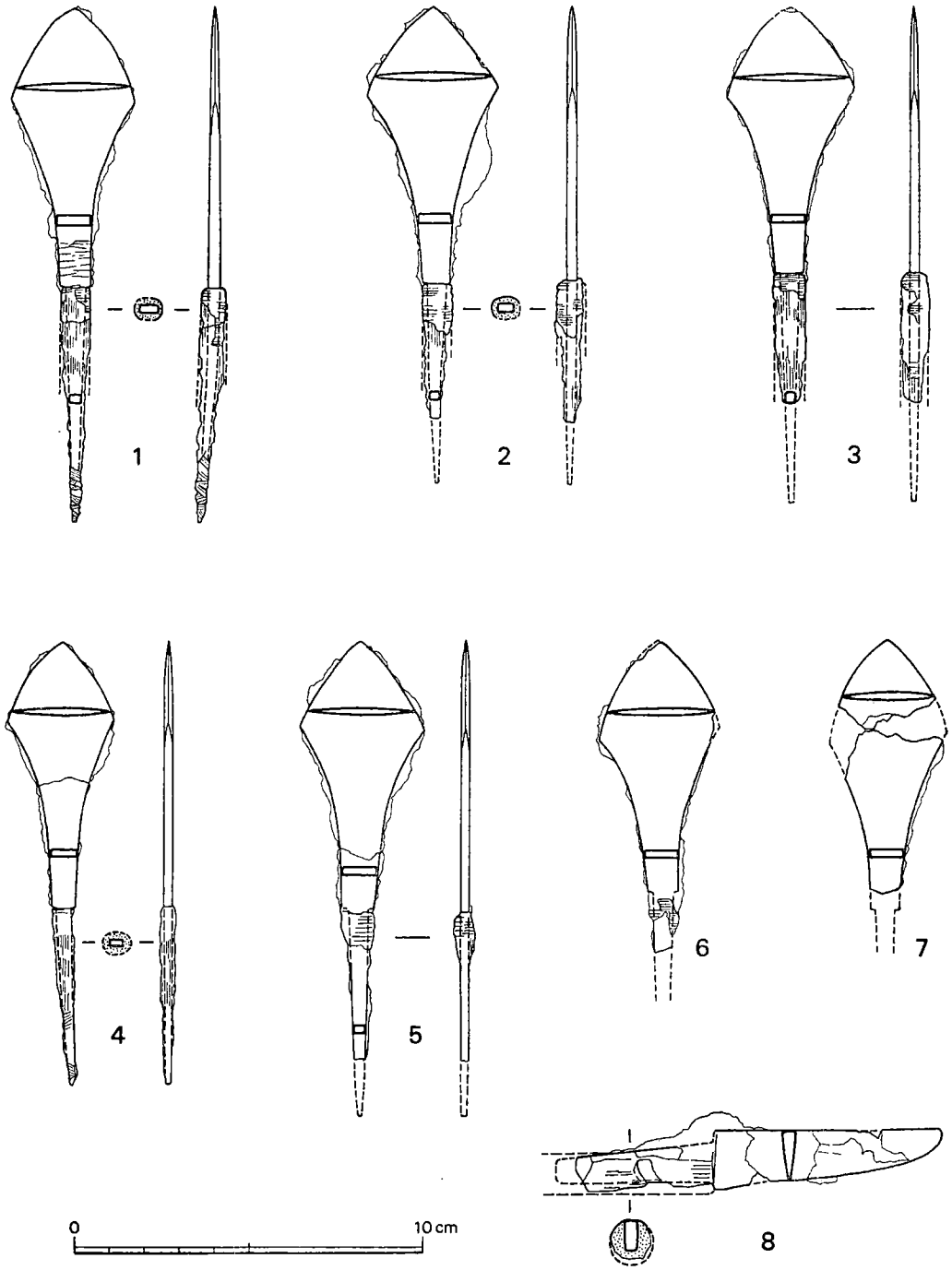
a．遺　構

立　地　辻田舌状台地先端部の中心的位置を占拠している。

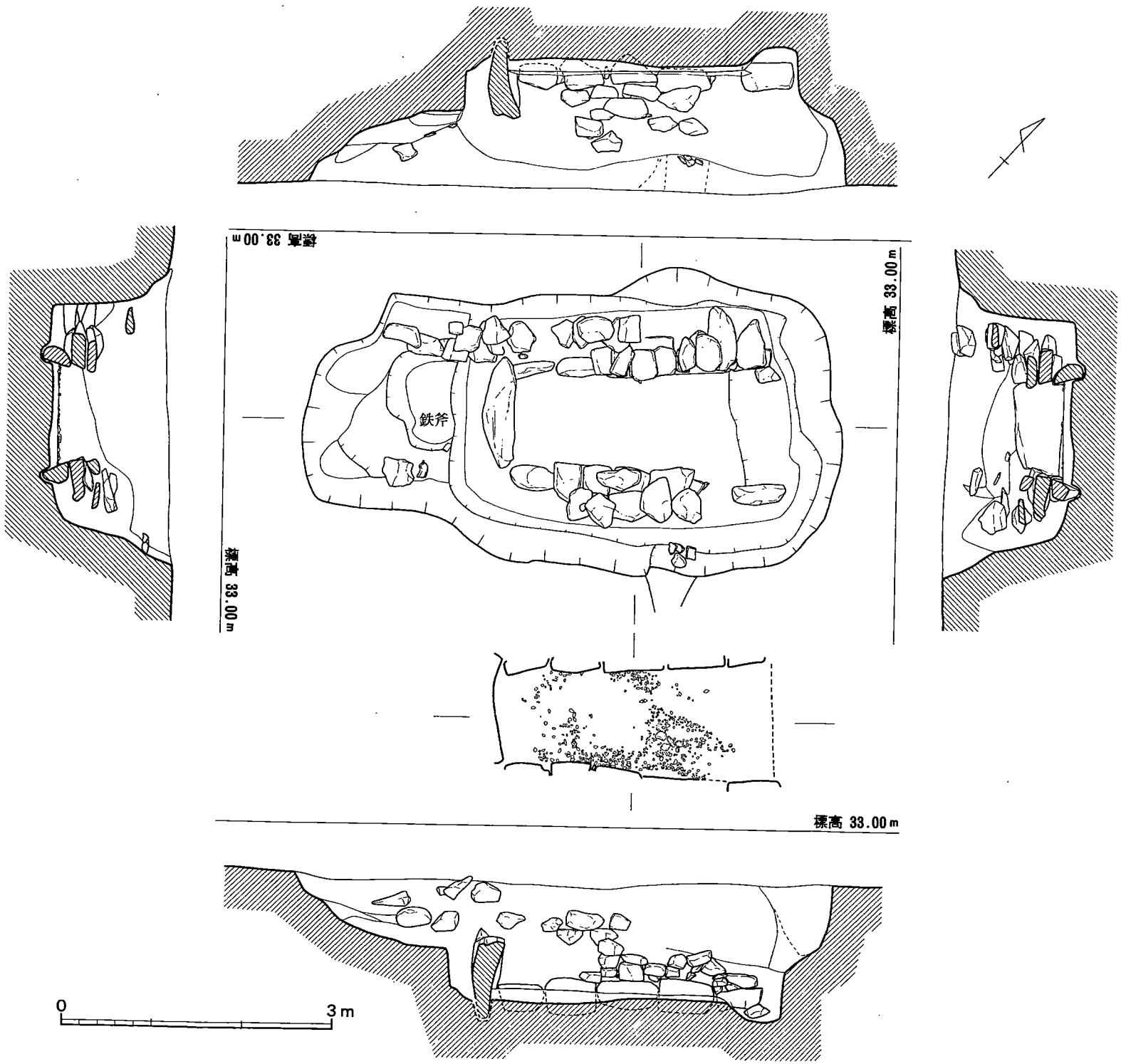
墳　丘　墳丘は完全に削平され，周溝さえ検出できなかった。石室掘方が深いため，墳丘はあまり高いものではなかろうが，周溝がなかったはずはない。１号・２号墳が隣接するので，その距離から推測すると半径９m以内であり，直径18m以上の古墳とはならない。円墳であろうと思われるが，これも不明といわざるをえない。

石　室（図版67～69，第71図）　３号墳は掘方が深かったためか，石材がいくらか残されていた。前庭部を含めた石室掘方は，主軸長６m，石室部最大幅３m，前庭部幅2.4m，石室部主軸長4.1mの大きさである。深さは石室床面までが1.2m，前庭部が0.8mである。

石室構造は，掘方内に残っている花崗岩の石組によって未発達の腰石をもって，主軸をS—42°—Wに向けた竪穴系横口式石室であることが十分推測できる。奥壁は完全に失なわれてい



第 70 図　2号墳石室内出土鉄器実測図（1/2）

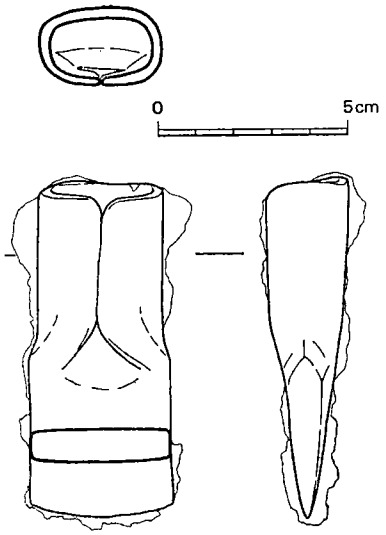


第 71 図　3 号墳石室実測図 (1/60)

るが，抜跡が大きいことと横口部仕切石が大きいことから，奥壁には1枚石の腰石があった可能性が強い。しかし，横口部仕切石は別として，側壁のような小さな腰石の場合もある。側壁は小口積の石材より一まわり大きな石材が腰石として，右側壁（南東壁）が6個，左側壁（北西壁）が5個使用されている。腰石は内側に少し傾斜し，その上の小口積も次第に傾斜をもたせている。

横口部には床面から50cmの高さに1枚石が立てられて，石室と前庭部の床面の高さに大きな差をつけている。この1枚の仕切石があることによって袖石の存在は考えられない。前庭部は左壁が残っているが，これによるとわずかに広がっている。石室床面内法は，長さ3m，奥壁幅1.3m，前方幅1m，前庭奥幅約1.1m，前庭前方幅約1.2mの大きさである。両側壁には赤色顔料が塗布されている。

床面には小石が散乱していたので，玉砂利が敷石として利用されていたのであろう。



第 72 図　3号墳出土鉄斧実測図 (1/2)

b．出土遺物

出土状態（図版69—2）　石室内には玉砂利の敷石が残っていたが，副葬品は全てなく，前庭部床面で鉄斧1個が発見されただけである。

鉄　斧（図版76—1，第72図）　長さ8.6cm，刃幅3.8cm，袋幅3.3cmの小形品である。

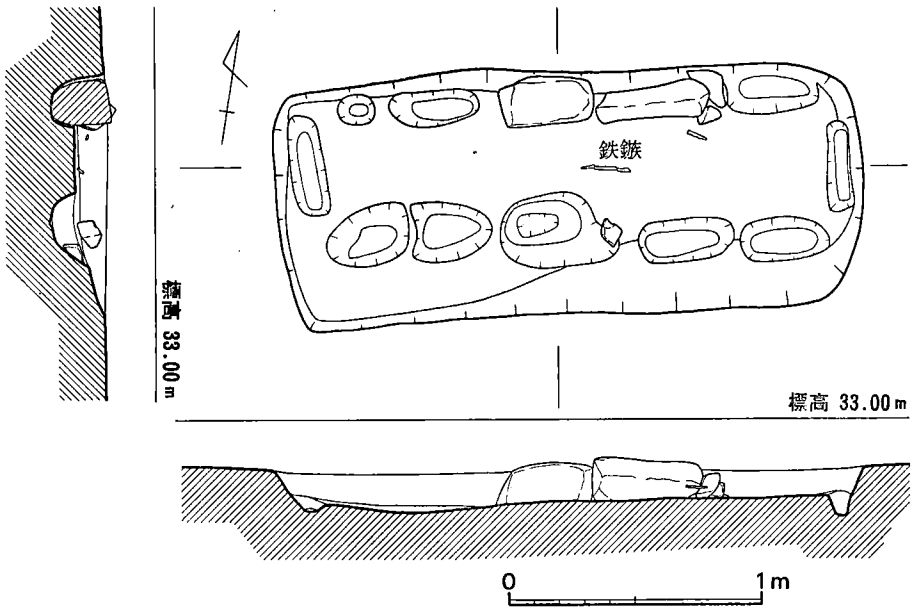
(5) 辻田4号墳

a．遺　構

立　地　位置は3号墳の東側で，やはり舌状台地の中心部を占地している。これも完全に削平されて，石材5個を残すのみである。

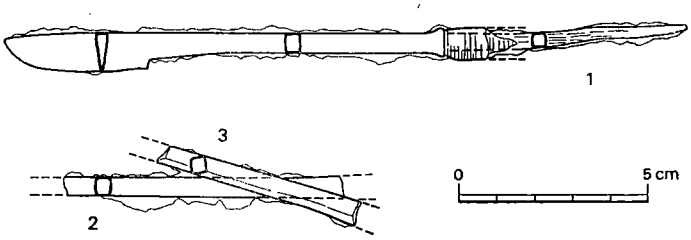
周溝もなく，小石室であるために墳丘の存在も不明。

石　室（図版70，第73図）　石室掘方は，主軸長2.33m，最大幅0.95mの大きさである。大きさからすると石棺といえるものであるが，2個残っている腰石が，床面から高さ15cmしかなく，箱式石棺系のものではなく，小口積される竪穴式石室系のものであることがわかる。腰石は両小口が各1個，側壁が各6個使用されている。石材は全て花崗岩である。石室床面内法は，主軸をS—80.8°—Eに向けた長さ1.98m，東幅0.42m，西幅0.31mの大きさで，11cm広い東側が頭部と思われる。床面には敷石らしいものは残っていなかった。



第 73 図　4号墳石室実測図（1/30）

b．出土遺物



第 74 図　4号墳出土鉄鏃実測図（1/2）

出土状態（図版70—2）副葬品は鉄鏃が3本分だけである。完形品の1本は，石室内中央で主軸に平行に先を東側に向けていた。

鉄　鏃（図版76—2，第74図）　1は全長18cm，刃部長3.8cm，茎長6.4cmの片刃作形式であろう。3・4も同様な形式のものであろう。（柳田）

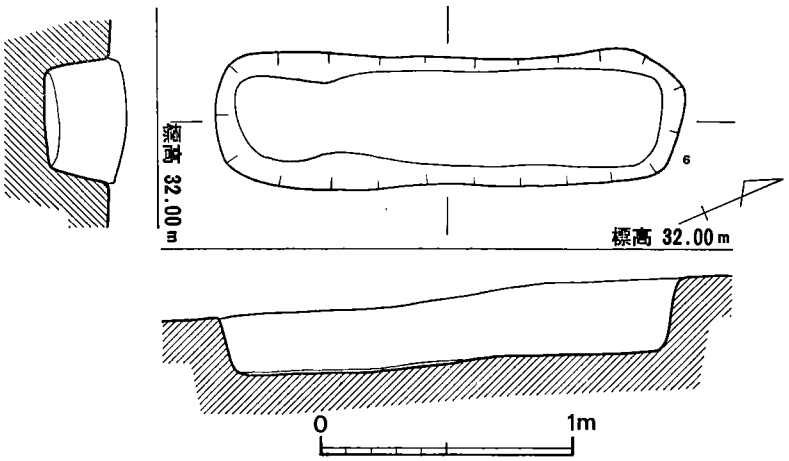
(6) 土壙墓

≪6号土壙墓（第75図）

E6—1区から検出された素掘りの土壙墓である。墓壙のプランは長楕円形を呈し，その規模は長さ185cm，幅50cm，深さ28cmを測る。壙底は北側から南側にわずかに傾斜している。主軸方位はN—23°—Eを指す。

≪7号土壙墓（図版71，第77図7）

C7—23区に位置し，主軸方位をN—19°—Eを指す素掘りの土壙墓である。墓壙のプラン



第 75 図　6号土壙墓実測図（1/30）

は楕円形を呈し，その規模は長さ170㎝，幅約87㎝，深さは極めて浅く4㎝を測る。上面の削平が著しい。南側小口部中央から，床面より若干浮いた状態で完形の須恵器杯1個が出土した。時期は古墳時代後期である。

第 76 図　7号土壙墓出土須恵器実測図（1/3）

須恵器杯（第76図）　口径9.3㎝，最大径11.5㎝，器高3.45㎝を測る。平坦気味の底部から緩やかに立ち上る体部がつく杯で，蓋受けの立ち上りは弱く低い。体部内外はヨコナデ，底部外面は回転ヘラ削り，内面は不定方向のナデ仕上げである。色調は暗青灰色を呈し，焼成は良好である。須恵器Ⅳ期のものである。

≪8号土壙墓（図版72—1，第77図8）

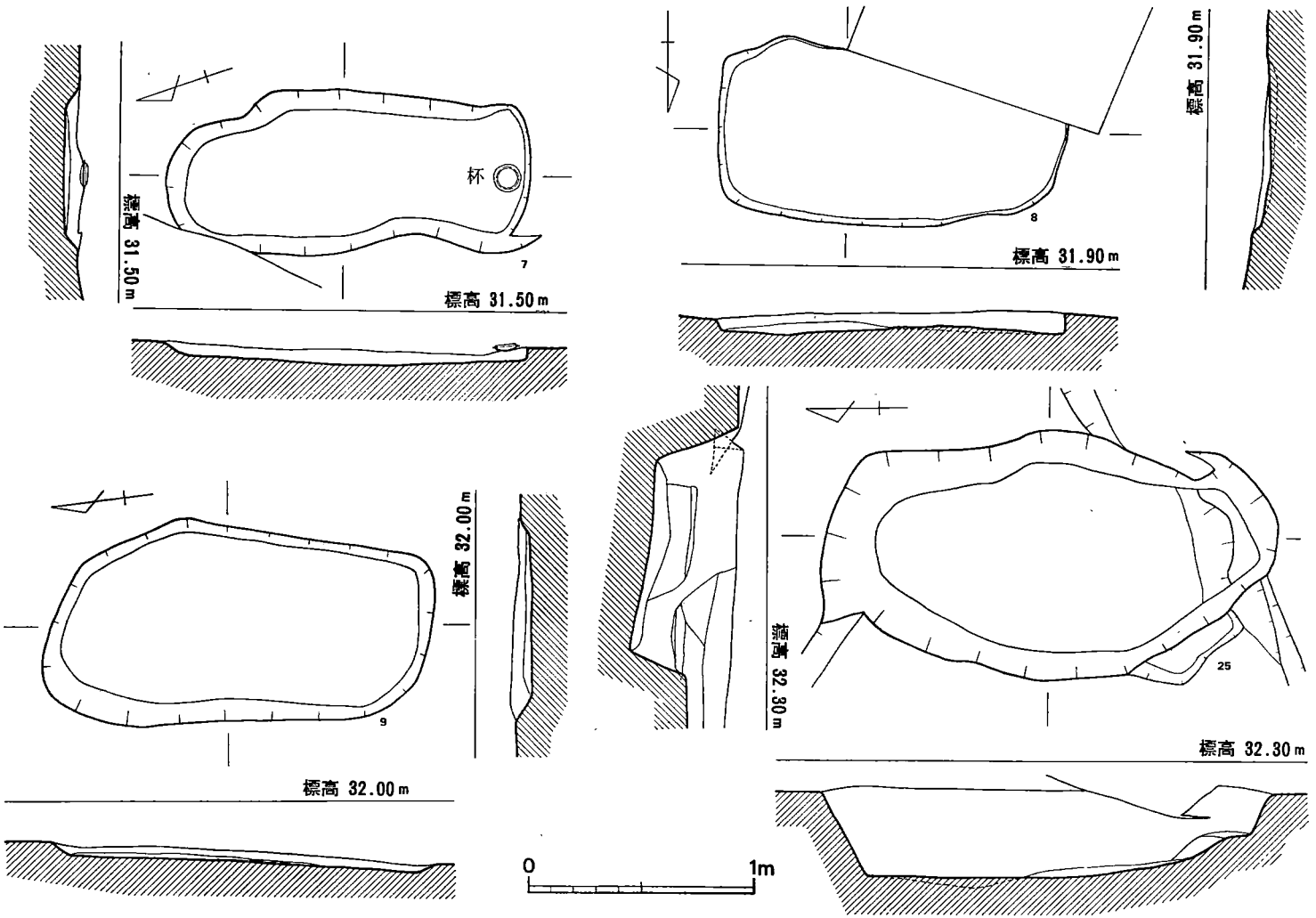
7号土壙墓の南側にあり，主軸方位をN—89.5°—Wにとる素掘りの土壙墓である。南西隅は下水ためますで破壊されている。7号と同様，上面の削平が著しい。墓壙のプランは楕円形を呈し，その規模は長さ155㎝，幅76㎝，深さ2.5㎝を測る。

≪9号土壙墓（図版72—2，第77図9）

8号土壙墓の東側に位置する。墓壙プランは楕円形を呈し，主軸方位をN—7.5°—Eにとる素掘りの土壙墓である。7・8号土壙墓と同様上面の削平が著しい。墓壙の規模は長さ170㎝，幅87㎝，深さ4㎝を測る。壙底は北から南にわずかに傾斜している。

≪25号土壙墓（第77図25）

D5—25区から検出された不整楕円形プランを呈す土壙墓で，弥生時代中期前半の2号住居跡を切って作られている。墓壙の規模は長さ200㎝，幅110㎝，深さ41.5㎝を測る。主軸方位はN—1.1°—Eを示す。遺物は高台付須恵器が北側小口部付近から30㎝浮いた状態で出土した。須恵器Ⅵ期のものである。（井上）



第 77 図　7～9・25号土壙墓実測図（1/30）

(7) ま と め

a．石室の構造

辻田古墳群は，最初は中世に破壊され，さらに近世の段畑開墾により著しく削平されてしまっている。前項では一部石室の復原も混えて報告したが，残されていたのは石室の一部と石材の抜跡であるため，さらに石室の原形をわかりやすくするために各古墳に最も近い石室構造をもつ既知古墳をあて，各墳の構造比較を試みたい。

3号墳は，本古墳群中では最も残りのよいものであり，横穴式石室としては古式の竪穴系横口式石室の範疇に含まれることは明らかである。この種石室の最古の例として5世紀初頭とされる老司古墳（註1）は，辻田古墳群の北西2㎞のところにあり，両古墳は那珂川を挟んで対峙している。3号墳石室の特色は，①石室床面と前庭部とに大きな段差を有する仕切石を立てる。②横口部に袖石がない。③「羽子板形」プランを呈する。④未発達の腰石を有する。⑤前庭側壁に続いて傾斜した墓道がある。この5点があげられる。以上の観点から，柳沢一男氏の竪穴系横口式石室形式分類（註2）ではⅡaということになり，石山勲氏分類（註3）の横口前面の構造はCタイプになる。

Ⅱa形式には，飛山1号墳・高崎1号墳・長迫古墳・栗崎山7号墳・浦口3号墳が例としてあげられているが，この中では福岡市飛山1号墳（註4）が本古墳に最も近い構造を示しているものといえる。京都郡長迫古墳（註5）も横口部に高い仕切石を立てる点は本例に似ているが，前庭部と墓道が不明である。さらに，福岡市高崎1号墳（註6）・飯塚市栗崎山7号墳（註7）・粕屋郡浦口3号墳（註8）なども横口前面の構造がもう一つはっきりしないところがある。辻田2号墳はこれらの中では腰石の未発達などの点から形式的には最も古いタイプということになろう。

2号墳は，頁岩質板状腰石を使用しているところに最大の特色がある。2号墳の石室は玄門付近が完全に削平されているので，不明なところもあるが，長崎県大村市黄金山古墳（註9）などの例から竪穴系横口式石室といってよいものである。扁平板状腰石の上には，花崗岩を使用したのではなく腰石と同じ頁岩質の扁平板石を小口積した可能性も強く，そうなるといっそう黄金山古墳に近くなる。福岡平野では，花崗岩を入手するには簡単であるが，老司古墳や本古墳のように入手困難な扁平割石を使用しているところに被葬者の性格の違いに重要な意味があろう。2号墳石室は奥壁幅が1.85ｍと広くなり，複次葬を目的としたものであるが，この種石室で単次葬と考えられるものに八女郡平原7号墳（註10）がある。

平原7号石室は，上部の小口積部分を除去すると箱式石棺といえるもので，北部九州では，畿内型竪穴式石室導入より遅れて次階級で箱式石棺を母体に竪穴式石室を小形模倣した「石棺

系小竪穴式石室」に横口を付加したものである。この点，老司古墳・丸隈山古墳・糸島郡釜塚古墳石室のように畿内型竪穴式石室から一貴山銚子塚古墳石室形式を経て竪穴系横口式石室に発展したもののように基底部から扁平割石小口積するものと系統を若干異にするのではなかろうか。この仮説が成立するとすれば，辻田２号墳や黄金山古墳石室は「石棺系小竪穴式石室」から発展したもので，「石棺系小竪穴式石室」が，畿内型竪穴式石室より後出するように，石棺系の横口式石室も竪穴系横口式石室より多少後出する可能性もある。しかし九州型古式古墳の大形箱式石棺を母体にしたとも考えられるので，同時発生，共存も可能となる。

４号墳石室は，小竪穴式石室というよりは炭焼５号墳（註11）や上ノ宿１号・２号・６号（註12）のような石棺系小竪穴式石室に近いものである。

１号墳の石室構造は，前室と見るか羨道と見るかによって大きな相違があるが，大きな石材の腰石から竪穴系横口式石室でいう前庭部側壁でないことは明らかであろう。では仮に前室とした場合には羨道が付加されていないのはおかしいし，前室なしの羨道とした場合には広すぎるし，大きな腰石が気になる。この両者を都合よく生かしてくれる石室構造に寿命王塚古墳がある。前室右側壁の延長を調査した小田富士雄氏によると（註13）「右壁は閉塞積石面から1.5ｍまで延長されるが，右壁の石積は次第に逓減される。従ってプランにおいて前室の羨道の区別は袖石を立てるなどのような特別な施設はなく，立面において前室天井石のはずれに閉塞積石を積みあげて区別したにすぎない」という。

b．辻田古墳群の年代

３号墳は，飛山１号墳に最も近似することを述べたが，飛山１号墳は副葬品の滑石製品から５世紀後半から６世紀初頭とされている。飛山１号墳出土の須恵器甕口頸部を見ると，口唇部端下に三角凸帯をめぐらすなごりがあり，頸部にも三角凸帯をめぐらすなど古い様相を示し，５世紀代に編年できる資料である。この種石室で袖石の有無の区別を除けば，八女郡平原古墳群は５世紀後半，鞍手郡汐井掛24・25・27号墳は出土した須恵器から５世紀末頃（註14）とされている。したがって，辻田３号墳は５世紀初頭といわれる老司古墳のある那珂川流域にあることからおそくとも５世紀後半には位置ずけられよう。

２号墳は，石室構造が類似する黄金山古墳が出土土師器から５世紀中葉から後半に及ぶ頃，平原７号墳が５世紀後半，山口市馬塚古墳（註15）が６世紀初頭であり，九州北西沿岸から遠ざかるにつれて新しくなる傾向が見られる。辻田２号墳は那珂川流域にあるが，「羽子板形」プランを呈する点，黄金山古墳より形式的には新しいといえるので，５世紀後半とするのが妥当であろう。

では，３号墳と２号墳はどちらが先行するのであろうか。形式的に見れば２号墳は石棺系の腰石といえども３号墳よりは発達した腰石を持つ点や石室を浅く構築し，その分３号墳より墳

丘を大きく目立たせるなど２号墳は新しい要素があるといえるだろう。

１号墳は，出土した須恵器がⅢ型式にあたるところから６世紀中頃には築造されたであろう。これは同一丘陵上にあってⅡ型式の須恵器を持つ日拝塚古墳（註16）が単室であり，Ⅲ型式の須恵器を出土した五郎山古墳が複室と羨道を完備している（註17）点など須恵器の年代からも王塚古墳と同時期としてよいであろう。

４号墳は，出土遺物として鉄鏃があるが，これと共に小竪穴式石室というところに特色があり，年代判定の重要な決め手となる。小竪穴式石室は，石棺系小竪穴式石室も含めて，炭焼５号墳（註18）・片山11号墳（註19）・七夕池古墳（註20）・峠山５号墳（註21）のように５世紀代に限定できるものである。この場合小竪穴式石室というのが，６世紀後半頃から出現し，横穴式石室を持つ群集墳の周辺で発見される石棺形の短側壁の小石室ではなく，畿内型竪穴式石室の小形のものや箱式石棺系の小竪穴石室で，成人１体の伸展葬が可能な長辺の石室をいう。

c．辻田古墳の成立

那珂川流域の古墳群については，油田古墳群の調査以来機会あるごとにその概要と成立の環境にふれてきたので（註22），ここでは辻田古墳群と門田古墳群の成立について若干補足しておきたい。

５世紀前半代に那珂川流域を支配したのは，老司古墳の主であろう。老司古墳がトップクラスであれば，次の階級の古墳は原１号墳（註23）・油田１号墳（註24）・恵子若山古墳（註25）などであろうが，老司古墳との間には規模や副葬品の量・質ともに大きな差がある。内部構造の不明な那珂八幡古墳・須玖古墳群・観音堂古墳・ウトロ（グチ）古墳など，那珂川流域では中型の古墳が５世紀前半の第２クラスになりうるか，またはその前後のトップクラスか第２クラスになるかで，那珂川流域の古墳築造背景とその発展を考えるうえで重要な鍵となるだろう。すなわち，老司古墳の前代には60mクラスの安徳大塚古塚があるので，老司古墳の５世紀初頭や那珂八幡古墳の時期には勢力が大きくなったことがわかるが，次代の５世紀後半以後には大型の古墳はなく，あるのは６世紀代と思われる40m前後の小型前方後円墳のみで，５世紀後半以後には大型古墳を築造する地元勢力がなかったことを意味している。

このような那珂川流域の古墳築造の背景が変動する中にあって，５世紀後半に成立する辻田古墳群は重要な一面を備えているのではなかろうか。現在，那珂川流域で５世紀後半代の古墳は辻田古墳群以外に発見されていないが，那珂八幡古墳や須玖古墳群がこの頃のものとすればこれがトップクラスとなり，辻田古墳群は第２クラス集団の墓となる。また辻田古墳群以外にも同クラスの同様な規模の古墳は存在するはずである。

辻田古墳群は，５世紀後半に３号墳・２号墳の順に築造され，単次葬の４号墳がその前後に

登場して古墳群が成立する。最後に6世紀中頃から後半に1号墳が築造されるが，6世紀後半には隣の門田2号墳（註26）も築造されている。門田2号墳は規模が1回り大きく，横穴単室に他の副葬品と共に須恵器Ⅲb形式が発見され，墳丘には埴輪もある。須恵器から辻田1号墳が多少先に築造されたと思われるが，両古墳群では門田2号墳が最大規模を誇っている。ちなみに，那珂川流域で埴輪を持つのは安徳大塚・老司・那珂八幡・剣塚・浦の田4号・小丸1号・須玖1号の7基が確認されているだけである。両古墳群は，その間に小さな谷があることで字名をとって古墳群の各称を別にしたが，これらは同一古墳群でどちらかの名称に統一すべきものであったろう。この古墳群の築造過程を考える時，小規模な辻田4号と門田1号は別にして，5世紀後半に2基，6世紀中頃から後半に2基と近接して築造されるが，6世紀前半代に空間があることに気付く。門田と辻田の丘陵を全掘したわけではないので，この時期の破壊された古墳が存在する可能性もあるが，この空間時期を埋めるに都合のよい古墳が両古墳群の北方450mの同一丘陵上にある。この古墳は，前にも述べた全長47.2mで前方後円墳の日拝塚古墳である。日拝塚古墳は，規模や副葬品の質・量ともに門田2号墳より1段上で，この時期の那珂川流域ではトップクラスである。

那珂川右岸で古式横穴式石室採用の古墳として成立した辻田古墳群は，6世紀前半には日拝塚古墳を含む規模に発展し，6世紀後半には埴輪を持つ門田2号墳，さらには東方800mにある天神山前方後円墳を含めた古墳群となり，これを背景とした生活基盤も拡大されたものと思われる。さらに，門田付近では「白水廃寺」ともいわれる山田寺系の古瓦が発見されるのも無関係とはいえず，辻田・門田一族の発展が忍ばれる。（柳田）

註1　九州大学文学部考古学研究室編「老司古墳」福岡市教育委員会　1969

2　柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』　1975

3　石山勲「Ⅶ平原古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅲ　福岡県教育委員会　1972

4　島津義昭・塩屋勝利「飛山古墳群の調査」『和白遺跡群』　福岡市教育委員会　1971

5　小田富士雄「九州型古墳文化の興隆」『日本の考古学Ⅳ—九州—』　1966

6　浜田信也「高崎古墳群」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1　1970

7　佐田茂「栗崎山7号墳」『栗崎山古墳群』　1973

8　木村幾多郎・東中川忠美「浦口3号墳の調査」『鹿部山遺跡』　1973

9　小田富士雄「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」『九州考古学』39・40　1970

10　高山純「平原遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅲ　1972

11　宮小路賀宏・柳田康雄「炭焼古墳群」『福岡県文化財調査報告』37　1968

12　福岡県立朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化』　1969

13　小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形式」『史淵』100　1968

14 上野精志「汐井掛古墳の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸⅡ 1978
15 山口県教育委員会編「馬塚古墳」 1971
16 中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎「日拝塚」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』5 1930
17 註13に同じ。
18 註11に同じ。
19 石山勲他「片山古墳群」『福岡県文化財調査報告書』46 1970
20 上野精志「七夕池遺跡群」『志免町文化財調査報告』1 1974
21 故前川威洋氏調査。
小田富士雄「西日本における発生期古墳の地域相」『古文化談叢』4 1978 に一部所収。
22 柳田康雄「油田古墳群―那珂川流域の古墳とその編年―」『福岡県文化財調査報告書』42 1969
柳田康雄「春日・那珂川地区の遺跡の環境―古墳時代の遺跡―」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1 1976
柳田康雄「観音山古墳群成立の環境」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』5 1978
23 木下修他「原古墳群の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』2 1976
24 渡辺正気・柳田康雄「油田古墳群」『福岡県文化財調査報告書』42 1969
25 恵子遺跡調査会「恵子若山遺跡」 1975
26 甲元真之「門田２号墳の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1 1976

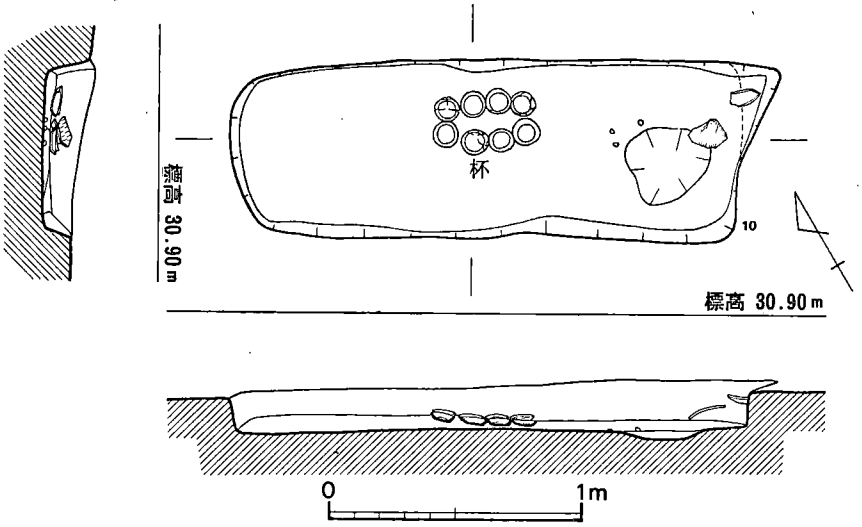
Ⅴ 歴史時代の墓地

(1) 土 壙 墓

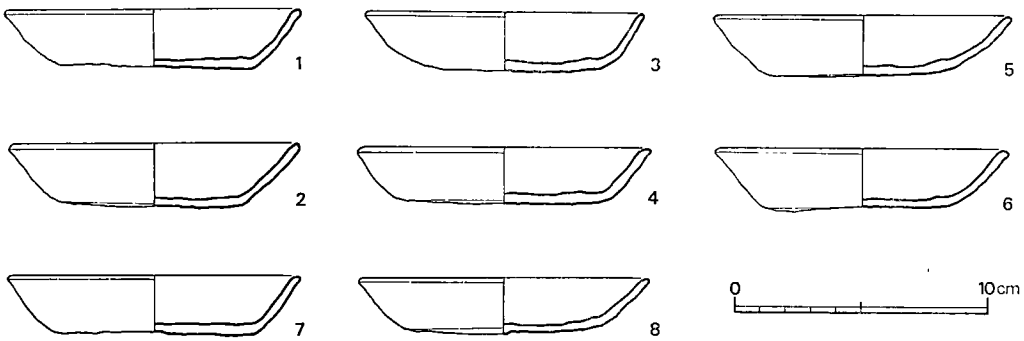
≪10号土壙墓（図版77，第78図）

Ｃ８―21とＤ８―１区にわたって検出されたもので，長辺2.06m，短辺70cm，深さ16cmを測る。東側小口部の北東隅はわずかに突き出て，小口部付近の棺底中央部には浅いピットが穿たれている。棺内中央部北側から棺底よりわずかに浮いた状態で土師器皿４個が並列して計８個副葬されていた。また，東側の浅いピット周辺から３個の碁石様の小石が検出された。時期は平安時代。

土師器皿（図版78―１，第79図） 底部の切り離しは全てヘラ切りで，その大半が板目状圧痕を残している。口径11～11.8cm，底径7.1～8.5cm，器高2.2～2.5cmを測り形態的にもほぼ一定した皿である。色調は全て淡黄白色を呈し，全体に器面の風化が著しい。計測値は表９に示す通りである。 （井上）



第 78 図　10号土壙墓実測図（1/30）



第 79 図　10号土壙墓出土土師器実測図（1/3）

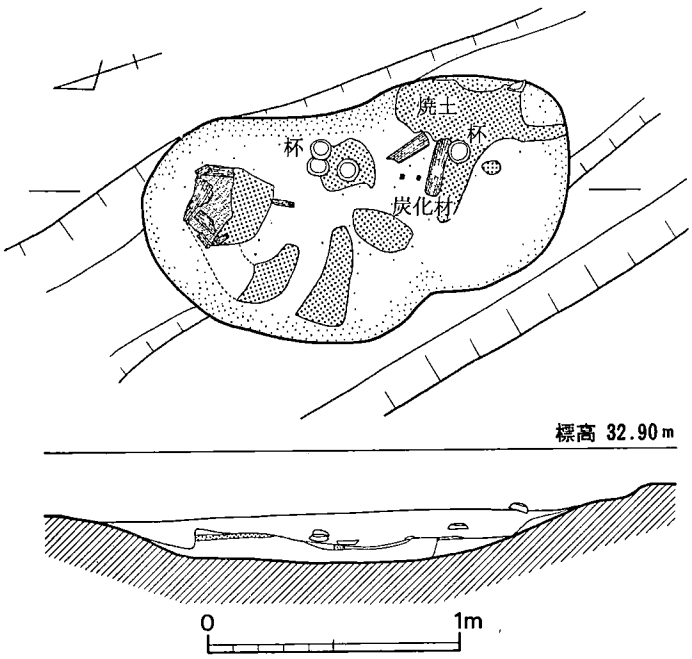
表 9　土師器皿計測表

（単位cm）

No.	口径	底径	器高	備考	No.	口径	底径	器高	備考
1	11.7	7.6	2.3	ヘラ切り・板目	5	11.8	7.2	2.35	ヘラ切り
2	11.5	7.25	2.5	〃	6	11.6	7.4	2.4	〃
3	11	7.1	2.35	〃	7	11.6	8	2.3	ヘラ切り・板目
4	11.6	8.5	2.2	〃	8	11.5	7.9	2.25	〃

(2) 火 葬 墓

C５区南端に位置し溝H内の堆積土上層で検出された。長径1.7m，短径0.9mの瓢形に近い楕円形プランを呈し，深さ20cmの低平なU字状に凹む竪穴である。竪穴内全面に焼土・木炭が分布し，地山より５～10cm上位に焼土が顕著にみられる。また骨片が散在することからこの竪穴内で火葬されたものと推定される。ほぼ南北に長軸を有しており，東南側に供献されたと考えられる土師器皿５点が出土した。ただし遺構実測作業実施中に盗難に遇い，遺物の詳細な検討をなしえない。実測作業中の管見では，土師器皿は糸切り底で，口径８～９cm程度，底径６～7.5cm程度である。この数値を大宰府南条坊遺跡での前川威洋氏の分類と対比させれば，Ⅱ—５類に相当し，Ⅱ—５類は鎌倉時代中期後半と考えられていることから，鎌倉時代中期後半ないしはそれ以降の所産と推定（註１）することが可能である。（小池）

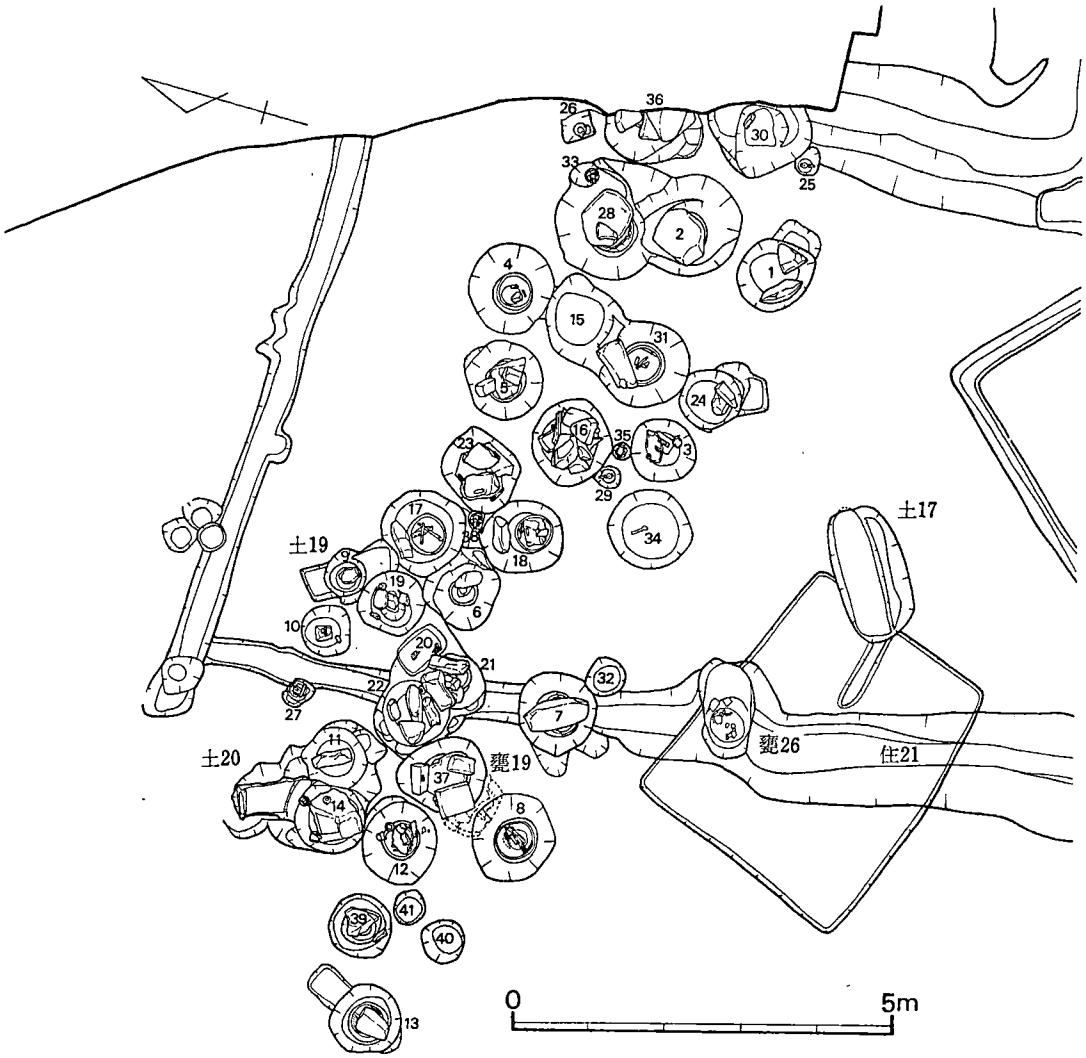


第 80 図　火葬墓実測図（1/30）

(3) 近 世 墓

≪１号近世墓（図版81—１，第82図１）

C５区の東端部に位置し，近世墓群の東南端寄りに占地する。不整円形プランで直径0.95m深さ1.45m，底面径0.65×0.5mの素掘り円筒状墓壙をもち，墓壙内には花崗岩製の台石等が上半部に転落した状況で検出され，銅銭７枚も出土した。おそらく，桶を棺として使用したもので，改葬によって墓標等が転落したものであろう。銅銭７枚の内訳は，寛永通宝１枚（一文銭），文久永宝３枚（四文銭），不明２枚と一銭銅貨１枚で，一銭銅貨には大日本大正七年の刻印がある。寛永通宝，文久永宝等の孔空き銅銭６枚の出土は，いわゆる冥銭として６枚一組の六道銭という役割りで副葬されたもので，一銭銅貨１点の混入は改葬等の際の混入と考える



第 81 図　近世墓地遺構配置図（1/100）

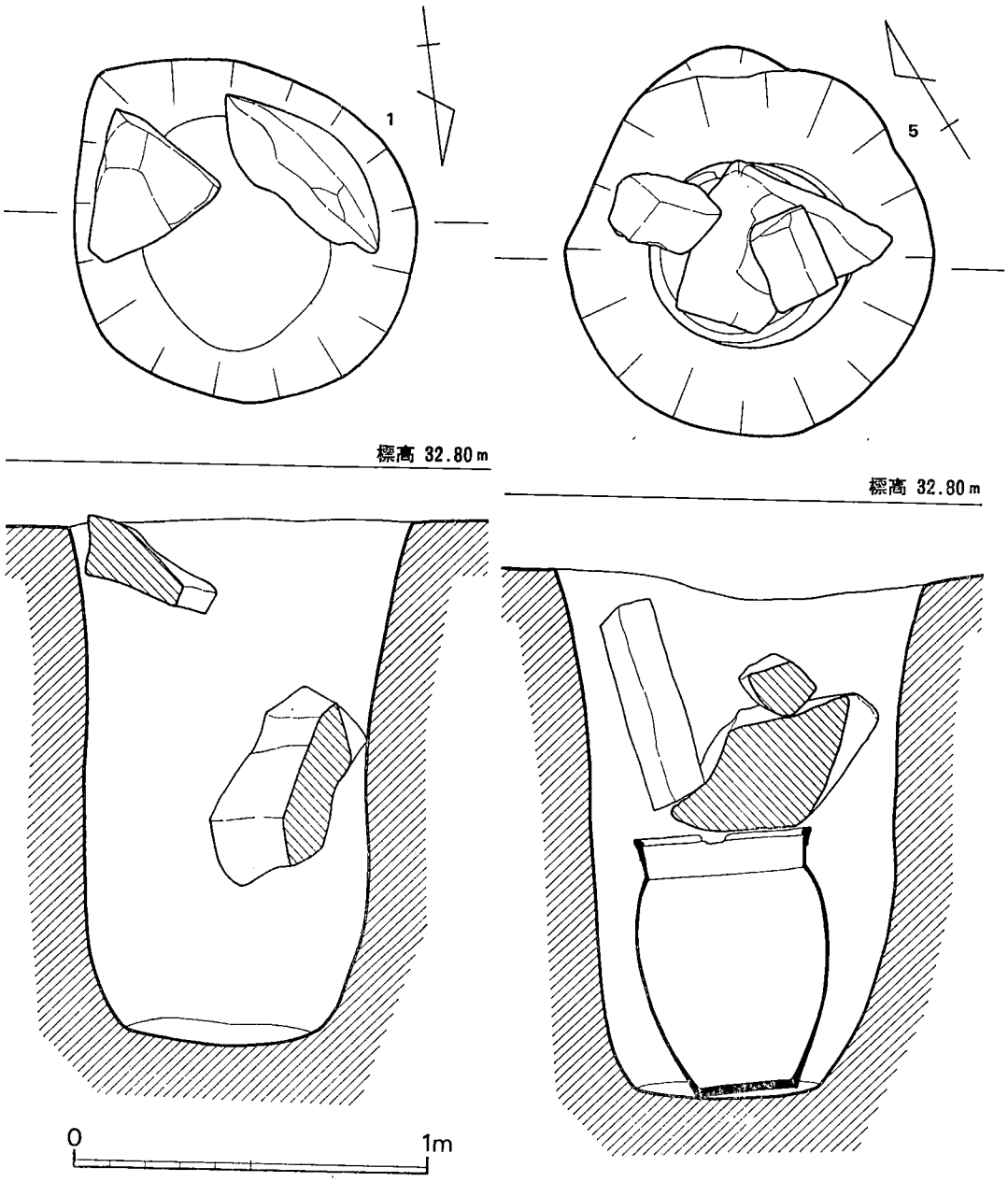
のが妥当であろう。（小池）

≪2号近世墓（図版81—2，第83図2）

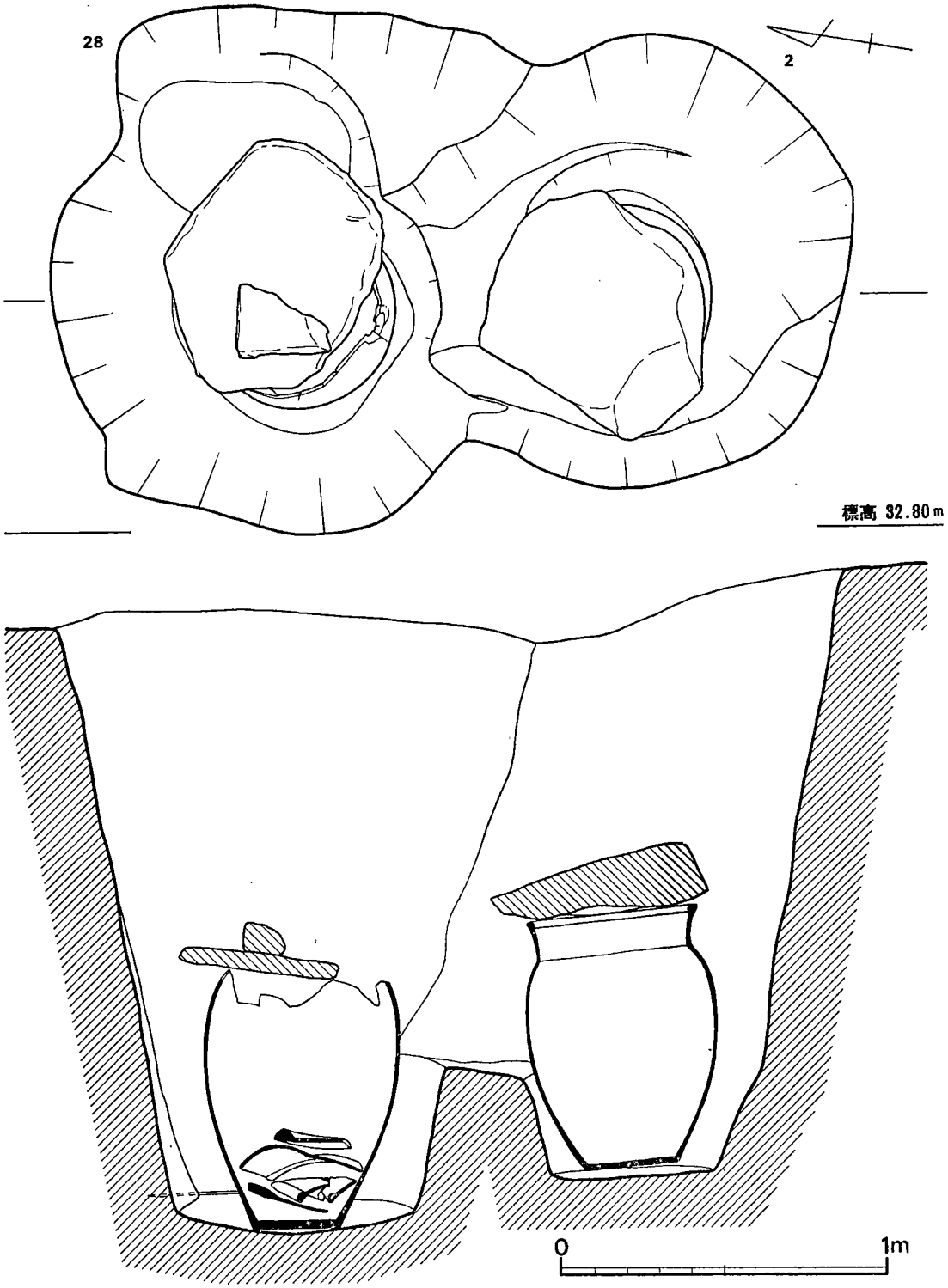
1号近世墓の北側に位置し，北側の28号近世墓を切っている。プランは円形を呈し，上面径1.37m，底面径0.56m，深さ1.85mを測る土壙である。棺は甕棺で，垂直にすえられ花崗岩製の平石で蓋されていた。棺内からは寛永通宝1枚が検出された。（井上）

≪3号近世墓（図版82—1，第84図3・第88図3）

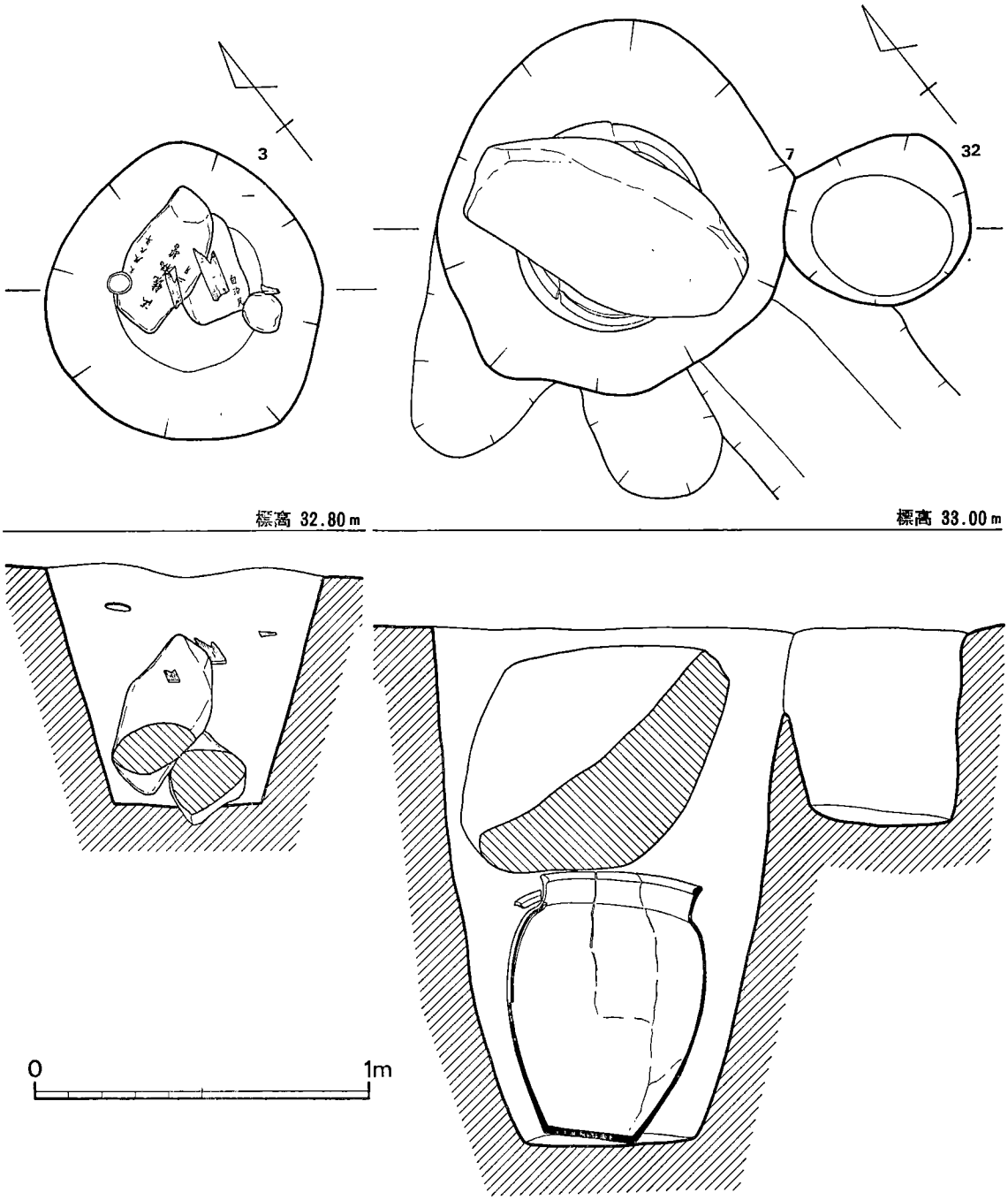
1号近世墓の西方約3mに，24号近世墓を挟んで位置する。墓壙は上縁直径0.85m，下縁直径0.45m，深さ0.7mの素掘り円筒状土壙である。墓壙内には，花崗岩製の墓標2点と，円礫



第 82 図　1・5号近世墓実測図（1/20）



第 83 図　2・28号近世墓実測図（1/20）



第 84 図　3・7・32号近世墓実測図（1/20）

1個が底面に重さなるようにして検出された他，竹筒片2点，灯明皿1点がやや上位の堆積土中から検出された。

墓標は1点が『萬延元酉年，　釈負九童子　四月十四日』を表面に刻み，　裏面右下に『自治民』とあり，　高さ34㎝，幅22.5㎝，厚さ16㎝の柱状礫を使用している。　いま1点は，高さ49㎝，幅21㎝，厚さ15.5㎝の丸味のある柱状礫に『文政九年法號釈誓　十一月四日』と刻まれたものである。これらの墓標も改葬時に墓壙内に転落したものと考えられる。　（小池）

≪5号近世墓（図版83，第82図5・第89図5）

4号近世墓の西側に位置する。　プランは円形を呈し，　上面径1.03m，底面径0.53m，深さ1.47mを測る。棺は甕棺で，蓋石は花崗岩である。墓壙内には墓石を思わせる四角柱の石が陥没した状態で発見された。墓碑名はない。棺内からは寛永通宝5枚が出土した。

≪9号近世墓（図版85—1，第87図9）

墓壙内南側の一部を16号近世墓に切られ，弥生時代の19号土壙墓を切って検出された。小児用近世墓である。墓壙プランは円形を呈し，底面中央に径25㎝，深さ8㎝のピットがある。墓壙内底面からは墓石が陥没した状態で発見された。棺は不明であるが桶棺であった可能性が高い。墓石表面には『糸山百太郎墓』の墓碑名が，裏面には『文久四年八月十四日』の没年月日が刻まれている。

≪13号近世墓（図版86，第91図13）

最も西端に位置する近世墓である。　プランは円形で，上面径94㎝，底面径70㎝，深さ1.4mを測る。棺は甕棺で，棺内からは人骨，線香・花立用の竹筒，木蓋と思われる平板が検出された。また，棺上には花崗岩の平石1枚が陥落した状態で発見された。

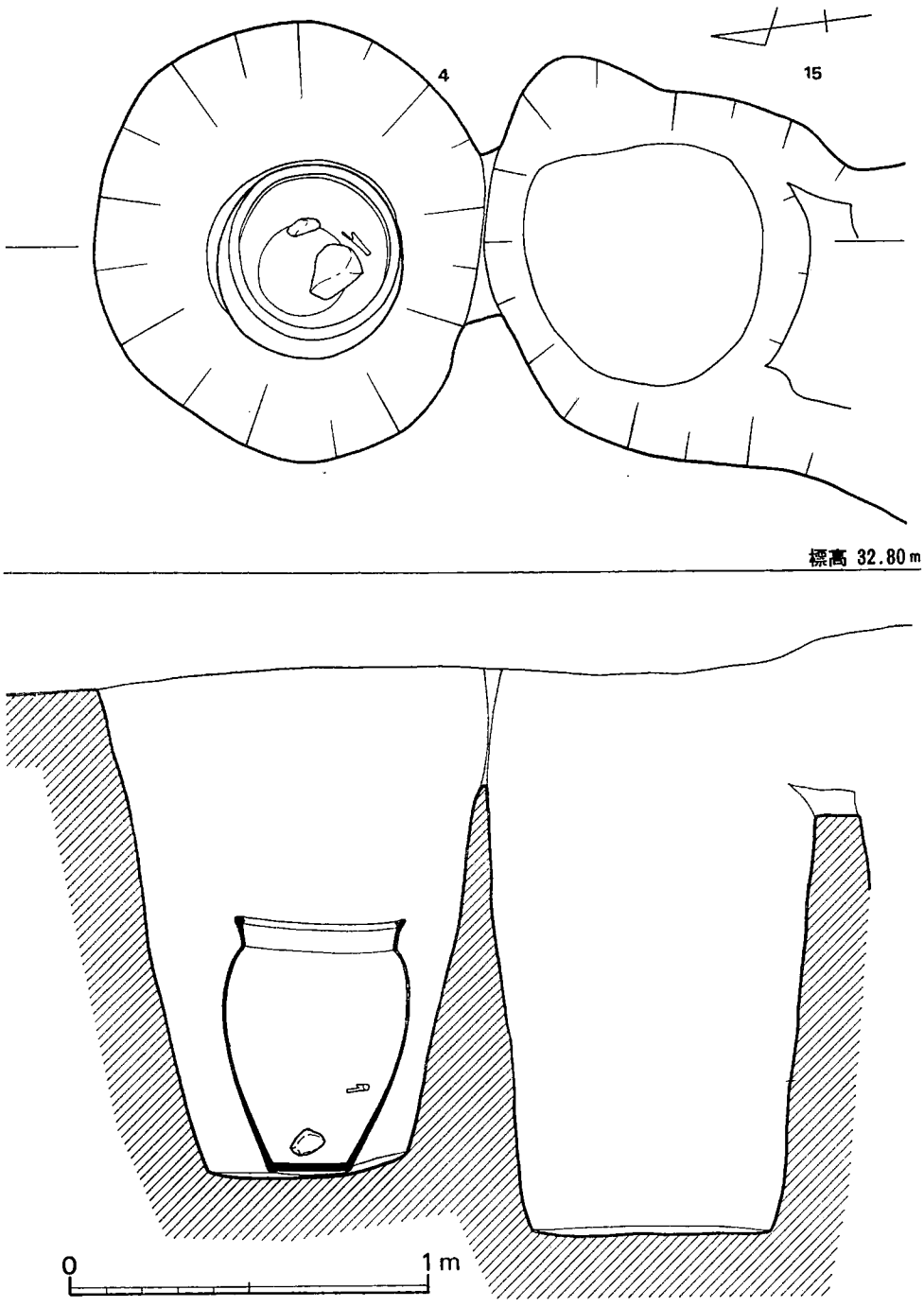
≪14号近世墓（図版87，第92・94図・第103図14）

11・12号近世墓と複合し，弥生時代の20号土壙墓を切って検出された。プランは楕円形を呈し，　上面は長辺1.1m×短辺89㎝，底面径68㎝，深さ1.4mを測る。　墓壙内からは陥没した墓石，土瓶1・鉄瓶1・茶碗1が出土した。棺は不明であるが，墓石の陥没等から考え，桶棺であった可能性が高い。墓石は粗雑であるが花崗岩の切石で墓碑名は『法名釈西還信士』，没年月日は『天保六年十二月』と記されている。また『吉蔵（？）』の銘もある。

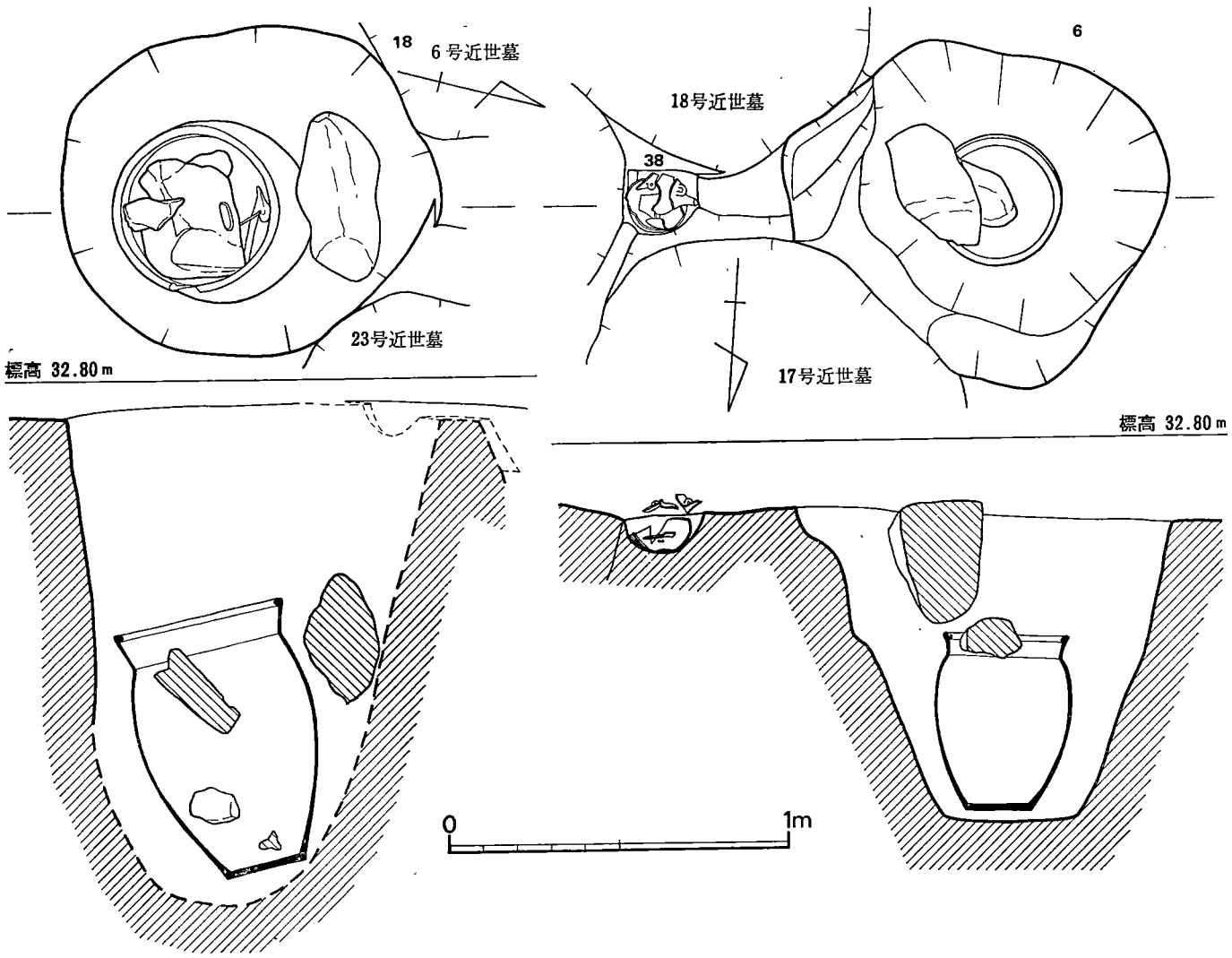
≪19号近世墓（第87図19・第98図19）

9号近世墓を切って埋置されたもので，プランはほぼ円形である。規模は上面径80㎝，深さ1.1mを測り，底面は他と異なり平坦面をなさない。　墓壙内からは，底面より若干浮いた状態で墓石1と河原石4個が検出され，その下から香炭1が出土した。墓石は河原石の一端を打ち欠き平坦にしたもので，表面には『糸山吉太郎』の墓碑名が，左側面に『明治十七年九月十七日』の没年月日が刻まれていた。

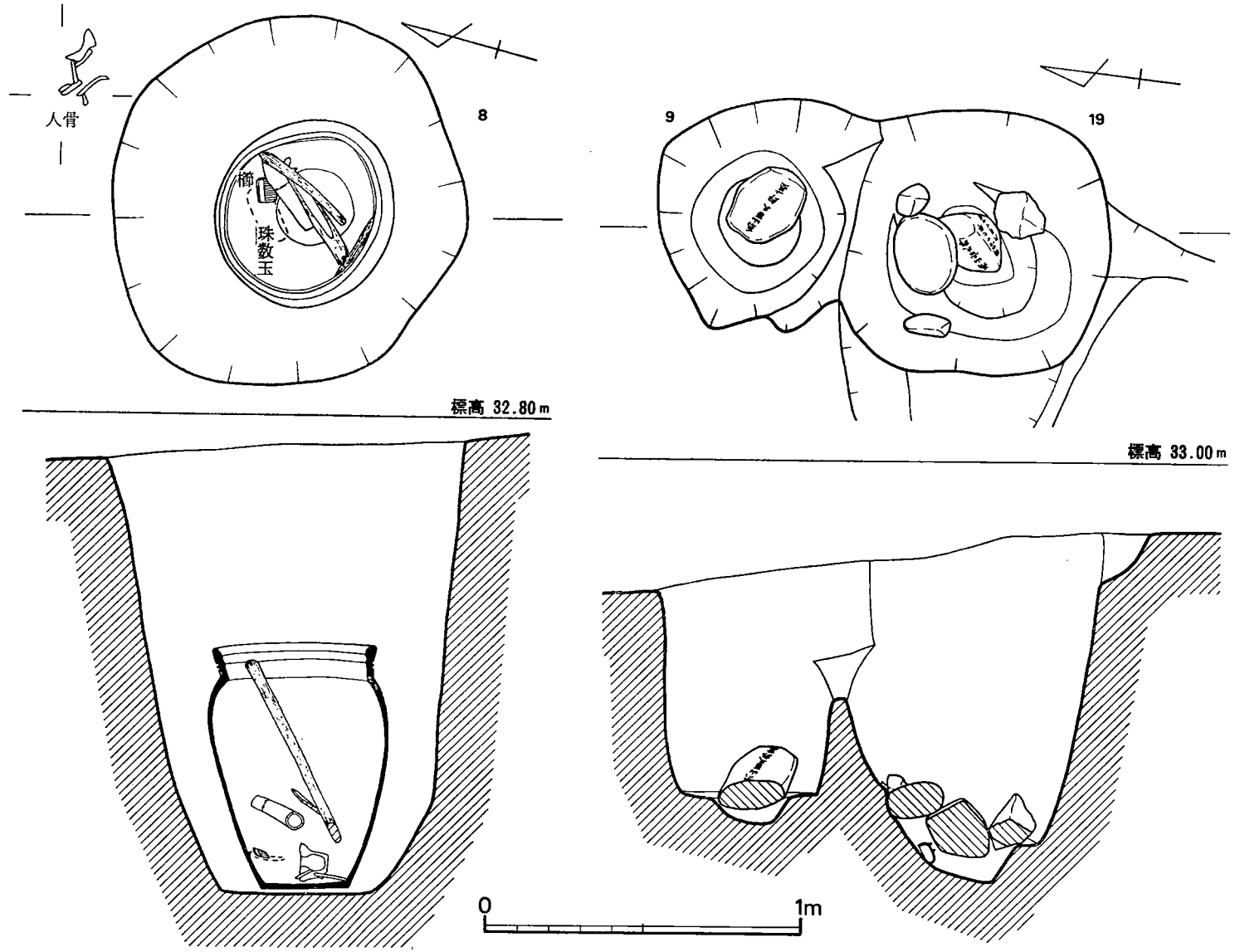
≪20号近世墓（図版88—2，第96図20）



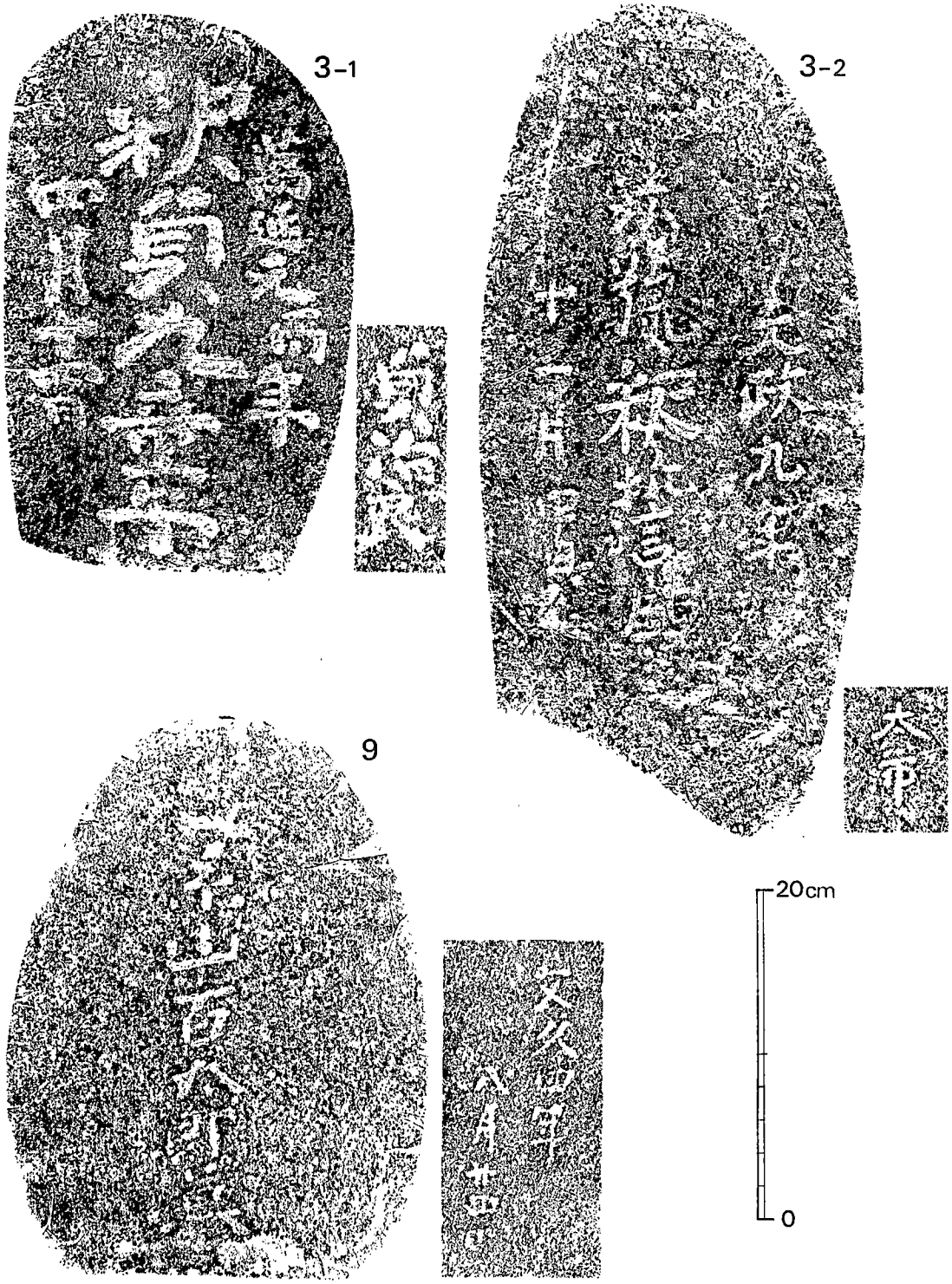
第 85 図　4・15号近世墓実測図（1/20）



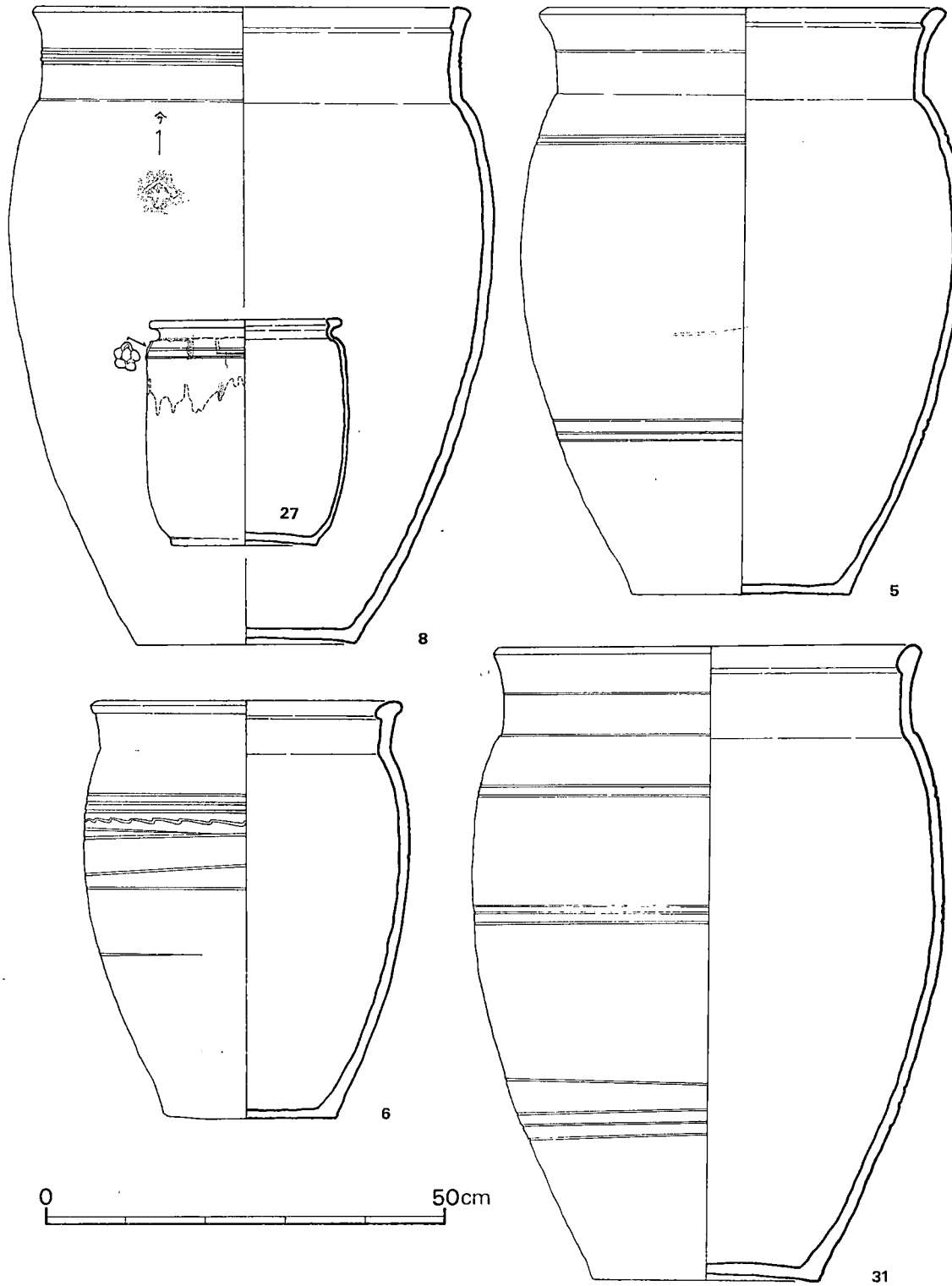
第 86 図　6・18・38号近世墓実測図（1/20）



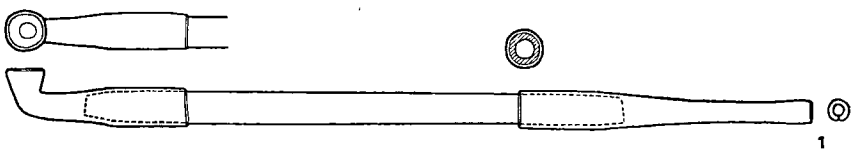
第 87 図　8・9・19号近世墓実測図（1/20）

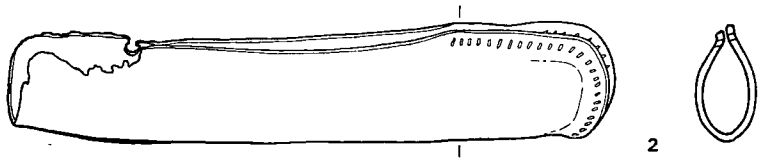


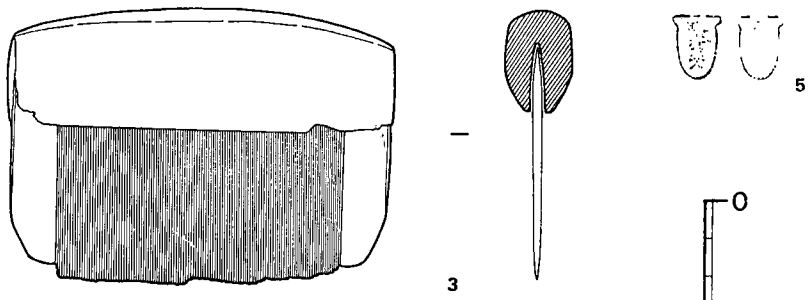
第 88 図　墓碑拓影 1 (1/4)

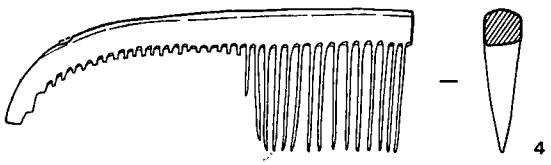


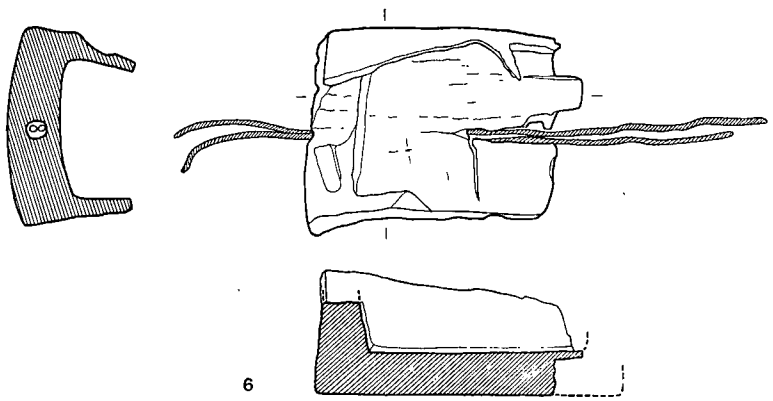
第 89 図　近世甕棺実測図（1/8）



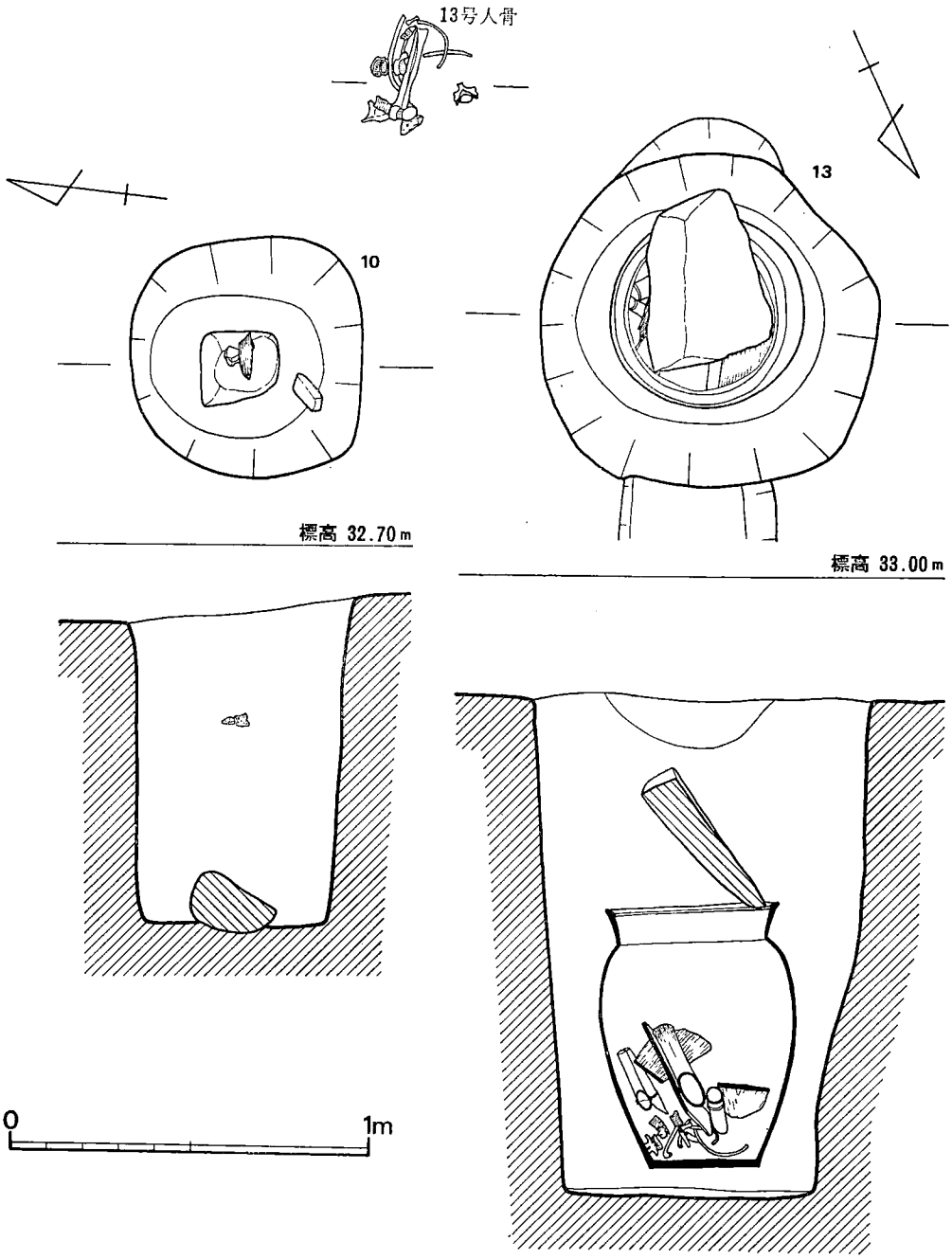








第 90 図　近世墓出土遺物実測図 (1/2)



第 91 図　10・13号近世墓実測図（1/20）

19号近世墓の南側にある小児用木棺墓で，西側の22号近世墓を切って南側は21号近世墓に切られて検出された。棺底からは側板・底板と思われる板材と鉄釘数個が出土した。

≪21号近世墓（図版88—2，第96図21・第99図21）

20・22号近世墓と複合して検出された。墓壙プランは楕円形を呈す。上面は長辺73cm×短辺60cm，底面は長辺45cm×短辺39cm，深さ92cmを測る。墓壙内からは改葬を受けたための撹乱か墓石・受座石の他に，数個の切石・河原石が出土した。墓石表面には『糸山佐市妻之墓』の墓碑名が，裏面には『明治四年二月三日死六十三歳』と刻まれている。墓壙の規模などから考えるとこの墓石の帰属は22号であった可能性がある。

≪22号近世墓（図版88—2，第96図22・第98図22）

20・21号近世墓と複合して検出されたもので，墓壙の掘り方は二段をなし，上面は不整円形であるが，中段は円形を呈す。上面径約96cm，底面径60cm，深さ1.23mを測る。21号近世墓と同様，墓石の他に3個の割石・河原石が出土した。また墓壙内からは茶碗1個が出土した。墓石は小さな河原石で，表面に『釈静休・禿吉』の墓碑名が，裏面には『文政十三年十一月十九日』の没年月日が記されていた。20号と同様，この近世墓も改葬を受けているようで，墓壙内は撹乱されている。墓壙内から検出された墓石は明らかに子供のもので，墓壙の規模などから考えても成人用であり，その帰属には疑問が残る。むしろ，21号内から検出された墓石が22号に，22号の墓石が21号に帰属する墓石と考えた方が適当のようである。改葬時の撹乱であろう。（井上）

≪25号近世墓（図版89—2，第102図25）

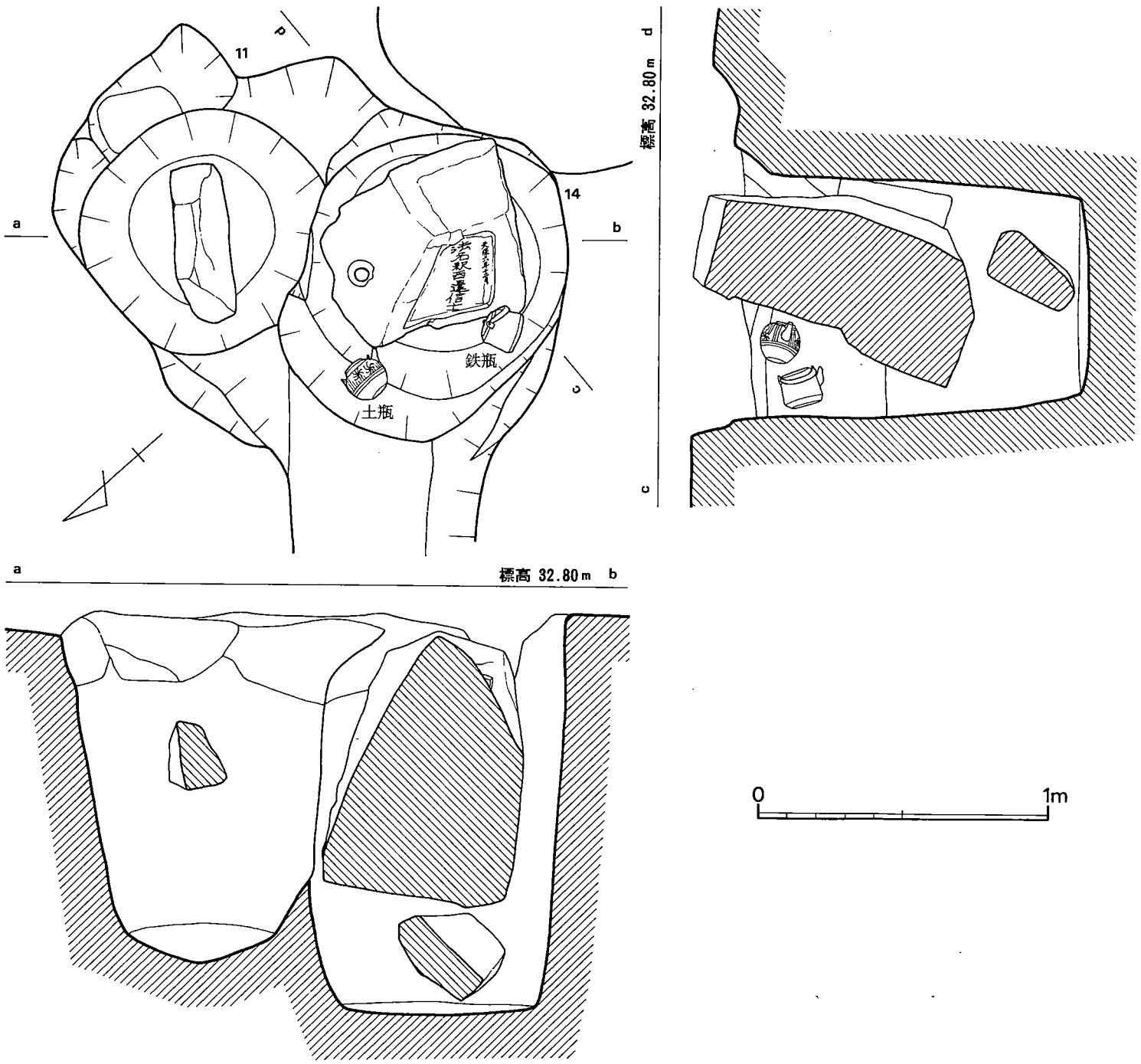
溝Gの堆積土上層，30号近世墓の一部を切り込んだ状況で検出された。軟弱な土質のため墓壙の上縁を確認し難く，墓壙床面より約15cm上位で輪郭を検出したが，長径75cm，短径60cmの不整円形プランを呈す墓壙を有している。墓壙の西寄りに，注口部をN—166°—Eに向けた土瓶が埋置されており，傾斜角度は7.5°注口部を上向けにした状態である。なお土瓶の口には蓋がセットされていたが，土瓶内部には何らの遺物も検出されず，空胴の状況であった。

土瓶は断面ソロバン玉形の胴部を有し，底部は上げ底で，肩部に注口部を貼りつけた形状を呈し，上面の口縁はやや反り返って肩部との間に把手孔を貼りつけている。蓋は中凹みで凹みの中央につまみがある。端部は折り返して土瓶の口縁部を覆う形状である。

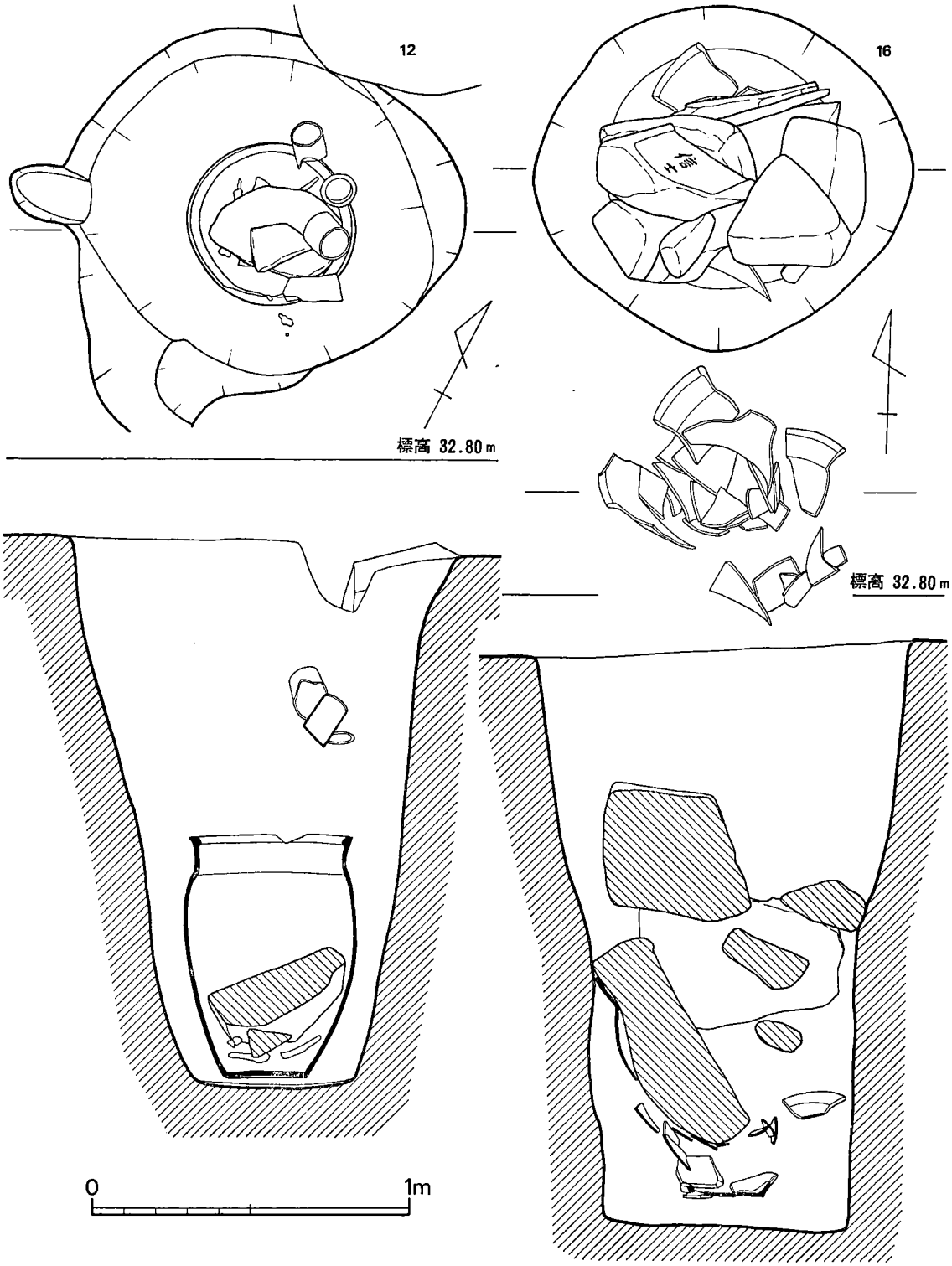
なお土瓶胴部以下には煤が顕著にみとめられる。類似した土瓶は29号近世墓の例にある。土瓶という特種容器の使用は，乳児埋葬あるいは後産処理を考えさせるものである。（小池）

≪29号近世墓（図版92—1，第102図29・第103図29）

18号と34号近世墓の間に埋置されたもので，墓壙の規模は長辺35cm×短辺25cm，深さ14cmを測る。墓壙には注口を北側に向けた土瓶1個が埋置されていた。棺内からは何等検出されなかった。

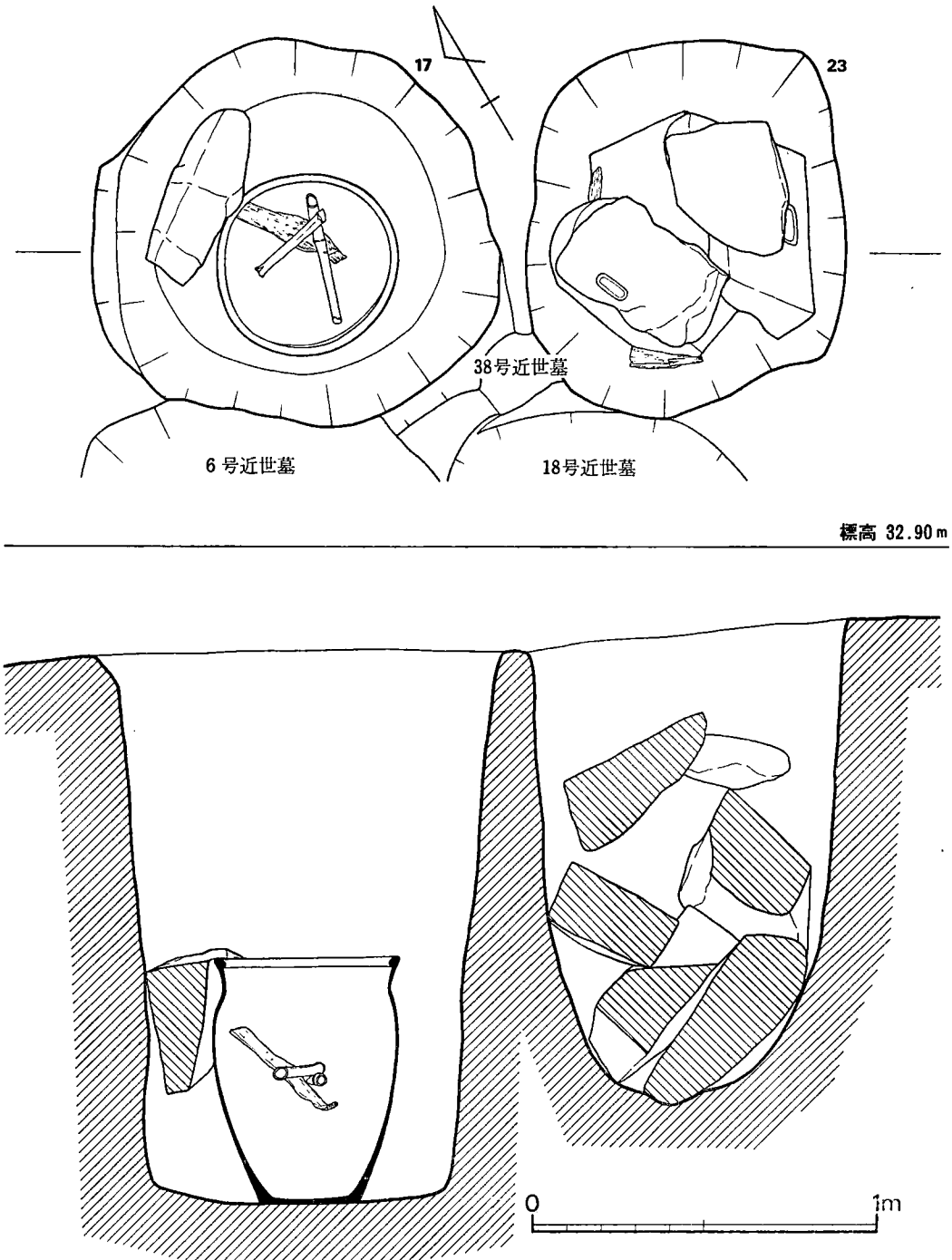


第 92 図　11・14 号近世墓実測図 (1/20)

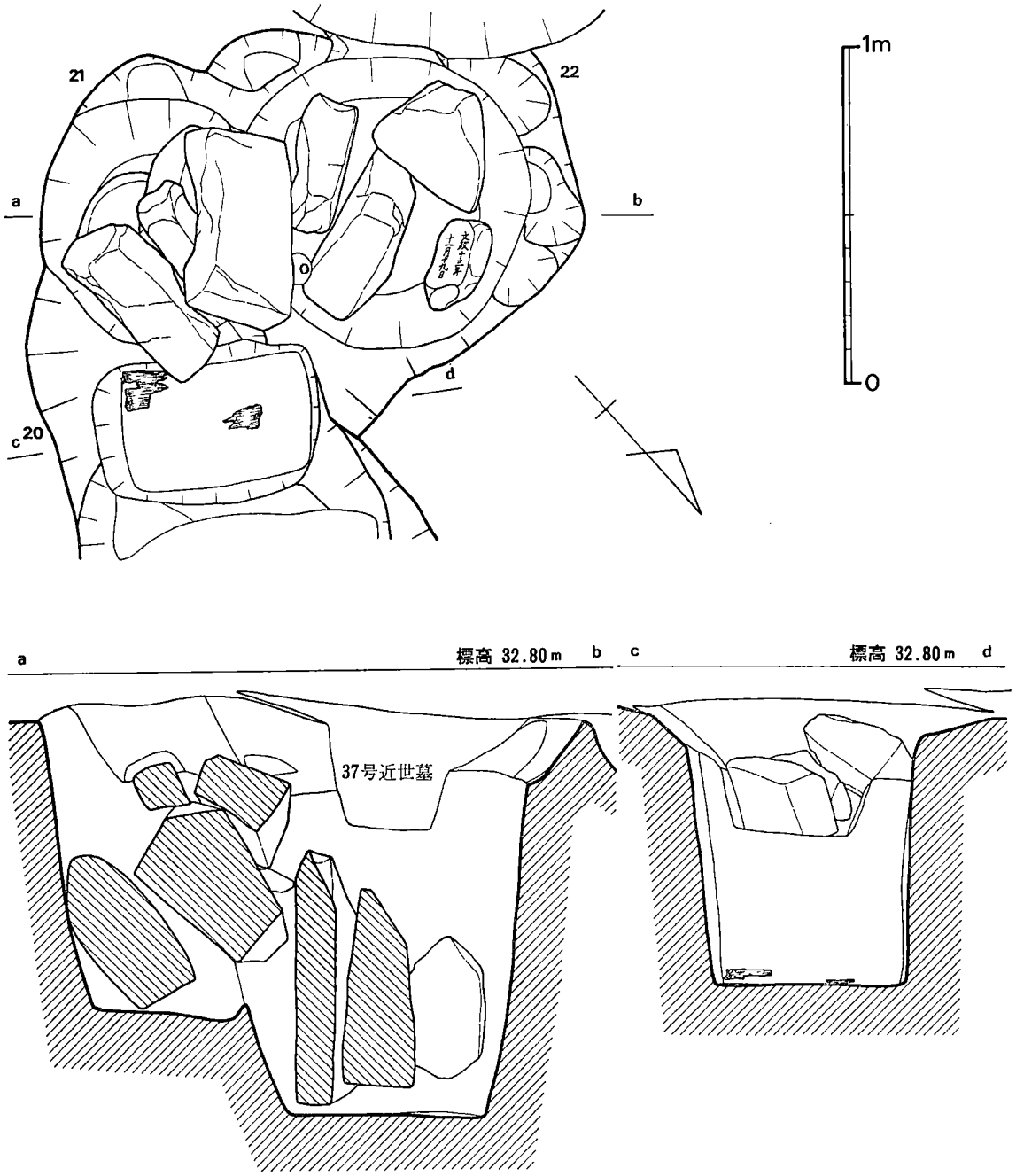


第 93 図　12・16号近世墓実測図（1/20）

第 94 図　墓碑拓影 2 (1/4)



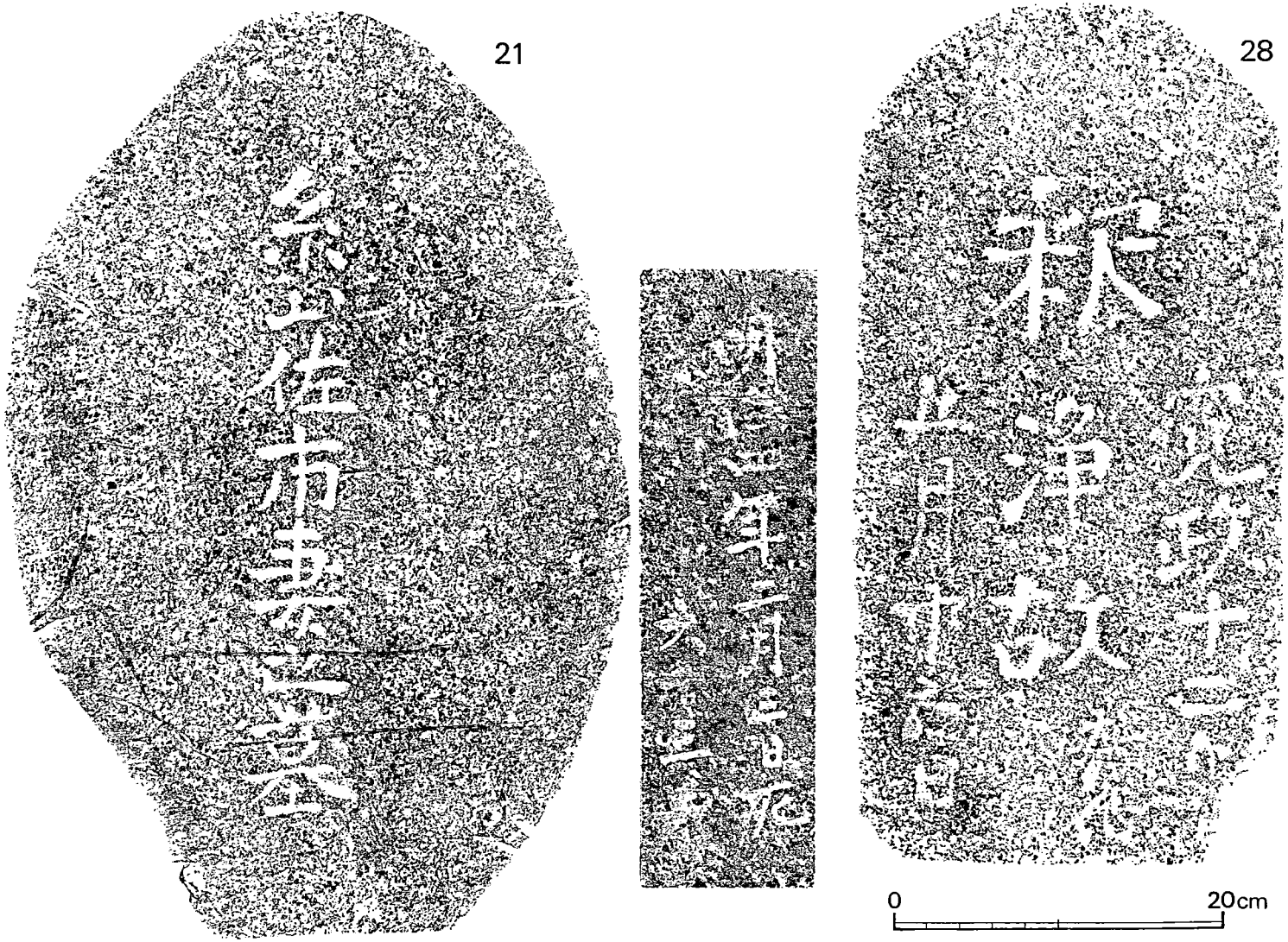
第 95 図　17・23号近世墓実測図（1/20）



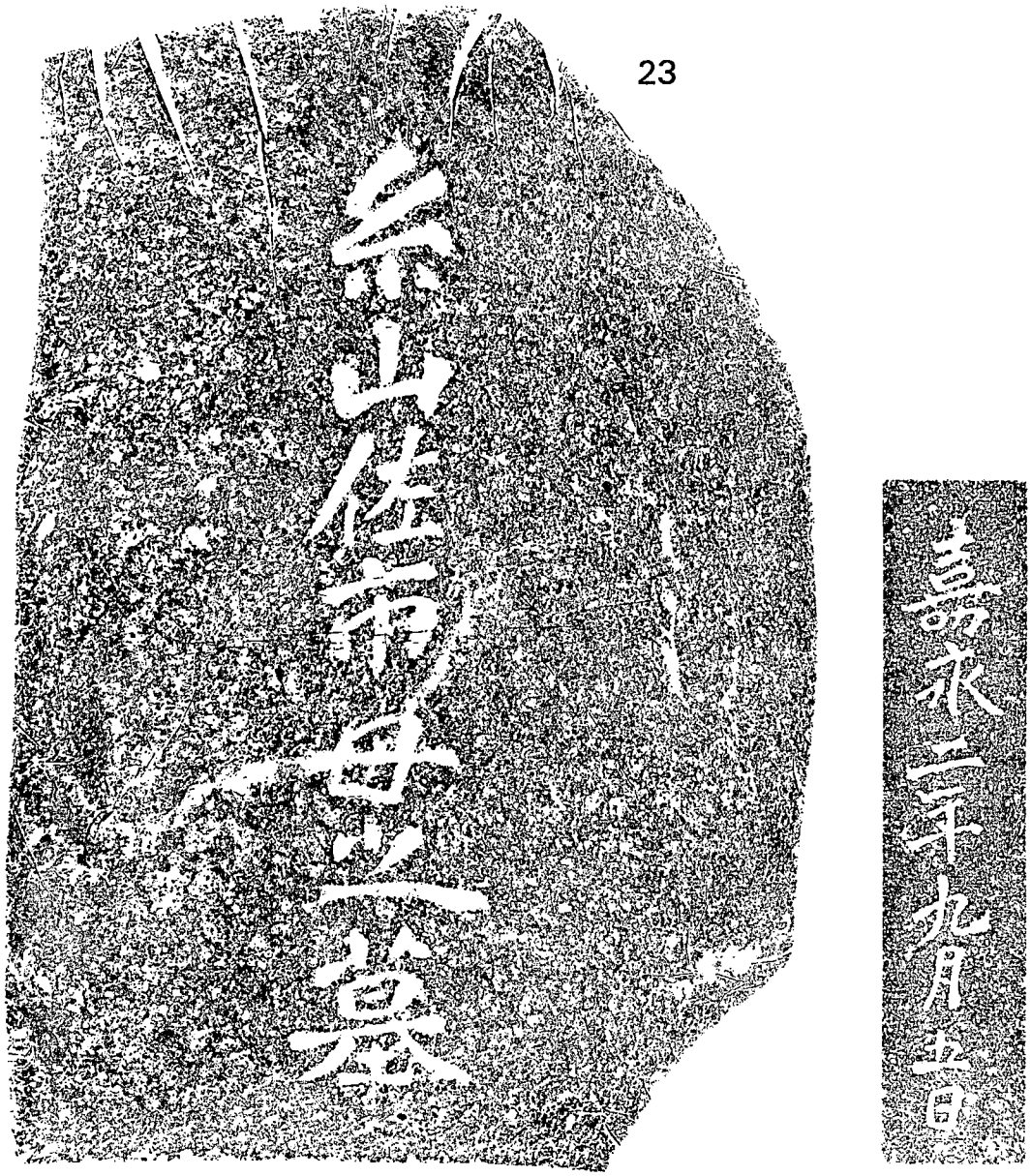
第 96 図　20～22号近世墓実測図（1/20）

第 97 図　墓碑拓影 3 (1/4)

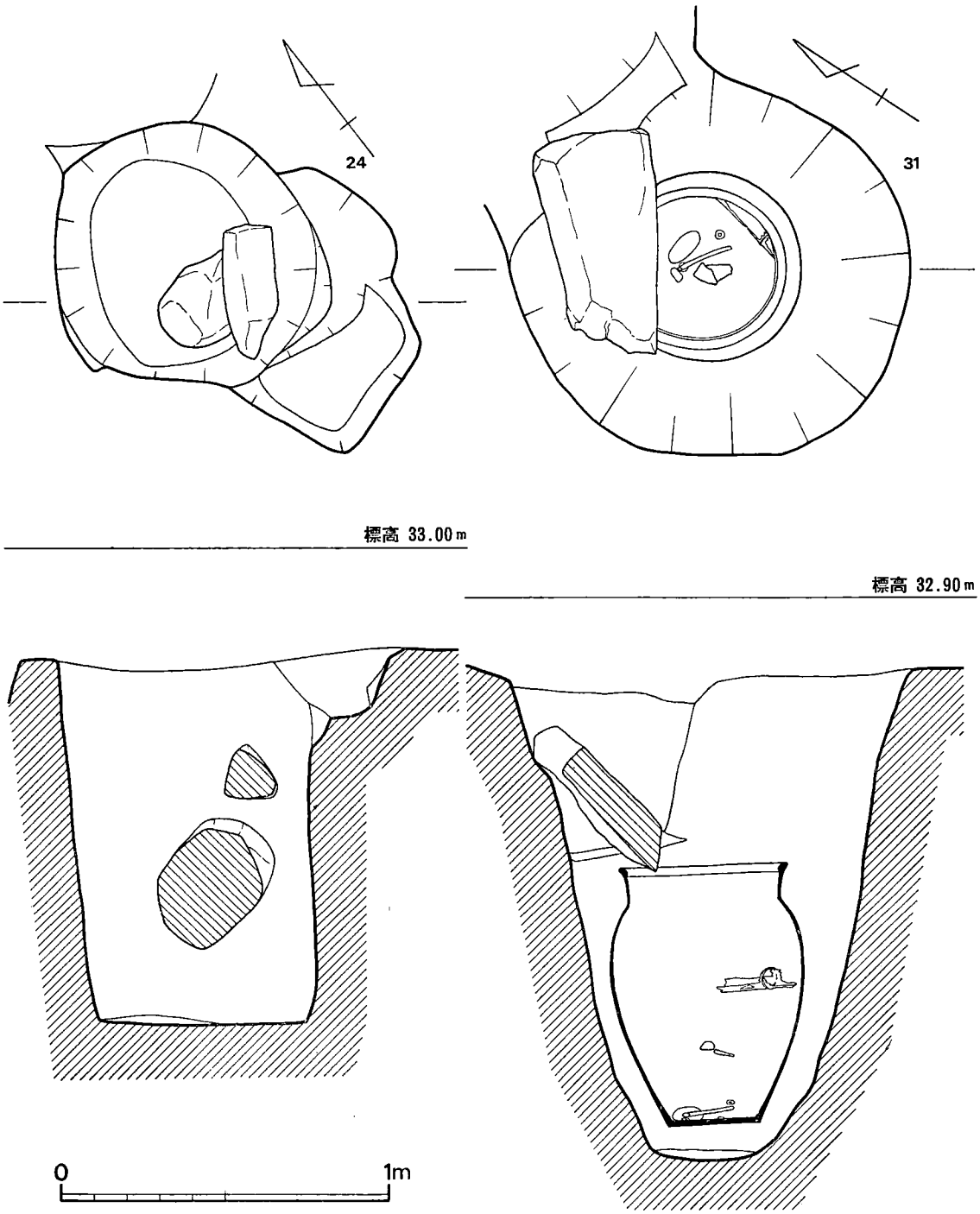
第 98 図　墓碑拓影 4 (1/4)



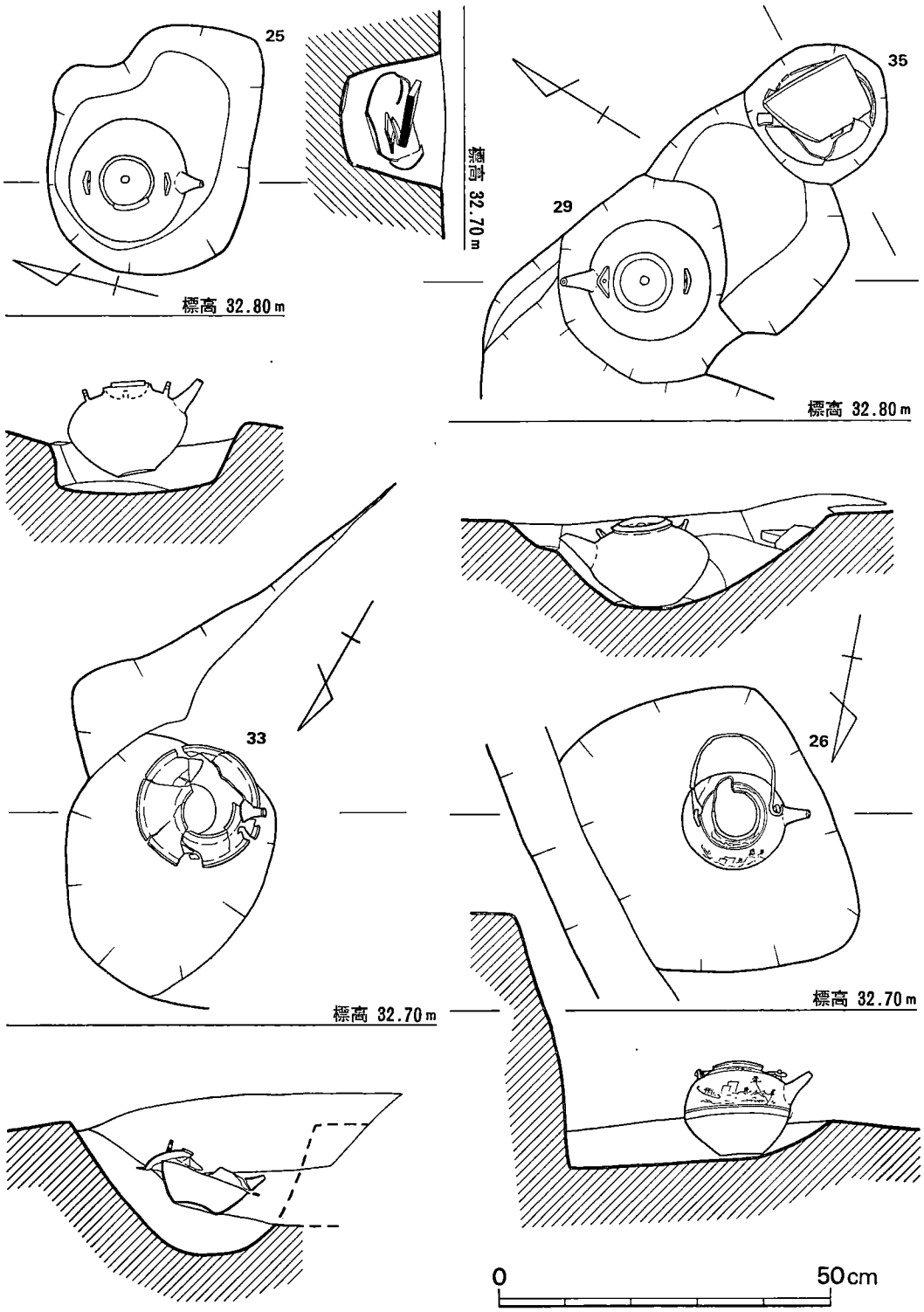
第 99 図　墓碑拓影 5 (1/4)



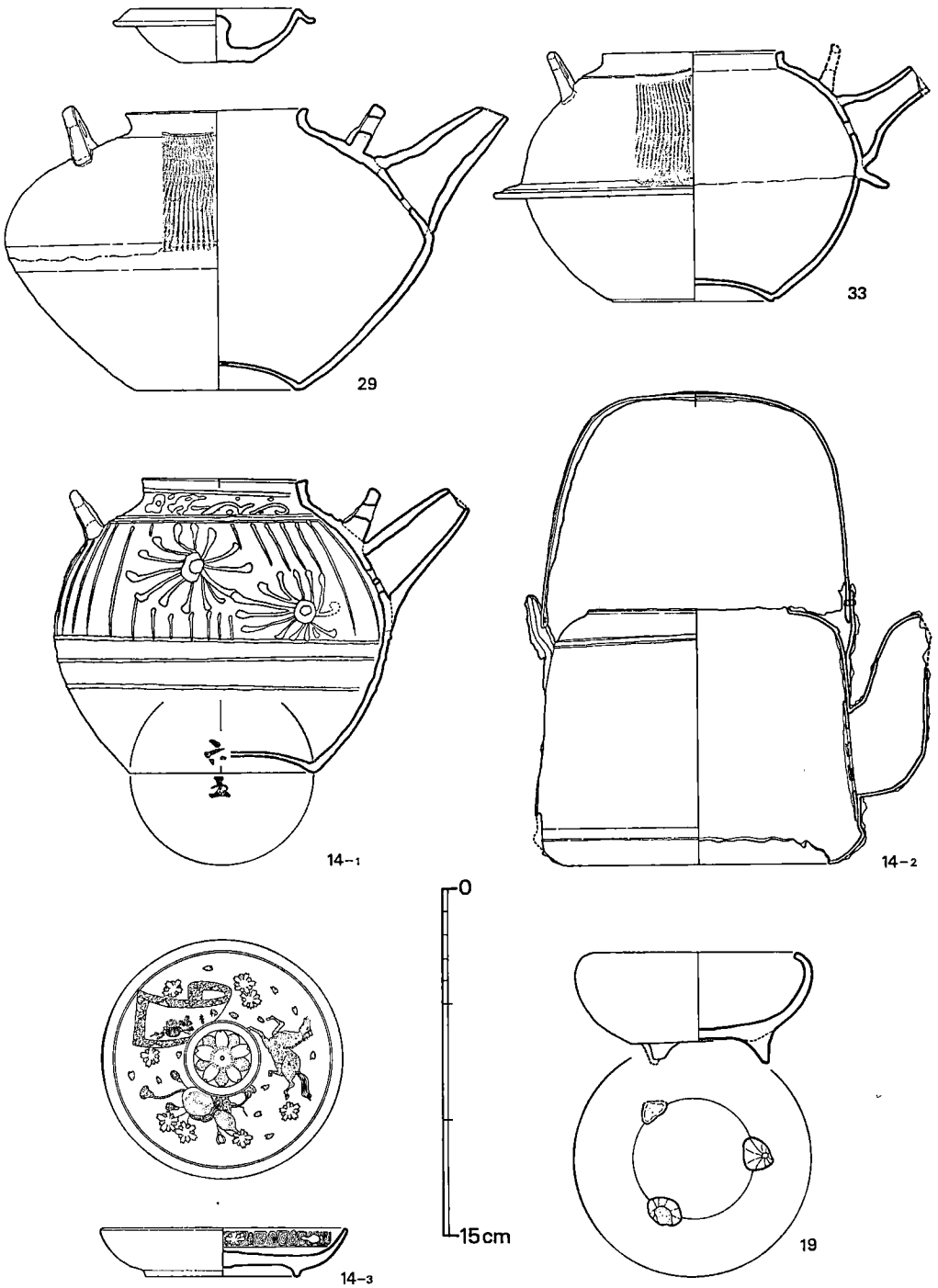
第100図　墓碑拓影 6（1/4）



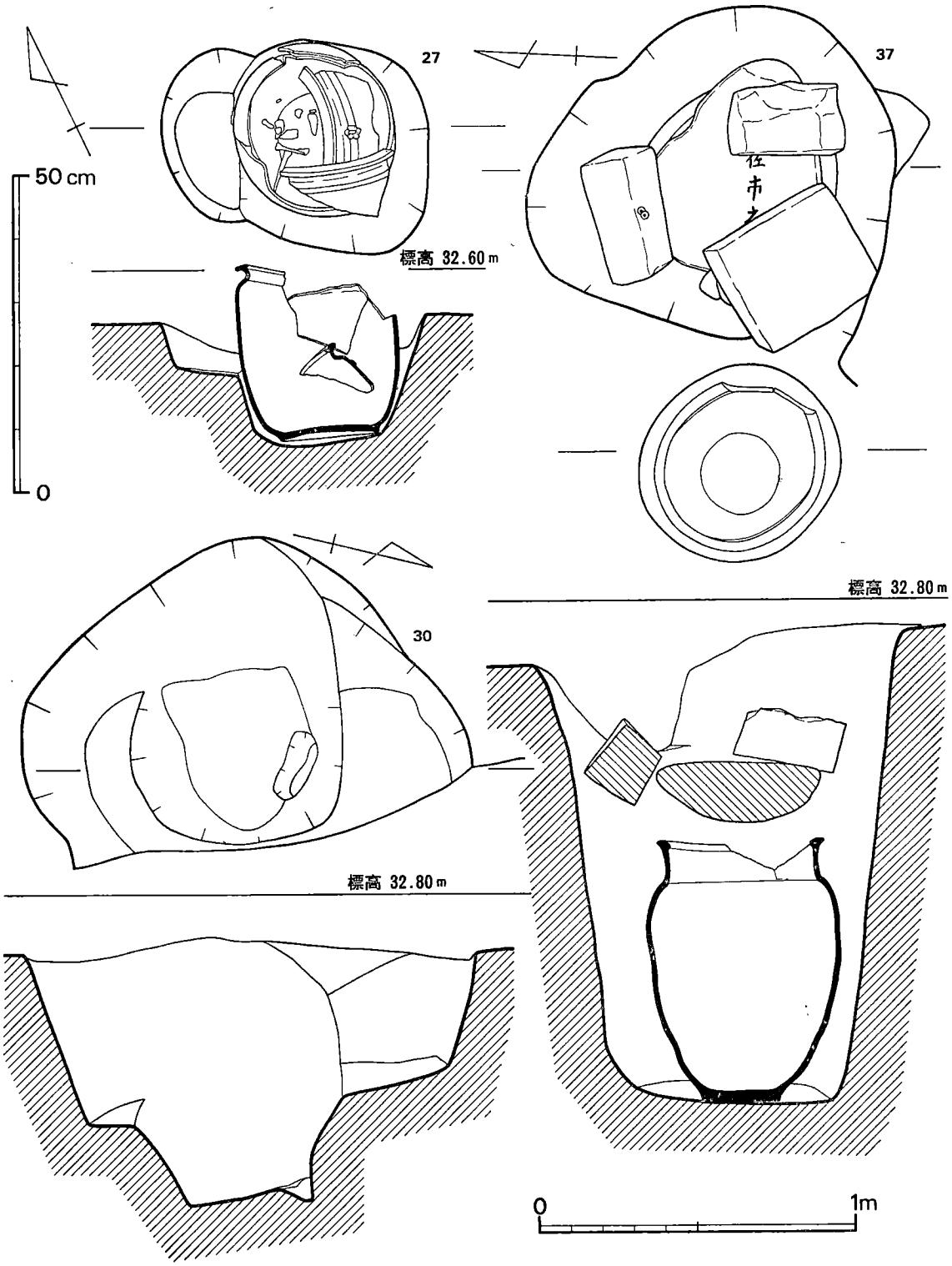
第101図　24・31号近世墓実測図（1/20）



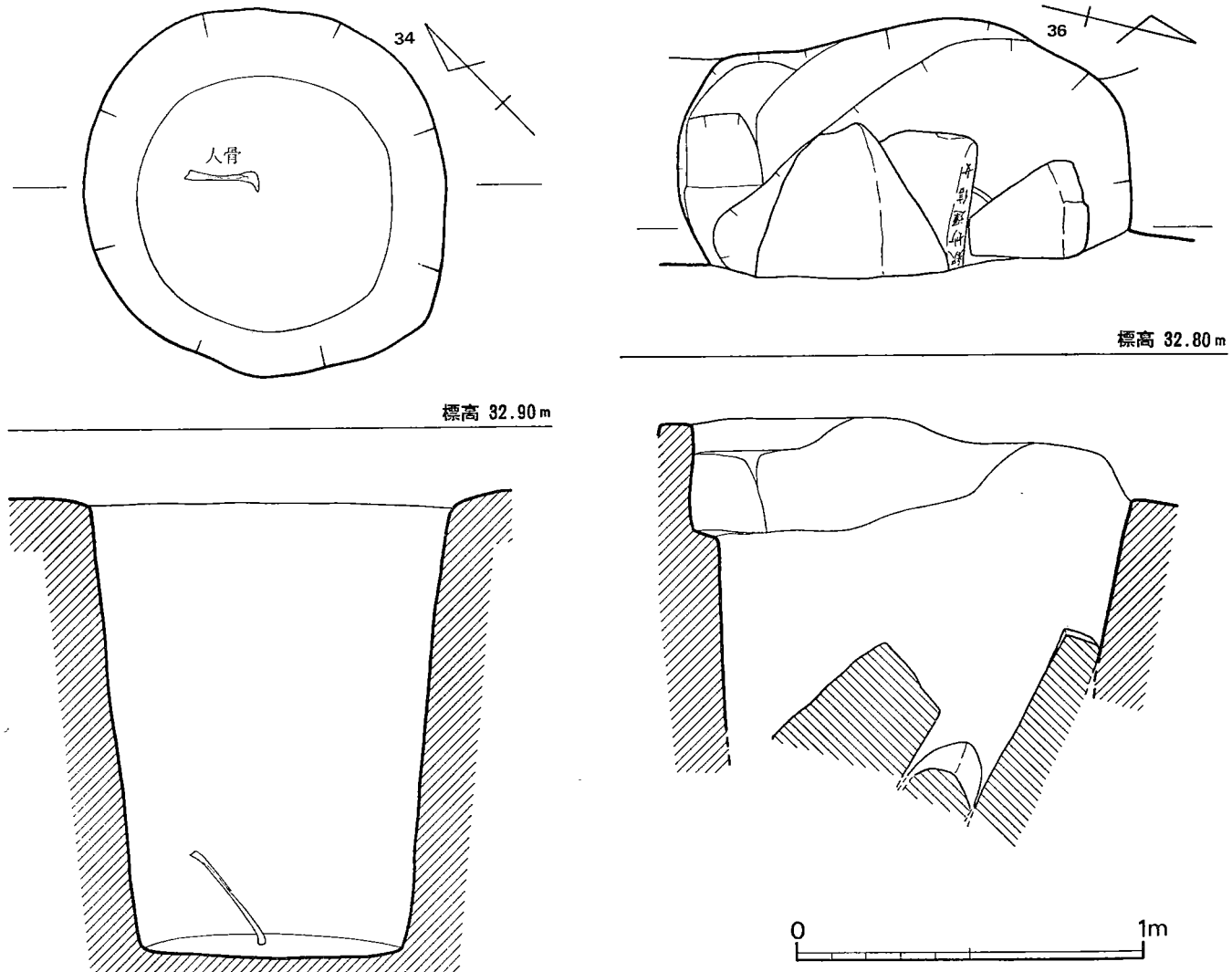
第102図　25・26・29・33・35号近世墓実測図（1/10）



第103図　後産埋納土器・供献土器実測図（1/3）

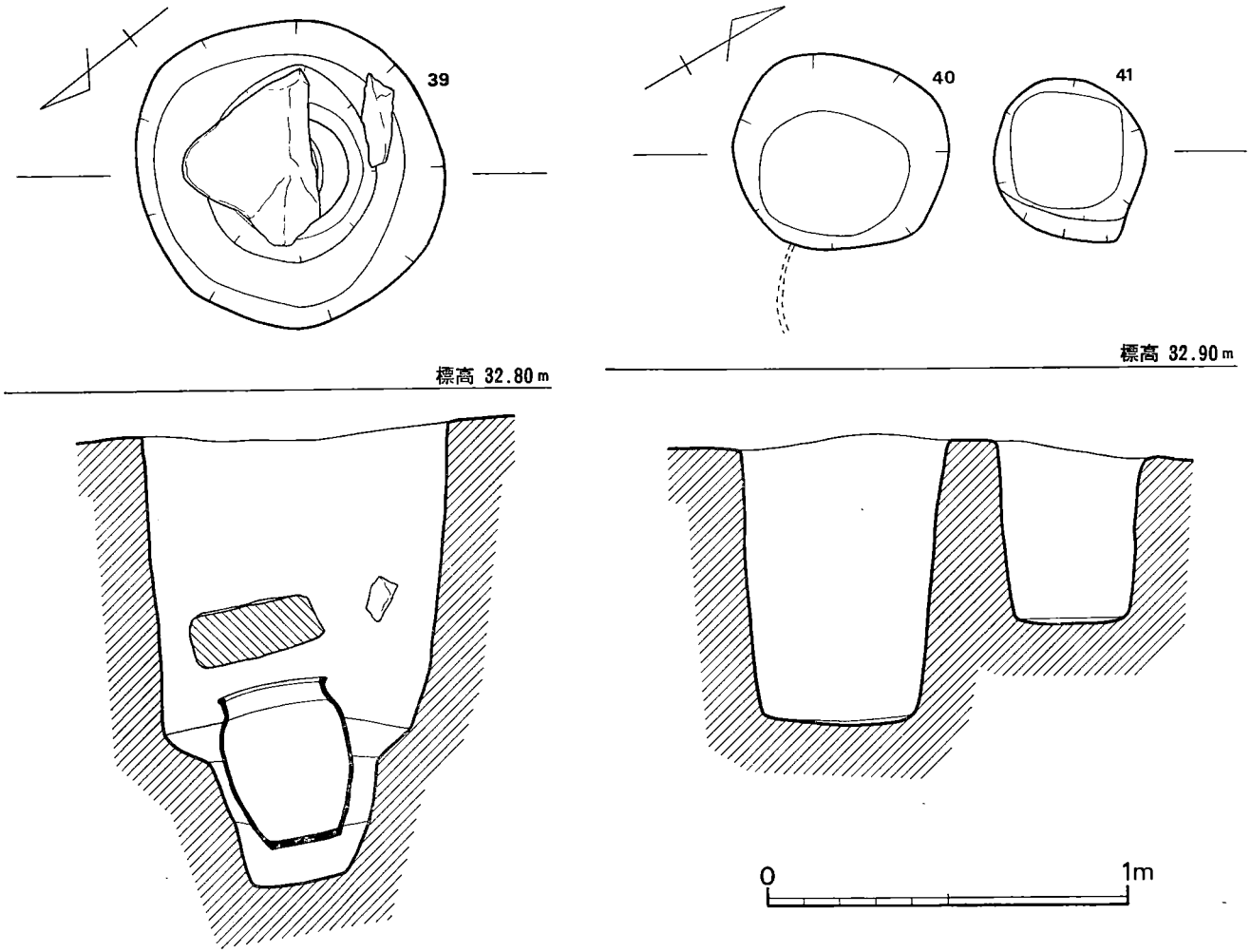


第104図　27・30・37号近世墓実測図（1/10・1/20）



第105図　34・36号近世墓実測図（1/20）

第106図　墓碑拓影 7 (1/4)



第107図　39～41号近世墓実測図（1/20）

≪35号近世墓（図版93—2，第102図35）

29号近世墓の東側で，3号と16号の間に位置する。墓壙のプランは不整円形で，径約40cm，深さ32cmを測る。墓壙内からは底面より若干浮いて，土瓶の上半を打ち欠き，平瓦片で蓋した棺が検出された。棺内からは何ら出土しなかった。

≪37号近世墓（図版94—2，第104図37）

19号甕棺墓を切って12号・22号近世墓と複合して検出された。棺は甕棺で，棺上面からは墓石1，受座石1，方柱状切石1，平石1が陥落した状態で検出された。墓石表面には『糸山佐

表 10　近 世 墓 一 覧 表

No.	墓坑形態	棺	蓋	墓標	戒名・俗名	没年月日	人骨	副葬品	備考
1	不整円形	—		台石				銅銭7	
2	円形	甕棺	石蓋					銅銭5	
3	〃	—		墓石2個	①釈負九童子 ②法號釈誓 太市	萬延元酉年四月十四日（1860） 文政九年十一月四日（1826） 自治民		灯明皿1 竹筒2	
4	〃	甕棺					○		
5	〃	甕棺	石蓋					銅銭4・鉄銭1	
6	不整円形	甕棺						銅銭4	
7	円形	甕棺	石蓋					銅銭3	
8	〃	甕棺					○	銅銭6・数珠玉 キセル1・櫛2	竹・小枝
9	〃	—		墓石	糸山百太郎	文久四年八月十四日（1864）			
10	〃	—							
11	不整円形	—						銅銭1	
12	円形	甕棺	石蓋				○	銅銭1	改葬
13	円形	甕棺	木蓋				○		竹・小枝
14	楕円形	—		墓石	法名釈西還信士 吉蔵？	天保六年十二月（1835）		土瓶・鉄瓶 皿	
15	不整円形	—							
16	円形	甕棺		墓石	法名釈静寛信士 釈妙玄	文久元年三月　一日 七六歳　作蔵（1862） 寛政六年六月十一日（1795）			改葬（？）
17	〃	甕棺						銅銭2	竹・小枝
18	〃	甕棺		台石					小枝
19	〃	—		墓石	糸山吉太郎	明治十七年九月十七日（1884）		香焚	
20	長方形	木棺						木片・釘	
21	楕円形	—		墓石・台石	糸山佐市妻之墓	明治四年二月三日死 六十三歳（1871）			
22	不整円形	—		墓石	釈静休・允吉	文政十三年十一月十九日（1830）			

	墓壙形態	棺	蓋	墓標	戒名・俗名	没年月日	人骨	副葬品	備考
23	楕円形	−		墓石(?)・台石	糸山佐市母之墓	嘉永二年九月五日 (1849)			
24	円形	−							
25	楕円形	土瓶							後産
26	?	〃							〃
27	不整楕円形	甕棺					○		火葬
28	〃	甕棺	石蓋		釈浄故	寛政十二年五月十六日 (1800)		銅銭4	
29	楕円形	土瓶							後産
30	?	−							末掘部分を残す
31	円形	甕棺	石蓋				○		
32	楕円形	−							
33	〃	土瓶							後産
34	円形	−						銅銭3	
35	不整円形	土瓶	平瓦				○		後産
36	?	−		墓石	釈妙運信女			銅銭2	
37	不整楕円形	甕棺		墓石・台石	糸山佐市之墓	明治四年五月二日死 七二歳 (1871)		銅銭5	
38	楕円形	土瓶							後産
39	円形	甕棺		石蓋					二段掘り
40	不整円形	−							竹・改葬(?)
41	〃	−							改葬(?)

表 11　近世墓出土甕棺一覧表

(単位cm)

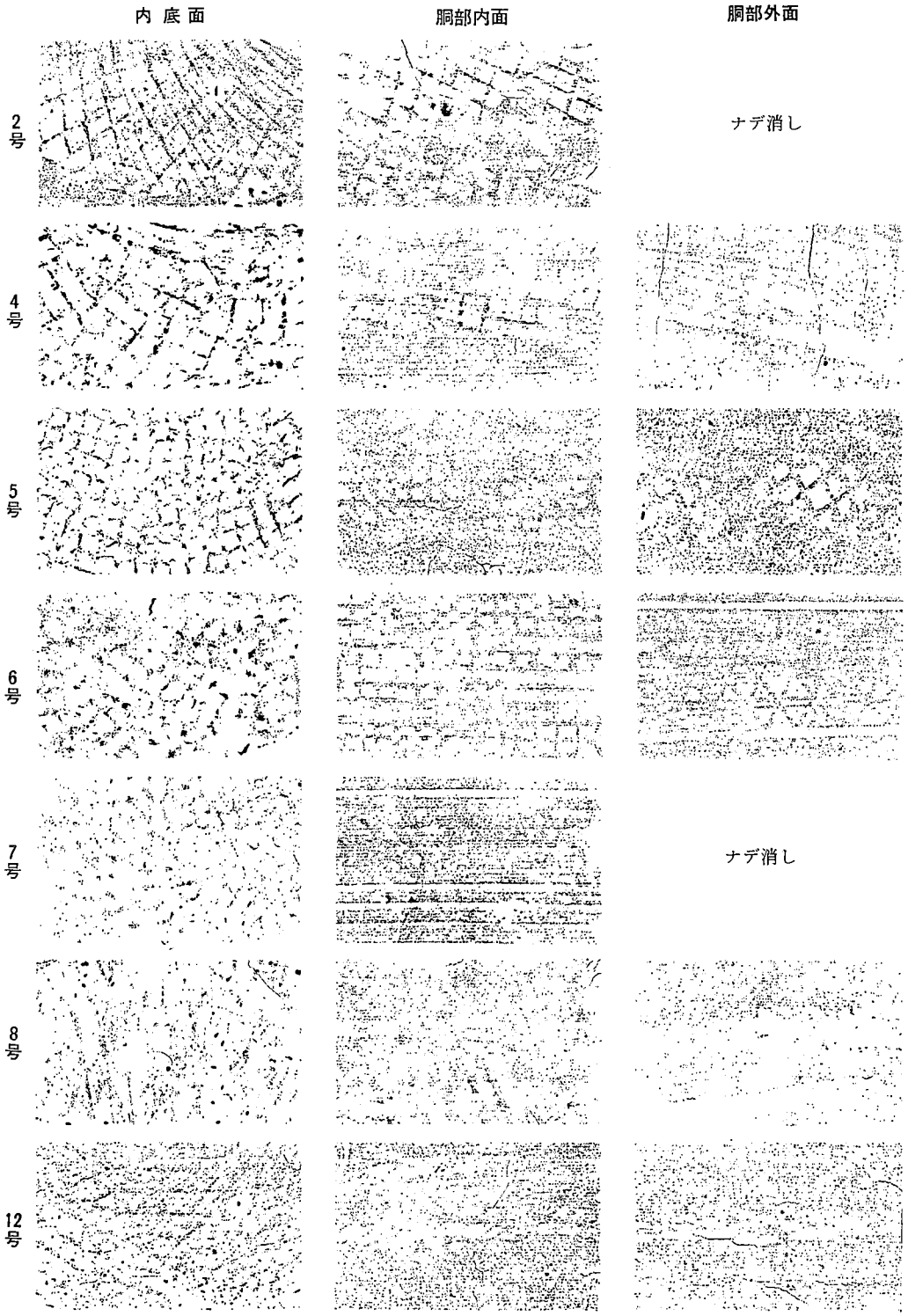
No.	口径	底径	器高	胴最大径	色調	釉薬	沈線の有無	調整	備考
2	52.8	26.4	77.75	57.3	暗赤茶褐色	淡黒色	頸部中位に3条	内底部・胴内面にタタキ痕 外面タタキのちヨコナデ	上底 肩部は余り張らずに緩やかに胴部に移行
4	48.8	26.5	70.7	54.8	(外)灰紫茶褐色 (外)黄褐色	ナシ	肩部下に2条 胴下位に2〜3条	内底部　タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	頸部に段を有す
5	50.0	27.0	72.4	54.4	暗黄茶褐色	暗黄茶褐色	頸部　1条 肩部下　2条 胴下半　3条	内底部　タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	
6	38.0	18.7	51.6	39.5	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	肩部下　5条 波状文　1条 胴部　3条	内底部タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	
7	50.5〜54.6	29.9	78.45	59.3	暗赤紫茶褐色	暗紫黒色	頸部中位に2条	内底部　タタキ 胴内面タタキのあとヨコナデ 外面ヨコナデ. 底部付近ヘラ削り	口縁部のゆがみが著しい 肩部は余り張らない
8	54.2	27.0	78.4	60.0	暗黒茶褐色	暗黒茶褐色	頸部　3条	内底部タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	肩部に〆の刻印アリ
12	51.75	28.2	76.2	55.1	赤茶褐色	赤茶褐色	頸部中位に3条	内底部タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	

No.	口径	底径	器高	胴最大径	色調	釉薬	沈線の有無	調整	備考
13	49.5	25.0	75.1	54.7	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	頸部中位に3条	内底部タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	肩部は余り張らずにスマート 口縁部は外反気味上底
16	50.5	25.4	73.6	52.1	(外)淡赤紫茶褐色 (内)赤紫茶褐色	赤紫茶褐色	肩部下 2条 胴中位 3条	内底部タタキ 内外ともヨコナデ	肩は張らず 頸部中位に段を有す
17	52.3 ~55.2	29.4	71.1	54.95	(外)淡赤紫茶褐色 (内)灰黒褐色		頸部中位 1条 肩部・胴中位下3条	内底部タタキのちナデ 内外ともタタキのちヨコナデ	口縁部のゆがみ著しい 肩は張らない
18	49.4	25.6	76	54.2	暗紫茶褐色	淡黄褐色	頸部・肩部下2条 胴下半 3条	内底部タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	
27	24.0	18.1	27.9	25.1	黄褐色	緑青色		内外ともヨコナデ	花文様の貼付け文2個ある
28	55.0	29.1	86.0	61.0	淡灰紫茶褐色	灰紫茶褐色		内底部タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	肩は余り張らずスマート
31	52.6	28.0	78.6	57.8	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	頸部 1条 肩部下 2条 胴部 7条	内底部タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	頸部に段を有す
37	51.0 ~56.0	31.8	82.2	65.0	暗赤紫茶褐色	暗赤紫茶褐色	頸部中位 2条	内底部タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	口縁部のゆがみ著しい 肩は余り張らずスマート
39	34.5	23.2	46	37.7	暗紫黒茶褐色	暗紫黒茶褐色	肩部下 2条	内底部タタキ 内外ともタタキのちヨコナデ	肩部は丸味をもってやや張り気味

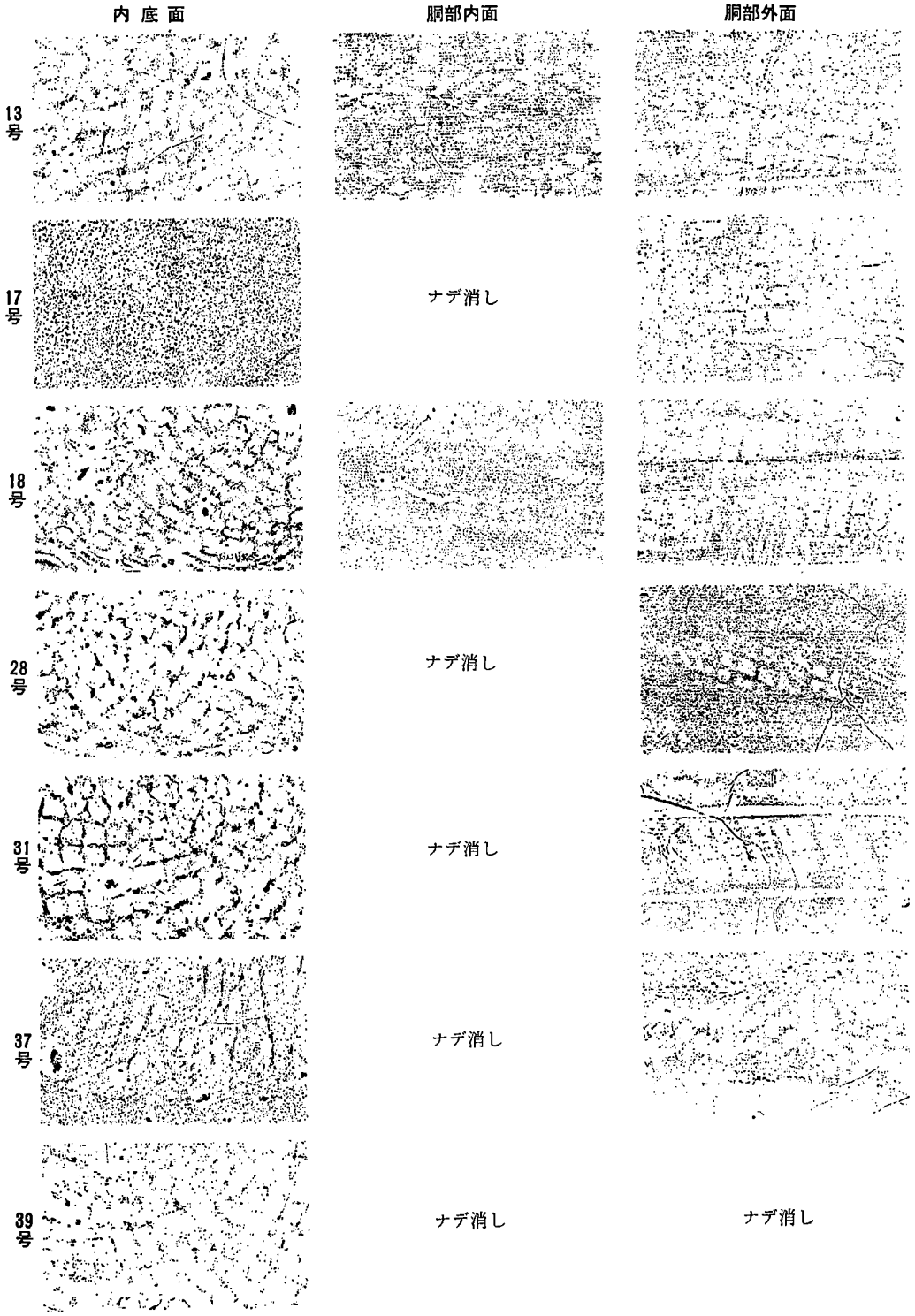
表 12　近世墓出土土瓶一覧表

(単位cm)

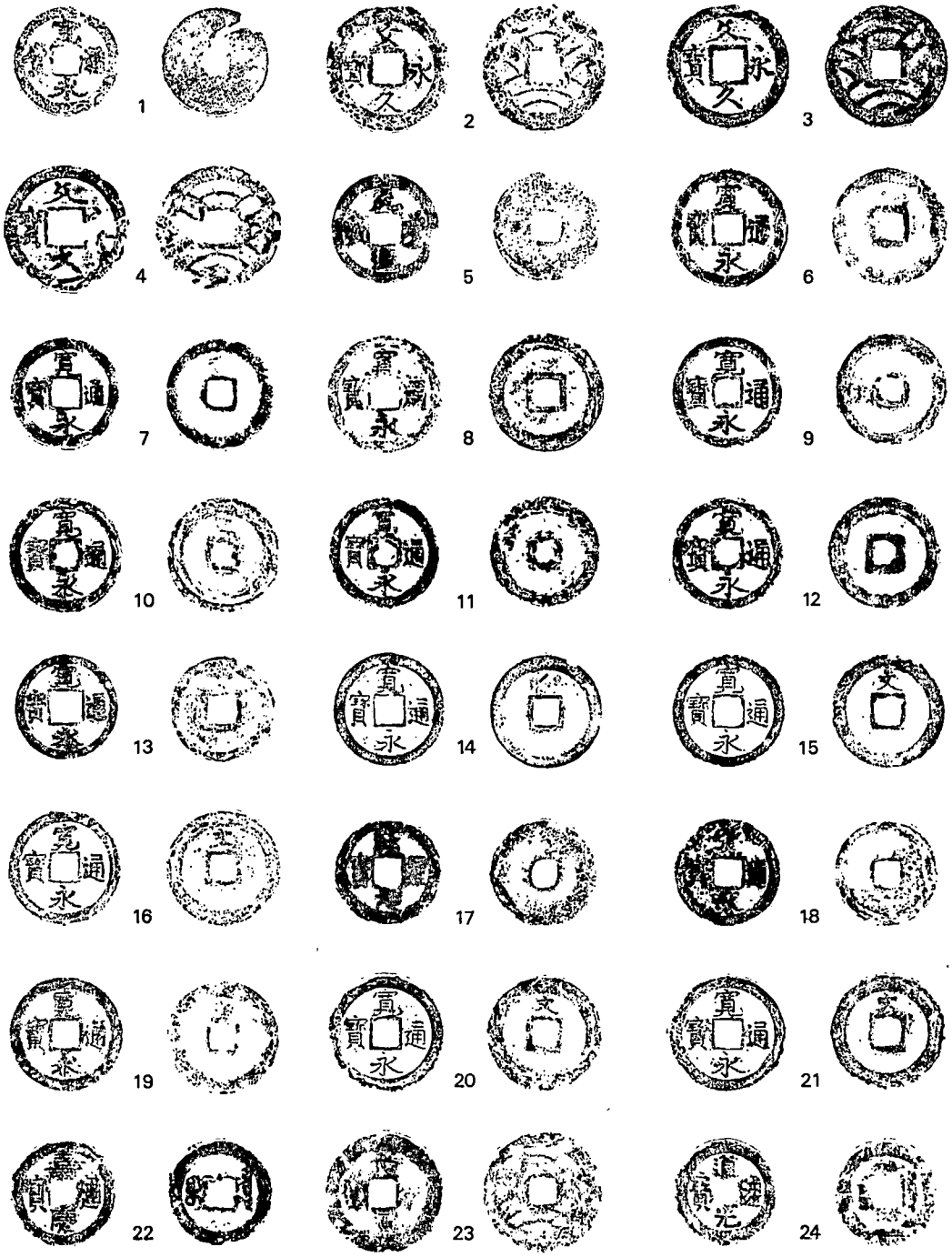
No.	口径	胴径	底径	器高	形態・調整	胎土・釉薬・文様	備考
25	7.8	18.0	6.8	12.25	胴部ソロバン玉状 胴下半ロクロヨコナデ 胴上半飛びカンナ手法 (ロクロ右回転) 口縁部内外・内面ロクロヨコナデ	胎土・焼成：精良，器壁薄い 焼成堅緻で軽い 釉薬：黄釉を胴外面上半に施釉，下半と内面は無釉 文様：胴外面上半に飛びカンナ	胴下半に炭の塗布がみられる
26	7.2	15.6	8.1	13.3	胴部球形 胴部内外ともロクロヨコナデ	胎土・焼成：精良，焼成良 釉薬・文様：白釉の下地による，帆かけ舟・松・人家の文様の染付 胴下半と内面は無釉	把手は鉄製
29	8	18.6	7.3	11.9	胴部ソロバン玉状 胴下半ロクロヨコナデ 胴上半飛びカンナ手法 (ロクロ右回転) 口縁部内外面ロクロヨコナデ	胎土・焼成：胎土精良，器壁薄く焼成堅緻で軽い 釉薬：胴外面上半に黄釉を施釉している他は無釉 文様：胴外面上半に飛びカンナ	蓋あり
33	7.9	14.8 (最大径 17.7)	7.1	10.65	ぶんぶく茶釜の土瓶，つば付 胴下半・口縁内外・内面ともロクロヨコナデ 胴外面上半に飛びカンナ手法 (ロクロ右回転)	胎土・焼成：胎土精良，器壁薄く焼成堅緻で軽い 釉薬：胴外面上半に暗茶褐色の施釉，下半と内面無釉 文様：胴部外面上半に飛びカンナ	
37	8.2	18.2	7	13.0	25と同じ	25と同じ	蓋あり
38	9	16.4	8.2	12.4	胴部球形 内外ともロクロヨコナデ	胎土・焼成：胎土精良，器肉薄く焼成堅緻で軽い	
14	7.3	14.6	8.2	12.6	〃	〃	蓋あり 底部に六五の炭文字あり，14号近世墓の供献品，他に皿1個と鉄瓶(ホーロー)1個あり



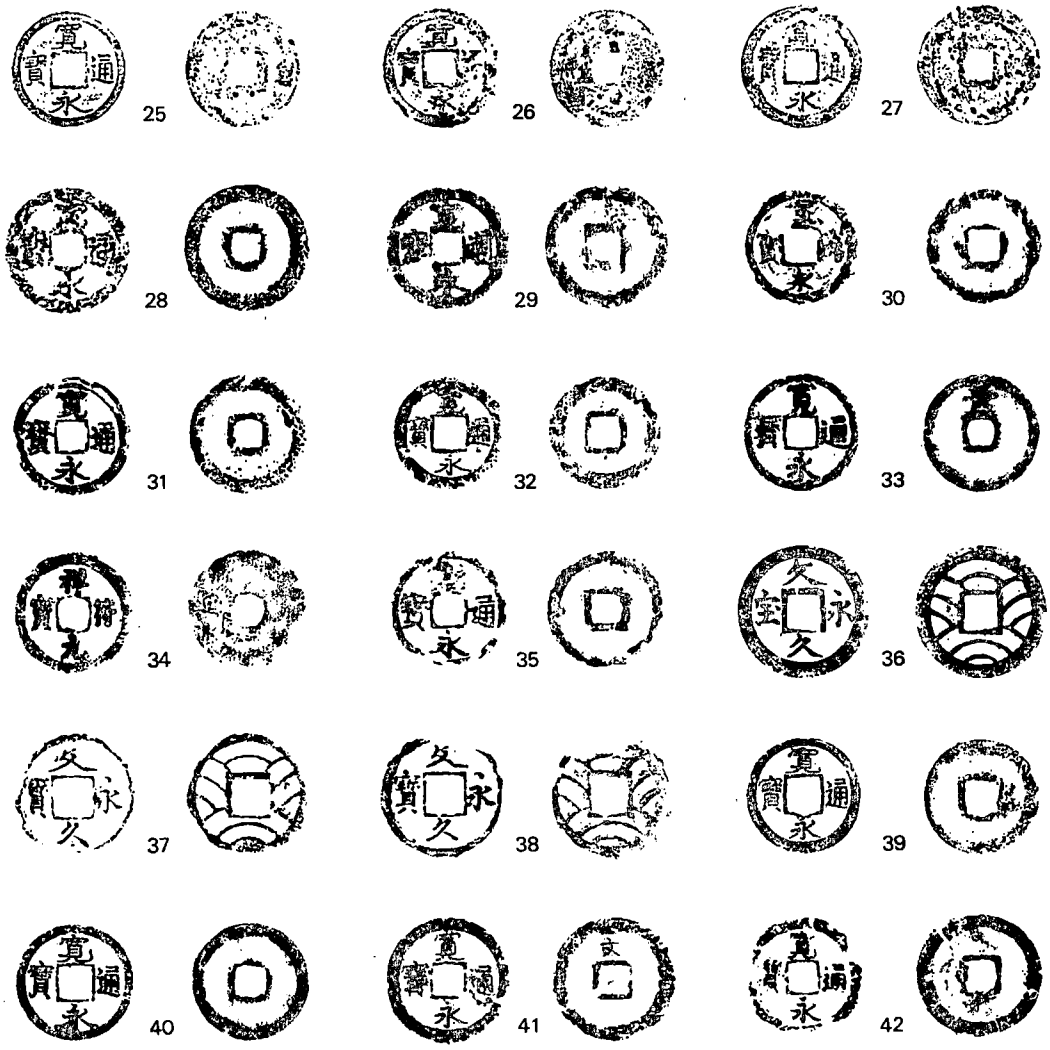
第108図　近世甕棺タタキ目拓影 1 (1/2)



第109図　近世甕棺タタキ目拓影 2 (1/2)



第110図　古銭拓影 1 (2/3)



第111図　古銭拓影 2 (2/3)

表 13　近世墓出土古銭計測表

単位（mm, g）

墓番号	拓影図番号	銭貨名	直径	内径	内面窓径	厚さ	重さ	出土位置
1号	1	寛永通寶	23.4	18.5	タテ 5.7 ヨコ 5.5	1.1	2.95	フク土
	2	文久永寶	27	20.5	6.7	1.2	3.20	〃
	3	文久永寶	26.9	20.9	6.5	1.2	4.20	〃
	4	〃	27	21.4	7.5	1	2.70	〃
		不明（2枚）	24.8	20.6	6.5	2.3	5.20	〃

単位（mm, g）

墓番号	拓影図番号	銭貨名	直径	内径	内面窓径	厚さ	重さ	出土位置
		不明	24.3	18.9	6	1.3	1.80	〃
2号	5	元豊通寶	23.8	18.3	6.4	0.9	2.55	棺内
	6	寛永通寶	22.5	19.9	5.9	1	2.95	フク土
	7	〃	24.2	18.8	6	1.1	2.25	〃
	8	〃	25.6	20.2	タテ 5.7 ヨコ 5.9	1.3	3.66	〃
		〃	24.6	20.3	タテ 6.9 ヨコ 6.2	1	2.60	〃
5号	9	寛永通寶	24.5	19.4	タテ 5.0 ヨコ 5.6	1.2	3.50	〃
	10	〃	25.3	19.9	タテ 5.9 ヨコ 5.7	1.3	3.40	〃
	11	〃	25.9	19.8	5.3	1.6	4.60	〃
	12	〃	24.6	19.3	6.1	1.3	3.20	〃
		不明	24.5	不明	不明	1.5	2.1	〃
6号	13	寛永通寶	22.8	18.7	6.7	1.1	2.90	墓穴
	14	〃	24.9	19.6	タテ 6 ヨコ 5.6	1	3.80	〃
	15	〃（文）	24.9	20.2	6.2	1.1	2.65	〃
		不明	24	18.7	6.2	1.1	3.30	棺内
7号	16	寛永通寶(文)	25	19.8	5.9	1.4	4.3	〃
	17	照寧元寶	24.9	18.2	タテ 6.2 ヨコ 5.7	1.2	2.80	〃
	18	寛永通寶	23.4	18	6	1	3.45	〃
8号	19	〃（文）	25	20	5.7	1.3	3.45	〃
	20	寛永通寶(文)	25.3	20	5.5	1.4	3.6	〃
	21	〃（文）	25.3	20	5.8	1.1	2.7	〃
	22	嘉慶通寶	24.6	17.9	5.8	1.6	4.16	〃
	23	文久永寶(?)	26.2	19	6.2	1.3	4.10	〃
	24	道光通寶	22.5	16.9	5.25	1.7	3.8	〃
	25	寛永通寶	23.1	19.1	5.9	1.2	2.5	〃
	26	〃	23.5	18.5	タテ 5.9 ヨコ 5.5	1.2	3.85	〃
	27	〃	24.6	19.15	タテ 5.5 ヨコ 5.3	1.4	4.5	〃
11号		寛永通寶	25.4	19.9	6	1.1	2.2	〃
17号	28	寛永通寶	25.2	19.4	6	1.25	2.45	〃
		不明	22.2	18.1	5.8	1.4	2.40	〃
28号	29	寛永通寶	24.8	19.4	5.3	1.1	2.25	フク土
	30	〃	22.3	18.9	タテ 6.5 ヨコ 6.2	1.2	2.7	〃

単位（mm, g）

墓番号	拓影図番号	銭貨名	直径	内径	内面窓径	厚さ	重さ	出土位置
		不明	22.1	17.9	6.6	1.2	1.7	フク土
34号	31	寛永通寶	23.7	19	5.9	1.2	2.5	棺内
	32	〃（九）	22.5	19	6.3	1	1.55	〃
	33	〃（長）	23.4	19.5	5.7	1.2	2.25	〃
36号	34	祥符元寶	24	19.2	6	1.1	3.25	フク土
	35	寛永通寶	24.2	20	5.5	1.5	2.75	〃
37号	36	文久永宝	26.3	20.5	6.2	1	3.25	棺内
	37	文久永寶	24.3	21.4	7.7	1.3	1.85	〃
	38	〃	24.4	21.4	7.3	1	1.9	〃
		寛永通寶（？）	25	20	5.5	1.3	1.9	〃
	39	寛永通寶	23	19.2	6.6	1.2	2.4	〃
表採	40	〃	23.5	19.8	6.7	1	2.8	〃
38号貯穴	41	〃	24.9	19	6.4	1	2.1	上部撹乱内
44号貯穴	42	〃	24	18.6	5.4	1	1.9	44号貯穴

市之墓』の墓碑名が，裏面には『明治四年五月二日死七十二歳』と没年月日が刻まれている。棺内から寛永通宝５枚，文久永宝３枚が出土した。（井上）

(4) ま と め

a．平安時代の土壙墓について

10号土壙墓の時期は，副葬されていた８個の土師器皿で想定できる。口径11～11.8㎝，底径7.1～8.5㎝，器高2.2～2.5㎝を測り，底部の切り離しはヘラ切りで，その多くは板目状圧痕を残している。この種の土師器皿は，太宰府町君畑遺跡18号墓（註２）に良好な一括土器があり，口径・底径・器高，ヘラ切りによる底部の切り離しなど極めて共通しているタイプである。前川威洋氏の編年（註３）からすると，御笠川南条坊遺跡土師器の分類のⅠ－２Ａに比定され，平安時代の３期に相当する。年代としては10世紀後半～11世紀初めが考えられているものである。

また，本遺跡の門田地区から発見されている木棺墓（註４）も，ほぼ同じ時期に比定できるが，木棺墓の方がやや新しい傾向がある。

b．近世墓について

検出された近世墓は41基で，墓地はさらに東側の未発掘地区に続くためその全貌は不明である。墓地形成の時期は残存する墓碑から少なくとも寛政６年（1792）～明治17年（1884）の間であることが判る。不明の墓を多く残すが形成のあり方，出土遺物等からしてさほど前後しない江戸時代末期に中心をもつ時期が考えられよう。また，墓碑名から糸山家一系の墓地であったこともいえる。

この墓地は現在でもこの上白水に在住される糸山大作氏の先祖一系の墓地であり，糸山氏の話によると昭和初期まで墓地とし墓参りされていたようである（註５）。しかし，戦後まもなく一部改葬され那珂川町安徳の明応寺に納骨された。従って，その後は墓地としての機能を失い畑として耕作されていたことが判った。

調査時にも12号近世墓から改葬時に使われたと思われる骨壺が発見されたり，３・16号近世墓から墓石２個が一つの墓壙内から出土することから改葬時の撹乱が想定されていた。

墓壙の形態は円形・楕円形を呈すものが大半で，棺材としては土壙（桶棺の可能性あり）18基，甕棺16基，木棺１基である。蓋としては石蓋のもの７基，木蓋のもの１基，平瓦で蓋したもの１基の他は不明である。木蓋として使用された14号近世墓出土の板材は九州大学農学部松本教授に樹種同定していただきヒノキ属の板材であることが判った。

41基中火葬されたものは27号近世墓１基である。

墓　碑　戒名・俗名が刻まれた墓碑は３・９・14・16・19・21・22・23・28・36・37号の11基台石のみのもの１・18号の２基である。墓石は14・16―１号が花崗岩の切り石の角山形である他は，全て自然石に戒名・俗名を刻み込んだ墓碑である。

墓碑には正面中央に戒名，その両側に没年月日を配したもの16―２・19・28号の３基，中央に戒名，その右側に没年月日，左側に俗名を配したもの14号の１基，正面中央に戒名，両側に没年月日，裏面に俗名を配したもの３―１・３―２号の２基，正面中央に戒名，左側に俗名，裏面に没年月日を配したもの22号の１基，正面中央に，戒名，裏面に没年月日・俗名を記したもの16―１号の１基，正面中央に俗名，裏面に没年月日を記したものは９・21・23・37号の４基である。

系図・文書等の資料は糸山大作氏宅や明応寺にも現存せず，被葬者の関係は不明な点が多い。わずかに21・23・37号の関係が俗名から知り得るのみである。糸山佐市の母（23号）→糸山佐市（37号）・糸山佐市の妻（21号）の関係である。墓壙・墓碑等からみて９・10・32・40号は子供の墓であろう。

甕　棺　棺材として甕棺が利用されたものは16基である。その甕棺には口径50㎝前後，器高80㎝前後の大型品と，口径30～40㎝前後，器高50㎝前後の小型品がある。さらに，小型品には形態・釉調とも他と明らかに異なる27号例がある。

27号例（図版97―２，第89図27）は張りのない長い胴部に短かい頸部がつき，平坦で分厚い

口縁部をもった甕である。淡黄色の釉を下地に飴釉・緑釉の流掛けしたもので，肩部には貼り付けの花文を一対配している。いわゆる高取焼系のものであろう。

しかし，他の長胴で張りのある胴部に緩やかに外反した立ち気味の口縁部がついた甕で，底部は平底かわずかに上げ底のものが多く，口唇部内面を肥厚しているのが特色である（図版95～98，第89図）。また，外面頸部や胴部には数条のヘラ描き様の沈線が巡り，6号例（第89図6）のように沈線間をヘラ描き波状文で埋めたものもある。製作方法は「叩き」技法による輪積み成型で，内外に「叩き目」の痕跡を残している。しかし，内底部を除きロクロヨコナデ調整でその大半は消されている。「叩き目」（第108・109図）には正方形・長方形・斜格子の格子目文等があり，6号例外面のような斜格子目と平行条線を組み合せた特殊な叩き目（第108図）もある。釉薬は内外に施され，口唇部はふきとったものが多い。

釉調は暗茶褐色（黒茶色）・暗赤紫色・黄灰褐色の3種である。

この種の甕は，一般に石甕（こくがめ）・飯胴甕（はんどうがめ）などと呼ばれ，江戸時代以来，穀物・水・酒・味噌・醤油等の貯蔵甕として，また紺屋の染料入れなどとして盛んに使用されてきた。一方，筑前地方では死人甕として需要が多かった甕である。それも明治時代までは需要が多かったが，大正期に入って衰退し，戦後は，農家の自給自足の経済がくずれ，大甕による貯蔵や仕込みが不必要となり，一方金属製・合成樹脂などによる容器の変革でその需要は全く絶えてしまったようである。

この種の大甕の生産窯として知られているのは佐賀県武雄市多々良窯（註6），東松浦郡相知町押川窯（註7），同町横枕窯（註8）などが有名である。昨今まで「押川甕の系譜」をひく藤田勇氏の横枕窯で一部生産されていたが，それも閉窯となり，今では全く生産されていない。しかし，大甕造りの伝承技法の記録が現在残されている（註9）。また，天明四年に書かれた『肥前物産絵図』の第4帳「焼物大観」に大甕の製作過程の絵図が描かれている。図説には「当時は馬場組梶山村の内押川山にて焼き，焼き薬も村内より取出しつかふなり」と記されている。従って，その絵図は「押川がめ」の製作工程を描いたものであることは確かのようである（註10）。

製作技法は大型のため一般の技法とは明らかに異っている。「武雄古唐津系陶芸技法調査記録」（註11）によると図版103に示すように，まず，底作りからはじめ，あらかじめ作っておいた粘土ひもを段つなぎ式に胴中位まで4～5段輪積みし，「シユレー」（外側の叩き道具）・「イキャー」（内側の叩き道具）と叩ばれる叩き板で内外から叩きしめて作り上げていくのである。それとともに外側は焚火により，内側は「火鍋」をつるし粘土の乾燥をはやめる。そしてロクロを回転させ成型していく。さらにその上に輪積みを数段かさね，「叩き」，「火鍋吊し」をくりかえし，再びロクロを回転させ成型し，胴上半部を作り上げる。最後にロクロを回転させ，縁作りし，大甕が完成する。その間，形の崩れを防ぐため巻きひもを巻く。出来上っ

た製品は２人の工人が「縄ひも」を組み合せ，ロクロ台よりおろし，自然乾燥に入る。乾燥した製品は釉薬かけの工程をへて窯入りする。

このような大甕の製作工程は本遺跡の甕棺の製作方法を知る上で極めて重要である。15基の甕棺には若干の差異はあるが，形態的にはほぼ同一型式内で把握しうるタイプである。また，叩き技法，口唇部の釉のふき取りなど極めて共通している。同一系窯で焼かれたものの可能性が高いといえよう。生産窯についてはまだ不明な点が多いが，現在知りうるうちで最も「押川窯」の大甕に近いようである。「押川窯」とは明和３年に田中此右衛という人が押川で陶土を発見し窯を開いたのにはじまる。「押川甕」の広範な販路は，押川を利用しての搬出が容易であったことも幸いして，藩内はもとより博多・長崎方面まで及び一大陶房として繁栄したようである。最盛期には職人が30人近くおり，また雑役60～70人程いたといわれる。唐津商人宮島喜兵衛が死人甕として筑前方面に盛んに売り出し，大変な売れ行きで巨利を得たことも知られている（註12）。

「押川甕」は，厚手で茶褐色の黒味がかったのが特色といわれている。本遺跡の３種の釉調をもつもの全てが「押川窯」のものであるか疑問が残るが，形態的特色や製作手法の共通性からみて，少なくとも横枕窯も含めた同系の窯であった可能性は高い。また現在知られてはいないが筑前地方における同系の窯の存在も否定できない。

土　瓶　墓地の一角に後産（胞衣）を壺や土瓶に入れて埋める風習は古くから存在している。また，産屋の床下，家の門口に，男子なら向って右側，女子なら左側，便所の軒下，屋敷内の方角のよい所に埋める等地方によってさまざまである。

今回，墓の一つとしてあつかった25・26・29・33・37・38号近世墓からは土瓶が検出されたのみで人骨・副葬品など墓を思わせるものは一斉出土しなかった。むしろ古来からある後産（胞衣）処理の埋納器であった可能性が高い。福岡地方では後産（胞衣）を埋めると最初にその上を通る者を恐れるといって，生児の父親が真っ先にその上を踏むという風習がある。また，その家族の内で悪い習慣のある者がある時，たとえば夫が酒飲みの場合は酒をこれにかけ，また賭博を好む時はサイコロを入れて埋めれば，その子は決してそんな悪事をしないといういいつたえもある（註13）。

埋納器に土瓶を使うという風習は福岡・熊本地方でみることができるが，一般には壺を使う地方が多いようである。

本遺跡出土の土瓶には４種類ある（図版99，第103図）。ａ類：胴部がソロバン玉状をなし，胴部外面上半にロクロ右回転の飛びカンナ文様が描かれたもの（25・29・37号），ｂ類：胴部が茶釜形をなし，胴部外面上半に前者と同様の飛びカンナ文様が描かれたもの（33号），ｃ類：胴部は球形で，緑釉の下地に白釉のイッチン掛で２個の菊花文とソウメン文を描き出したもの（38号），ｄ類：胴部は球形で，白釉の下地に家・松林・帆かけ舟等の染付けを行なったも

の（26号）である。

a類・b類にみる飛びカンナ手法は現在小石原焼で盛んに使われている手法で，c類のイッチン掛け手法は上野焼・小石原焼・黒牟田焼等に主にみられる手法である。しかし，緑釉を下地に白釉のイッチン掛けは，緑釉を盛んに用いた上野焼の可能性が高かろう。また，d類の白釉の下地に茶色と緑色による染付けしたものは肥前陶器一般にみられるもので，窯の限定は難しい。

副葬品・供献品　副葬品として一般的なものは「寛永通宝」・「文久永宝」などの古銭である。その数は1～8枚などさまざまで，「六道銭」といわれる如く6枚とは一定していない。また，古銭の中には「祥符元宝」・「元豊通宝」・「熙寧元宝」・「道光通宝」・「嘉慶通宝」などの北宋銭もある（図版101・102，第110・111図，表13）。

最も多く副葬されていたのは8号近世墓で，煙管1個（竹・鉄製），煙管入れ1個（革製）櫛2個（ツゲ），足袋のハゼ1個（銅製），珠数1個である（図版100，第90図1～5）。副葬品から考え，高齢の女性であろう。足袋のハゼには『洋美人』という足袋メーカーの銘が記されている。

他に27号近世墓からは木製の刻みタバコ入れ1個（図版100—6，第90図6）が出土している。

供献品としては，14号近世墓から出土した鉄瓶1個，土瓶1個，皿1個がある（第103図）。また，19号近世墓から線香たて1個（第103図）が出土している。他に，花立・線香たてに使われたと思われる。竹筒が3・8・17号近世墓から発見されている。　（井上）

註1　前川威洋他「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(1)」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2　福岡県教育委員会　1975
2　前川威洋他「筑紫郡太宰府町所在君畑遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』7　福岡県教育委員会　1977
3　前川威洋「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(1)～(4)」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2～6・7　福岡県教育委員会　1975～1978，註2に同じ
4　木下修「Ⅱ6—1木棺墓」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3　福岡県教育委員会　1977
5　糸山大作氏教示
6　武雄市史編纂委員会「古跡と伝統編」『武雄市史』下巻　1973
永竹威「武雄古唐津系陶芸技法調査記録」『佐賀県文化財調査報告書』27　佐賀県教育委員会　1974
7　相知町史編纂委員会「押川」『相知町史』上巻　1971
相知町史編纂委員会「産業史—相知の陶器—『相知町史』下巻　1975
尾形善郎「肥前国産物図考にみる習俗」『佐賀県立博物館報』14　佐賀県立博物館　1978
なお，近世陶器については佐賀県立博物館森醇一朗・尾形善郎・吉永陽三氏から多くの御教示を得た。記して謝意を表したい。
8　註7に同じ
9　永竹威「武雄古唐津系陶芸技法調査記録」『佐賀県文化財調査報告書』27　佐賀県教育委員会　1974
10　尾形善郎「肥前国産物図考にみる習俗」『佐賀県立博物館報』14　佐賀県立博物館　1978
11　註9に同じ
12　註7に同じ
13　恩賜財団母子愛育会編「出産一胞衣—」『日本産育習俗資料集成』　第一法規　1975

Ⅵ　自然科学系の調査

(1)　21号甕棺墓出土の人骨

（1）**人骨番号**　K21
（2）**推定性別**　女性
（3）**推定年令**　熟年
（4）**推定身長**　152.4*cm*　右大腿骨最大長より推定
（5）**埋葬姿勢**　仰臥屈葬
（6）**保存状態**　全般に骨質不良であって，頭骨は少量の骨片のみであるが他の全身骨は形骸のみ辛うじて残存。
（7）**そ の 他**　頭片に赤色顔料の付着あり。抜歯風習の痕跡は不明。　（永井昌文）

(2)　北九州地方における甕棺の胎土分析

北九州における甕棺の生産体制を究明するひとつの手段として，甕棺胎土の材質研究が加えられる。本報告では，土質や鉱物組成の肉眼的観察と甕棺の形式対比から，すでに５つのグループに分けられた試料の分析をおこなった。ただし，非破壊的手法によらねばならず，また，多数の試料を迅速に分析，測定できる方法として蛍光Ｘ線分析法を主として利用した。

分析のために供された試料は，表14にみるように11遺跡から出土した甕棺片65点である。これらは試料提供者によって，すでにＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの５グループに分類されている。ここでは５グループの試料を分析することによって，何らかの相違点，または関連性を見い出すこと，外観上の観察や形式などからは分類できなかった試料の同定を目的とした。

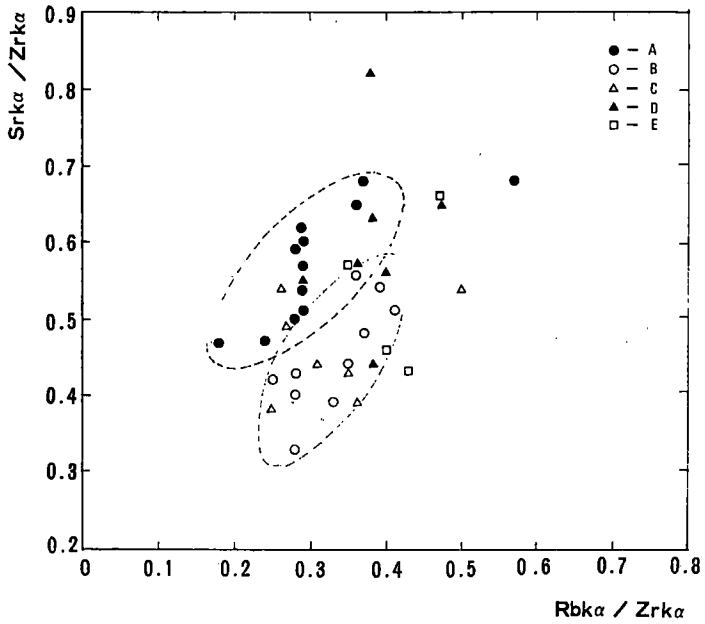
表　14　　胎土分析資料一覧表

試料番号	遺跡名	甕棺番号	時期	色調	胎土に赤色粒を含むもの	タイプ	試料番号	遺跡名	甕棺番号	時期	色調	胎土に赤色粒を含むもの	タイプ
1	門田・辻田地区	K１(下)	前期末	黄白色			5		K15	〃	暗赤褐色		
2		K９(下)	〃	黄褐色			6		K17	〃	黄褐色		
3		K10	中期後半	〃			7		K20	〃	暗赤褐色	○	A
4		K12(下)	〃				8		K21(下)	〃	赤褐色		

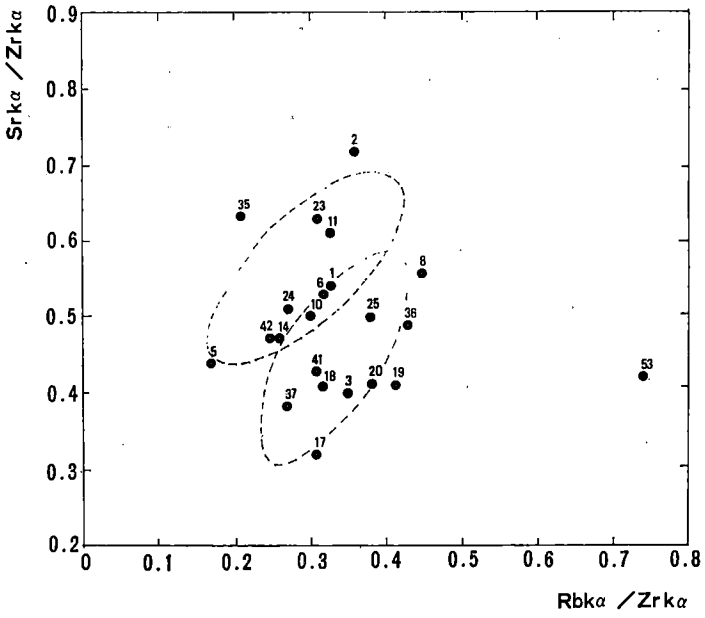
試料番号	遺跡名	甕棺番号	時期	色調	胎土に赤色粒を含むもの	タイプ	試料番号	遺跡名	甕棺番号	時期	色調	胎土に赤色粒をのむもの	タイプ
9		K22 (上)	〃	暗赤褐色	○	A	38	蒲田	K 2 (A)	中期中葉	褐色		
10		K22 (下)	〃	黄褐色			39		K13 (D)	中期後半	暗赤褐色	○	D
11		K23 (上)	〃	暗赤褐色	○	A	40		K12 (D)	〃	〃	○	D
12		K23 (下)	〃	〃	○	A	41	諸岡	K 2	〃	褐色		
13		K24 (上)	〃	〃	○	A	42		K27	〃	暗赤褐色		A'
14		K24 (下)	〃	茶褐色			43	原	K 6 (下)	〃	茶褐色		B
15		K25	〃	暗赤褐色	○	A	44		K110(下)	〃	褐色		B
16		K27 (上)	〃	〃	○	A	45		K121(下)	〃	淡褐色		B
17		K27 (下)	〃	黄褐色			46		K128	〃	〃		B
18	高辻	CK 2	〃	褐色			47		K134(上)	〃	〃		B
19		BK 4(下)	中期中葉	黄褐色			48		K134(下)	〃	黄白色		B
20		BK 8(下)	〃	褐色			49	道場山	K 1 (下)	〃	暗赤褐色	○	A
21		CK 9(下)	中期後半	暗赤褐色	○	A	50		K33 (上)	〃	〃	○	A
22	原	K 5 (下)	〃	褐色		B	51		K33 (下)	〃	黄白色		E
23		K15 (下)	中期中葉	〃			52		K48 (下)	〃	〃		E
24		K99 (上)	〃	黄褐色			53		K75 (下)	〃	〃		E
25		K100 (下)	〃	褐色			54		K99 (下)	〃	〃		E
26		K122 (上)	中期後半	黄褐色		B	55		K101(上)	〃	〃		E
27		K125	〃	〃		B	56	須玖岡本付近		〃	暗赤褐色	○	A
28		K136 (下)	〃	褐色		B	57	蒲田	K11(4区)	〃	淡黄褐色		
29	一の谷	K 2 (下)	〃	暗赤褐色		A	58		K 5 (F28)	〃	暗赤褐色	○	D
30		不明	〃	〃		A	59		K 6 (K)	〃	〃	○	D
31	栗田	K10 (上)	〃	黄白色		C	60		K12下(D)	〃	〃	○	D
32		K26 (上)	〃	〃		C	61	栗田	K19 (下)	〃	黄褐色		C
33	門田・門田地区	K47 (下)	〃	褐色			62		K22 (下)	〃	黄白色		C
34		K57 (下)	中期中葉	黄褐色			63		K28 (上)	〃	淡褐色		C
35		K59 (下)	〃	〃			64		K28 (下)	〃	黄白色		C
36	金隈	K77 (下)	中期後半	茶褐色			65		K34 (上)	〃	〃		C
37		K120	〃	黄褐色									

蛍光X線分析装置は理学電機株式会社製。各元素の測定条件は，X線管：クロム，X線強度（kV—mA）：40—20，結晶：LiF，検出器：シンチレーション，ピーク角度（2θ，°）：Rbk（26，64）・Srkα（25・16）・Zrkα（22，58）。X線の照射に際しては，大半の甕棺片

は曲面を持っていたので直径約15㎜の円形になるよう，これを研磨し平滑面をつくった。測定データはRbkα，Srkα，Zrkα 線のピークの高さを利用して， 各試料についてSrkα／Zrkα，Rbkα／Zrkα比を求め，第112・113図に示した。



第112図　グループ分された試料の Srkα/Zrkα Rbkα/Zrkα 比



第113図　グループ分けされていない試料の Srkα/Zrkα Rbkα/Zrkα 比

第112図にみられるように，AグループとBグループが上限・下限に分離する結果を示した。つまり，両者の構成成分の異なりを示すものと考えてよい。さらに，Dグループは試料番号38を除いて他は上限にプロットされ，Aグループに属する形となった。Cグループ，Eグループは全体に分散し，また，試料数も少ないところからA・Bグループ群のどちらかに帰属させることはできなかった。第113図はグループ分けができなかった試料だけをプロットしたものである。これらについては，第112図をもとにAグループ群・Bグループ群を基準に分類したものである。この分類法の有効性については今後の研究にゆずらねばならないが，遺跡毎に注目するとA・Bグループ群のどちらかにまとまる傾向がみられた。すなわち，高辻遺跡出土のグループ分けが不明であった甕棺片3点（試料番号18・19・20）はすべてBグループ群に属している。

なお，第112・113図で試みたような $Srk\alpha/Zrk\alpha$，$Rbk\alpha/Zrk\alpha$ を求めて分類する方法が甕棺胎土の相違を決定づけるには不十分であり，これを補なう意味で次のような偏光顕微鏡による観察をおこなった。薄片作成のために供された試料はAグループ6点（試料番号5・7・9・12・16・42），Bグループ1点（試料番号28），Cグループ2点（試料番号31・32），Dグループ3点（試料番号38・39・40），グループ分けが不明の試料3点（試料番号18・23・35）の計15点である。

観察に際しては，特に次の点に留意した。すなわち，胎土中に含まれる鉱物の粒度と，その集合状態，特に基質（マトリックス）の状態を観察した。さらに，鉱物の種類の判定，および有色鉱物の大きさ，量の如何，そして含有される石英の消光状態（ひずみのためにひとつの鉱物粒子が部分毎にわずかに消光位が異なり，顕微鏡のステージの回転とともに波動状に消光する現象）の観察をおこなった。観察の結果，大きく次の2つのタイプに分けることができた。

（タイプⅠ）　胎土の基質全体が粗い結晶の集合体で，粒度はほぼ一定している。鉱物の形はやや丸味を帯びており，原料土はシルト質のものと推定できる。単独の石英，長石が多く含まれ，また，石英，斜長石の組合せによる深成岩組織を示す岩片もみられる。次のタイプⅡにくらべて斜長石が多く，かつ，小片ではあるが，黒雲母，角閃石，赤鉄鉱，磁鉄鉱等の有色鉱物が多い。石英には波動消光を示すものもかなりあり，また，変成を受けたと思われる岩片もみられる。

（タイプⅡ）　胎土の基質は微小粒の結晶と粘土の集合体であり，原料土はシルト・粘土を使用したと思われる。胎土中に含まれる岩片（礫）は2㎜大におよぶものも存在し，全体に大きいものが多い。石英が大半を占め，それらのほとんどは波動消光を示す。タイプⅠに比して有色鉱物が少ない。

表 15　タイプ別による分類

タイプ	試料番号
タイプⅠ	5(A), 7(A), 9(A), 12(A), 16(A), 23(不明), 35(不明), 39(D), 40(D), 42(A)
タイプⅡ	18(不明), 28(B), 31(C), 32(C), 33(B), 38(D)

（ ）内はグループ名

表15はタイプ別に分類された結果である。表中の（ ）内のアルファベットは試料提供者によるグループ分けを示す。タイプⅠは，AグループとDグループが中心となり，タイプⅡではBグループとCグループが大半を占めている。第112図では，試料数が少なくて明確にできなかったCグループはタイプⅡのBグループ群に属しているのが注目される。第112図ではCグループの試料番号63・64を除いてはBグループ群に属することが認められる。また，グループ分けが不明であった試料番号18はタイプⅡのBグループ群に，試料番号23・35はタイプⅠのAグループ群に属しており，第113図の結果とも一致している。なお，第112図でBグループ群にプロットされたDグループの試料番号38は，検鏡の結果もタイプⅡのBグループ群に属し，特異な存在となった。

以上のことから，A，Bグループ群は明らかに異なる性質を持ち，DグループがAグループと同質であり，CグループはBグループに類似する可能性があることがわかる。なお，Aグループの甕棺の大きな特長のひとつとして注目された胎土中に含まれる赤色の斑点は赤鉄鉱の塊片と思われる。（沢田正昭・秋山隆保）

(3) 門田遺跡出土鉄戈の分析調査

(1) まえがき

福岡県春日市大字上白水門田遺跡辻田地区の甕棺墓24号・27号より，弥生中期後半（須玖Ⅱ）の鉄戈が出土したので，この薄片について顕微鏡組織・炭素定量分析・発光分光分析等を調査したので報告する。

(2) 試料

24号鉄戈 長さ34㎝，身幅4～4.5㎝，鋒付近でやや広くなる。関幅16.6㎝。銅戈にみられるような樋を中央に有する。棺外副葬。

27号鉄戈 長さ33㎝，身幅4～5㎝，鋒付近で広くなる。関幅16㎝でやや彎曲気味，双孔と関の間に革紐の着痕が認められる。棺外副葬

上記24・27号出土鉄戈の剝離した薄片を試料に供した。いずれも剝離片は酸化が進行していて金属鉄は留めていない。磁石を用いて試料を選別した。したがって試料採取位置は一定個所にさだまらない。

(3) 調査方法

1）顕微鏡組織

鉄戈から剝離した薄片をベークライト樹脂に埋込んだ後，エメリーペーパーの#150，#320，#600，#1000で荒研磨し，酸化クロム，酸化アルミナで仕上げ研磨を行なった。

2）炭素定量分析

鉄中の炭素量（C）をチェックするため，湿式法による定量分析を行なった。

3）発光定性分析

スペクトル線の波長から構成元素の存在を知る発光定性分析を行なった。化学分析の絶対法に対して相対法であるので，分析に消費する量は極く微量の20㎎程度あれば足りる。

(4) 調 査 結 果

1）顕微鏡組織

両鉄戈の研磨した組織を図版105に示す。錆化のため金属鉄（Metallic Fe）は残留せず，組織はゲーサイト（Goethite：$Fe_2O_3 \cdot H_2O$）に変じている。これからは，鉄中炭素量や熱処理の有無といった技術面の検討は不可能である。

2）化学分析

顕微鏡組織から鉄中の炭素量の推定ができなかったので，化学分析による定量分析で炭素量（C）の測定を行なった。表16に示すように，24号出土鉄戈の炭素量は，3回の繰返し分析で0.28%，0.35%，0.53%あり，27号出土鉄戈は，2回の繰返しで24号鉄戈より若干高目の0.45%，0.646%で，この数値から鍛造品といえる。

このように，鉄戈の炭素量は利器としては低目で，素材は錬鉄（炭素量0～0.4%）相当品で現代の呼称では軟鋼の範疇に入れることができよう。なお，錬鉄は材質が柔軟で鍛冶及び鍛合が容易である。製鉄技術の未熟な弥生時代の鉄製品としては，当炭素含有量程度であれば，加工性の面からは，割合い使い易い素材だったと考えられる。

特に24号鉄戈は，有樋という手のこんだ金属表面を鑿で切った加工も材質（低炭素量で軟質）を考慮した上で可能な技術だったのであろう。しかし刃物利器としての鋭利性には，焼入れ性が不足がちになり，実用性ではやや不適当かとも考えられる。

3）発光分光分析

鉄戈の分析結果を表17に示す。24・27号出土鉄戈は，ともに他に類をみない程の不純物が少なく純度の高い鋼である。

表 16　鉄戈の炭素含有量

試料＼元素	炭素量（%）		
	1	2	3
24号鉄戈	0.28	0.35	0.53
27号鉄戈	0.45	0.646	——

分析は日立金属安来工場で行なった。矢野武彦氏の御尽力による。

主要構成元素は，鉄（Fe）をはじめとして，造滓成分であるアルミニウム（Al），カルシウム（Ca），マグネシウム（Mg），けい素（Si）等であり，これらも極めて量が少ない。他の微量元素としては，ほう素（B），銅（Cu），カリウム（K），マンガン（Mn），ニッケル

表 17　弥生時代鉄器の分光分析結果

符号	試料履歴				銀 (Ag)	アルミニウム (Al)	比素 (As)	ほう素 (B)	バリウム (Ba)
	遺物	遺跡	遺跡所在地	推定年代					
2	24号出土鉄戈	門田遺跡	春日市大字上白水字門田	2世紀	0	3	0	0	0
3	27号出土鉄戈			〃	0	3	0	1	0
参考値	14号住居跡出土鉄鉇	門田遺跡	春日市大字上白水字辻田	3世紀末	0	5	0	0	0
	17号住居跡出土鉄鏃茎	辻田地区		〃	0	5	0	0	0
	鉄斧	神蔵古墳	甘木市大字小隈字	〃	0	5	0	0	0
	鉄鏃	墳丘盛土内	カンノクラ	〃	0	5	0	0	0
	小鉄塊　金属鉄	太宰府史跡	筑紫郡太宰府町大字	?	0	3	0	0	0
	〃　錆化鉄	第39—3次調査	観世音寺字今道 183—4		0	3	0	0	0

ビスマス (Bi)	カルシウム (Ca)	コバルト (Co)	クロム (Cr)	銅 (Cu)	鉄 (Fe)	ゲルマニウム (Ge)	カリウム (K)	リチウム (Li)	マグネシウム (Mg)	マンガン (Mn)	モリブデン (Mo)	ナトリウム (Na)	ニオブ (Nb)	ニッケル (Ni)
0	1	0	0	1	5	0	1	—	1	0	0	0	0	0
0	3	0	0	2	5	0	1	—	3	1	0	0	0	1
0	5	0	0	5	5	0	0	0	5	1	0	0	0	0
0	5	0	0	3	5	3	0	0	3	1	2	0	0	0
0	4	1	1	3	5	0	0	0	4	3	0	0	0	1
0	4	1	1	3	5	0	0	0	4	2	0	0	0	1
0	5	2	1	2	5	0	0	0	2	2	2	1	0	1
0	5	2	1	2	5	0	0	0	2	2	2	1	0	1

鉛 (Pb)	アンチモン (Sb)	けい素 (Si)	すず (Sn)	テルル (Te)	チタン (Ti)	バナジウム (V)	タングステン (W)	亜鉛 (Zn)	ジルコン (Zr)	燐 (P)	註
1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	—	
1	0	5	0	0	0	1	0	0	0	—	
0	0	5	0	0	4	1	0	0	0	0	①
0	0	5	0	0	3	0	0	0	0	0	
0	0	5	0	0	3	1	0	0	0	0	②
0	0	5	0	0	3	1	0	0	0	0	
0	0	5	1	0	1	1	0	1	0	0	⑨
0	0	4	1	0	1	1	0	1	0	0	

0：認められない
1：辛じて認められる
2：明瞭
3：強い
4：可成り強い
5：非常に強い

※　分析は新日鉄八幡製鉄所で行なった。

(Ni)，鉛（Pb），ヴナジウム（V）等が「明瞭」以下で検出される程度である。

また，24号出土鉄戈は，27号鉄戈より不純物が少なく，ほう素（B），銅（Cu），マンガン（Mn），ニッケル（Ni），ヴナジウム（V）等の1ランクの差異から，両者の原料産地の違いを示すものと推定される。これら素材は，チタン（Ti）の検出がなく，かつ純度の非常に高いところからみて，高品位磁鉄鉱を使用して特殊製造したものであろう。

鉄戈は，参考値として挙げた門田遺跡の鉄鉇や鉄鏃茎とも，又，神蔵古墳墳丘盛土内より出土した鉄斧や鉄鍬とも構成成分を異にし，これら主に工具類とは歴然と素材を別にしている。鉄戈に対する素材の選択は，意識的なものであろうか，単なる時期のズレや入手経路の違いとして片付く問題ではないと考える。

(5) 分析結果からの問題点

門田遺跡出土の24・27号鉄戈は，炭素含有量が0.28～0.646%含有されていて，錬鉄であり鍛造品であることが明らかになった。特に，24号鉄戈は銅戈に類似した有樋であり，一見鋳造品を思わせる造りであるが，この樋は鏨で素地表面を彫っている。24号鉄戈の材質を考えた場合，炭素量が0.28%，0.35%，0.53%と27号鉄戈の0.45%，0.646%より低目で柔軟である。しかし両者共鍛冶や鍛合にも比較的容易で加工し易いものであったと考えられる。

現在のところ，鉄戈は大陸側にその類品がないとして鉄器の国内生産（鍛冶加工）の開始を論ずる場合の基準品とも云われているが（註3），今回の供試品である門田遺跡出土鉄戈の素材産出地は何処であったろうか。

表17の分光分析結果でみたように，鉄戈は不純物が少なく，非常に純度の高い鋼で鉄鉱石を原料とするものである。この素材は列島で製錬されたとは考えられず，やはり大陸側からの輸入品とみるのが妥当であろう。ここで気ずくのが，有名な『魏志』三十巻東夷伝弁辰の条である。「国出鉄韓濊倭皆従取之諸市買皆用鉄如中国用銭又以供給二郡」の文章である。「これをとる」の解釈が採鉱冶金を意味するのか，交易によるものなのか，さだかでないが（註4），鉄素材の獲得を朝鮮側に依存したことは間違いないであろう。朝鮮出土で弥生期の鉄器を分析することにより，その手がかりを摑むことも考えられるが，この件は後日に期待するよりいたしかたのないことである。

中国側の鉄素材として有望なものに梯形鉄板がある。前漢中・晩期に推定される河南郡鄭州所在の古栄鎮冶鉄遺跡（註5）をはじめとして，二，三の発見例が報告されている（註6）。

この鍛造品の素材である梯形鉄板は，長さ19cm，幅7～10cm，厚さ0.4cmで含有炭素量が0.1～0.2%である。その生産工程は，まず炭素含有量の高い鋳鉄（炭素量：2.5～4.5%程度）を鋳型に鋳造し，その後脱炭処理（註7）を施して鉄中の炭素を下げて鍛造可能な性質に変えるのである。この梯形鉄板の特徴としては，鋳鉄の脱炭材であるため，酸化物などの非金属介

在物・造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+MgO+CaO$）が極めて少なく金属組織も平均化されたものである。

この製造方法であれば，表17に示した高純度の鋼材も製造可能と考えられる。しかし，梯形鉄板の分析結果は炭素量の他にけい素（Si）が0.06%とあるだけで，他の構成成分の検討ができないもどかしさがある。

以上，梯形鉄板には，鉄戈素材としての可能性を秘めているので，これらも分析データがあがれば検討できるであろう。

最後に，今回供試材とした鉄戈薄片は，金属鉄がほとんど残留しておらず，この試料から正確なデータが得られるか否か懸念されるところである。

定量分析での炭素量については，過去に花聳2号墳出土の鉄鏃（註8）で調査した結果によれば，金属鉄は0.69～0.86%に対して錆化鉄は0.72%で比較的差異の少ない数値であった。

また，分光分析は大宰府出土の小鉄塊（42g）（註9）について分析したところ，表17の参考値に示すように，これも差がほとんど現われていない。このような結果から，金属鉄と錆化鉄の間で大差ないと判断している。もっとも定量分析で硅素（Si），マンガン（Mn），硫黄（S）等の元素は変動が大きいので注意を要するし，また，現在の比較試料の個数が少ないので全面的な信頼は無理としても一つの指標になりうるであろう。

また，鉄戈の炭素量は0.28～0.646%と低目傾向で刃物として焼入れ性が不十分ではなかったかと述べたが，これも例えば刃先と鋒部との対比をとった訳ではなく，平均的な数値としてみた場合の所見であることを申し添えておく。

(6) ま と め

① 門田遺跡出土の鉄戈は，炭素量の分析結果から，錬鉄を素材とした鍛造品であることが明らかになった。

有樋の24号鉄戈は，炭素量が低目の0.28～0.53%であり，鑿による樋の彫金加工も27号鉄戈よりは軟質で容易だったろうと推察される。27号鉄戈の炭素量は0.45～0.646%であった。

② 分光分析によると，24号鉄戈は27号鉄戈より不純物が少なく，より純度の高い鋼を使用している。24号・27号鉄戈ともに，チタン（Ti）の検出がないところから製鉄原料は鉄鉱石を用いたものと推定される。しかし，24号・27号鉄戈の素材は別物で，産出地は異なるのであろう。

③ 24号・27号鉄戈は，他の弥生期の鉄器に比べて高純度であり，素材は最近中国で散見される鋳鉄脱炭材の梯形鉄板あたりに製造の可能性を考えたい。大陸側で鉄戈の出土例をみないとすると，弥生期に列島内で鍛冶加工を行なった傍証となり，遺構の検出に期待がもたれる。

④ 鉄戈の酸化剝離片を供試材としたので，金属鉄（Metallic Fe）の組織がみられず，ゲー

サイト（Goethite：$Fe_2O_3 \cdot H_2O$）のみでは熱処理技術面までの言及はできなかった。

謝　辞　（大澤正己）

本稿作成に当って分析データは清水峯男先生（旧新日鉄・生産技術研究所部長，現在九州大学工学部冶金学教室教授）の御尽力で揃った事を銘記して感謝の意を表します。

註1　大澤正己「製鉄関係遺物の分析」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第7集下巻』　福岡県教育委員会　1978

2　大澤正己「神蔵古墳出土鉄器の分析調査」『神蔵古墳―福岡県甘木市大字小隈所在古墳の調査―』（甘木市文化財調査報告第3集）甘木市教育委員会　1978

3　小田富士雄「鉄器の関連資料」『立岩遺跡』立岩遺跡調査委員会編　1977　河出書房新社

4　村上英之助「『三国志』東夷伝の鉄に関する一節をめぐる解釈」『たたら研究』22　たたら研究会　1978

5　鄭州市博物館「鄭州古榮鎮漢代冶鉄遺跡発掘簡報」『文物』1978　二期　本松馨氏の翻訳文のお世話になった。

6　≪中国冶金史≫編写組「古榮遺址から漢代生鉄冶煉技術を看る」『文物』1978　二期例えば渦池出土の成批漢魏鉄器，鄭州東史馬出土の後漢鉄器，北京郊外大葆台の前漢墓出土鉄器などに前後して梯形鉄板がみつかっている。

7　脱炭処理。鋳鉄を空気・水蒸気・炭酸ガス中などで，高温に加熱すると脱炭が起る。

$$2Fe+O_2 \rightarrow 2FeO \quad (1)$$

$$FeO+C \rightarrow Fe+CO \quad (2)$$

鋳鉄が酸化を受ければ，まず（1）式により，その表面に酸化物（FeO）ができ，つぎに（2）式により脱炭が起る。850℃以下では（2）式の進行速度が遅いので（1）式により酸化膜がつきやすいが，900℃以上になると（2）式の進行速度が大となり，鋼材内部の炭素は拡散により表面に移動し，COガスとなって脱炭する。

8　大澤正己・山本信夫「鉄鏃の新例に関する検討―福岡県小郡市花聳2号墳の出土遺物―」『考古学雑誌』第62巻　第4号　1977

9　森田勉氏より昭和51年10月19日提供頂いた試料。試料履歴：大宰府6AYE―C　AJ89　暗褐色　790825

(4)　門田遺跡出土の繊維製品について

(1)　鉄剣に巻かれた平織物と撚糸

春日市門田遺跡から，剣身に巻かれた平織物（図版106A―C）と，それとは別に剣柄に巻かれた撚糸（図版106D・E）とが出土した。これら繊維製品を構成する繊維の断面形を観察することによってその材質が判明し，もし絹製品であることが明らかになった場合には，繊維（註1）の断面計測，織り密度調査などを行ない，その値を他の弥生時代遺跡あるいは同時代の中国その他の遺跡から出た絹製品について数値と比較することによって，当該絹製品及びその材料の産地，あるいは生産技術の伝承経路等についてある程度明らかにすることができるか

もしれぬ。そのような期待のもとに行なわれたのがこの調査である。

1　調査の方法（註2）

平織物の織り密度，織り糸ならびに撚糸の幅，撚り数等は資料を低倍率で拡大鏡検することにより，また繊維の断面完全度（断面編平度）と断面積については，パラフィン切片法によって作成した繊維横断面を Abbe 氏描画装置を用いて約2000倍に拡大転写し，その転写面図を切り抜いて秤量し，これを面積に換算したものを繊維の断面積とし，転写断面図上において測定した最長径を直径とする円の面積に対する 上記断面積の比率をもって断面全度とした。なお，過去における筆者の経験からすれば，断面計測値について比較する場合に，断面完全度によるよりは断面積による方が信憑度が高く，より効果的であるように思われる。

繊維断面計測値の比較に用いた馬王堆一号漢墓の出土品での数値としては，出土品の入手が不可能であるために，上海市紡織科学研究院文物整理組及び上海市糸綢工業公司文物整理組によって公表された絨圏錦について繊維断面積の測定値（註3）（かって中国側によって発表された絹繊維断面計測値としては唯一のもの）を借用したが，この測定値がいかなる測定方法によって求められたものであるかが不明であるのと，繊維断面完全度についての記載がないところから，中国側報文（註3）に載せられている繊維断面の写真から断面から断面完全度と断面積の両方を改めて測定し直し，断面積についての中国側測定値と合わせて使用した。

2　調査成績とその考察

調査の成績をまとめて表示すれば表18のごとくであり，繊維の断面形は図版107A—Fに示す通りである。

表18の繊維断面計測値及び図版107の断面形からみて，これらの繊維製品はいずれも家蚕（Bombyx mari L）の繊維を材料として作られたものである。

表　18　　門田遺跡から出た絹製品についての調査成積

春日市門田遺跡	完全度	面積	3 漢墓
剣身を巻いた平絹(2)	＜＊＊	＞＊＊＊	陽高県漢墓 (10)
同上	＜＊	＞0.3	楽浪漢墓 (23)
同上	－＜＊＊	＜0.4＞＊＊	馬王堆一号漢墓 (5)
剣柄を巻いた撚糸(2)	＜※	＞＊＊＊	陽高県漢墓 (10)
同上	0.1＜＊＊	＞0.2	楽浪漢墓 (23)
同上	－＜＊＊	＜0.9＞＊	馬王堆一号漢墓 (5)

備考 (1) ＊、＊＊、＊＊＊はそれぞれ危険率0.05、0.01、0.001の水準において両平均値間に有意な差を認めるもの。同じ場所に数値を記したものは危険率0.05以下の水準では両平均値間に有意な差を認めないもの（この数値が大きくなるほど両平均値間の差が小さくなる）。(2) その他第21表の備考にしたがう。

そこで，これらの絹繊維を産出した蚕の系統を知るための比較対照用として山西省陽高県漢

表 19　漢代絹製品についての調査成績

遺　跡	経糸数（対1 cm）	緯糸数（対1 cm）	経糸数と緯糸数の比	遺　蹟
弥生時代遺跡(6)	< ***	< ***	< 0.3	陽高漢墓 (6)
同　上	< ***	< ***	< *	楽浪漢墓 (10)
同　上	< *	< *	< 0.1	馬王堆一号漢墓(90)

備考 (1) 第18表の備考(1)(2)に同じ。 (2) 弥生時代遺跡での数値（平均値）は経糸数が25.0本、緯糸数が15.7本、経糸数と緯糸数の比が1.60であり、3漢墓での数値は第21表に掲げてある。

墓（華北），楽浪漢墓（朝鮮）及び湖南省馬沙の馬王堆一号漢墓（華中）から出た絹製品の繊維断面についての調査成績を表19に掲げる。

表19の3漢墓及び春日市門田遺跡（弥生時代中期）のそれぞれの間に若干の時代的隔たりはあるにしても，絹繊維に関する限り，長い歴史の上からはこの程度の隔たりは余り問題にならないと思われる。

いま表18と表19とにおける繊維断面計測値（それぞれ平均値）の差の有意性について検定すれば表20のようになり，本表から次のことがいえる。

表 20　門田遺蹟から出た絹製品についての調査成績

資　料	経緯等の別	繊維(brin) 横断面についての計測値			糸幅(mm)	糸の撚り数(対1 cm)	撚りの方向	織糸数(対1 cm)	経糸数と緯糸数の比
		完全度	面積 (μ^2)	供試繊維の数					
剣身を巻いた平絹	経	41.2±3.12	60.9±6.63	28	0.50			24	1.50
同　上	緯	41.9±3.10	62.5±3.85	32	0.45			16	
剣柄を巻いた撚糸	(a)	43.3±3.57	62.5±6.10	30	0.30	13.3	左		
同　上	(b)	42.6±2.96	66.4±4.60	31	0.30	13.3	左		

備考 (1) 糸幅は真上からみた時の値 (2) 剣柄を巻いた撚糸におけるa、bはその任意の2ヶ所をあらわしており、a、bと複数にしたのは、差の有意性検定のための措置である。

(1) 繊維断面完全度については3漢墓のいずれよりも小さく，1つの例外を除けば，3漢墓の数値との間に有意な差が認められる。完全度の値がこのように小さいことは弥生絹の1つの特色とみてもよく，完全度がこのように小さな値を示したことについては，（i）品種的なものである，（ii）産地の気候風土による，（iii）養蚕技術の拙劣，（iv）屑物を使ってある，などのことが考えられるが，これら要因の幾つかが重なって生じたものかもしれない。

(2) 繊維断面積については，剣身の平絹，剣柄巻撚糸の両者とも楽浪と馬王堆の中間の値であるが，ただし，筆者の計算ではむしろ楽浪の方に近いが，殊に剣柄巻撚糸の方は繊維断面積が大きい点において立岩遺跡出土の撚糸と似たところがある。剣そのものもよく似ている。ただ，立岩の場合は左撚，右撚は2本を並べて巻いてあるのに対し，春日市門田の方は左撚のものが1本だけ巻かれている点が異なる。立岩の撚糸について筆者は，その繊維断面積が馬玉堆のものに近いところから，次の3つの場合を想定した（註4）。（i）中国本土で飼育されていた比較的太い繊維を産出する蚕品種と同系統の蚕が弥生時代中期の立岩遺跡のあたりで飼育されていて，その蚕糸を用いて作られた撚糸である。（ii）この撚糸は中国から舶載品である。（iii）楽浪あるいは立岩遺跡のあたりで飼育されていた三眠蚕の糸の中から比較的太い繊度のものを選び，それを用いて作られた撚糸である。そしてこの3点から，その撚糸が外国製，日本製の何れとも決め難く，またその繊維を産出した蚕が四眠蚕とも三眠蚕とも決め難いとのべた。

門田遺跡の撚糸の繊維断面積は立岩遺跡の撚糸のそれほど大きくはない。しかし，結論としては同様のことがいえるのではないかと思われる。

平絹の経糸と緯糸の繊維について，断面完全度を互いに比較すると，両者は殆ど同じである。しかし，断面積について比較すると，経糸よりも緯糸の方がやや大きい。これは，他の弥生中期遺跡（立岩遺跡，須玖岡本遺跡，肥前南高来郡三会村遺跡）出土の5種の平絹での傾向（註4）と全く逆であって，後世においても経糸繊維として摩擦に強い太繊度の生糸を選んでこれに当てる場合が多いことを考えると，理解し難い。

次に，本遺跡出土の平絹の織り密度を3漢墓のものと比較すると，前者では1㎝当たり経24本，緯16本といったきわめて粗いもので，経糸数と緯糸数の比も1.5と小さい。

織り密度の粗いことは他の5種の弥生絹（註4）においても同様であって，このことは弥生時代の平絹の大きな特色でもある。

表 21　漢代絹製品についての調査成績

遺跡	繊維(brin) 横断面についての計測値		平絹での織り密度（対1㎝）		
	完全度	面積（μ^2）	経糸数	緯糸数	経糸数と緯糸数の比
陽高県漢墓	50.9 (10)	37.1 (10)	125.8 (6)	70.8 (6)	1.97 (6)
楽浪漢墓	50.8 (23)	49.8 (23)	68.4 (10)	32.9 (10)	2.06 (10)
馬王堆一号漢墓	—〔53.9〕(5)	65.5〔69.3〕(5)	61.1 (90)	33.0 (90)	1.95 (90)

備考 (1) 漢代の遺跡としては，出土の絹製品を構成する繊維がそのあたりで産した可能性のあるものに止めた。(2) 馬王堆一号漢墓における繊維横断面計測値は『考古学報』(1974年第1期)[5]にあるもの（ただし，〔 〕内の数値は筆者が同報に示されている繊維横断面写真をもとに算出したもの）であり，その平絹における織り密度の数値は『馬王堆一号漢墓』上集（1973）[6]に表示されているもの（ただし，経糸数と緯糸数の比は同表の数値をもとに筆者が算出したもの）。(3) 本表の数値には，まわたでのものは含めてない。(4) ( )内の数値は資料数。

いま，弥生中期遺跡出土の平絹と３漢墓出土の平絹とにおける織り密度（それぞれ平均値）の差の有意性検定を行なってみると，表21に示すように経糸数と緯糸数においては明らかに有意性があり，経糸数と緯糸数の比においては特に楽浪との間に有意性が認められる。したがって，織り密度の点からみた場合に，春日市門田遺跡の平絹を含む６種の弥生絹はともに舶載品とは考えられず，純日本製と思われる。

これら弥生絹は南鮮からの舶載品でなかったかとの疑いを持つ人があるかもしれない。たしかに「三国史記」（註５）に，新羅の始祖赫居世居西干が妃とともに六郡を巡撫して農桑を勧督し，もって地の利を尽したことを記し，４代後の婆娑王の代にも勧農桑のことがある。そして，百済の始祖温祚王もまた農・蚕業を奨励している。これらの王の時代はわが国の弥生時代中期頃に当たる。

しかし，南鮮における当時の発掘物の中に絹製品はなく，また，「三国史記」のこれら記載にどの程度の信憑性があるかについても明らかでない。たとえ当時の南鮮において蚕織が行なわれていたとしても，弥生絹のように初歩的なものをわざわざ朝鮮から輸入したとは考えられない。

弥生絹と３漢墓の平絹との間にみられる顕著な織り密度の違いは，機織技術の差異をあらわしているようである。

弥生絹は中国または朝鮮から輸入した生糸を用いて織ったものではなかったかと考える人があるかもしれぬが，弥生絹のように初歩的な平絹を織らんがためにその原料糸をわざわざ輸入したとは考え難い。古代において東ローマ国，エジプト，ペルシアなどの国々が中国の生糸を盛んに輸入した例はあるが，それにはそれぞれの理由があったのである。例えば中国から輸入される絹織物のデザインが自国の人々の趣味に合わないとか，輸入生糸でもって他国向けの高級織物を織り，輸出した方が自国の利益になるなどのことがあったからである。

以上のことから，弥生時代中期頃の九州北部において養蚕を行ない平絹を織っていたとみられる。春日市門田遺跡の平絹もまた，そのあたりで飼育されていた蚕の生産した糸を使って土地の人が織ったものと思われる。その繊維断面積の値が楽浪と馬王堆の中間の値であるとはいえ，筆者の計算ではむしろ楽浪の方に近いので，その蚕は他の５つの弥生絹について考察（註４）したと同様，楽浪系の三眠蚕であったと想像される。

それらの弥生絹に筬筋がみられないところから，これを織るのに使用された機としては無筬の無機台貫刀杼機に類する原始機以外のものは考えられない。おそらく，登呂や唐古の弥生時代遺跡から出た部品から想像されているような形式のものであったと思われる。

当時の北九州で養蚕が行なわれていたとすれば，当然桑があった筈である。しかし，それが果たして栽培桑であったのか，それとも野桑であったのかについては確かめようがない。桑分類の専門家である堀田禎吉博士（註６・７）によれば，現在九州北部に山桑（Movus Dombycis

KOIDZ) 系の自生桑がみられるという。おそらく弥生時代にも自生していたであろう。

門田遺跡のものを含む弥生時代中期の６種の平絹は，「説文解字」，「釈名」，「急就篇」などに記す絹織物の定義よりすれば，いずれも「縑」ではなく，「絹」の範疇に入るべきものである。

「縑」について「説文解字」は「縑并絲縑也謂駢絲為之雙絲縑也」と，２本の糸を並べ合わせて織った絹織物であるとのべ，「釈名」には「縑兼也其絲細緻数兼於絹染兼五色細緻不漏水也」と，水も漏らさぬほど細密なものであるとのべている。また。「急就篇」の顔注には「縑之言兼也并絲而織甚致密也」と，糸を合わせて織った細密なものであるといっている。

「絹」について「釈名」は「絹絇也其絲絇厚而疎也」と，その織糸が太くてあらいという。并絲されていてしかも細密な「縑」に相当するものは陽高，楽浪及びわが古墳時代の織物の中にみられる。馬王堆一号墓の場合は「縑」の字を記した５本の竹簡の中に土珠袋の名を記したものがあり，その土珠袋に相当するとみられる実物も出土している。しかし，その織り密度は経68本，緯22本，細密というほどのものではなく，并絲されているかどうかについてはのべられてない。

いずれにせよ，６つの弥生絹はいずれも「絹」と称すべきものであって「縑」ではなく，このことは弥生絹の特色として見逃がせない。ただ，立岩遺跡と肥前三会村遺跡から出た平絹の織糸に多少なり撚りがかかっていることからみて，これらは「絹」というよりは「紬」というべきものかもしれない。

いま，参考までに日本の各地で発掘された弥生時代の布及び土器における布痕の合計92種類について織り密度の平均値を求めてみると，１㎝につき経糸17.7本，緯糸9.5本となる（土器面の圧痕の場合は，焼き上げる際の収縮率を約10％とみて補正した）。これに対し，６種の弥生絹の場合は経糸が17—35本，緯糸が11—20本であるから，粗いとはいっても，当時の布に比べれは細かい方である。古墳時代になると平絹は概して細密化するが，それでもなお弥生絹に匹敵する粗さのものがかなりみられるのは，弥生時代の名残りというべきものと思われる。

3　日本における養蚕の起源と渡来の経路

門田遺跡を含む弥生時代中期の４遺跡から出た６つの平絹についての調査成績から，日本における養蚕の起源とその渡来経路についてのべると結局次のようになる（詳細は「立岩遺跡」（註４）第５章６，320—321頁を参照されたい）。

(1)　日本における養蚕の開始は弥生時代中期よりもさほど以前ではなかったと思われる。

(2)　渡来の経路としは，楽浪郡25県の１つである蚕台県のあった歳の地から九州北部へ渡来したものと推察するが，その場合に南鮮を中継地としたかどうかについて明らかでない。

(2)　辻田２号墳出土の繊維製品

辻田２号墳出土の首飾の青銅丸玉の中にあった繊維製品の石撚りの紐で，紐の直径は約0.7㎜，撚り数は１㎝に付3.65回である。繊維の材質は，その断面形から苧麻とみられ，われわれの繊維断面の大きさは正倉院所蔵の苧麻布（１）のものに比べてかなり小さい。すなわち，苧麻としては未改良品種であったと考えられる。（布目順郎）

註１　１本の繭糸（bave）は２本の単繊維（brin）から成り立つている。本報において絹繊維と称するものはこの単繊維（brin）を指す。

2　方法の詳細については拙著「絹繊維遺物の研究」の３頁を参照されたい。

3　上海市紡織科学研究院，上海市糸綢工業公司文物整理組「長沙馬王堆一号漢墓出土的絨圈錦」『考古学報』1974—１，175—187頁。

4　福岡県飯塚市立岩遺跡調査委員会編「立岩遺跡」第５章，６，301--324頁（布目順郎執筆），1977，河出書房。

5　林英樹訳「三国史記」（上）巻第一，1974，（中）巻第二十三，1975，三一書房。
なお，「魏志」巻三十，東夷伝によれば，辰韓・弁辰・馬韓・濊ともに養蚕を行なっている。ただし，辰韓・弁辰は縑を出すも馬韓と濊は綿（まわた）を産するのみで織物としての絹は産していない。そして，東沃沮・高句麗・挹婁・夫餘などの国々では養蚕は行なわれていない。魏志」東夷伝にあるこれらの記載は３世紀になってのことであるから，たとえ漢代の辰韓・弁辰・馬韓・濊などの国々で養蚕が行なわれていたとしても，製品としてはこれ以上のものではなかったと思われる。

6　堀田禎吉「桑編」『農学大系』（作物部門），７頁，1951，養賢堂。

7　Teikichi Hotta "Distribution of Morus Peants of Low Datilude District in Tapan. 1 Distribution of Moras plcnts in Northern Kyusyu"『京都工芸繊維大学繊維学部学術報告』２—３，334—341頁，1951

8　湖南省博物館，中国科学院考古研究所編『長沙馬王堆一号漢墓』上集，46—55頁，1973

9　拙著「正倉院の繊維類について」（『書陵部紀要』第26号，１—46頁）1975

(5)　赤色顔料の分析について

２基の甕棺墓に認められた赤色顔料について，その種類と形状を知る目的で，顕微鏡観察とX線分析および粒子径分布の測定を行った。

この時期に用いられた赤色顔料としては，ベンガラFe_2O_3，朱HgS，鉛丹Pb_3O_4が考えられる。現在までに報告された分析例から，埋葬施設にはベンガラを，遺骸（特に，頭胸部）には朱を用いた場合が多いことが知られている。

試　料

試料は３点であり，その内容を表22に示す。顔料の色は粒度（粒子の大きさ）が大きな要素となるので，本来の粒度が損なわれることを避けるため今回は試料の細粉化を行なわなかった。小塊状のものは楽包紙に包み指で押してほぐした。人骨に付着した赤色顔料については，削り取らずにそのままの状態で用いた。

顕微鏡観察

表 22　試 料 一 覧 表

No.	遺 構	出　土　状　況	色	形 状
1	K 21	人骨に付着，棺内への流入土砂中にも少量が残存していた。	鮮紅色	小塊状
2			〃	頭骨片
3	K 24	甕棺の内面全体に多量に塗布されていた	〃	粉 末

スライドガラス上に試料を取り，反射光および透過光で検鏡した。（No. 2は反射光のみ）No. 1，3はそのほとんどが朱の粒子から成り，少量の土砂や人骨粉（No. 1）の混入は認められたが他の赤色顔料は観察されなかった。No. 2にはいくつかの朱の粒子を認めることができたが，大部分の顔料は人骨に密着しているため，粒子を識別することができなかった。しかし，その色調から朱であると思われた。

なお，人骨に付着した顔料については，遺骸が白骨化する段階で塗布したものとする説もあるが，今回の検鏡結果からだけでは，単に付着残存したのか塗布されたのか不明である。

けい光X線分析

主成分元素の定性分析が目的である。No. 1，3はマイラーに包み，No. 2は赤色部分とそうでない部分についてそれぞれ比較的平らな面を選び照射面積を一定にして測定を行なった。

測定条件は，理学電機製ケイ光X線装置・ガイガーフレックス・W対陰極，35KV—15mA，LiF—air，シンチレーションカウンター，であり，フルスケール，時定数，チャートスピード，走査速度は試料毎に適宜設定した。測定結果を表23に示す。

検出元素はFe，Hgであり Pb は検出されなかった。管球に由来する WLα に対する FeKα，HgLα のピークに関する相対強度比を求めた所，Fe は Hg に対して極めて小さい値となったので，これらの主成分元素は Hg であると考えられる。

X線回折

No. 1は試料の量が少なかったため（約50mg）無反射ガラス試料板の裏面中央に少量（3mg）をワセリンで付着させた。No. 3は多量にあったので（約3g）試料板表面のくぼみに充填した（100mg）。No. 2はアルミ板の中央に測定面が試料板の表面と一致するようにセロテープで固定した。各試料について主成分となる鉱物の同定を行った。測定条件は理学電機製X線回析装置・ガイガーフレックス，Cn/Ni 対陰極，40KV—20mA，プロポーショナルカウンター，スリット系1—0.3—1，であり，フルスケール，時定数，チャートスピード，走査速度は試料毎に適宜設定した。測定結果を表23に示す。

表 23　X線分析測定結果

No.	ケ イ 光 X 線 分 析	X線回折
1	FeKα, FeKβ, HgLα, HgLβ, HgLα	HgS
2	〃	〃
3	〃	〃

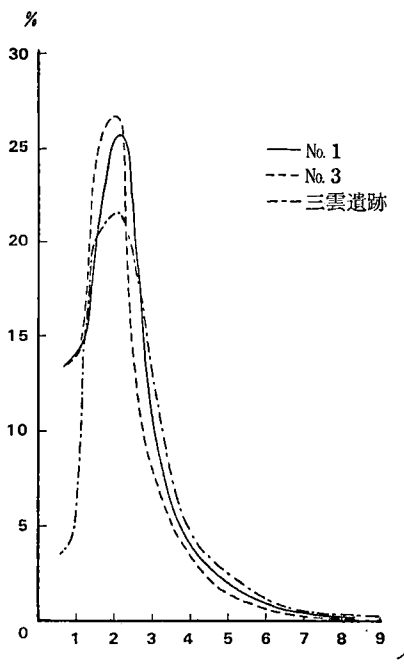
No.1，2，3はすべて HgS（六方晶系・赤）によるほとんどの回折線が同定され，HgS（等軸晶系・黒）は認められなかった。また，鉄化合物についてははっきり同定できるピークは認められなかったが，この点については Cn 対陰極を用いているため今回の結果からだけでは確定的なことは言えない。

以上の検鏡およびX線分析の結果から，No.1，2，3はかなり純粋な朱であり，Feは土砂あるいは朱の不純物に由来するものと考えられる。なお，X線回析分折により石英，長石等の鉱物も同定されたが，今回の試料はそれ自体に土砂を含むため，これらが顔料と土砂のどちらに由来するのか判断できないので対象外とした。

粒子径分布

No.1，3について顕微鏡法（光学）を用いて粒子径分布を測定した。検鏡試料としては，充分に乾燥させた試料をスライドガラス状に分散させたものを5個づつ作成した。朱以外に土砂や人骨粉が混入しており，投影像からだけでは朱と混入物との区別がつきにくいため，同一視野のカラー反射写真を参考にして拡大した 透過写真上の朱の粒子500個について2軸平均径を測定した。撮影倍率は200×で最終拡大倍率は1000×である。これらの粒子径分布から，粒度分布曲線および粒度累積曲線を求め第114・115図に示した。

粒径範囲はNo.1，3ともに0.5～8μ，最多頻度径 **d***mod*はNo.1で1.9μ，No.3が2μであった。分布曲線の形は左傾分布に近いが，これは光学顕微鏡を用いているため0.5μ以下の粒子について測定不可能であることも，その原因の1つかもしれない。粒径範囲，**d***mod*，中位径 **d***med* および分布・累積曲線の形が近似していることから，No.1，3はその製造条件，つまり天然産ならば粉砕・水簸の行程が，人造ならば生成時の温度等が，良く似ているとも考えられる。しかし，測定値のバラツキあるいは偏差等を考慮しなければならないので，今回の結果からだけでは確実なことは言えない。



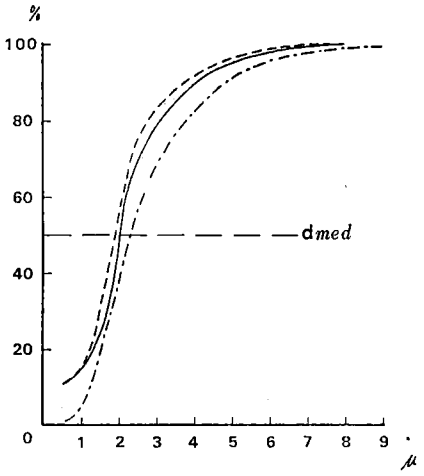
第114図　粒度分布曲線

墳墓に認められる朱の粒子径分布についてさらに情報を得るために，K21，K24とほぼ同時期の三雲遺跡の南小路1号甕棺墓に伴なわれた赤色顔料（福岡県教育委員会柳田康雄氏の御好意に依る）および時期の異なる野方塚原遺跡の箱式石棺墓内で検出された赤色顔料（福岡市教育委員会折尾学氏の御好意に依る）についても同様に測定を行な

表 24　粒子径分布測定結果

試　料	粒径範囲 (μ)	dmod(μ)	dmed(μ)
No. 1	0.5～ 8	2	1.9
No. 3	〃	1.9	1.8
三雲遺跡	0.5～ 9	2	2.1
野方塚原遺跡	0.5～26.5	9.4	8.1

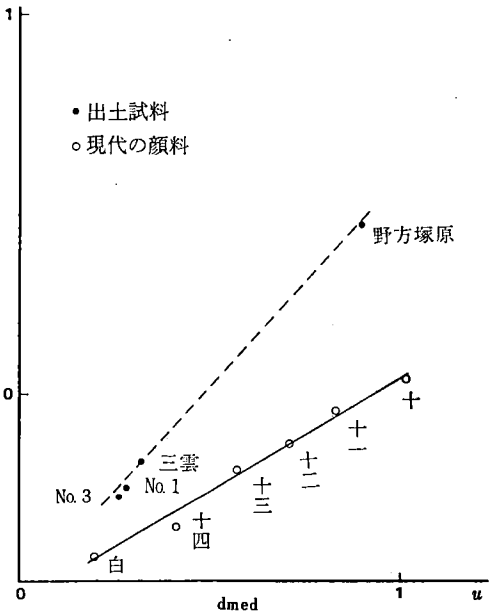
い，No. 1，3と比較した結果を第114・115図，表24に示した。両者とも顕微鏡観察およびX線分析の結果，朱であることが同定されたものである。野方塚原遺跡のものについてはその報告書を参照されたい。



第115図　粒度累積曲線

三雲遺跡の南小路1号甕棺の朱は，No. 1，2に比べて粒径範囲は少し大きいが，**dmed** はNo. 1と同じである。分布はやや不揃いである。野方塚原遺跡の朱は，以上の3点とは粒径範囲 **dmed** とも大きく異なることがわかった。図版109—1～4に各々の透過写真を示す。

以上の4点について，累積曲線より **dmed** および粒度の均一性を表わす算術四分偏差 Qa を求めた所，第116図の結果を得た。ところで，市販の朱（日本画顔料「天然辰砂」）はその粒度により細かいものから順に白，十四……五番までに分けられており，これらについても比較のために同様の測定を行ない Qa を求めた。使用した顔料は京都放光堂製天然辰砂白から十番までである。現代の顔料については一定の相関関係を認めることができるが，出土試料に関しては対象が少ないため規則性を認めるには無理があるかもしれない。しかし，No. 1，3および三雲遺跡南小路1号甕棺の朱は一つのグループを形成する可能性が強いと考えられ，野方塚原遺跡の朱はこれら3点とはまったく別種のものと言えるであろう。今後，試料数の増加とともに，測定値のバラツキあるいは偏差について統計的な検討を加えることによって，よりはっきりしたグループ分けが可能であると思われる。



第116図　粒子径と均一性の相関関係

結　論

1．No.1，2，3はすべて朱であり，かなり純粋な顔料である。

2．No.1，3はその製法が良く似ていると言えるかもしれない。

3．No.1，3は市販の朱の一番細かい種類と同程度の粒度を持ち，三雲遺跡南小路1号甕棺の朱も同様である。これに対して，野方塚原遺跡出土のものは非常に大きい粒度を示す。

4．今後，多数の朱について粒子径分布を測定することにより，考古学的に有効な分類を行なうことができると考えられる。

X線分析については，成瀬正和氏に測定の一部をお願いした。心からお礼申し上げます。

（本田光子）

(6) 門田遺跡出土のガラス玉類の材質について

(1) 試　料

辻田2号墳出土の勾玉1個（淡緑青色，長2.5cm），小玉5個（青色径6.5mm，淡緑，径5.0mm，緑色径4.5mm，赤褐色，径4.0mm，黄，径3.8mm）

15号土壙墓出土の管玉1個（淡緑青色，長17mm，径5mm）

1号石蓋土壙墓出土　黄色小玉破片

以上の9点で，2号墳の完形品青色小玉を除き，微小な気泡を含んでいるため，半透明で濁った色を呈している。また黄色小玉破片はわずかに緑色を帯びた黄色を微小破片で，その破片も細かい亀裂が数多く入っている。

(2) 分　析

これらの試料について，材質調査のため非破壊的方法により，蛍光X線分析を行なった。非破壊的方法による測定であるので，検出される元素は重金属領域の元素に限られ，ガラスの主な成分である珪素や，カルシウム，マグネシウム，ナトリウム，カリウム等は測定されないが，これらの試料に含有されていることは明らかである。

検出された重金属領域元素から，鉛ガラスか，アルカリ石灰ガラスであるかの判別，呈色金属の判定は可能である。

(3) 螢光X線分析結果

測定条件

X線管対陰極：白金　印加電圧および電流：40KV—20mA，分光結晶：弗化リチウム，検出器：シンチレーション・カウンター。

結　果

測定結果を次表に示す。

表 25　ガラス玉測定結果

試　料	検　出　元　素　（ ）内はX線強度
2号墳	
1．勾　玉	銅（中）・鉄（中）・鉛（弱）・ストロンチウム（弱）・ジルコニウム（弱）・ルビジウム（微） 錫（微）・バリウム（極微）
2．小　玉　青　色	銅（中）・鉄（弱）・鉛（微）・ストロンチウム（微）・錫（微）
3．　〃　緑　色	銅（弱）・鉄（弱）・錫（微）
4．　〃　淡緑色	銅（中）・鉄（弱）・鉛（弱）・錫（微）
5．　〃　赤褐色	銅（弱）・鉄（弱）・鉛（弱）・錫（微）
6．　〃　黄　色	鉛（強）・銅（弱）・鉄（弱）・錫（微）
15号土壙墓	
7．管　玉	鉛（強）・銅（弱）・鉄（弱）・バリウム（微）
8．青色小玉破片	鉄（弱）・銅（微）・鉛（微）・ストロンチウム（微）・ジルコニウム（微）
1号石蓋土壙墓	
9．黄色小玉破片	鉛（強）・銅（弱）・鉄（微）・錫（微）

試料が小さく，微量成分のスペクトル強度が弱く，判定が困難なものは除いた。

2号墳，勾玉，鉛を含むアルカリ石灰系ガラスで，バリウムを含むのが特徴で，鉛の量はあまり多くないと考える。

小玉類　青，緑色小玉は，アルカリ石灰ガラス，着色は鉄，銅による。不純物としては青色は鉛，錫，緑色は錫を含む。

淡緑色および赤褐色小玉は，鉛を含むアルカリ石灰系ガラスで，不純物に錫を含み，着色は，淡緑色は銅，鉄，赤褐色は銅によるものと推定する。

黄色小玉，鉛ガラスまたは鉛をかなり含んだアルカリ石灰ガラスであろう。不純物の錫着色は，従来の研究から鉄によるものと言われている。

管玉　バリウムを含む鉛ガラス，または鉛の含有量の多いアルカリ石灰ガラスであろう。着色は鉄，銅による。バリウムが特徴である。

1号石蓋土壙墓　黄色小玉破片，2号墳黄色小玉と同様，アルカリ石灰ガラスと鉛ガラスの中間の成分をもつガラスであろう。不純物として錫を含む。この試料について浮力を測定して比重を算出したが，数10㎎の重量であるのと，細かい亀裂が入っているので，不確実な値となったが，3より大であることが判った。比重から鉛の含有量を推定することは不可能であった。

(4)　考　察

以上のように非破壊的方法であり，微小試料であったため不明な点もあるが，バリウム，鉛を含む，15号土壙墓管玉，2号墳勾玉は，中国漢代ガラスとの関連が考えられる。漢代鉛ガラスの破片にアルカリ石灰系ガラスを混ぜて，わが国で熔融，成形されたものではないかと考えており，興味ある問題である。　（江本義理）

Ⅶ おわりに

(1) 調査の成果と問題点

1．弥生時代墓地調査の成果は，A群墓地の前期末の甕棺墓９基，中期後半の甕棺墓18基，中期のものと思われる土壙墓（木棺墓）14基，石蓋土壙墓１基，B群墓地の後期前半の甕棺墓２基，ほぼ時期を同じくする土壙墓４基，石蓋土壙墓１基の発見である。

とりわけ，盗掘を受けてはいたがA群墓地の23・24・27号甕棺墓（中期後半）から出土した青銅製鋤先１・鉄剣３・鉄戈２の発見である。特に，24号甕棺墓の棺外に副葬されていた鉄戈は，これまで類例のない銅戈を思わせる有樋鉄戈である。鉄分析の結果，鍛造品であることが判った。弥生時代中期の製鉄技術の水準の高さを知ることができる。

また，長さ約60㎝，径約２㎝の朱塗りの木柄が着装された痕跡が発見され，その着装方法が胡を上方に着装するという中国戈と異なる方法をとっていることが判ったことも大きな成果である。一方，盗掘を受け残存していないが，銅鏡２面の副葬があった痕跡を発見しえたことも重要である。

さらに興味深いことは，24号甕棺出土の検柄に巻かれた撚糸と27号甕棺出土剣身に巻かれた織物が，分析の結果，絹製品であり，すでに，弥生中期の時期にこの北部九州で養蚕を行い平絹を織っていた可能性が指摘されていることである。また，23号甕棺墓出土のほぼ完形の青銅製鋤先は，これまで，その大半が弥生終末の遺構に伴って発見されることが多かった。しかし，今回の発見はそれを中期後半までさかのぼらせる貴重な発見となった。

後期前半のB群墓地の甕棺墓・土壙墓・石蓋土壙墓から出土した多量の玉類の発見も貴重な資料となる。とりわけ，管玉・小玉は全てガラス製品で，総数1500個以上となる。また，ガラス管玉・小玉の製作法が少なからず明らかにされたことも重要な点である。

これらの両墓地群に存在する多量の副葬品をもちえた集団と持ちえない集団とがいかなる関係であったか，さらに時間的には連続する両墓地群が同一集団の継起的な墓地と理解するか重要な問題を今後に残している。また，周辺遺跡群との関係の中で，この集団の占める位置についても明らかにしていかなければならない。この問題については時間的余裕もなく検討しえず，今後に残された課題は大きいといわざるをえない。後日，分析を加えていきたい。

2．古墳時代墓地調査の成果は，５世紀後半代に比定される３号墳・２号墳，それと前後する時期に成立する単次葬の４号墳，最後に６世紀中頃から後半に築造される１号墳の４基であ

る。また，７世紀以降のものと思われる土壙墓５基の発見も重要である。

３号墳の石室は，いわゆる横穴式石室としては古式の竪穴系横口式石室の範疇に含まれるものである。

２号墳石室は頁岩質板状腰石を使用した特異な竪穴系横口式石室ともいえるもので，畿内型の竪穴式石室より発展したもののように基底部から扁平割石を小口積するものとは系統を若干異にする可能性がある。いわゆる「石棺系小竪穴式石室」から発展した石棺系の横口式石室であろう。

４号墳石室は小竪穴式石室というより石棺系小竪穴式石室である。

１号墳石室は前室・羨道の区別が不明瞭な横穴式石室といえるものである。

これまで那珂川流域における５世紀後半代の古墳の存在はかならずしも明らかにされていなかった。その意味で今回の辻田古墳群の発見はその空白部分を補う貴重な発見となった。

３．歴史時代墓地調査の成果は，平安時代の土壙墓１基，中世の火葬墓１基，江戸時代～明治時代にわたる近世墓42基の発見である。

特に，42基の近世墓はこれまで調査例の少ない貴重な資料である。棺材として利用された大甕は，いわゆる飯胴甕・石甕と呼ばれ，一般に穀物・味噌・醤油・酒・水などを貯蔵する甕として使用されてきたものである。その生産窯としては佐賀県東松浦郡相知町押川窯・横枕窯，武雄市多々良窯などが知られている。本遺跡例は全体として押川窯のものに類似している。

また，墓の一つとして扱った土瓶は，後産（胞衣）処理に使用された埋納器で，墓地の一角に埋置する風習はこの地域一帯に一般化したようである。（井上）

(2) 甕棺製作技術と工人集団把握への試論

a．はじめに

甕棺墓は弥生時代の九州で独自に発達をとげた特殊な埋葬様式のひとつである。それに使用された甕棺（大型棺）は日常生活用土器とは明らかに異なり，埋葬専用の目的で製作された超大形の甕形土器である。

とりわけ甕棺葬の盛行した北部九州では，形態（斉一性）・大きさ・数量のうえでも甕棺の製作技術は，土器作りの極地に達した作品ともいえる。現代の陶工が叩きとロクロを使用してもなかなか作りえないともいわれ，そこには熟練した高度な技術を修得した工人の存在がうかがわれる。これまで，甕棺製作における専門工人の想定は少なからず指適されてきた（註１）。また，その製作技術についても高島忠平氏（註２），橋口達也氏（註３）等の研究があり，甕棺製作工人の問題も具体的に追来する段階にきている。

ここでは門田遺跡辻田地区の中期後半の甕棺にみられる二つのタイプの甕棺の存在を一つの

手がかりとして，製作技術上の特色や工人集団把握への一つの試みを周辺遺跡の甕棺とも対比して行ないたい。しかし，中期後半という型式の時間幅内での差異の指摘には，埴輪生産のような時間的に極めて限定される場合での比較と比べ，その不充分性は否めない。だが，大枠としての製作技術・工人集団の差異の指摘は可能であろう。

b．製作技法

胎　土　肉眼観察によれば長石・石英をはじめとする多くの 砂粒や金雲母片が 含まれている。他に若干の角閃石を含むものもあるが数は極めて少ない。しかし，本遺跡の甕棺で特徴的なことは，一部の甕棺の胎土中に多量の「赤色粒子」が含まれ，焼き上がりの色が暗赤褐色で一定する一群の甕棺の存在である。この赤色粒子には径約１㎜の小さいものから５㎜の大きいものまである。奈良国立文化財研究所の沢田正昭・秋山隆保両氏の分析によれば「赤鉄鉱の塊片」であろうとのことである。

「赤色粒子」を含む甕棺は19号・20号・22号（上）・23号（上・下）・24号（上）・25号・27号（上）・28号の一群である。また，「赤色粒子」を一切含まない甕棺は10号・17号・21号（下）・22号（下）・24号（下）・27号（下）で，色調には黄褐色・茶褐色・赤褐色のものもあるが，その大半は黄褐色をなす。従って両者の差異は肉眼でも明瞭に識別できる。「赤色粒子」を含む一群をⅠ類，含まない一群をⅡ類とすれば両者が組合わさった甕棺墓が３基（22号・24号・27号）あり，同時に共存している。胎土中に含まれる砂粒の量・大きさでもⅠ・Ⅱ類は異なる。Ⅰ類は砂粒の量もⅡ類と比べ少なく，粒度も小さく均一であるのに対し，Ⅱ類は砂粒の量も多く，粒度も大きいものが多い違いがある。

成　形　幅約６㎝～14㎝の粘土帯を輪積みして作っている。いわゆる粘土紐を用いた「粘土帯積み上げ技法」（註４）である。 粘土帯の帯（表26）は６～８㎝のものが最も多く，底部付近と口縁部付近の輪積みは幅３㎝～５㎝と狭いものが多い。積み上げは普通13～17段で，24号下甕のような超大型のものは21段の輪積みで成形している。その内でも15～16段のものが最も一般的で，積み上げの技法は高島忠平氏のいう「ひとつ積み上げた粘土帯の上端にほぼ同じ厚さで粘土帯を積み上げる技法（A技法）」と「積み上げた粘土帯の内側か外側面に，つぎの粘土帯の下部を貼りつけるようにして積み上げる技法（B技法）」（註５） の両技法が併用されている。

甕棺のような大型のものは一度に積み上げることは 不可能であり， 途中で積み上げを停止し，一定の乾燥を待たなければその上に積み上げることはできない。その工程を良く残す例に23号下甕（第117図）がある。 それをみると底部から口縁部まで少なくとも６段の小工程の存在が内面調整の仕方で観察できる。底部・胴下位・胴中位・胴上位下半・胴上位上半・口縁部の６段階で，小工程ごとの刷毛目調整と次の粘土帯積み上げ時に調整されるナデ調整が交互に

表 26　粘土帯幅の計測表

（単位cm）

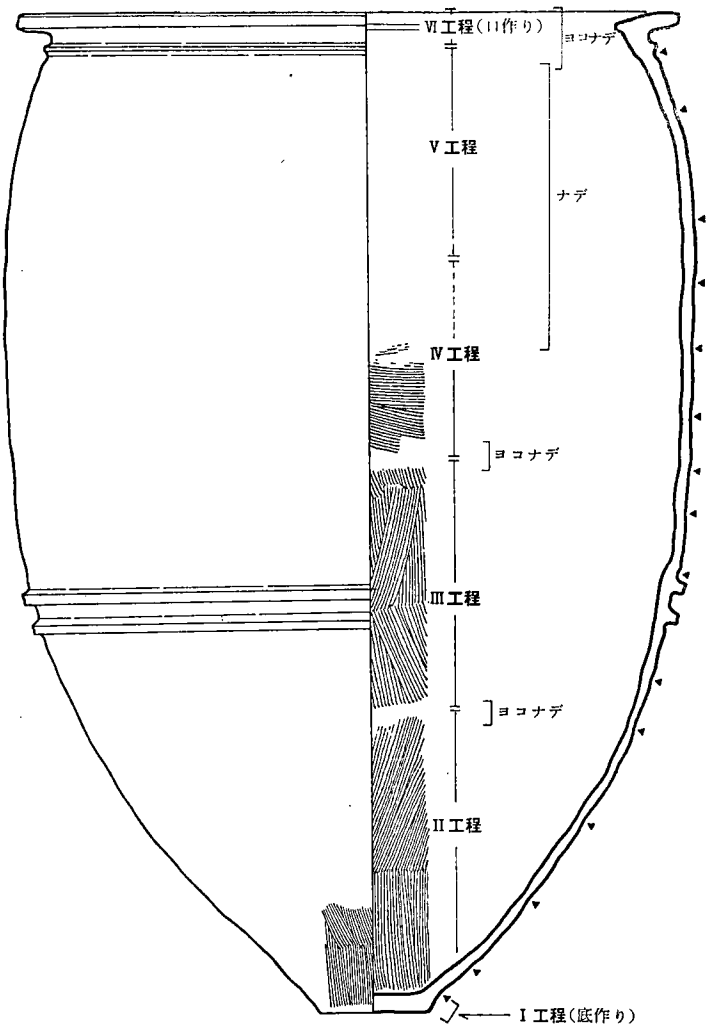
No.	口縁					→	底部（口縁部と底部は除く）												
K10	5.4	6.6	7	6.8	8	7.6	6	8	10	10.2	10	4.8							
K19	8.4	8	7.8	6.4	7.8	7	12.8	8.8	9	3.4	4	6.6	6	3.4					
K20	4	7	7	8.4	8.6	6.6	8	11.2	8	7.2	8.4	9.6	8.4	6.6					
K21（下）	6.8	8	7	6.2	6.8	6.8	14.8	9	5.4	9	12.4	9	7.4						
K22（上）	6.8	7.6	6.6	3.2	8.2	6.6	4.4	2.8	5.4	11	10.2	7.4	4.4						
（下）	4	5.6	11	11	4.6	9.4	9.6	10.8	10.2	9.4	6.2								
K23（上）	3	6.4	10.2	8.0	6.6	6.6	6.6	8.2	5.6	13.4	10.7	7.8	11.8	6.4					
（下）	2.4	5.2	11.8	6.2	7.4	6.2	5.8	5	6.2	11	6.4	10.4	10	9.4	4				
K24（上）	3.8	7.4	7	6	7.4	7 4	12.4	17	11.4										
（下）	2.8	6	8	6.4	4.4	8.3	10.4	7	5.4	6.2	5.8	8.0	6.8	9	8.4	5.6	6	5.4	4
K27（上）	6	5.4	10	7.6	6.8	6.6	7.4	9.4	6.4	9.6	18.4	6.6							
（下）	4.8	7.8	10.4	8.8	7.4	8.2	6	6.6	6.4	9	9.8	7.4	8.6	6.2					

繰り返される。そこに下位の刷毛目がナデ消され，次の段階の積み上げが終るとわずかな空間を残し，刷毛目調整がナデ調整の上から開始される。その繰り返しが底部から胴上位下半まで行なわれ，胴上位上半はナデ調整で，最終段階の口縁部の作成はヨコナデ調整で仕上げられている。一工程の粘土帯積み上げ数は，胴下位で4段，胴中位で4段，胴上位下半で少なくとも3段，胴上位上半で3段である。粘土帯の積み上げ方法は調整順序から見ても底部から口縁部への成形方法をとっている。他にも若干不明の部分もあるが成形段階の判る10号・23号（上）甕棺では少なくとも5段階あり，本遺跡の甕棺は5～6段階の工程を経て出来上るのが一般のようである。

一方，成形方法の一つに，器体上半と下半を別個に作り突帯周辺において上下を接合するという技法（註6）や，粘土板を縦に合わせて成形する技法（註7）の存在が指摘されている。しかし，本遺跡例ではそのような成形技法は観察できない。また，粘土板を縦に合わせて成形する方法にタタキ技法が用いられたといわれているが，それも確認できなかった。だが，甕棺のような超大型の土器作りにはタタキ技法の存在は充分に考えられる技法であろう。

調　整　観察しえた調整手法は，刷毛目・ナデ（ヨコナデ・ナデ上げ・不定方向ナデ）調整が主なもので，一部に磨きを思わせるものがあるが，丁寧なナデ調整と識別が難しい。

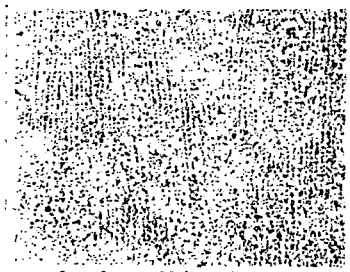
『胴部内外面の調整』　内外面の調整はまず刷毛目によってなされる。刷毛目（註8）には細かいもの，粗いものなどさまざまであるが，擦痕の状態により6種類にわかれる（第118図）。(A)幅1㎝単位あたりに10～11本の凸面が観察できるもので，最も細かい刷毛目，(B)1㎝単位あ



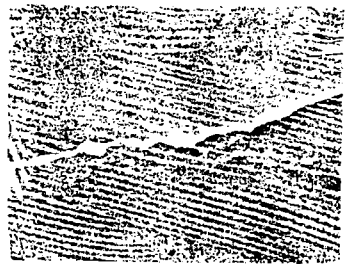
第117図　甕棺成形工程（1/8）

たり７本前後の凸面があり，凸面と凹面の幅がほぼ同じ刷毛目，(C)幅１cm単位あたり４～５本の凸面があり，凹面より凸面の幅が広い刷毛目，(D)幅１cm単位あたり５～７本の凸面があり，凹面の幅が凸面より広い刷毛目，(E)幅１cm単位あたり４本の凸面があり，凹面の幅が凸面の２倍近くある粗い刷毛目，(F)幅１cm単位あたり２本の凸面があり，刷毛目Ｅとは反対に凸面が凹面の２倍近くある条痕状をなす極めて粗い刷毛目である。刷毛目の方向は原則として下から上に走るが外面下半の一部に上から下に走るものもある〔21号（下）・22号（下）・27号（下）〕。

甕棺の胴部内外の調整は刷毛目調整のあと丁寧なナデ調整で器面を平滑に仕上げたもの，刷毛目調整のままのもの，部分的にナデ調整を加えて仕上げたものなどがある。丁寧なナデ調整には一見磨きを思わせるものもある。



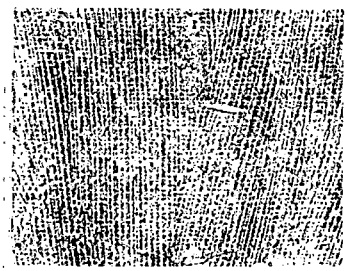
A—1　K23上・外面下半



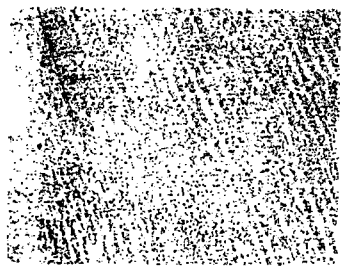
B—1　K23上・内面中位

D—1　K23下・内面中位

E—1　K10・内面上半



A—2　K23下・外面底部



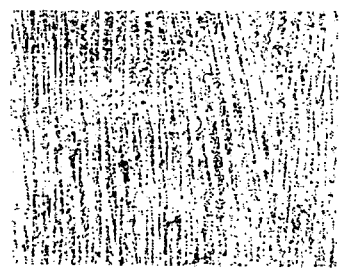
C—1　K21下・外面上半

D—2　K22下・外面下半

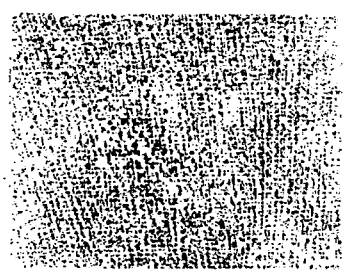
F—1　K22上・内面上半

A—3　K23上・内面上半

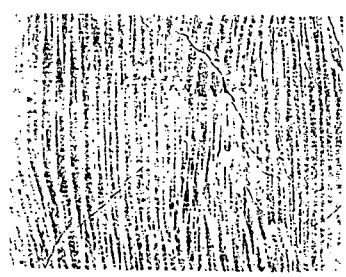
C—2　K23上・内面下半



D—3　K21下・外面下半

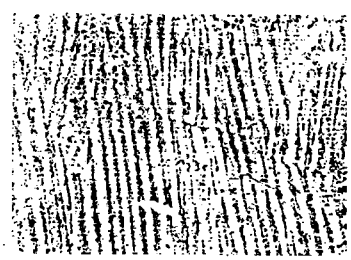


A—4　K10・外面下半

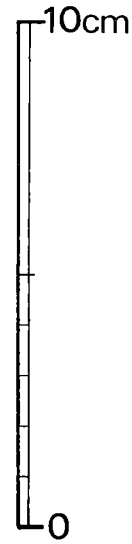


D—4　K27下・外面上半

A—5　K23上・内面底部



D—5　K17・外面上半



第118図　甕棺刷毛目拓影(2/3)

『口縁部の調整』　胴部内外面の調整が終った後，口縁部を調整する。口縁部の調整は刷毛目のあとすべてヨコナデで仕上げるが，ヨコナデの後，さらに口縁部上面を刷毛目調整したものがある〔21号（下）・24号（下）・27号（下）〕。

『凸帯の貼付けと調整』　凸帯には胴部凸帯と頸部凸帯があり，凸帯の断面形は「コ」字形のもの，三角形をなすものの２種類がある。三角形凸帯は「コ」字形凸帯に比べ少なく，27号下甕の胴部凸帯が三角凸帯である他は頸部凸帯の４例にみられるのみである。調整はすべてヨコナデである。

頸部凸帯は製作工程の最終段階の口縁部作りの段階で貼付される。しかし，胴部凸帯は胴中位の3段階目の成形・調整が終了した後に貼付されるものである。凸帯貼付の意味については，成形段階におけるひび割れを防ぐための補強として施されるもので，従って凸帯の位置は成形上２段目の上端部であり，それから上との継ぎ目にあるという高島忠平氏の意見（註９）と，運搬の用に供するもので補強のためのものではないという橋口達也氏の意見（註10）がある。

胴下半の外側への開きが強い中期後半の甕棺の成形段階で，極めて難しいのは胴中位の３段階目の成形であろう。いわゆる胴部最大径に移行する部分で，最も体部がひらきやすい所である。従って，体部の外側への「タレ」・「ひび割れ」を防ぐことが土器製作上，特に重要であり，凸帯の貼付は器体のひらきを防ぐ欠せない工程といえる。そこには近世の大甕作りにみられる形崩れを防ぐための紐かけ作業（註11）も甕棺製作上考える必要があろう。どの甕棺にも一般的にみられる凸帯部内面の内側への張り出しが単に凸帯貼付け時の外側からの押しつけによる結果だけでできるものでなく，型崩れを防ぐ紐かけ技術が存在した可能性が高い。

また凸帯の効用が運搬に供するためという意見も，実際，そこに縄かけして持てば超大型の甕棺も意外と二人で容易に運ぶことが出来ることからも充分うなずける。両者の意見はそのまま共存したものとして凸帯の貼付がなされたものと思う。

しかし，高島氏の凸帯は粘土帯の接合部にあるという指摘があるが，本遺跡ではそのような例は極めて少ない。だが，凸帯が接合部につこうが中間位置につこうが，さほど問題ではなく，要は体部の外側への開きを防ぐことであり，本遺跡例にみるように接合部上端に近い部分に施されてもその目的は充分に果されると思う。

以上，甕棺の調整手法には細部において若干の違いはあるが大きく４種類に分けられる。a：器面内外とも全面丁寧なナデ仕上げで平滑にしたもの（19号・20号・24号上・27号上），b：胴部外面上半は丁寧なナデ調整，下半は刷毛目とナデ調整で仕上げたもの。内面下半は刷毛目仕上げ，上半は刷毛目のもの，ナデ調整のもの，両者が併用されたものがある。刷毛目調整工具には粗いもの，細かいものもあるが，細かい刷毛目のが多く，２種類以上の工具を使用している（23号上・23号下・22号上）。c：胴部外面下半は全て刷毛目，上半は刷毛目のものとナデ調整したものがある。内面も刷毛目のものとナデ仕上げのものがある。刷毛目は１種類か

2種類で粗い刷毛目のものが多い（10号・17号・22号下）。 d：内面は全て丁寧なナデ仕上げ，外面は刷毛目のもの，ナデ仕上げのものもある。口縁部の仕上げはヨコナデによるものが普通であるが，ヨコナデの後，さらに上面のみを刷毛目調整で仕上げている手法は他にはみられない（21号下・24号下・27号下）。

また，内外に施された刷毛目擦痕の走行形状は，内と外でかなり共通している。それは刷毛目調整時の器体内外の乾燥条件がかなり同一化していることを示すものであろう。とりわけ，甕棺のような超大型の土器作りには前記したような数段階の一定乾燥の小工程が必要であることはいうまでもないが，特に内外の乾燥状態は外側と比べ遅くなる。従って，近世の大甕作りに行われる「火鍋操り」（註12）による乾燥の促進等も甕棺製作上考えられる技法であろう。

焼成・色調　調整の完了した甕棺は『乾燥』の工程をへて『焼成』され完成する。

焼き上りの色調には黄褐色・茶褐色・赤褐色・暗赤褐色の4種がある。その大半は暗赤褐色と黄褐色を呈すもので，その差異は明瞭に識別できる。暗赤褐色を呈すグループ（Ⅰ類）は19号・20号・21号下・22号上・23号上・23号下・24号上・25号・27号上・28号の10例，黄褐色を呈すグループ（Ⅱ類）は10号・17号・21号上・22号下・27号下の5例である。Ⅰ・Ⅱ類の両者が組み合さった甕棺は21号・22号・27号例で3基あり，両者は共存している。

暗赤褐色を呈すⅠ類甕棺は，胎土中に多量の赤色粒子を含む胎土Ⅰ類と一致し，黄褐色を呈すⅡ類甕棺は赤色粒子を含まない胎土Ⅱ類に一致する点は重要である。焼き上りの発色は，焼成温度・焼成方法等の相違を示すと同時に，粘土中に含まれる夾雑物・混入物や混和材（註13）の差異も重要な原因をなす。従って，色調の差異のみわけは製作技法上の違いをみるうえで，有効な手段である。

その意味で，赤色粒子を含む甕棺の焼き上りが暗赤褐色で一定することは，焼成温度もさることながら，赤色粒子（赤鉄鉱の塊片）を混和することにより暗赤褐色の一定の発色をねらった可能性もあろう。

c．甕棺の分類

門田遺跡辻田地区の甕棺の製作技術についてはすでに記してきた。その結果，胎土・焼き上りの色調で大きく二大別でき，さらに器面内外の調整手法の差異で4分類できることが明らかになった（表27）。

Ⅰタイプ　いわゆる胎土に多量の赤色粒子を含むもの。また，胎土中に含まれる長石・石英などの砂粒の量がⅡタイプと比べ少なく，粒度も小さく均一である。焼き上りの色調は暗赤褐色で一定する。調整手法にはａ・ｂの二手法がある。

Ⅱタイプ　胎土に赤色粒子を一切含まないもの。また，胎土中に含まれる長石・石英などの砂粒の量も多く，粒度も大きいものが目立つもの。焼き上りの色調は黄褐色をなすものが主

表 27　甕棺分類表

タイプ	調整手法	No.	色調	胎土に赤色粒を含む	胴部外面調整		胴部内面調整		口縁部上面調整	刷毛目の種類	凸帯	
					下半	上半	下半	上半			胴部	頸部
I	a	19	暗赤褐色	○	ナデ	ナデ	ナデ上げ	ナデ	ヨコナデ		コ	コ
		20	暗赤褐色	○	ナデ	ナデ	ナデ〃	ナデ	ヨコナデ		コ	コ
		24上	暗赤褐色	○	ナデ	ナデ	ナデ〃	ナデ	ヨコナデ		コ	コ
		27上	暗赤褐色	○	ナデ	ナデ	ナデ〃	ナデ	ヨコナデ		コ	コ
	b	23下	暗赤褐色	○	ハケ・ナデ	ナデ	ハケ	ナデ	ヨコナデ	A－2，D－1	コ	コ
		上	暗赤褐色	○	ハケ・ナデ	ナデ	ハケ	ハケ	ヨコナデ	A－1・3・5 B－1，C－2	コ	>
		22上	暗赤褐色	○	ハケ・ナデ	ナデ	ハケ	ハケ・ナデ	ヨコナデ	A，F－1	コ	>
II	c	17	黄褐色		ハケ	ハケ	ナデ上げ	ナデ	ヨコナデ	D－5	コ	コ
		22下	黄褐色		ハケ	ナデ	ナデ〃	ナデ	ヨコナデ	D－2	コ	コ
		10	黄褐色		ハケ	ナデ		ハケ	ヨコナデ	A－4，E－1	コ	>
	d	24下	茶褐色		ナデ	ナデ	ナデ上げ	ナデ	ハケ	D	コ	コ
		21下	赤褐色		ハケ	ハケ・ナデ	ナデ〃	ナデ	ハケ	D－3	コ	>
		27下	黄褐色		ハケ	ナデ	ナデ〃	ナデ	ハケ	E－4	>	コ

で，茶褐色・赤褐色を呈すものもある。調整手法にはｃ・ｄの二手法がある。

以上のような辻田地区の甕棺に存在する共通性と差異性が如何なる意味をもつものか即座に決定しえないが，Ⅰタイプ・Ⅱタイプの差は甕棺製作工程の根幹をなす粘土採取・素地作りからの違いを少なくとも示すものであろう。また，調整手法からみたａ～ｄの４手法もそれぞれ独自の手法的特徴をもっている。２種類以上の刷毛目調整工具を使用したｂ手法と，１～２種類の工具で粗い刷毛目のものが多いｃ・ｄ手法でもその差異は存在する。

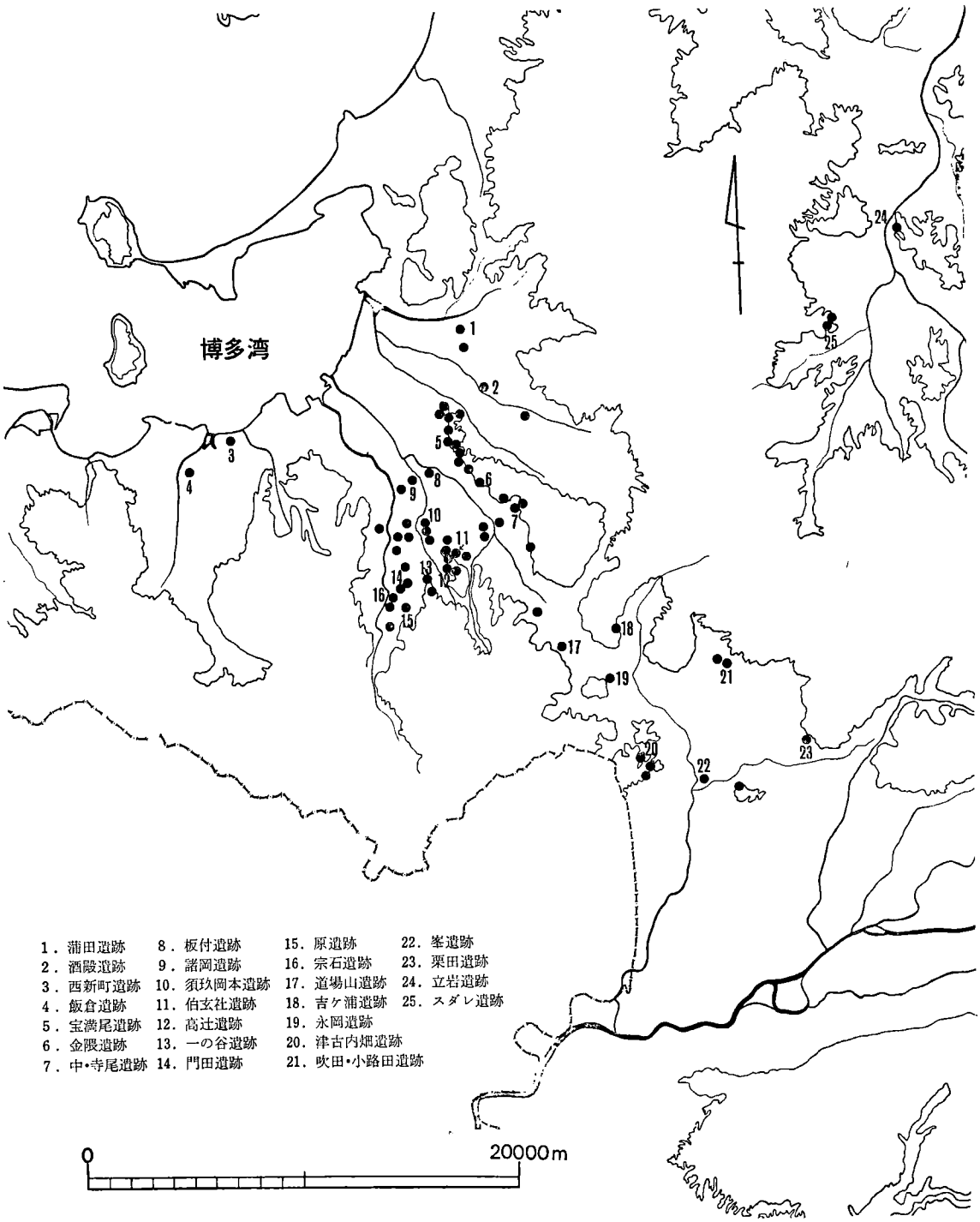
さらに，ｂ手法とｃ手法内の甕棺の刷毛目に極めて類似した工具の存在が観察できることである。ｂ手法に属する23号上甕と23号下甕で，刷毛目Ａ—１・５（23号上）とＡ—２（23号下），ｃ手法に属する21号下甕と27号下甕で，刷毛目Ｄ—３（21号下）とＤ—４（27号下）である（第118図）。

とりわけ，23号甕棺は上・下組合さった資料であり，同一作者の作品の可能性が高い。

このような２つのタイプの差を製作者集団の違い，調整手法にみる４つの手法（ａ～ｄ）を集団内の工人ないしは工人単位の違いと考えることもさしたる飛躍ではなかろう。

ｄ．周辺の遺跡の甕棺との対比

門田遺跡辻田地区の甕棺に存在した２つのタイプの甕棺，とりわけⅠタイプとした暗赤褐色を呈し，胎土に赤色粒子を多量に含む甕棺を一つの大きな目安とし，形態的特色・製作手法も



第119図　周辺の主要な甕棺遺跡分布図（1/300,000）

考慮に入れ，周辺遺跡の甕棺を検討したい。

門田遺跡辻田地区とほぼ並行する中期後半の甕棺を有す近隣の遺跡としては，門田遺跡門田地区（註14）・原遺跡（註15）・一の谷遺跡（註16）・高辻遺跡（註17）・若葉台遺跡（註18）・須玖岡本遺跡（註19），また近年調査された一の谷A地点遺跡（註20）などが群在している。この地域は「奴国」の中心地ともいわれ，弥生時代遺跡が密集する地域である。

また，地域的には若干異なるが同じ福岡平野にある福岡市諸岡遺跡（註21）・金隈遺跡（註22）・蒲田遺跡（註23），福岡平野と筑後平野の緩衝地帯にある筑紫野市道場山遺跡（註24），いわゆる筑後平野の朝倉地域にある三輪町栗田遺跡（註25）もその対象として検討したい。

Ⅰタイプ甕棺を有する遺跡　このタイプの甕棺をもつ遺跡には春日市一の谷遺跡・一の谷A地点遺跡・高辻遺跡・若葉台遺跡・門田遺跡辻田地区などがあり，他に工事中に採収された資料ではあるが，春日市須玖岡本遺跡付近・坂口２丁目例などもある。地域は異なるが筑紫野市道場山遺跡では，中期から後期にわたる112基の甕棺墓が発見されている。中期後半に属する甕棺墓は70基で，その内の３基（26号・33号・40号）５例がこのタイプの甕棺である。また，福岡市諸岡遺跡でも極似した甕棺がある。

現在知られる遺跡で，このタイプの甕棺を最も多く有す遺跡は一の谷遺跡・一の谷A地点遺跡である。一の谷遺跡では，中期後半の甕棺の90％以上にその特徴をみることができる。一の谷A地点遺跡もほぼ同様の比率を示すようであり，この地域がⅠタイプ甕棺の中心地域の可能性が高い。

しかし，同一遺跡である門田遺跡の門田地区にある甕棺墓中にはこのタイプの甕棺は存在せず，また，南西500mに近接する200基を越す甕棺墓群が発見された原遺跡でも一切見ることができず，明らかに異なる一群の甕棺が存在している。

原遺跡　春日市大字上白水字原に所在する。中期中頃から後期初頭にわたる遺跡で，その数は200基を越す大甕棺遺跡である。遺跡の中心時期は中期中頃～後半で，中期後半の甕棺が多く発見されている。その甕棺は，焼き上りの色調が褐色ないしは黄褐色を呈す同系色のものでほぼ一定し，顕著な区別はできない。形態的にも，調整手法の点でも共通したものが多い一群の甕棺である。

全てを実見したわけではないが，調整手法は辻田地区甕棺のａ・ｃ手法のものが多く，刷毛目もD—３（第118図）のような粗い工具を使用したものが多いようである。また，原遺跡の甕棺はⅠタイプ甕棺と比べ，胴部の器肉が厚く，胎土に含まれる砂粒も多い。特に肉眼観察ではあるが石英粒が目立ち，その粒度も大粒のものが多いという特色をもっている。この一群の甕棺は明らかにⅠタイプ甕棺とは分離しうる。しかし，辻田地区のⅡタイプ甕棺との区別は，胎土・焼き上りの色調などの共通性も多く，現時点では不明である。

道場山遺跡　筑紫野市大字武蔵に所在する。中期後半～後期初頭にわたる遺跡で，112基が

発見されている。中期後半に属す甕棺墓は70基あり，その内の３基（26号下・33号上下・40号上下）５例にⅠタイプ甕棺が存在している。しかし，その他は黄白色ないしは淡黄色とでもいう焼き上りの色調で，ほぼ一定する甕棺である。従って，暗赤褐色を呈すⅠタイプ甕棺の摘出は容易である。胎土も原遺跡例と比べ，砂粒の量は少なく，その粒も小さいものが多い。調整手法にはａ・ｂの２つの手法が存在し，その多くはａ手法である。また，粘土帯の幅が全体に広く，12～18㎝を測るものが多い。中には29㎝を測るものまであり，この遺跡の一群の甕棺も他とは明らかに異なる特色をもつタイプである。

栗田遺跡　朝倉郡三輪町大字栗田字経田に所在する。中期中頃から後半にわたる遺跡で，現在73基が発見されている。墓地は北東側にさらに広がるので100基近くなる可能性がある。

この遺跡の甕棺は，まだ未報告のため詳細は知りえないが，実見しえた中期後半の甕棺には焼き上りの色調が黄白色・黄褐色・淡褐色を呈すものがあるが，全体として黄白色ないしは黄褐色系のものである。胎土に含まれる砂粒は大きいものが多いが，器肉も薄く作りの良い甕棺である。実見しえた資料では調整手法はａ・ｂ手法の２つで，ａ手法が多いようである。

蒲田遺跡　福岡市東区大字蒲田字北熊に所在する。甕棺葬が盛行する福岡平野の北西のはずれに位置するともいえる遺跡である。甕棺墓はＡ・Ｄ地区の２地点から発見されていて，総計23基である。時期は中期中頃から後期初頭にわたる。この遺跡の甕棺には胎土に赤色粒子を若干含み，焼き上りの色調も暗赤褐色を呈すものがあり，Ⅰタイプ甕棺に近似している。しかし，赤色粒子の量はⅠタイプ甕棺と比べ極めて少ない甕棺である。

以上，辻田地区の甕棺に存在する２つの製作技法を異にする甕棺（Ⅰ・Ⅱタイプ）を手がかりに，とりわけ，Ⅰタイプ甕棺を大きな目安として他遺跡の甕棺の特色と差異を指摘してきた。

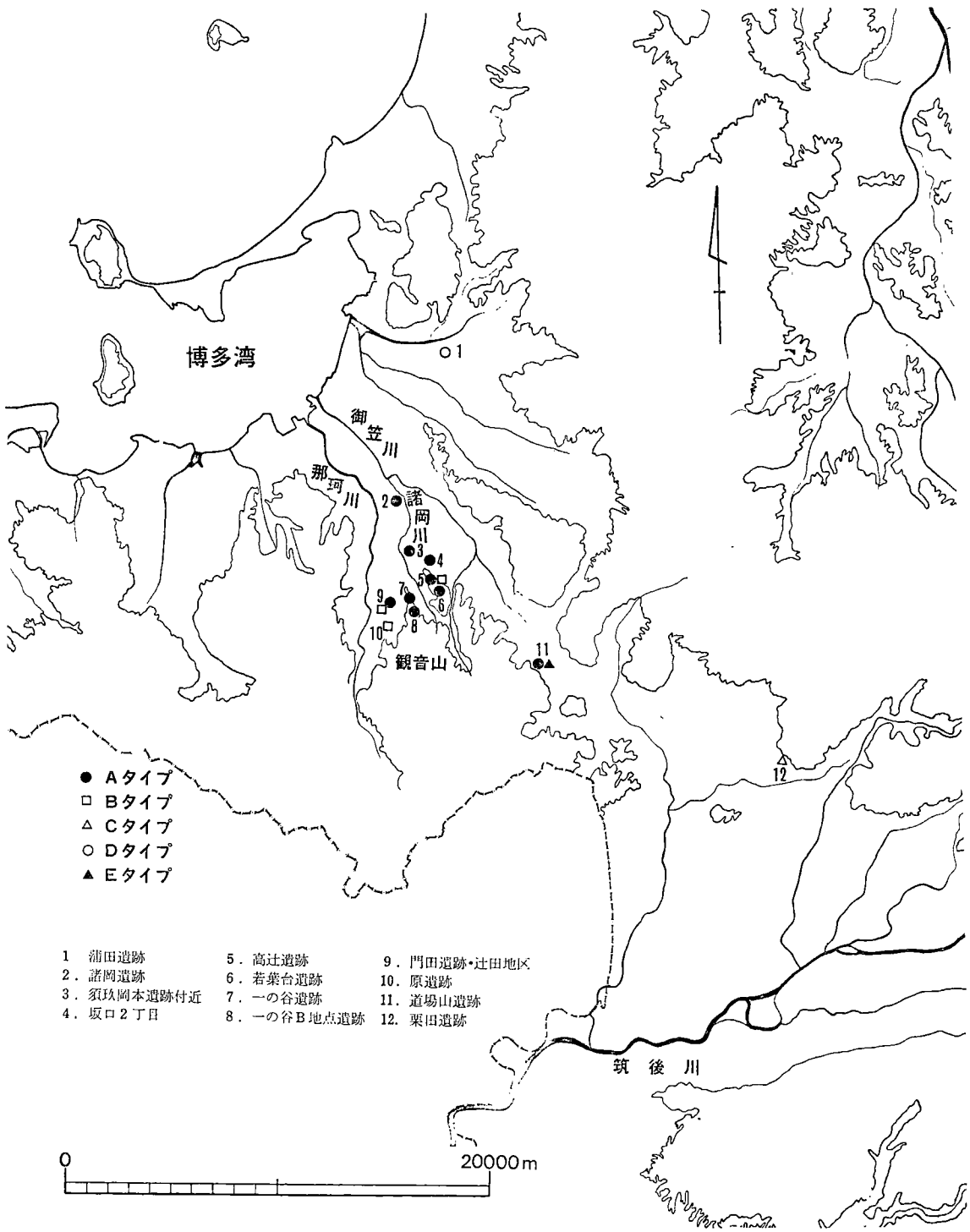
その結果，本遺跡に近接する門田遺跡門田地区や原遺跡に，Ⅰタイプ甕棺と明らかにタイプを異にする一群の甕棺が多数存在することが判った。それはⅡタイプ類似の一群の甕棺で，別タイプとして分離が可能である。

また，道場山遺跡でもⅠタイプ甕棺と明らかに異なる一群の甕棺の存在が指摘できた。この一群の甕棺は原遺跡の一群のものとも異なったタイプであることもほぼ明らかにできた。

しかし，栗田遺跡・蒲田遺跡については充分な検討ができていないため，他遺跡との比較で不分明な点が多い。栗田例は色調的には道場山例に近い要素をもち，蒲田例は胎土・色調の共通性でⅠタイプに近い要素をもつが，明瞭な区別・共通性の指摘が困難な一群の甕棺である。

だが，両者とも前記した遺跡と明らかに地域を異にする遺跡であることを考え，一応，別タイプとしておきたい。従って，将来，解消されるタイプかもしれない。

ここで仮に，Ⅰタイプ甕棺をＡタイプ，Ⅱタイプ類似の原遺跡甕棺をＢタイプ，栗田遺跡甕棺をＣタイプ，蒲田遺跡甕棺をＤタイプ，道場山遺跡甕棺をＥタイプと呼ぶことにしよう。



第120図　甕棺タイプ分布図（1/300,000）

この５つのタイプは，素地作り・成形手法・調整手法・焼成方法など，少なからず製作技術上の一定の安定した独自の技法をもっている。とりわけ，A・B・Eの３タイプは安定した独自の技法を備えたタイプともいえる。このタイプを製作者集団の違いと措定するにはまだ多くの問題を残すが，このモデルを一つの足がかりとして甕棺生産体制の実態を明らかにすることは可能と思う。

今回，不充分ながらも分類しえた５タイプと不分明な甕棺の胎土分析を奈良国立文化財研究

表 28　甕棺タイプ一覧表

No.	遺跡名	甕棺番号	時期	色調	胎土に赤色粒を含むもの	タイプ	胎土分析試料番号
1	門田・辻田地区	K1（下）	前期末	黄褐色			1
2		K9（下）	〃	〃			2
3		K10	中期後半	〃		B′	3
4		K11（上）	前期末	〃			
5		K12（下）	中期後半				4
6		K15	〃	暗赤褐色			5
7		K17	〃	黄褐色		B′	6
8		K19	〃	暗赤褐色	○	A	
9		K20	〃	〃	○	A	7
10		K21（上）	〃	黄褐色		B′	
11		K21（下）	〃	赤褐色		B′	8
12		K22（上）	〃	暗赤褐色	○	A	9
13		K22（下）	〃	黄褐色		B′	10
14		K23（上）	〃	暗赤褐色	○	A	11
15		K23（下）	〃	〃	○	A	12
16		K24（上）	〃	〃	○	A	13
17		K24（下）	〃	茶褐色		B′	14
18		K25	〃	暗赤褐色	○	A	15
19		K27（上）	〃	〃	○	A	16
20		K27（下）	〃	黄褐色		B′	17
21		K28	〃	暗赤褐色	○	A	
22	門田・門田地区	K47（下）	中期中葉	褐色			33
23		K57（下）	〃	黄褐色			34
24		K59（下）	〃	〃			35
25	原	K5（下）	中期後半	褐色		B	22

No.	遺跡名	甕棺番号	時期	色調	胎土に赤色粒を含むもの	タイプ	胎土分析試料番号
26		K15 (下)	中期中葉	〃			23
27		K99 (上)	〃	黄褐色			24
28		K100 (下)	〃	褐色			25
29		K122 (上)	中期後半	黄褐色		B	26
30		K125	〃	〃		B	27
31		K136 (下)	〃	褐色		B	28
32		K6 (下)	〃	淡褐色		B	43
33		K110 (下)	〃	淡褐色		B	44
34		K121 (下)	〃	黄日色		B	45
35		K128	〃	淡褐色		B	46
26		K134 (上)	〃	茶褐色		B	47
37		K134 (下)	〃	褐色		B	48
38	一の谷	K2 (下)	〃	暗赤褐色	○	A	29
39		不明	〃	〃	○	A	30
40		K5 (下)	〃	〃	○	A	
41		K9	〃	〃	○	A	
42		K15 (下)	〃	〃	○	A	
43		K22 (下)	中期中葉	〃	○	A	
44		K26	〃	〃	○	A	
45		K29	後期初	〃	○	A	
46	高辻	CK2	中期後半	褐色		B	18
47		CK4	〃	暗赤褐色	○	A	
48		BK4	中期中葉	黄褐色			19
49		BK8	〃	褐色			20
50		CK9	中期後半	暗赤褐色	○	A	21
51	須玖岡本付近		〃	〃	○	A	56
52	坂口2丁目	K1	〃	〃	○	A	
53	若葉台	K1 (下)	〃	〃	○	A	
54	諸岡	K2	〃	褐色			41
55		K27	〃	暗赤褐色	○	A	42
56	金隈	K77 (下)	〃	茶褐色			36

No.	遺跡名	甕棺番号	時期	色調	胎土に赤色粒を含むもの	タイプ	胎土分析試料番号
57		K120	〃	黄褐色			37
58	蒲田	K2 (A)	中期中葉	褐色			38
59		K13 (D)	中期後半	(暗)赤褐色	○	D	39
60		K12 (D)	〃	〃	○	D	40
61		K11 (4区)	〃	淡黄褐色			57
62		K5 (F28)	〃	暗赤褐色	○	D	58
63		K6下(K1)	〃	〃	○	D	59
64		K12 (D)	〃	〃	○	D	60
65	道場山	K1 (下)	〃	暗赤褐色	○	A	49
66		K33 (上)	〃	〃	○	A	50
67		K33 (下)	〃	黄白色		E	51
68		K48 (下)	〃	〃		E	52
69		K75 (下)	〃	〃		E	53
70		K99 (下)	〃	〃		E	54
71		K101 (上)	〃	〃		E	55
72		K40 (下)	〃	暗赤褐色	○	A	
73		K26 (下)	〃	〃	○	A	
74	栗田	K10 (上)	〃	黄白色		C	31
75		K26 (下)	〃	〃		C	32
76		K19 (下)	〃	黄褐色		C	61
77		K22 (下)	〃	黄白色		C	62
78		K28 (上)	〃	淡褐色		C	63
79		K28 (下)	〃	黄白色		C	64
80		K34 (上)	〃	〃		C	65

所の沢田正昭・秋山隆保両氏に依頼した。その分析資料は一覧表に示した通りである。詳細はⅥ—2を参照されたい。不充分な分類段階の資料の分析を快く引き受けていただいた沢田・秋山両氏に対し，謝意を表する。

e．胎土分析結果と甕棺の分類

門田遺跡辻田地区の甕棺を中心に周辺10遺跡の資料も加え甕棺の胎土分析を実施した。ここではその結果と，製作手法を主な基準として分類しえたA～Eの5タイプとがどのような関連性をもつかを検討したい。

胎土分析は，蛍光X線分析法と偏光顕微鏡観察の二方法で実施された。蛍光X線分析法で測定された Rbkα，　Srkα，　Zrkα 線のピークの高さを利用したSrkα／Zrkα，Rbkα／Zrkα 比の結果では，AタイプとBタイプが明瞭に分離された。その差は粘土の構成成分の異なりを示すものといわれている。また，DタイプとしたAタイプ近似の蒲田例が，Aタイプ側に属する結果を得たことも重要である。甕棺分類の際，Aタイプに近い要素を多くもちながらもDタイプとして別にあつかった蒲田例がAタイプに帰属しうる可能性が高いことが判ったことである。

しかし，明瞭に分類できたEタイプや，不充分ではあるが分類したCタイプについては，試料数が少ないこともあって，全体に分散し，一定のまとまりをなさなかったようである。

また資料提供者のミスでAタイプの典型資料である甕棺を依頼時に不明として扱った辻田地区23号甕棺上甕（胎土分析資料番号11）が，蛍光X線分析でAタイプに帰属することが指摘されたことは極めて重要である。

偏光顕微鏡観察の結果でも，AタイプとDタイプの共通性や，AタイプとBタイプの明確な分離が指摘されている。一方，蛍光X線分析で資料的にも少なく分散的であったCタイプがBタイプ群に類似する点が明らかになったことは大きな成果である。

とりわけ，胎土分析の結果えられたAタイプとBタイプの明瞭な分離は，甕棺製作手法上の差異とも一致する。辻田地区甕棺でⅡタイプ（10号・17号・21号下・22号下・24号下・27号下）として分離されたBタイプ類似の甕棺は，当初Bタイプとして措定するつもりであった。しかし，Bタイプの典型とする原遺跡例に調整手法のd手法がみられないので，将来さらに別タイプとして分離される可能性が高いため，不明として扱ったものである。胎土分析の結果では，A・Bタイプの中間位置に属するもの（17号・22号下・24号下）と，Bタイプの外延に位置するもの（10号・21号下・27号下）があり，全体としてBタイプに近い結果を得ている。従って，Bタイプ類似の甕棺であることには異論はないが将来さらに詳細な検討を必要とする一群の甕棺であろう。

f．甕棺工人集団の存在

さきに門田遺跡辻田地区の甕棺群（中期後半）に，製作手法を異にする2つのタイプの甕棺が存在することを論じた。また，周辺の甕棺遺跡にも明らかに手法を異にする甕棺が存在することも説いた。

辻田地区の甕棺は，胎土に「赤色粒子」（赤鉄鉱の塊片）を含み，焼成・色調が暗赤褐色で一定する焼き上りをもつⅠタイプ（Aタイプ）と，胎土に一切「赤色粒子」を含まず，焼成・色調がほぼ黄褐色で一定する焼き上りをもつⅡタイプ（Bタイプ類似）とがあり，胎土に含まれる長石・石英などの砂粒でも大別できる。前者が後者と比べ量的に少なく，粒度も小さく均

一であるのに対して，後者は量的にも多く，粒度も大きいものが目立つ違いがある。このような差異は，甕棺製作工程の根幹をなす良好な粘土の採取や，超大形の甕棺製作に適した粘土の調合，混和材の添加などの素地作りからの違いを示すものである。また，同時に一定の安定した焼き上りの色調は焼成温度・焼成方法などの安定した技術の定着を示すものであり，その差は技術の違いを表わすともいえる。その差異は胎土分析の結果でも，粘土構成成分の違いがほぼ証明されていることと一致する。

また，調整手法にみるａ～ｄの４手法にもそれぞれ独自の手法的特徴をもつが，その差は存在する。２種類以上の刷毛目調整工具を使用したｂ手法（Ⅰタイプ）と，１～２種類の工具で粗い刷毛目のものが多いｃ・ｄ手法（Ⅱタイプ）の違いである。

この結果からみて，同一の工人ないしは工人集団が両系統の技法を併用して製作した可能性よりも，別工人ないしは別工人集団が存在し，製作したと考えた方が説明がつきやすい。粘土採取から焼成までの一連の安定した工程を，根本的に変えて製作できる工人ないしは工人集団が存在したとしても，その変える理由が証明されないかぎり認めがたいことである。

また，周辺の甕棺遺跡との対比の中でも触れたように，本遺跡の２つのタイプも含め，Ａ～Ｅの５つの別タイプの存在を指摘した。　とりわけ，Ａ・Ｂ・Ｅの３タイプの差異は明瞭であり，工人集団の違いを示すものであろう。特に，Ａ・Ｂ両タイプの差は，胎土分析の結果でも明瞭に分離され，明らかに構成成分が異なる粘土を使用していることが証明されている。

これら異なる工人集団により製作された甕棺が，共存する遺跡が二・三知られている。門田遺跡辻田地区のＡタイプ（Ⅰタイプ）９例とＢタイプ類似（Ⅱタイプ）６例の共存，道場山遺跡におけるＡタイプ５例とＥタイプ84例以上の共存であり，他に，高辻遺跡のＡタイプとＢタイプ類似の甕棺の存在，諸岡遺跡におけるＡタイプ類似とＢタイプ類似の甕棺の共存などがあげられる。このような同一遺跡における異なる工人集団の製作による甕棺の共存関係は，甕棺の生産と消費の関係を知る上で重要であると同時に，その解釈は弥生時代のこの地域の集団関係を理解する重要な問題を内包しているといえる。

生産地の限定をするとすれば，Ａタイプは一の谷遺跡・一の谷Ａ地点遺跡付近にその中心が考えられる。ＢタイプおよびＢタイプ類似の甕棺は原遺跡付近，Ｅタイプは道場山遺跡付近に想定することが可能であろう。

Ａタイプ甕棺の分布は，現在知りうる限りでは最も広範かつ量的にも多い。Ａタイプに近似するとしたＤタイプの蒲田例が，胎土分析の結果でも同質とされたもので，それがＡタイプに帰属するとすれば，北は蒲田遺跡，南は道場山遺跡，東は坂口２丁目遺跡，西は門田遺跡辻田地区にわたることになる。特に，今後の調査の進展により，東への拡大は充分考えられる。しかし，西と南への拡大は，門田遺跡辻田地区・道場山遺跡でのＡタイプの比率からしてもさほど広がることはなかろう。

また，Aタイプと明瞭に分離しえたBタイプは，Bタイプ類似甕棺も含め今後の詳細な検討を必要とするタイプであるが，現時点では原遺跡を中心として門田遺跡門田地区・辻田地区，高辻遺跡などに分布しているようである。胎土分析の結果をみると，諸岡遺跡・金隈遺跡例にも同様の構成をもつ甕棺があるが，手法上での検討をへていないので保留しておきたい。さらに明瞭に分離しえたEタイプについては道場山遺跡例のみでの検討であり，その分布の確定は今後の問題である。

しかし，分類段階でも不分明であったC・Dタイプは，Dタイプが胎土分析の結果，Aタイプと同質とされたものでAタイプに帰属する可能性が高い。Cタイプは偏光顕微鏡観察で，Bタイプ類似とされたものである。今後の詳細な検討を必要とするタイプで，別工人集団の把握は今後にゆずりたい。

ここでは甕棺製作にたずさわった工人ないしは工人単位について触れてみたい。辻田地区甕棺にみられるａ～ｄの４つの調整手法の差異に，工人ないしは工人単位の措定が可能であるとすれば，Ⅰタイプ（Aタイプ）にａ・ｂの２手法，Ⅱタイプ（Bタイプ類似）にｃ・ｄの２手法があり，少なくとも２工人ないしは２工人単位の存在が想定できる。また，ａ～ｄの４つの手法内には，まだ多くの小差が存在するので，それに一人の工人をあてるとすれば，工人の数はさらに増えることになる。この小差を措定するには資料数も少なく，今後資料的に豊富な遺跡での検討がさらに必要である。従って，ａ～ｄの４つの調整手法の差異は集団内の工人単位の違いと理解する方が妥当かもしれない。

工人集団の把握には，生産地の確定も伴う。しかし，これまで甕棺を製作したと思われる遺構・遺跡を発見した例をきかない。これだけ超大形で，多量の甕棺を焼いた跡が発見されないことは不自然ともいえる。豊富な原料粘土・水・燃料木材等の入手が容易な場所，また，甕棺は日常生活用土器と違い，超大型であり，重量（100Kgを超すものもある）もかなりあることからも製品搬出の容易な場所であったろう。水系を伴った山麓付近が有力な候補地であろう。その意味で，Aタイプ甕棺はその密集する地域を貫流する諸岡川（御笠川の支流）水系の上流，観音山山麓が有力ともいえる。今後の調査に期待したい。

g．おわりに

門田遺跡辻田地区の甕棺の製作技法を検討する中で，周辺の甕棺遺跡との対比を行い甕棺工人集団の復原を試みてきた。だが，なお不充分な点を多くもつため今後に残された問題は多いといわざるをえない。特に，これら工人集団が専門工人としてどれだけ自立していたかという問題や工人集団と消費者側の集団との関係などは今後に残された大きな課題である。

しかし，この試論が甕棺生産体制究明への一つの糸口となり，各遺跡での詳細な比較検討がなされることを望む。（井上）

(3) 甕棺を黒く塗る風習

一般に，焼成時の火まわりの悪さによってできるともいわれる「黒斑」とは，明らかに異なる黒色の「炭」を思わせる顔料が甕棺の外面全体に塗られている。

これまで，甕棺内面の赤色顔料の塗布や丹塗り甕棺の存在は各地で知られていた。しかし，外面に黒色顔料を塗った例については全く注意されていなかった。今回のこの発見は九州歴史資料館で遺物整理を担当されている岩瀬正信氏である。従ってその知見は岩瀬氏に負うところが大きい。

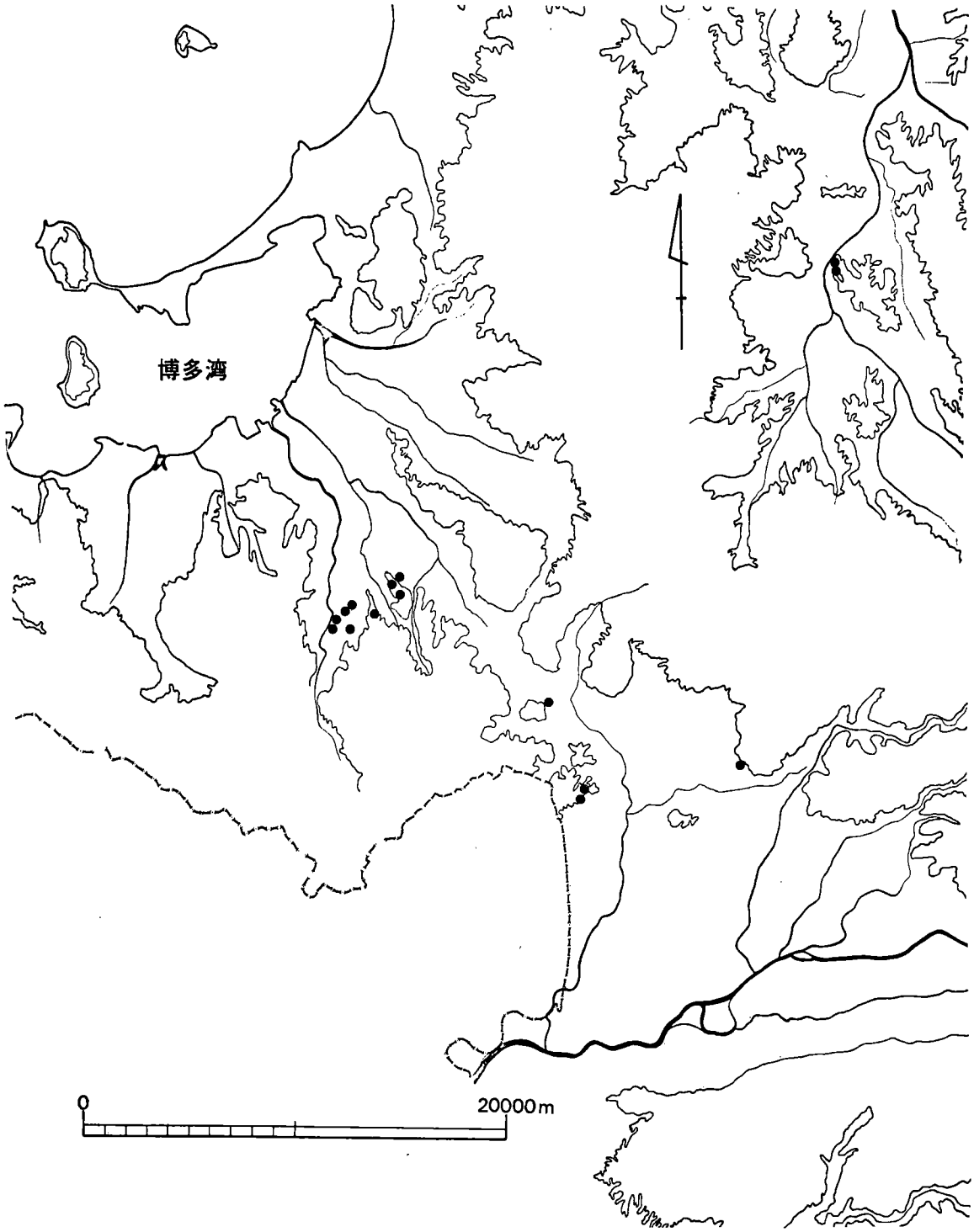
本遺跡で黒色顔料が塗られた痕跡を残す甕棺は，17号・19号・20号・21号下・23号上下・24号上下・27号上下の7基10例である。他は器面の風化が著しく確認できない。この黒色顔料の塗布が明らかに焼成後に施されたものであることは完存する27号下甕により判る。27号下甕の頸部凸帯は，何等かの理由で焼成前に一部が剝落したまま焼成された甕棺で，黒色顔料は明らかにその部分にも塗られているのである。従って焼成後に塗布された黒色顔料は，遺存状態の悪い遺跡や土器洗いの不注意でも消失してしまうだろうし，これまで注意されなかった一因も少なからず理解できる。

黒色顔料がいかなる物質であるかは今後の化学分析を待たなければならないが，もし「炭」であるとすれば読み取りにくい木簡や壁画等の 撮影に良く適用される 赤外線撮影が有効と考え，実施した。その結果は少なからず肉眼観察よりも黒色塗布の痕跡を顕著にみることができた（図版110）。しかし，風化の進んだ器面ではその痕跡をみることは困難のようである。 それは焼成後の塗布もあって内面への浸透をほとんどみない結果かもしれない。

この黒色顔料を塗った甕棺の類例は，実見しえたもので現在11遺跡あり，その数は50例をゆうに越している。主な遺跡としては，春日市門田遺跡門田地区，原遺跡，伯玄社遺跡，高辻遺跡，若葉台遺跡，那珂川町宗石遺跡，筑紫野市永岡遺跡，飯塚市甘木遺跡，立岩・堀田遺跡などがある。その類例は，今後さらに増大し，その分布も拡大するであろう。甕棺の外面に黒色顔料を塗る風習は，甕棺葬が盛行した北部九州一帯に普遍的に行われていた可能性は高い。

時期は，現在知られるその大半が中期前葉から中葉の甕棺であるが，門田遺跡辻田地区や若葉台遺跡例は中期後半のものであり，少なくとも甕棺葬が盛行する中期全般に一般化していたことが知られる。また，今後の資料の増加により前期・後期まで広がる可能性がある。

この甕棺外面を黒く塗る風習が，いかなる意味をなすものか即座に決めえないが，少なくとも外面を黒く塗ることにより死者の霊魂が安らかに鎮静することを願う意味がこめられたものと考えられないだろうか。 （井上）



第121図　黒色塗彩甕棺分布図（1/300,000）

註1　高島忠平「土器の製作と技術」『古代史発掘』4　1975　講談社

2　註1に同じ

高島忠平「甕棺の製作技術」『立岩遺跡』立岩遺跡調査委員会編　1977　河出書房新社

3　橋口達也「道場山1地点の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　ＸＸＶ　福岡県教育委員会　1978

4　佐原真「土器製作法」『陶芸辞典』1970

5　註2に同じ

6　山崎純男「宝満尾遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』26　1974

7　折尾学「金の隈遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』7・17　1970・1971

8　横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』23　1978　横山氏の研究による。

9　高島忠平「甕棺の製作技術」『立岩遺跡』立岩遺跡調査委員会編　1977　河出書房新社

10　註3に同じ

11　永竹威「武雄古唐津系陶芸技法調査記録」『佐賀県文化財調査報告書』27　佐賀県教育委員会　1974

12　註11に同じ

13　佐原真「土器の話1」『考古学研究』64　1970　佐原氏の用語に従った。

14　佐々木隆彦他「門田遺跡門田地区墓地群の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』6　福岡県教育委員会　1977　佐々木氏から胎土分析の提供をいただいた。記して謝意を表したい。

15　木下修氏御教示，なお，木下氏から胎土分析資料をいただいた。記して謝意を表したい。

16　宮小路賀宏他「一の谷遺跡」『春日町文化財調査報告書』2　1969　春日市中央公民館長亀井勇氏より胎土分析資料をいただいた。記して謝意を表したい。

17　井上裕弘他「高辻遺跡」『春日市文化財調査報告書』3　1972

18　春日市中央公民館長亀井勇氏御教示

19　島田貞彦「筑前須玖史前遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』11　1930

20　春日市教育委員会丸山康晴氏御教示

21　横山邦継他「板付周辺遺跡調査報告書」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』29・31　1974・1975

なお，横山邦継氏から胎土分析資料をいただいた。記して謝意を表したい。

22　註7に同じ，なお，折尾学氏から胎土分析資料をいただいた。記して謝意を表したい。

23　飛高憲雄他「蒲田遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』33　なお，飛高憲雄氏から胎土分析資料をいただいた。記して謝意を表したい。

24　橋口達也・川述昭人「道場山1地点の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　ＸＸＶ　福岡県教育委員会　1978　なお，川述昭人氏から胎土分析資料をいただいた。記して謝意を表したい。

25　馬田弘稔「栗田遺跡」『三輪町文化財調査報告書』1　1974　なお，馬田弘稔氏から胎土分析資料をいただいた。記して謝意を表したい。

図　　版

1　門田遺跡辻田地区全景航空写真（西から）

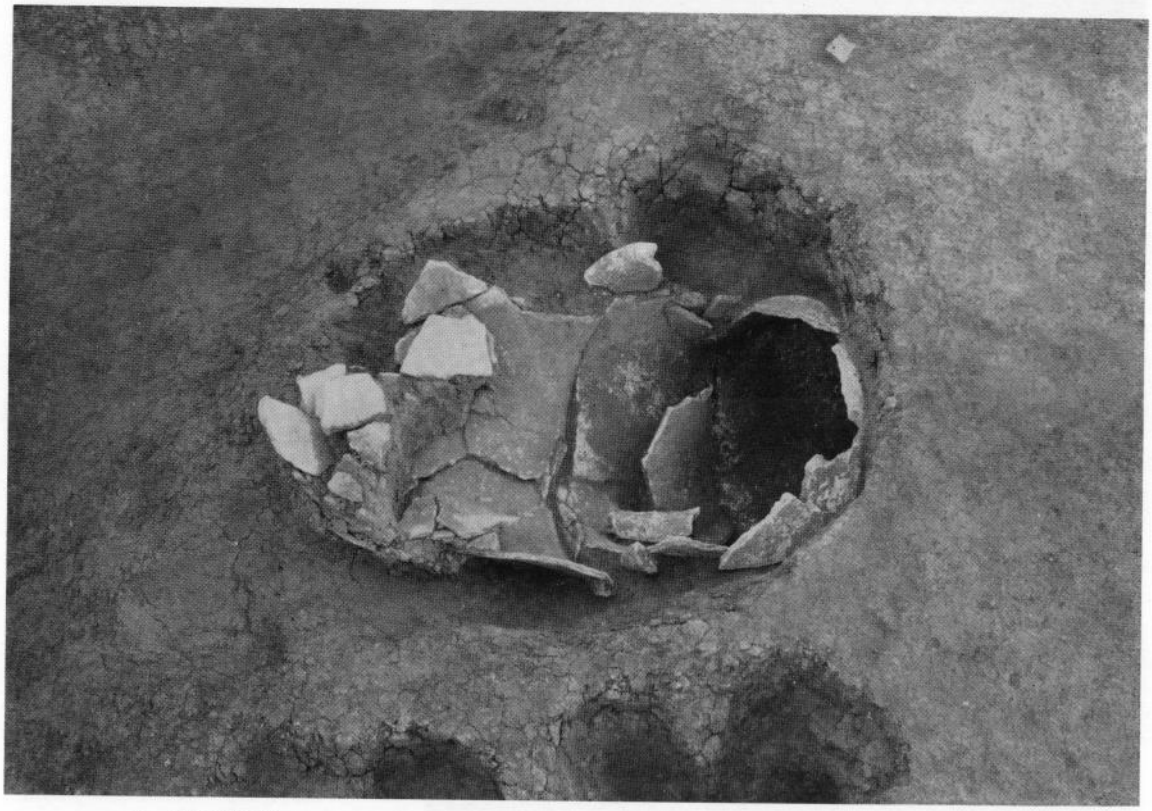
2　昭和47年度・辻田地区の予備調査航空写真（東から）

図版　2

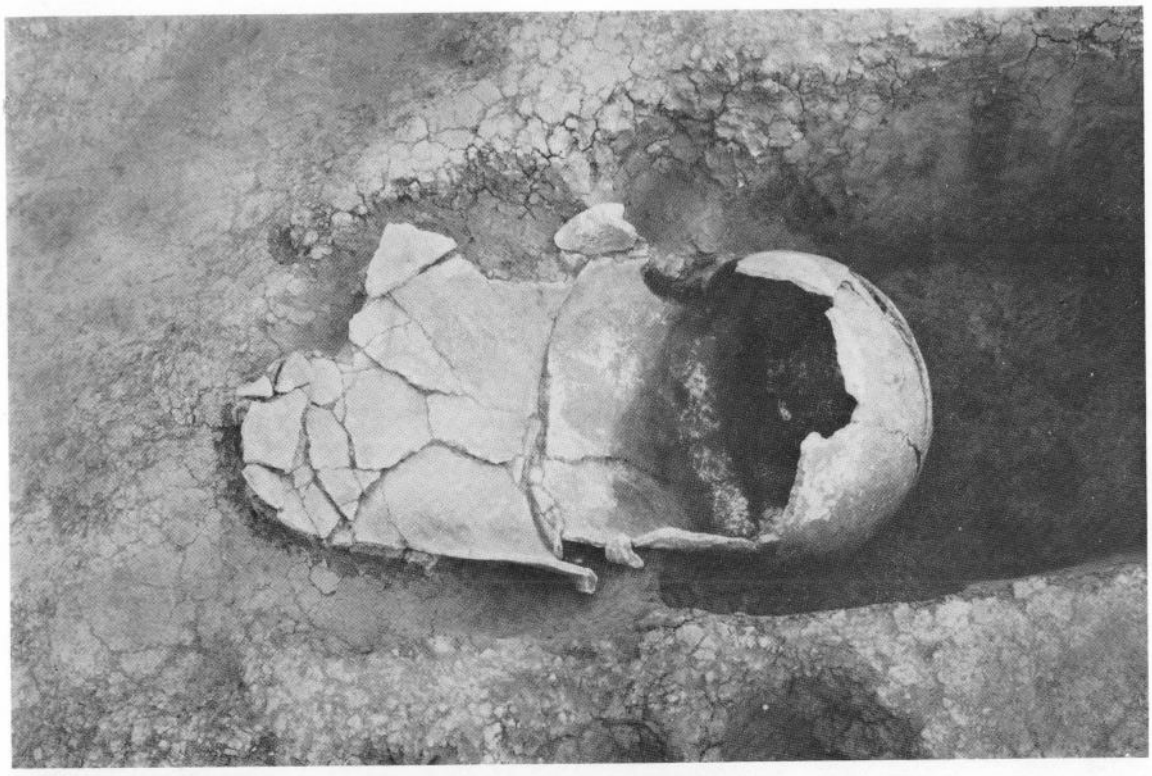
1　昭和48年度・辻田地区調査航空写真（西から）

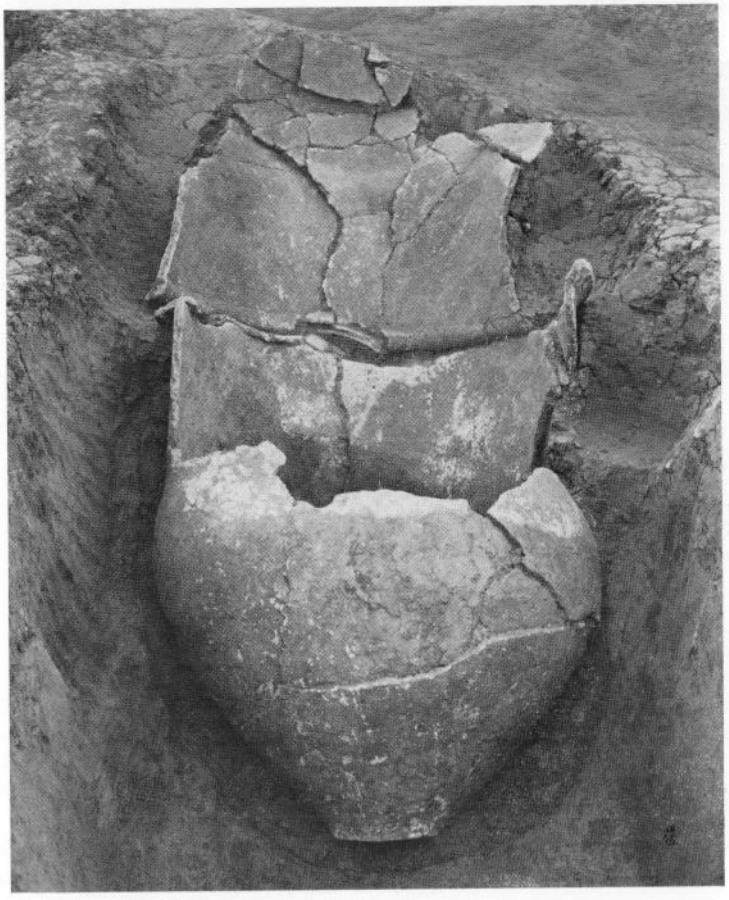
2　昭和50年度・辻田地区調査航空写真（東から）

1　弥生時代A群墓地西端部の甕棺・土壙墓群



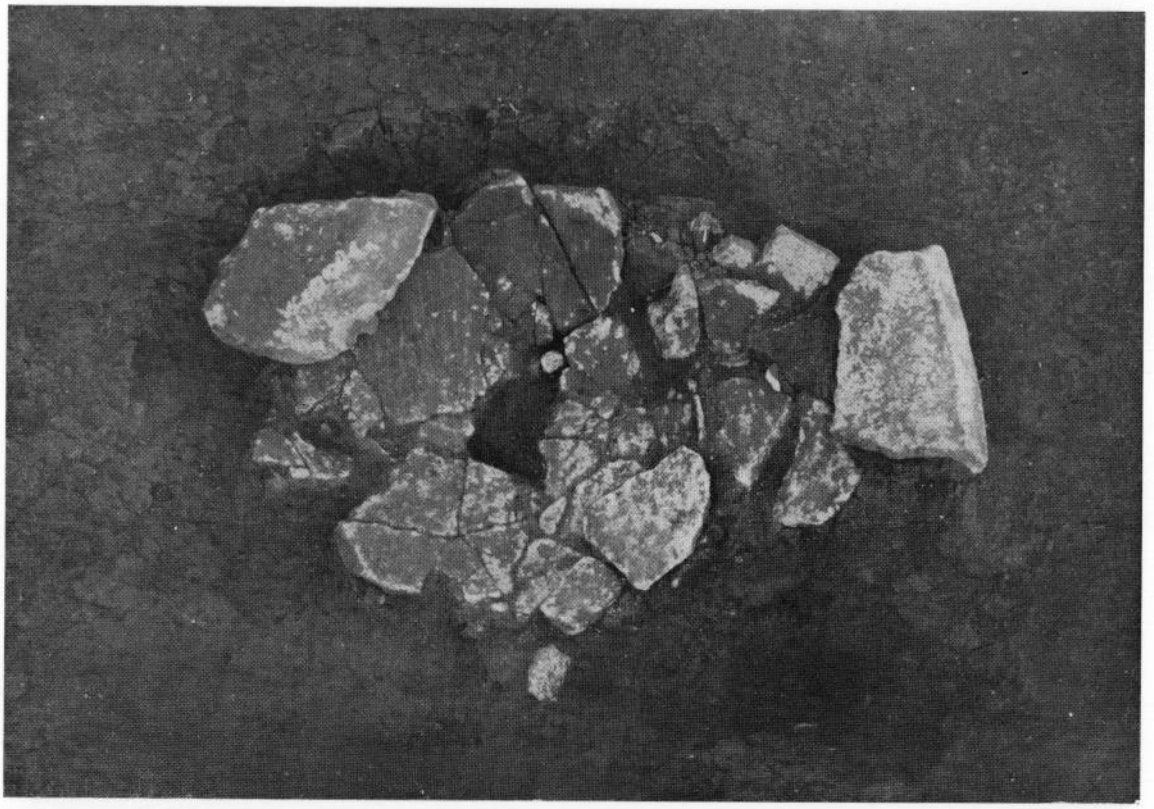
2　1号甕棺墓



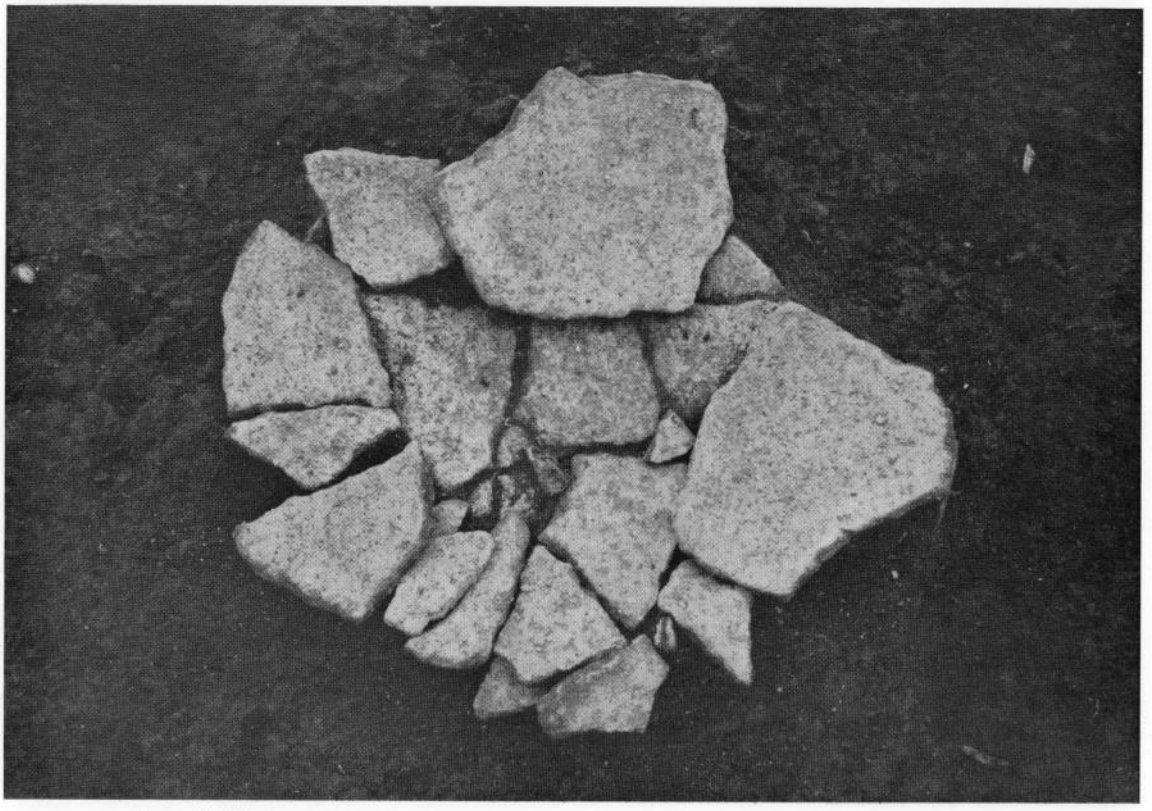


上　1号甕棺墓（南から）

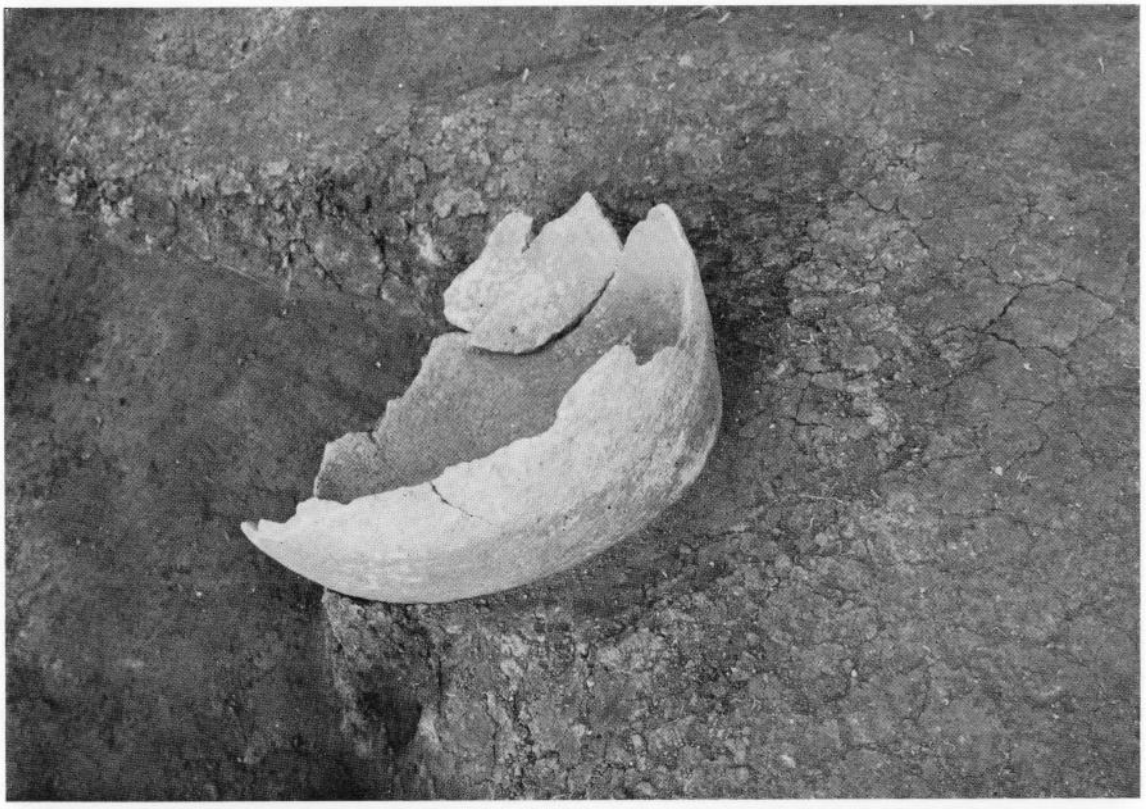
下　1号甕棺墓（東から）



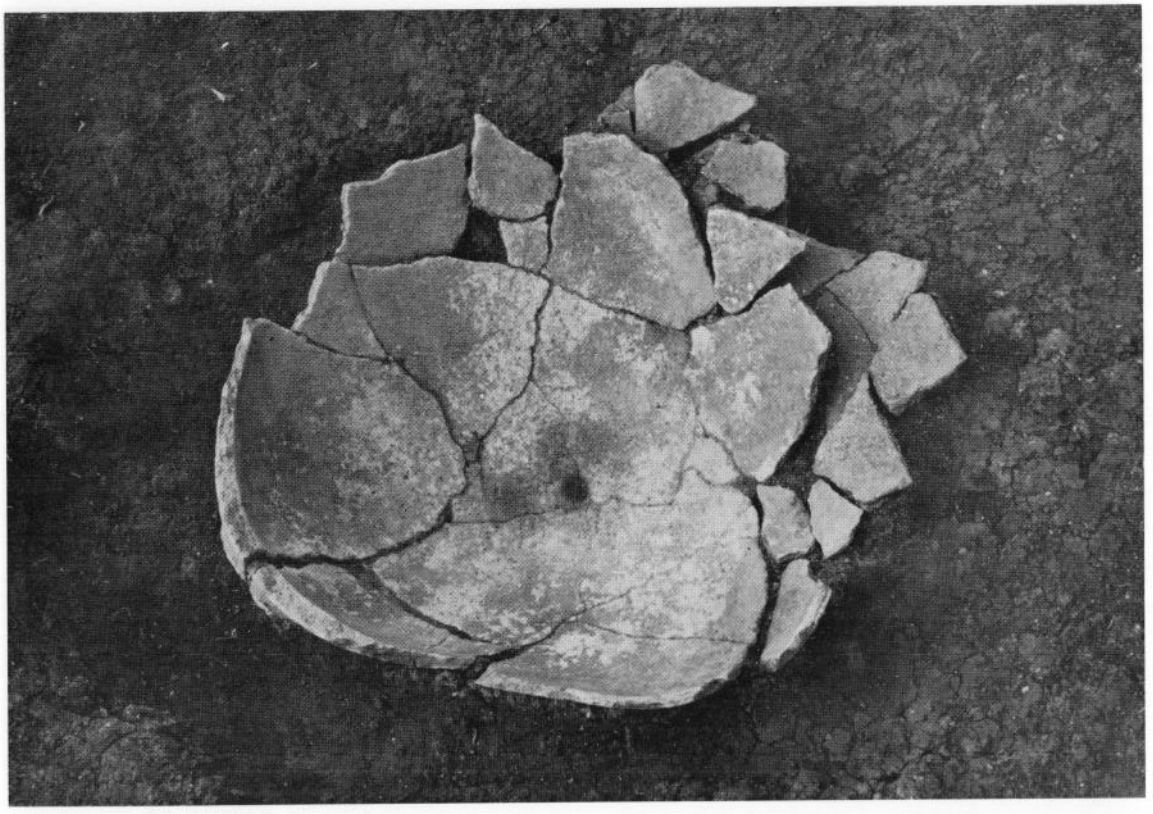
1　2 号甕棺墓



2　4 号甕棺墓



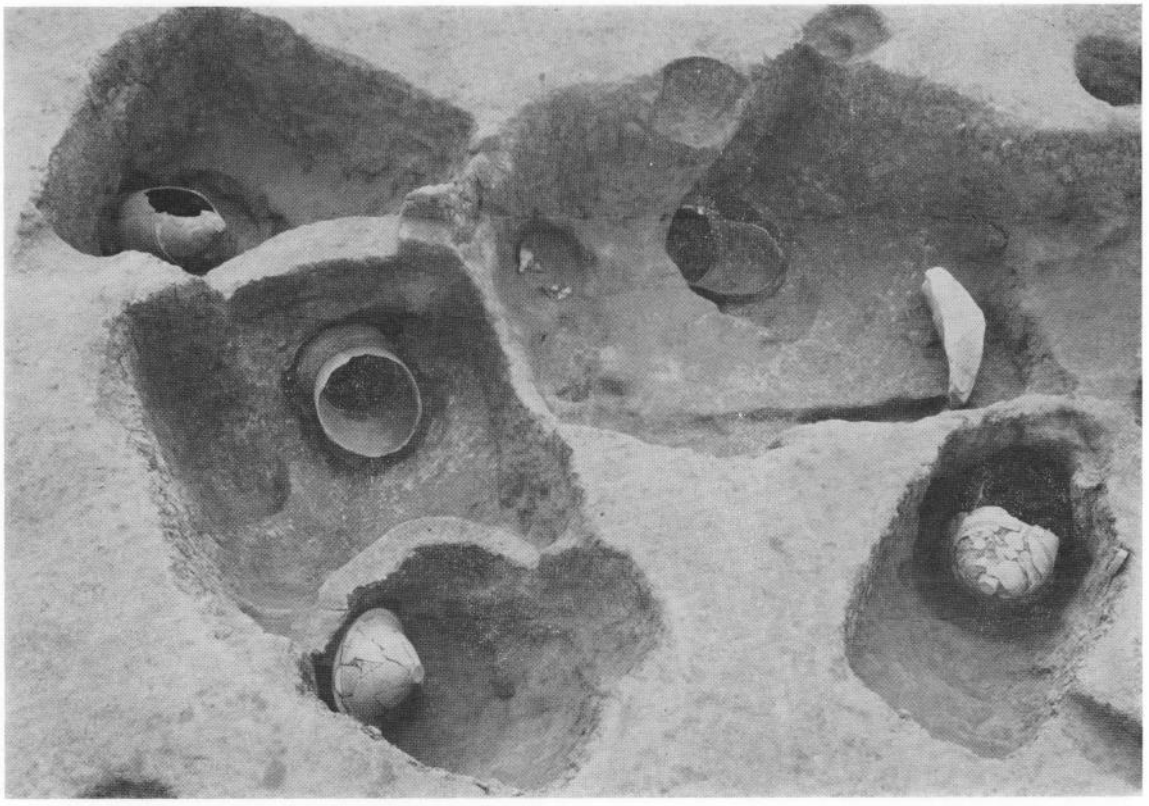
1　5 号甕棺墓



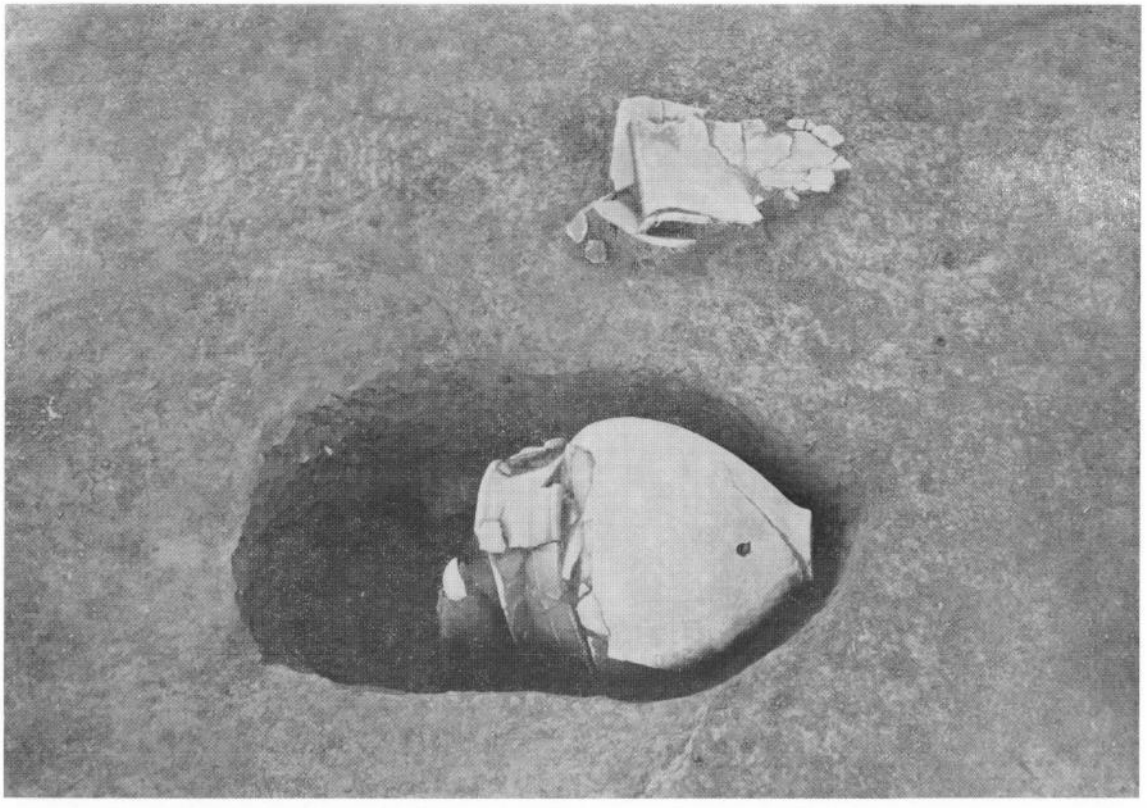
2　6 号甕棺墓

1　弥生時代A群墓地中央部の甕棺・土壙墓群全景

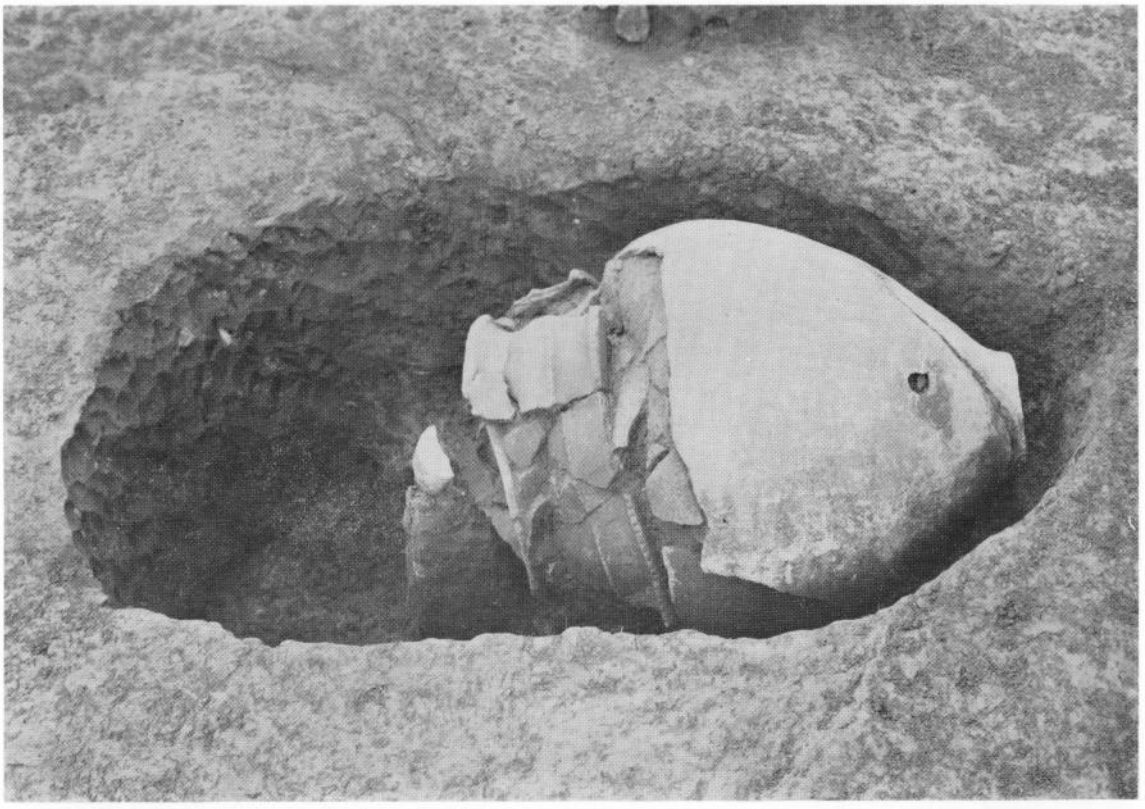
2　中央部の甕棺・石蓋土壙墓・土壙墓群近景



1　21〜24・27・28号甕棺墓群



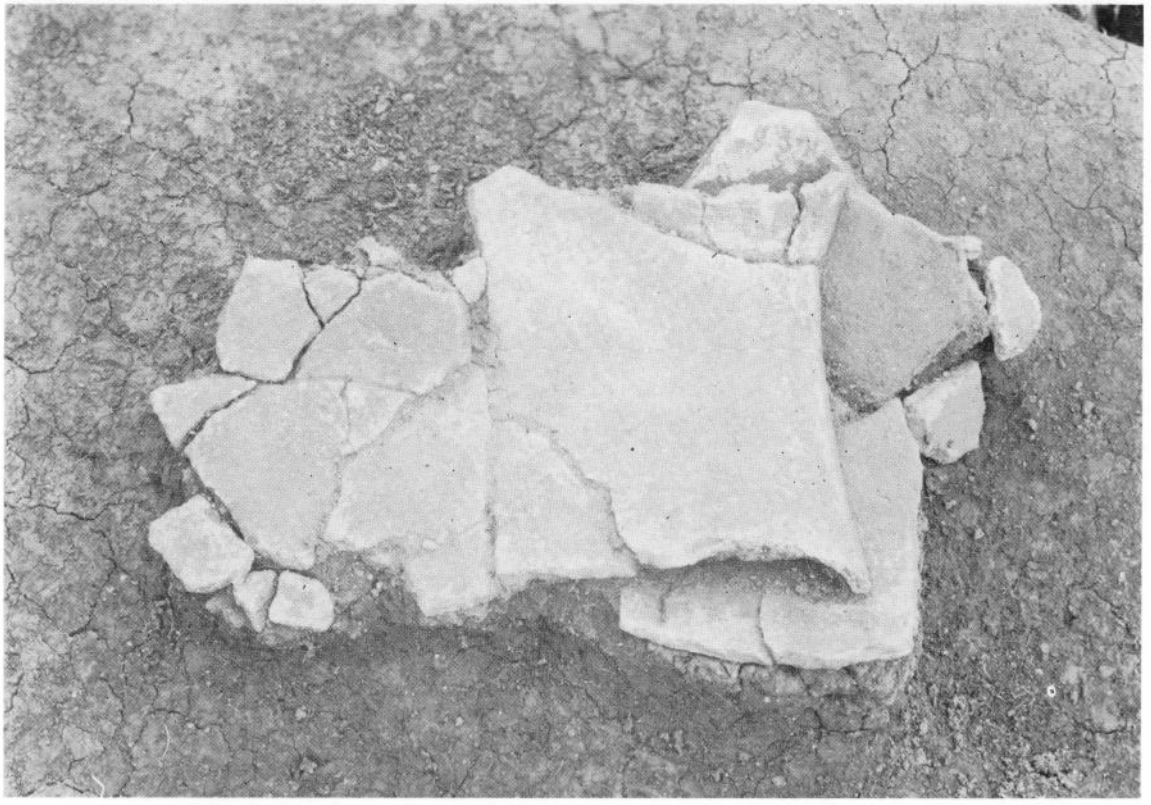
2　9・11号甕棺墓



1　9 号甕棺墓

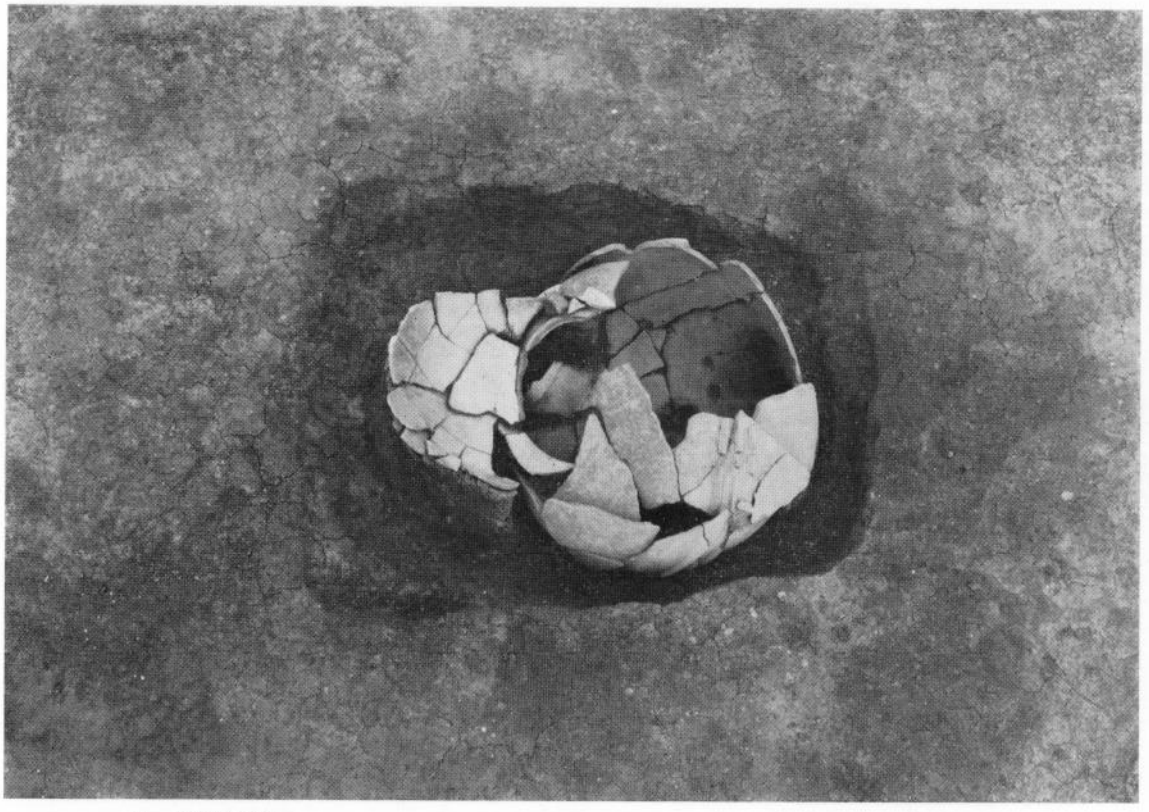
2　9 号甕棺墓覆口部近景

1　10号甕棺墓

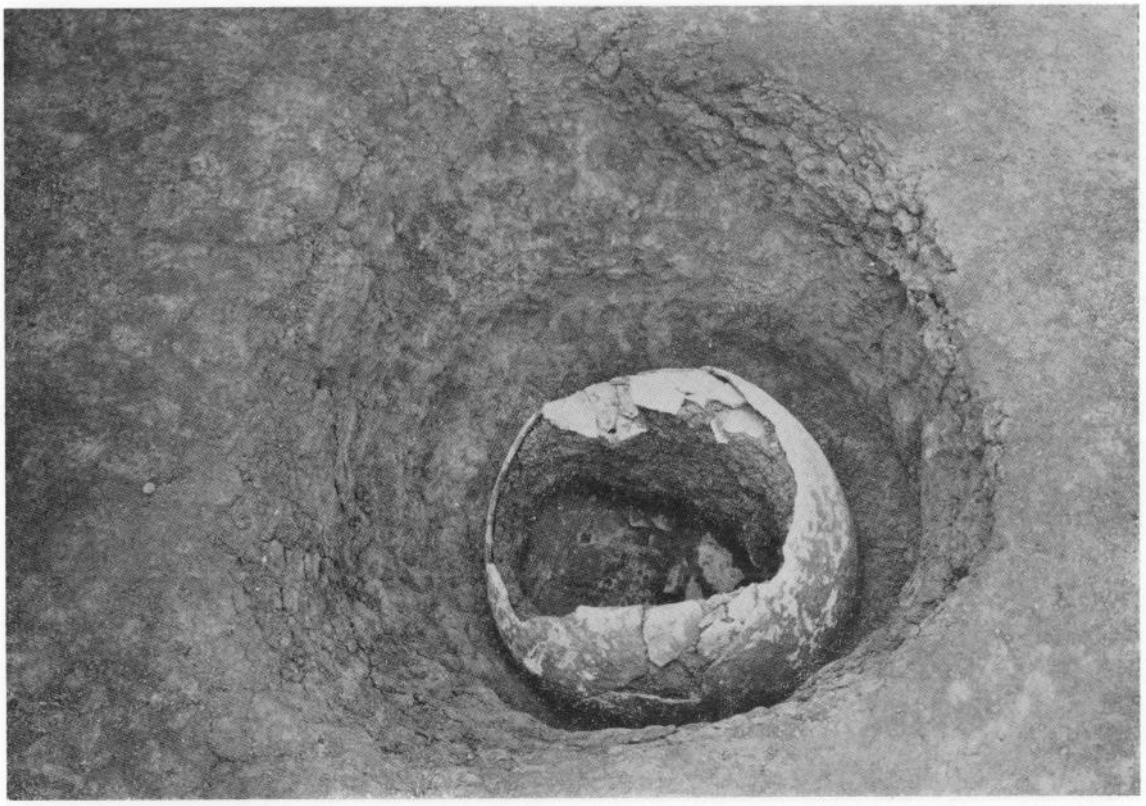


2　11号甕棺墓

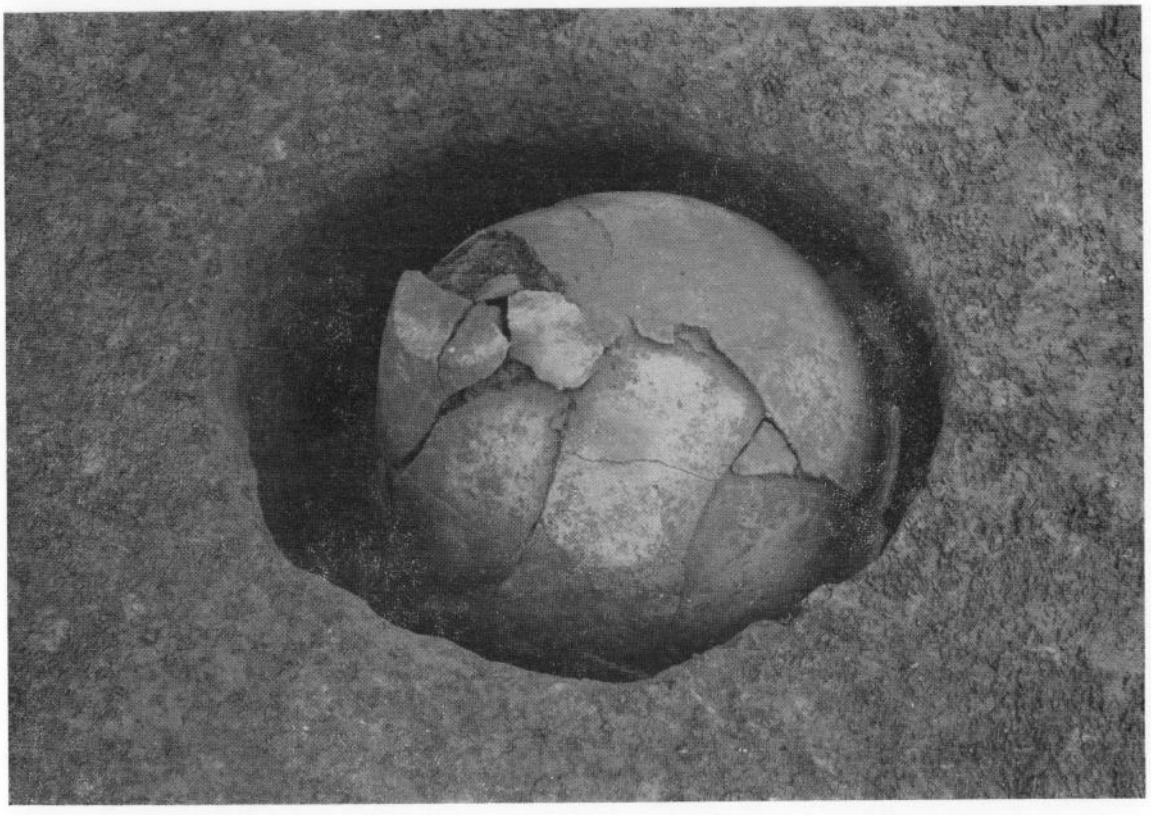
1　12号甕棺墓



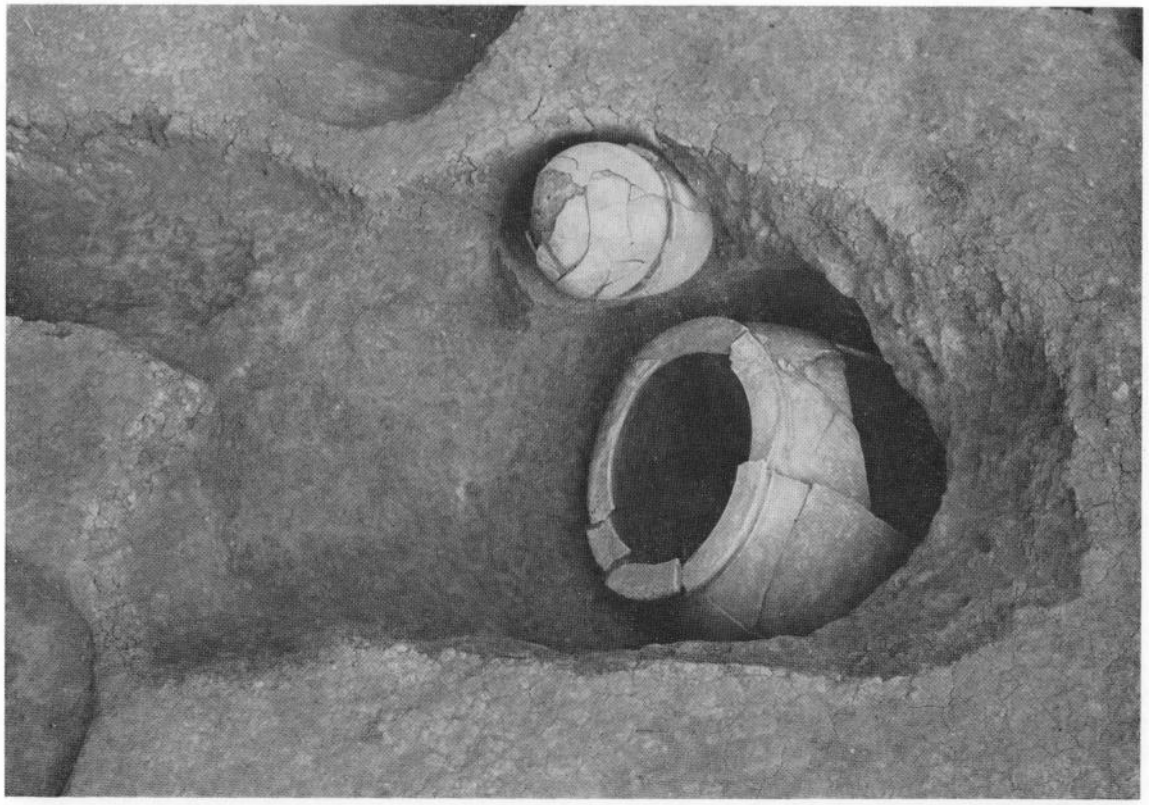
2　13号甕棺墓



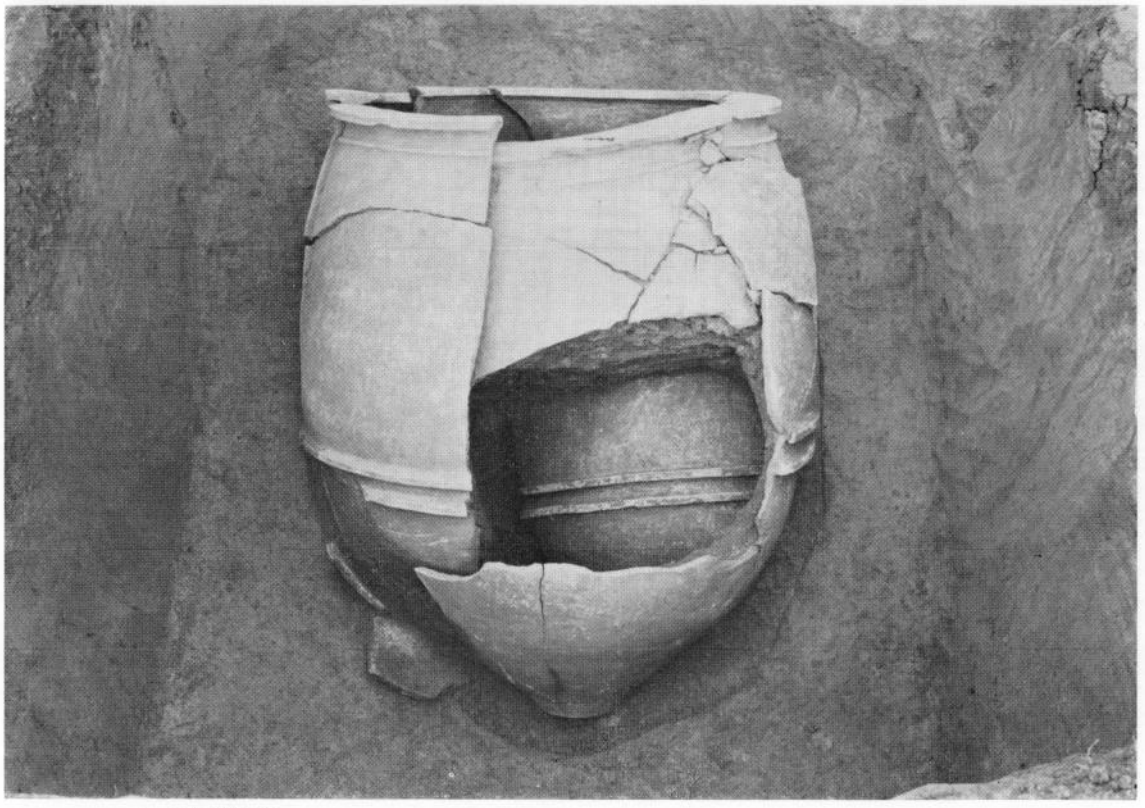
1　14号甕棺墓



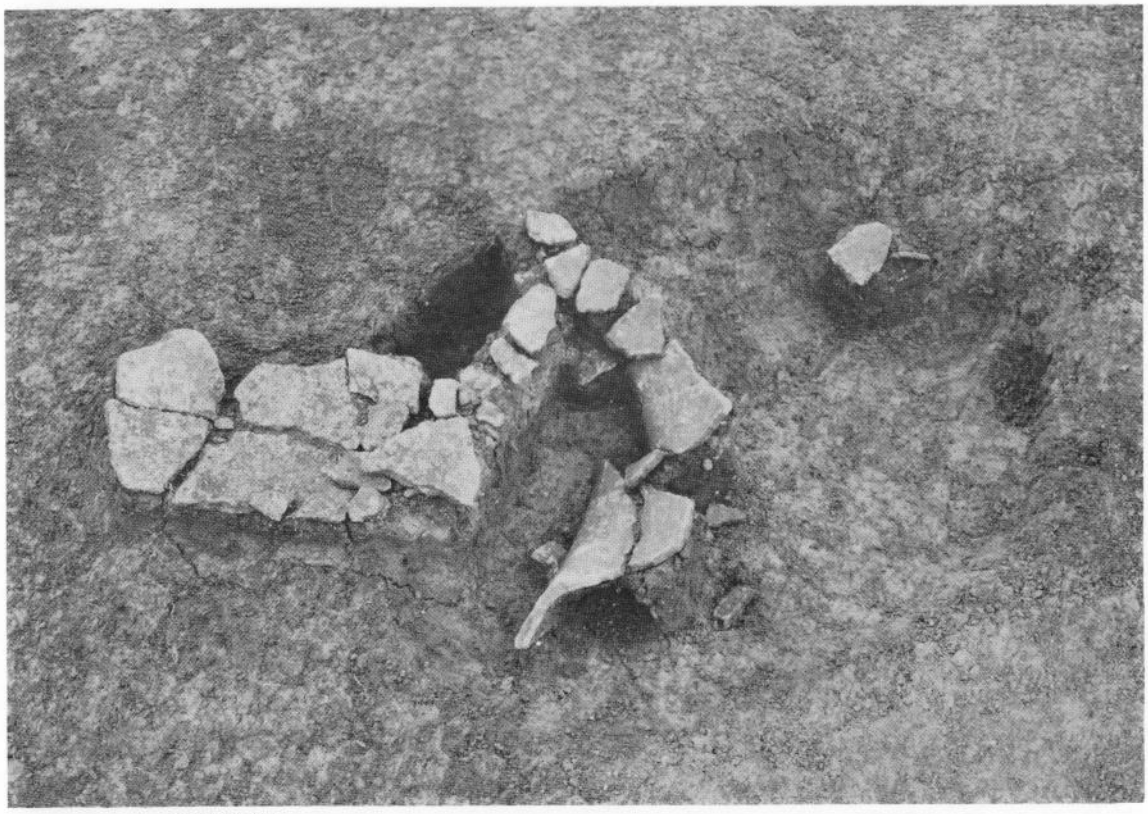
2　16号甕棺墓



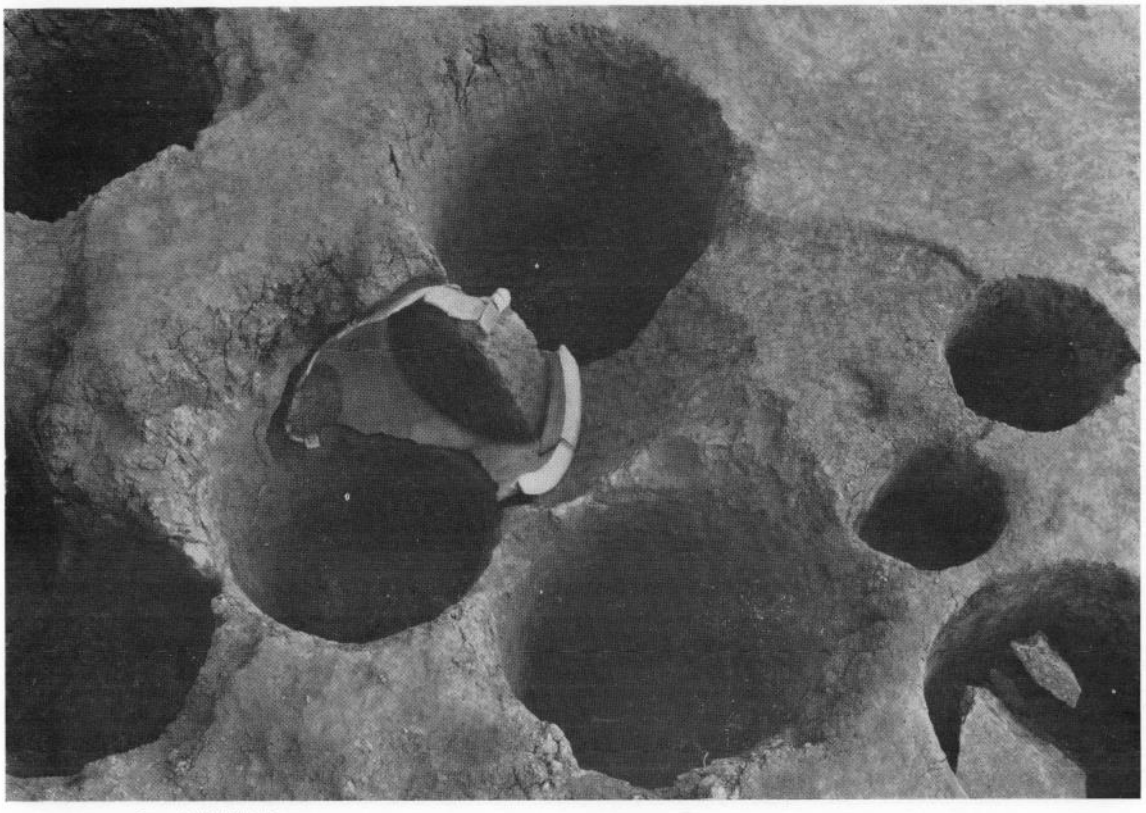
1　16・17号甕棺墓



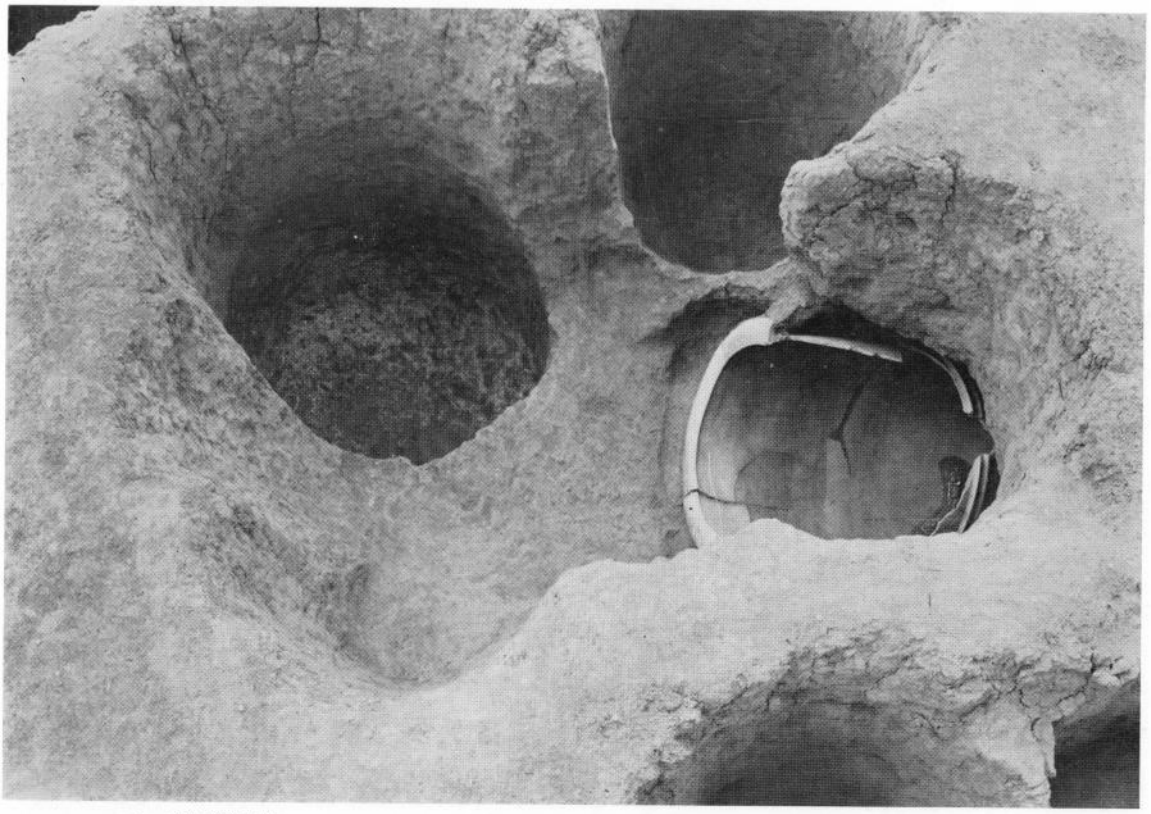
2　17号甕棺墓



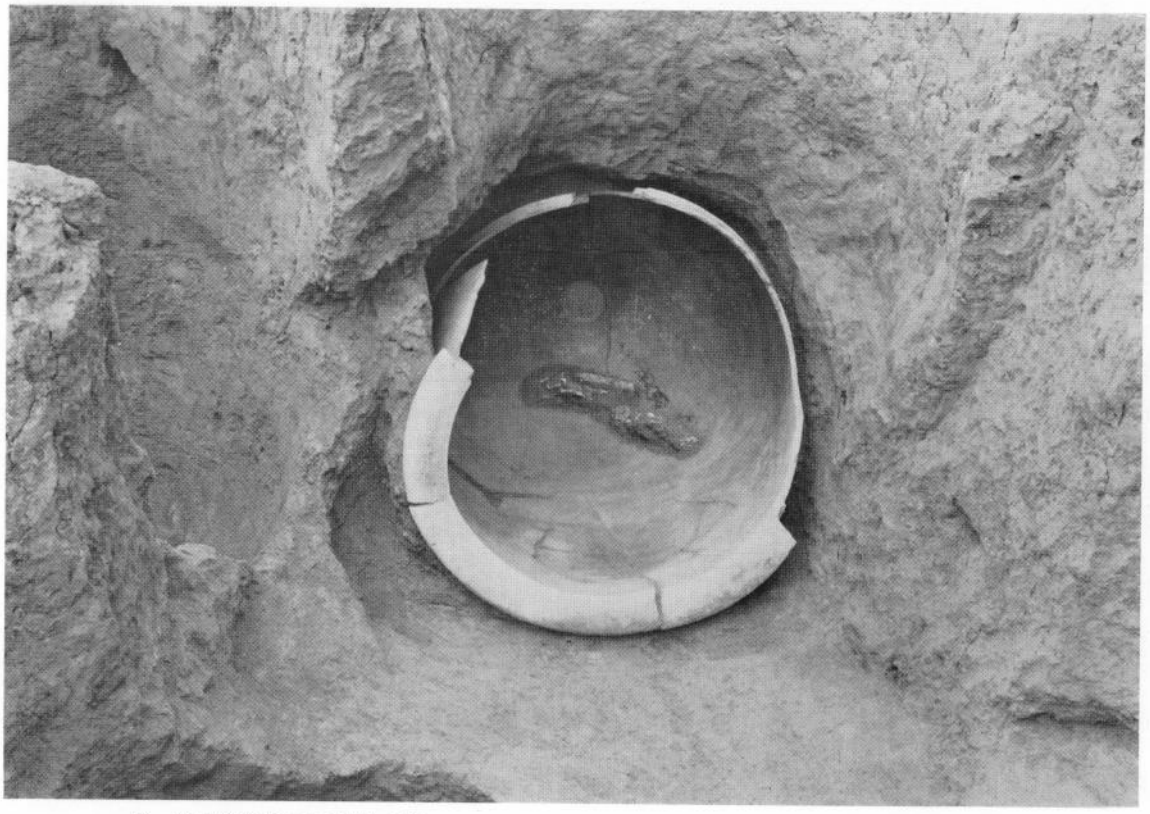
1　18号甕棺墓



2　19号甕棺墓

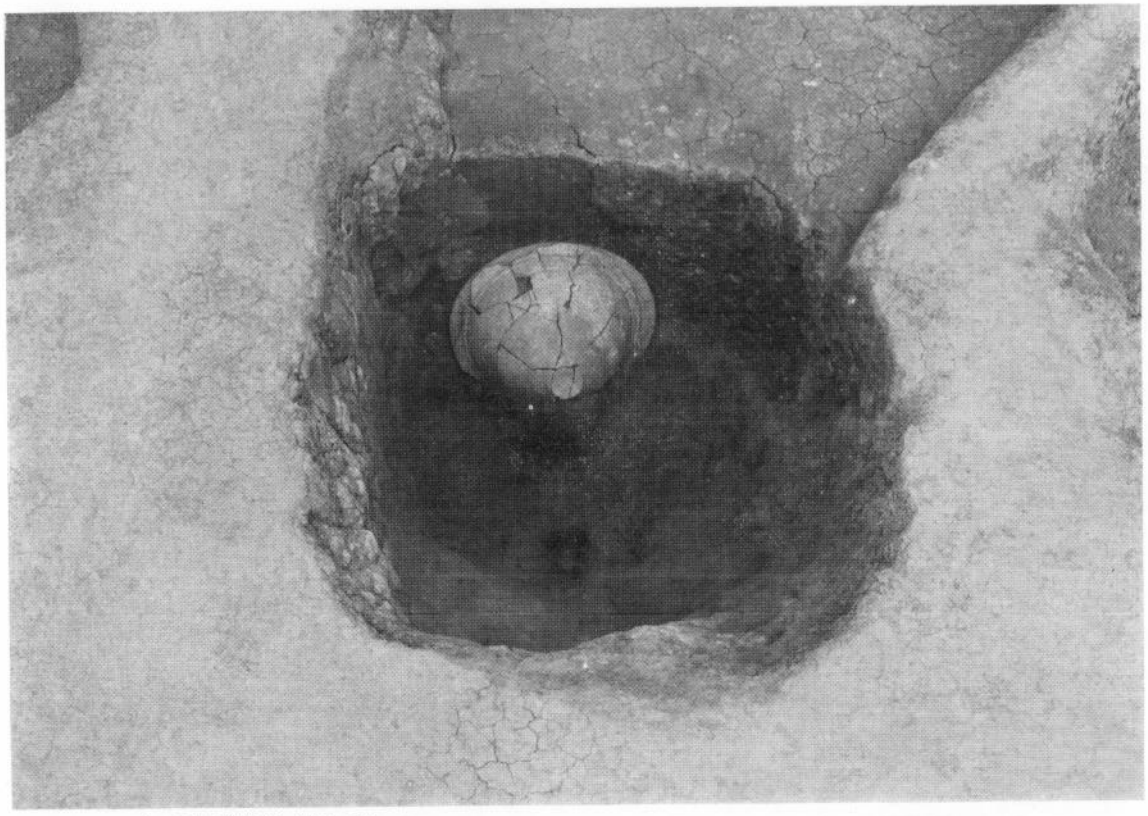


1　20号甕棺墓

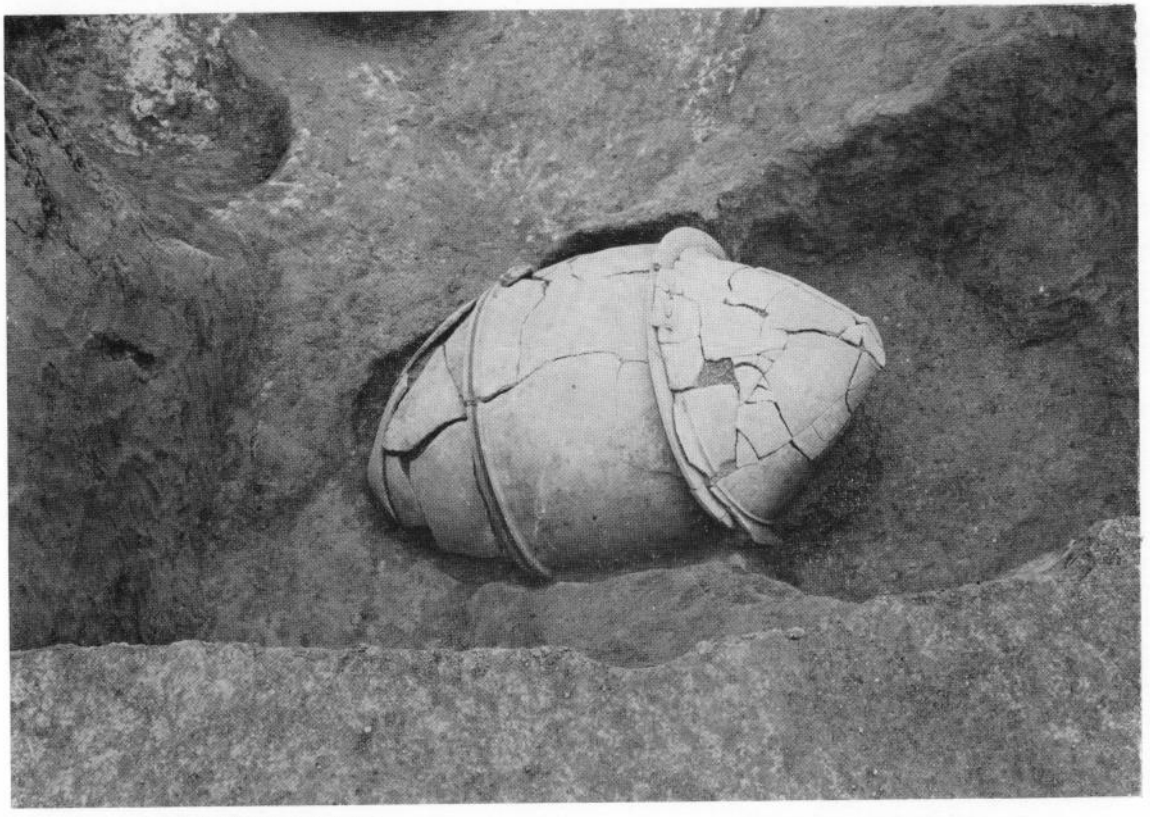


2　20号甕棺墓内人骨出土状態

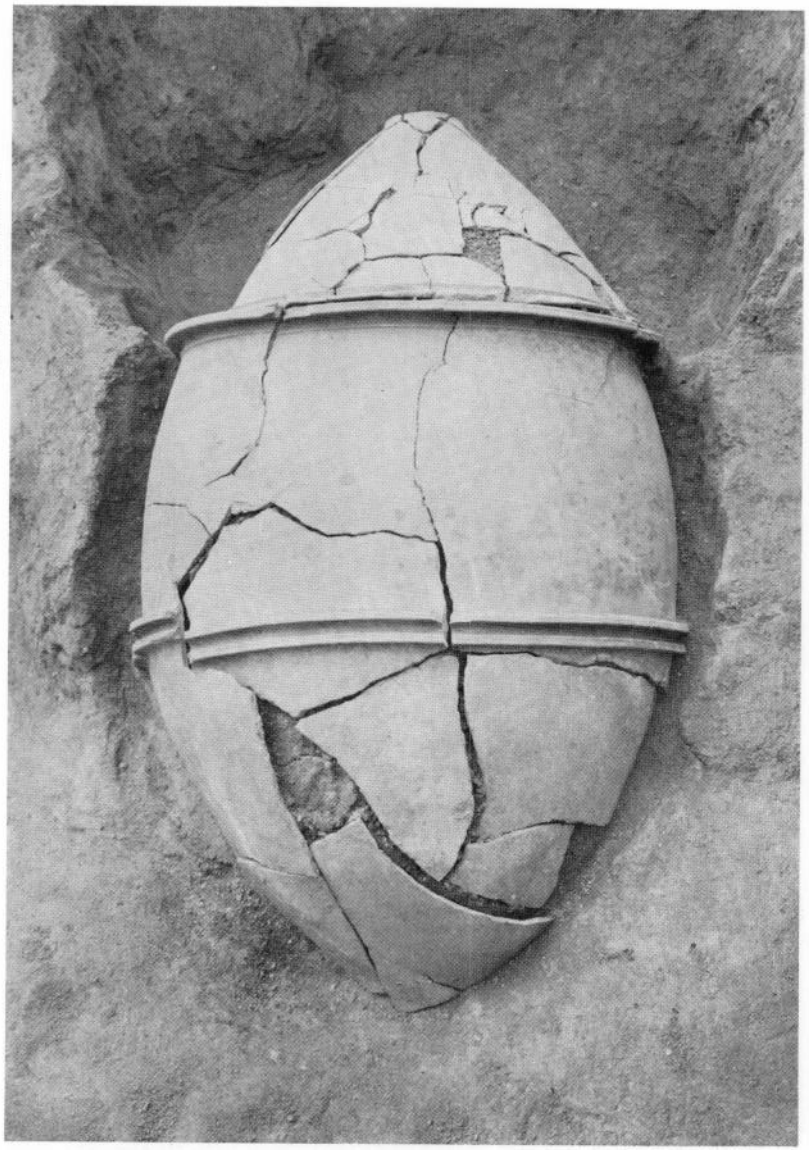
図版　16



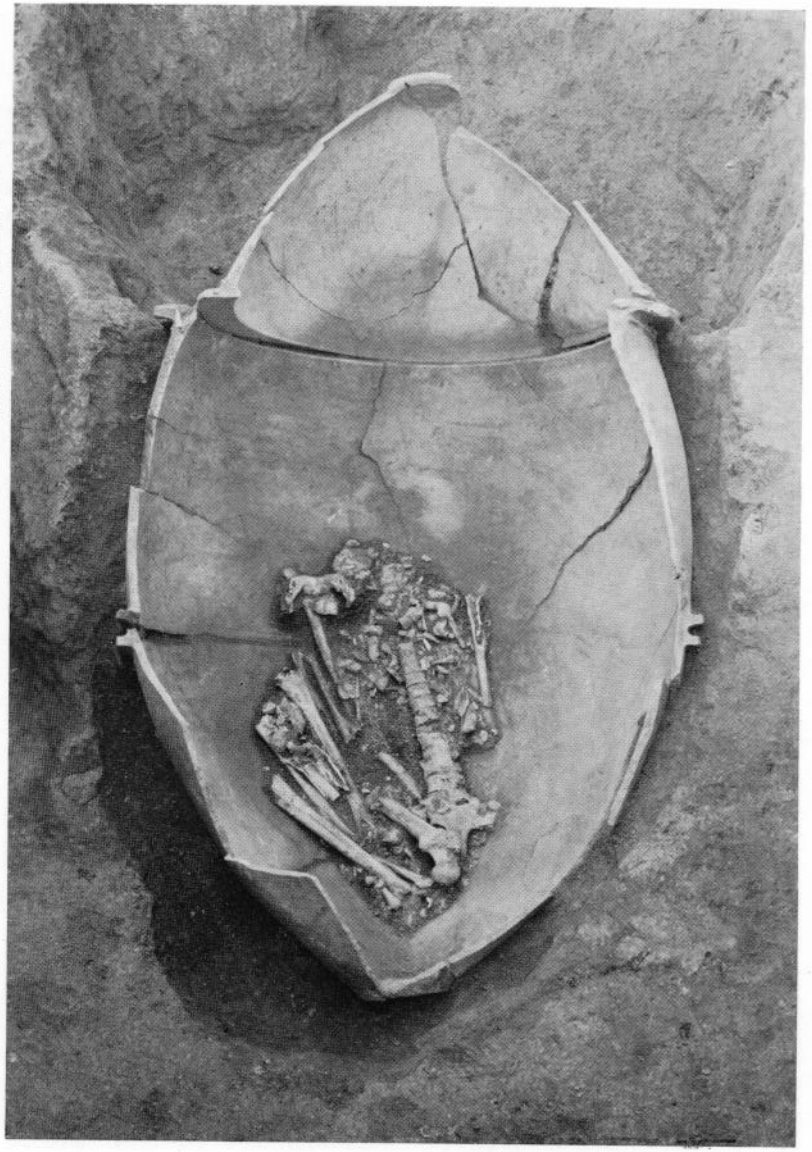
1　21号甕棺墓（西から）



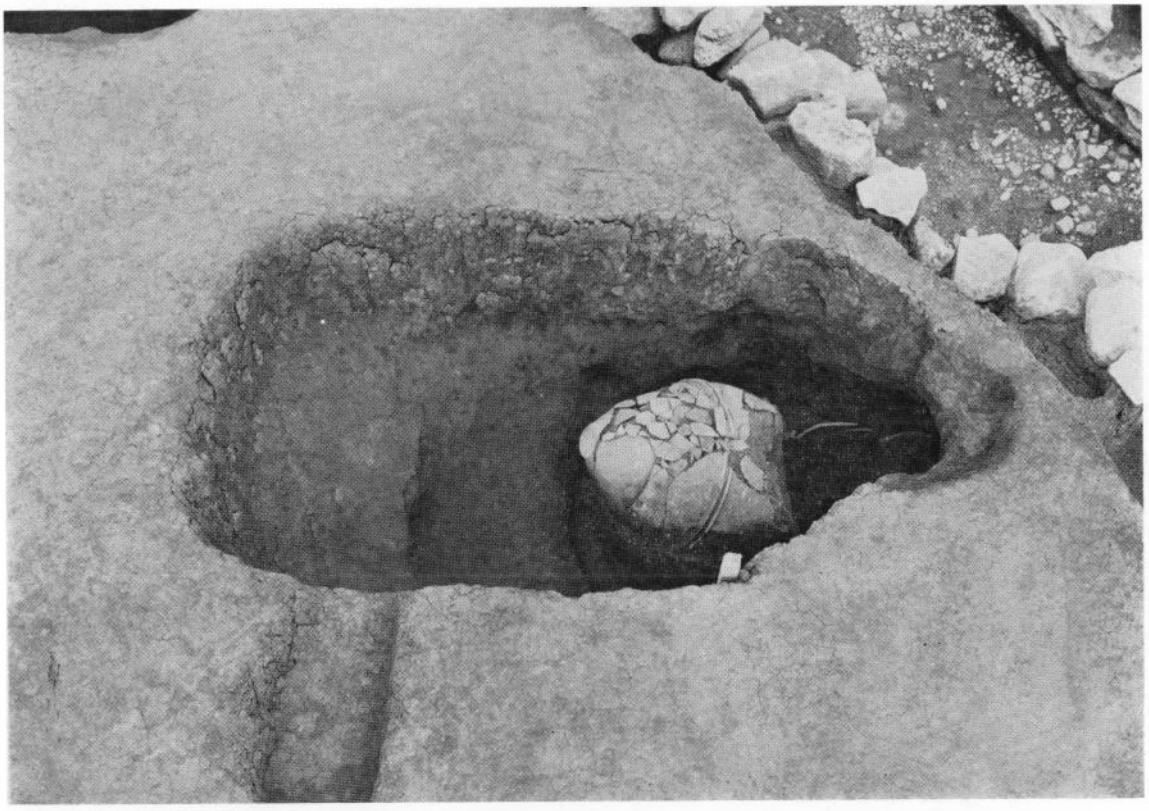
2　21号甕棺墓（北から）



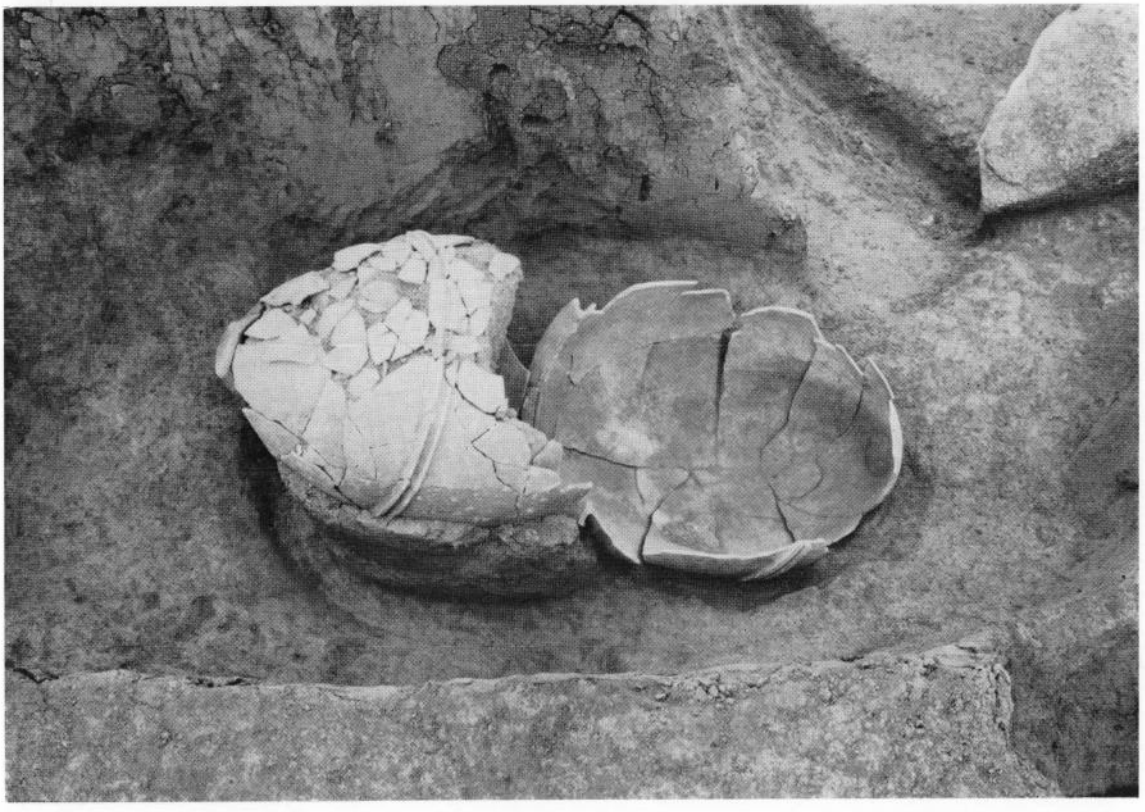
1　21号甕棺墓（東から）



2　21号甕棺墓内人骨出土状態



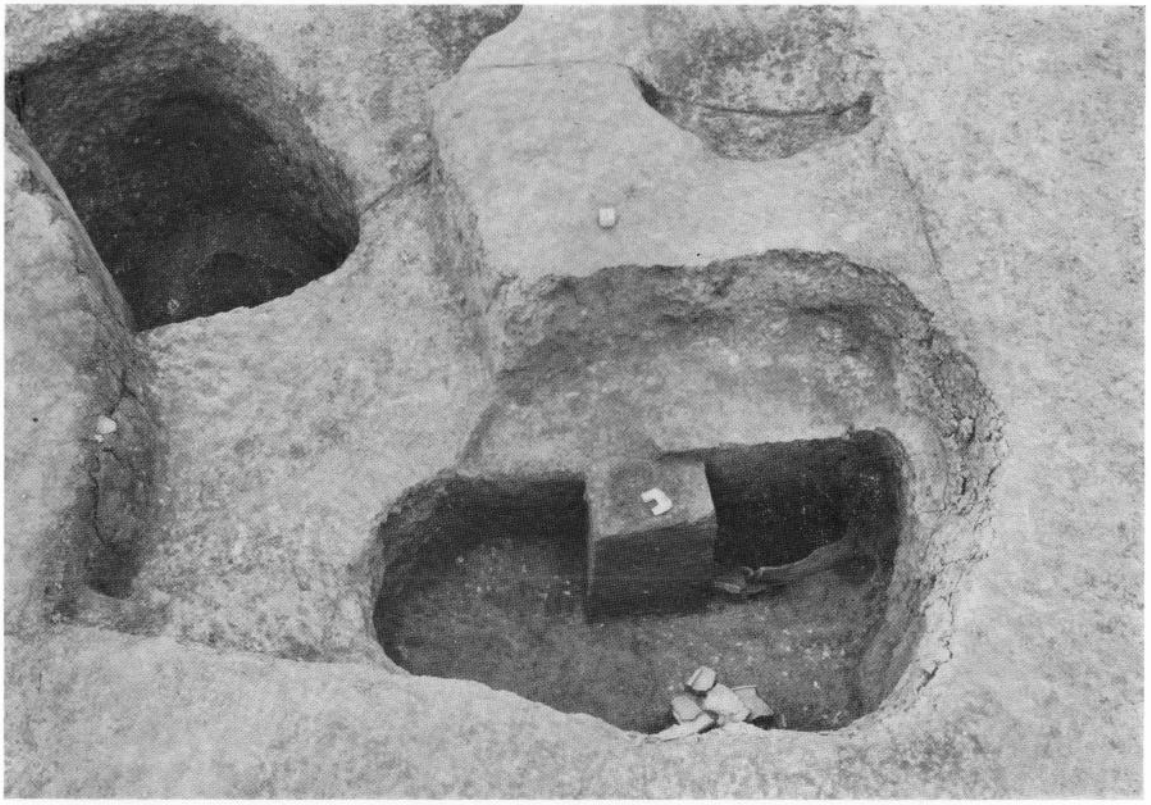
1　22号甕棺墓



2　22号甕棺墓

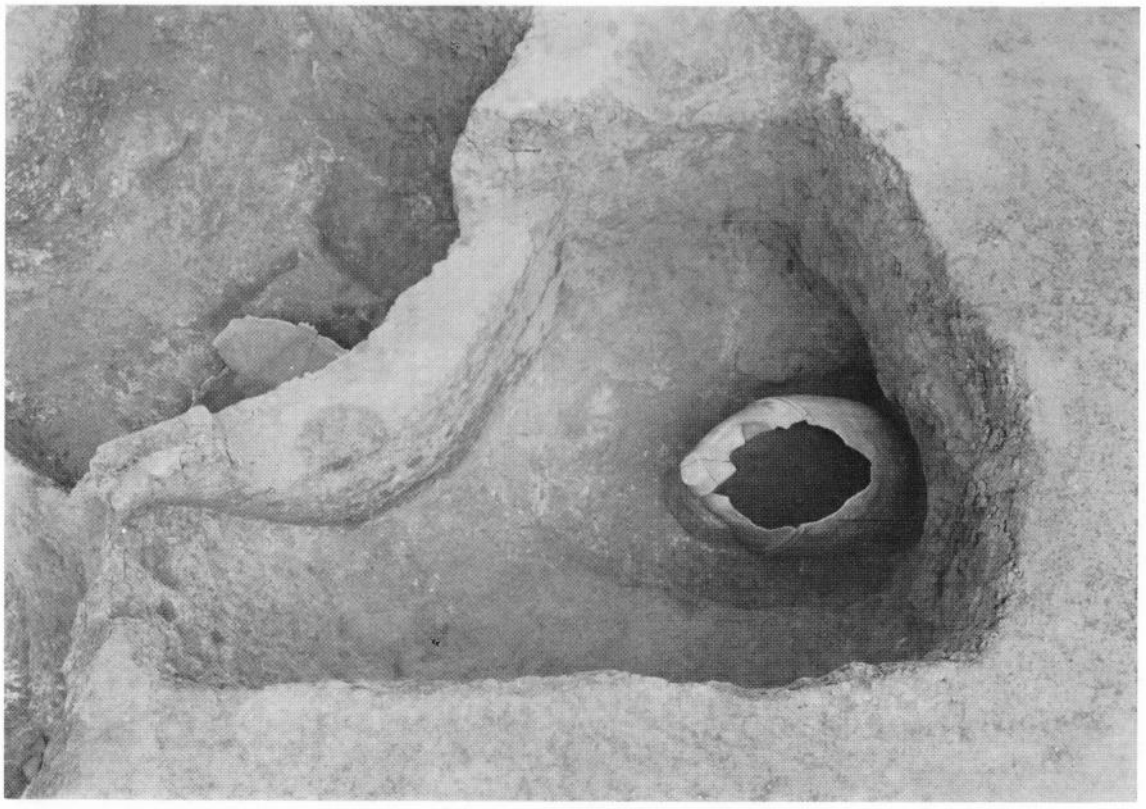
1　21・23・24・27・28号甕棺墓全景

2　21・23・24・27号甕棺墓露出状態

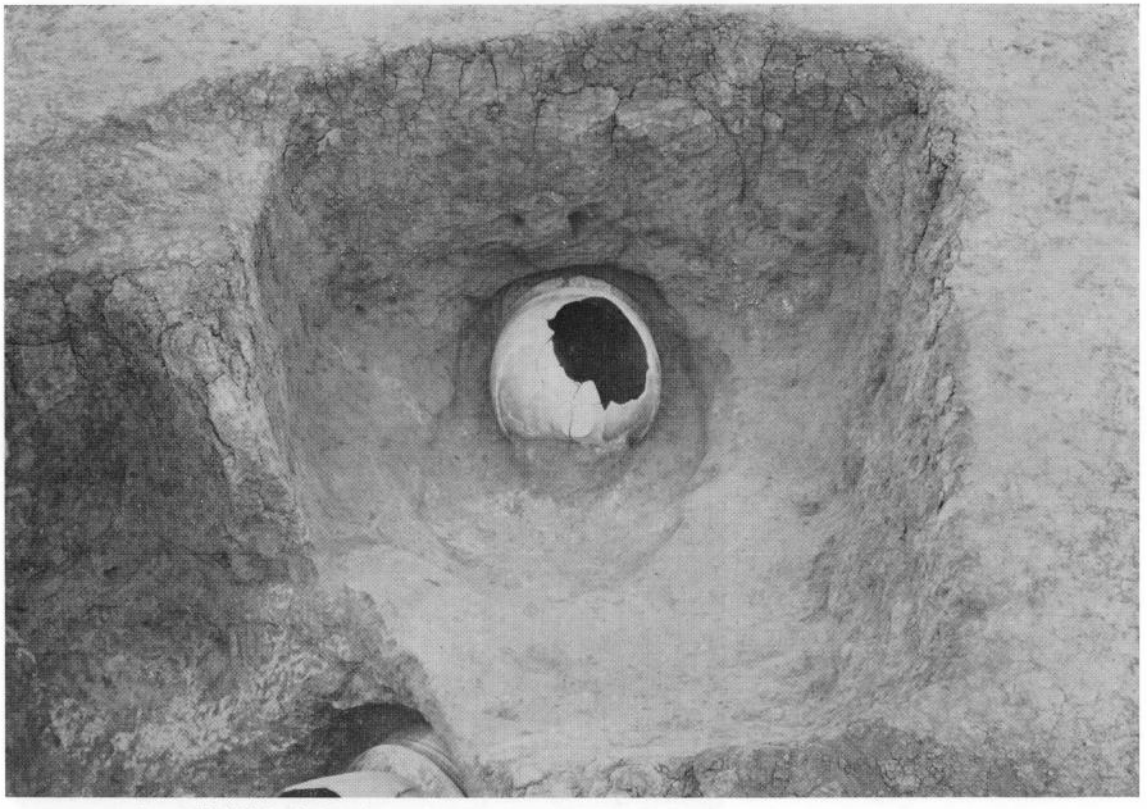


1　23号甕棺墓盗掘坑と出土青銅製鋤先

2　青銅製鋤先出土状態



1　23号甕棺墓（南から）



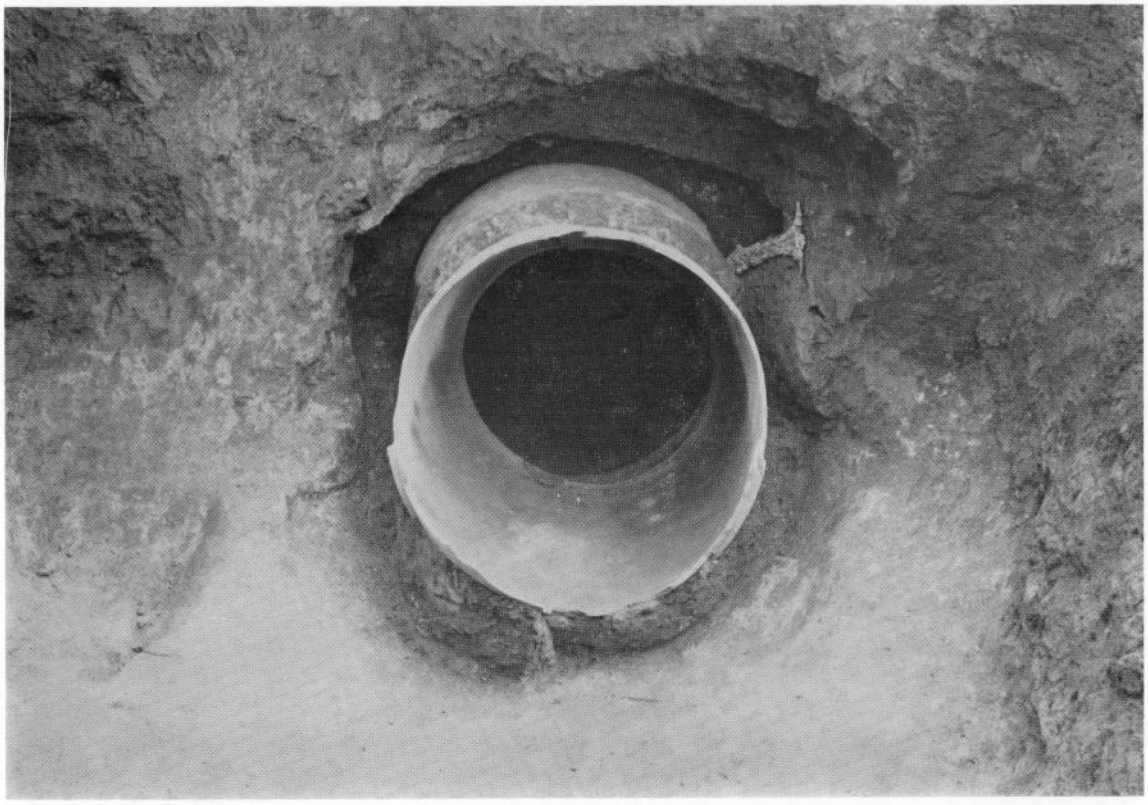
2　23号甕棺墓（西から）

上　23号甕棺墓と横穴の状態

下　23号甕棺墓全景

1　24号甕棺墓

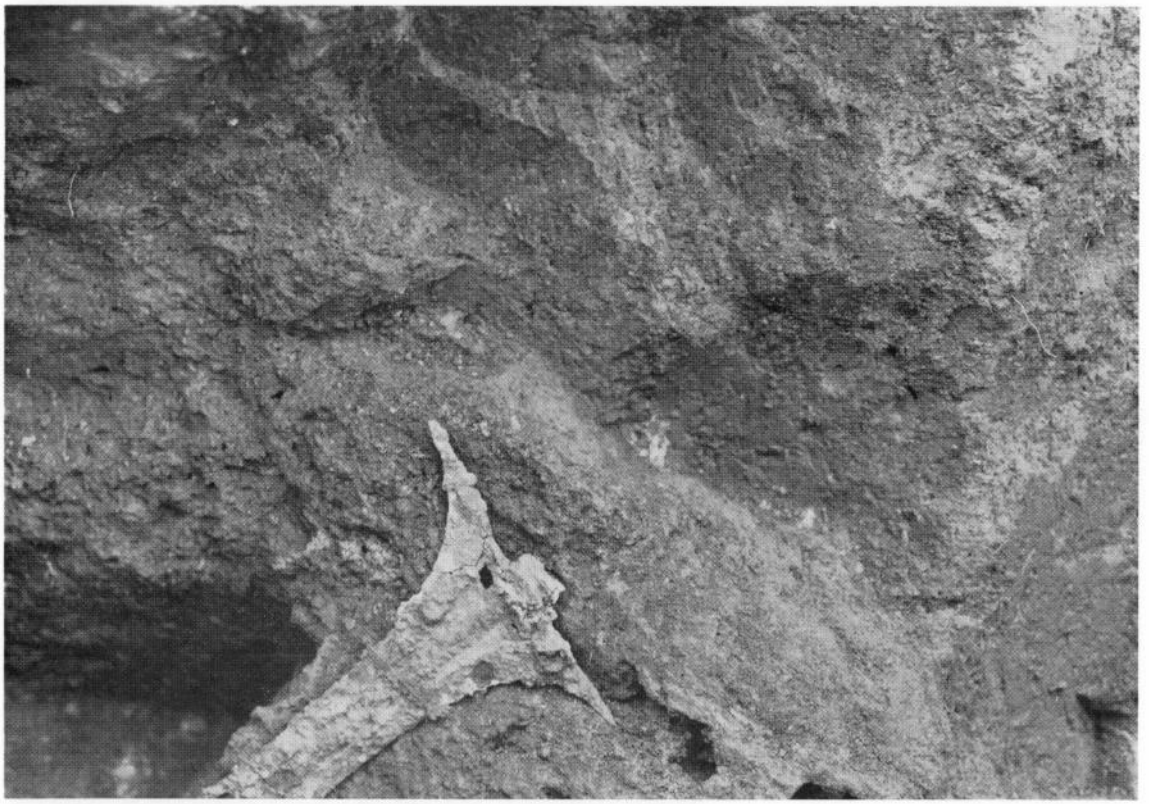
2　24号甕棺墓と鉄戈の出土状態



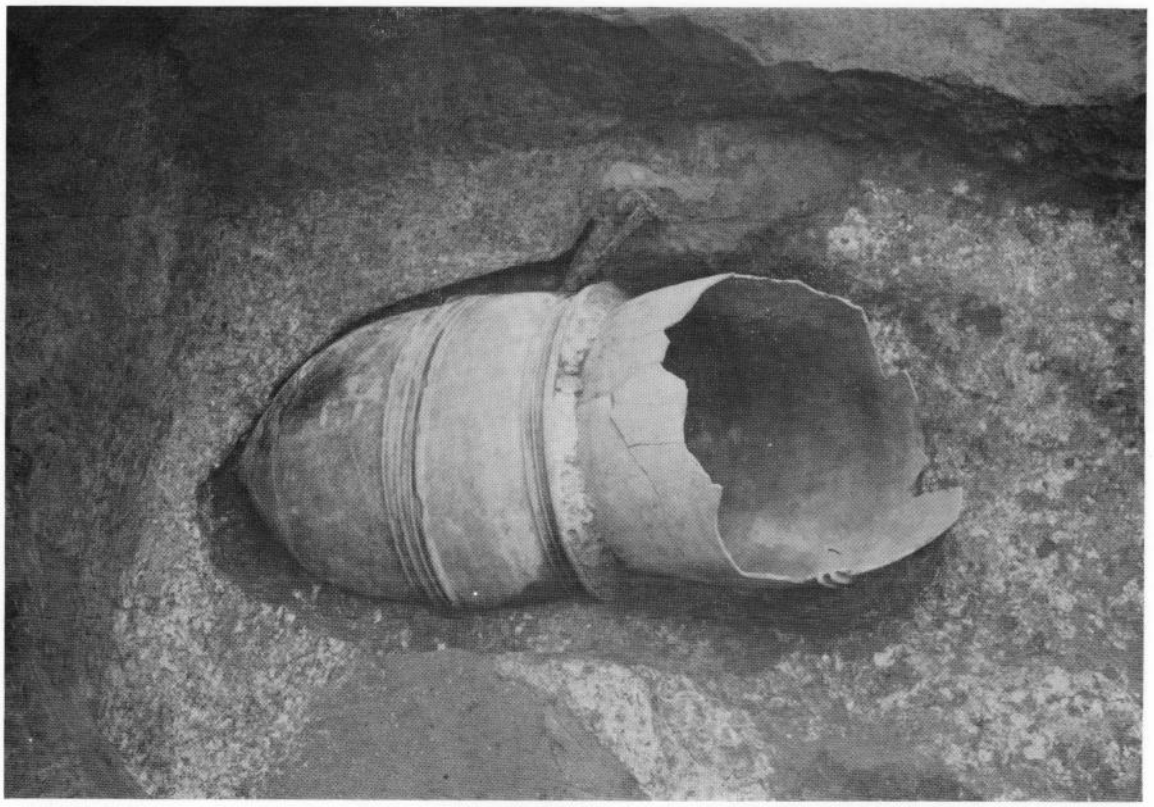
1　24号甕棺墓（西から）

2　24号甕棺墓と横穴の状態

1　鉄戈と柄の痕跡

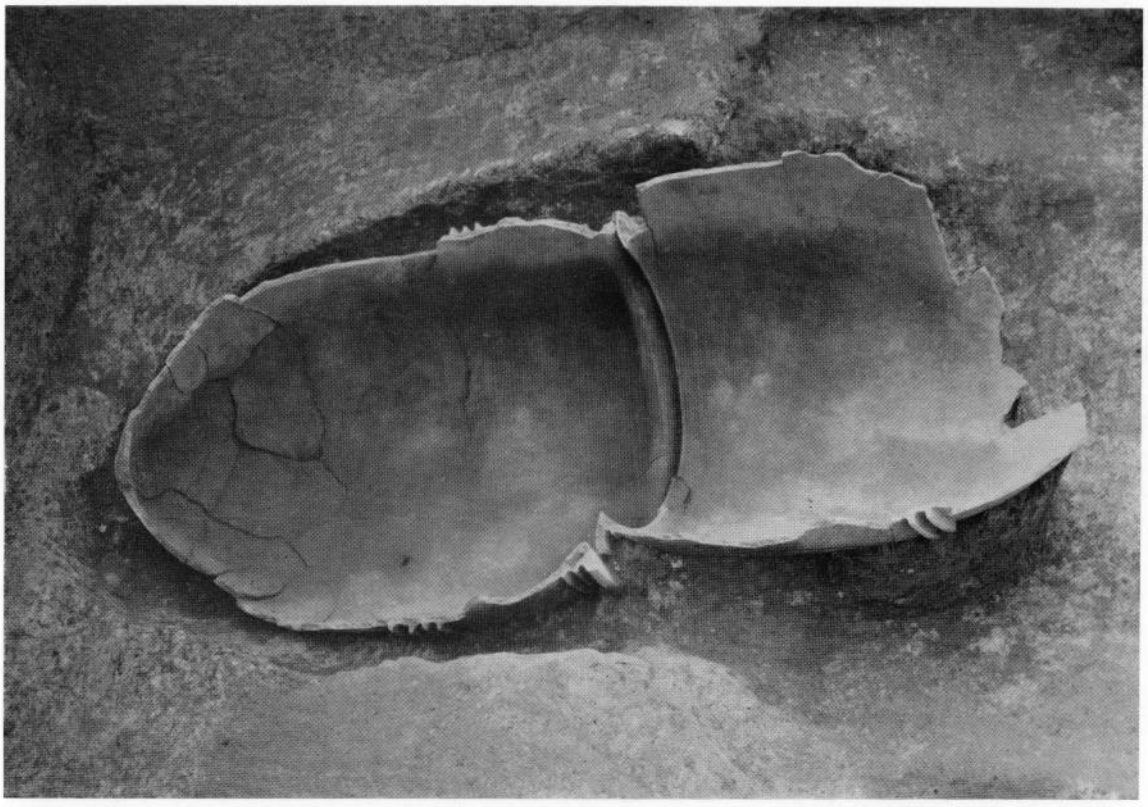


2　墓壙掘削時の鋤状工具の痕跡



上　24号甕棺墓全景（北から）

下　24号甕棺墓全景（東から）



1　24号甕棺墓内面

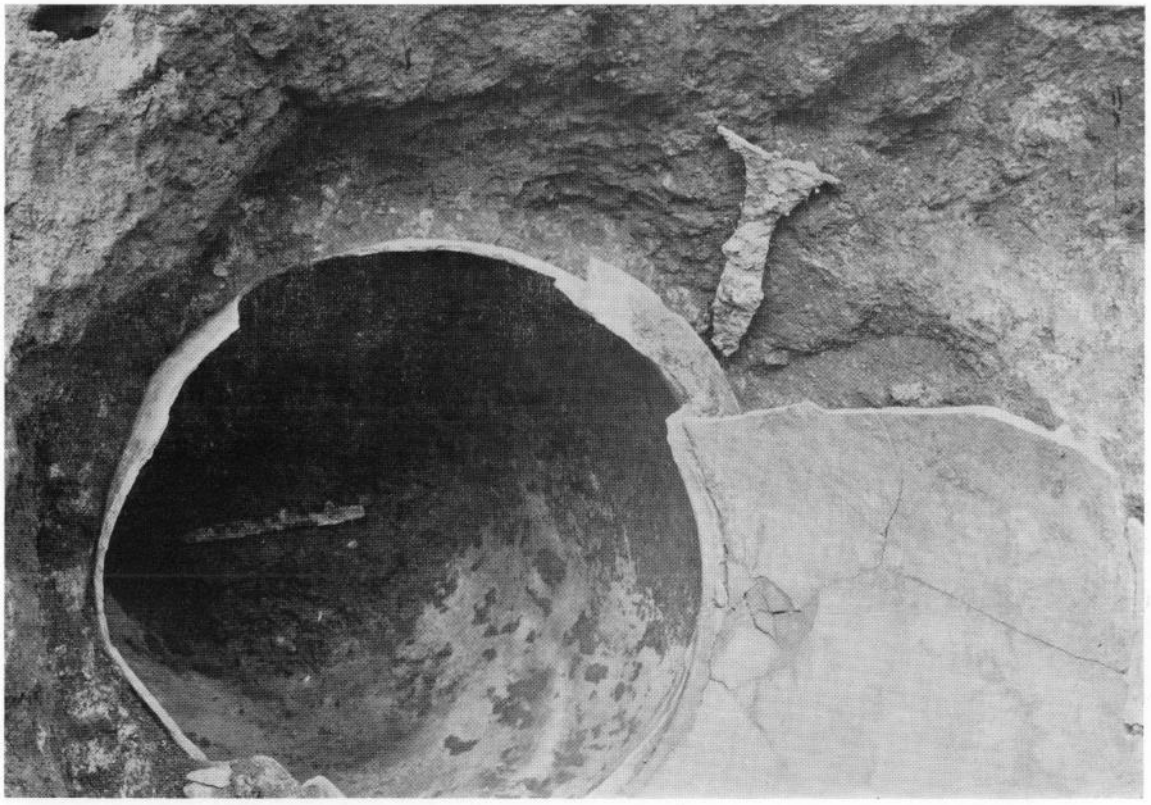
2　銅鏡副葬の痕跡（２面が一部かさなった状態）

1　25号甕棺墓

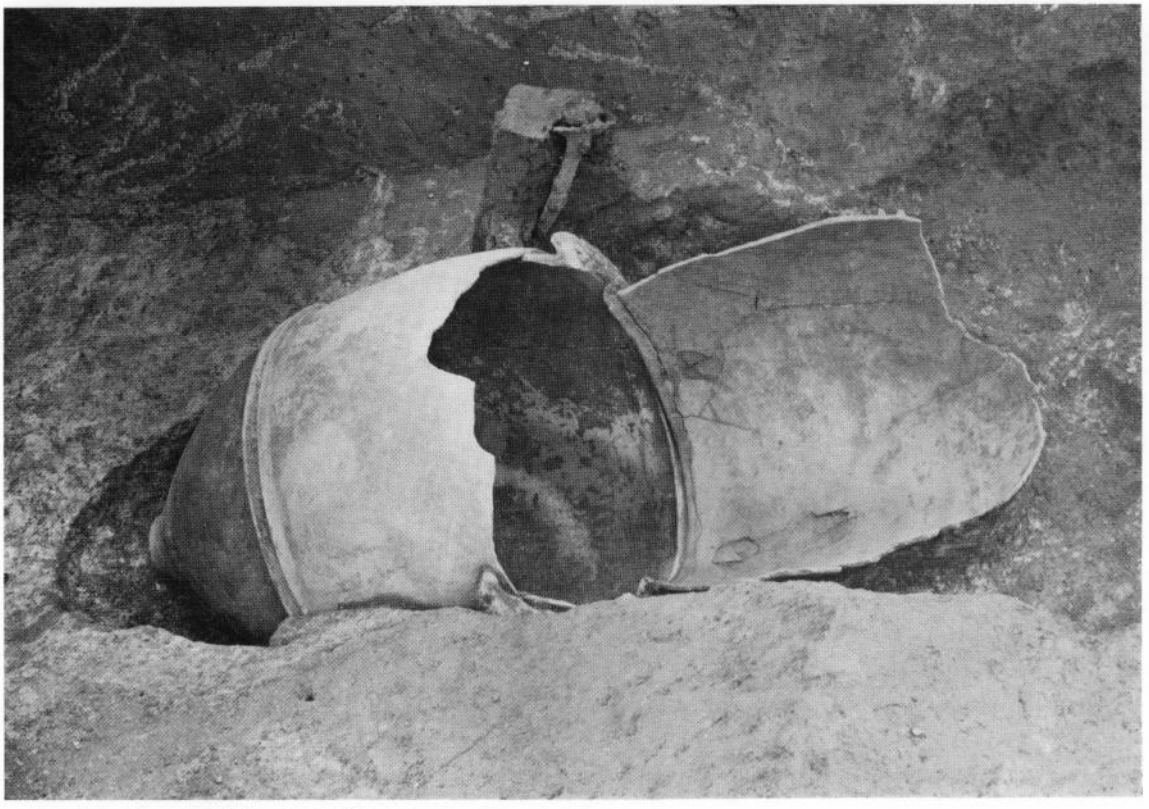
2　26号甕棺墓

1　27号甕棺墓（南から）

2　27号甕棺墓（西から）



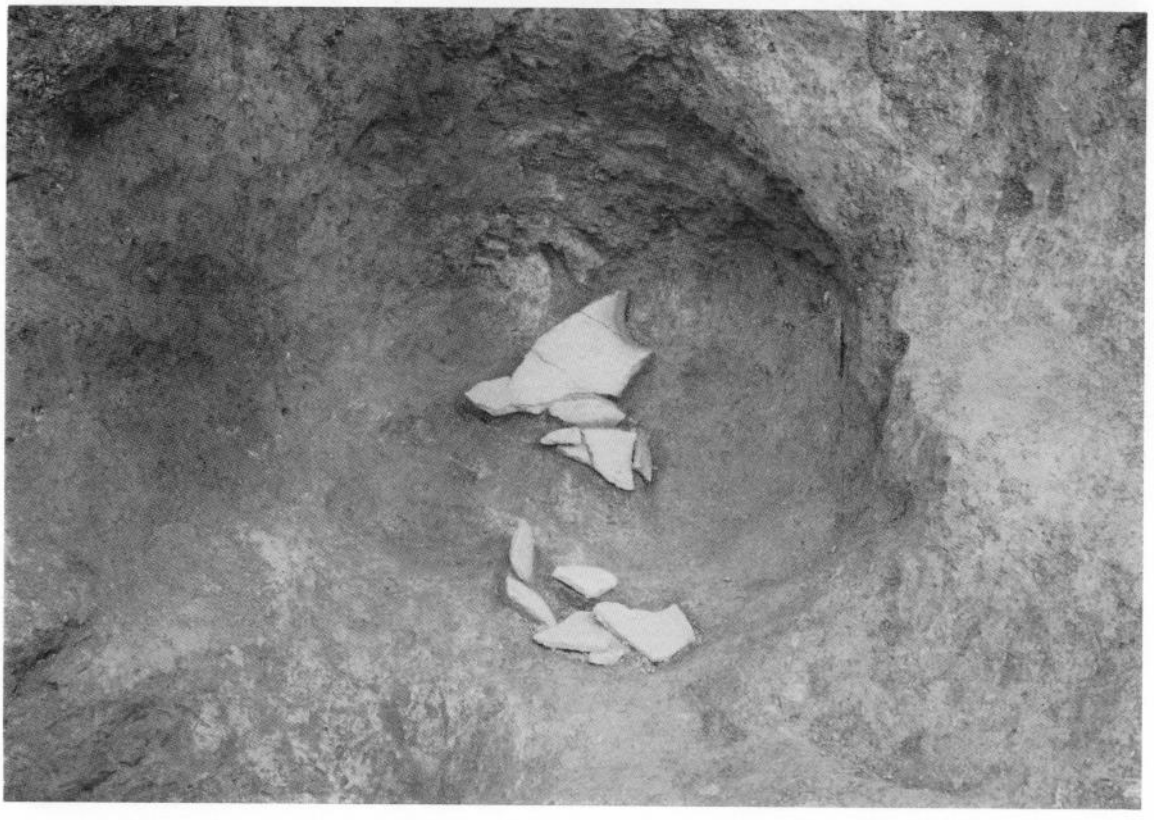
1　鉄剣・鉄戈出土状態



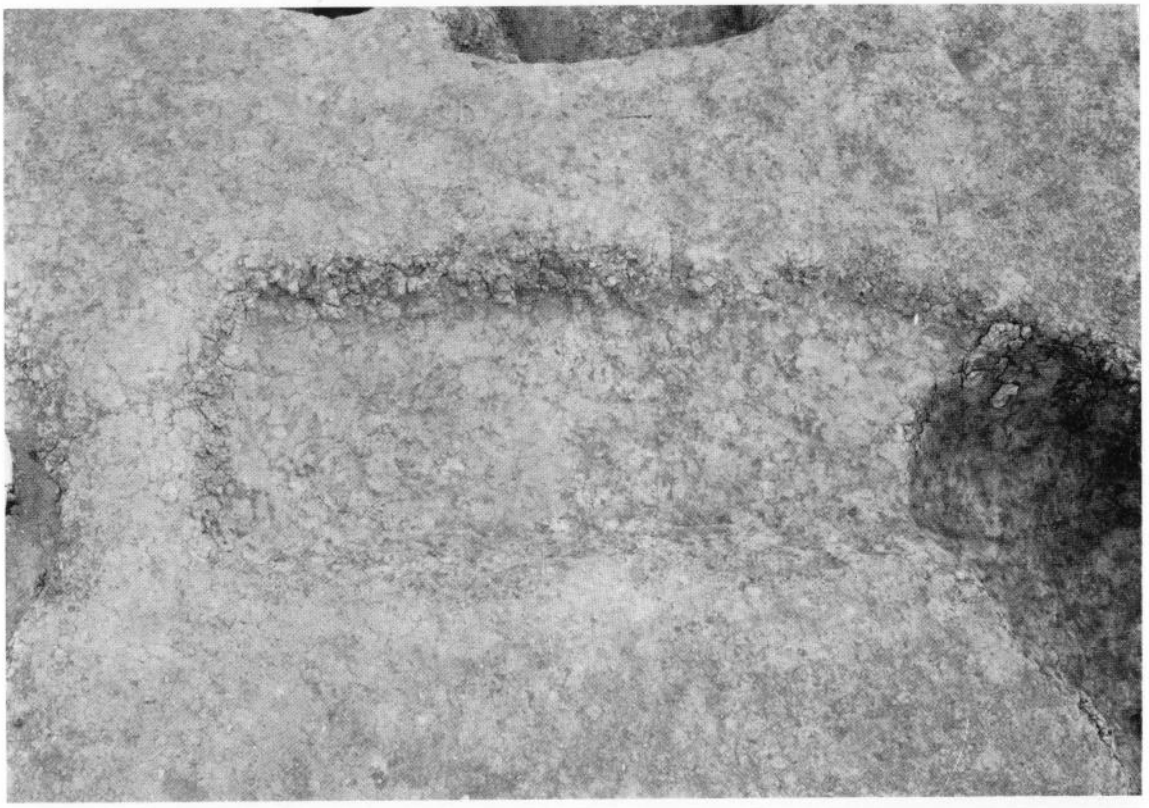
2　27号甕棺墓全景（北から）

上　27号甕棺墓全景（東から）

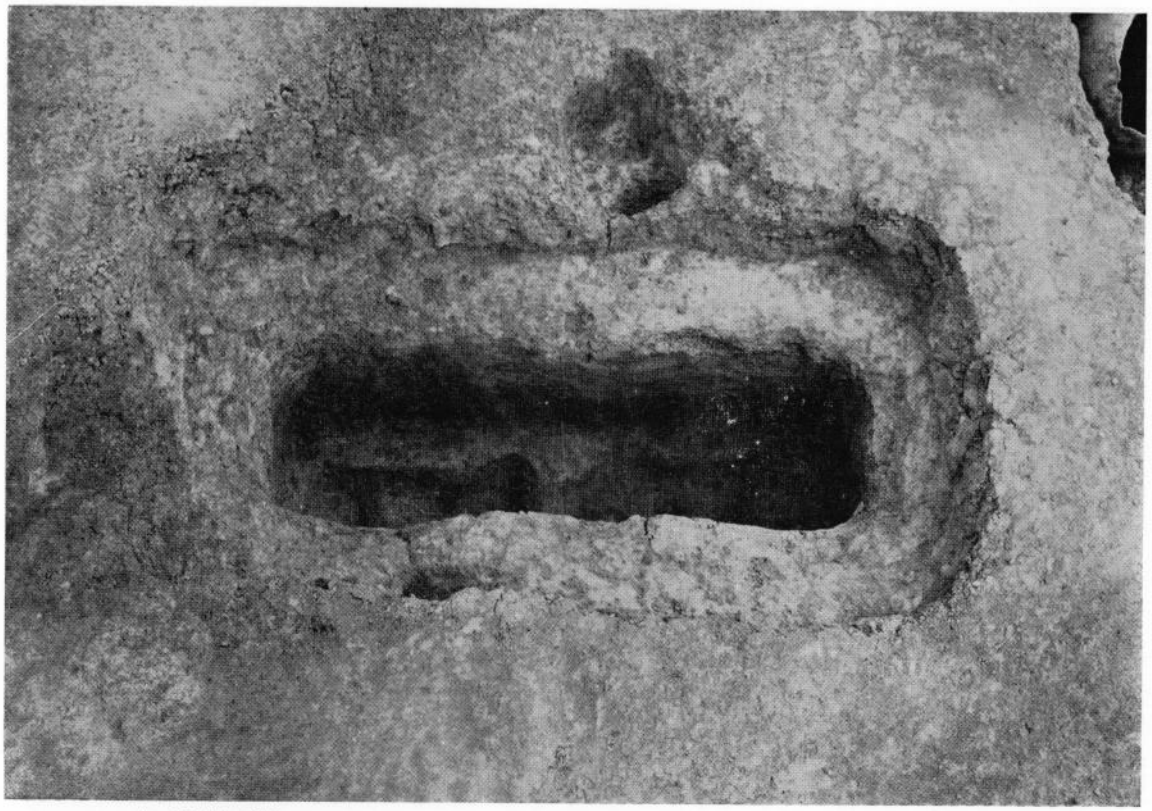
下　28号甕棺墓



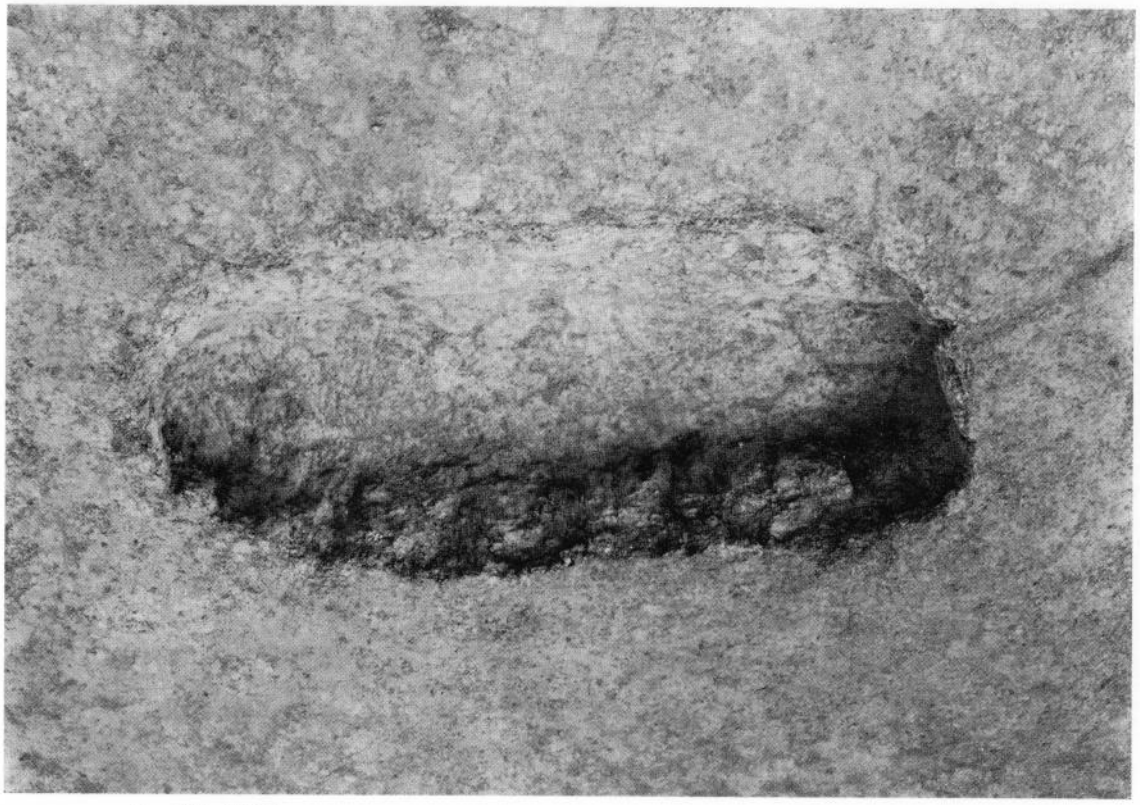
1　1・2・5号土壙墓



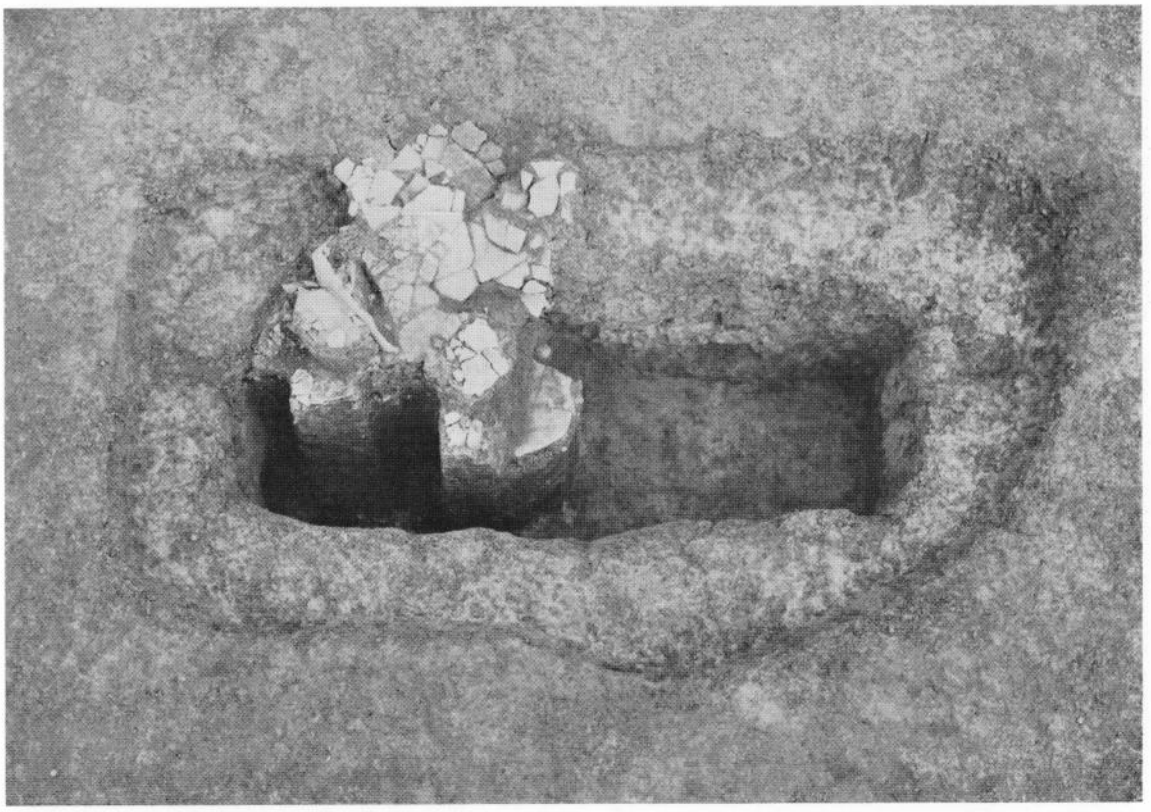
2　3号土壙墓



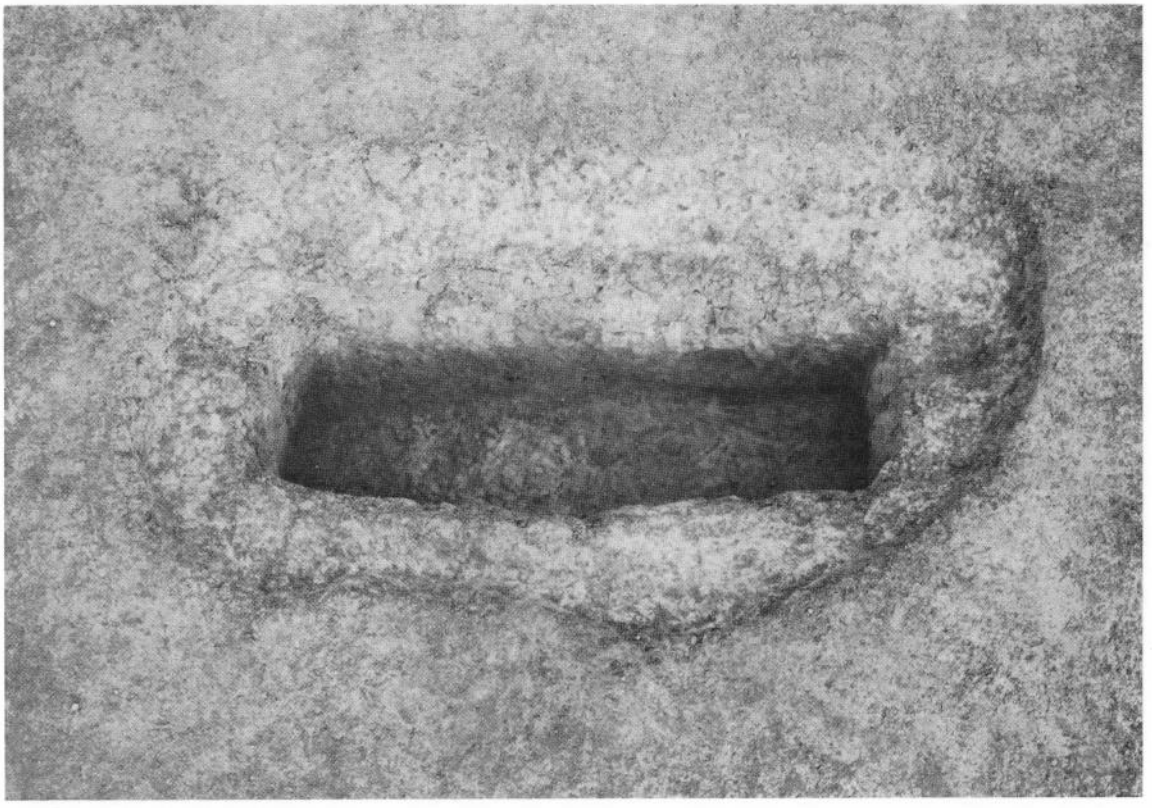
1　16号土壙墓



2　17号土壙墓

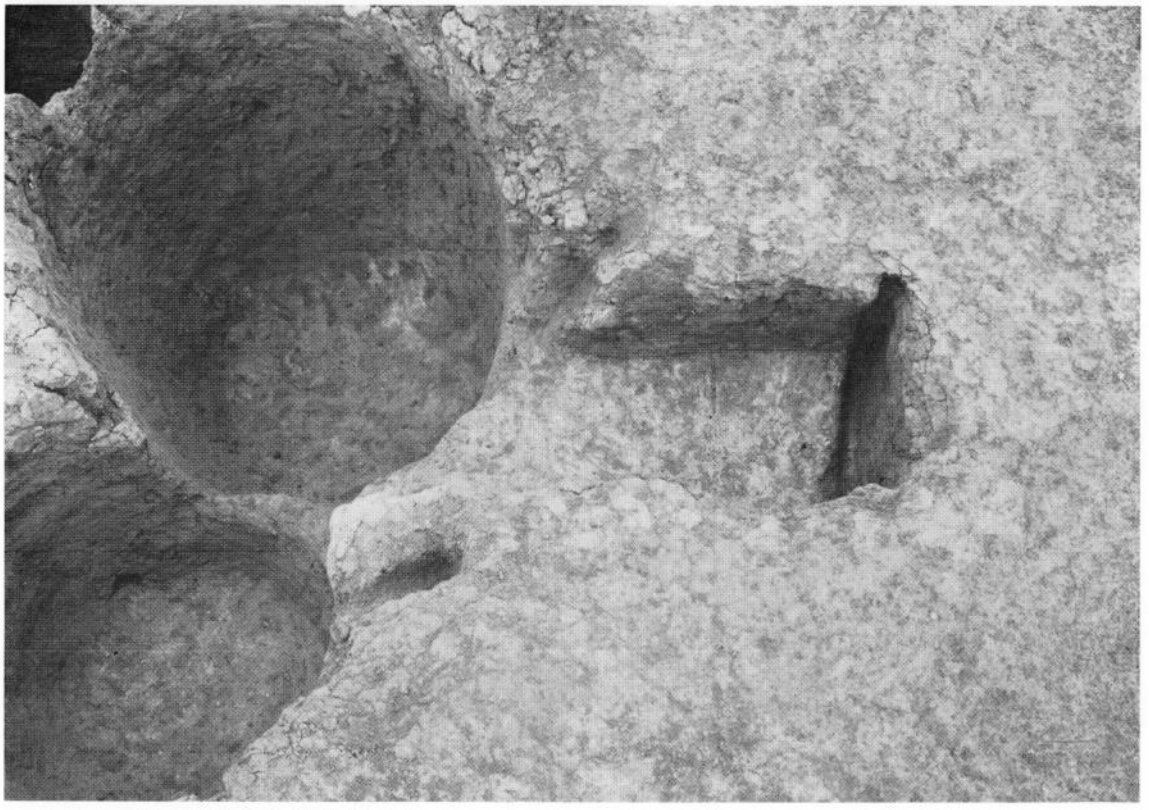


1　18号土壙墓と供献土器出土状態

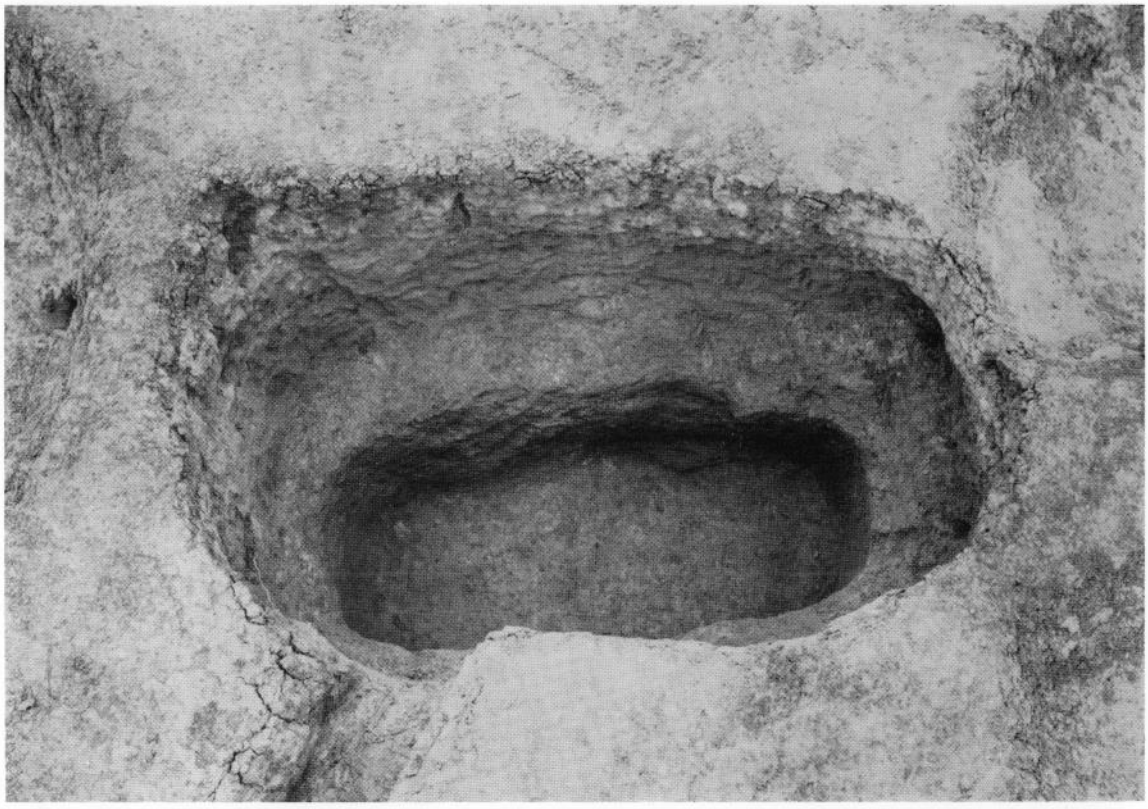


2　18号土壙墓

1　19号土壙墓

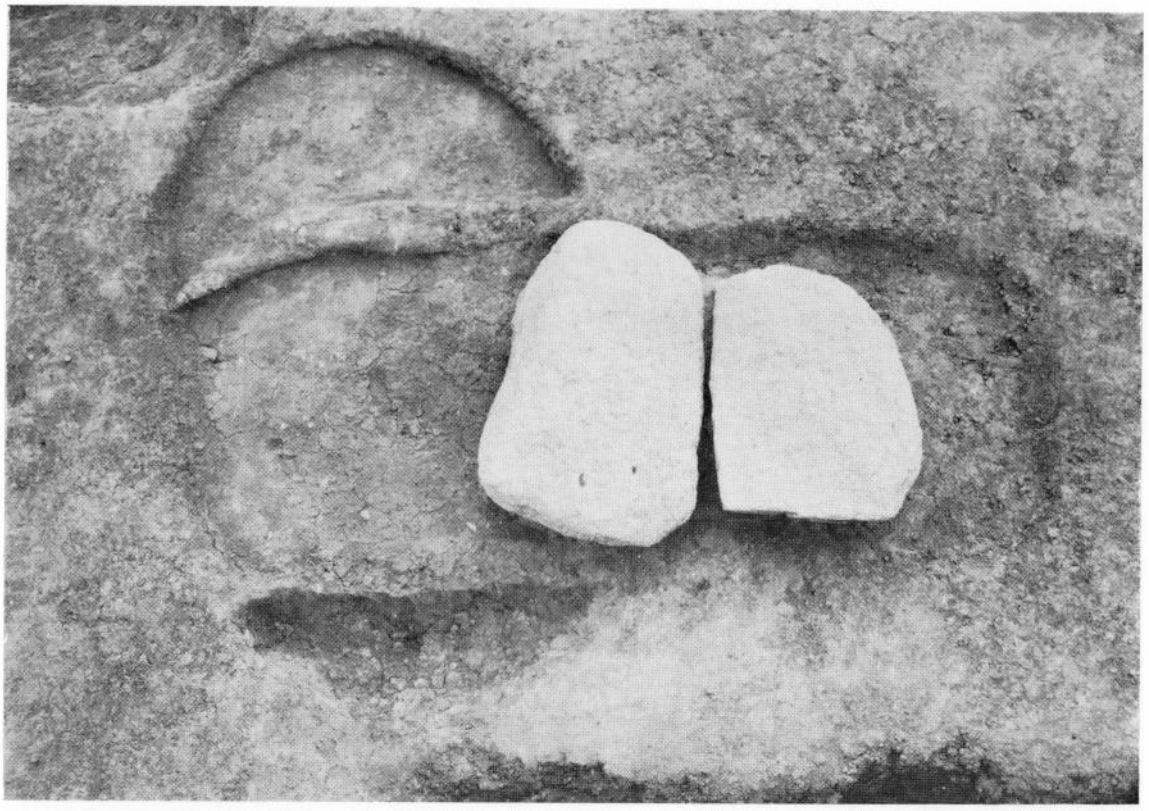


2　20号土壙墓（木棺墓）

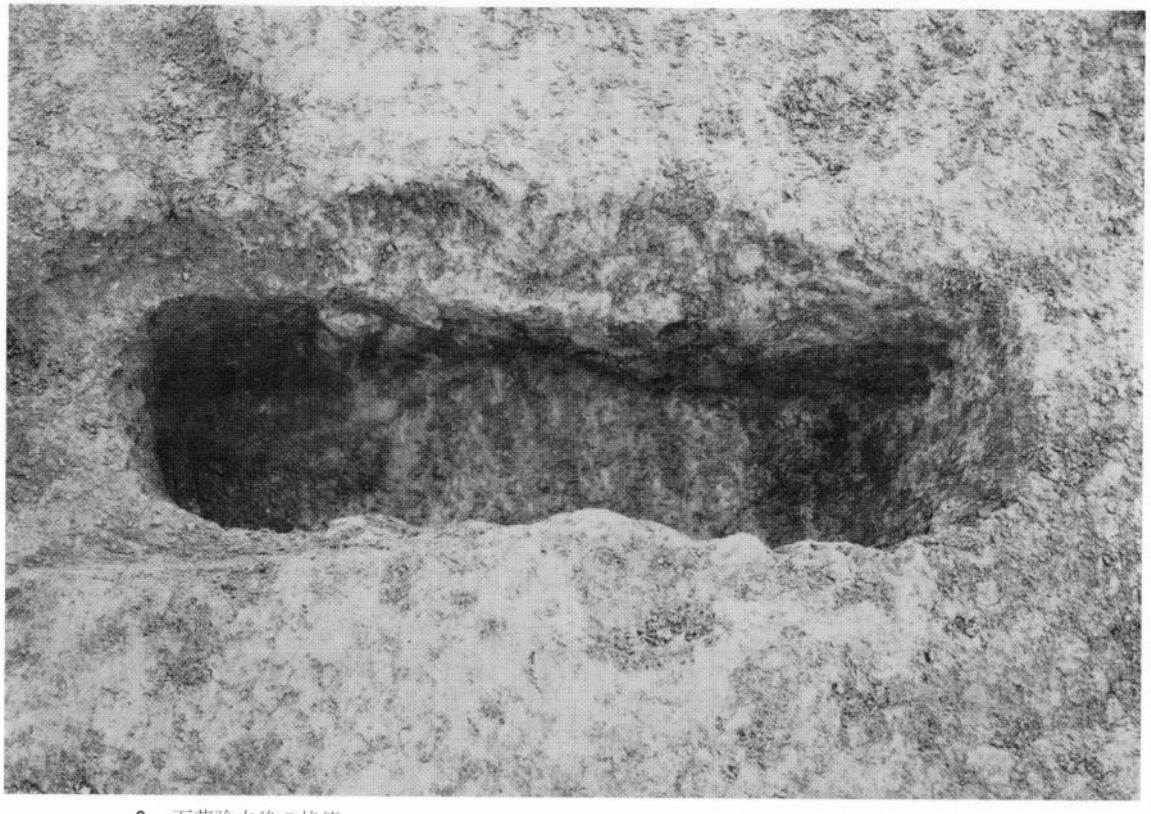


1　23号土壙墓

2　24号土壙墓



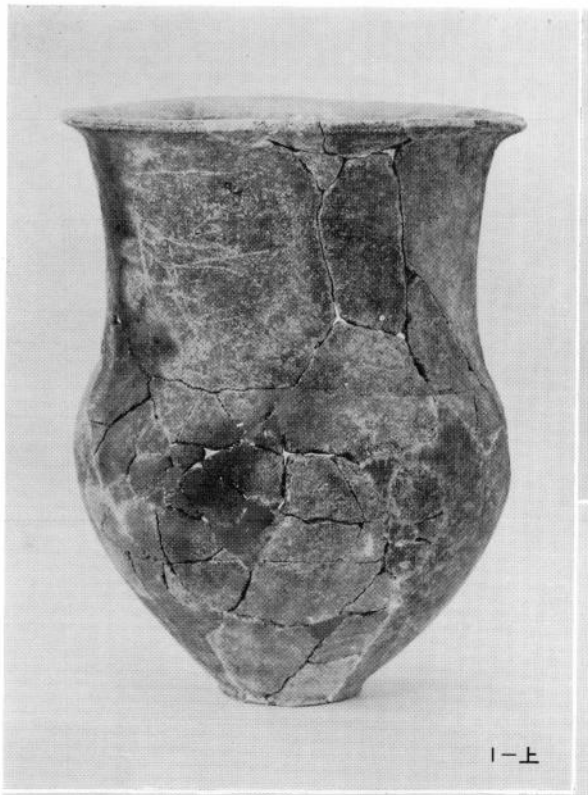
1　2号石蓋土壙墓

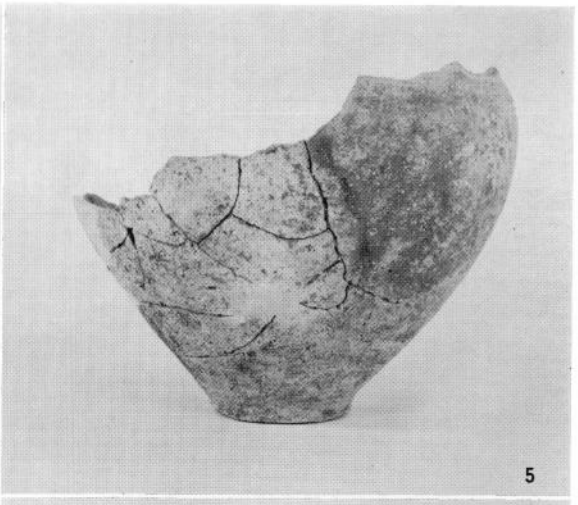


2　石蓋除去後の状態

1　土器溜状遺構全景

2　土器溜状遺構内土器出土状態


1－上


5

9－上

1－下

9－下

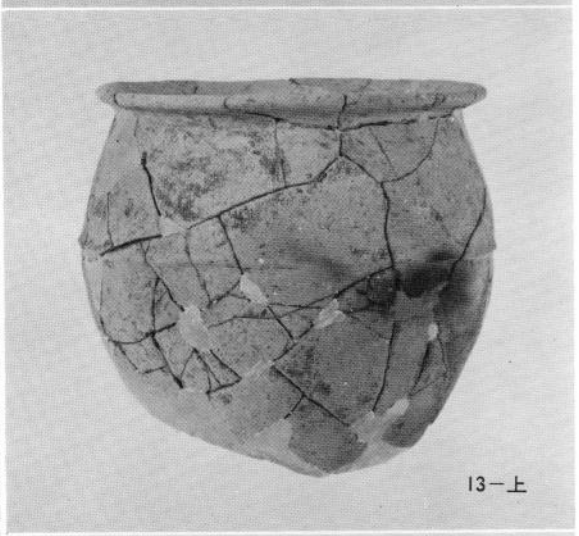
1　1号甕棺（上・下）
5　5号甕棺
9　9号甕棺（上・下）

甕　棺　（1）

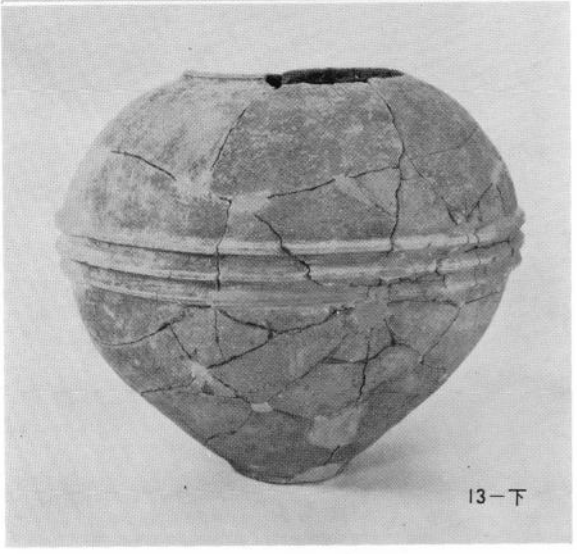
10

12－下

14



13－上



13－下

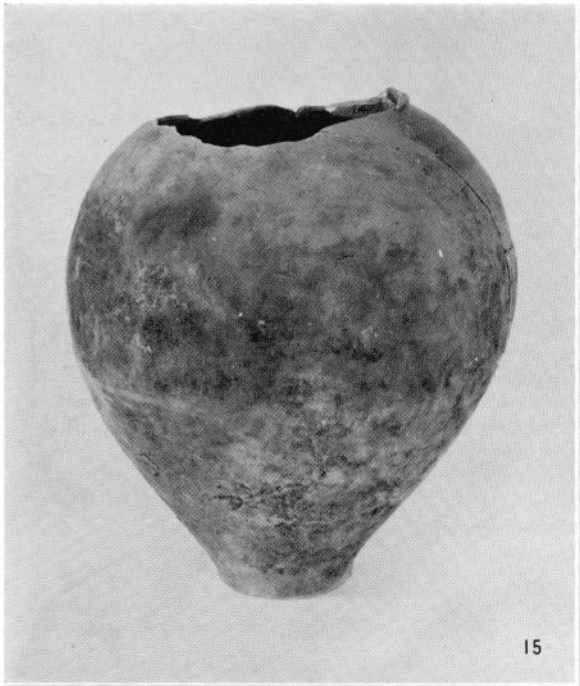
10　10号甕棺

12　12号甕棺（下）

13　13号甕棺（上・下）

14　14号甕棺

甕　棺　（2）


15

16－上

17

16－下

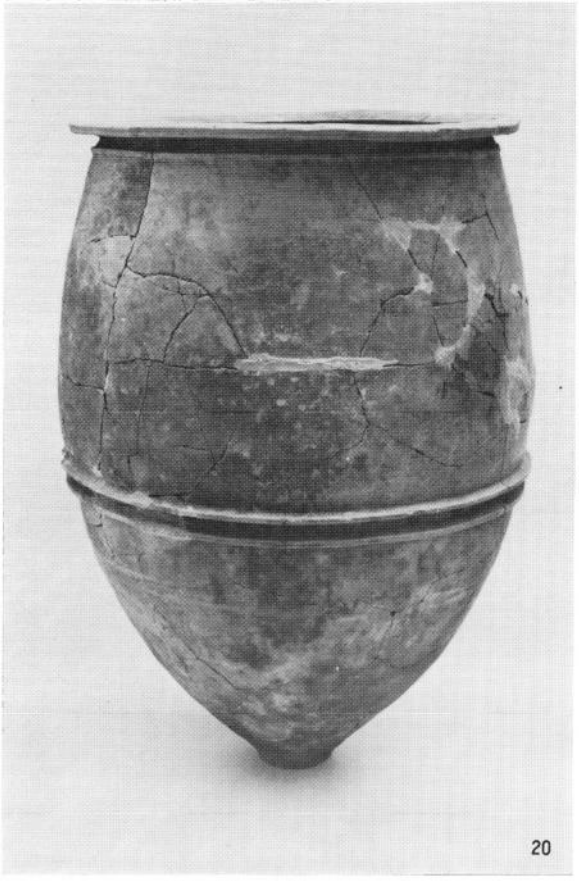
15　15号甕棺

16　16号甕棺（上・下）

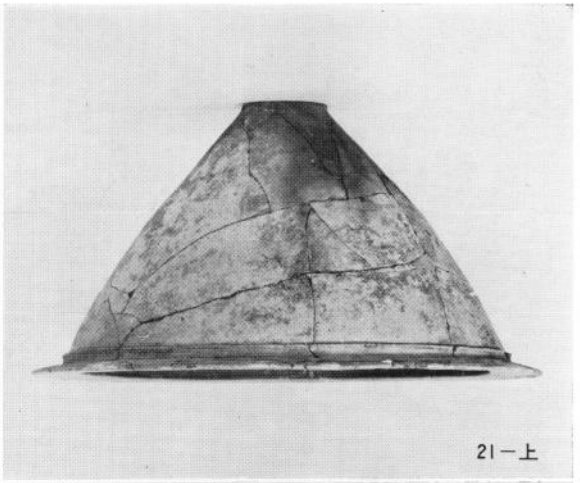
17　17号甕棺

甕　棺　（3）

19



20



21－上

21－下

19　19号甕棺

20　20号甕棺

21　21号甕棺（上・下）

甕　棺　（4）

22－上

23－上

22－下

23－下

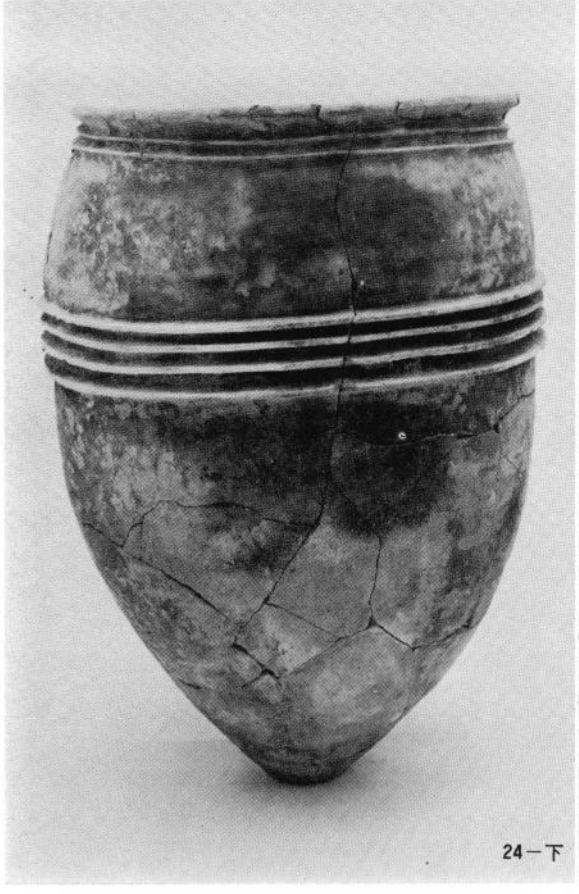
22　22号甕棺（上・下）

23　23号甕棺（上・下）

甕　棺　（5）

24－上

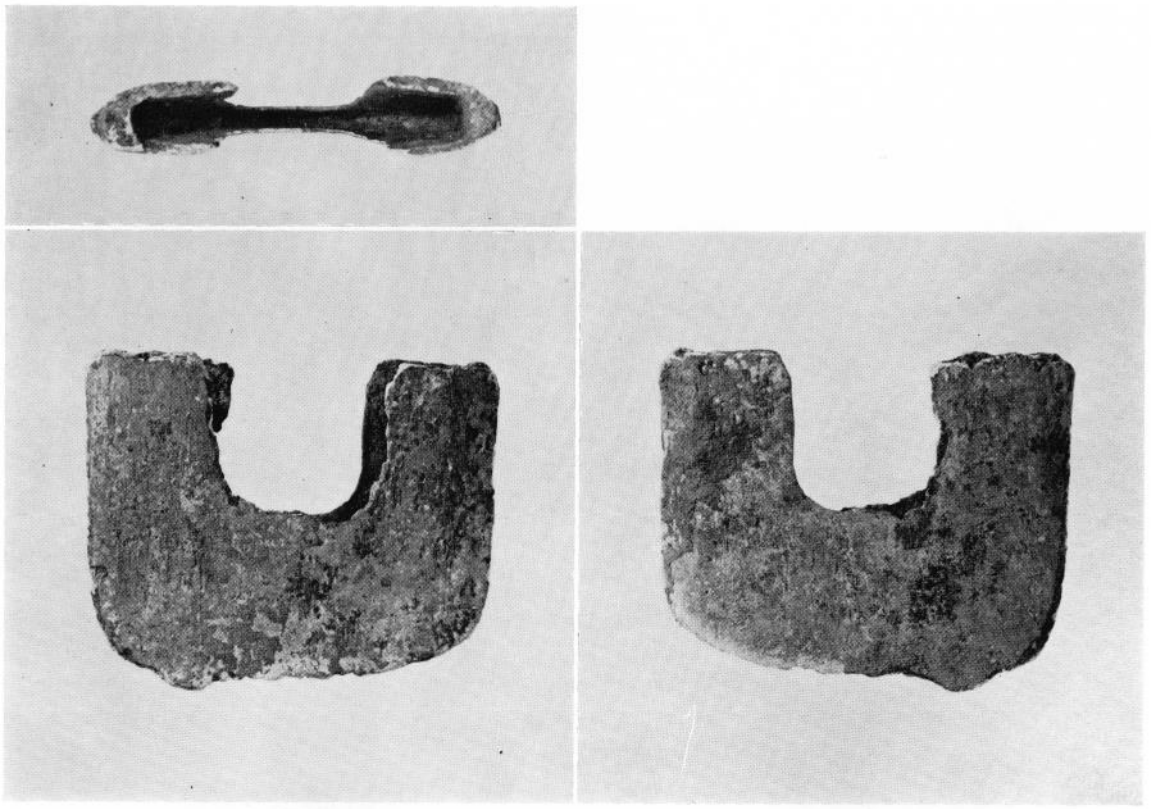
27－上



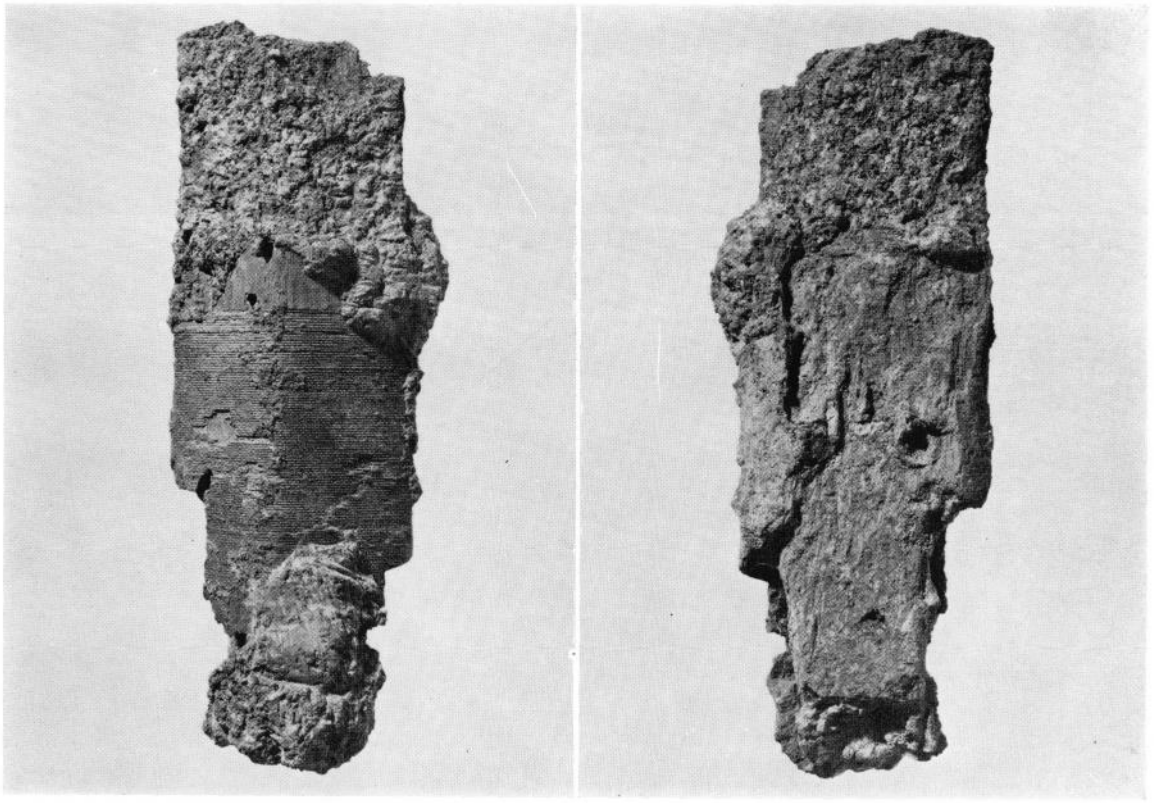
24－下

27－下

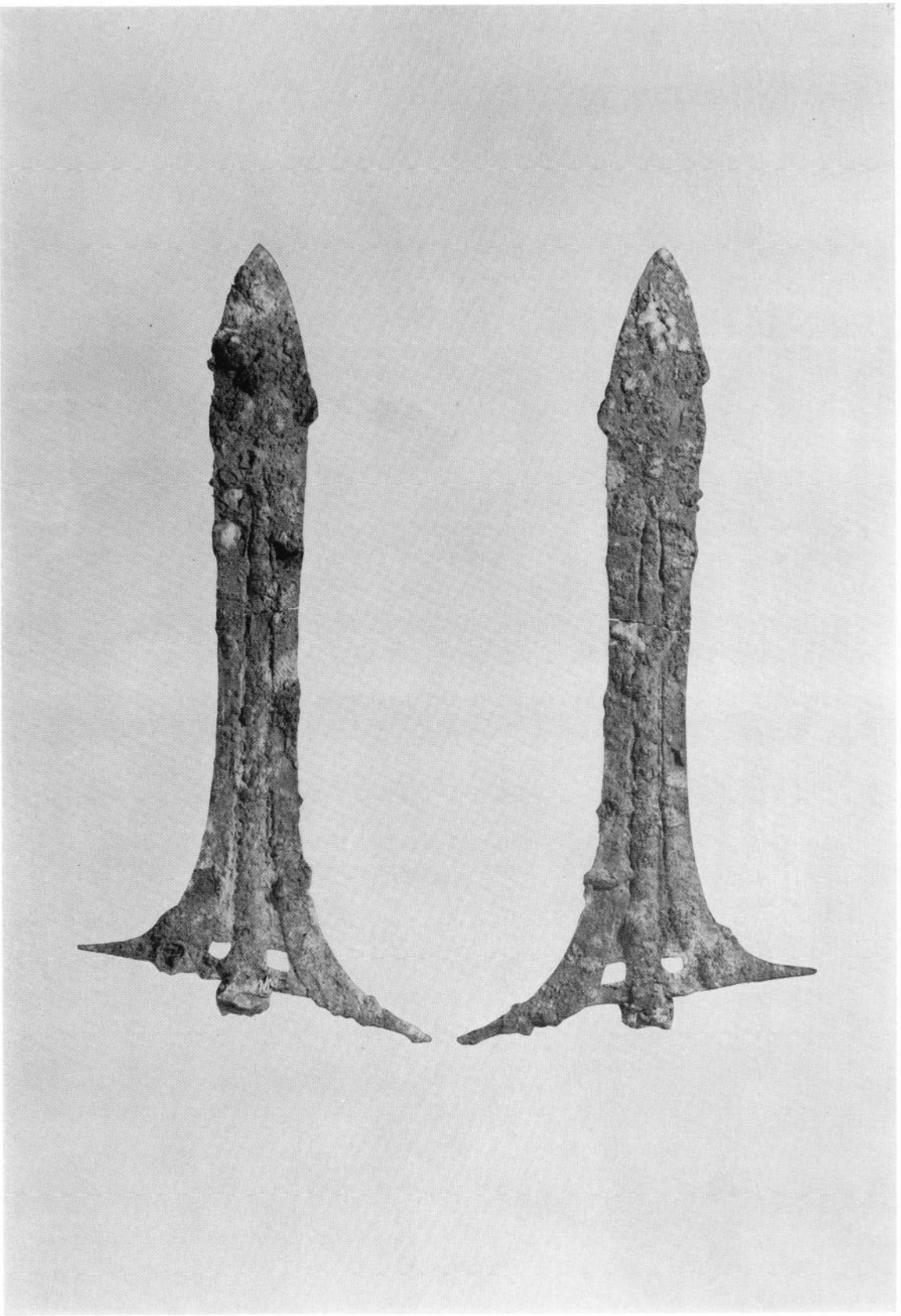
甕　棺　（6）



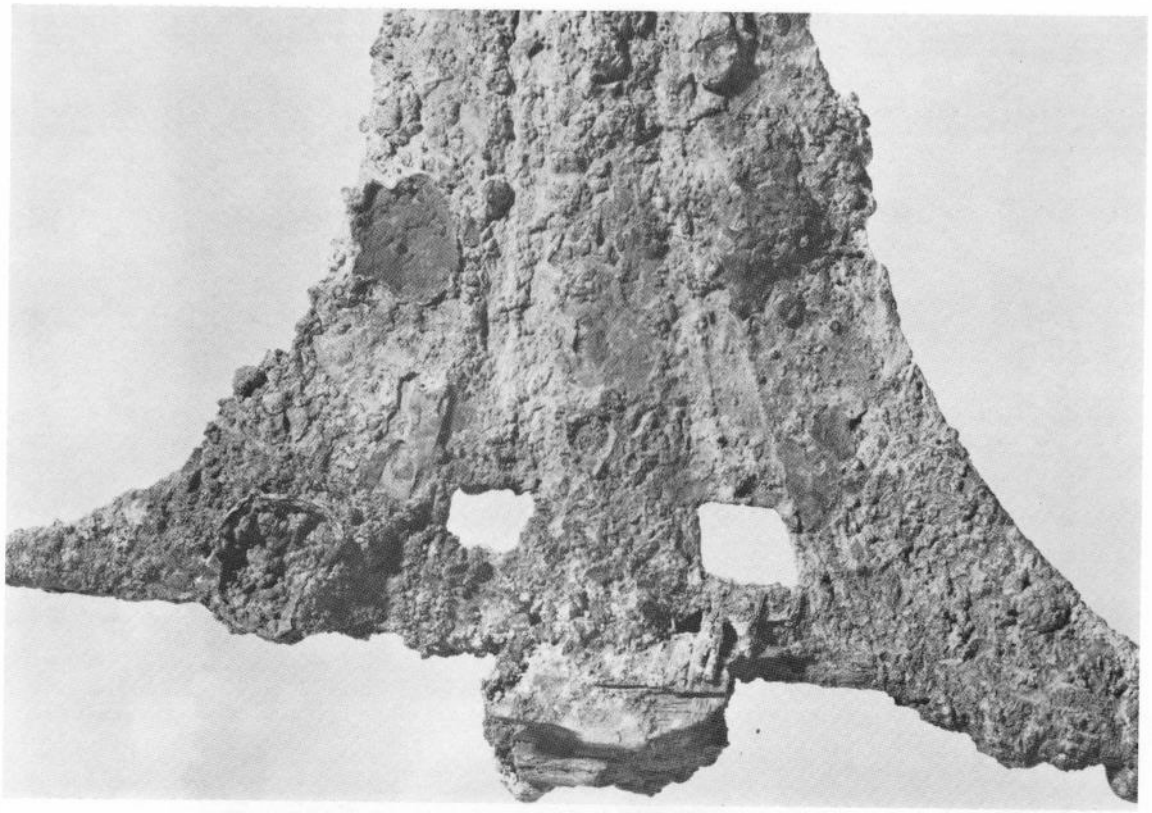
1　23号甕棺墓出土青銅製鋤先



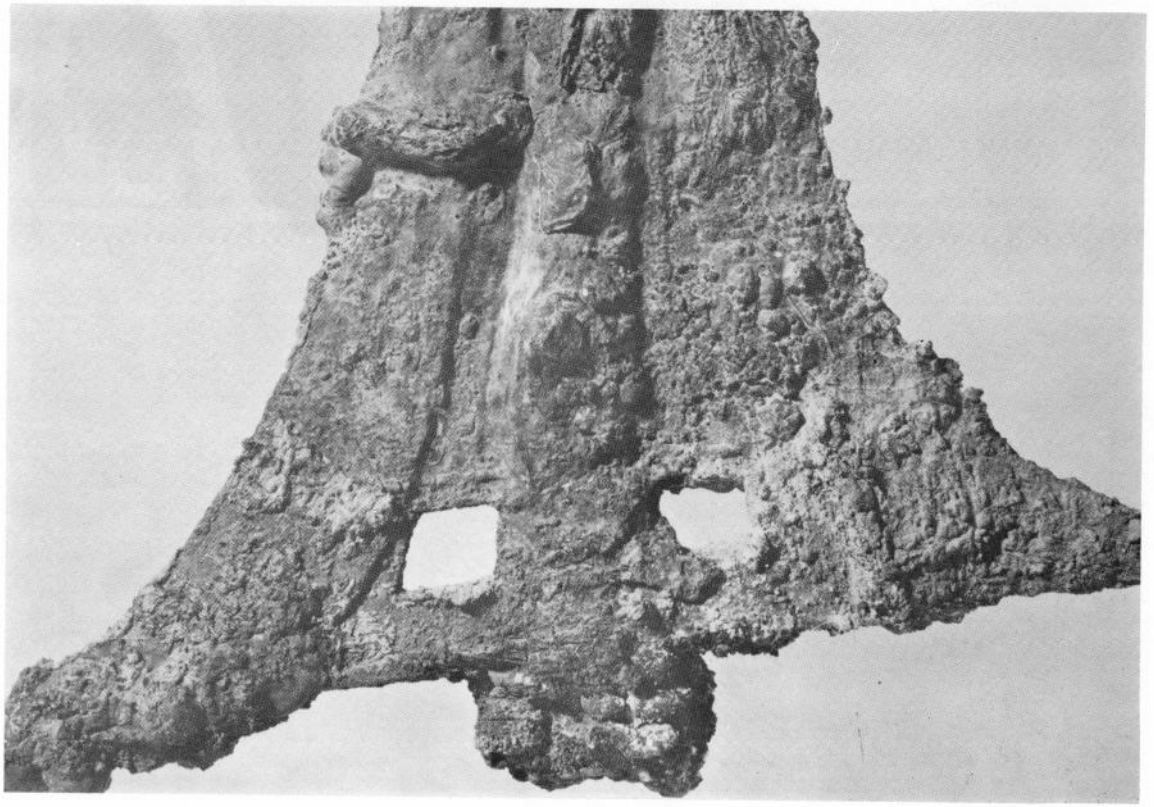
2　24号甕棺墓出土鉄剣



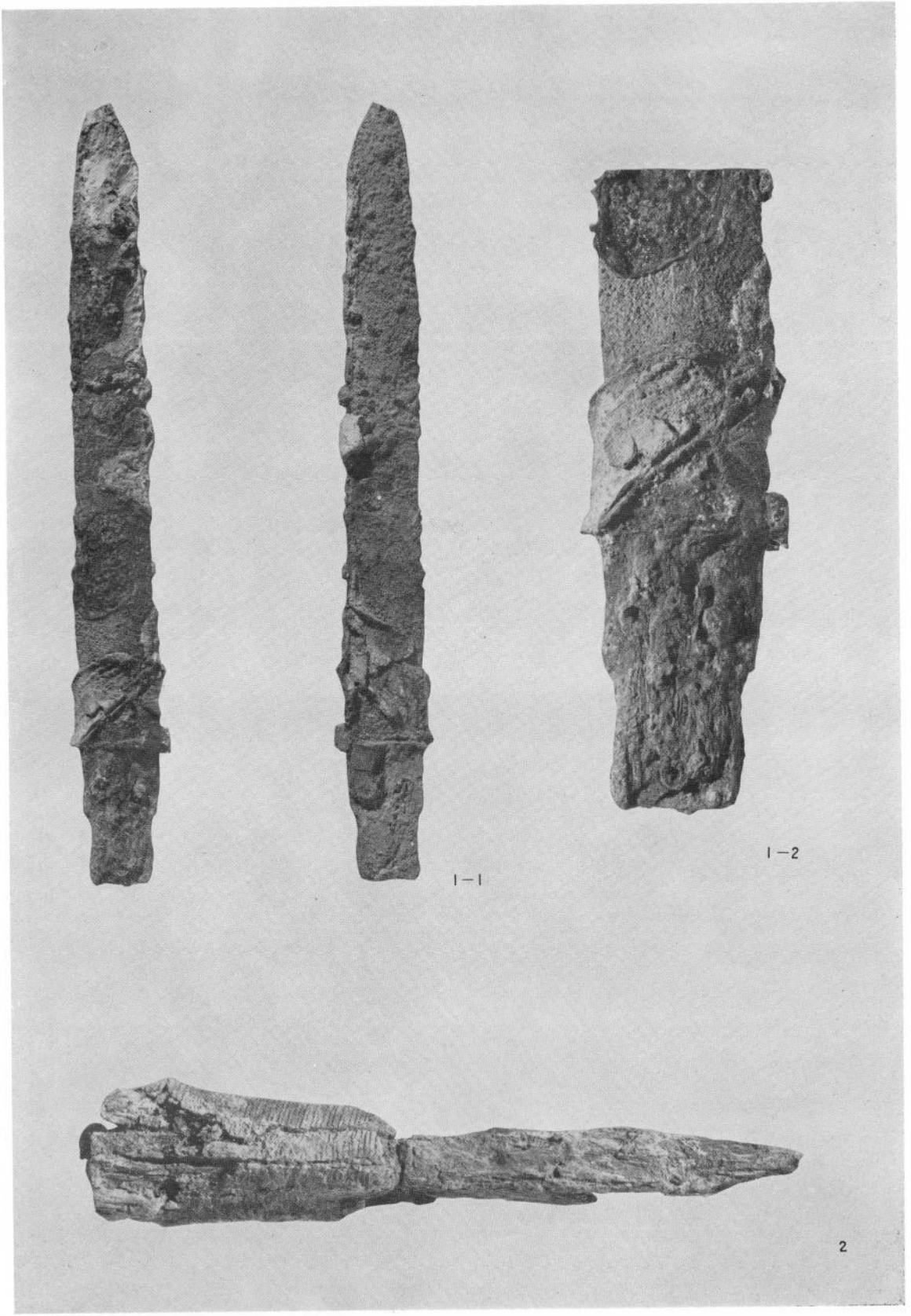
24号甕棺墓出土鉄戈



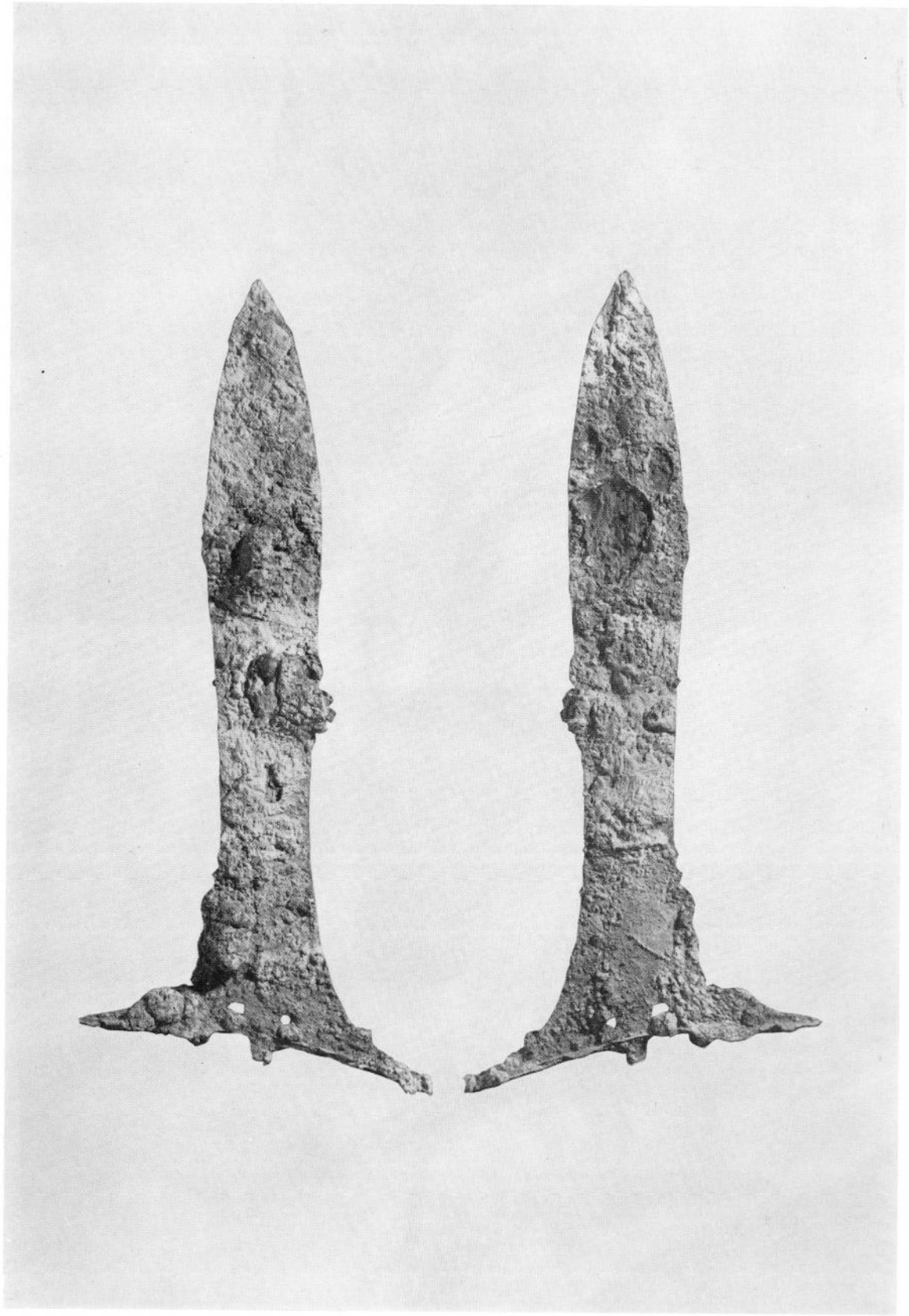
1　24号甕棺墓出土鉄戈着柄部（表）



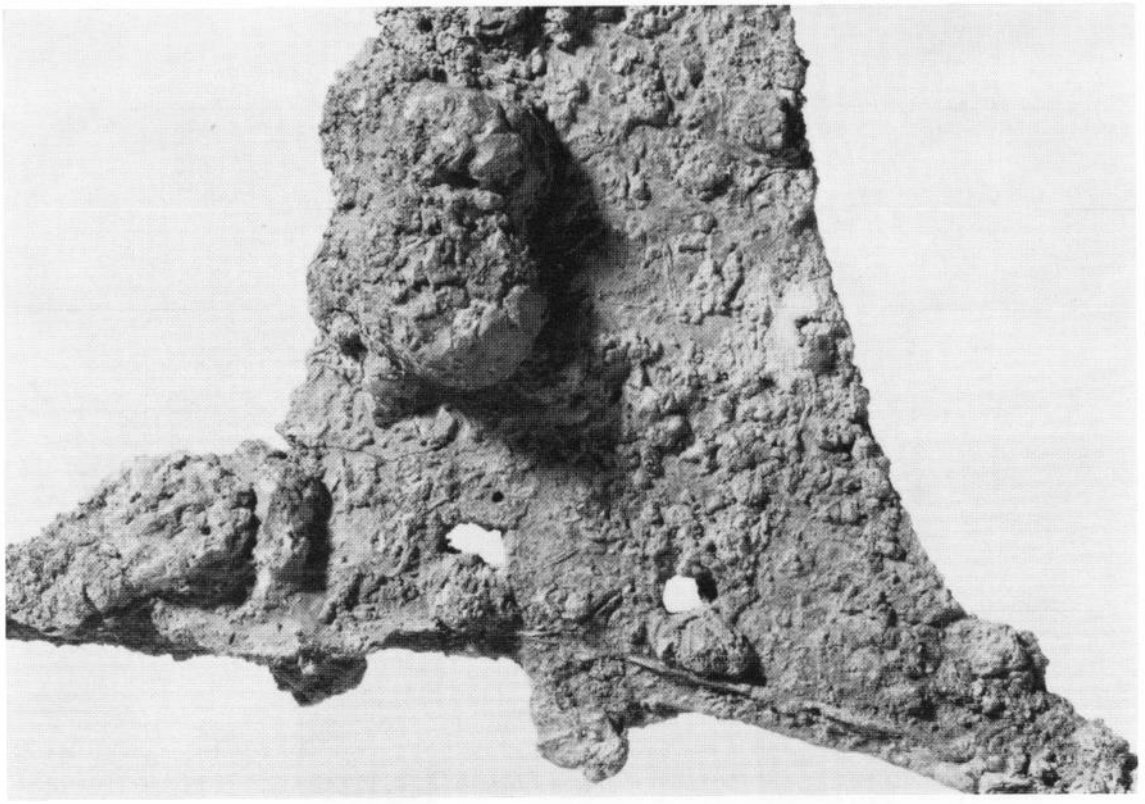
2　24号甕棺墓出土鉄戈着柄部（裏）



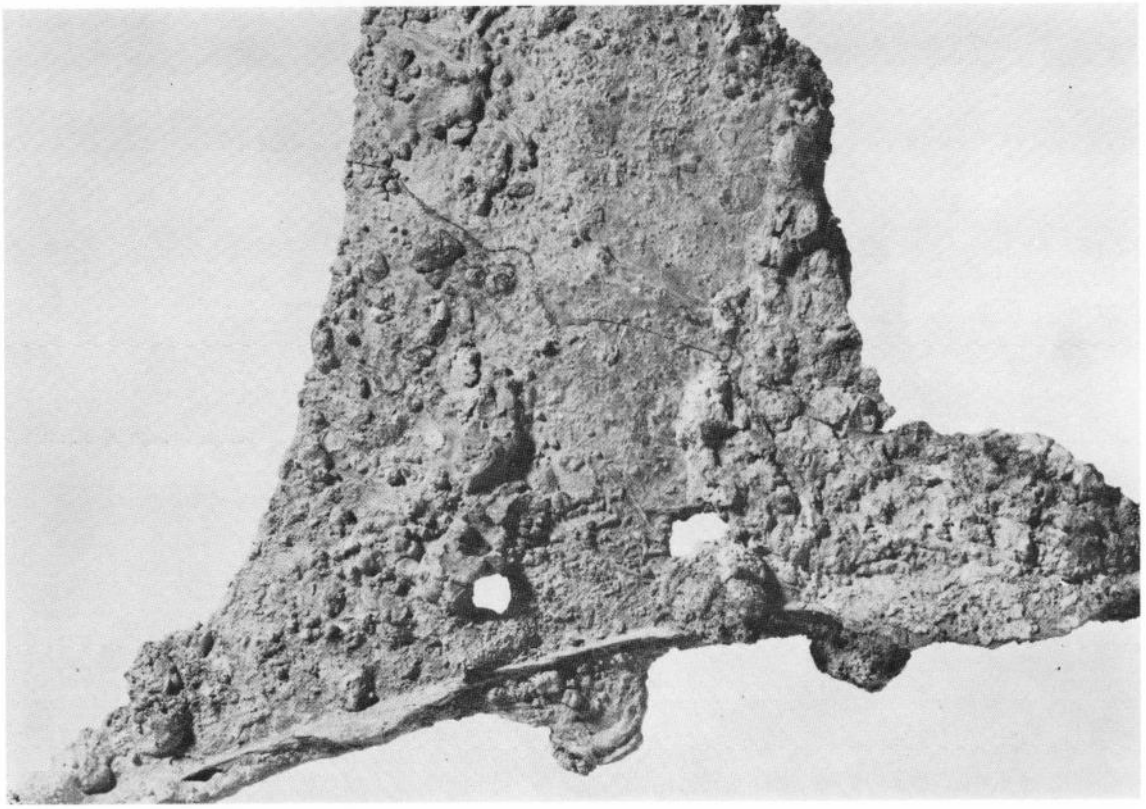
27号甕棺墓出土鉄剣



27号甕棺墓出土鉄戈



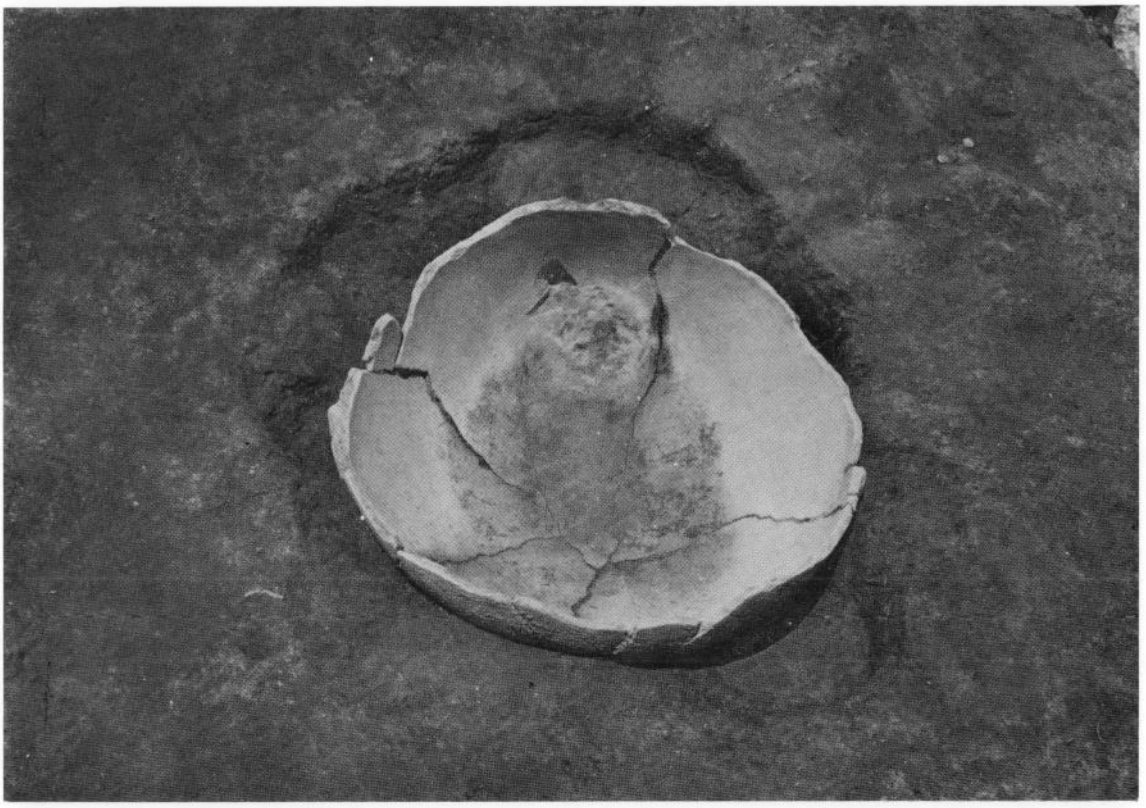
1　27号甕棺墓出土鉄戈着柄部（表）



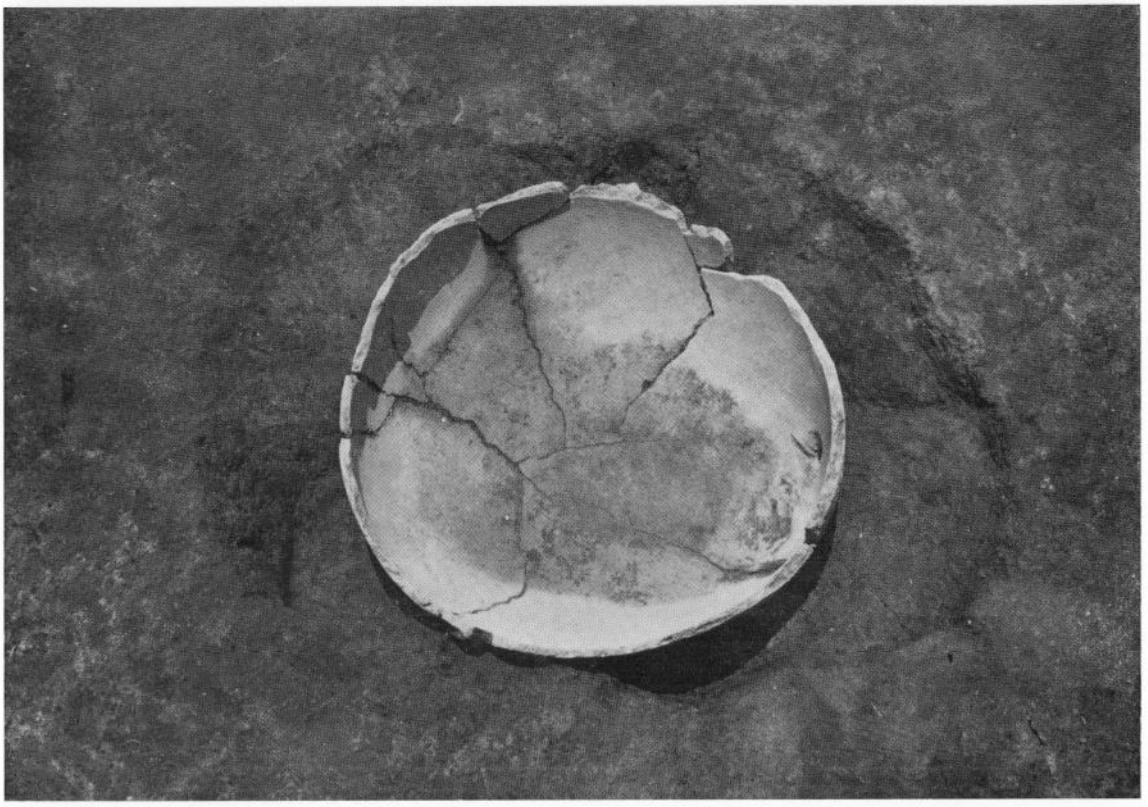
2　27号甕棺墓出土鉄戈着柄部（裏）

1　弥生時代B群墓地全景（東から）

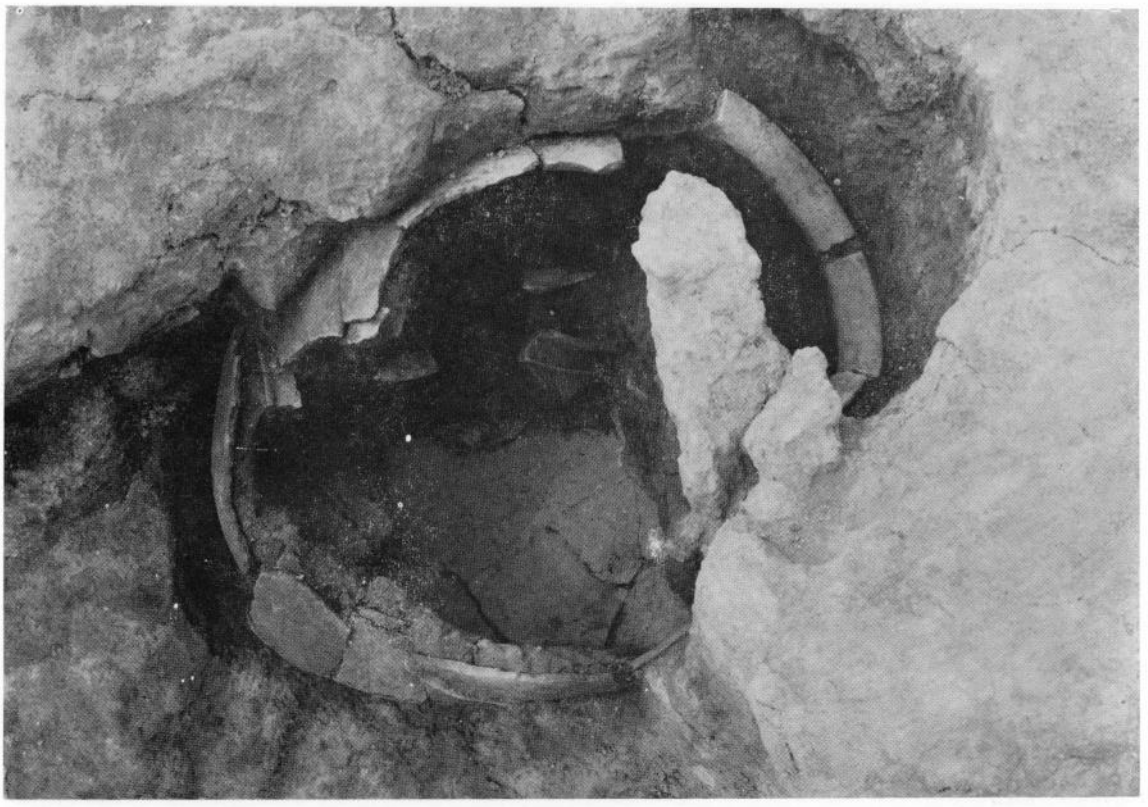
2　弥生時代B群墓地全景（北から）



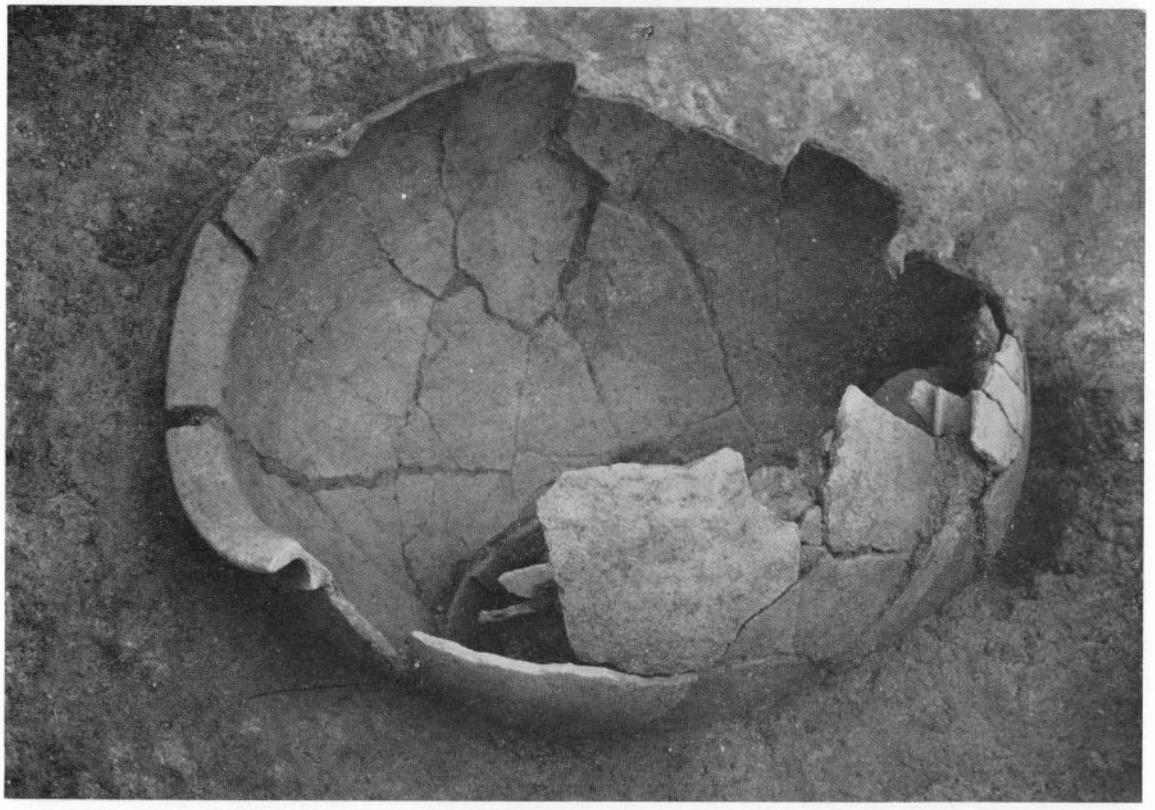
1　7号甕棺墓（東から）



2　7号甕棺墓（北から）



1　8号甕棺墓（南から）



2　8号甕棺墓（北から）

上　13・14号土壙墓（北から）

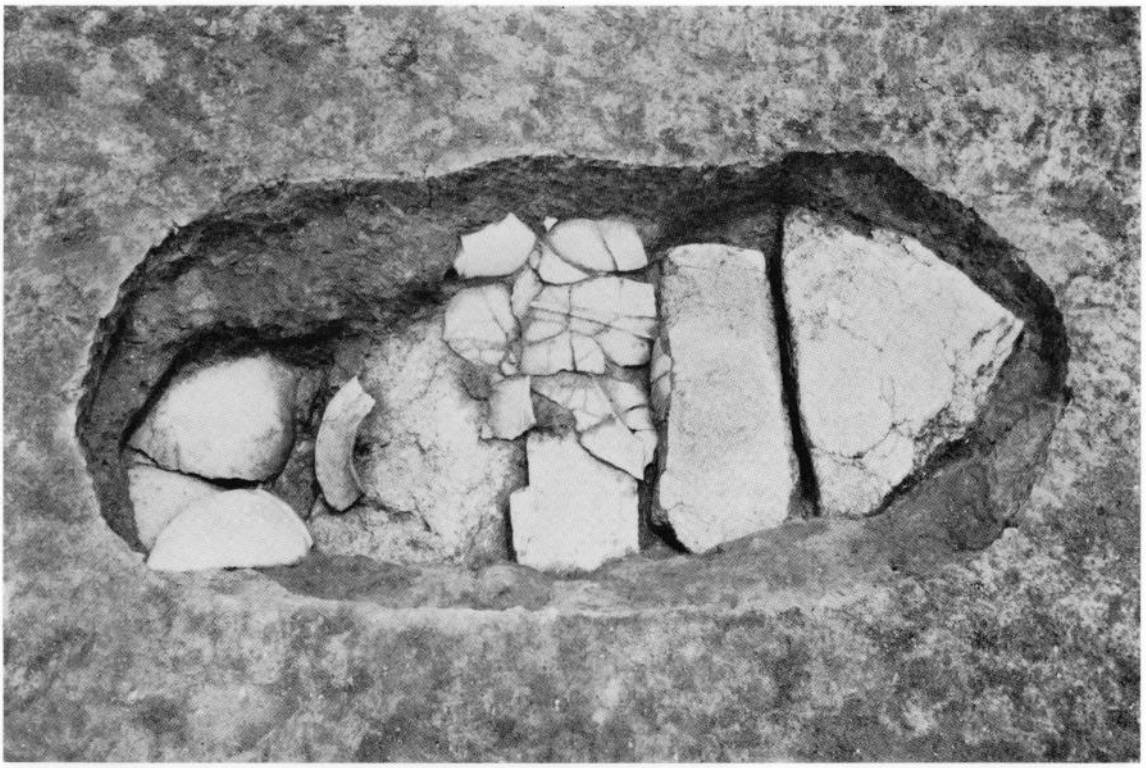
下　13・14号土壙墓（東から）

上　15号土壙墓（西から）

下　15号土壙墓内玉類出土状態

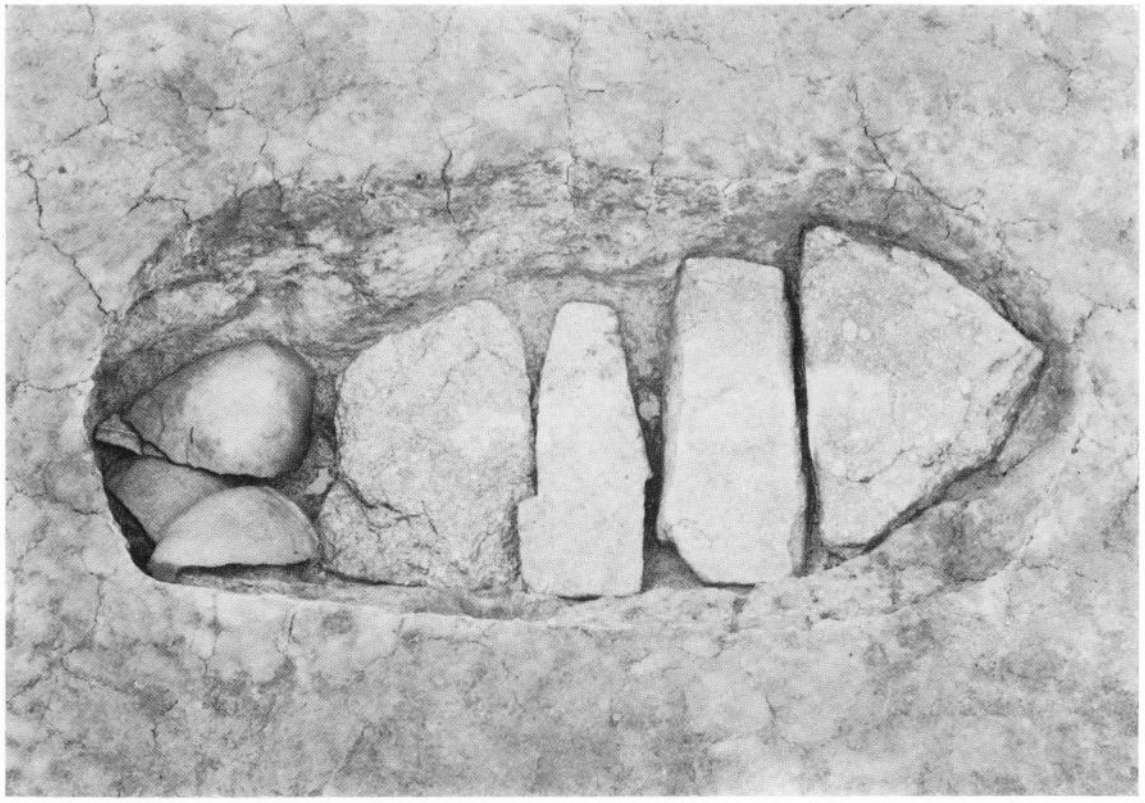
上　15号土壙墓（北から）

下　15号土壙墓（西から）



上　1号石蓋土壙墓（西から）

下　1号石蓋土壙墓（南から）



1　1号石蓋土壙墓

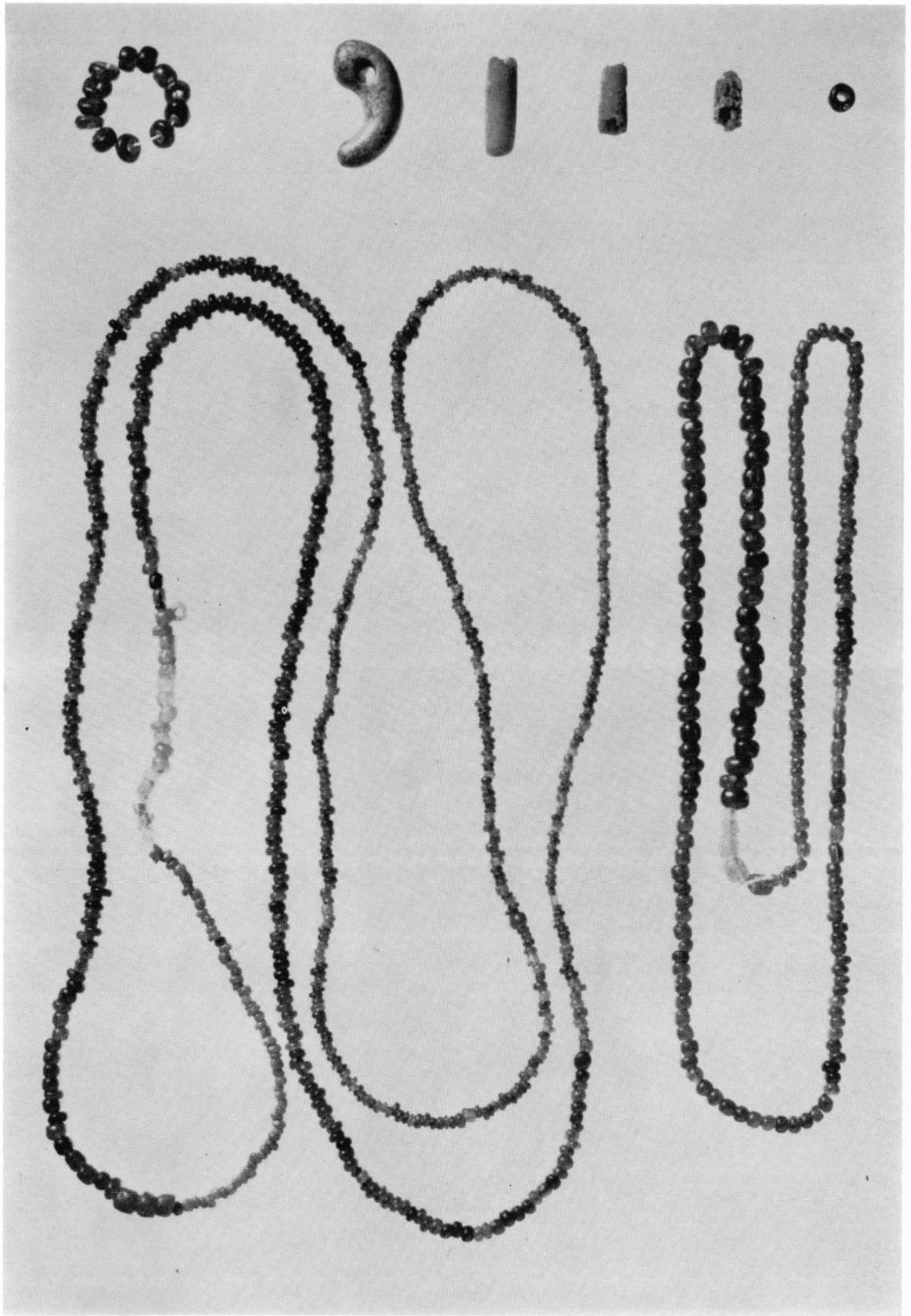
2　石蓋除去後の状態

1　1号石蓋土壙内玉類出土状態全景

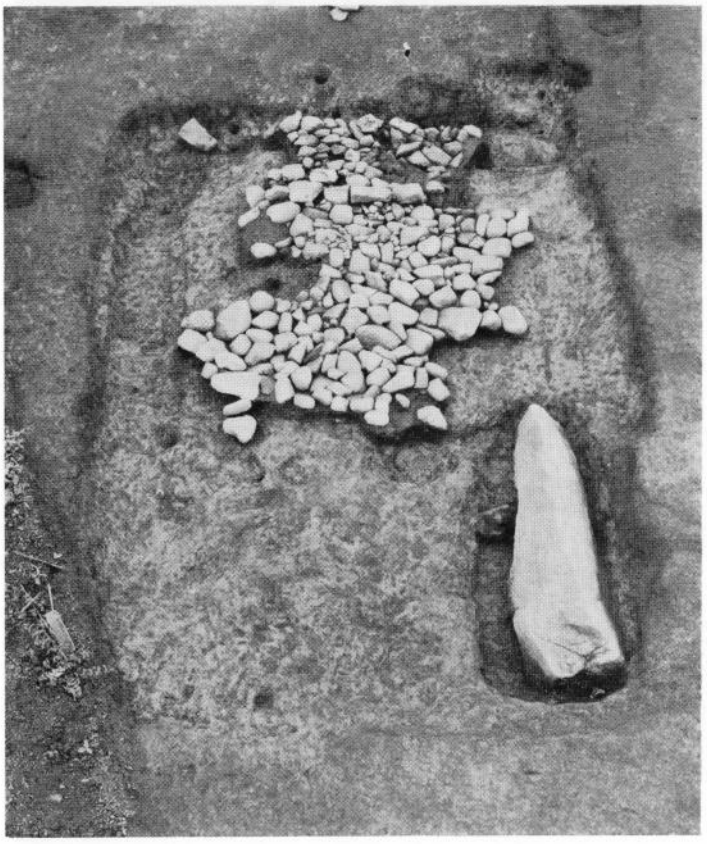
2　玉類出土状態近景

1 8号甕棺

2 1号石蓋土壙墓出土壺形土器



7号甕棺墓，13・15号土壙墓，1号石蓋土壙墓出土玉類

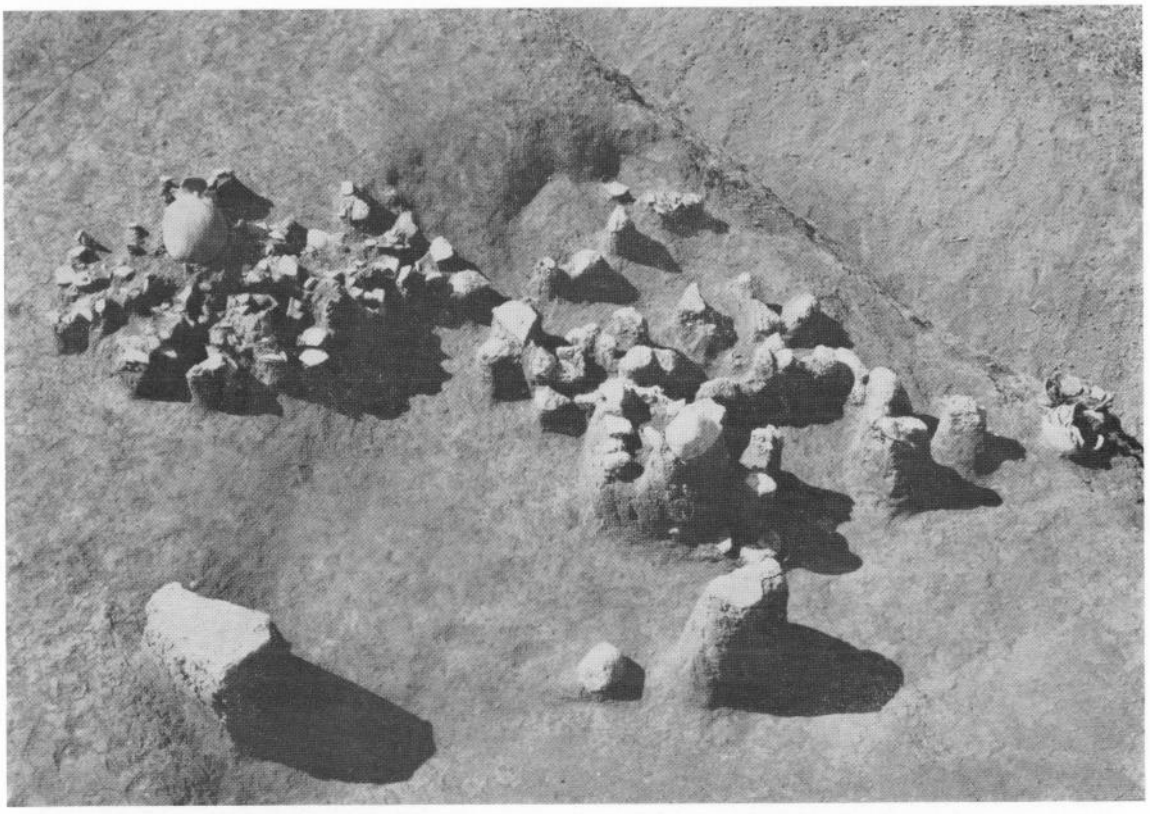


上　予備調査で発見された
　　1号墳

下　1号墳石室

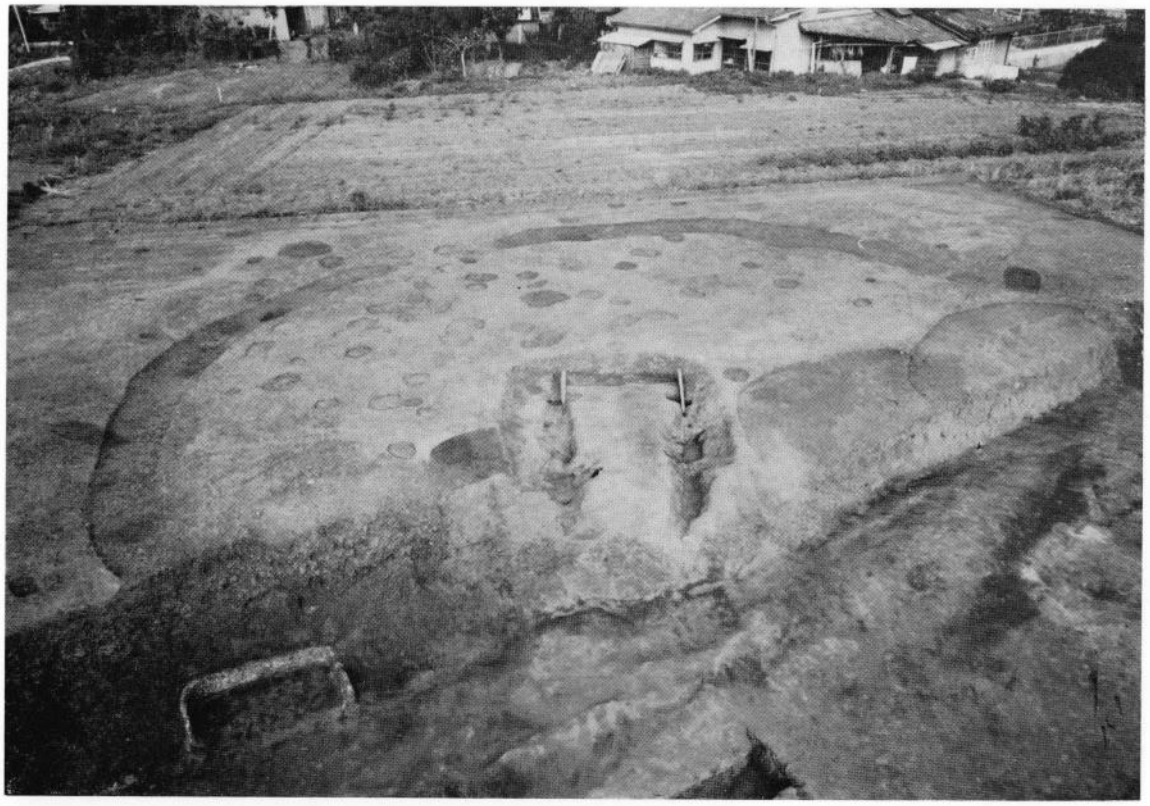
1　1号墳全景（南から）

2　1号墳全景（東から）



1　周溝内土器出土状態全景

2　周溝内土器出土状態近景



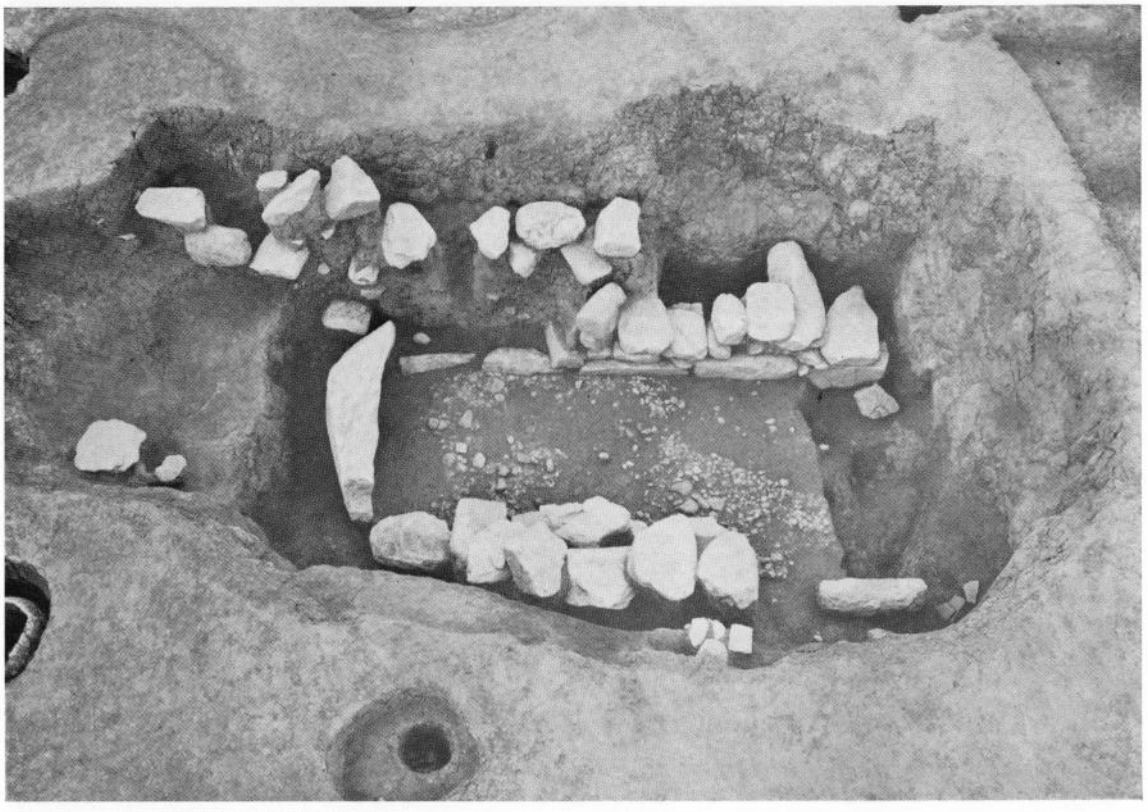
上　2号墳全景

下　2号墳石室

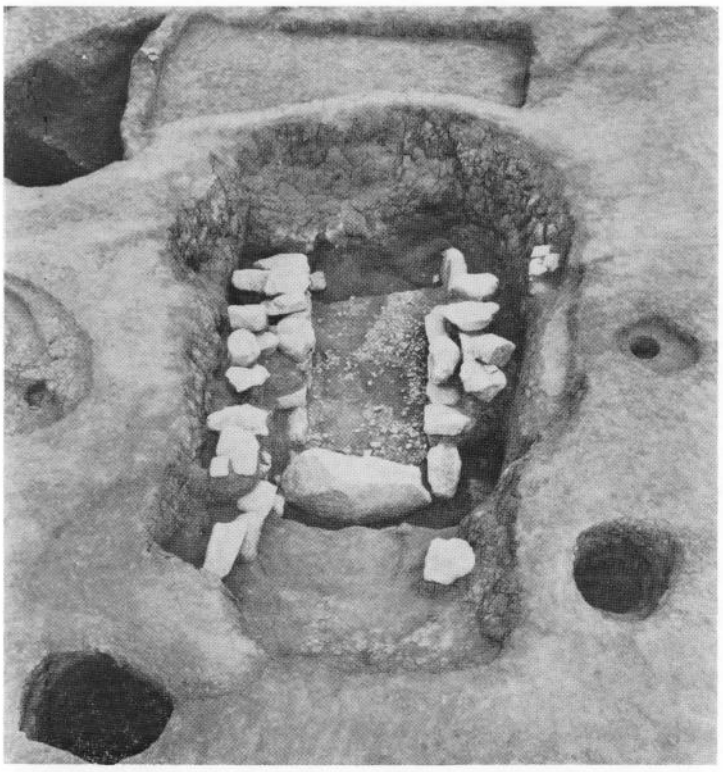
1　石室内鉄鏃・玉類出土状態

2　石室内刀子出土状態

1　3号墳全景

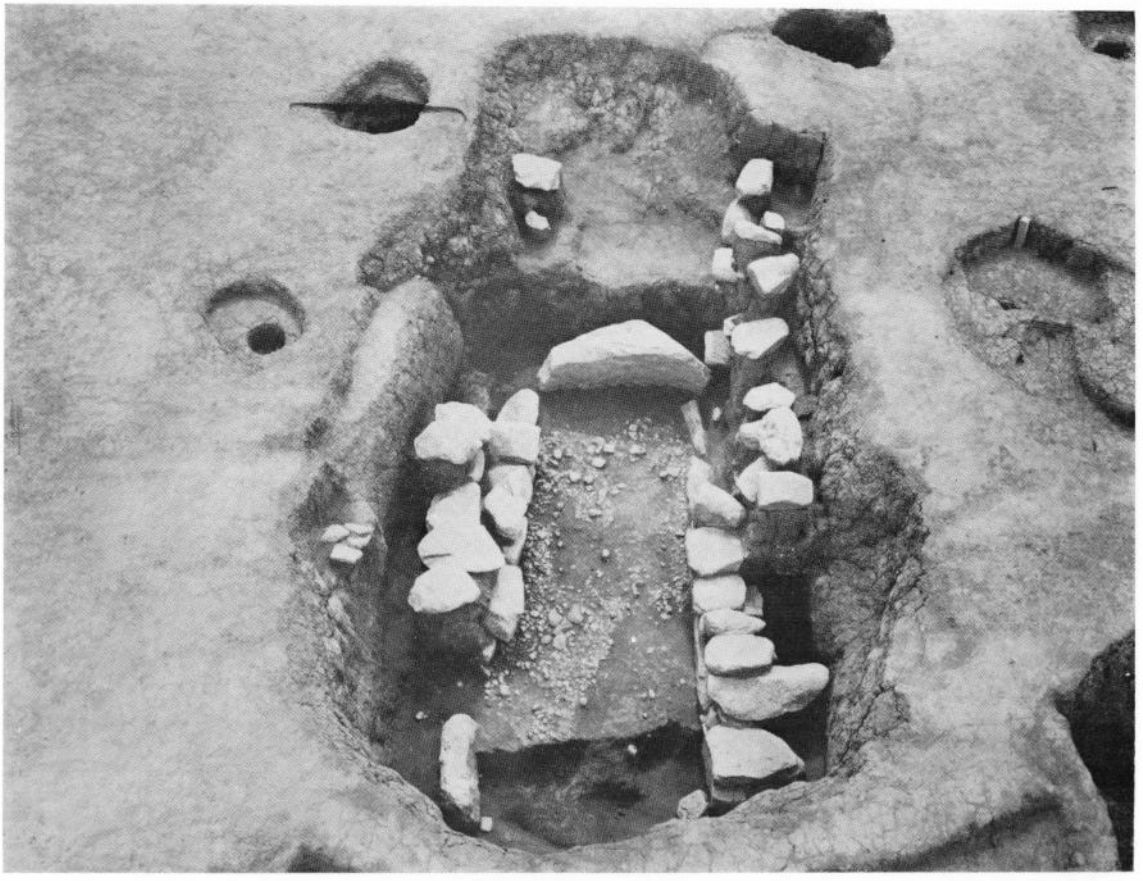


2　3号墳石室（南東から）



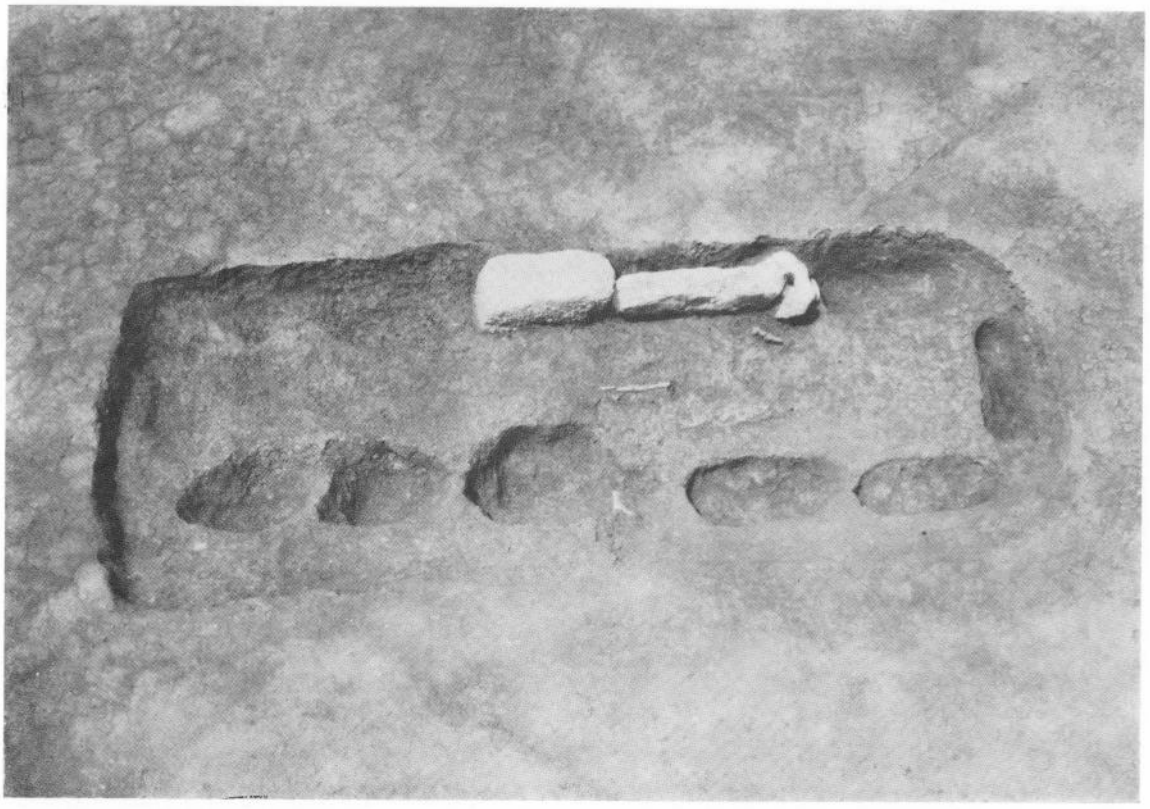
上　　3号墳石室（南西から）

下　　3号墳石室（北東から）



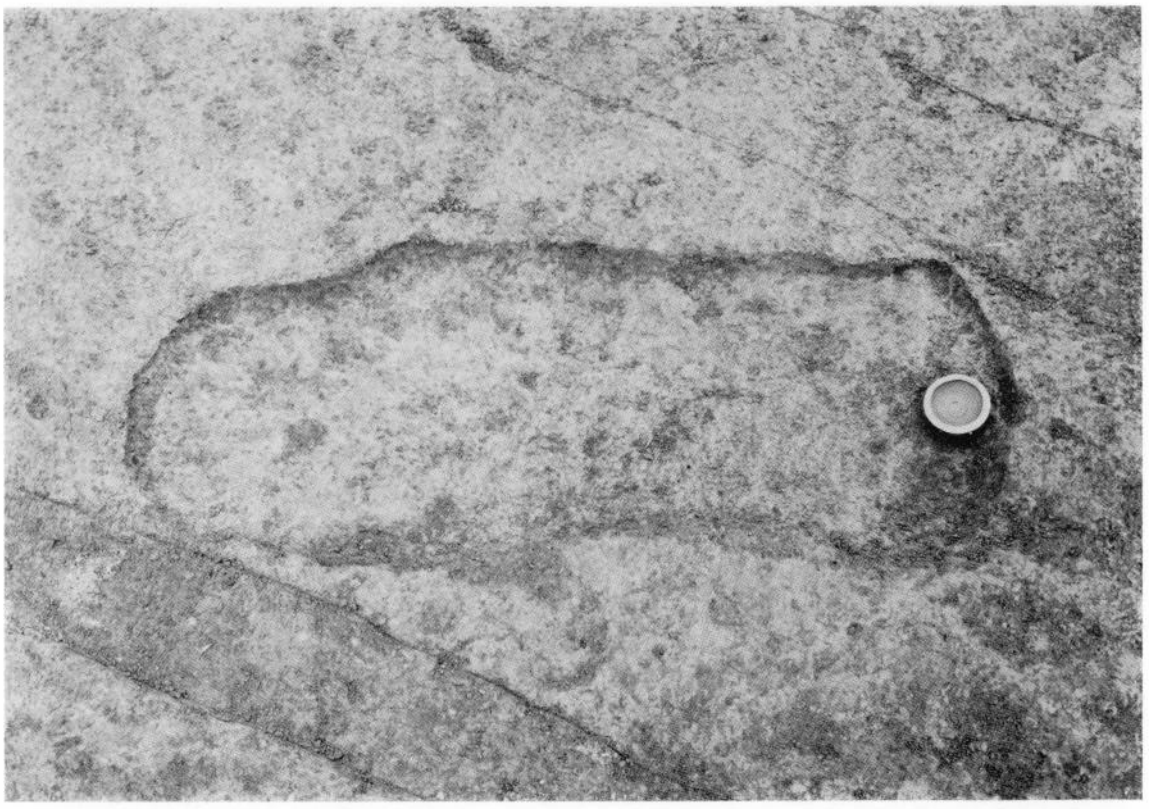
1　石室北壁石積み状態

2　墓道内鉄斧出土状態

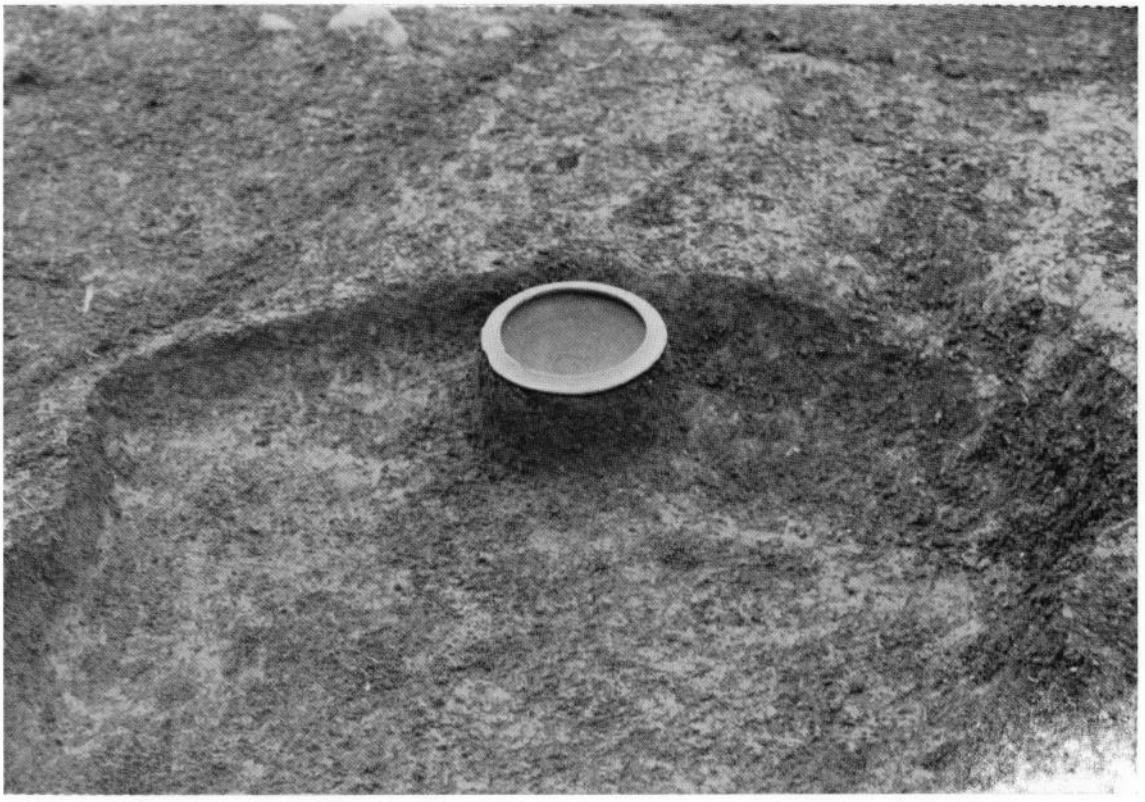


1　4号墳石室全景

2　石室内鉄鏃出土状態

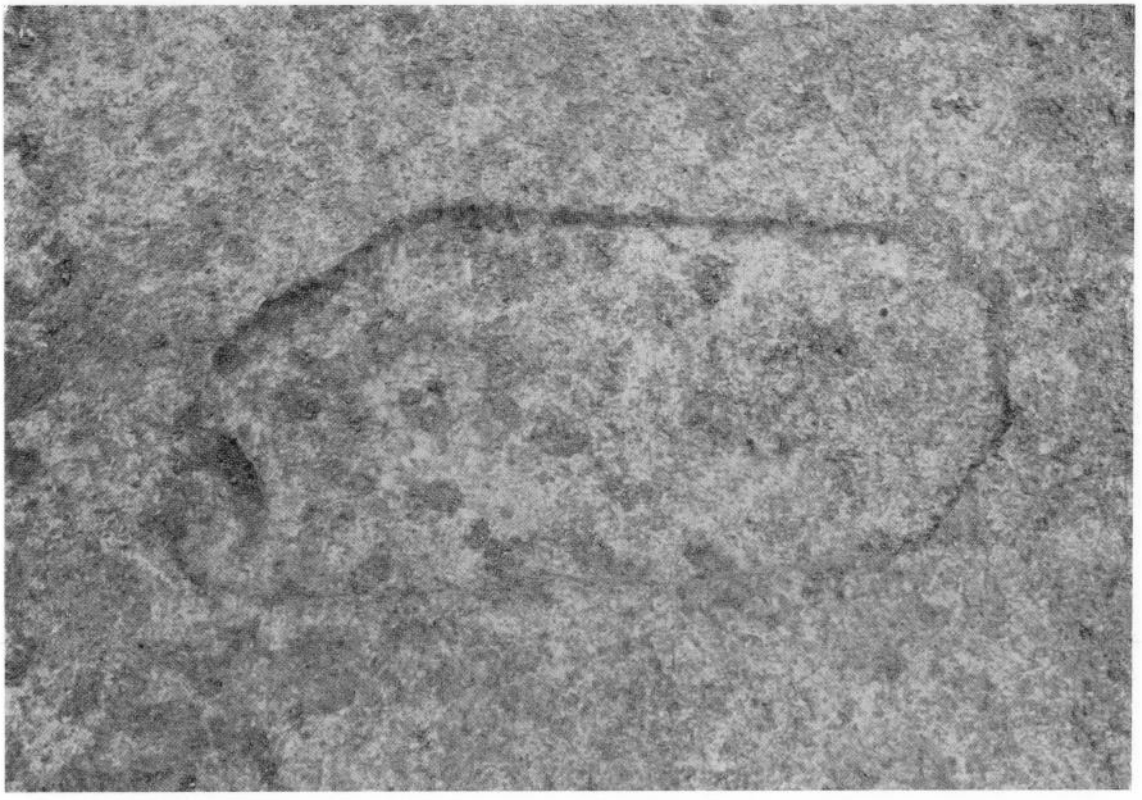


1　7号土壙墓

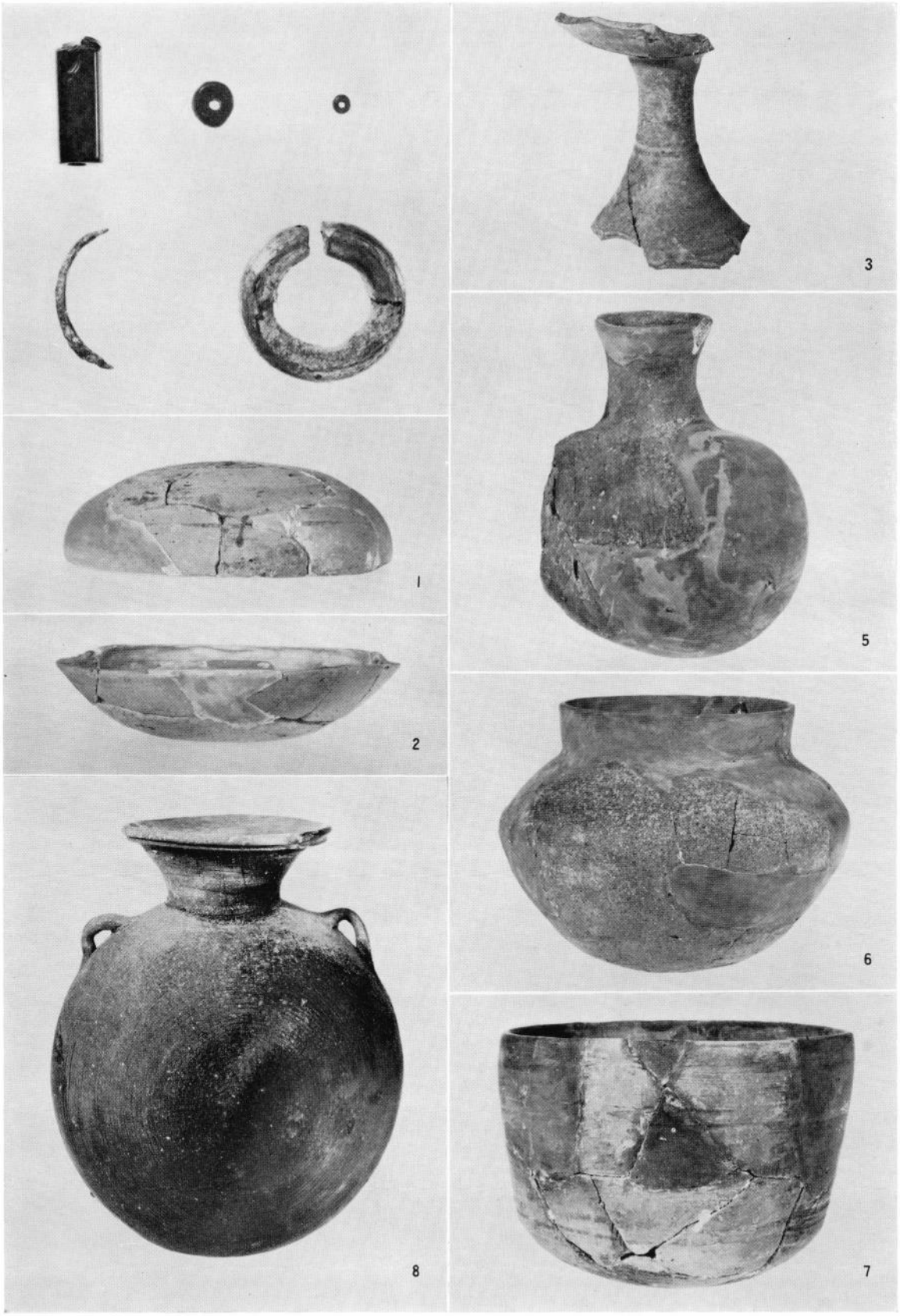


2　7号土壙墓内須恵器杯出土状態

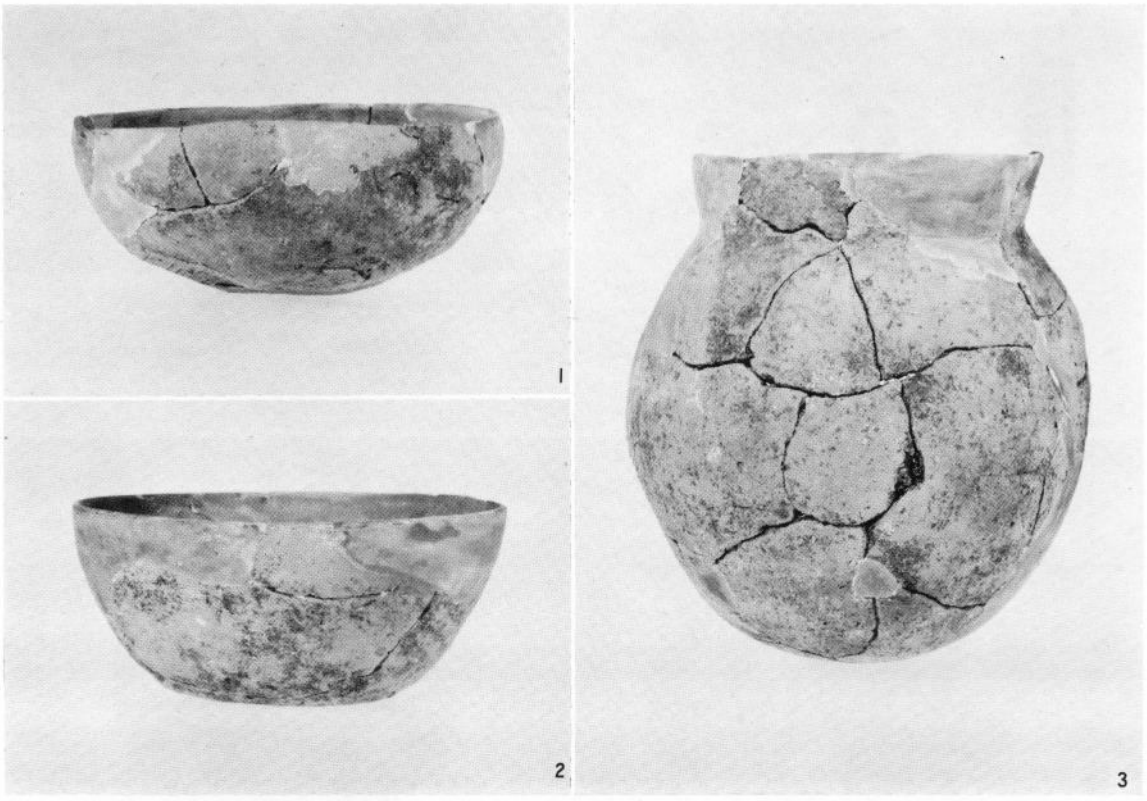
1　8号土壙墓



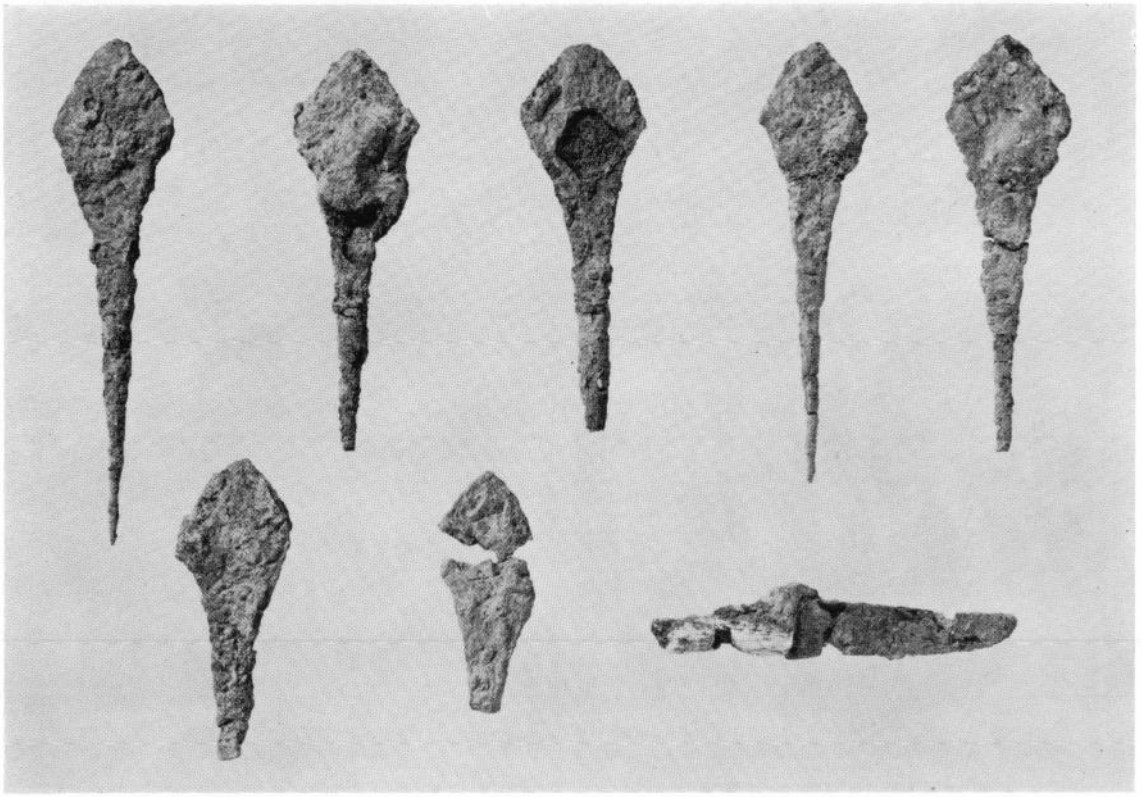
2　9号土壙墓



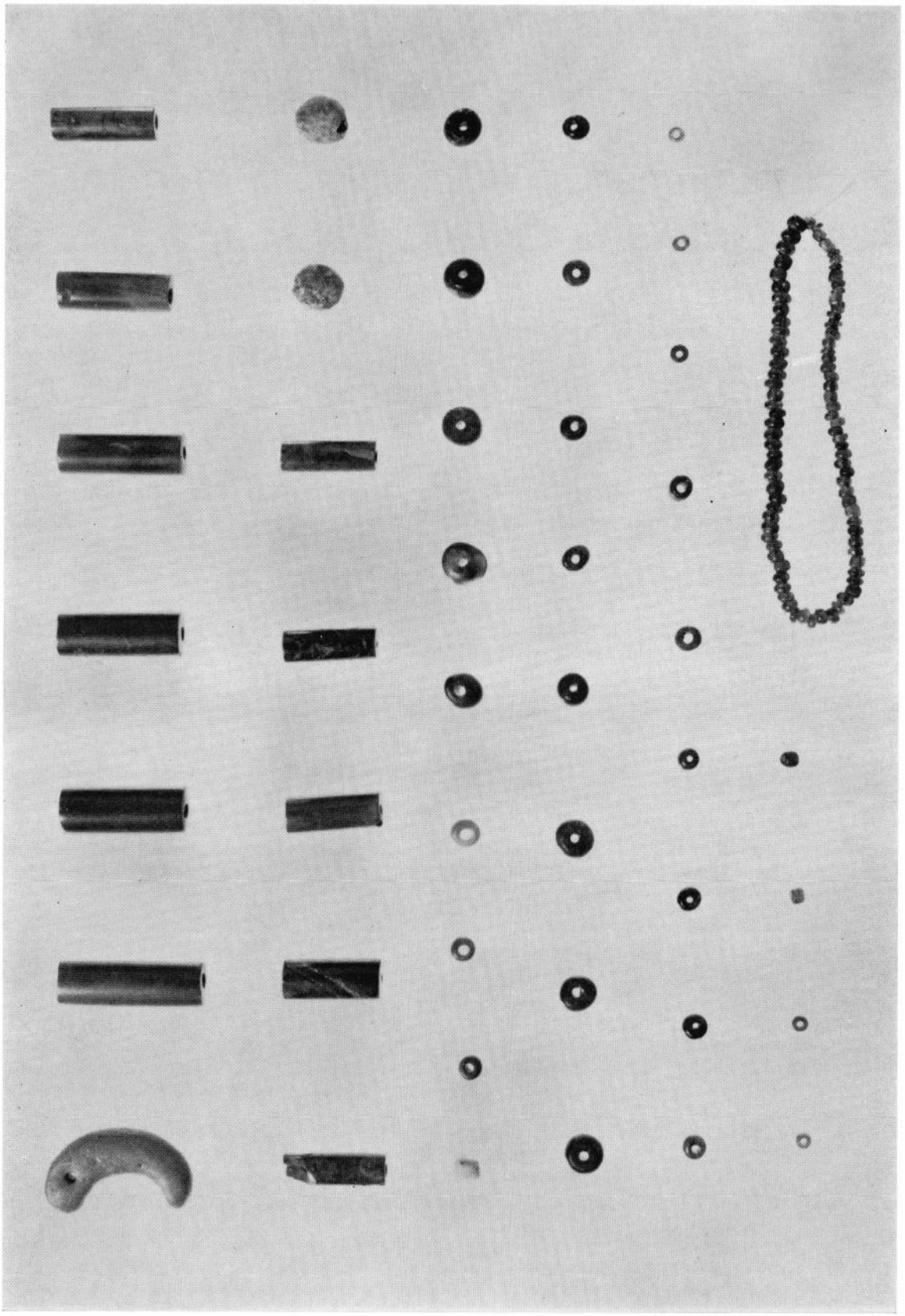
辻田1号墳出土装身具・須恵器



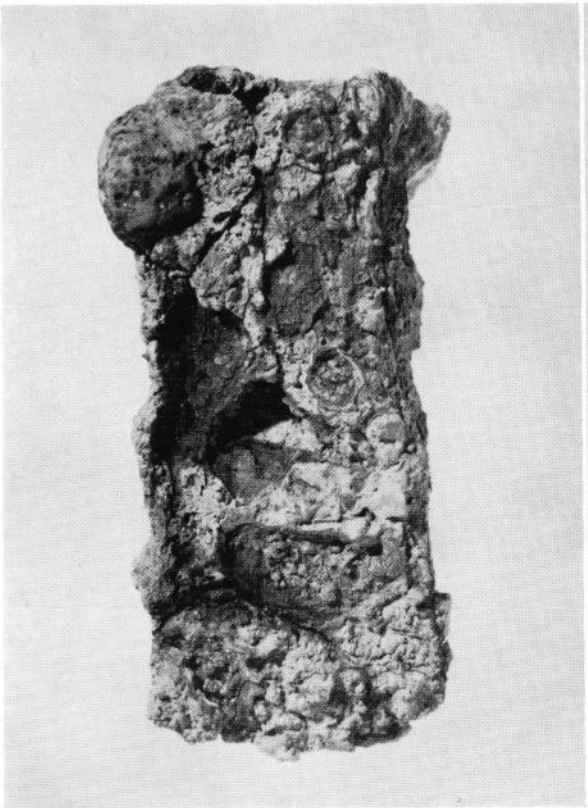
1　辻田1号墳出土土師器

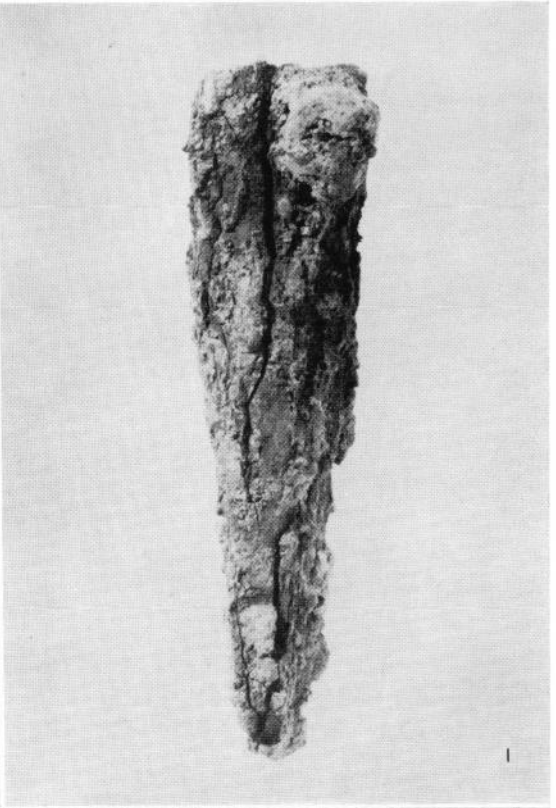


2　辻田2号墳出土鉄器

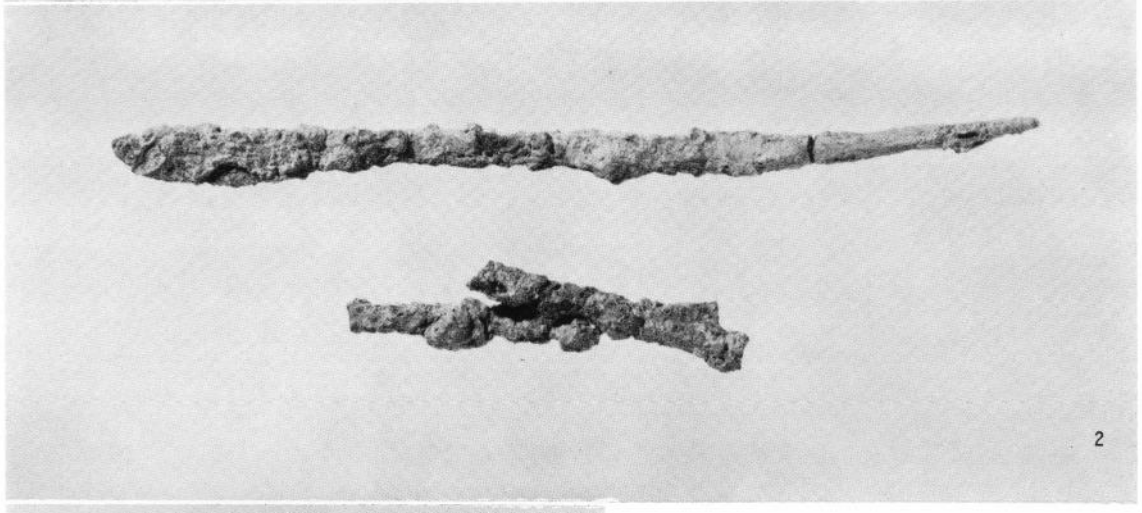


辻田2号墳出土玉類





1



2

3

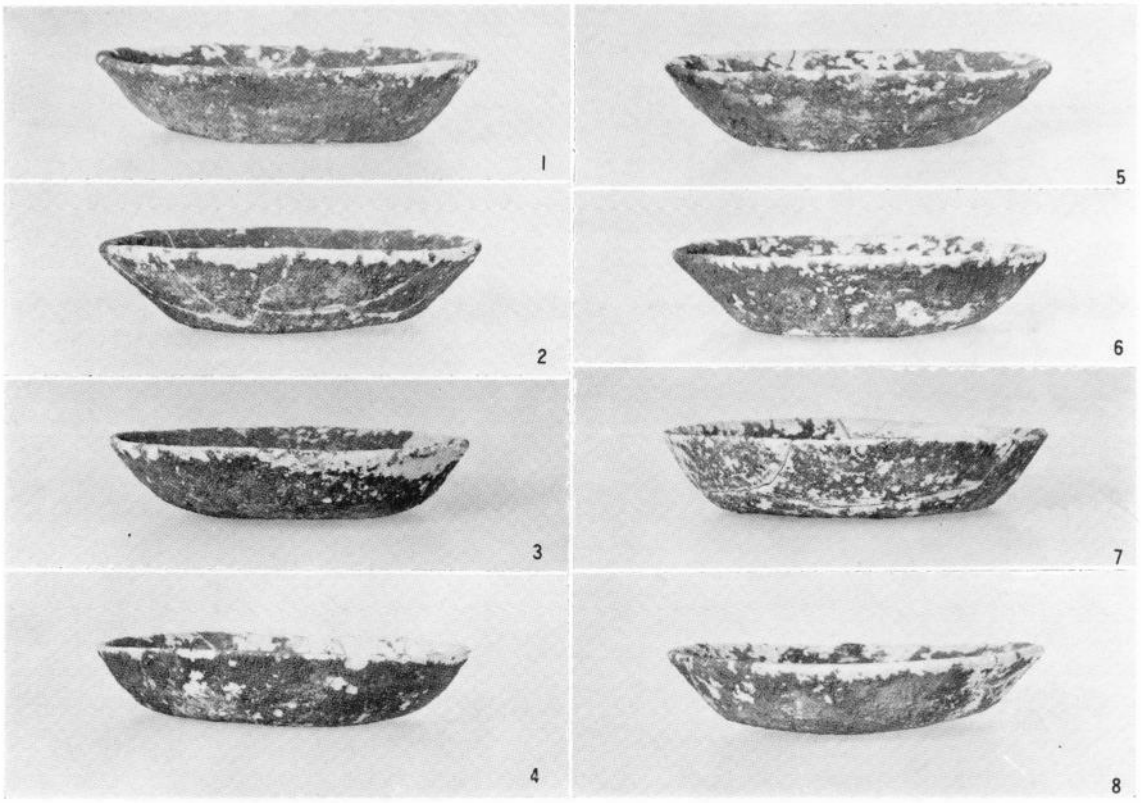
1　辻田３号墳出土鉄斧

2　辻田４号墳出土鉄鏃

3　７号土壙墓出土須恵器

1　10号土壙墓

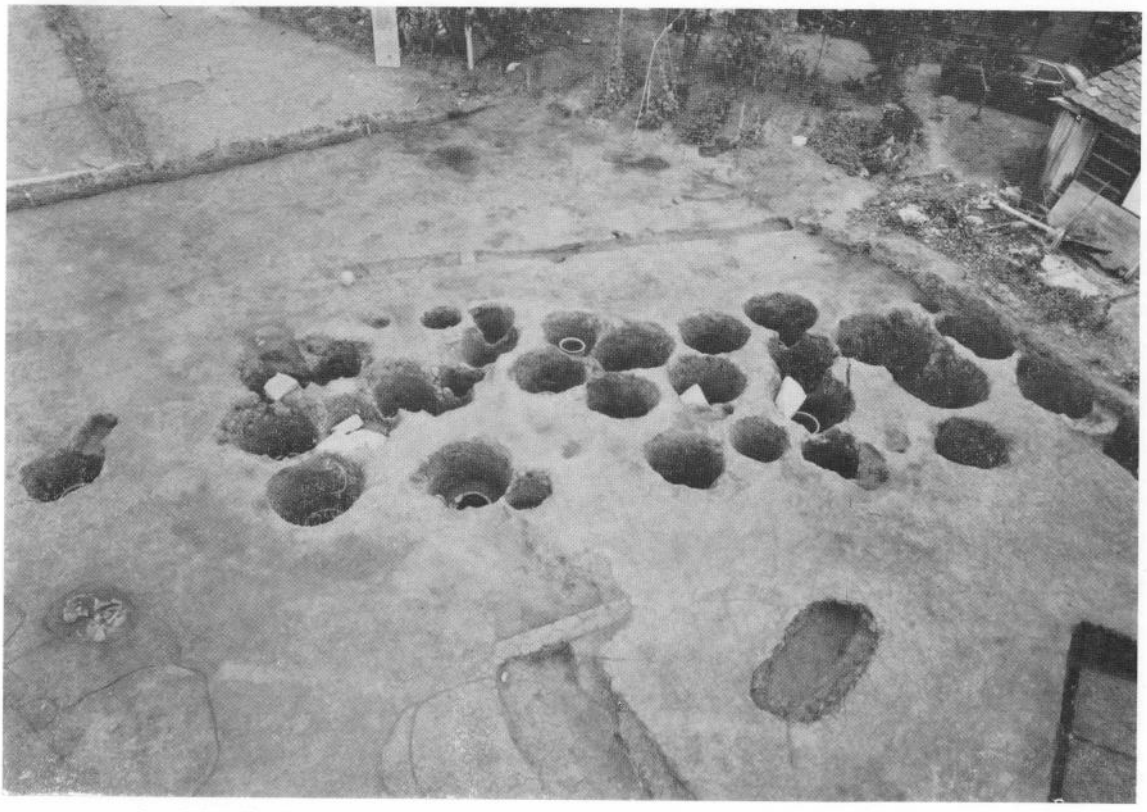
2　10号土壙墓内土師器皿出土状態（南から）



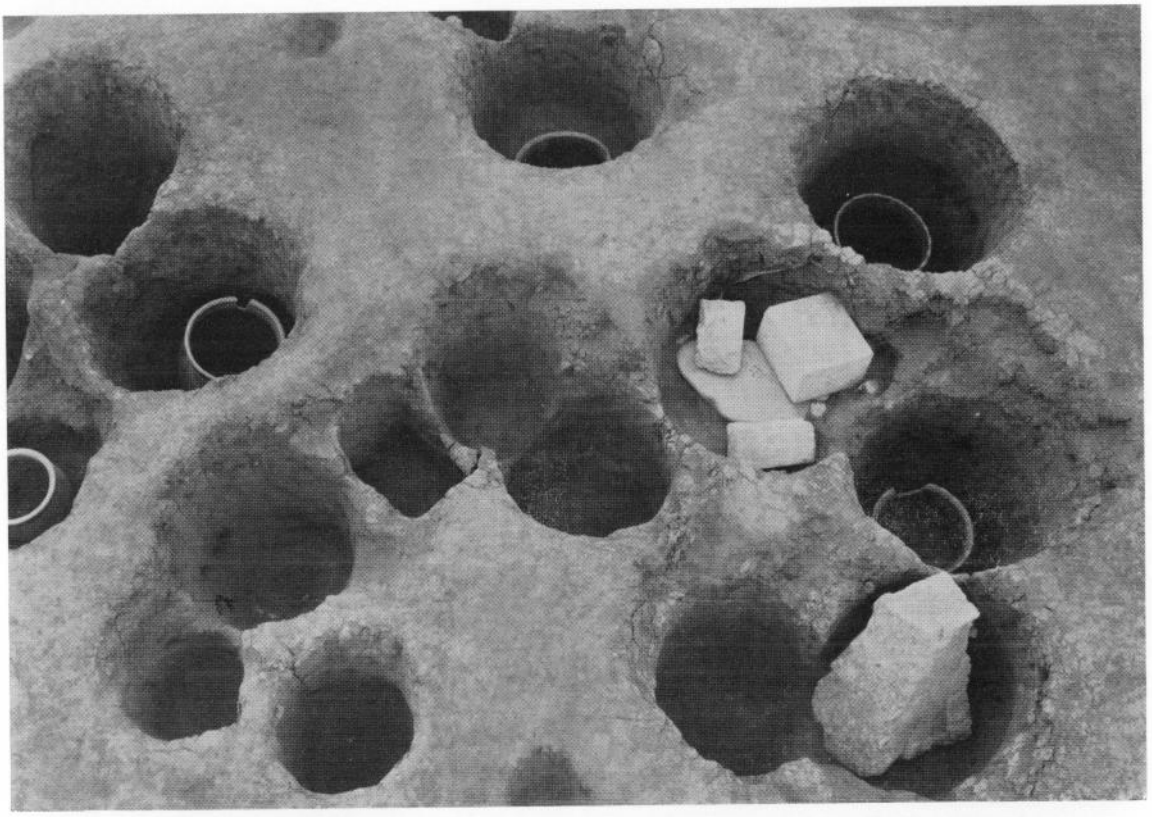
1　10号土壙墓出土土師器皿

2　火葬墓

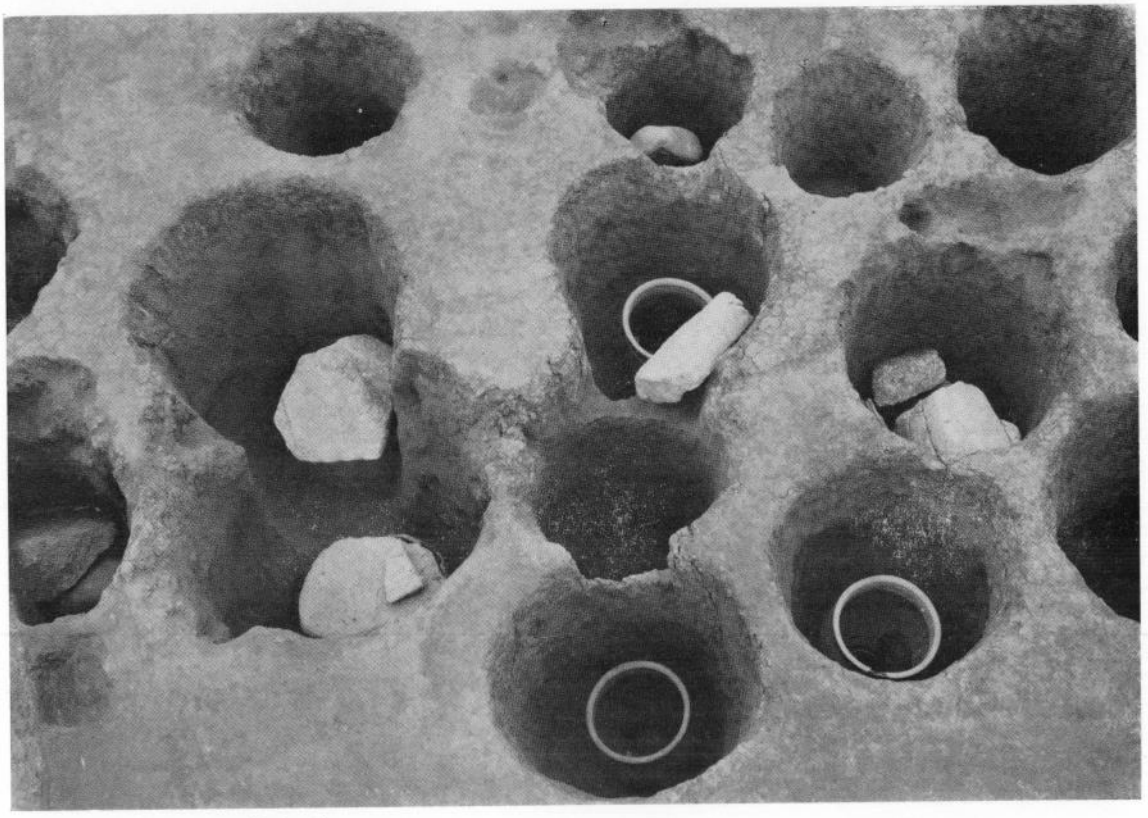
1　近世墓群全景（北から）



2　近世墓群全景（南から）

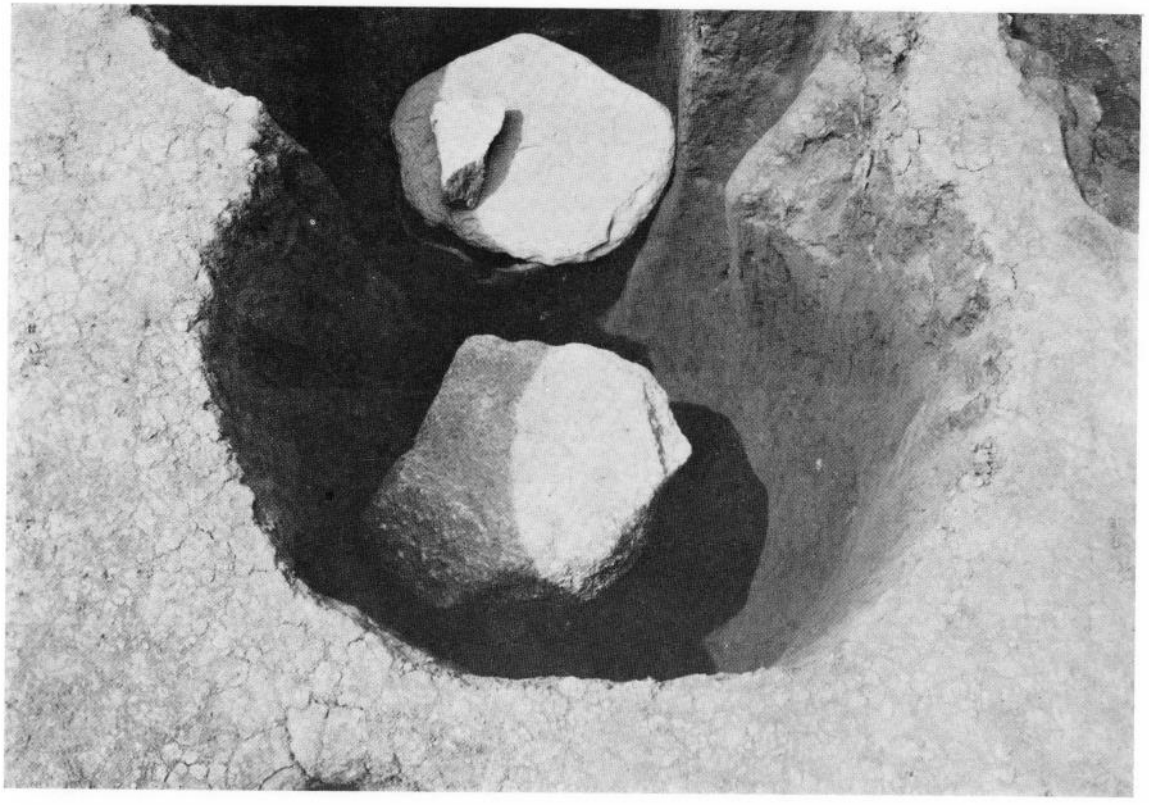


1　近世墓西側一群

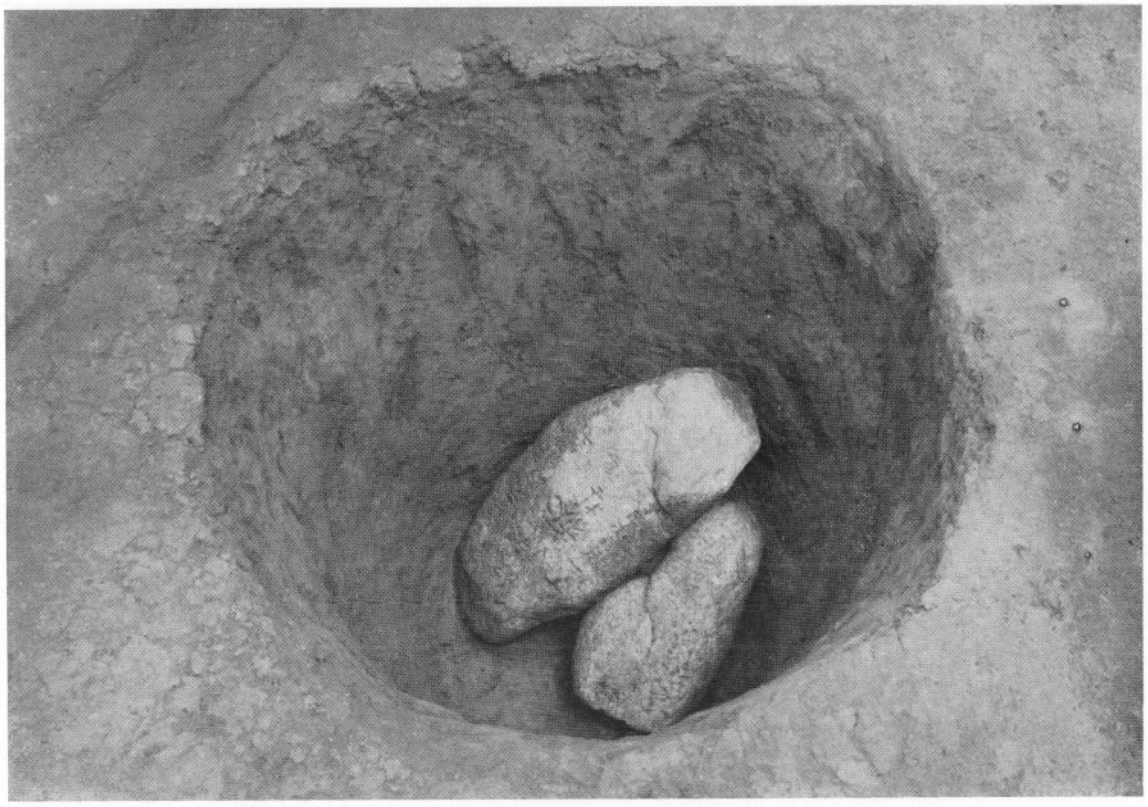


2　近世墓東側一群

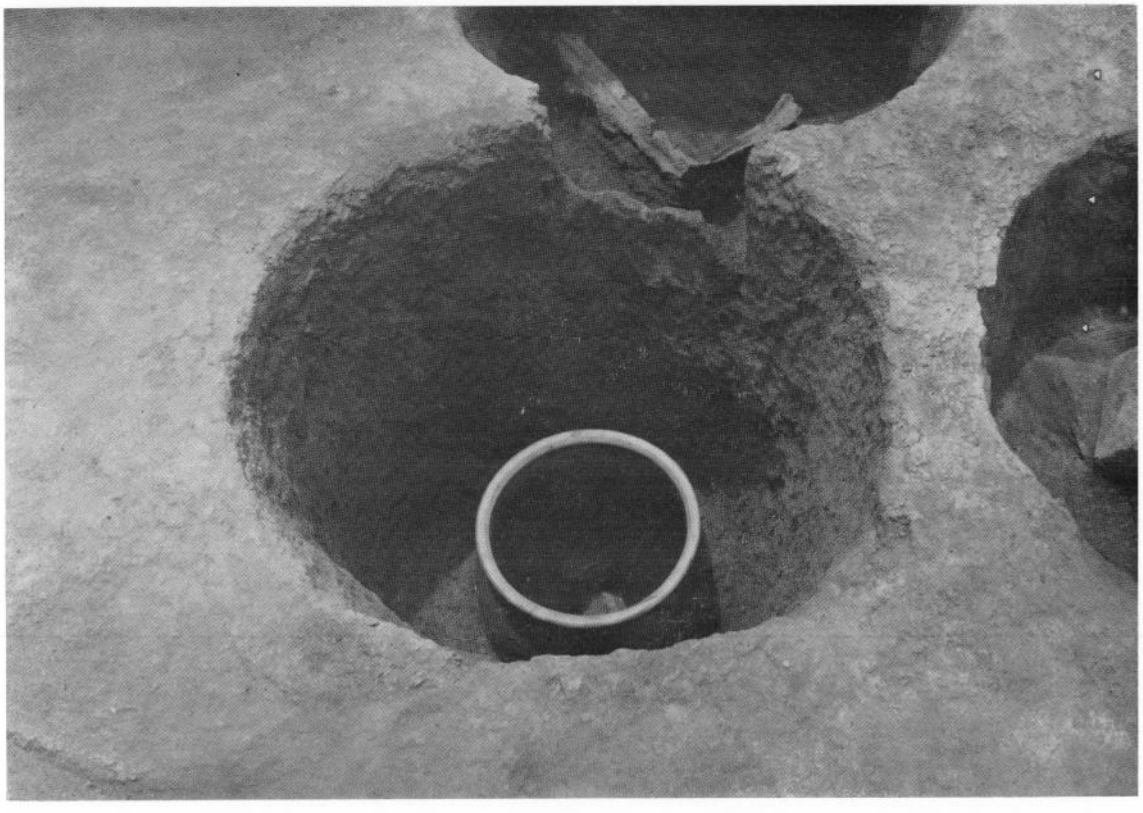
1　1号近世墓



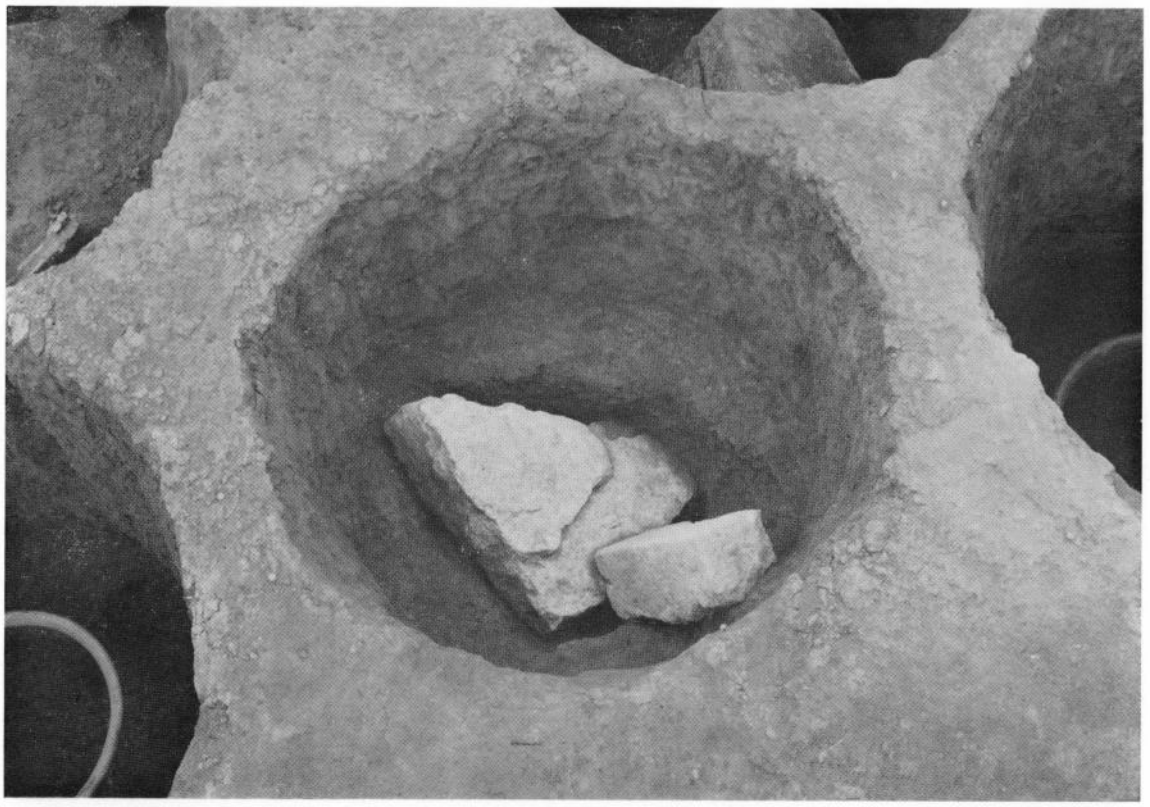
2　2号近世墓



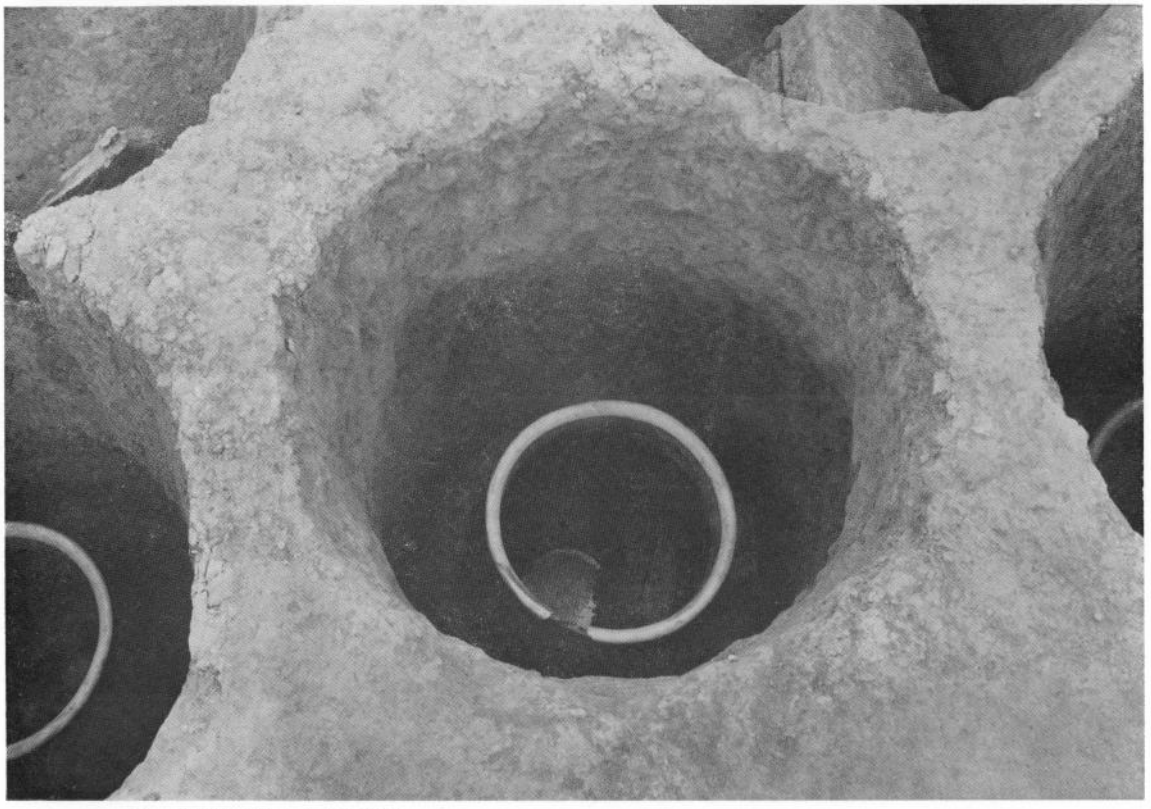
1　3号近世墓



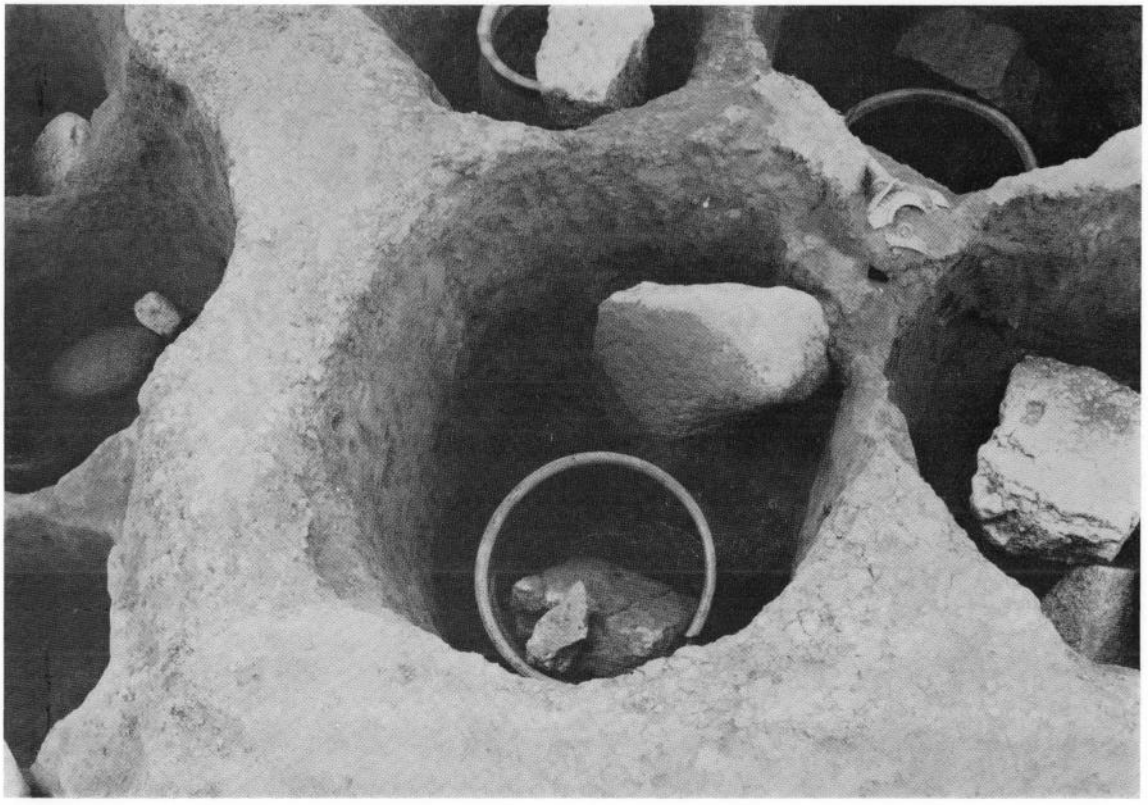
2　4号近世墓



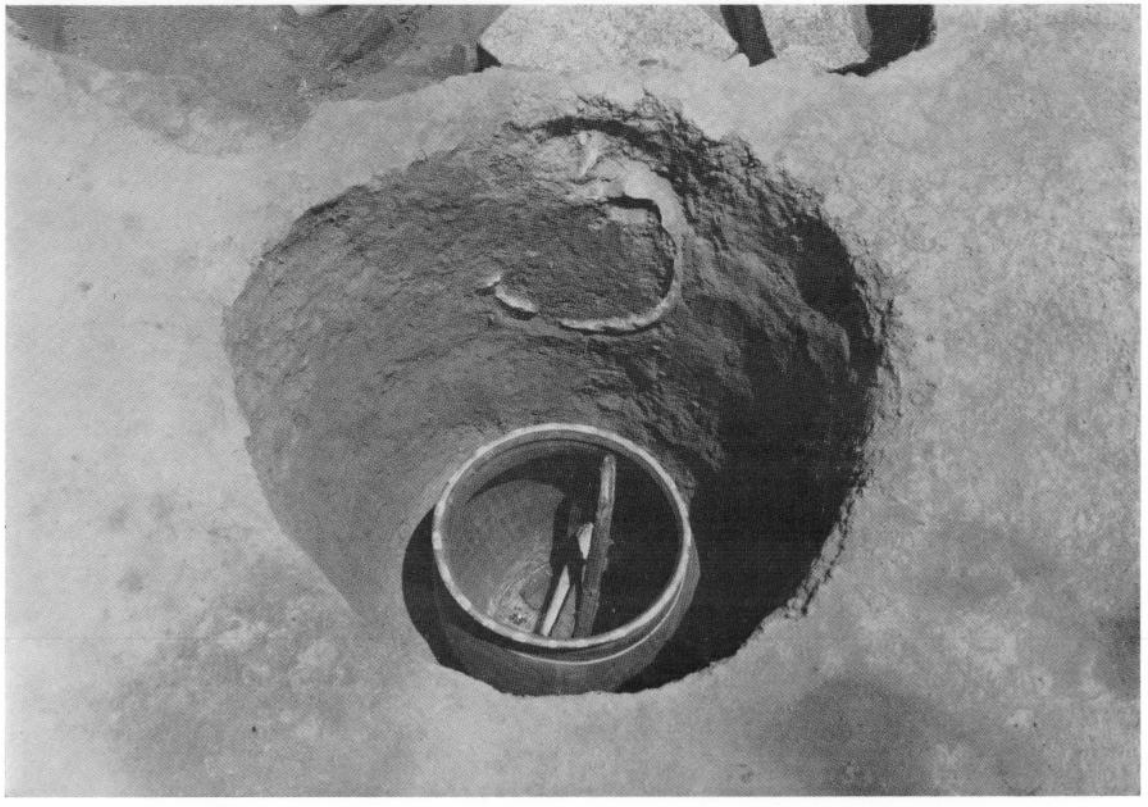
1　5号近世墓



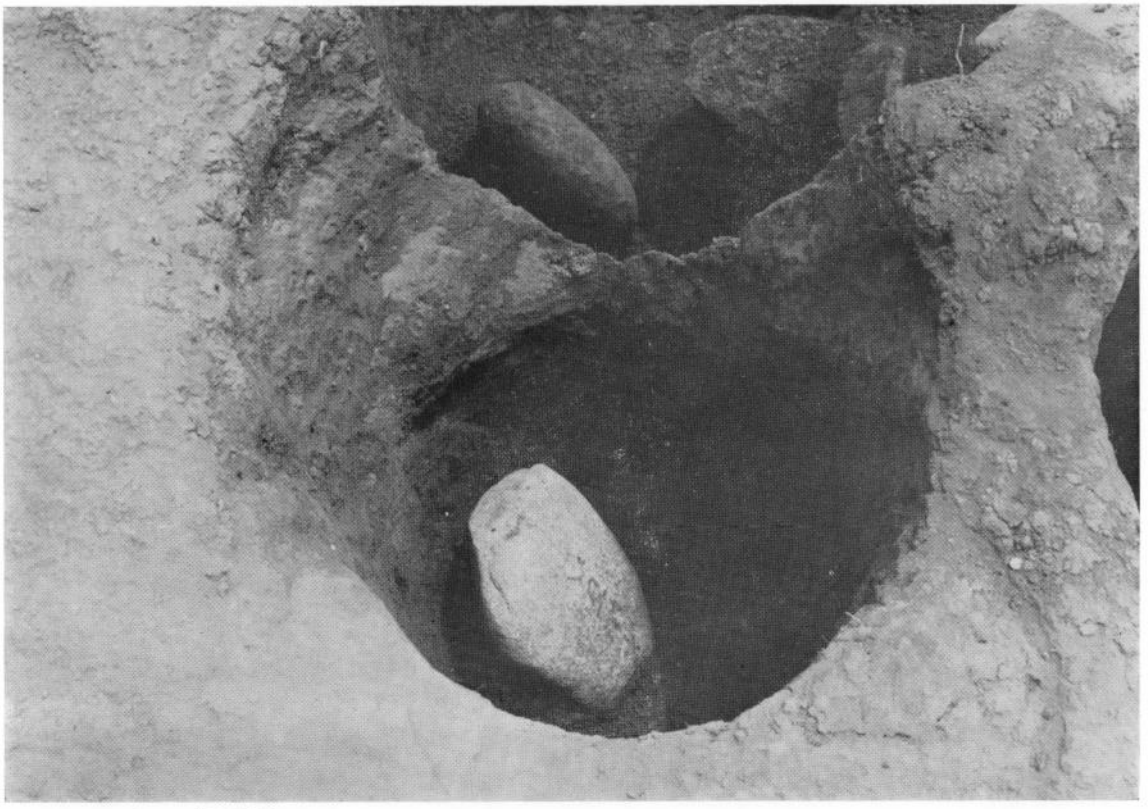
2　石蓋除去後の5号近世墓



1　6号近世墓

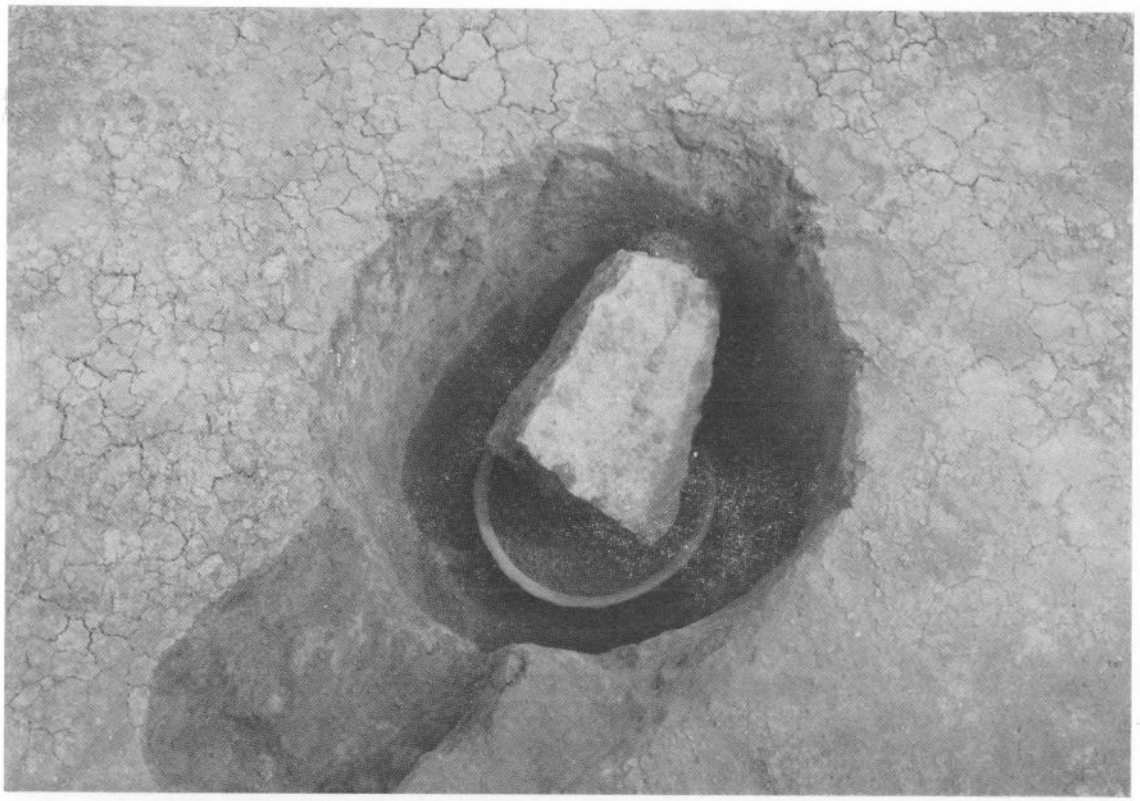


2　8号近世墓

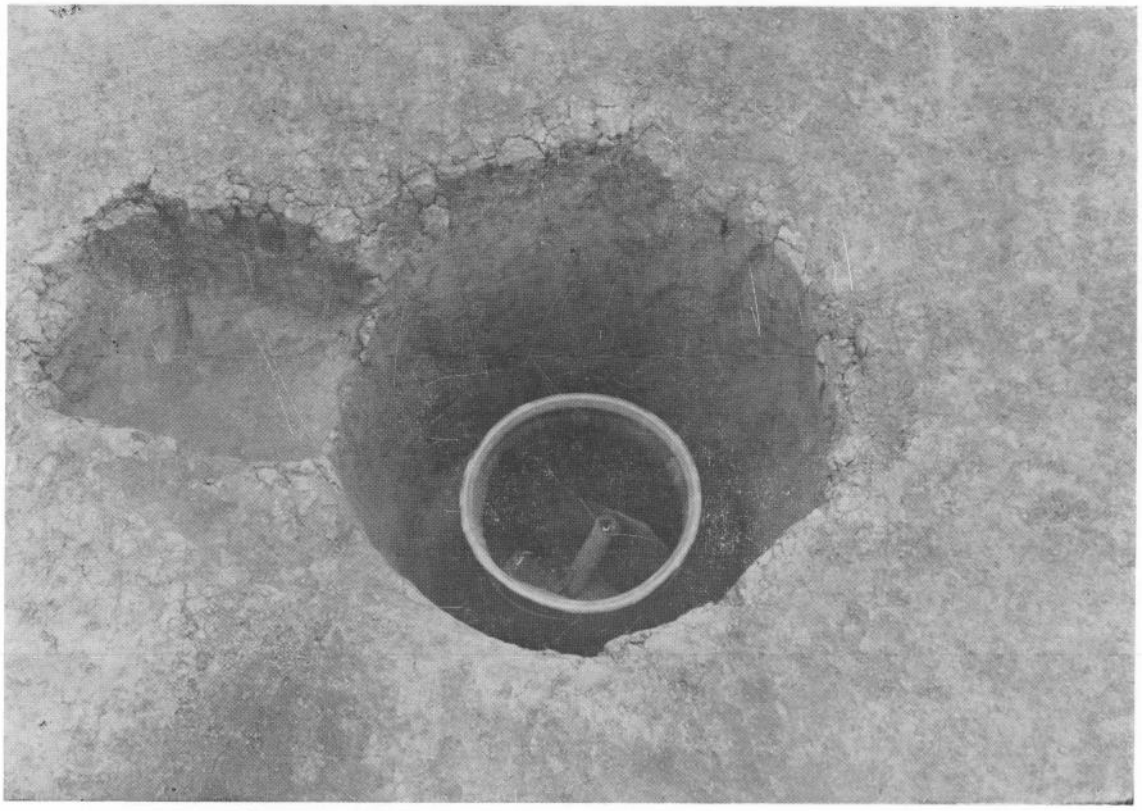


1　9号近世墓

2　12号近世墓

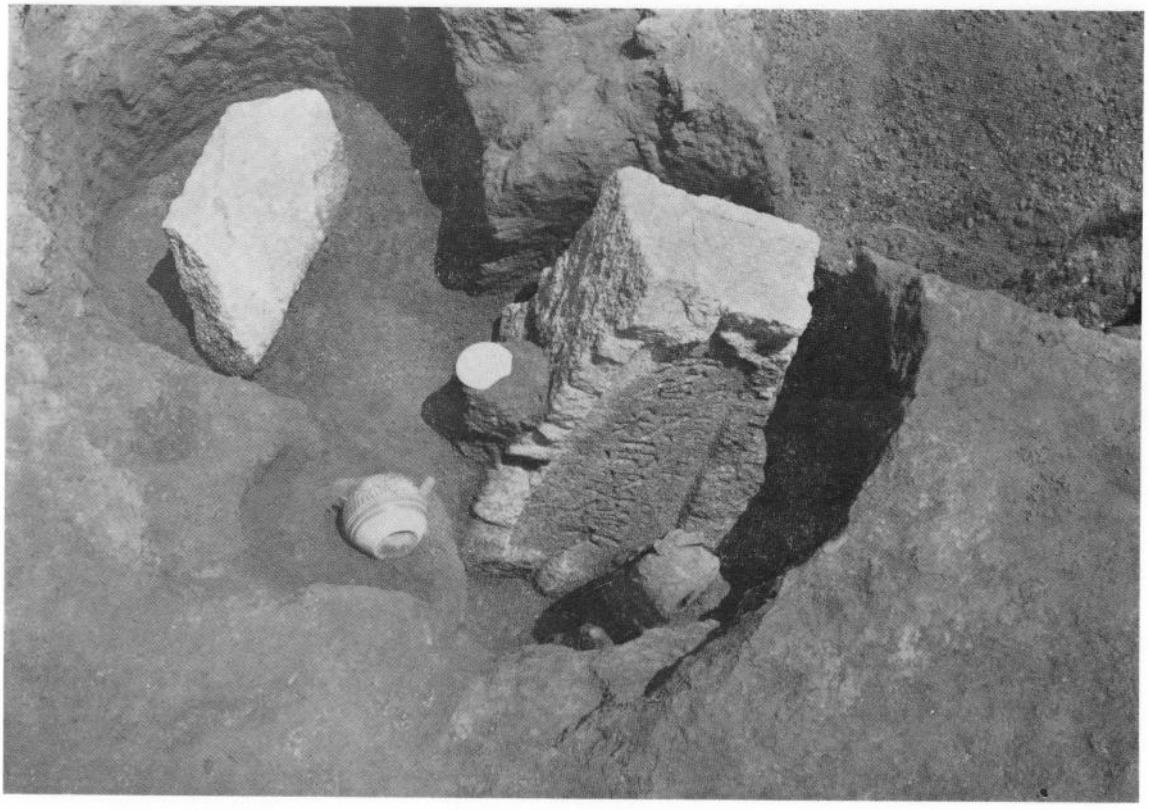


1　13号近世墓



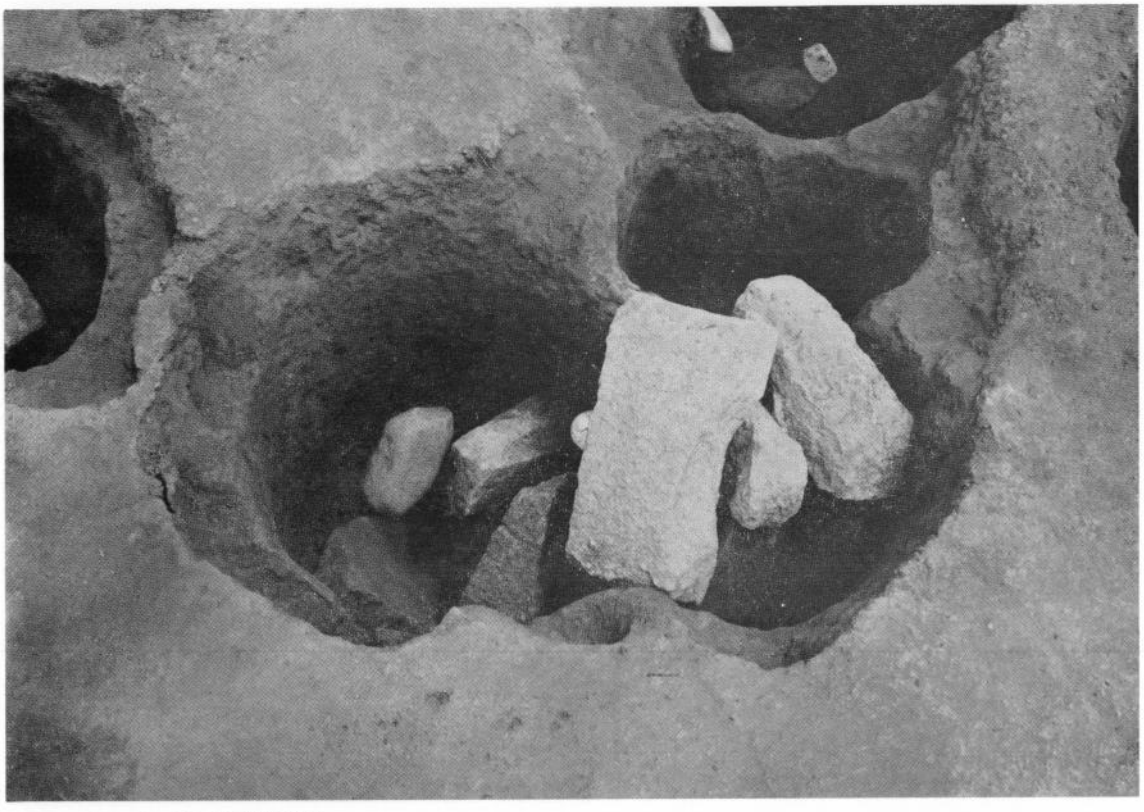
2　平石除去後の13号近世墓

1　11・14号近世墓



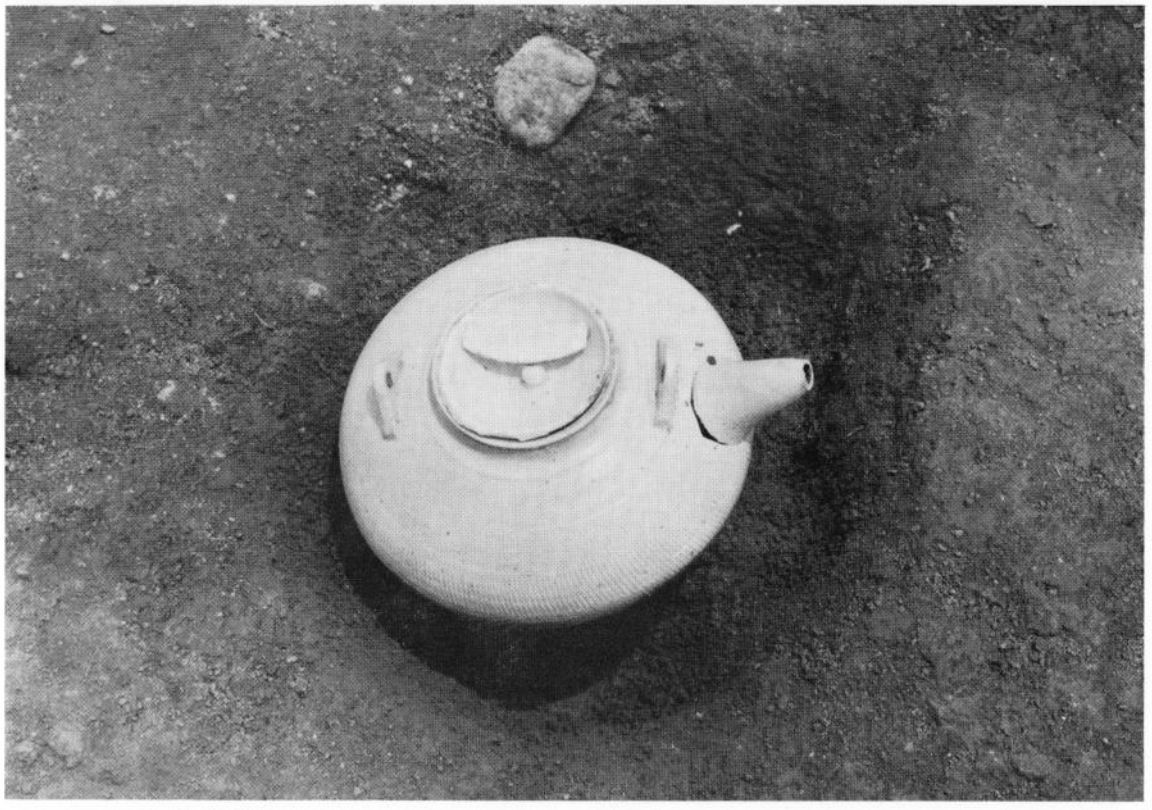
2　14号近世墓

1　17号近世墓



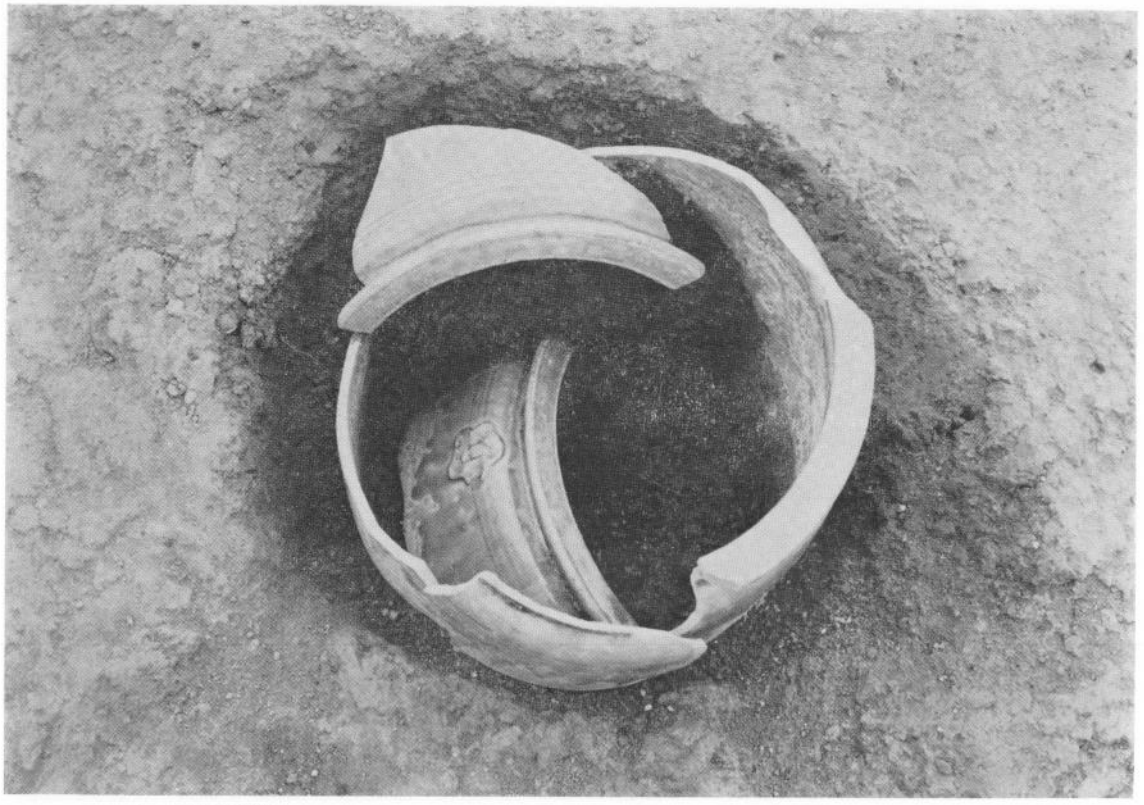
2　20～22号近世墓

1　23号近世墓

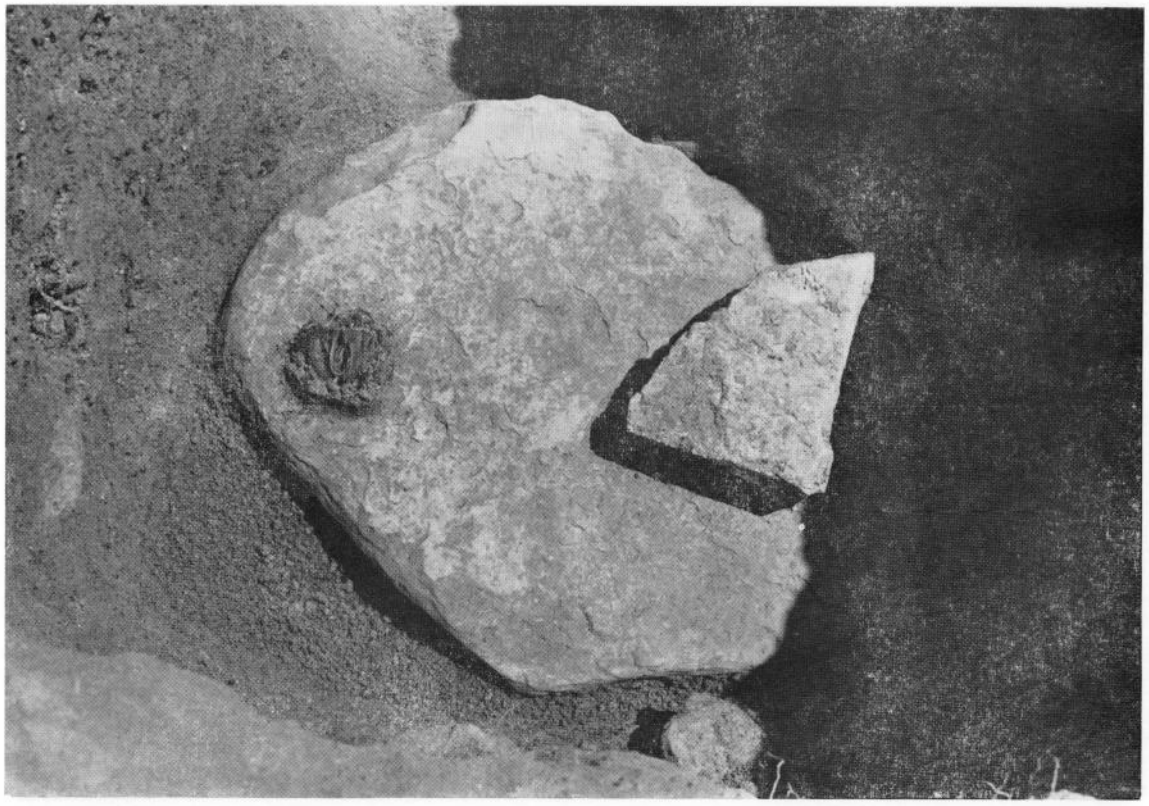


2　25号近世墓

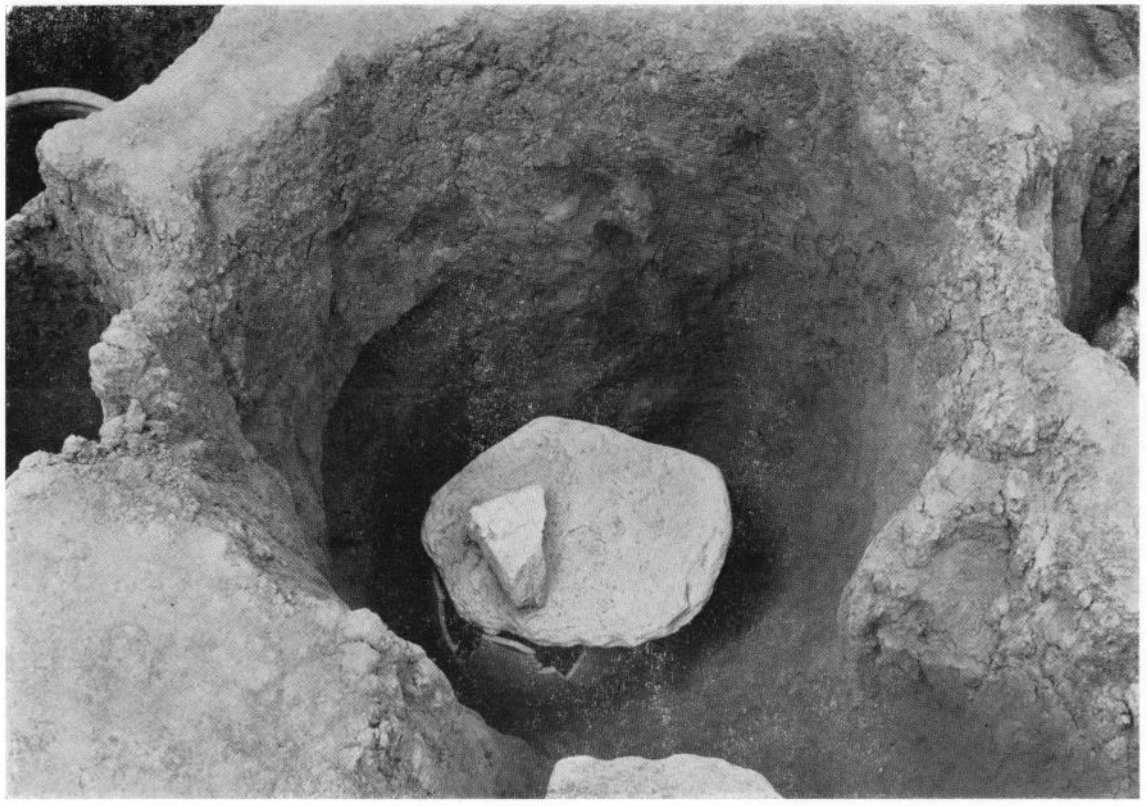
1　26号近世墓



2　27号近世墓

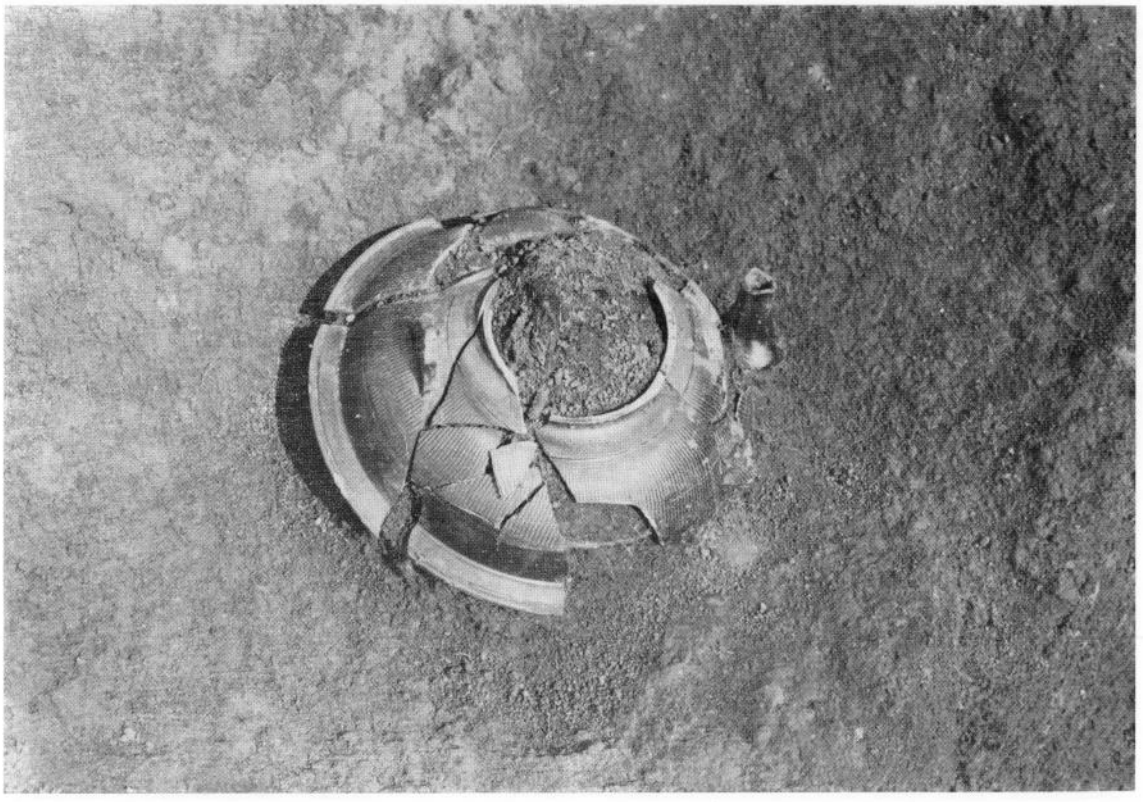


1　28号近世墓蓋石と髪毛



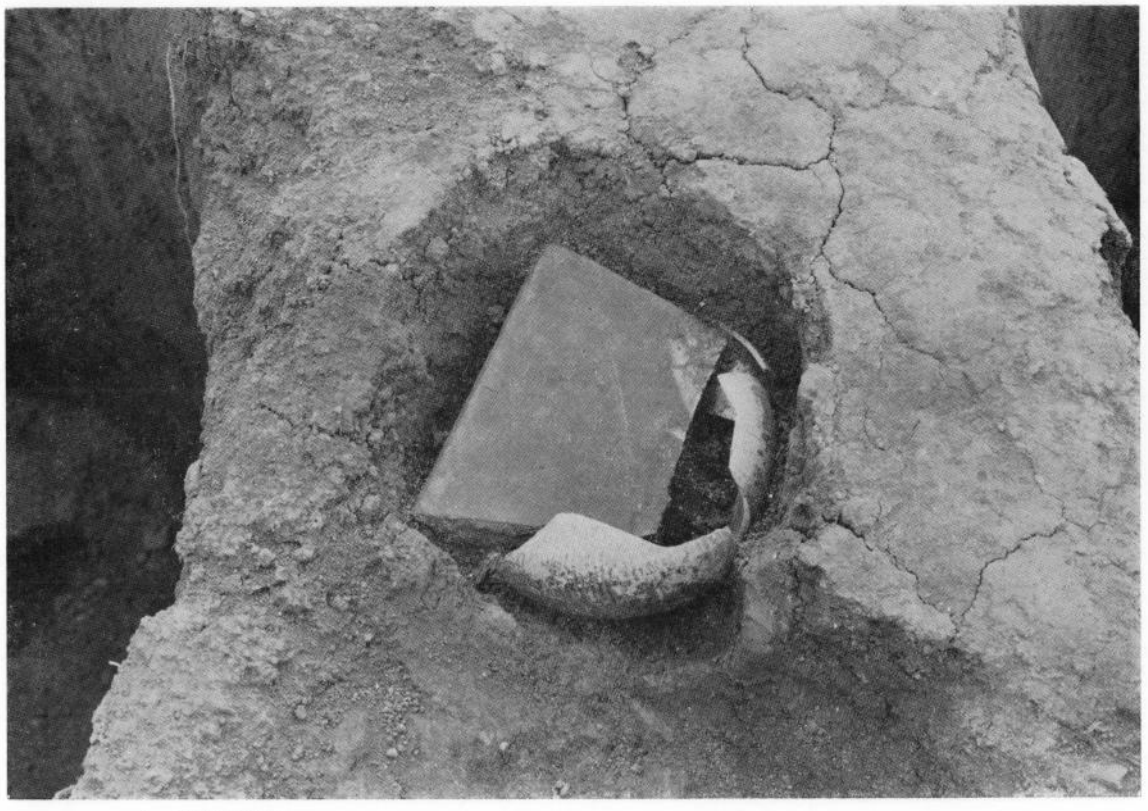
2　28号近世墓

1　29号近世墓

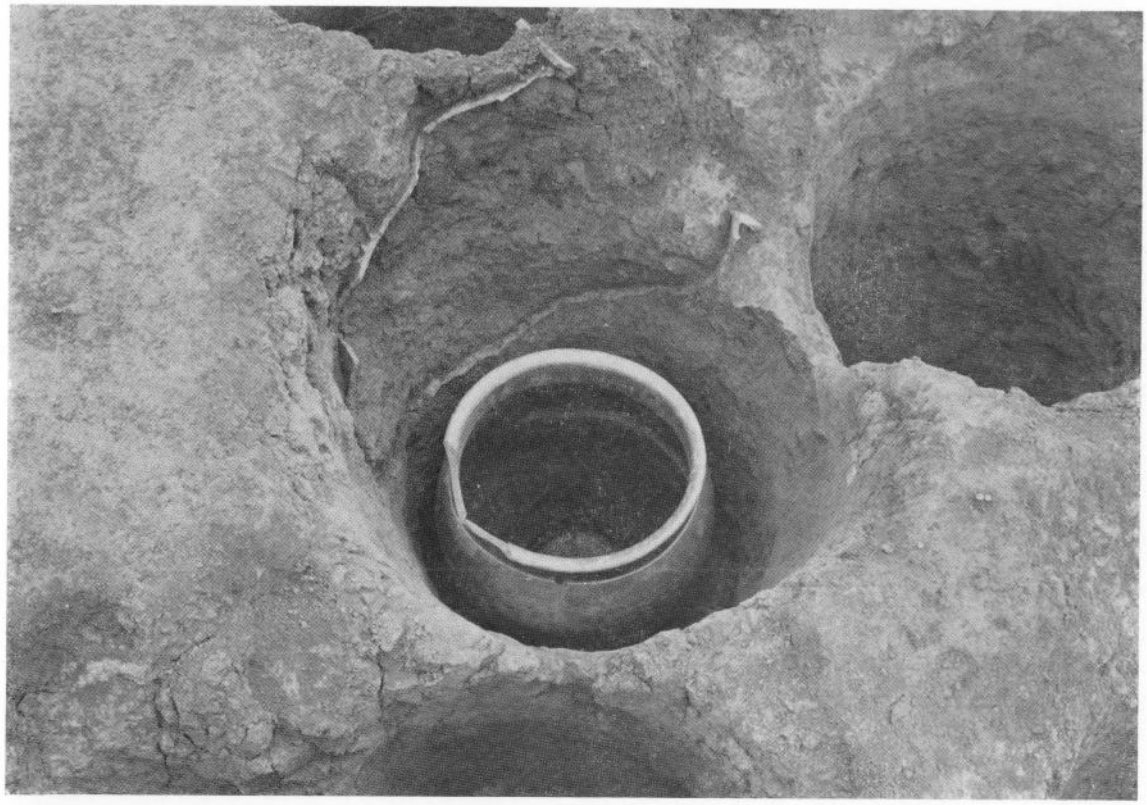


2　33号近世墓

1　34号近世墓



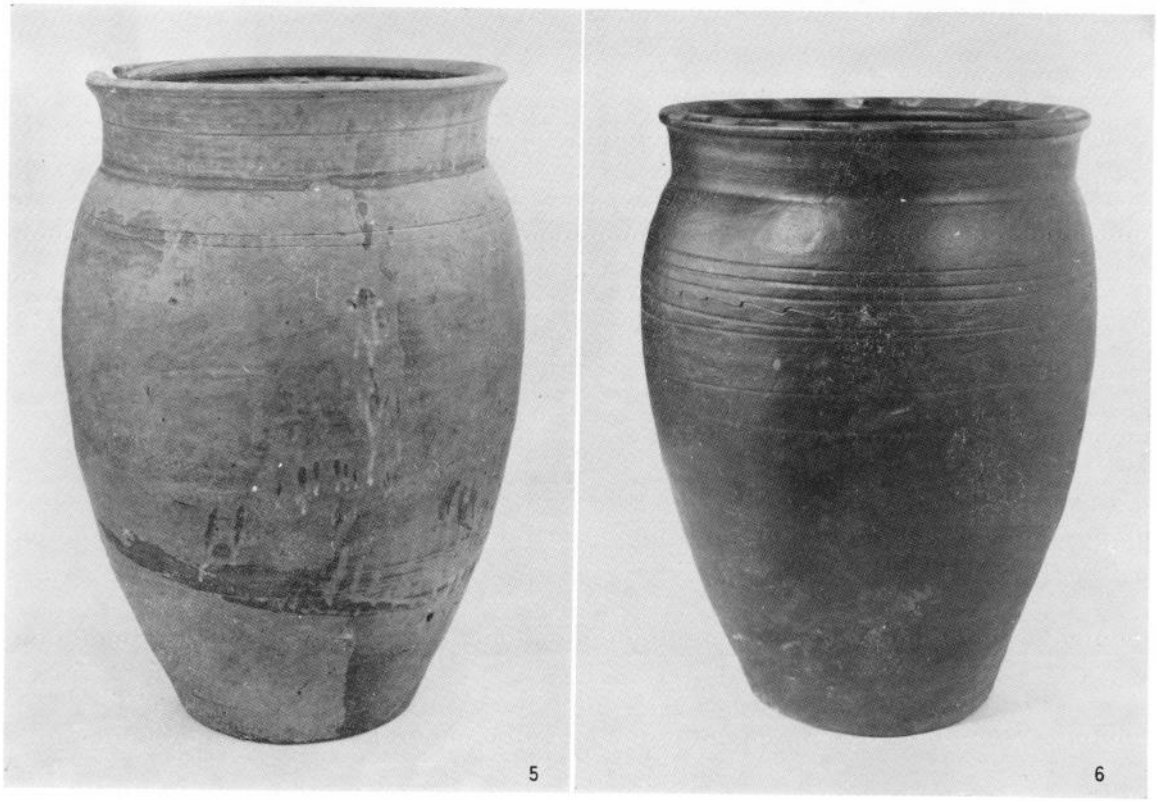
2　35号近世墓



1　37号近世墓

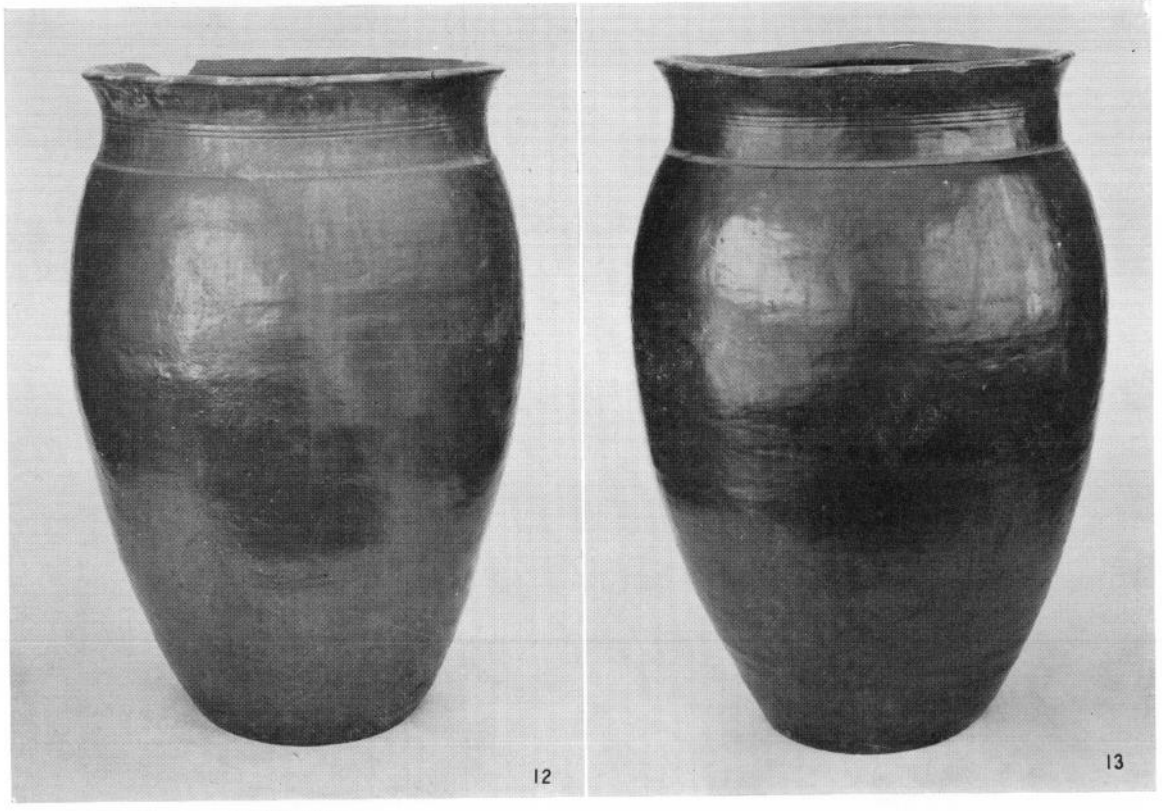
2　39号近世墓

1　2・4号近世甕棺

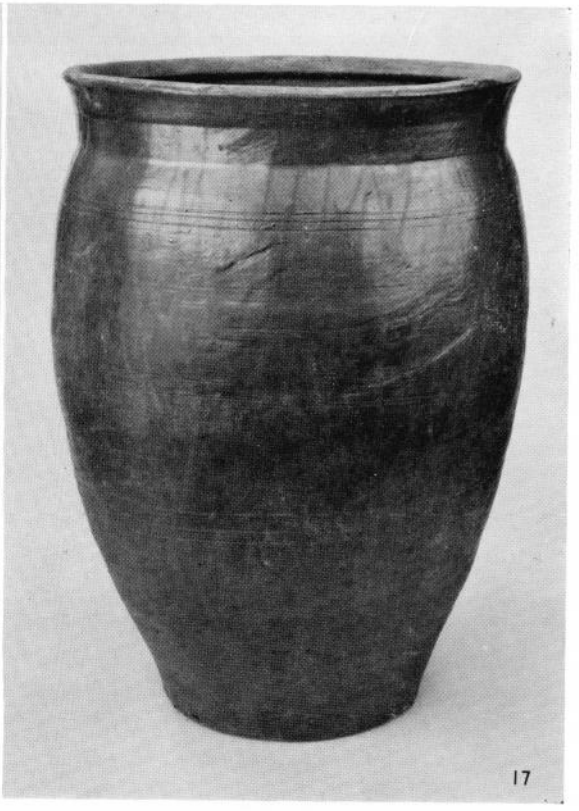


2　5・6号近世甕棺

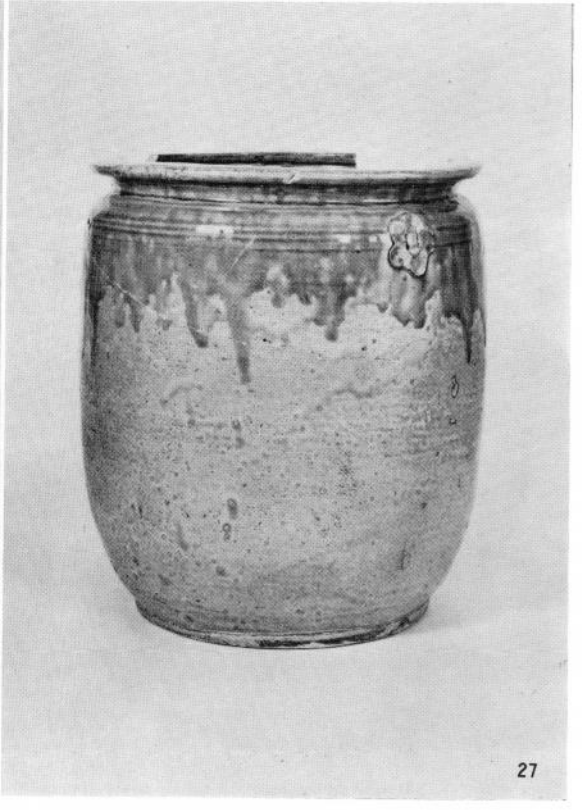
1　7・8号近世甕棺



2　12・13号近世甕棺

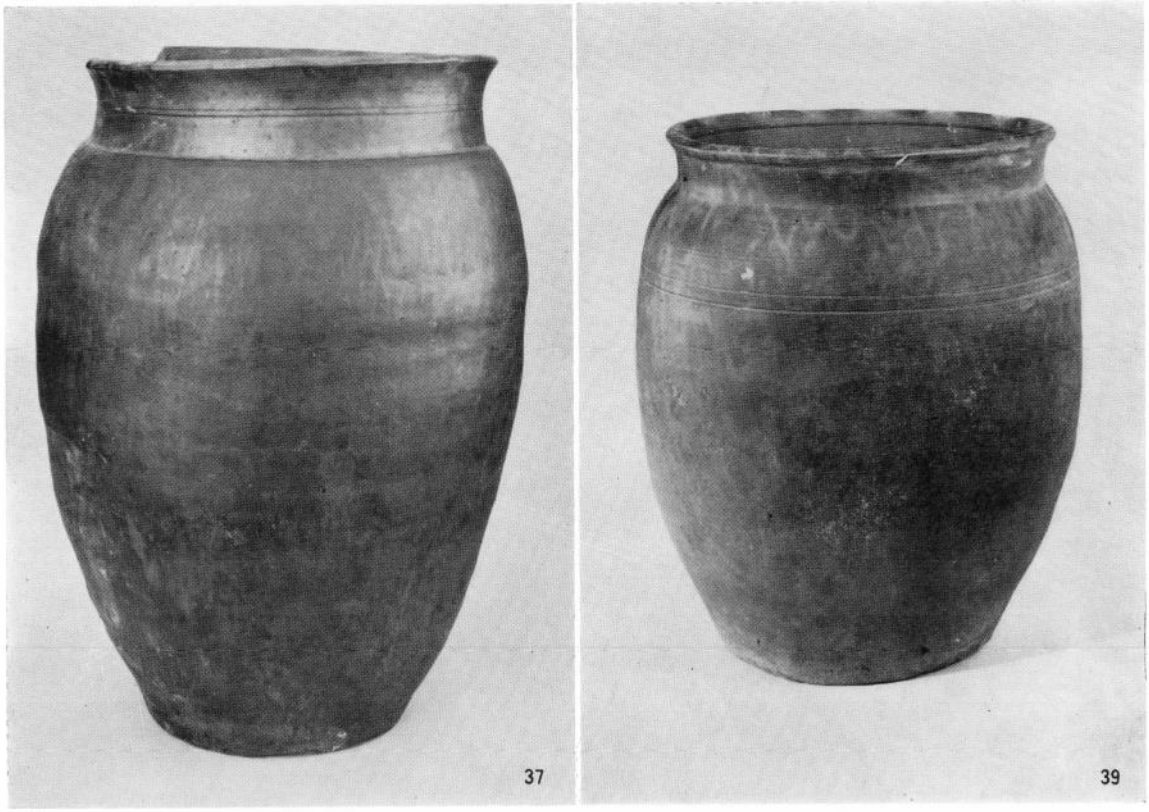


1　16・17号近世甕棺



2　18・27号近世甕棺

1　28・31号近世甕棺

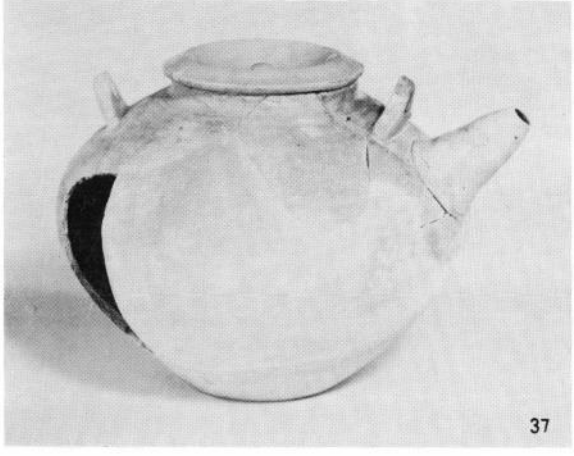


2　37・39号近世甕棺

25

26

29


37

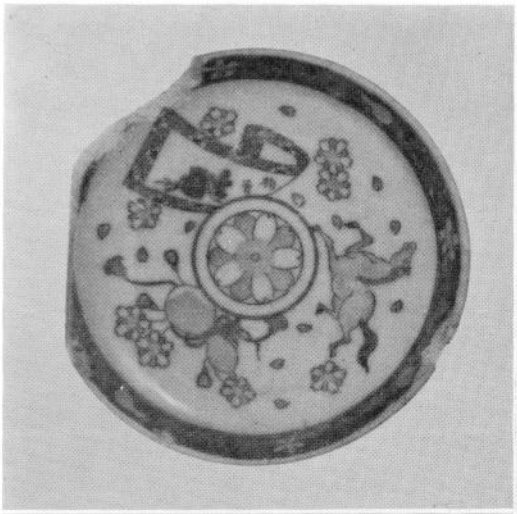
33

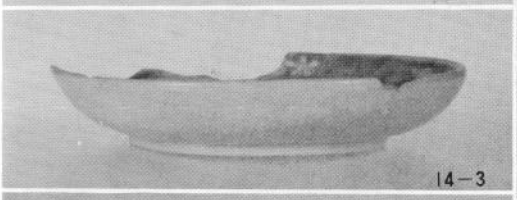
38

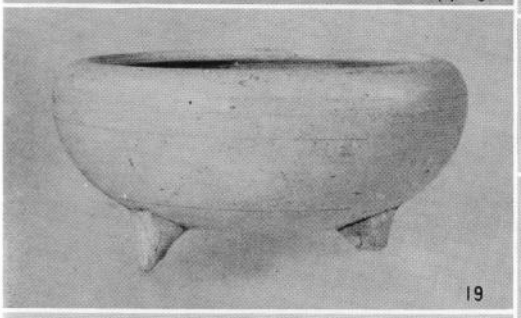
14－1

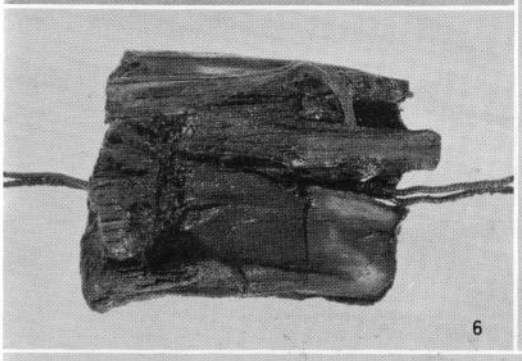
14－2

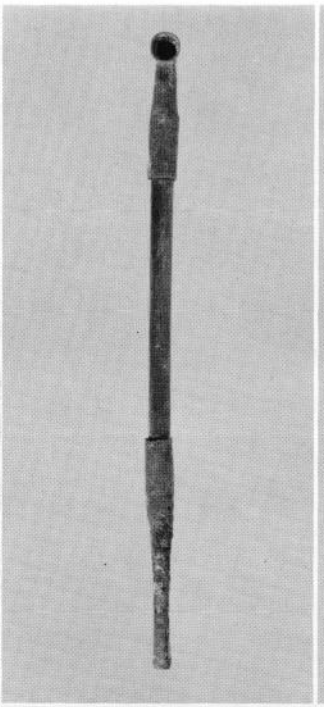
後産埋納器・供献品

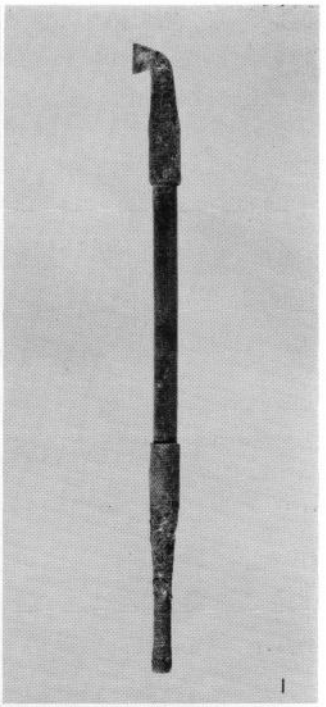


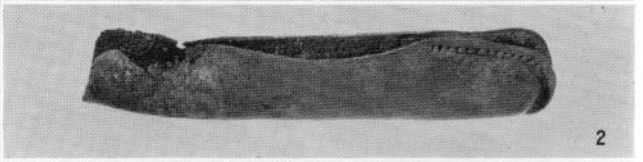


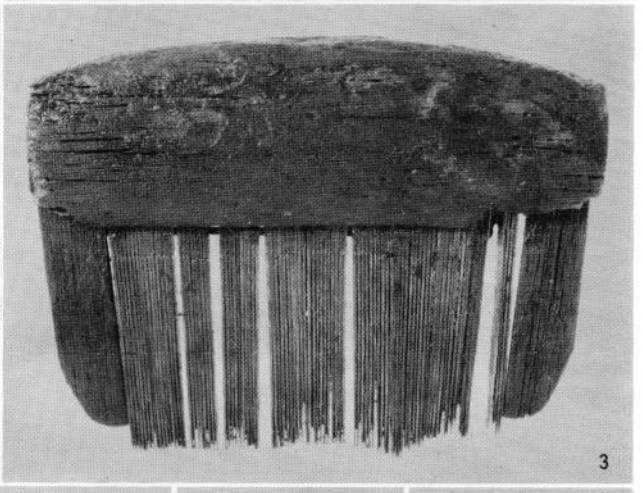


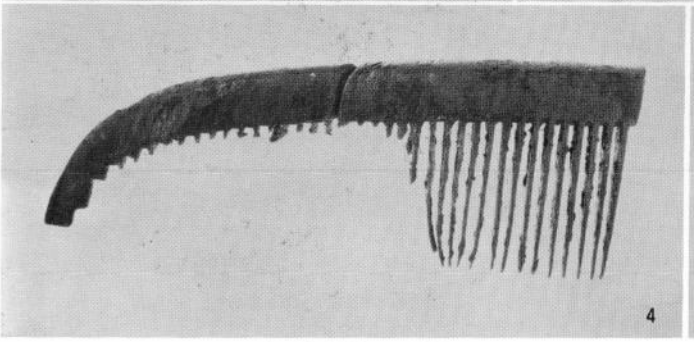


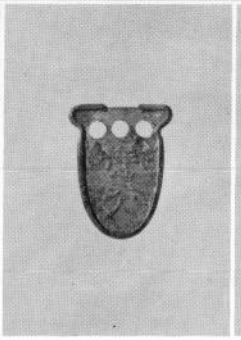


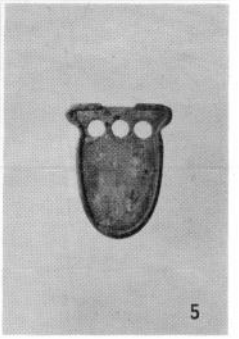




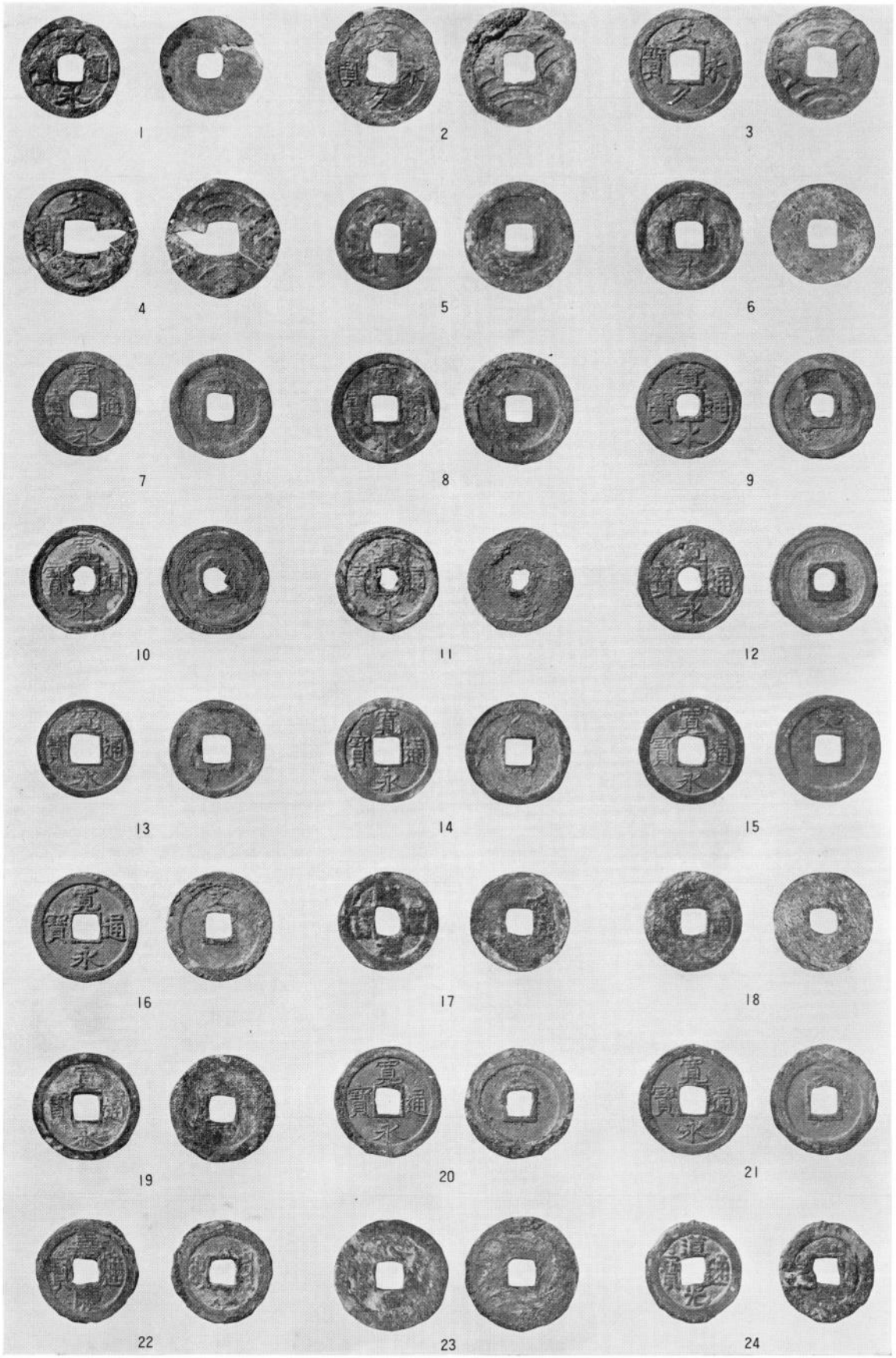




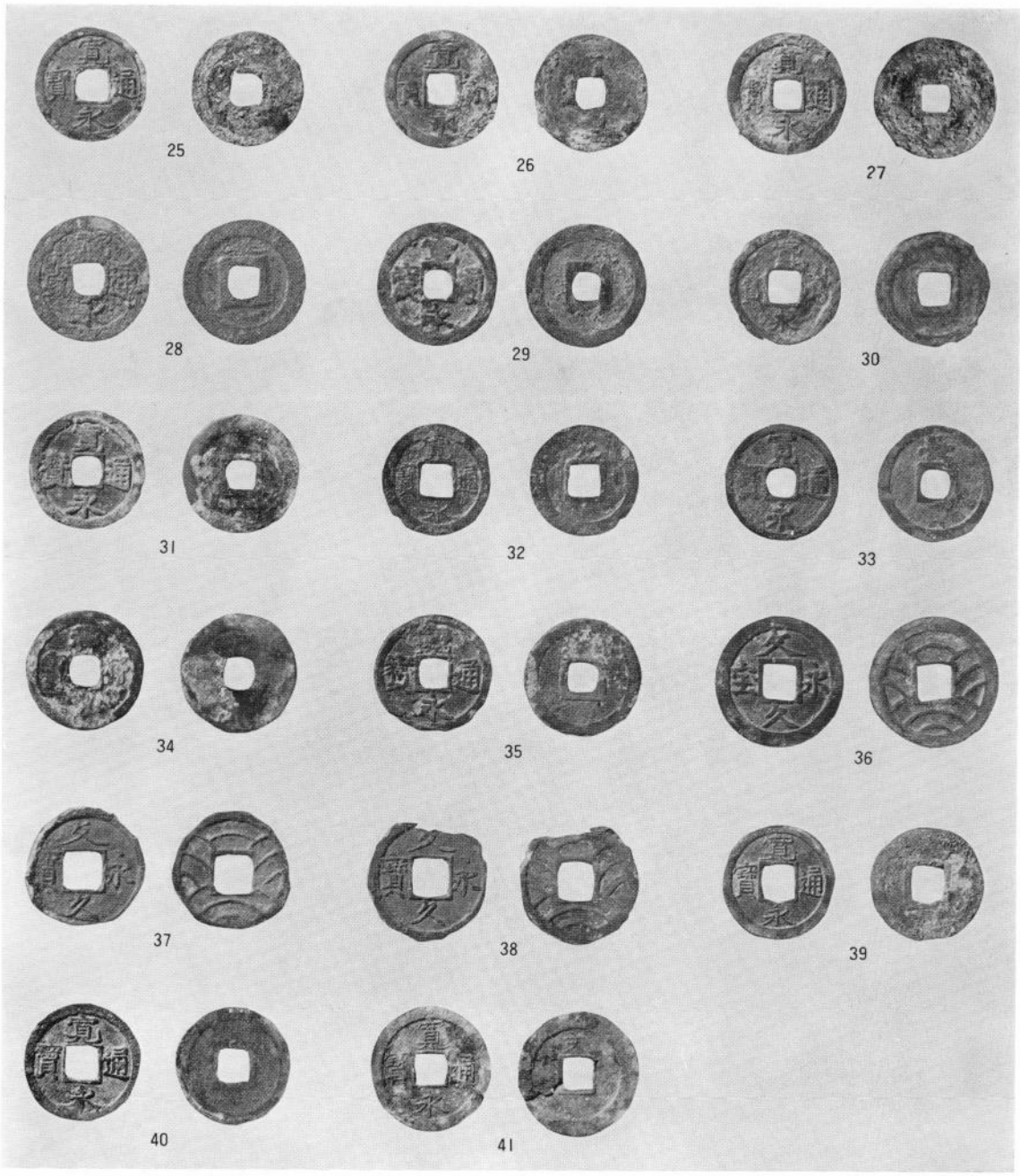




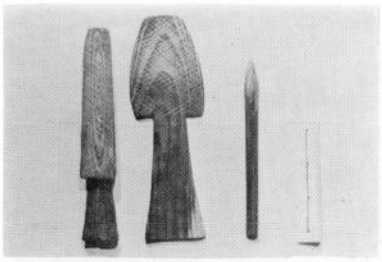
近世墓出土の供献品・副葬品



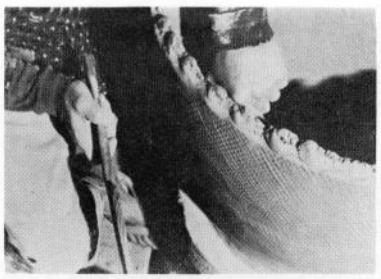
近世墓出土の古銭（1）



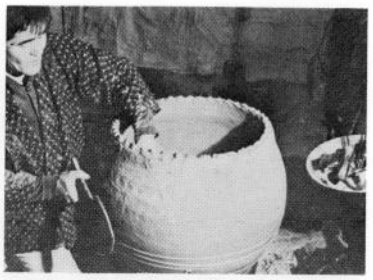
近世墓出土の古銭（2）



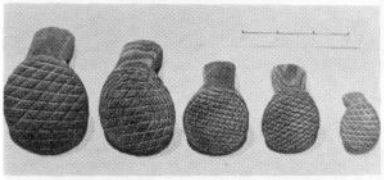
外側の叩き道具



製作過程Ⅵ（叩き）



製作過程Ⅻ（叩き）



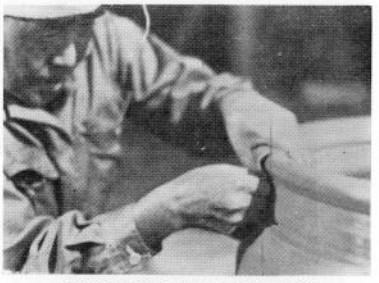
内側の叩き道具

製作過程Ⅶ（成型）

製作過程ⅩⅣ（成型）

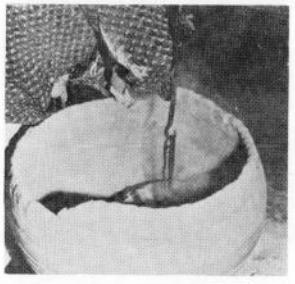
製作過程ⅰ（底作り①）

製作過程Ⅸ（計測）



製作過程ⅩⅤ（ふち作り①）

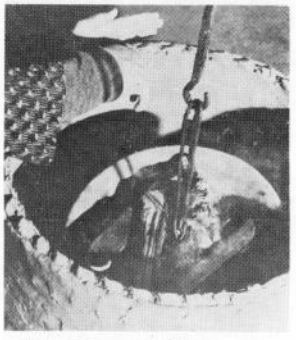
製作過程Ⅲ（輪積み）



製作過程Ⅹ（輪積み）

製作過程ⅩⅥ（生製品移動）

製作過程Ⅴ（輪積み）

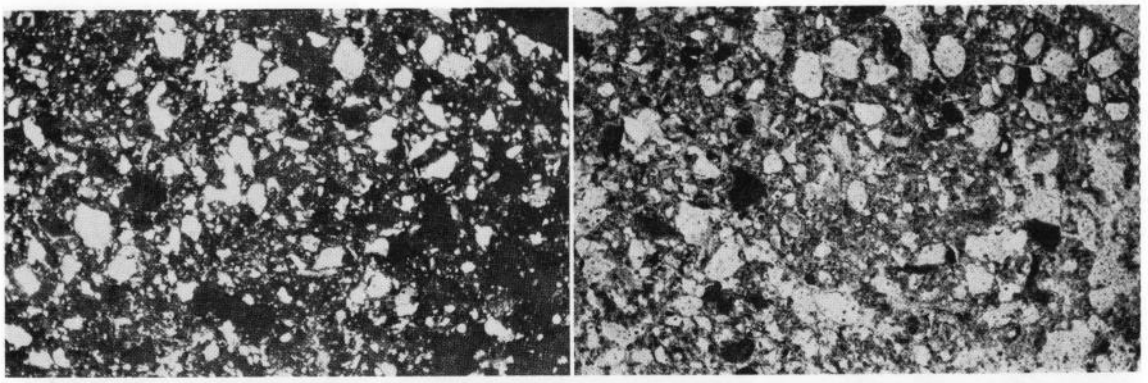


製作過程Ⅺ（小付け）

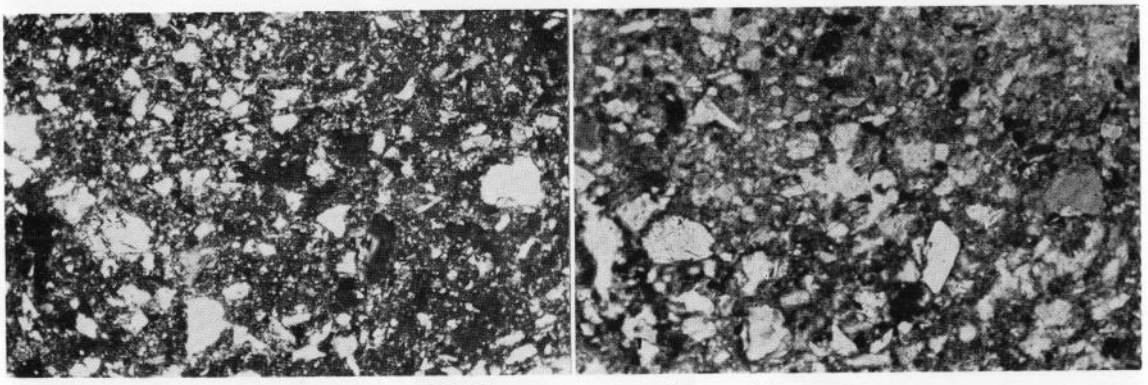
釉薬かけⅡ

多々良窯・石甕製作工程

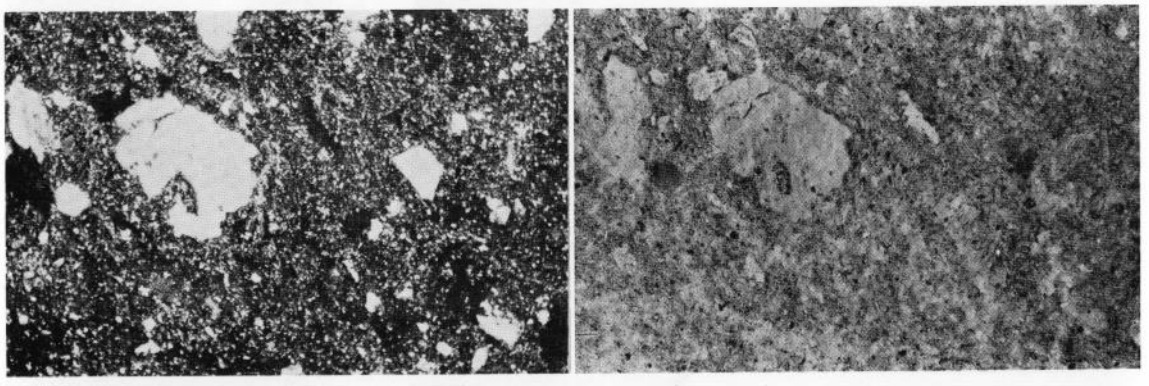
図版 104



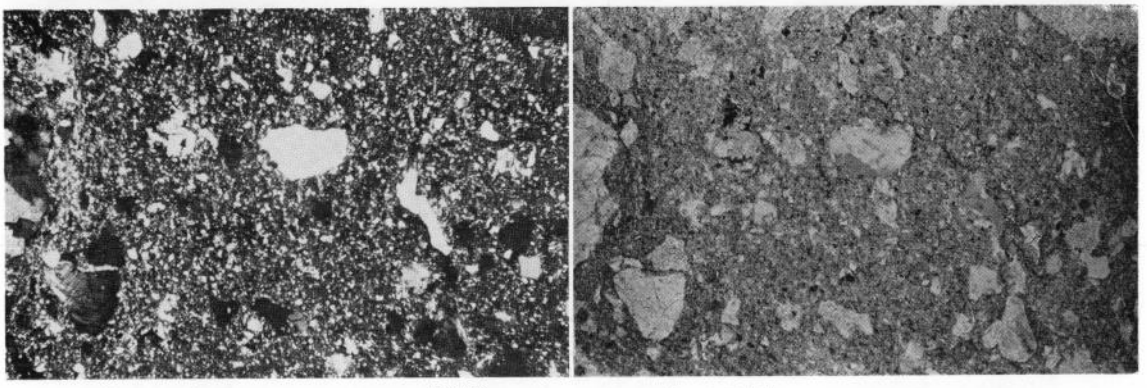
（＋ニコル）　試料 5　（－ニコル）



（＋ニコル）　試料40　（－ニコル）



（＋ニコル）　試料28　（－ニコル）



（＋ニコル）　試料38　（－ニコル）

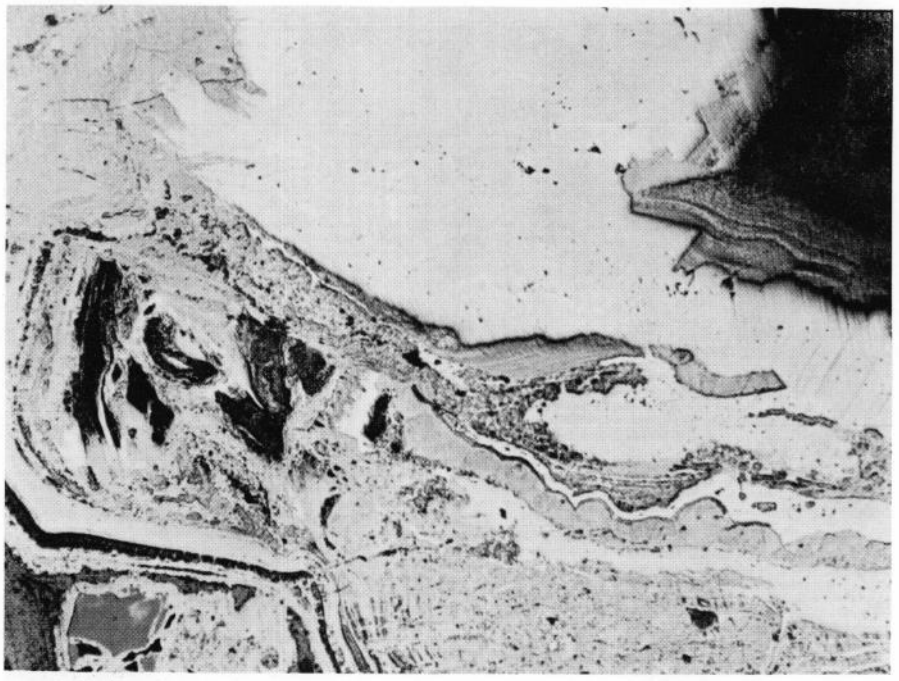
偏光顕微鏡写真（×20）

24号鉄戈

Goeth'te

($Fe_2O_3 \cdot H_2O$)

×100

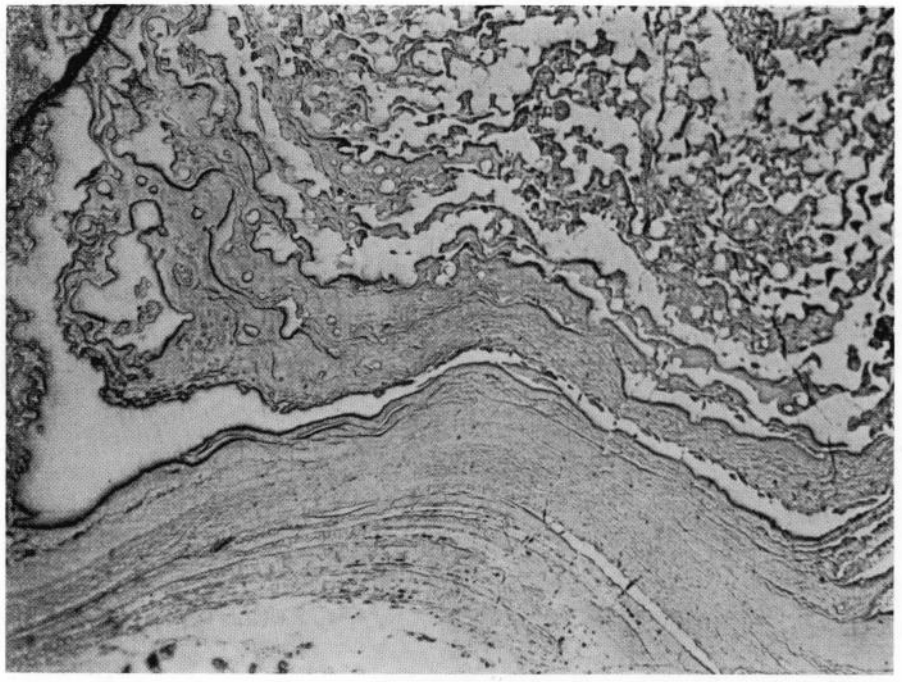


27号鉄戈

Goethite

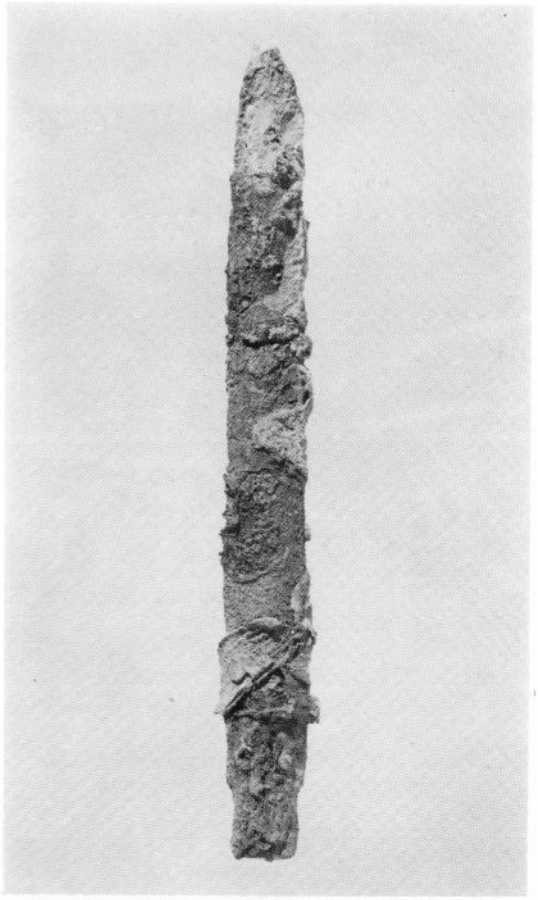
($Fe_2O_3 \cdot H_2O$)

×100

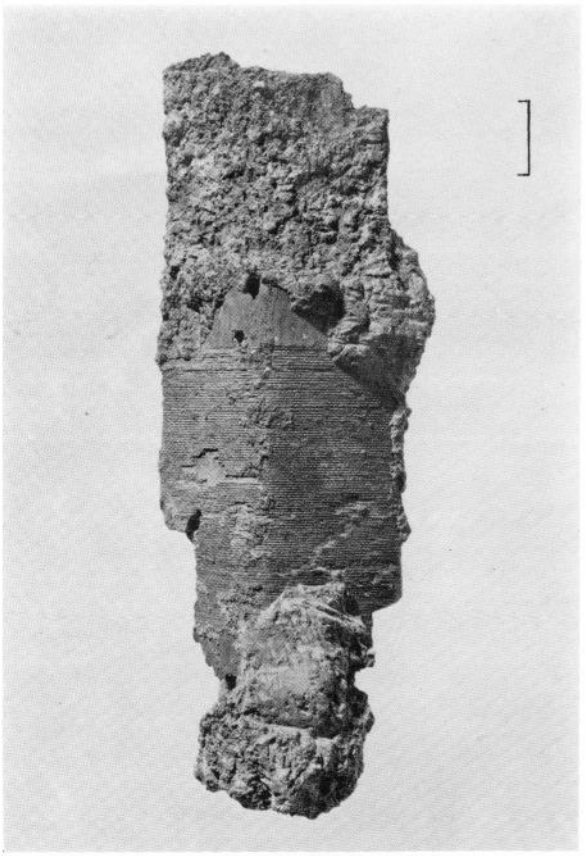


鉄戈の顕微鏡組織

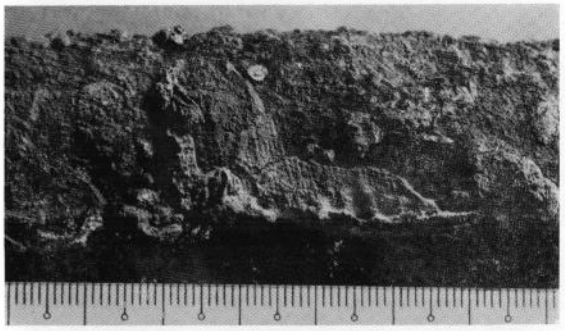
図版 106



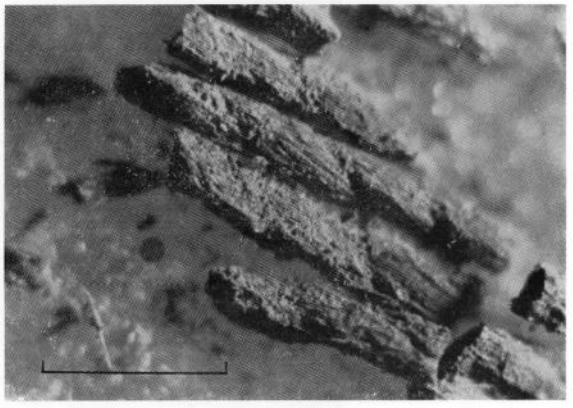
(A)　平絹の巻かれている剣の全形（27号甕棺出土）



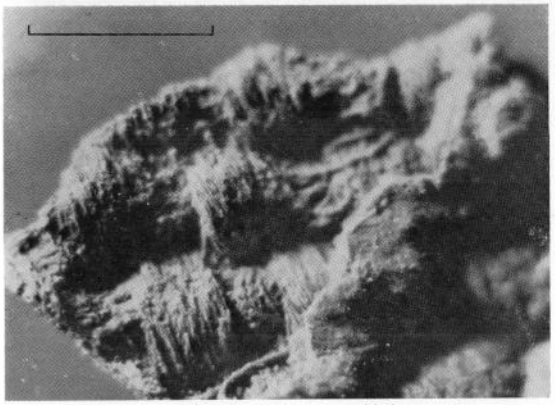
(D)　撚糸の巻かれている剣柄（24号甕棺出土）



(B)　剣に巻かれている平絹の一部拡大



(E)　Dに示した撚糸の一部拡大

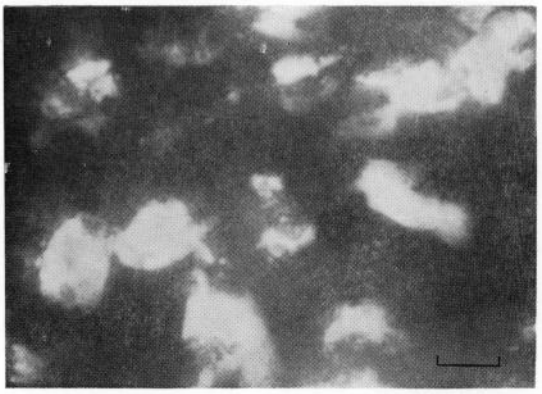


(C)　Bに示した平絹の一部をさらに拡大したもの

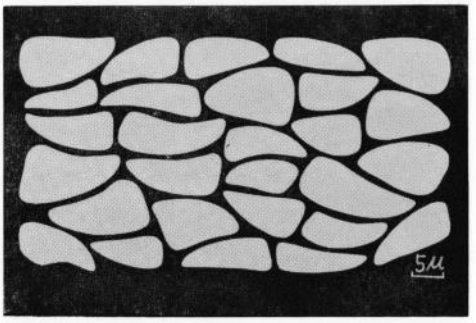
Scale　：　B・C・E……1 ㎜

D……1 ㎝

門田遺跡出土の絹製品

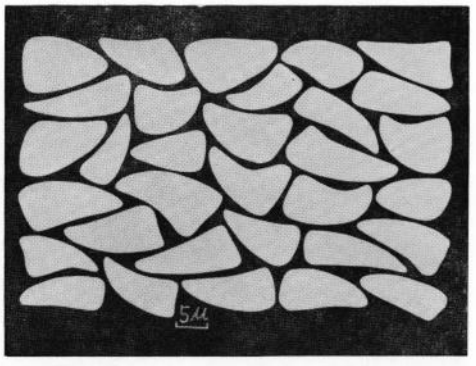


(A) 剣身を巻いた平絹の経糸繊維断面（S：10μ）

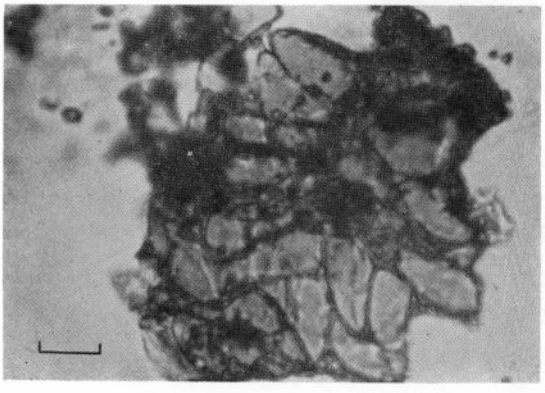


(B) 剣身を巻いた平絹の繊維断面転写図

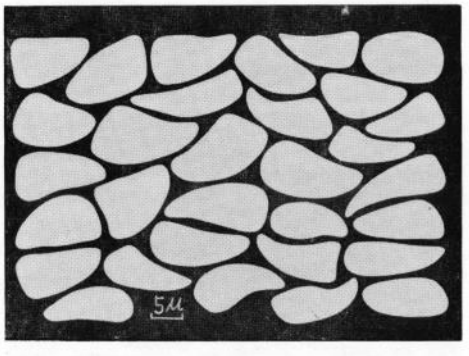
(C) 剣身を巻いた平絹の緯糸繊維断面（S：10μ）



(D) 剣身を巻いた平絹の繊維断面転写図

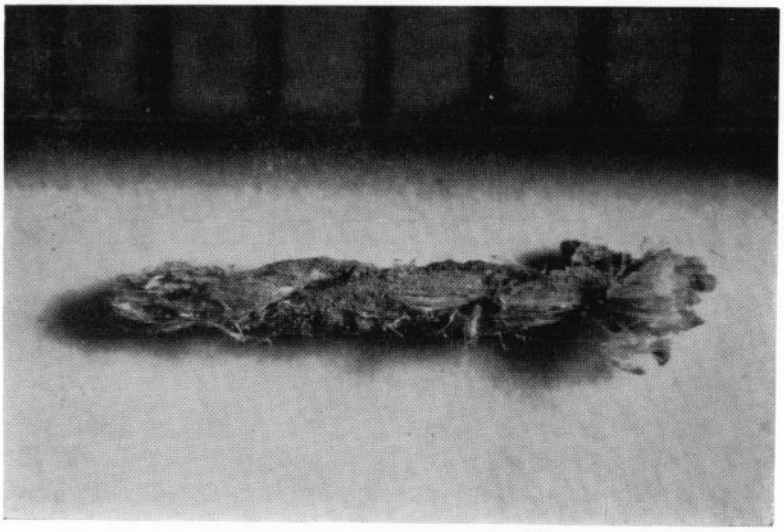


(E) 剣柄を巻いた撚糸の繊維断面（S：10μ）



(F) 剣柄を巻いた撚糸の繊維断面転写図

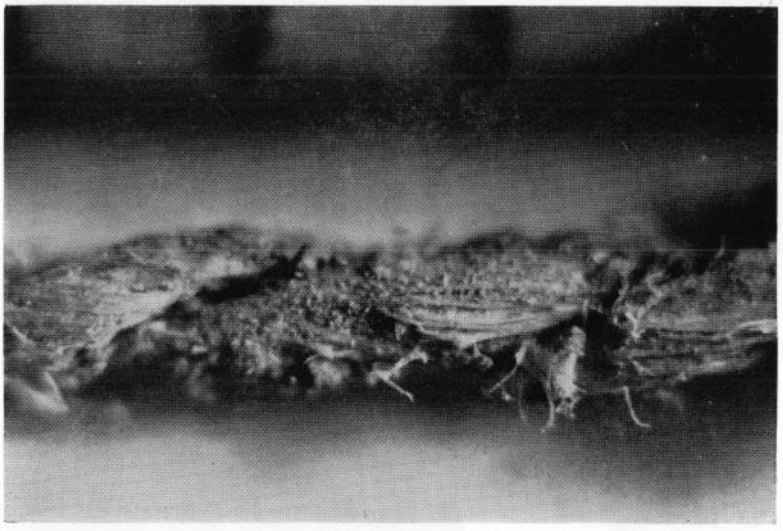
図版 108



(A)

繊維製品の一部

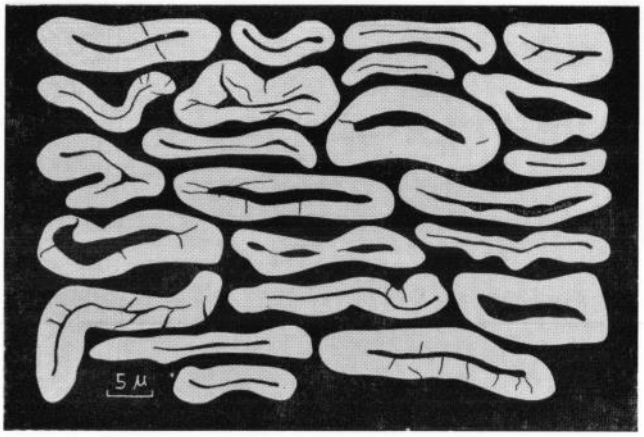
（S：1㎜）



(B)

Aに示した繊維製品
の一部拡大

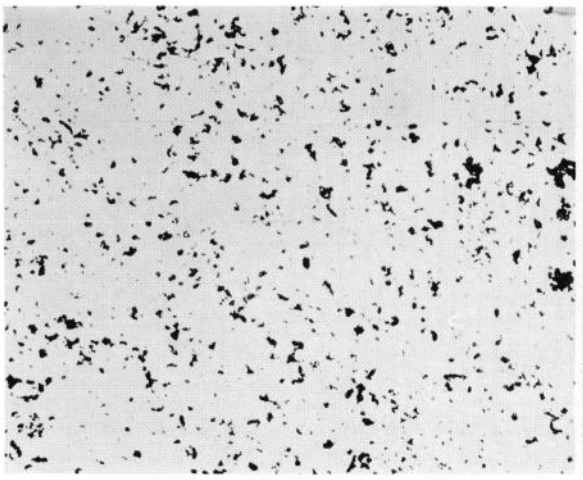
（S：1㎜）



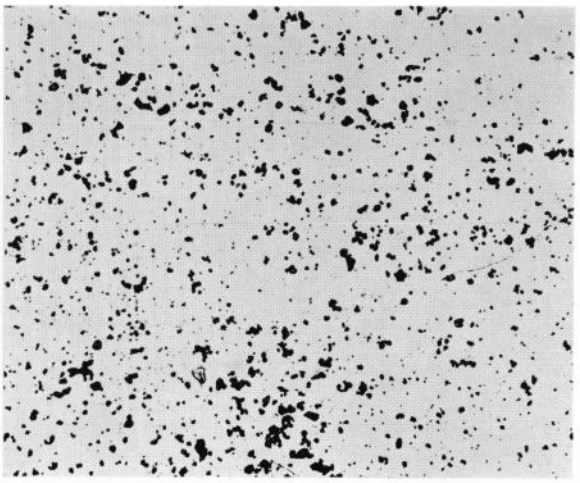
(C)

繊維製品の繊維断面
転写図

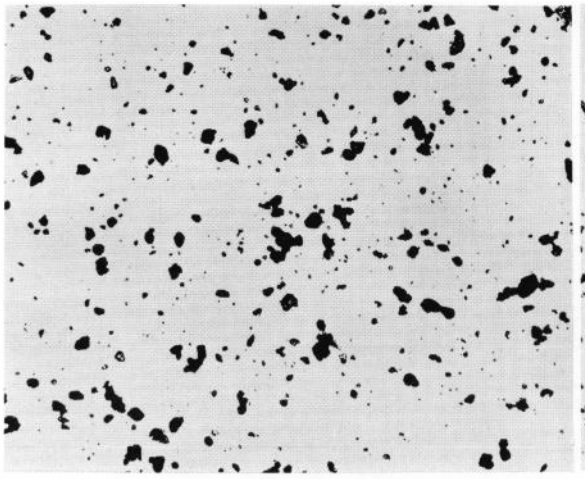
辻田2号墳出土の丸玉の孔に残った繊維製品



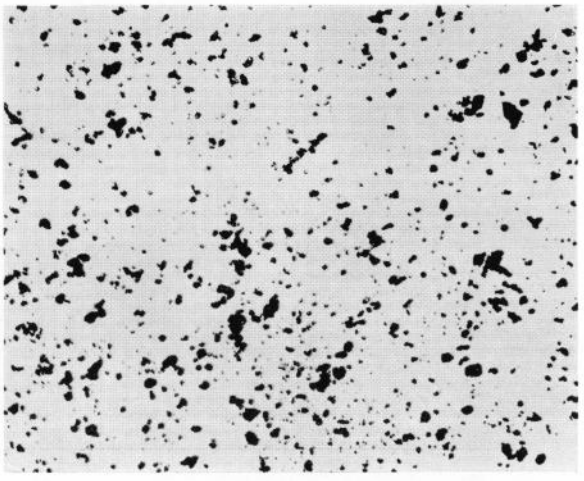
(1)



(2)



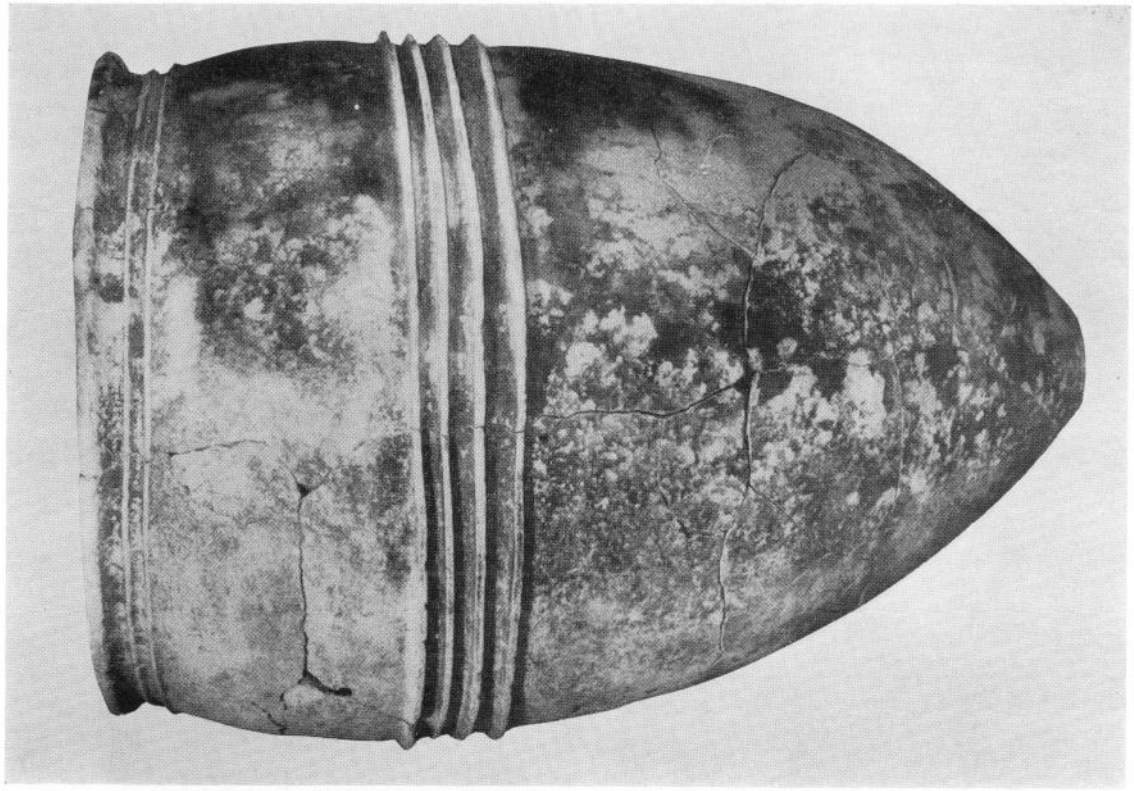
(3)



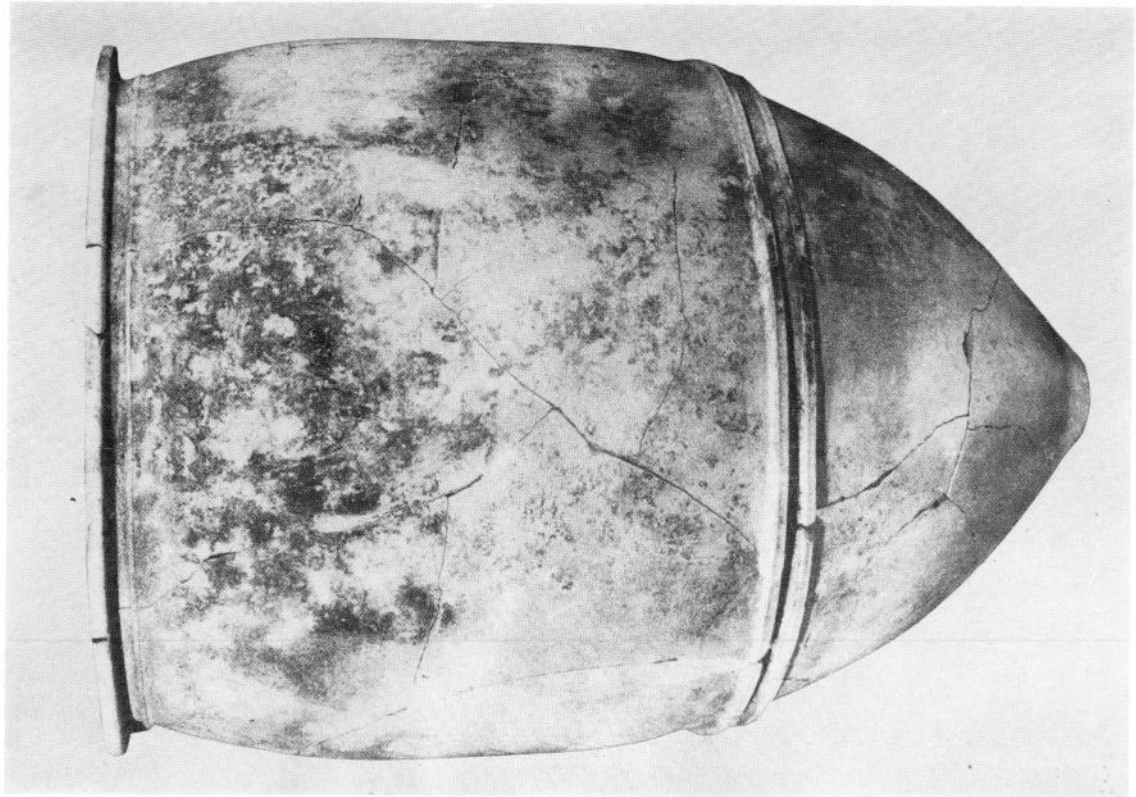
(4)

(1)	Mo. 1	透過光	125倍
(2)	Mo. 3	透過光	125倍
(3)	三雲遺跡	透過光	125倍
(4)	野方塚原遺跡	透過光	125倍

出土顔料の顕微鏡写真



2　黒色塗彩した24号下甕棺（赤外線撮影）



1　黒色塗彩した23号上甕棺（赤外線撮影）

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第 9 集

昭和 53 年 12 月 20 日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6-29

印　刷　株式会社　チューエツ
福岡市博多区東比恵2丁目9-1

山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告

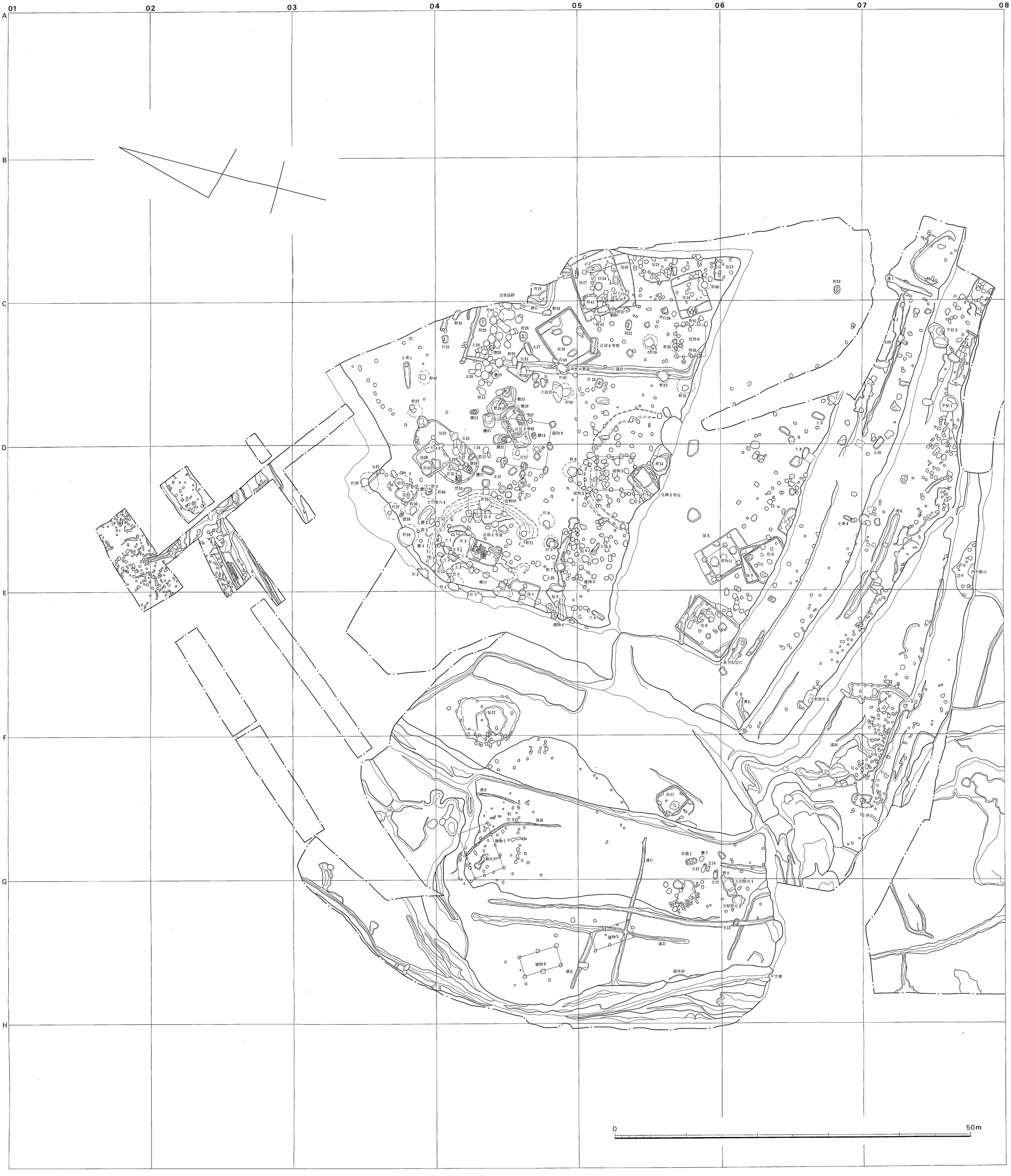
第 9 集

付　　図

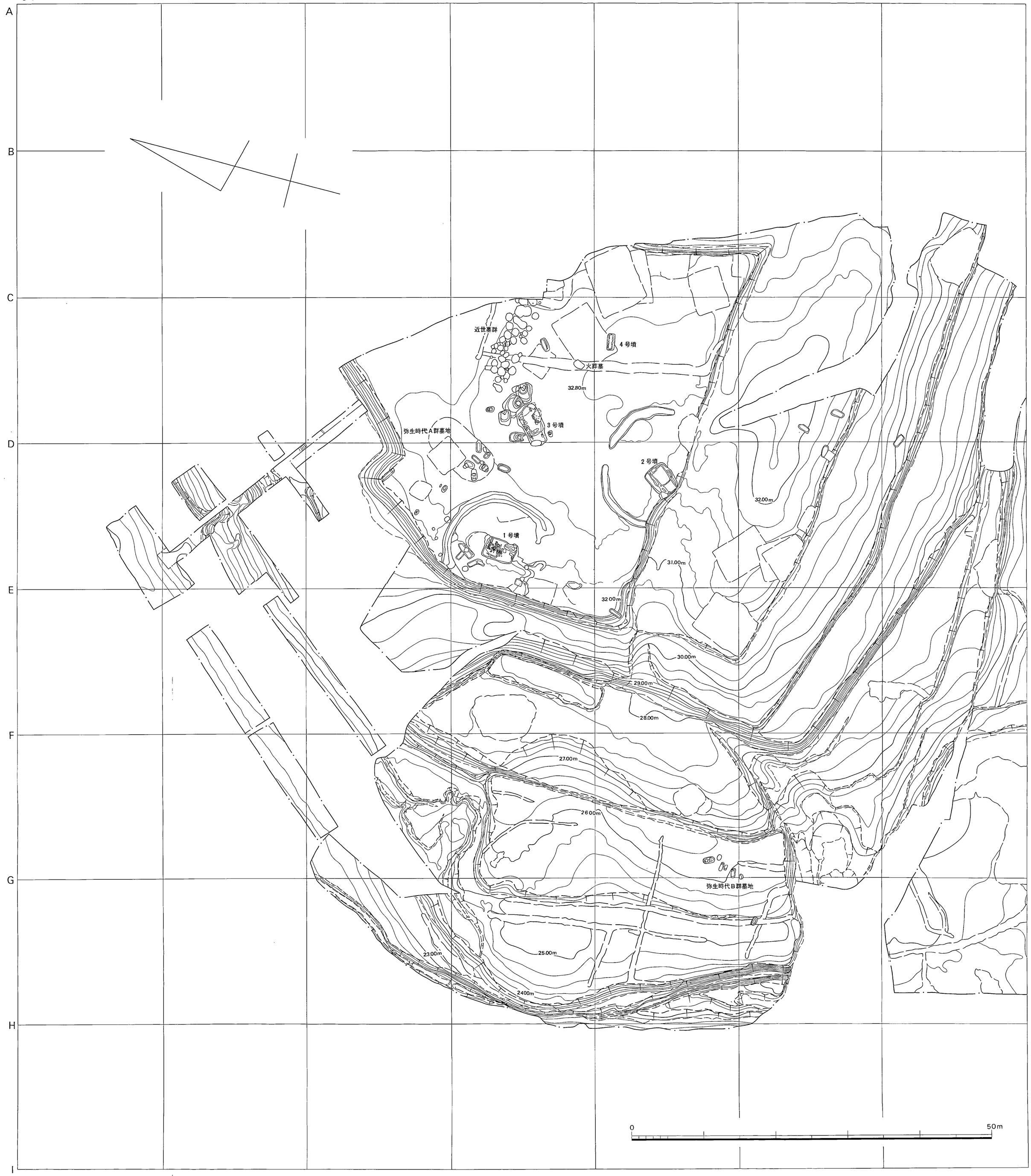
1978

福岡県教育委員会

付図1　門田遺跡遺構配置図 (1/300)



付図2　辻田地区遺構配置図　(1/200)



付図 3　辻田地区旧地形と遺構配置図 (1/300)